

# 成島柳北研究

## —海外体験からの言論活動に焦点をあてて

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2017年 9月

具島 美佐子

## 論文概要

### 論文題目

成島柳北研究—海外体験からの言論活動に焦点をあてて

### 概要

序章では、成島柳北という人物についての概略と、研究の背景や目的と方法、先行研究について論じている。成島柳北（名は惟弘、天保8（1837）年-明治17（1884）年）は、漢文戯作『柳橋新誌』初編と二編の作者として広く知られているが、徳川幕府の奥儒者の家庭の出身であった。幕末には外国奉行や会計副総裁を歴任した柳北は、明治維新後は『朝野新聞』を中心に幅広く活躍した。柳北の維新後の活動内容は多様で、『柳橋新誌』初編と二編だけでは活動の足跡をたどることはできない。筆者は柳北の海外游记「航西日乗」等を読み進めるうちに、柳北の海外体験がその後の転身の契機となったことが作品中に読み取れることが分かった。柳北の歩みは近世から近代への移行の時期における一個人の歩みにすぎないが、明治維新を経ても幕臣時代と同様に社会の進展に尽力した点には意義がある。

先行研究としては、近年では前田愛の『成島柳北』（朝日新聞社 1976）や乾照夫の『成島柳北研究』（ぺりかん社 2003）等の優れた研究がある。前田は柳北の文学的全貌と位置付けを明らかにして人間像を捉えたことに功績があった。これに対して乾は、前田は柳北が反近代的な系譜に特異な位置を占めること主張し、前田の研究は反近代理論からは脱却できなかったと批判している。これら先行研究をふまえて、筆者は柳北が外遊後に幅広い言論活動をしたことに着目し、本研究では柳北の著作を通じて海外体験が帰国後の言論活動にもたらしたものを解明することを目的とした。その目的のためには主要な作品を読解することが課題となった。特に『朝野新聞』や『花月新誌』に掲載されている西欧文芸の翻訳作品や、柳北の家族や周辺の人々の著した江戸時代末期の文学作品、さらに米国での鉄道による大陸横断の際の漢詩について考察したことを強調している。

まず第Ⅰ章 幕臣としての歩みでは、柳北の幕臣時代について柳北自身の日記や漢詩、代表作の漢文戯作『柳橋新誌』初編（万延元（1860）年）をもとに考察した。柳北は海外の文化に目を向けて幕政の刷新を訴えるが弾圧を受ける。閉門中に柳北は洋学を真摯に学び、日本に西欧文化を取り入れることに目をむける。奥儒者の地位を失いながらも程なく幕政に復帰した柳北は、軍事や外交面でその才能を発揮した。幕府の仏国からの軍事顧問シャノワーズ（Charles Sulpice Jules Chanoine, 1835-1915）との交流もあり、柳北は海外への関心を深化させたが、まもなく幕府は崩壊した。柳北は旧態依然とした幕府の体制を批判したり、『柳橋新誌』初編の中で人間関係の裏側を描くなど、人間社会の裏側に潜むものへの関心も深めていった。

次に第Ⅱ章 明治維新直後の柳北では、維新後間もない頃の柳北について社会的活動を目論むことの契機となった山陽地方の旅行を中心に考察した。幕府崩壊後に「無用の人」となった柳北ではあったが、明治2（1869）年6月には手作りの新聞である『東京珍聞』を出したりしている。また同年の明治2（1869）年陰暦10月14日～11月28日の親族に誘われた山陽地方への旅行から、柳北は社会への関心を再び取り戻した。この旅の記録が国内游记「航薇日記」（明治2（1869）年）で、後に柳北自身の編集である詩文雑誌『花月新誌』（82-117号）に連載されている。そこでは過去の生活への追懐の念と無常観が背景とされ、漢詩人や遊女との出会い等から、日本の国というものへ思いを馳せることになった。柳北は日本の国の様々な人々との出会いや地域の見聞で、社会の裏側を見る目を広げていった。東京に戻った柳北は漢文戯作『柳橋新誌』二編（明治4（1871）年）において、文明開化の浅薄さを批判している。明治4（1871）年秋に作られた漢詩の連作「秋懷十首」（『柳北詩鈔』巻三）において、柳北は幕臣としての職務に励みつつも幕府が崩壊したことの無念さを切実に詠んでいる。幕府崩壊から海外渡航までのほぼ4年半の歳月は、無用の人となった柳北にとって最も試練の時期ではあったが、自己の役割を模索す

るための期間であった。

第Ⅱ章に続く第Ⅲ章 柳北と海外体験では、主として「航西日乗」と「航西雑詩」から柳北と海外体験の関わりを考察した。維新に際しては幕府側であった真宗大谷派（東本願寺）は、維新後の布教に活路を見出そうとしていた。東本願寺に翻訳局を設置する計画があり、柳北は真宗大谷派の人々と外遊する機会に恵まれた。訪問国は仏国（国名は「航西日乗」中の表記）、伊国、英国、米国の4カ国であったが、欧州までの航路では亜細亜の国々にも立ち寄った。

柳北一行は亜細亜地域では航海中もまた上陸地でも過酷な自然に遭遇した。欧州での最初の訪問国は仏国であり、柳北は近代化された社会を見学しつつ、那破侖第一世（ナポレオン Napoleon I, 1769-1821, 在位 1804-14.15）と第三世（ナポレオン Napoleon III, 1808-73, 在位 1852-70）を追慕するが、観劇や外国語の学習も経験する。次に訪れた伊国ではサヴォイア（Savoia）家を中心となった統一後まもない国の状況から、幕藩体制を追慕した漢詩を詠む。特に弗稜蘭（フロラン, 現行のフィレンツェ Firenze）では過去の君主であるメディチ家やハプスブルク家を追懐する住民の姿に共感し、さらに羅馬（ローマ Roma）やポンペイの遺跡見学から悠久の時の流れに心を動かされる。第三番目に訪れたのは英国で、産業革命による近代国家の状況を柳北はつぶさに見学した。ヴィクトリア（Victoria, 1819-1901, 在位 1837-1901）女王治世下の英国の繁栄を評価しつつも、柳北は英国社会の繁栄の裏側に潜むものにも目を向ける。最後の訪問国の米国では、柳北は雄大で過酷な自然と向き合いつつ、大陸横断鉄道で大陸を横断し、特に米英戦争の戦跡の見学では思索を深めた。米国での旅の記述は「航西日乗」には収録されていないので、『柳北詩鈔』（明治 27（1894）年）に収録されている「航西雑詩」の漢詩から柳北の心情を読み取ることを試みた。

外遊中の柳北は特に伊国で歴史の変遷に思いをはせつつ、西欧文化の受容の必要性を学んだ。また米国では国の独立の維持の必要を学んだ。柳北は旧幕臣としての立場を忘れることはなかったが、文化の進展には統一された政権の必要があることも見聞した。

最後の第Ⅳ章 帰国後の活動では、帰国してからの柳北の活動について海外体験との関わりを中心として考察した。帰国後の柳北は当初は翻訳家への転身の道が絶たれ、『公文通誌』（後の『朝野新聞』）に招かれて、以前から関心のあった新聞の世界に入ることとなる。柳北以外にも幕臣からジャーナリストへ転じた人々は多かった。柳北の幕臣時代の洋学の師柳川春三や、海外体験のある栗本鋤雲や福地桜痴等であった。前田愛は、これらの旧幕臣ジャーナリストたちが拠り所としたのは、江戸社会であり文化であったと指摘している。柳北は政府の言論弾圧に対して、柳北自身が親しんできた江戸文化に根ざした諷刺や諧謔性に富んだ文章を駆使し雑録を書くことで対抗した

また柳北と同時代を生きた福沢諭吉は、私学教育を通じて国家や官学に対する自律的活動の意義を示した。柳北は福沢の『學問のすゝめ』第7編が共和制の推進である等と誤って解釈された際には『朝野新聞』に投稿させて反論の場を提供した。柳北の理想とする国民の自由な言論活動の推進は、民権論を抑圧しようとする維新政府の政策とは相容れないものとなっていった。やがて政府の弾圧を受けた柳北は政府との直接対決を避けるため、「雑録欄」では軽妙洒脱な文章を展開させた。

柳北は明治 10（1877）年に詩文雑誌『花月新誌』を発行した。そこには花月に代表される文芸の情趣を国内外の人々に考えてほしいという柳北の意向があった。『花月新誌』に掲載された文芸には、江戸時代末期の大学頭林述斎の随筆や、江戸の市井の社会意識を背景とした大沼枕山の漢詩や柳北の戯作等があった。また西欧の市民社会の思想を背景とした翻訳作品があり、多様な内容であった。森鷗外も『花月新誌』に連載された「楊牙兒（ユンケル）ノ奇獄」を愛読していた。後年鷗外が西欧文学の翻訳に力を発揮したことを考慮すると、『花月新誌』は、青少年の文芸観によい影響を与えたものと考えられる。

日本の西欧文化の受容の推進に取り組んでいる柳北であったが、国内游记『熱海文藪』（明治 17（1884）

年)の中で柳北は、徳川将軍家を偲んだ漢詩を残している。それは幕臣として旧主への礼儀であって、柳北は最終的には旧幕府からも自立した個人であって、武士の世に戻る必要はないという考えをもつに至っていた。西南戦争に際しては、『朝野新聞』(明治10(1877)年5月2日の社説)において反乱を引き起こした西郷隆盛を後進的人物と批判している。その一方で、維新政府側出身の丹羽純一郎(翻訳家)や松浦辰男(歌人)とは文芸において交流した。柳北は文芸の面では幕臣や維新政府側という立場を超越していた。また柳北には生来の批判的精神が備わり、柳北の生来の批判的精神は明治維新を経てさらに深化していた。柳北は西欧文化を模倣するだけの維新政府の政策の浅さを嘆き、日本の伝統文化を踏まえることの必要性も『花月新誌』等で述べている。

終章では本研究の結論を述べた。「柳北の著作を通じて海外体験が帰国後の言論活動にもたらしたものを解明する」という目的に対して、柳北は海外体験から自己の歩むべき道を模索し、欧米の歴史に学ぶことで独立した統一国家としての日本を形成して文化の進展を斬新的に図ろうとしたというのが結論である。ここでの文化の斬新的な進展とは、日本の伝統文化の良い面に西欧文化の良い面を融合させた文化の形成であった。柳北がこのような考えをもつに至ったのは、海外体験に因る。特に伊国での体験では柳北は小国分立から国の統一がなされるが過去の王朝を偲ぶ人々も一部にいる状況であることを見聞き、また米国での米英戦争の戦跡の見学から国の独立の意義を見聞する等、海外での見聞から歴史や国家への思索を深めたからであった。

## Thesis Abstract

### Thesis Title

A Study of Ryuhoku NARUSHIMA: Focusing on his activities of speech and writing based on his overseas experience

### Abstract

The Introduction provides a brief summary of the life of Ryuhoku Narushima and outlines the background of this study, its objective and methods, and earlier studies on Ryuhoku. Ryuhoku Narushima (given name Korehiro, 1837-1884) is widely known for authoring the first and second volumes of a kanbun gesaku (playful writings in Chinese) entitled *Ryukyosinshi*, but he was from a family of okujusha, or Confucian tutors to the Tokugawa Shogunate. He served as Minister of Foreign Affairs and as Vice President of the Treasury Department at the end of the Edo period, but after the Meiji Restoration, he was active in various fields, making a name for himself with *Choya Shinbun*. As he engaged in a diversity of activities after the Meiji Restoration, it is impossible to trace his footsteps only by looking at the first and second volumes of *Ryukyosinshi*. While reading his diary of his journey to the West entitled *Kosei Nichijo*, I, the author, discovered that what he experienced overseas encouraged him to make a transition later on in his life. His footsteps are merely footsteps of an individual during the transitional period from early modern to modern, but they are significant in that he devoted himself to the advancement of society even after the Meiji Restoration, just as he did when he was a shogun's retainer.

Earlier studies on Ryuhoku include Ai Maeda's *Narushima Ryuhoku* (1976, Asahi Shinbun) and Teruo Inui's *A Study of Narushima Ryuhoku* (2003, Perikansha Publishing). Maeda makes a remarkable contribution to grasping what kind of person Ryuhoku was by revealing the full scope of his literary works, and his position of Japanese literary history. In contrast, Inui criticizes Maeda's approach, arguing that Maeda fails to break away from anti-modernism when he claims that Ryuhoku occupies a unique position in the anti-modern genealogy. Bearing these studies in mind, this study casts a spotlight on the fact that Ryuhoku engaged in a wide variety of activities of speech and writing after returning from his journey abroad and aims to unravel what his overseas experience brought to such activities through his works. To achieve this objective, it was necessary to examine his major literary works, especially the translated works of the Western literature featured in *Choya Shinbun* and *Kagetsu Shinshi*, literary works written by Ryuhoku's family members and by the people he knew toward the end of the Edo period, and the Chinese poems he wrote during his trans-American train travel.

Chapter I, "His Career as a Shogun's Retainer," studied his life as a Shogun's retainer based on his diary, Chinese poems he wrote, and the first volume of *Ryukyosinshi* (1860), one of his representative works. Turning to foreign cultures, Ryuhoku called for reform of the Tokugawa government but was oppressed. Under home confinement, Ryuhoku explored Western studies seriously, turning his attention to introducing Western culture into Japan. Although he lost his position as a Confucian tutor, he returned to the shogunate government shortly afterward, displaying his talent as a military and foreign relation senior official. Partly because of his interactions with Charles Sulpice Jules Chanoine (1835-1915), a French military adviser to the shogunate, he deepened his interest in foreign cultures, but the shogunate collapsed soon afterward. Ryuhoku also deepened his interest in what was hidden behind human society; for example, he criticized the outdated system of the shogunate and wrote about the underside of human relationships in the first volume of *Ryukyosinshi*.

Chapter II, "Ryuhoku Immediately after the Meiji Restoration," discussed Ryuhoku's days soon after the

Meiji Restoration, focusing on his travel to the San'yō Region, which inspired him to pursue social activities. The collapse of the Shogunate turned him a “man of no use,” but in June 1869, he published a handmade newspaper called *Tokyo Chinbun*. Invited by his relatives, Ryuhoku went on a journey to San'yō Region from October 14 to November 28, 1869 on the lunar calendar and renewed his interest in society. *Koubinikki* (1869) is an account of this travel. This was later serialized in *Kagetsu Shinshi* (No. 82-117), a magazine he launched to publish prose and poetry. It was written out of his reminiscence of his past life and the idea of impermanence. His meetings with local people, from composers of Chinese poems to courtesans made him think about Japan as a country. While meeting with various people throughout Japan, he also learned a great deal in various places, which allowed him to see the underside of society. Back in Tokyo, Ryuhoku criticized the shallowness of *bunmei kaika*, or the “civilization and enlightenment” movement in the second volume of *Ryukyosinshi* (1871). In *Shukai Jusshu* (*Ryuhoku Shisho*, Volume 3), a series of Chinese poems written in the fall of 1871, he showed his despair, compellingly describing how he devoted himself to his duties as a Shogun's retainer but the shogunate collapsed nonetheless. The four-and-a-half-year period from the collapse of the shogunate to his travel overseas was the hardest time for Ryuhoku, who became a man of no use, but it was also a time to seek what his role was.

Chapter III, “Ryuhoku and His Overseas Experience,” studied the relationship between Ryuhoku and his overseas experience based mainly on the reading of *Kosei Nichijo* and *Kosei Zasshi*. The Otani School of Jodo Shinshu Sect (Higashi Hongan-ji Temple), which sided with the shogunate government at the time of the Meiji Restoration, was trying to find a way in missionary work after the restoration. As there was a plan to establish a translation bureau in Higashi Hongan-ji Temple, Ryuhoku was given an opportunity to travel overseas with the people of the Otani School of Jodo Shinshu Sect. According to *Kosei Nichijo*, they visited France, Italy, Britain and the United States, but they also visited some Asian countries on their way to Europe.

Ryuhoku and the Otani School group experienced the harshness of nature both during the navigation and on land in Asia. France was the first country they visited, where Ryuhoku observed modern civilized society and yearned for Napoleon I (1769-1821, Reign: 1804-1814/15) and Napoleon III (1808-73, Reign: 1852-1870), while enjoying theatrical plays and learning foreign languages. They then visited Italy. Seeing the country that recently went through unification led by the House of Savoy (Casa Savoia), Ryuhoku wrote Chinese poems in memory of the Tokugawa Shogunate. Especially in Florence (Firenze), he developed sympathy for the people who were reminiscent of its past monarchs, the Medici family and the Hapsburg family, and was moved by the abyss of time when he saw the ruins in Rome (Roma) and Pompeii. The third country they visited was Britain, where he witnessed a modern nation born as a result of the Industrial Revolution and took a close look at the situations there. While praising Britain's prosperity under the rule of Queen Victoria (1819-1901, Reign: 1837-1901), Ryuhoku also turned his eyes toward what was hidden behind the prosperity of British society. The final country was the United States, where Ryuhoku was confronted with the immense but harsh nature during the trans-American railroad journey and was deeply impressed especially when he saw the battle site of the War of 1812. Because he did not write about his journey across the United States in *Kosei Nichijo*, I attempted to discern what he felt from the Chinese poems featured in *Kosei Zasshi* included in *Ryuhoku Shisho* (1894).

During his journey overseas, he learned the need to accept Western culture, contemplating the transitions that Italy went through in its history. In the United States, he learned the need to maintain independence as a country. Ryuhoku never forgot his position as a former Shogun's retainer, but he learned through his experience that a unified administration was necessary for cultural advancement.

Chapter IV, “His Activities after Returning to Japan,” looked at Ryuhoku’s activities after returning to Japan mainly in association with his overseas experience. Soon after returning to Japan, Ryuhoku’s road to becoming a translator was closed. Invited by *Kobun Tsushi* (later *Choya Shinbun*), he entered the world of newspaper, which he had been interested in. Aside from Ryuhoku, many of the Shogun’s retainers became journalists, including Shunsan Yanagawa, who was Ryuhoku’s mentor of Western studies during his days as a Shogun’s retainer, as well as Joun Kurimoto and Ouchi Fukuchi, who had also been abroad. Ai Maeda points out that these ex-retainer journalists engaged in activities, building on the Edo society and its culture. Ryuhoku contested the government’s suppression of free speech by writing miscellanea full of satires and jokes rooted in the Edo culture he was so familiar with.

Yukichi Fukuzawa, a contemporary of Ryuhoku, demonstrated the significance of self-directed activities through private school education versus the national and public school education. When section seven of Fukuzawa’s *An Encouragement of Learning* was misinterpreted as the promotion of republicanism, Ryuhoku offered a space in *Choya Shinbun* so that Fukuzawa could make a rebuttal statement. Promotion of free speech among the people, which was Ryuhoku’s ideal, conflicted with the policies of the restoration government, which was trying to oppress the people’s rights movement. Suppressed by the government, soon Ryuhoku adopted a witty and sophisticated style of writing in “Zatsuroku-ran” to avoid direct confrontation with the government.

Ryuhoku launched a magazine entitled *Kagetsu Shinshi* in 1877. His intention here was to inspire people both in Japan and overseas to think about the charm of literature as represented by flowers and the moon. Literature featured in *Kagetsu Shinshi* included an essay by Jussai Hayashi, who served as Daigaku no Kami (Director of the Bureau of Education) at the end of the Edo period, a Chinese poem written by Chinzan Onuma having the background of the social consciousness of the people of Edo, and gesaku (playful writings) by Ryuhoku. A wide variety of literature was featured in the magazine, including translated works written based on the ideologies of Western civil societies. Ougai Mori also enjoyed reading *Yunkeru no Kigoku* serialized in *Kagetsu Shinshi*. Given the fact that Ougai made a significant contribution to translating Western literature in later years, it is believed that *Kagetsu Shinshi* had a positive influence on how young people viewed literature.

Although Ryuhoku devoted himself to promoting the acceptance of Western culture in Japan, he composed a Chinese poem in remembrance of the Tokugawa shogunate family in his domestic travel log entitled *Atami Bunso* (1884). Yet, it was a courtesy to his old master as a shogun’s retainer. He developed the idea that he was an individual who became independent from the former shogunate and that Japan did not have to go back to the time of samurai rule. When the Seinan War occurred, he criticized Takamori Saigo as a backward person, who started the war, in *Choya Shinbun* (editorial section on May 2, 1877). On the other hand, he interacted with Junichiro Niwa (translator) and Tatsuo Matsuura (poet), who were from the restoration government, in the field of literature. He transcended the boundaries between shogun’s retainers and those from the restoration government in the aspect of literature. Ryuhoku had an innate critical spirit. Having gone through the Meiji Restoration, this spirit was intensified. Lamenting the shallowness of the policies of the restoration government, which was merely imitating Western culture, he expressed the need to build on Japan’s traditional culture in *Kagetsu Shinshi*.

The final chapter presents the conclusion of this thesis. For the objective of “unraveling what Ryuhoku’s overseas experience brought to his activities of speech and writing after returning to Japan through his works,” it has been concluded that Ryuhoku explored the path he should take based on what he experienced overseas and tried to lead Japan to become an independent and unified nation as well as to help develop Japanese culture in a

totally new fashion by learning the history of the western world. Development of culture in a totally new fashion here means the formation of a culture through amalgamation of the best parts of two cultures, modern Western and traditional Japanese. What he experienced overseas led him to think this way. Because of what he learned overseas, he now had a deeper emotional attachment to history and to Japan; for example, especially in Italy, he learned that there were some people who still commemorated past dynasties even after Italy, which consisted of small states, was unified into a single nation, while in the United States, he learned the significance of a nation's independence by seeing the battle site of the War of 1812.



## 目 次

序章	1
第1節 研究の背景と目的	1
第2節 研究の方法	2
第3節 先行研究	3
第4節 論文の構成	5
第Ⅰ章 幕臣としての歩み	8
第1節 幕藩体制の揺らぎの時代に生まれて	8
1 奥儒者の家	8
2 内憂外患の時代	11
3 漢文戯作による社会風刺	12
第2節 『柳橋新誌』初編の創作	13
1 創作の背景	13
2 『板橋雑記』を手本とした作品の構成	14
3 花街としての柳橋	15
4 柳北にとっての『柳橋新誌』初編創作の意義	19
第3節 海外への関心と幕臣としての苦悩	20
1 柳北の日記	20
2 挫折から再起へ	22
3 幕府滅亡の頃の柳北	25
第4節 第Ⅰ章のまとめ	26
第Ⅱ章 明治維新直後の柳北	29
第1節 無用者意識の下で	29
1 幕臣から市井の人へ	29
2 「無用の人」として	31
第2節 「航薇日記」の創作	31
1 「航薇日記」創作の背景	31
2 東京・横浜で	33
3 京阪の地から山陽道へ	35
4 山陽道から四国へ	38
5 帰路	48
6 柳北にとっての「航薇日記」創作の意義	51
第3節 『柳橋新誌』二編の創作	55
1 『柳橋新誌』二編の創作の背景	55
2 文学作品としての『柳橋新誌』二編	59
3 『柳橋新誌』二編と中国文学	64
4 柳北にとっての『柳橋新誌』二編の創作の意義	71

第4節 第Ⅱ章のまとめ	73
<b>第Ⅲ章 柳北と海外体験</b>	79
第1節 亜細亜周辺から仏国迄の航路	79
1 日本からの旅立ち	79
2 亜細亜地域	84
3 英国の亜細亜地域への進出	87
4 西亜細亜から西欧へ	89
第2節 仏国	91
1 巴里で出会った人々	91
2 第二帝政から第三共和制の中で	92
3 巴里での見聞	95
4 仏国滞在の意義	96
第3節 伊国	97
1 伊国での見聞	97
2 追懐の念と今後の模索	101
3 伊国見聞の意義	104
4 海外体験の中での伊国体験の重要性	107
第4節 英国	107
1 英国での見聞	107
2 英国滞在の意義	110
第5節 米国	110
1 米国滞在の概要	110
2 「航西日乗」未収録の漢詩 後世での評価	111
3 雄大な自然の中で	113
4 古戦場での柳北	118
5 過酷な自然	120
6 桑港（サンフランシスコ）から日本へ	125
7 帰国後の柳北	127
8 米国滞在中の作品とその意義	129
9 海外体験における「航西雑詩」の重要性	130
第6節 第Ⅲ章のまとめ	131
1 海外体験の概略	131
2 伊国と米国	131
<b>第Ⅳ章 帰国後の活動</b>	140
第1節 『朝野新聞』での政治や社会への批判	140
1 新聞による社会の進展をめざして	140
2 新聞への弾圧	144
3 西南戦争前後の『朝野新聞』	150

4	自由民権運動	153
第2節	『花月新誌』の創刊	157
1	創刊の背景	157
2	『花月新誌』における柳北	160
3	文明開化の中での伝統文芸	168
第3節	柳北の翻訳作品	169
1	西洋文芸の翻訳 軽薄な文明開化への批判	169
2	「小仙屈」	171
3	「倫敦小誌」	172
4	「楊牙兒ノ奇獄」	174
5	『朝野新聞』上での翻訳作品	175
6	翻訳家としての真摯な活動	176
第4節	文化の進展への努力	176
1	国内の旅行での文明批評	176
2	幅広い活動	178
3	明治時代における柳北への批判と評価	183
第5節	帰国後の活動の特徴	184
1	海外体験のもたらしたもの	184
2	啓蒙思想への共感	190
第6節	第IV章のまとめ	191
終章	総括と今後の課題	201
第1節	各章のまとめ	201
第2節	結論と今後の課題	210
1	本研究の結論	210
2	今後の課題	211
謝辞		213
参考文献		214
業績		220
付録		221
付録 1		221
付録 2		231
表付 2-1	「航薇日記」収録漢詩目次	231
表付 2-2	「航薇日記」収録短歌目次	233
付録 3		235
表付 3-1	欧米旅行中（「航西日乗」と「航西雑詩」）の漢詩	235
表付 3-2	「熱海文藪」中の漢詩	246
付録 4		257
付録 5		267
付録 6		275

## 表 一 覧

表Ⅰ-1	不平等条約の調印	12
表Ⅰ-2	『板橋雑記』と『柳橋新誌』初編の作品構成	14
表Ⅱ-1	「航薇日記」(陰暦明治2年10月14日～11月28日)の旅	32
表Ⅱ-2	『板橋雑記』と『柳橋新誌』の初編・二編の構成	60
表Ⅲ-1	「航西日乗」・「航西雑詩」(陰暦明治5年9月13日～陽暦明治6年7月9日)の旅	81
表Ⅲ-2	明治維新前後の日本と伊国の新聞の発行と政治状況	97
表Ⅲ-3	仏・伊・英の柳北訪問時の状況	102
表Ⅲ-4	大江敬香の評価した柳北の海外での詩作	111
表Ⅲ-5	内容からみた滞米中の作品	129
表Ⅳ-1	大新聞と小新聞の違いについて	142
表Ⅳ-2	柳北と同時期に弾圧されたジャーナリスト	146
表Ⅳ-3	明治8-9年にかけての主要新聞の発行部数	150
表Ⅳ-4	佐賀の乱勃発から西南戦争終結までの日本	150
表Ⅳ-5	柳北生存中の『朝野新聞』発行停止の状況	153
表Ⅳ-6	4つのグループから成る立憲改進黨の構成	155
表Ⅳ-7	自由党と改進黨の特徴	155
表Ⅳ-8	明治10年前後の詩文雑誌の創刊	159
表Ⅳ-9	『花月新誌』に掲載された伝統文芸の特色	168
表Ⅳ-10	『花月新誌』第20号～第81号に掲載の翻訳作品	170
表Ⅳ-11	『花月新誌』上の翻訳作品と <i>London Labour and the London Poor</i> の関わり	174
表Ⅳ-12	海外体験による柳北の変容	184

## 成島柳北研究—海外体験からの言論活動に焦点をあてて

### 序章

#### 第1節 研究の背景と目的

成島柳北（天保8（1837）年-明治17（1884）年）は江戸幕府の奥儒者の家の出身で、幕末には会計副総裁の要職にまで就いた。柳北は維新後にジャーナリストへの道を歩み、漢文戯作『柳橋新誌』初・二編また漢詩文や国内外の游记にも優れた作品を残し、海外体験を綴った「航西日乗」の作者としても広く知られている。

柳北の生きた幕末から明治へ、近世から近代という時代は大きな変動があった。近代の始まりについては、「幕藩体制が廃止され統一国家が樹立された明治維新におくこと」<sup>1</sup>が通説であるが、近世から近代への移行については、青山忠正によって「政治体制の骨格として、徳川将軍を頂点とする武家の大名領主が解消され、単一の政府による全国統治の体制が成立する過程」<sup>2</sup>であると説明されている。また青山は近代の国家の枠組みは国境とされる領域に戸籍によって把握された国民、国民に対して強制力をもつ単一の政府によって構成される権力体によって成立していると述べている。本研究では日本列島が世界資本主義体制の一環に組み込まれていったことから、近代化の条件は本格的に成立するという青山の見解の下に、明治維新の始期については嘉永6（1853）年のペリー（Matthew Calbraith Perry, 1794-1858）<sup>3</sup>の来航に置くこととする。

幕末から明治維新という変革期の中で柳北は人生の浮沈を経験したが、そのような状況にもかかわらず柳橋を舞台とした『柳橋新誌』二編には、一部の批評家が指摘するような著者である柳北の江戸追懐の念に浸っているばかりの創作意図、近代の夜明けである現実社会からの逃避は見られない。柳北の文学史における評価は、昭和40年代には三好行雄、越智治雄、浅井清から「〈反近代〉の視座」<sup>4</sup>から評価されたが、それ以前の昭和30年代には大久保利謙等から「近代文学史上の先駆性」<sup>5</sup>がある点が指摘されていた。筆者は柳北が江戸追懐に浸っていたばかりではなく、『柳橋新誌』二編の終わりの部分では西欧社会では新聞により自由な言論活動が行われていることを述べている点に注目した。また同書の中では客も妓も金銭のやり取りを背景にそれぞれの「生」を歩んでいる様相が描かれている点から、柳北は現実の背を向けているのではないことを把握した。その後、柳北の作品である「航西日乗」等を読むうちに、柳北の海外体験が帰国後の言論活動の基盤となったことが作品中に読み取れることが分かった。

柳北は帰国後に『朝野新聞』の主筆となり、ジャーナリストへの道を歩んで幅広い活動を展開した。ここで「ジャーナリスト」という言葉については、鶴見俊輔が『ジャーナリズムの思想』<sup>6</sup>の中で以下のように述べている。

「ジャーナリズム」とは、新聞・雑誌のことを言い、戦後にはそれだけでなく、ラジオやテレビなどもふくめるようになった。「ジャーナリスト」とは、これらの職場で報道関係の面で働く人びとを主にさし、やがてそれらの職場で丸がかえで働く人たちだけでなく、たのまれて外部から寄稿したり出演したりする人もふくむようになった。

このような通説の他に日本での「ジャーナリスト」は漢字表記の場合は「記者」や「編集者」となる。「記者」については以下の様な通説がある。

19世紀まで、記者は書く人を指す言葉であり、writerの訳語であった。漢文調の難解な論説を書いた。取材を担当するreporterは別に探訪者と呼び、市井に雑報をあさっていた。英語でいうwriter、reporter、editorといった区別はやがて曖昧になり、日本語では「記者」に統一される。<sup>7</sup>

先行研究の前田愛『成島柳北』、乾照夫『成島柳北研究』でも柳北の職業について、「ジャーナリスト」という用語が

用いられている。前田も乾もジャーナリストという言葉の定義はないが、前田の『成島柳北』の用例は以下の様である。

しかし、あえて新聞を「無用」の文字といいきった柳北一流の韜晦にこそ、文人ジャーナリストとして大いに「有用」の事をなす彼の転身を解く鍵がかくされていたはずである。(『成島柳北』 p. 217)

そういえば、ふつう柳北に冠せられている文人ジャーナリストという呼称が、すでにこうした皮肉な事態を要約していることになるのだ。(『成島柳北』 p. 258)

前田は通説にあるように報道関係の面で働く人々を指す言葉として「ジャーナリスト」という言葉を使っていると考えられる。また乾は『成島柳北研究』の中で、以下のようにジャーナリストという言葉を用いている。

万国対峙の国際社会において「我が帝国ノ富強」を「いかにはかるか」といった国家意識が基調となっており、しかも柳北はそれを強く打ち出すことで、ジャーナリストとしての立場を主張していた。(『成島柳北研究』 p. 124)

また、柳北は『朝野新聞』『花月新誌』を通じて、大槻磐溪・大沼枕山・小野湖山・鱸松塘・森春濤らの漢詩を紹介し、いわば漢詩のあり方をメディアの世界にまで拡大させたジャーナリストでもあった。(『成島柳北研究』 p. 209)

乾もまた通説のように報道関係の面で働く人々として働く人々として、「ジャーナリスト」という言葉を使っていると考えられる。このような用例から、ジャーナリストという言葉は報道関係の面で働く人々という意味で使われていると考えられるので、本研究でもそれに倣うこととする。

柳北はジャーナリスト以外にも翻訳家として、また文明開化の風潮に対しての批判を述べる等の文明批評家<sup>8</sup>としての活動を展開した。また殖産興業にも関心をもち、東京商法会議所の議員となり米国のグラント將軍の接待にも当たっている。柳北の初期の作品『柳橋新誌』だけからでは柳北像を概観することはできないことが判明した。柳北の作品である「航西日乗」等を読むうちに、柳北の海外体験が帰国後の言論活動の基盤となっていることを読み取ることもできた。柳北が外遊後に幅広い言論活動をしたことは、非常に意義がある。これらの点を踏まえ、研究目的は柳北の著作を通じて海外体験が帰国後の言論活動にもたらしたものを解明することとした。その目的のために、代表的な散文作品や漢詩を読解することが課題となった。

## 第2節 研究の方法

柳北の著作は漢文戯作から西欧文学の翻訳作品まで、非常に幅広い。ここで取り上げる柳北の代表的な作品を以下に記す。これらの散文作品や漢詩を読解し、柳北が海外体験を経てどのような点に変化が見られたかを考察することが本研究で取られた方法である。

漢文戯作『柳橋新誌』初編(万延元(1860)年成立 明治7(1874)年4月刊行)は、明末清初の『板橋雜記』の影響を受けて書かれた繁昌記物であり、柳橋の花街を舞台としている。初編は柳北が幕臣時代に『徳川実記』等を訂正補修して、黄金及び時服(小袖)の下賜があり奥儒者の栄光に包まれていた時期に完成している。中国文学の影響を受けながら、客や妓の人間像を描き、金銭の支配する社会を表現し、柳北が社会への目を開いた出発点となった作品である。

国内游記「航薇日記」(明治2(1869)年陰暦10月<sup>9</sup>の山陽旅行 明治12(1879)年9月『花月新誌』82~117号に連載)は、明治2(1868)年の柳北の山陽地方への旅行から、国内游記である「航薇日記」が書かれた。ここには柳北の近親者も含めて、文人墨客や遊女が主に描かれている。漢詩の他に短歌も盛り込まれている。

漢文戯作『柳橋新誌』二編(明治4(1871)年3月成立 明治7(1874)年2月刊行)には、柳橋の花街を舞台に維新政府への批判や文明開花の裏側が描かれ、文明批評的色彩が初編よりも強まっている。柳北は『板橋雜記』の作者余懷の創作による旧政権への追慕という行為に影響を受けており、『柳橋新誌』二編で浅薄な文明開化を批判し、内容に深み

のある日本の近代化の必要性を述べている。さらに欧米では新聞による言論の自由があることを力説している。

海外游記「航西日乗」(明治5(1872)年～6(73)年)は、海外体験による游記である。「航西日乗」の元となる紀行中の日記の原文は散逸していて9月11日から10月22日までの漢文日記の内容が本紀行とほぼ同じ内容であり、柳北の日記原文を松本白華が写したものと考えられている。明治14(1881)年11月の『花月新誌』118号に連載が開始され、17(1884)年8月の153号まで連載された。原文は漢文であったが連載に際して漢文書き下し文に改められ、散文の中に絶句が盛り込まれ、短歌や俳句の挿入はない。

「航西雑詩」は「航西日乗」(明治5(1872)年～6(73)年)で描かれた海外体験中に詠まれた漢詩を集成したもので、『柳北詩鈔』(巻三)に収録されている。全て絶句であり、「航西日乗」とは字句に異同のあるものもある。しかし「航西日乗」に収録できなかった作品、米国で詠まれたものも収められている。

国内游記『熱海文藪』(明治17(1874)年7月30日刊行)は、『熱海文藪』は散文の記述の中に柳北の漢詩が盛り込まれ、「航西日乗」と同様な形式をとった国内游記である。「澡泉紀遊」「鴉のゆあみ」「なくもがな」「烟草の吸さし」「すげのを笠」「菅の小笠附言」「藥槽餘滴」の七編の小品から成る。『熱海文藪』に収録されている「鴉のゆあみ」(明治14(1871)年1月25日『朝野新聞』)に、柳北は幕藩体制の構成員であった譜代の久保氏の家臣、旧小田原藩士たちの生活ぶりを記し、旧藩士が団結して堅実な生活を送っていることに感動している。柳北はまた西郷隆盛が日本社会の進展を妨げる人物であったとして西郷への批判を述べ、今後は全国の士族が国の構成員として国家社会へ取り組む必要性を論じている。

昭和40年代以降、柳北は現実社会からの逃避や江戸追懐の念に支配された作家であると言われてきたが、前掲の散文作品を分析して日本の社会の進展を心がけていた人物であることが明白となった。それは外遊体験から西欧社会では歴代王朝や文化遺産を尊重する姿勢を学び、日本の歩むべき姿を真摯に探究する意思をもつようになったからである。明治維新という大きな時代の変遷の中で、柳北が幕臣時代から目論んでいた日本の国の文化の進展のために尽力した点は評価されるべきものと考ええる。

### 第3節 先行研究

柳北については森鷗外や永井荷風もその作品に親しんだとされているが、明治の批評家北村透谷は柳北の文体は幕末の戯作文学の延長であると批判していた。大正に入り、関東大震災後に明治文化の消滅からその研究が盛んとなり、大正14(1925)年に木村毅(明治27(1894)年-昭和54(1979)年)が「成島柳北論」(『早稲田文学』第229号)を著した。木村は、柳北は福沢諭吉<sup>10</sup>等と異なり都会人らしい洗練さをもっていたとした上で、さらに次のように述べている。

さう言ふ人間が、世に時めく機会を失つて、なつて行くさきは、洗練的方面に於ては世に拗ねた風流隠士となり、その社会批評は小さな皮肉、諷刺となることを、誰しも推想するであらう。<sup>11</sup>

木村は、柳北には文芸への造詣があるが凡俗な市井人に過ぎないことを強調したのであった。昭和19(1944)年に刊行された『明治文学研究文献総覧』<sup>12</sup>には、柳北だけを単独に論じた文献は木村の「成島柳北論」以前には記載がないので、これが最初のもので推定される。

このような中で、大正15(1926)年11月に野崎左文(安政5(1858)年-昭和10(1935)年)は「成島柳北仙史の一面」(『新旧時代』明治文化研究会)<sup>13</sup>を著した。そこでは明治14年の北海道官有物の払下げの説が洩れた際に、福地原一郎や沼間守一等のジャーナリストが新富座で反対の大演説会を催したが、柳北は一篇の狂詩を作ったことを記し、さらに次のように述べている。

一體仙史の文は正面から攻撃するのではなく寛大なる政府とか賢明なるお役人とか反対に讃めてかゝつて其裏をか

くのであるから、新聞検閲の役人も苦笑するばかりで掴まへ處がなかったのであらう。<sup>14</sup>

野崎は、柳北が他のジャーナリストとは異なった面をもっていたことを評価している。野崎はまた『私の見た明治文壇』（春陽堂 昭和2（1927）年）を著し、そこで述べられた柳北についての見解をまとめると、学殖があり、人格もすぐれていて新聞の編集に適任であることや、藩閥政府への対抗の姿勢をとったが、江戸の伝統からの諧謔と風刺によって、江戸の批判精神を継承させた点が柳北の活動の特徴であるということである。<sup>15</sup>

野崎は『絵入朝野新聞』の記者であり、柳北から直接指導を受けており、柳北の文芸の優れた点を以下のように述べている。

紀行文に至つては文其物は無類と称するに足らずとも、能く土地の人情風俗を写し其弊あるものは忌憚なく筆誅して後の戒めとする点にあつて、唯だ形容修飾を事とする他の紀行文とは自から其流を異にする所があつた。<sup>16</sup>

野崎の著作の中の柳北についての記述は、柳北が文芸趣味の凡庸な市井人ではなく、ジャーナリストとしても作家としても独特の個性の持ち主であったとジャーナリズムの世界で把握されてきたことを裏付けている。

柳北の文学史における評価は、昭和30年代には近代文学史上の先駆性があるという指摘がされていたが、昭和40年代には〈反近代〉に位置する作家として評価がされた。昭和51（1976）年に前田愛（昭和6（1931）年-昭和62（87）年）が『成島柳北』<sup>17</sup>（朝日新聞社）を著した。また平成に入ると乾照夫が平成15（2003）年に『成島柳北研究』<sup>18</sup>（ぺりかん社）を著し、幕臣から新聞記者へ転じて独自の視点から言論活動を展開した柳北の歴史的意義をその思想と行動から解明しようと、膨大な史料を収集して研究を行った。乾の『成島柳北研究』の中で評価できる主要な点は、柳北の明治10年代の言論活動を「文明論」と「伝統文化」の両面から捉えたことである。乾はここで柳北が「文明」の中に忠誠原理を見いだし、それにより忠誠意識が変容してジャーナリストへの道に邁進したと結論付けている。

乾の『成島柳北研究』から、柳北の明治10年代の言論活動が「文明論」と「伝統文化」の両面から捉えられ、柳北の思想と行動の軌跡がほぼ辿られたが、柳北像はそれほど変化してはいないと考えられる。乾の『成島柳北研究』については、以下の点が土屋礼子によって批評されている。

本書が提示しようとしたのは、従来の研究枠組みにとらわれない柳北の像であり、「近代—反近代」論からいくぶん自由になった柳北の姿である。けれども全く新しい柳北像が示されたわけでもない。<sup>19</sup>

乾の著作が刊行される以前に前田愛が『成島柳北』（朝日新聞社）を著したが、前田は柳北の文学的全貌と位置付けを明らかにして人間像を捉えていて、柳北のジャーナリストとしての活動について以下の様に述べている。

柳北晩年の不幸は、文人墨客の役割を、それとはまったくうらはらなジャーナリズムの世界で演じなければならなかったきわどい均衡の中にある。かつては辛辣な諷刺の精神をかくす擬態であつた風流人の面が、今では柳北の自由を窒息させようとしているのである。<sup>20</sup>

ここでは、孤高な風流人としての反骨精神からの活動と社会の動きに注意を払うジャーナリストとしての活動の二つの面で均衡をとることに苦慮した柳北の姿が述べられている。ここで文人精神とは「世俗の榮達をきらい、孤高・隠逸の精神をもつ反骨の精神」<sup>21</sup>を指している。

前田の『成島柳北』について、乾照夫はその内容は反近代理論からは脱却できなかったものであるとしている。その要因として乾は、柳北が文人的反骨精神に富んで反近代の系譜に特異な位置を占めること、伝統的美意識すなわち遊び



の精神が作品の背景にあること、旧幕臣の後半生を支えた心情論理—忠孝の心情に富んでいるのが柳北であると前田が指摘した点を挙げている。<sup>22</sup>

しかし前田は『成島柳北』を著した同時期に、柳北も含む近世から近代の作家を論じた『幕末・維新期の文学』（昭和51年）を著し、そこに収録された「近世から近代へ」という論考の中で以下のように柳北の文学作品には近代社会の思潮に通ずる面もあることも婉曲的に述べている。

『柳橋新誌』のリアリティは政治的行動を断念せしめられた柳北にとって、政治的行動権力への抵抗が文学的表現を通じてのみ可能であったという事情にもとづいている。さらにまた「文明開化」のメダルの裏を諷刺的に形象化してみせた『柳橋新誌』は、福沢らによって領導された実学の世界にたいして、文学の領域を確保したのである。<sup>23</sup>

柳北についての前田の著作『幕末・維新期の文学』<sup>24</sup>では、確かに反近代理論の下での柳北像の色彩が濃厚ではあるが、柳北は啓蒙思想家であった福沢諭吉の思想を理解し、共感をもって支援していたのであった。幕末から親交のあった福沢の『學問のすゝめ』七編が、共和制の推進であると誤った解釈で非難を受けた際に、柳北は『朝野新聞』に福沢自身の「學問のすゝめ評」という投稿を掲載させて統一国家の必要性を読者に訴えたのである。前田の主張は、福沢が触れなかった文学の領域で柳北が内容のある文明開化を訴えたということであり、柳北が反近代理論だけでは把握できない人物であることを裏付けている。

前田が『幕末・維新期の文学』において「柳橋新誌」は「福沢らによって領導された実学の世界にたいして、文学の領域を確保」と述べていることは注目に値する。また前田の研究では『柳橋新誌』だけが主として取り上げられており、「航西日乗」では仏国のみが取り上げられている。筆者は前田の柳北についての研究は未完成であったと考えている。乾の研究は先述の土屋礼子によって、新しい柳北像が把握されてはいないと批評されている。このような先行研究を踏まえて筆者は研究を始めた。乾は前田の研究を「反近代理論からは脱却できなかった」と批評しているが、本研究は乾の見解とは異なり、前田の研究が「反近代理論からは脱却できなかった」と断定できないという見解に立脚している。

#### 第4節 論文の構成

柳北の人生とその作品の展開を総合して、その時代の流れを盛り込み、帰国後の活動について考察し、以下の章段で論じている。

まず第Ⅰ章 幕臣としての歩みでは激動の時代であった幕末における柳北について述べる。幕末から明治という時代の変遷の中で、柳北の西欧文化への関心の深さに注目し、その足跡を解明しようとしたものである。日本の近代化に目を向けつつ、また『柳橋新誌』初編から窺えるように人間社会に目を開いた柳北ではあったが、奥儒者成島家の嫡子としての柳北は旧態依然な幕閣への批判から蟄居閉門を体験しつつも忠実な幕臣であった。

次に第Ⅱ章 明治維新直後の柳北では、維新直後には無用者意識に支配されていた柳北が、山陽道への旅行によって「航西日記」を著し、江戸から日本へと人間社会を見る視野を徐々に広げていった点に注目した。柳北はこの旅行から底辺の人々とも心の交流をもった。さらに維新政府の旧幕府を除外した上部だけの文明開化を批判し、『柳橋新誌』第二編を著した。柳北はそこで新聞というメディアを通じての国の文化の進展に取り組む必要性を述べている。柳北の文化の進展を図ろうとする姿勢には、維新政府の政策に批判も込められていることが特徴的である。

これに続く第Ⅲ章 柳北と海外体験では、柳北の欧米社会との直接の出会いが綴られた「航西日乗」及び「航西雑詩」を中心に、海外体験が柳北のその後の人生に影響を与えたかどうかを解明することを試みた。仏国では近代文明による生活を体験して維新政府の岩倉具視や木戸孝允との出会いもあった。次の伊国での見聞では、統一された国家の必要性和過去の歴史の尊重ということを柳北が学び取るに至ったことは意義深いと考えられる。柳北は一つの政権のもとでなければ国の発展はないことを見聞し、日本の国のもそうあるべきと徐々に考えるに至ったのであった。国に帰属すると

いう考えも芽生え始めていった。さらに英国では立憲王政下での産業革命の進展する社会を直接体験した。最後の米国では「航西雜詩」を手がかりに、米国での建国直後の歴史や雄大な自然との遭遇を通じて、柳北は国の独立の意義を学び帰国後への思いをめぐらすようになったのである。

さらに第IV章 帰国後の活動では、帰国後の柳北の活動について掘り下げを試みた。政府からの弾圧に対して、文芸作品の掲載で柳北が言論の自由を得ようと努力し、『花月新誌』を創刊した点は特徴的である。特に幕末期の成島家の祖父や父の文芸作品を『花月新誌』上に掲載し、一方では西欧文芸を翻訳して掲載する等、柳北は独自の文化活動を行った。伝統文芸<sup>25</sup>に学ぶとともに、西欧の文芸を取り入れて日本の文化を進展させようとする柳北の姿勢には評価できるものがある。柳北の幅広い活動は海外での過去の文化遺跡の保存の見聞等の体験に根差したものであった。さらに帰国後の国内游记の『熱海文藪』の中では旧小田原藩士の生活等が記され、土地に留まって堅実に生活する旧藩士の人々への評価も見られる。

幕藩体制下で、当時の幕府の旧態依然とした体質を風刺した柳北は欧米の進んだ文化に目を向け、洋学の学習に励んでいる。柳北は『朝野新聞』（明治7（1874）年11月7日）に、啓蒙思想家福沢諭吉の匿名の投稿「學問のすゝめの評」を掲載して、「學問のすゝめ」第七編への誤解を解くことに助力した。<sup>26</sup>また柳北自身は11月9日には全国の士族に対して、幕藩体制下での君主への忠孝の道と統一国家レベルでの文明開化の並立を願う文章を掲載している。柳北は帰国後に旧幕臣という帰属意識を日本の国の構成員という帰属意識に変容させたのであった。

『柳橋新誌』二編の中で、柳北は幕末の文化等への追懷を記したことから「反近代」<sup>27</sup>を志向していたとみなされがちであるが、それは過去の文化にも優れた面があったという視点からの文章表現をしたからであった。柳北の目指した文化は、日本の伝統文化の良い面に西欧文化の良い面を融合させた文化を背景とする独自の文化の形成であり、柳北にはこのような状況の社会の到来が理想であった。

最後の終章では、柳北の目指した国としての日本とは日本の伝統文化に西欧文化のよい面を取り込んだ独自の文化を背景とした国家であり、独立した統一国家である点を強調した。西欧の模倣だけではない、独自の文化を目指した点に、柳北の文明観があったのである。また柳北は旧幕臣としての矜持をもつが、幕臣時代からの当時の幕閣を批判して閉門に処せられるなどの独自の精神世界を持ち合わせていた。維新政府への批判も、幕末から継続されてきた権力者への裏側への関心に根差したものであった。柳北の内面で幕末から明治に至るまで持続されてきたものは、社会や権力者の裏側に潜むものへの視線と、西欧の文化への関心と修得であった。しかし海外体験、特に伊国や米国での見聞から、柳北は国の統一や独立についての思索を深めて、旧幕臣としての矜持をもちつつも帰属意識を日本の国の構成する一般の人々である「人民」に徐々に変容させていったのであった。

国家の構成員である一般の人々を表す用語には、柳北や福沢諭吉の著作に「人民」という語が用いられている。それに倣う。柳北の用例は「人民ノ言行ニ過誤有ルヤ、亦宜シク之ヲ譴責警戒ス可シ。」（「文辞ノ弊ヲ論ズ」『朝野新聞』明治8年6月22日の論説欄）<sup>28</sup>、福沢の「學問のすゝめの評」の中の用例は、「日本の人民何れも皆この國を以て自家の恩を為し、共に全國の獨立を守らしめんとするの趣意なり。」<sup>29</sup>である。福沢の「人民」の用法については「福沢は人民に自由獨立の趣旨を示し」<sup>30</sup>と把握されており、柳北の用例もそれに近いものと考えられる。

本研究での「柳北の著作を通じて海外体験が帰国後の言論活動にもたらしたものを解明する」という目的に対して、柳北は海外体験から自己の歩むべき道を模索し、欧米の歴史に学ぶことで独立した統一国家としての日本を形成して文化の進展を斬新的に図ろうとしたというのが結論である。ここでの文化の斬新的な進展とは、日本の伝統文化の良い面に西欧文化の良い面を融合させた文化の形成であった。柳北がこのような考えをもつに至ったのは、海外体験に因る。特に伊国での体験では柳北は小国分立から国の統一がなされるが過去の王朝を偲ぶ人々も一部にいる状況であることを見聞き、また米国での米英戦争の戦跡の見学から国の独立の意義を見聞する等、海外での見聞から歴史や国家への思索を深めたからであった。

## 〔注〕

- <sup>1</sup> 国史大辞典編集委員会. 国史大辞典 4. 吉川弘文館, 2001. p. 621.
- <sup>2</sup> 青山忠正. 日本近世の歴史 6 明治維新. 吉川弘文館, 2012. p. 1.
- <sup>3</sup> 世界史小辞典編集委員会. 山川世界史小辞典. 山川出版, 2004. p. 630. (欧米人の人名表記については、初出はカタカナ表記、原綴)
- <sup>4</sup> 重松泰雄. 明治大正昭和作家研究大事典. 桜楓社, 1993. p. 430.
- <sup>5</sup> 注 4 明治大正昭和作家研究大事典, p. 430.
- <sup>6</sup> 鶴見俊輔. ジャーナリズムの思想. 筑摩書房, 1965. p. 7.
- <sup>7</sup> 武田徹. 現代ジャーナリズム事典. 三省堂, 2014. p. 44.
- <sup>8</sup> 文明とは「易経」に見られて、人知が明らかになることを意味するが、「明治期の日本において、文明とは 18 世紀啓蒙思想上の civilization のこと」という記述が『日本思想史辞典』にある。(石毛忠／他. 日本思想史辞典. 山川出版, 2009, p. 886.)
- <sup>9</sup> 改暦により、陰暦明治 5 (1972) 年 12 月 3 日が陽暦明治 6 年 1 月 1 日となった。5 年陰暦 12 月 3 日以前は陰暦である。
- <sup>10</sup> 福沢諭吉 (福澤諭吉 天保 5 (1834) 年-明治 34 (1901) 年) は、幕末明治の教育者、啓蒙思想家である。中津藩の出身であったが、蘭学や英学を修め幕府の遣米使節 (万延元 (1860) 年) に加わり、帰国後は幕府の翻訳方に出仕した。「学問のすゝめ」他、著書は多数ある。維新後は慶応義塾の拡充に努めまた明治 15 (1882) 年には『時事新報』を創刊した。(注 8 日本思想史辞典, p. 854 参照) 人名である「福沢」の表記には、注 8 日本思想史辞典に倣って、当用漢字を用いた。
- <sup>11</sup> 木村毅. 成島柳北論. 早稲田文学, 229 号, 1925. p. 124.
- <sup>12</sup> 岡野他家夫. 明治文学研究文献総覧. 富山房, 1943. p. 552.
- <sup>13</sup> 明治文化研究会は、明治文化を研究対象として設立され、それに関しては以下の記述がある。  
1924 (大正 13) 年 11 月、前年の関東大震災で明治期の文化財が消滅・散逸するのを憂えた吉野作造が、尾佐竹猛・藤井甚太郎らと明治文化研究会を創立した。(注 8 日本思想史辞典, p. 970.)
- <sup>14</sup> 野崎左文. 成島柳北仙史の一面. 新舊時代. 明治文化研究 : 新旧時代 [複製版] vol. 2, No. 8, p. 22.
- <sup>15</sup> 野崎左文. 成島柳北仙史の面影. 増補 私の見た明治文壇 1. 平凡社, 2007. p. 244-45 参照。
- <sup>16</sup> 注 15 増補 私の見た明治文壇 1. p. 246.
- <sup>17</sup> 前田愛. 成島柳北. 朝日新聞社, 1990. 巻末の前田愛に拠るあとがきには、「とりわけ、越智治雄氏の柳北論 (『近代文学の誕生』等) からは教えられるところが多かった。」と記されている。
- <sup>18</sup> 乾照夫. 成島柳北研究. ペリカン社, 2003.
- <sup>19</sup> 土屋礼子. 書評「乾照夫著『成島柳北研究』」. メディア史研究 vol. 17, 2004. p. 177.
- <sup>20</sup> 注 17 成島柳北, p. 258.
- <sup>21</sup> 注 8 日本思想史辞典, p. 886.
- <sup>22</sup> 乾照夫. 成島柳北研究. ペリカン社, 2003. p. 13 参照。
- <sup>23</sup> 前田愛. 幕末・維新期の文学／成島柳北. 筑摩書房, 1989. p. 20.
- <sup>24</sup> 『幕末・維新期の文学』は 1972 年 10 月に法政大学出版局から刊行された。小池正胤は『日本近代文学』(18, 1973 年) の書評「前田愛著『幕末・維新期の文学』」の中で、前田の近世から近代文学についての論考の特徴を以下の様に述べている。  
氏の幕末・維新の文学を貫く美学とその方法は、人と作品に何種かの偏光プリズムを当てて解析し、それを「政治と文学」「有用と無用」、そして冒頭の詩篇の「狂愚」と「才良」にそれぞれ当てはめ、さらにどのように組み合わせしていくか、ということにあるのではないかと考える。
- <sup>25</sup> 「伝統文芸」は、近代文学に対しての江戸時代の戯作文学、漢詩文、和歌文学を指すことが『時代別日本文学史事典』近代編に記されているので、本研究ではそれに倣う。(有精堂編集部. 時代別日本文学史事典近代編. 有精堂, 1994. p. 4.)
- <sup>26</sup> 「啓蒙」とは、西洋的な意味では理性の光に照らして旧習を打破することであるが、日本の啓蒙思想とは福沢諭吉や西周に代表される明六社の人々の思想を指すとされている。福沢の思想の内容については以下のように記されている。  
福沢の主張する日本の最重要課題は、近代西洋文明を支える思想を移入することで広く民衆を啓蒙することにあり、彼の「学問のすゝめ」(1871~76)、「文明論の概略」(1875) を代表とする。(注 8 日本思想史辞典, p. 284.)
- <sup>27</sup> 明治の人は殆ど〈反近代〉に心ひかれる素養の持ち主であると、従来からの指摘があったが、柳北と「反近代」との関わりについては、山田有策によって以下のような把握がなされていた。  
もちろん漢詩文に見あう美意識を核としつつ、欧化に狂奔する浅薄な世相を『柳橋新誌』第二篇 (明 7・2) などで痛烈に諷刺してみせた成島柳北などは鋭く〈近代〉の底の浅さをえぐっているわけで、〈反近代〉の極北にたたずんでいると言ってよい。(三好行雄. 別冊 国文学 近代文学史必携. 学燈社, 1987. p. 75.)
- <sup>28</sup> 新編柳北詩文集. 漢詩文集. 新日本古典文学大系 2 明治編. 岩波書店, 2004. p. 255.
- <sup>29</sup> 福澤諭吉全集 1. 岩波書店, 1958. p. 39.
- <sup>30</sup> 芳賀登. 民衆概念の歴史的変遷. 雄山閣出版, 1994. p. 327.

## 第 I 章 幕臣としての歩み

### 第 1 節 幕藩体制の揺らぎの時代に生まれて

#### 1 奥儒者の家

##### (1) 柳北の家系

幕府の儒官である成島家に生をうけた柳北は、儒教的教養や倫理をより多く身につけることが宿命でもあった。柳北は天保 8 (1837) 年 2 月 16 日、奥儒者成島良譲 (よしのり) (号筑山・稼堂) の子として浅草厩河岸の賜邸に生まれた。柳北自身の『遷上隠士傳』<sup>1</sup> に拠れば「遷上の隠士、その名を惟弘といひ、字を保民と呼ぶ、幼名甲子麻呂、長じて甲子太郎と改む、天保丁酉の年二月甲子に生まれし故なり」と記されている。柳北には多数の号があり、遷上漁史、松菊荘、可愛叟、桃花生、何有仙史、誰園、春聲楼、我楽多堂、不可拔齋等が使用されたが、一般には甲子太郎、号柳北 (都の北に住んだことに起因している) が通称となっている。父の良譲は養子であり、良譲の養父である祖父の司直 (もとなお) (号東岳) は図書頭を勤めたこともあった。

成島家の本姓は源姓であり、新羅三郎義光を祖として、代々甲斐に居住していた。柳北の残した『先祖書』では次のように記されている。

新羅三郎義光ノ後裔 甲斐國成島村ニ居住依而成島ト稱 成島惣太夫信郷大永ノ比成  
島村出生 天文年中武田信玄ニ仕へ 信玄卒後成島村ニ退隱【先祖書】<sup>2</sup>

やがて信郷の男、道雪信次は江戸に出て徳川家に仕え、寛永 7 (1630) 年の將軍家光の時代にはお広間坊主となった。成島家では道雪信次が始祖とされているが、儒者として聞こえるようになったのは三代・道築信遍 (のぶゆき) (号錦江) からであった。二代目の信好の養子となった錦江は松平下總守の家臣平井金左衛門信休の次男で、荻生徂徠 (寛文 6 (1666) 年-享保 13 (1728) 年) の門人であり、將軍吉宗の侍講となった。その後、奥儒者としての地位を成島氏は世襲することとなった。

##### (2) 祖父と父

成島家の六代目司直は柳北には祖父であり、大学頭林述斎 (明和 5 (1738) 年-天保 12 (1841) 年) の下で文化 6 (1809) 年に御実記編纂を命じられて、編纂局を自邸に設けた。祖父の司直にはまた幕政への関心もあった。柳北の遺孫大島隆一 (第十二女梅子の子息) の著作である『柳北談叢』には、司直の政治や社会への関心の顕著な事例について以下の記述がある。

「奥儒者成島司直、幕府に上書して水野忠邦の専横を訴へ、諸弊の改革を請ふ」(「國史大年表」) と、あるやうに、ときの、老中・水野忠邦の政策にたいして、けつぜん、たつことを辞さなかつた。これは天保十二年のことである。<sup>3</sup>

この天保 12 (1841) 年 8 月に司直は、多年の功績から御広屋敷御用人格五百石となり、諸大夫に叙せられ、名を図書頭と改めた。著書は代表的なものに『東照宮実記』があり、他にも五百余の著作がある。しかし司直は水野忠邦を批判したことから、養子の良譲と共に罷免された。大島隆一は『柳北談叢』の中で司直と柳北について「『柳北と司直』—このふたりは、まことに近似したところがあつた、といへる。」<sup>4</sup>と、述べている。

柳北の父稼堂はこの司直の養子良譲で、奥医師杉本宗春院良敬の次男で、天保 14（1843）年には稼堂と名乗った。稼堂も養父司直と共に罷免されていたが、『後鑑』等の編纂に功績があり、嘉永 4（1851）年 6 月には奥儒者となった。しかし嘉永 6（1845）年、柳北が 17 歳の時に稼堂は歿した。稼堂には三男一女があったが、二児は早世し、柳北は三男であった。荷風の「成嶋柳北の日誌」には、稼堂について、以下の記述がある。

嘉永四年六月廿九日より奥儒者となつたが、其職に在ること久しからず嘉永六年十一月十五日に遽に病んで歿した。行年五十一歳。翌年三月十七日に至つて始めて其訃を公にしたのは、其男甲子太郎が跡目相續の手續の済まなかつた故であらう。

柳北の出生については、柳北が稼堂の養子であるという説があり、<sup>5</sup> 永井荷風の「成嶋柳北の日誌」には、成島家の先祖書の末尾に柳北の女婿成島謙吉の「成嶋柳北翁ハ襁褓ノ時口男ヲ貰ヒ成嶋桓之助ノ實子トセシナリ」という記述が引用されている。さらに、柳北自身の作品には以下のように姓の異なる兄弟がいたことが記されている。

十六日晴 森兄 訪ひ來たり旅路のこと種々物語す（「航薇日記」）

本日始テ家信ヲ得ル其喜び比ス可キ無シ書ヲ寄セシハ 森楠二兄 荊妻謙兒舟橋玉卿國井忠雄竹内財次等ナリ（「航西日乗」明治 6 年 2 月 16 日の記述）<sup>6</sup>

特に「航西日乗」の記述からは、異国での肉親家族の手紙に接した柳北の喜びが表現されており。森は森省吾（?-1898）、楠は楠山孝一郎（生没年不詳）のことである。

森省吾は旧幕臣森泰次郎のことで、柳北の実兄（松本家次男）であった。幕末には神奈川奉行・海軍奉行配下で活躍し、維新後は工部大学校で学び、明治 21（1888）年には陸軍五等技師となり、維新政府に仕えていた。<sup>7</sup> また楠山孝一郎も柳北の実兄の一人で、永井荷風が「成嶋柳北の日記につきて」（昭和 2 年、のち「成嶋柳北の日誌」と改題）に記した成島家先祖書では「孝三郎」と記されている。<sup>8</sup>

### （3）少年期から家督相続まで

奥儒者の家庭で育った柳北は、早期から経学では「四書五経」を学び、また漢詩文や堂上派の和歌のも学んでそれらの創作にも励んでいた。奥儒者であった成島家は、三代・道築信遍（錦江）が荻生徂徠の門人でもあったので、古文辞学の影響も受けていたが、寛政異学の禁（寛政 2（1790）年）で徂徠学派は折衷学派と共に禁じられていたことから、柳北も昌平坂学問所の正学である朱子学の素養を身につけるように教育されていたと考えられる。柳北は少年時に父から受けた教育を「仲冬十一莫先考周忌不勝凄愴謹裁蕪草一篇以供蒹藻之奠」という漢詩に詠んでおり、その中で「六経親授読 韓詩嘗誡符（六経 親しく読を授け 韓詩 嘗て符を誡む）」と詠んでいる。それについて乾照夫は以下のように述べている。

これによると、柳北は幼少の頃より良譲から「六経」（易経・書経・詩経・春秋・礼記・楽記）を伝授されたことがわかる。この「六経」は、所謂「唐虞三代」の制度文物を叙述し、徂徠の説では「六経はその物なり。礼記・論語はその義なり。義は必ず物に属し、しかるのち道定まる」（『弁道』）とされ、徂徠学派が最も重んじた古典である。<sup>9</sup>

徂徠学派で重視された「六経」を柳北が教授されたことは、成島家の内部では「道」を重視する徂徠の思想を受け継いでいたと考えられる。また「韓詩」は『韓詩外伝』のことで、『詩経』の句の意義を故事を用いて解説した書であり、前漢の韓嬰の著作である。内容は主として先秦時代の寓話故事、思想哲学論であった。柳北は父から成島家独自の教育を受けていたのである。林家の家塾から出発した昌平坂学問所では、朱子学に偏した教育が幕臣の子弟に施されていた。朱子学は宋代の朱熹（朱子, 1130-1200）が集大成した儒学思想で、『四書』を重んじることであった。朱熹の著作には『四書集注』や呂祖謙との共著である『近思錄』があるが、後人の編纂した『朱文公文集』121巻、『朱子語類』140巻等の膨大な量のものがある。朱子学の特色は「物事をもっとも根本・統一的に説いていること」<sup>10</sup>である。

また朱子学は江戸時代から明治時代にかけての日本人の知的世界の背景となり、政治的世界にも影響を与えており、以下のような指摘もある。

幕末期には朱子学の華夷論が尊王攘夷論の下敷きにされたり、西学を紹介する時に朱子学の格物致知が科学的意味に転用されたりした。<sup>11</sup>

柳北は父から朱子学以外の古文辞学も教授され、幅広い知識を養っていた。柳北と同時代を生きた信夫恕軒（天保6（1835）年-明治43（1910）年）<sup>12</sup>は、『恕軒文鈔』の中で柳北の修めた儒学の内容について、「先生、学は程朱を宗とし、間ま独得の見有り」<sup>13</sup>と述べている。程朱とは、中国宋代の儒学者、北宋の程顥・程頤の二兄弟と南宋の朱熹のことであるが、恕軒は「程朱」以外の学問も柳北は修めていたと推定しているので、「独得の見」と記したものと考えられる。

柳北は家督相続を済ませた安政（1854）元年には最初の夫人を迎えているが、その女性は幕府の絵師狩野董川の女、瀏（りゅう）であって、董川の妻は父稼堂の娘であった。「柳北にとっては姪に当る」<sup>14</sup>女性との結婚も、柳北が他家の出生であることを裏付けている。婚儀は11月26日に行われたが、以下のように柳北の著した日記『硯北日録』（一）に記されている。

申中刻後 嫁女輿入儀 多抄略 與衆賓飲 青生宿<sup>15</sup>

（申ノ中刻後、嫁女輿入ノ儀、多ク抄略ス。衆賓ト飲ム。青生宿ス）

（大意：申の刻である午後4時から一時間位して、花嫁の輿が到着した。婚礼の様相については省略する。来客と酒を飲み青生は宿泊した。）

「青生」という人物が宿泊したことは記しているが、花嫁の記述は全くない。「青生」というのは当時の柳北の門人青木銀三と考えられ。青木は嘉永7（1854）年の柳北の日記である「甲寅日録」の正月3日にも柳北を訪れていた。

やがて柳北の夫人は安政3（1856）年11月に男児を出産したが、まもなくこの嬰兒は死去した。子供の死から7日後に柳北は奥儒者となり、将軍家茂の侍講となったが、翌4年3月17日の『硯北日録』（四）には夫人は実家に戻り、「此夜阿瀏大歸于其家（此ノ夜 阿瀏其家ニ大歸ス）」と記されている。「大歸」という表現は「嫁した女が離縁せられて實家にかへること」<sup>16</sup>である。20日に柳北は江戸城を退出後に頭痛となり、「有疾頭岑々（疾頭有リ岑々）」と記され、その病は21日にも続いていたことが記されている。25日には狩野氏を正式に離別した。『硯北日録』（四）には、「狩野氏決細君大去之事也（狩野氏細君大去ノ事ヲ決スナリ）」記されている。

『硯北日録』（四）の3月20日から21日に頭痛が続いていたような状況から、柳北にとってこの離婚

は、非常に耐え難いことであったと考えられる。

離婚から一カ月、柳北は旗本永井主膳の妹と再婚した。4月24日の『硯北日録』（四）には、以下の記述がある。

此日迎永井氏賀客雜園山口夫妻管其事夜將曉寢此日論講如例

（此ノ日永井氏ヲ迎フ。賀客雜園、山口夫妻其ノ事ヲ管ル。夜將ニ曉セントシテ寢ヌ。此ノ日輪講例ノ如シ）

（大意：この日永井氏を迎えた。客が多く婚礼は盛んであった。山口夫妻が媒酌の労をとっていた。夜がまさに明けようとした頃に寝た。この日の輪講は通常どおりであった。）

最初の婚礼の時と同様に、花嫁個人への記述はないが、柳北は淡々と人生の節目の儀式に臨んだこととされる。

## 2 内憂外患の時代

柳北誕生以前の天保年間には凶作や打ちこわしが全国的に多発していた。天保8（1837）年大阪では大塩平八郎の乱が起こった。大塩平八郎（寛政5（1793）年-天保8（1837）年）は陽明学者でまた大阪町奉行所の与力であったので幕府の衝撃は大きいものがあつた。大塩は蜂起直前に、水野忠邦らの幕閣や水戸藩徳川斉昭、林大学頭に宛てて書簡を送り、大坂町奉行への批判や大坂での大名などの不正な経済行為を報告しているが、これらの書簡は届かずに終わっている。<sup>17</sup>

この年、米国のオリファント会社の持船モリソン（Morrison）号（当時は英国船とされていた）が浦賀に入港する事件が起こったが、異国船打払令に基づき砲撃された。このモリソン号にはマカオで保護されていた4人の日本人漂流民が乗っており、モリソン号がこの日本人漂流民の送還と通商・布教のために来航していた事が1年後に判明し、異国船打払令に対する批判が強まった。天保10（1839）年には『慎機論』を著した蘭学者渡辺崋山（寛政5（1793）年-天保12（1841）年）や、『戊戌夢物語』を著した高野長英（文化元（1804）年-嘉永3（1850）年）が幕府の対外政策を批判したため逮捕されるという事件、蛮社の獄がおこったが、崋山と長英の著作については、以下のような評価がされている。

いわば在野の知識人ともいべき彼らが著したこの二著は、従来ややもすれば現実から遊離しがちであった海防論や地勢論を、すぐれた世界認識の上に立って合理的かつ現実的なレベルにまで引きあげ、それによって幕府の鎖国政策を根底から批判するきっかけをつくることになった。<sup>18</sup>

しかし崋山等の主張は当時の日本人の意識を世界に向けるまでには至らなかったという見方もあり、以下に記す。

のちに蛮社の獄（1839）により投獄された高野長英（1804-50）は、『戊戌夢物語』（1838）において、鎖国政策は是認していたのであつた。むしろ彼の後援者でもあつた渡辺崋山（1793-1841）の『慎機論』（1838）のように、鎖国政策それ自体を批判し、世界に向けて自らを開くべきことを説く主張もあつたが、このような動きが一般化するに至るには、アヘン戦争（1840-42）を経て、ヨーロッパ列強の脅威が現実のものとして認識されるのをまたなければならなかった。<sup>19</sup>

また外国への危機意識をもっていたのは、崋山や長英のような尚齒会の蘭学者だけではなく、危機意識をもっていた人々には幕臣もあり、勘定吟味役川路聖謨、代官江川英竜等であった。林述斎の子であった目付の鳥居耀三は江川英竜等が崋山に接近することを察知し、洋学者の勢力拡張を警戒して弾圧を加えたのであった。崋山自身は『慎機論』が幕政批判にあたる内容であることは弁えており、実際には公表されなかったが、天保 10（1839）年 5 月に、幕政批判が名目の家宅搜索の際に押収されたのであった。<sup>20</sup> 崋山や長英の著作がアヘン戦争の敗北後に公に知られることになれば、彼らの罪状も多少軽くなり得る可能性もあったと考えられる。

同じ天保 10（1839）年 6 月には徳川斉昭が將軍家慶に対して、『戊戌封事』を提出して、内憂外患を説いた。そこでは「外患対策＝海防強化論がオランダ貿易禁止論、蘭学弾圧論としても展開され」<sup>21</sup> ており、幕閣はオランダ・蘭学問題への対応を迫られた。この『戊戌封事』に対して天文方渋川六蔵（鳥居耀三の腹心）は、天文方の蘭学奨励等を要望する提案を出した。アヘン戦争後には対外危機も進行して、幕府も洋式の軍備の必要性に迫られ、洋学は軍事科学の側面が重視されることになった。

嘉永 6（1853）年のペリーの浦賀への来航後、幕府は不平等条約により外国との通商を開始した。これは米国総領事ハリスが中国でのアロー戦争での英仏の脅威を利用して幕府との条約交渉を有利に進めたからである。これら五か国との不平等条約を総称して安政五か国条約という。その調印月日を以下の表 I-1 に示す。

表 I-1 不平等条約の調印

調 印 国	調印日（陰暦／陽暦）
アメリカ	6 月 19 日／7 月 29 日
オランダ	7 月 10 日／8 月 18 日
ロ シ ア	7 月 11 日／8 月 19 日
イギリス	7 月 18 日／8 月 26 日
フランス	9 月 3 日／10 月 9 日

（朝尾直弘、日本史辞典、角川書店、1996. p. 46）

対外政策からの幕藩体制批判の精神は、佐久間象山、横井小楠、吉田松陰等に引き継がれ、やがて天皇を重んじて欧米諸国を日本から追放しようとする後期水戸学の流れが尊王攘夷運動を形成していった。

後期水戸学の影響をうけた吉田松陰は、尊王攘夷のため井伊直弼ら幕府要路の排除による幕政矯正から倒幕へと進み、その主体も大名から士民に降下させ草莽崛起論を提唱した。<sup>22</sup>

天保年間（1830-44）の尊王攘夷論の形成の理論的根拠は後期水戸学から与えられたもので、内憂外患の時代は倒幕運動の時代へ徐々に変遷していったのであった。

### 3 漢文戯作による社会風刺

内憂外患の時代を象徴するかのように、混乱する幕末の社会を風刺した文芸作品が著された。『江戸繁昌記』は寺門静軒（寛政 8（1796）年-慶応 4（1868）年）によって、柳北の誕生以前、天保 2（1831）年に初篇が著わされ、天保 6 年 3 月には初篇と二篇が南町奉行所から発売差し止めの処分を受けていた。



その内容は巻頭で述べられた「相撲」「吉原」「劇場」の三章を出発点としている。「吉原」や「劇場」といった悪所が強調されたのは、「静軒は吉原と芝居町を核とする巨大な『あそび』の空間として、大御所時代の江戸を描きだそうとしたのである。」<sup>23</sup>と考えられている。

しかし一方には風俗誌の裏側での武士や儒者に向けられた批判もあり、「無用の人」<sup>24</sup> 静軒の時代に対する諷刺も込められていた。『江戸繁昌記』については、以下のような見方がされている。

「江戸繁昌記」は、蜀山人の狂詩文や、漢文でものした初期の洒落本等の形式にヒントを得、雅望・京傳・三馬・馬琴・一九・西鶴等の戯作者の作品に材料や見方を習ひ、其の個性の熱烈辛辣さを筆端に躍らせて書き上げたものであらう。<sup>25</sup>

水戸藩の下級武士の庶出の子であった静軒（名は良、字は子温、通称は弥五左衛門）は、折衷学者山本緑陰<sup>26</sup>の門下生であったが、父の死や、異母兄の水戸藩からの出奔などにより水戸徳川家への仕官運動に挫折し、天保2年の夏から『江戸繁昌記』を書き始めた。

この作品は平穏な生活の中の繁栄を背景としたものではなく、幕藩体制の崩壊の予兆ともいえるべき天保の大飢饉前後に書かれたもので、やがて筆禍を招き、「武士奉公御構」（奉公禁止）となった。その後の静軒は、生活に迫われた浪人儒者としての生涯を送り、慶応4（1868）年3月24日、73歳で没した。徳川慶喜が江戸城を官軍に明け渡したのが、それからまもない4月11日であり、静軒の生涯は武家政治と同時に終焉したのであった。しかし『江戸繁昌記』は天保7（1836）年には5篇が密かに出版されたので、広く読まれ、柳北も愛読していた。柳北は漢文戯作『柳橋新誌』初編において、安政6（1859）年の序の冒頭で「往日有静軒居士者著江戸繁昌記備模八百八街之景状（往日、静軒居士なる者あり。江戸繁昌記を著はす。備さに八百八街の景状を模し）」<sup>27</sup>と、『江戸繁昌記』の作者である静軒に敬意を払う姿勢を取っている。

## 第2節 『柳橋新誌』初編の創作

### 1 創作の背景

『柳橋新誌』初編は安政6（1859）年10月に、柳北が23歳の時に成立し、翌万延元（1860）年7月、『柳橋新誌』初編の追補が成立した。幕末の江戸の花街が漢文による散文形式で描かれている。それ以前にも知識人の風雅な遊びとして遊里の風俗が漢文で描かれていたことはあった。享保13（1728）年の『両巴唇言（りょうはしげん）』や、天保3（1832）年『江戸繁昌記』などの先行作品もある。柳北が誕生した頃、寺門静軒（寛政8（1796）年-慶応4（1868）年）は既に代表作『江戸繁昌記』天保2（1831）年を著しており、天保9（1838）年3月には初篇と二篇が南町奉行所から発売差し止めの処分を受けていた。また後年『東京新繁昌記』を著した服部撫松は柳北誕生より4年後の天保12（1841）年に誕生している。

柳北が柳橋の花街に出入りするようになったのは、安政3（1853）年20歳で將軍侍講になった頃からであった。安政6（1856）年11月に初編は成立し、翌万延元年に追補が成立した。天保の改革以後、深川の花街が衰退したが、それに変わって嘉永末（1854）年頃から柳橋が繁栄を極めた様子が柳北によって描かれている。

安政6年の序では、まず冒頭で「往日有静軒居士者著江戸繁昌記備模八百八街之景状（往日、静軒居士なる者あり。江戸繁昌記を著はす。備さに八百八街の景状を模し）」<sup>28</sup>と、『柳橋新誌』が『江戸繁昌記』を継承したものであることを明記している。また清の余懷による『板橋雜記』の影響を受けたもの

でもあることも各所に盛り込んでいる。

青年柳北は先人のこれらの作品を下地として実際柳橋での自己の体験も盛り込みながら、風雅な遊里を描いたのであった。『柳橋新誌』初編の最後には以下の記述がある。

若夫山川風月綺羅弦歌之遊多々益善豈有盡于此哉況其妙籌奇訣則在人々腔子裏而存焉寔非筆墨所得而形狀也噫

（若し夫れ山川風月、綺羅弦歌の遊びは、多々益々善し。豈に此に尽くるあらんや況んや其の妙籌奇訣（めうちうきけつ）は、則ち人々の腔子裏（こころのうち）に在って存するをや。寔（まこと）に筆墨の得て形状する所にあらざるなり。噫（ああ）。）

（大意：四季の風物や美女や弦歌を楽しむ遊びは、遊べば遊ぶほど味わいが深くなり、尽きることはない。その妙計と秘訣は遊里の人々の心の内側にあるのであり、まことに筆で記す所ことはできない。ああ残念である。）

遊里の風雅の奥には、柳橋の花街の厳しい秩序や金銭を重視する慣習があり、それらを包み込んだ上で、柳北は遊びの場としての柳橋を描こうとしたと考えられる。しかし遊里の人々の言葉の裏側の意味が深長であるので、筆舌に尽くしがたいと述べている。

## 2 『板橋雑記』を手本とした作品の構成

『柳橋新誌』初編は柳北が影響を受けたとされる『板橋雑記』に、作品としての構成が類似していると言われている。前田愛は二つの作品の構成を次の表 I-2 にまとめている。<sup>29</sup>

表 I-2 『板橋雑記』と『柳橋新誌』初編の作品構成

『板橋雑記』	『柳橋新誌』初編
雅遊編 1 金陵帝王建都之地（金陵の概観）	1 柳橋の概観
2 旧院人称曲中（妓女の呼称）	2 船宿 3 酒楼案内
3 妓家各分門戸（遊興の実際）	4 転妓 5 妓女の呼称
4 長板橋（風物）	11 柳橋の四季
5 秦淮燈船（行事）	
6 教坊梨園（演劇）	
7 裾履少年（風俗）	7 箱屋の風俗
8 南曲衣裳装束（衣裳）	8 衣裳
9 曲中女郎（妓家の内情）	6 妓家の内情
10 旧院与貢院（書生の遊興）	9 風流子弟に示す
11 曲中市肆（飲食）	1 柳橋の概観 3 酒楼案内
12 虞山錢牧齋	
麗品編	10 妓女の連名
佚事編	
附録	

（前田愛. 『板橋雑記』と『柳橋新誌』. 前田愛著作集 1. 筑摩書房, 1989. p. 492 掲載の表を筆者が横書き

に改めた。)

花街での風雅な恋を求めた柳北ではあったが、実際には柳橋の花街は金銭本位の世界であった。金銭本位という点では『板橋雑記』の世界も同様であったが、『板橋雑記』の妓女には客と対等に会話の出来るほどの高い教養があり、また客への真実の愛情に目覚める人間性をもちあわせていた。この『板橋雑記』の構成を下敷きに『柳橋新誌』初編が描かれていると考えられていて、前田愛は「虚飾と金の威力が横行するかぎりでは、東西の遊里はむしろ多分に共通項を持つ」<sup>30</sup>と述べている。

### 3 花街としての柳橋

『板橋雑記』の影響のもとに構成された『柳橋新誌』初編には、作者柳北はどのような世界を描きだしているか、それを次に述べる。

#### (1) 柳橋の概観

柳橋という地名は、現在は東京都台東区南東端の地区であるが、その地名の言われは、神田川が隅田川へ流入する落口に架けられた「柳橋」という橋に由来している。現在地名としての柳橋は台東区側に残っているが、中央区（旧日本橋区）側には明治初年以降に元柳町という一帯があった。ここは隅田川の舟遊びや、新吉原や向島を結ぶ舟運の中心地でもあり、川口に架けられていた柳橋の両側には幕末には料亭・待合茶屋・芸者置屋で賑わっていた。「柳橋」という橋については、『柳橋新誌』初編の中で以下のように語られている。

橋以柳為名而不植一株之柳舊地誌云以其在柳原之末命

(橋、柳を以て名と為して、一株の柳を植ゑず。旧地誌に云ふ、其の柳原の末に在るを以て命くと。)

(大意：「柳橋」という橋は柳が植えられていたからではなく、『江戸名所図会』に柳原の末にあるので、柳橋と名づけたと書かれている。)

橋としての「柳橋」の歴史については、昨今では前田愛によって以下のように述べられている。

神田川の川口近く、下柳原同朋町（現在の中央区両国）から下兵右衛門町（現在の台東区柳橋一丁目）に架かる橋で、元禄十一年（一六九八）に架設、初めは川口出口の橋と呼んだ。その後度々掛け替えになり、『柳橋新誌』初篇が執筆された安政六年（一八五九）は嘉永五年（一八五二）の掛け替えから七年目にあたる。橋の長さは幕末から明治初年にかけては一四間（約二五メートル）。橋名の由来は『江戸名所図会』に「柳原堤の末にある故に名とす……」とあるのが定説だが、その時期は不明。<sup>31</sup>

柳橋は橋の名前ではあるが、次第にそのあたり一帯の地の総称となった。新吉原や深川に通うことに使われた猪牙という小舟の出発する船宿が柳橋周辺にあったことから、自然と行遊の拠点として舟遊びや宴席に興を添える芸妓の水準には高いものがあったのである。またそのあたり一帯のにぎわいについては、『柳橋新誌』初編の中で以下のように述べられている。

餅店之餅可以壅遏黄河之水果舗之果可以彈盡齊圍之禽

（餅店の餅は以て黄河の水を壅遏（ようあつ）すべく、果舗（クダモノヤ）の果は以て斉園（せいいう）の禽（とり）を弾尽（ウチツク）すべし。）

（大意：餅屋には黄河の水を止めるくらい沢山の餅があり、果物屋には斉の宣王の庭園に飛ぶ鳥を撃ち落とせるくらいのたくさんの果実がある。）<sup>32</sup>

柳橋界限の賑わいは、黄河の水や斉の宣王の庭園に比較できるほどであると誇張されている。さらにその賑わいの担い手となった芸妓については、以下のように述べている。

蓋柳橋之妓其粧飾淡而有趣其意氣爽而不媚

（蓋し柳橋の妓、其の粧飾淡にして趣あり。其の意氣爽にして媚びず）

（大意：しかし柳橋の芸者は化粧はうすくて情趣がある。その意気も爽やかで客に媚を売ることはない。）

柳橋の芸妓の特徴は、媚態がなく、芸を売ることを真情とした芸妓の心意気にあるとしている。芸妓を相手として花街での遊びについては、柳北は以下のように述べている。

告子有言曰食色性也（告子言ふことあり、曰く「食色は性なり」と。）

（大意：告子には「食色は、人間の本性である」とある。）

『孟子』の「告子章句上」には、以下の記述がある。

告子曰、食色、性也。仁、内也、非外也。義、外也、非内也。<sup>33</sup>

（告子曰く、食色は性なり。仁は内なり、外に非ざるなり。義は外なり、内に非ざるなり、と。）

（大意：告子が言うに、「食物と女色を悦び好むことは、人の本性である。これら好愛するという心持がもとになっている仁徳は、やはり人の内部に自然に発生するものであって、外からおしつけられたものではない。それに対して、外部の事情によりその宜しきを判断して、正しく行っていくという義の徳は、外部からきめられたものであって、内から自然に発生するものではない。」と。）

柳北は人間にとっての遊びは、仁徳と同じように人の内部に自然に発生するものであると考えていたのであった。またその遊びと人間との関わりについては、以下のように述べている。

亘哉客之來耽者亦稱嘆於此而不通之人亦能得爲通矣豈不盛乎

（亘なる哉、客の来たり耽る者、亦此に稱嘆して、而うして不通の人も亦能く通と為ることを得る。豈に盛んならずや。）

（大意：最もなことであるが、花街に来てそこにひたる人、また称赞する人がいる。しかしながら花街の情趣を解さない野暮な人でも野暮が洗練されて通な人に育て上げられる）

柳北は柳橋のような洗練された花街によって、野暮な人間も「通」になっていくことがありうるとしている。「遊び」を通じて人間の幅が広がると述べているのである。

## （２）船宿・酒楼

花街である柳橋の船宿間には厳しい掟がある。柳橋一帯の船商は四区に分かれていて、三十三戸の店があり、互いに助け合い、団結をしていると記されている。それだけに、船頭の不正も許されない。一つの岸で不正を働いたものは他の岸でも雇われることはないのである。きびしい掟によって船宿の世間への信用を維持している様相が以下のように述べられている。

四岸之相結也如親戚然患難相援吉凶相問若二岸有争二岸解之一岸有曲三岸讓之故舟子為姦一岸逐之者三岸亦拒之

（四岸の相結ぶや、親戚の如く然（しか）り。患難相援（たす）け、吉凶相問ふ。若し二岸争ひあれば、二岸之を解く。一岸曲（きょく）あらば、三岸之を讓（せ）む。故に舟子（センドウ）の姦を為して一岸之を逐（お）ふ者は、三岸も亦之を拒（こば）む。）

（大意：四つの岸の船宿群の関係は、親戚どうしのものであった。災難や悩みのある時は助け合い、互いの無事を尋ねあった。もし二つの岸が争えば他の二つの岸がこれを修復するように整えた。一つの岸に不正があれば、他の三つの岸がこれを責めとがめた。それ故に船頭で不正をした者で一つの岸から追い払われた者は、他の三つの岸も之を雇うことはない。）

花街の裏側には伝統的な厳しさがあり、また互いに助け合っていたのである。さらに実際に船宿を取り仕切っているのは、その家の主婦である女将で、夫である主人は博打をしたり、店で居眠りをしたりする者など店の経営は妻に任せているような場合が多かった。

世俗所謂女天下者余亦目為女將軍女將軍每家伶俐口給無有一樸愚者

（世俗所謂はゆる女天下なる者にして、余も亦目して女將軍と為す。女將軍、家毎（いへごと）に伶俐口給（リコウクチキ）、一の樸愚（ぼくぐ）なる者あるなし。）

（大意：世間一般にかかあ天下と言われる者で、自分もまた女將軍と名づける。女將軍はその家ごとに伶俐な口を聞き、愚直な者は一人もない。）

女将には伶俐な人が多く、その様相は柳北自身の見聞から以下のように描かれている。

客至女將軍趨而邀之口巧眼捷直看取了其貧富與慧愚富與愚是彼之所欲也

（客至る。女將軍趨（はし）つて之を邀（むか）ふ。口巧みに眼捷（まなこはや）し。直ちに其の貧富（アルナイ）と慧愚（リコウバカ）とを看取し了す（ミテトル）。富と愚とは、是れ彼の欲する所なり。）

（大意：客が来ると、女将は走ってこれを向かえる。言葉たくみに目ざとくその人となりを観察する。客が愚かでお金があれば、これが女将の最も欲する所である）

女将は機敏な行動で客に対応し、客の全て、知性や経済力を観察する。それは客の背後に金銭があるかどうか、またそれが自分たちの方に流れてくるかどうかを見るためでもあった。妓を呼ぶこと、さらに妓と客が深い関わりをもとうとする際にもみなこの女将が背後にいる。酒楼でも同様で、女将の客への鑑識眼が花街を成立させていたのであった。酒楼では婢が仲立ちすることもあり、謝礼がないと客と芸妓の仲を裂くことも画策する。

嗚呼人情翻覆唯金而已

(嗚呼 人情の翻覆する(ウラガヘル)、唯だ金のみ)

(大意：ああ悲しいことに、人情が引っ繰り返ったりすることは全て金が支配している。)

才子佳人の出会いを期待していた柳北は、柳橋の花街では客と妓の出会いが金銭によって進展していくことを見聞し、華やかさの裏側に潜む人間模様に目を向ける機会を得たのであった。

### (3) 芸妓

柳橋の妓というのは、本来は売春を目的とした妓ではないのである。柳北は妓というものを一人の人間として位置づけたかった。しかし芸妓にもさまざまな者がいることを記している。

柳橋之妓賣藝者也非女郎也而往往賣色者有焉

(柳橋の妓は、芸を売る者なり。女郎にあらざるなり。而して往々色を売る者あり。)

(大意：柳橋の妓は芸を売る者で、女郎ではない。しかしながらしばしば色を売る者もある。)

現実の柳橋の芸妓は、芸に打ち込み媚は売らないような姿とはほど遠いものが大部分であった。それは柳北の期待とはほど遠い姿であって、以下にその実態が記されている。

蓋柳橋所以到今日之盛者即是頼轉之一字耳矣故記其盛則轉之論説不能不審也

(蓋し柳橋今日の盛を到す所以(ゆえん)の者は、即ち是れ転の一字に頼(よ)るのみ。故に其の盛を記すれば、則ち転の論説審(つまびらか)にせざる事能(あた)はざるなり)

(大意：確かに今日の柳橋の隆盛は、金次第で客に身売る芸妓に拠るものである。それ故にその隆盛ぶりを記することは、不見転芸者の解説をすることなので、それは省略する。)

青年柳北の柳橋の妓に対する幻滅感が述べられているが、柳北の理想とする妓というのは、以下のよう語られている。

而妓之喜任侠而不吝其財重然諾而不辱其人者蓋室婦閨女所不夢視也

(而して妓の、任侠(イサミ)を喜んで其の財を吝(をし)まず、然諾(タテヒキ)を重んじて其の人を辱(はづか)しめざる者は、蓋し室婦閨女(しつふけいじょ)の夢視(むし)だもぜざる所なり。)

(大意：しかしながら芸妓の義侠心があつて、気前もよく、義理や意気地を通して客に恥をかかせないのは、一般の家庭の主婦や娘には夢にも考えられない態度である。)

芸を極め、尚且つ義侠心にとみ、常に客に恥をかかせない配慮をするような存在が柳北の理想とする妓であった。しかし妓たちは置屋に拘束された身でもあった。置屋の女将は多くが仮母であり、少しでも多くの金銭を妓によって稼がそうとするのが、現実に見聞した柳橋であった。

柳北はさらに『板橋雜記』の中の「麗品」の巻が旧院・珠市の名妓の列伝になっていることを踏まえ、柳橋の芸妓の中で主だった者の名を列挙している。この中には友人桂川甫周の愛した「阿竹」や、柳北自身が愛した芸妓たち「阿蝶」「小勝」「久米八」の名も見える。このうち「阿蝶」は、柳北の二度目の

夫人（永井氏）の死後、明治4（1871）年に三度目の夫人となった。また「小勝」「久米八」は安政4、5（1857、58）年頃に柳北の日記『硯北日録』にその名が見える。

#### 4 柳北にとっての『柳橋新誌』初編創作の意義

柳北が心惹かれたのは、芸者と俗に言われる年功を積んだ大妓ではなく、お酌と言われる小妓であった。小妓は大妓が絃歌を職とするのに対して、妓になったばかりの小妓は弾ずることを許されないで、舞うことが多かった。柳北が小妓を愛した理由には、花街に求めた美学に小妓の方がかなっているといことでもあった。それは以下のようなものである。

而大妓易轉貪故也小妓難轉不貪故也

（而して大妓は転じ易し貪（むさぼ）るが故なり。小妓は転じ難し貪らざるが故なり）

（大意：しかしながら大妓は金銭に執着するので、不見転しやすい。小妓は金銭に執着しないので、不見転をすることは少ない。）

花街での「恋」の相手にも、金銭に執着しない小妓の方に実があるということを述べている。

世人論赤心則其意在枕席上耳若然則非淑良者不是如淑良者則可求諸小妓不可求諸大妓也

（世人の赤心（せきしん）を論ずるは、則ち其の意枕席上（フカイトコロ）に在るのみ。然るが若きは、則ち淑良（しゅくりやう）なる者にあらざれば是ならず（ヨクナシ）。淑良なる者の如きは、則ち諸れを小妓に求むべし。諸を大妓に求むべからず。）

（大意：世俗の人々のいう誠意は、妓と男女関係となった時だけである。そのような場合は善良で貞淑な妓でなければならない。善良さや貞淑であることは小妓に求めるべきで、大妓に求めてはならない。）

柳北が求めたものは、花街での才子佳人の「恋」であり、その相手は妓になって間もない小妓であると述べている。さらに花街での遊びは詩や絵画になるような風雅なものでありたいという柳北の理想が述べられている。

余付度千古才子佳人之心想像往昔甘心得意之遊豈得與此間有霄壤之異耶夫風花雲月之變態絲竹肉之妙趣一悲一歡一顰一笑之綢繆可以詩也可以畫也

（余（われ）、千古（せんこ）才子佳人の心を付度し（ハカリシ）、往昔（わうせき）甘心得意の遊びを想像するに（ヲモヒヤルニ）、豈に此の間と霄壤（せうじゃう）の異なるあるを得んや。夫れ風花雲月の変態、糸竹肉（ウタ）声の妙趣、一悲一歡、一顰（びん）一笑の綢繆（カラマリ）は、以て詩すべきなり。以て画（ぐわ）すべきなり。）

（大意：自分が昔からの才子佳人の心を推量し、過ぎ去った日々の心から満足できる遊びを想像するに、この柳橋の遊びと天地の差異があるというようなことがあるか。四季折々の遊びや、管絃や音曲には趣がある。その趣を背景に、妓と客が顔をしかめたり笑ったりして絡み合うさまは、絵にもなるし詩にもなる。）

柳北は金銭本位の傾向を踏まえた上で、趣のある恋によって花街での人間性の快復を心底では願って

いたと考えられる。柳橋での柳北自身の遊びの情趣を詠んだ漢詩には、「春夜閨思」・「夜過柳橋」がある。  
安政5（1858）年頃の漢詩「夜過柳橋」（夜、柳橋を過ぐ）（『柳北詩鈔』巻一）では、終わりの部分で青春の夢が述べられている。

（RH1054）

多愁未占風流場　多愁未だ占めず　風流場（ふうりうちやう）  
青春一夢独自惜　青春一夢　独自（ひと）り惜しむ  
借問月影柳色中　借問（しゃもん）す　月影柳色の中  
不知何処蘇小宅　知らず　何れの処か蘇小（そせう）の宅<sup>34</sup>

ここで柳北は、愁いごとの多いこの遊里に腰をすえるわけではないが、佳人とめぐり合おうという夢も忘れることはできないと述べ、ちょっとお尋ねするが、この月夜の柳の木陰のどこに蘇小小のお宅があるのでしょうかと問う形で自分の感慨を述べている。蘇小小は杭州の銭塘の名妓であり、柳北の理想とする佳人であったが、もはや現在の柳橋にはその面影を宿す妓が少ないことを嘆いている柳北の姿が想像できる。しかし未だ夢を棄てきれない青年が、その当時の柳北でもあった。

自己の体験も踏まえて柳橋の花街の情景を描いた『柳橋新誌』初編は、奥儒者であった青年期の柳北が、人間社会の裏側へ目を向けた出発点となった作品である。花街という美の世界が人間社会の縮図でもあることを柳北は把握した上で、その裏側での人々の暗躍する姿から人間社会の問題を問うことがその創作意図でもある。

### 第3節 海外への関心と幕臣としての苦悩

#### 1 柳北の日記

##### （1）散逸した日記

柳北は八歳頃から、父稼堂から和歌も学んで和漢の文学を身につけ、日記もつけていた。日記を始めたのは嘉永6（1853）年の8月からであった。彼の残した日記で前田愛氏の所蔵によるものが、『硯北日録』と『投閑日記』と呼ばれるものであり、この二つが現存している。以下にその内訳を記すと『硯北日録』（一）（嘉永7年（安政元）正月朔日～同年12月晦日）、『硯北日録』（二）（安政2年正月朔日～同年12月29日）、『硯北日録』（三）（安政3年正月朔日～同年12月30日）、『硯北日録』（四）（安政4年正月朔日～同年12月30日）、『硯北日録』（五）（安政5年正月朔日～同年12月除日）、『硯北日録』（七）（安政7年（万延元）正月朔日～同年12月9日）、『投閑日記』（文久3年8月9日～文久4年（元始元年）6月13日）の7点である。<sup>35</sup>

また柳北の外孫大島隆一の『柳北談叢』によれば、柳北の日記で『柳北談叢』執筆時に現存していたものには、『日記』（嘉永6（1853）年）、『硯北日録』（六）（安政6（1859）年）があった。『柳橋新誌』が書かれた安政6（1859）年の秋の柳北について、大島隆一は『柳北談叢』の中で以下のように述べている。

「九月朔　丁卯　風風雨　登殿　拜賀例ノ如シ。新誌ヲ草ス。」

これによると、九月の朔日から書きはじめたわけで、三旬の餘をつひやし、十月にいたって脱稿した。

これを書きあげた日は、あきらかでないが、『柳橋新誌』初篇の終りにちかく、—「此編成于已—末



仲冬」と、みづから、記していることからみて、十月であることは、たしかである。<sup>36</sup>

前田愛の著作『成島柳北』中の年譜にも「安政六年 一〇月、『柳橋新誌』初編成稿」<sup>37</sup>と記されている。大島隆一は仲冬（十一月）には完成したと書いているので、脱稿したのは10月と考えられる。

さらに、『柳北談叢』(p. 38～39)に記されている柳北の日記には以下の19点があった。『春聲樓日乗』（慶応元年）、『春聲樓日乗』（慶応2年）、『太田營公私日乗』（慶応2年）、『春聲樓日乗』（續）（慶応3年）、『太田營公私日乗』（續）（慶応3年）、『柳北閑人日乗』（明治元年）、『航薇日誌』（一）（明治2年）、『航薇日誌』（二）（明治2年）、『航薇日誌』（三）（明治2年）、『庚午日乗』（明治3年）、『辛未日乗』（明治4年）、『西遊日乗』（明治6年）、『瀧上日乗』（一）（明治11年）、『瀧上日乗』（二）（明治11年）、『瀧上日乗』（三）（明治12年）、『瀧上日乗』（四）（明治13年）、『瀧上日乗』（五）（明治14年）、『瀧上日乗』（七）（明治16年）、『瀧上日乗』（八）（明治17年）である。

『瀧上日乗』（五）と『瀧上日乗』（七）の間には、『瀧上日乗』（六）あったと推定される。欠落しているものについて、大島隆一の『柳北談叢』における見解は以下のようである。

おそらく、これらの日記は、柳北歿後、轉居の際、家人の不注意によつて、いつともなくうしなはれたものであらう。いま、考へると、まことにをしいことをしたものである。<sup>38</sup>

代表作『柳橋新誌』については、『硯北日録』（七）の万延元（1860）年7月5日頃に初編の追補が完成したので、それについての記述がある。

五日丁酉晴柳橋新誌成編疾愈芳山惇齋來酌

（五日丁酉晴柳橋新誌編成ル疾ハ愈ユ芳山惇齋來タリテ酌ス）

（大意：七月五日の丁酉の日は晴れていた。疾は治り、芳山と惇齋が来たので酒を酌み交わした。）

この記述から、体調がよくなったので友人と『柳橋新誌』初編の追補の成立を喜びながら酒を酌み交わしている柳北の様子があったと考えられる。

## （2）日記に見られる幕臣としての柳北

『硯北日録』一では、嘉永7（1854）年正月12日の末尾に「聞蜚舶泊豆州海」（蜚舶の豆州の海に泊すを聞く）という記述が見られる。これはペリーの浦賀来航のことである。また6月27日には米国から献上された「蒸気車」を見た記述がある。

觀米夷所獻蒸氣車 製造巧奇 有湯筒 長數尺 及薪竈

（米夷獻ズル所ノ蒸氣車ヲ觀ル。製造巧奇ナリ。湯筒有リ、長サ數尺薪竈（かま）ニ及ブ。）

（大意：米国が献上した蒸気車を見る。製品としては巧く造られていて、湯筒がありその長さは数尺で薪竈に到達している。）

柳北は蒸気車の形をつぶさに観察している。蒸気車の見学は柳北が欧米の文化に接した初めての経験であった。さらに9月25日の記述には「近頃異邦艦來于大坂海邊」（近頃異邦ノ艦大坂海邊ニ來タリテ）とある。

日本の鎖国時代が終焉する頃には、柳北の人生も多難であった。安政 4（1857）年には 3 月に最初の夫人であった狩野氏を離別し、4 月に永井氏と再婚している。3 月 25 日の記述は「如狩野氏決細君大去之事」と記され、4 月 24 日には「此日迎永井氏賀客雜闌」とある。柳北の離婚や再婚への感慨は事務的な記述だけであるが、封建時代の結婚には近代的な男女相互の理解がなくても家と家の間に成立すればよいというような公の行事として結婚が考えられていたのである。しかし永井家との縁組により、柳北は風雅な遊びへの嗜好を養っていった。柳北は夫人の母親が遊びにくると柳橋や隅田川兩岸の料亭でもてなしたのであった。さらに柳北は 6 月 14 日の記述で、柳橋芸妓小勝との交流を語っている。

與細井忠介舟而遊墨川 飲河喉楼 月券来伴 夜泛二州 晩前雷鳴 雨無

（細井忠介ト舟ニテ墨川ニ遊び、河喉（かこう）楼ニ飲む。月券来り伴フ。夜二州ニ泛カブ。晩前雷鳴。雨無シ）

（大意：隅田川に舟を浮かべて、河喉楼という所で酒を飲んだ。月券も来て夜は二つの中州の間に舟を浮かばせる。夜になる前には雷が鳴っていたが、雨は降らない。）

人名と把握できる「月券」については、前田愛の説明がある。

これは漢字を偏と旁に分解した簡単な暗号で、五月二十一日の舟遊びをともした小勝そのひとであらう。この手の暗号表記は、その後の日記にもひんばんにあらわれる。それは家人の眼をはばかり柳北のさかしらだったろうか。あるいは妓名にひとつひとつ暗号を当てはめて行くささやかな言葉あそびをたのしんでいたのだろうか。そのどちらも当たっているようにおもわれる。<sup>39</sup>

時代の変革期において、西洋の文化に関心をもちつつ、侍講として勤務し、さらに家庭ともうひとつの憩いの場での生活を体験するという多感な柳北の青年時代を日記から読み取ることができる。

## 2 挫折から再起へ

### (1) 閉門前の柳北

万延元（1860）年以前のことは既に述べた。以下では文久 2（1862）年からのことを記す。文久 2（1862）年 3 月 15 日に、柳北は、広瀬青村、大沼枕山、鷺津穀堂、植村蘆洲、小橋橋陰の五氏を招いて満開の花を看に隅田川に遊んだ。柳北と大沼枕山（文化 15（1818）年-明治 24（1891）年）との交流は安政 6（1859）年からで、永井荷風の「下谷叢話」において、次のように記されている。

此年秋の初に『枕山詩鈔』初編三巻が刻せられた。天保六年枕山十八歳の時より嘉永二年三十一歳に至る十五年間の吟作を哀（あつ）めたのである。枕山は初め『詩鈔』を刻するに先だつて序文を幕府の奥儒者成島確堂に乞うたことが、確堂の日誌『硯北目録』己未の巻に見えてゐる。<sup>40</sup>

文久 2（1862）年には枕山は 46 歳、穀堂は 39 歳であった。鷺津穀堂は枕山の親戚であり、荷風の母方の祖父である。彼らの一行は偶然大槻盤溪や桂川月池等の一行と出会った。この花見については、柳北は長詩（RH2036）（『柳北詩鈔』巻二）<sup>41</sup>を残しているが、その中では「花」と同韻字を韻としている。最初の部分では「何」「芽」「遮」が「花」と同韻字である。

(RH2036)

車而看花趣如何	車にして花を看る趣如何
香輪怯輾青青芽	香輪青青たる芽を輾（きし）らんことを怯（おそ）る
騎而看花亦下策	騎にして花を看る 亦下策
四蹄紅塵扞面遮	四蹄の紅塵 面を扞って遮（さえぎ）る <sup>42</sup>

ここで柳北は、馬車で花見に出かけるというのは、その様子はどんなものだろう。車輪が青青とした草の芽を踏みしだいてしまわないか心配であると述べている。さらに馬に乗って花見に行くというのも、まずいやり方だ。馬蹄の蹴立てる塵が顔に当って、花を見えなくするからと述べている。既に『柳橋新誌』初編の追補も万延元（1860）年7月に成り、芸妓お蝶を側室にするなど才子佳人の恋を実生活でも実践していた柳北ではあったが、幕府の若手官僚としての悩みもあったとされている。万延元（1860）年10月に柳北は足利将軍歴代の正史『後鑑』を完成させたが、その中に柳北は幕府の将来を案ずる記述を残していることが前田愛によって指摘されている。

この『後鑑』にそえられた「進後鑑牋（シンゴカンセン）」で、柳北は足利氏の衰亡を殷鑑（インカン）遠からずとして、政務に当る者の自戒すべきことを痛論している。おそらく、事を室町将軍に託して徳川三百年の終焉を憂えずにはいられない鬱勃（うつぼつ）たるものを、柳北は心の中に育て始めていたのだ。<sup>43</sup>

この詩の中の「四蹄紅塵扞面遮（四蹄の紅塵面を扞って遮る）」の部分は唐の劉禹錫（772-842）の七言絶句「元和十年自朗州至京戲贈看花諸君子（元和十年朗州より京至り、戯れに花を看る諸君に贈る）」を踏まえたものである。

紫陌紅塵拂面來	紫陌（しはく）紅塵 面を拂うて來る
無人不道看花回	人の花を看て回（かへ）ると道（い）はざるは無し
玄都觀裏桃千樹	玄都觀裏（げんとかんり）桃千樹
盡是劉郎去後栽	盡（ことごと）く是れ劉郎去つて後に栽（う）う。 <sup>44</sup>

ここで劉禹錫はまず、長安の街上、紅塵面を扞ってぞろぞろと引きもきらず通る人々は、誰しも桃の花を見てきての帰りと言わぬものがないと述べている。さらに今を盛りに咲くという、玄都觀裏の桃千本、それは皆劉郎が出て行った後で植えられたものだという感慨を表している。「劉郎」は、漢詩の作者・劉禹錫と、『幽明録』に記されている仙桃を味わった劉晨という人物の姓をかけたものである。<sup>45</sup>

また桃の花という自然の美しさに都の人々が魅せられたことを戯れに読んだ作品ではあるが、以下の様な理由から著名な作品である。

この詩は、実は作者が自分の都を逐われたあと、朝廷に新しい人々が現われて、政權をわがもの顔にして時めいているのを諷刺した、ということになって、忽ちにしてまた連州に放逐されたという、有名な詩である。<sup>46</sup>

劉禹錫は柳宗元とともに政治改革に参加したが失脚し、この句は左遷の召還後に詠まれたが、再び放

逐された。<sup>47</sup> 柳北は古詩の最初に劉禹錫の句を踏まえており、当時二十代半ばの柳北ではあったが中国文芸への造詣の深さが感じられる作品である。

## （２）閉門中の柳北

翌文久 3（1863）年に、柳北は侍講職を解かれて、閉門を命ぜられたのである。その後の柳北は洋学を学んでいた。柳北の日記『投函日録』は、8月9日の閉門から書かれたものである。しかし11日には、「余自本日讀蘭文典」（余、本日ヨリ蘭文典ヲ読ム）（「投函日録」）と、「蘭文典」を学習し始めていることが記されている。柳北が蘭語を何時から学び始めたかは不明であるが、この時既に文典を読む能力を有していた。大島隆一は『柳北談叢』の中で、以下のように記している。

和蘭語の手ほどきを、たれからうけたものか、このことについて、柳北は、なにも記してゐないが、おそらく柳川春三ではないかとおもふ。<sup>48</sup>

柳川春三（天保 3（1832）年-明治 3（1870）年）は蘭学を修め、英仏語にも通じていて、後には日本人の手になる『中外新聞』を創刊した人物であった。<sup>49</sup> 文久 3 年頃の春三は、幕府の開成所教授であった。また同年の 12 月 4 日には、「三宅生来始學英典神田来」（三宅生来タル英典ヲ学ブコトヲ始ム神田来タル）（「投函日録」）と記されている。神田というのは開成所の神田孝平（天保元（1830）年-明治 31（1898）年）で、前田愛は「神田孝平について『英典』を学びはじめるのは十二月四日である。」<sup>50</sup>と述べている。大島隆一は柳北の英語力について、元治 2（1865）年の柳北の日記『春聲樓日乗』に「三月九日 甲辰 Tuesday 晴 英文典會如例」<sup>51</sup>の記述があると述べている。『春聲樓日乗』は現在では失われてしまった柳北の日記で、柳北が蘭語の習得の後に、英語の学習や西洋の歴史や地理を学んでいることが記されていた。柳北が英学を学び始めたことは、和蘭以外の西欧諸国との交渉が始まったからでもあり、その状況は以下のように把握されている。

幕末のころになると蘭学者らはすでにオランダの国際的な地位の低下を認識して、学術研究の面からもオランダ以外の国を重視しようとする動きは顕在化していた。<sup>52</sup>

文久 3 年の閑居による 50 日間の日々を除いては、奥儒者成島家の当主として、また優れた能吏としての柳北であったが、その内実は決して平坦なものではなかった。それは柳北の日記や、明治元（1868）年に出された自伝「墨上隠士傳」に著されている。

十年文字を以って、内廷に奉仕し、君恩の優渥なるに感泣せしが、一朝擯斥をうけて、散班にいりぬ、そは風流の罪過によると、或は云ふ狷直に過ぎて衆謗を得ると、或は洋學を主張するの故なりと云ふ、何れにてもよしとして、三年籠居籠居、西學者に就て、専ら英書を攻む、大に開悟せしことあり<sup>53</sup>

向上心にあふれ、洋学に関心を持っていた柳北が、幕府の古い体制に疑問をもつに至るのも当然な経緯であった。狂詩を賦したことが、侍講を解かれた原因といわれている。前田愛は以下のような説明をしている。

柳北が賦した狂詩については、二つの説がある。『十大先覚記者伝』（大正十五年）は、『誰知千歳下。二卵捨干城』と役所の壁に墨痕淋漓と大書して用ゆべき人材の空しく埋没するを諷し」といい、渡辺脩次郎の『近世名家伝』（明治十一年）と佐々木秀二郎の『新聞記者列伝』初篇（明治十三年）は、「権官の評議屁よりも臭し。大府の威光軽きこと塵に似たり」という狂詩によって高官の怒りに触れ、五十日間の謹慎を命じられたと伝える。<sup>54</sup>

文久3年は将軍家茂が朝廷から攘夷期日の決定を迫られた年でもある。尊王攘夷運動の志士たちの行動が京都を中心に世情を騒がせた<sup>55</sup>。柳北自身も将軍に先行して京都へ赴いている。幕閣の無策への焦燥感が狂詩となったのである。閉門中に柳北は英学や西洋兵学を修めて、自己充填を行った。

### （3）閉門後の柳北

閉門が解かれて後、柳北は幕政に復帰するのであるが、これは奥儒者としてではなく武人としての登用であった。大島隆一は『柳北談叢』の中で「こゝに柳北は、一轉して、学究の徒から、武人となる。」<sup>56</sup>と述べている。

慶応元（1865）年に歩兵頭並に登用され、まもなく騎兵頭並に転じている。この年来日したフランスの騎兵教官シャノワヌ（Charles Sulpice Jules Chanoine 1835-1915）<sup>57</sup>とは親交を結んだ。「柳北は私的にもかなりシャノアンと親しく交わって、日常フランス語で対話したと伝えられている。」<sup>58</sup>と言われており、幕府では外国語の習得に優れた柳北の能力を評価していたのである。

文人としての柳北は慶応元（1865）年には桂川甫周（月池）と『伊都満底草』を編集している。『伊都満底草』には、桂川甫周（月池）、柳河春三、神田孝平、箕作秋坪等の洋学関係の友人たちが参加した。慶応元年から一年間位のうちに編纂された合作の戯文集である。この中で柳北は、「誰園主人、唯好の朝臣、可愛叟、桃花生など」<sup>59</sup>の名で登場している。

合作の中心人物としての意気込みをくれた調子で語っている。その背景には当時の幕臣としての柳北の立場もあったと考えられる。「述懐の歌よみけるなかに」の項目では、「唯好の朝臣」の狂歌に「大任を下さば下せそれまでは我もゆるりと一ね入せむ」という作品があり、くれた中にも人間としての自己を大切にしたいと願う柳北の思考の一端がうかがえる。

## 3 幕府滅亡の頃の柳北

慶応4（1868）年の3月から4月の江戸開城の際に、恭順論の立場の柳北は、会計副総裁の役職にあった。柳北が大久保忠寛の下で、会計副総裁となったのは「このとき、主戦論者はことごとく排斥された」<sup>60</sup>からであった。開城以前の1月に主戦論の小栗忠順は罷免され勝海舟が海軍奉行の要職についていたが、江戸城内部は混乱しており、末期症状のような観を呈していた。野口武彦はその混乱した状況を以下の様に述べている。

前橋藩松平大和守直克の家老山田太郎左衛門が、慶喜を禁錮して朝廷に謝罪の意を示し、徳川家の存続を図ろうとしていた計画が発覚した。<sup>61</sup>

このような混乱期の中でも、柳北は現在では失われた『柳北閑人日乗』（明治元年）という日記を著しており、大島隆一は『柳北談叢』の中で以下の様に記している。

四月十日から、十一月十七日にいたるもので、柳北は、こゝに一介の平民となり、悠々、漕上の草廬に坐して、はげしい、世の変遷をながめてゐた。柳北三十二歳のときである。<sup>62</sup>

在野の人となった柳北は、世の変遷に傍観的であつたと考えられる。幕末から明治初めの柳北の歩みの概略ついて、猪口篤志は以下の様に『日本漢文学史』の中で述べている。

慶応元年、幕府は鑑みるところがあつて兵制を釐革（りかく）し、柳北をあげて騎兵奉行とした。かくて従五位下大隅守に任じ、秩二千石となり、更に外国奉行・勘定奉行を歴任した。その間も特に意を兵事に用い、議論凱説、深く時弊にあたつたが、行われず、翌年病と称して辞職した。しかし人材乏しき折、その冬には再び会計副総裁にあげられ、参政の列に入った。維新の際は徳川氏のため大いに尽力したが、江戸開城とともに野に下り、爾来官途につかず、明治三年、学舎を浅草本願寺に設け、五年本願寺法主大谷光瑩に従つて欧米を周遊し、翌年七月帰国した。<sup>63</sup>

幕臣時代の失意期には洋学に打ち込んでいた柳北が、兵力増強等を唱えても容れられず、会計副総裁となつたものの、間もなく幕府は滅亡したのである。また官軍が品川に到着した際の幕府側の混乱について、信夫恕軒は以下のように述べている。

或は曰く、「主公宜しく引決して社稷の為に計るべし」と。先生奮然として膝を前めて曰く、「弘、徳川累世の臣たり。君を殺して罪を謝するは、公等縦ひ之れを忍ぶとも、吾は則ち能はざるなり」と。榎本武揚、原退蔵等、之を然とす。

（大意：或る人物が中国の歴史書『漢書』に倣い、將軍は自決して責任を取られるべきであると主張した。これに対して柳北は勇気を出して奮い立ち、自分（弘）は徳川家に代々仕えてきた。主君を手にかけて維新政府に対して罪を謝することは、皆さん方はじつと忍耐しながら行うかもしれないが、自分にはできないことではないと、反対した。榎本武揚と原退蔵なども柳北の考えを最とし、支持したのである。）<sup>64</sup>

幕末から明治への時代の変遷の中で、柳北は旧態依然とした幕閣を批判して閉門蟄居を経験しつつも、將軍に対しては幕臣としてあくまでも忠実な姿勢をとつたのであつた。

#### 第4節 第I章のまとめ

柳北は奥儒者である成島家の嫡子であつて、漢文戯作『柳橋新誌』初編を創作するなど文芸にも高い関心をもっていた。『柳橋新誌』初編は、柳北が幕臣時代に奥儒者としての栄光に包まれて『徳川実記』等を訂正補修した時期に完成している。柳橋を舞台とした『柳橋新誌』初編は、中国（清）文学の『板橋雜記』の影響を受けながら様々な人間像を描き、時代への諷刺をも表現して、柳北が社会への目を開いた出発点となった。花街の金銭本位の人間関係を見ていた柳北は、人間社会の裏側にも目を向け始めたが、日本の国状を案ずることから西欧文化にも関心を払うようになった。

幕府に忠実であつた柳北は、幕府の将来を案じて旧態依然な勢力を批判するために狂詩を賦し、それにより閉門蟄居を経験する。閉門中という苦しい状況下でも柳北は外国語の習得し、洋学を修めて西欧文化を受け入れる基盤を自己の中に形成していった。やがて柳北は幕政に復帰し、洋学への造詣の深さ等が評価されて最終的には外国奉行や会計副総裁の要職に就き、また仏国の軍事顧問との交流もあった。

しかし幕藩体制が崩壊して薩長中心の維新政府に政権が移ると、柳北はその活躍の場を失うこととなったのである。

## 〈注〉

- <sup>1</sup> 成島柳北. 澤上隠士傳. 柳北全集. 博文館, 1897. (文藝倶楽部. vol. 3, No. 9 臨時増刊) p. 1.
- <sup>2</sup> 柳北の残した先祖書については、『柳北談叢』(大島隆一. 昭和刊行会, 1943. p. 3)において次のように記されている。
- これは、いつごろ書かれたものか知らないが、この末尾にあたつて、—「慶応四年四月二十五日右勤向御免可成旨」と、あるのをみると、維新後まもないころに書いたものであろう。
- <sup>3</sup> 注 2 柳北談叢 p. 14.
- <sup>4</sup> 注 2 柳北談叢 p. 15.
- <sup>5</sup> 柳北が成島家の養子であることは、永井荷風や前田愛等によって指摘されている。
- 永井荷風. 成島柳北の日誌. 荷風全集第 16 巻. 岩波書店, 1972. p. 259-273 参照。
- 前田愛. 成島柳北. 朝日新聞社, 1990. p. 34 参照。
- 杉下元明, 堀川貴司『航西日乗』解説. 海外見聞集. 新日本古典文学大系明治編. 岩波書店, 2009, p. 644-645 参照。
- <sup>6</sup> 「航薇日記」と「航西日乗」の引用は、成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. 明治文学全集. 筑摩書房, 1969. に拠る。
- <sup>7</sup> 『航西日乗』人名注・索引. 注 4『海外見聞集』参照。
- <sup>8</sup> 『航西日乗』人名注・索引. 注 4『海外見聞集』参照。
- <sup>9</sup> 乾照夫. 成島柳北研究. ペリかん社, 2003. p. 34.
- <sup>10</sup> 藤野岩友. 中国文学小事典. 高山堂出版社, 1984. p. 139.
- <sup>11</sup> 石毛忠. 日本思想史辞典. 山川出版, 2009. p. 460.
- <sup>12</sup> 信夫恕軒は、旧因幡藩士で維新政府に仕えて中学校教諭等となっていたが、学制改革後は帝国大学文科大学講師を歴任した。その人となりについては以下のような記述がある。
- 性狷介、酒を嗜んで友とする人は少なかったが、成島柳北とは親しかった。(明治漢詩文集の「略歴」. 明治文学全集. 筑摩書房, 1983. p. 437. )。
- <sup>13</sup> 柳北成島先生の碑. 恕軒文鈔(抄). 漢詩文集. 新日本古典文学大系 明治編 2. 岩波書店, 2004. p. 335.
- <sup>14</sup> 注 5 前田愛. 成島柳北. p. 40.
- <sup>15</sup> 「硯北日録」「甲寅日録」「投函日録」の原文及び書下し文は、前田愛解説. 硯北日録. 太平社屋, 1997 に拠る。大意は松本浩一先生のご指導の下で付けたものである。以下同様。
- <sup>16</sup> 諸橋轍次. 大漢和辞典巻三. 大修館書店, 1956. p. 384.
- <sup>17</sup> 朝尾直弘. 角川日本史辞典. 角川書店, 1996. p. 147. 参照。
- <sup>18</sup> 犬塚孝明. 十九世紀初期日本人の英国像. 井上勝生『開国』幕末維新論集 2. 吉川弘文館, 2001. p. 74.
- <sup>19</sup> 佐藤広夫. 概説日本思想史. ミネルヴァ書房, 2005. p. 196.
- <sup>20</sup> 注 11 日本思想史辞典. p. 828. 参照。
- <sup>21</sup> 横山伊徳. 開国前夜の世界. 日本の近世 5. 吉川弘文館, 2013. p. 292.
- <sup>22</sup> 注 11 日本思想史辞典. p. 550.
- <sup>23</sup> 日本古典文学大辞典 第 1 巻. 岩波書店, 1983. p. 356.
- <sup>24</sup> 「嗟斯無用之人而録斯無用之事」(江戸繁昌記・柳橋新誌. 新日本古典文学大系 100. 岩波書店, 1989. p. 427) という記述がある。ここでは『江戸繁昌記』初篇の序において、この著述の今日における取り柄は、有用の世界を断念した自分、無用者である自分が無用のことを記している点であることを静軒自身が述べている。
- <sup>25</sup> 小池藤五郎. 寺門静軒と曲亭馬琴. 古典研究. 雄山閣. 1939. No. 12. p. 24.
- <sup>26</sup> 山本緑陰(安永 6 (1777) 年-天保 8 (1837) 年)は、山本北山(宝暦 2 (1752) 年-文化 9 (1812) 年)の子である。北山は折衷学の権威で、孝を中心とした思想の持主であったが、寛政異学の禁には反対した。(永井啓夫. 寺門静軒. 理想社, 1965. p. 28-31 参照)
- <sup>27</sup> 『柳橋新誌』の原文の引用は、柳橋新誌・伊都満底草. 勉誠社文庫, 1985. p. 7. 書下し文の引用は、注 24 江戸繁昌記・柳橋新誌 p. 337.
- <sup>28</sup> 『柳橋新誌』の原文の引用は、注 27 柳橋新誌・伊都満底草. p. 7. またおくり仮名を含む書下し文の引用

は注 24 江戸繁昌記・柳橋新誌 p. 337、大意についても同書の尾注を参照した。以下同様。

<sup>29</sup> 前田愛、『板橋雑記』と『柳橋新誌』。前田愛著作集第 1 巻。筑摩書房、1989。p. 492 掲載の表を参照し、横書きに改めた。

<sup>30</sup> 注 29『板橋雑記』と『柳橋新誌』p. 493。

<sup>31</sup> 明治開化期文学集。日本近代文学大系 第 1 巻。角川書店、1970。p. 431 の補注。

<sup>32</sup> 書き下し文の引用は注 24 江戸繁昌記・柳橋新誌。P. 340。大意についても同書を参照した。尚、同書 p. 340 の尾注には、「斉園」について以下の記述がある。

齊の宣王の庭園。狩猟を禁じたと孟子・梁恵王下に見えるので、鳥がさぞ繁殖していたであろうが、その鳥にぶつけて全部落としてしまうほど果実が多い。

<sup>33</sup> 原文及び書き下し文及び大意は、内野熊一郎。孟子。新釈漢文大系 第 4 巻。明治書院、1981。p. 381-383。

<sup>34</sup> 原文及び書き下し文は、新編柳北詩文集。漢詩文集。新日本古典文学大系 明治編。p. 226。大意も同書の尾注を参照した。

<sup>35</sup> 注 15 硯北日録。参照。

<sup>36</sup> 注 2 柳北談叢。p. 55。

<sup>37</sup> 注 5 前田愛。成島柳北 p. 268。

<sup>38</sup> 注 2 柳北談叢。p. 44。

<sup>39</sup> 注 15 硯北日録。p. 737。

<sup>40</sup> 永井荷風。改訂下谷叢話。荷風全集 第 15 巻。岩波書店、1993。p. 233。

<sup>41</sup> 『柳北詩鈔』は加藤国安。日本漢詩 第三輯。江戸後期／明治初期。凱希メディアサービス、2010。（CD-ROM）から目次を引用し、整理のために詩の番号を付した。

<sup>42</sup> 書き下し文は、成島柳北・大沼枕山。江戸詩人全集 第 10 巻。岩波書店、p. 39。大意と韻字も同書を参照した。

<sup>43</sup> 注 15 硯北日録。p. 762。

<sup>44</sup> 書き下し文は、目加田誠。唐詩選。新釈漢文大系 第 19 巻。明治書院、1998。p. 763-4。大意も同書を参照した。

<sup>45</sup> 注 44 唐詩選。p. 764「語釈」参照。

<sup>46</sup> 注 44 唐詩選。p. 763。

<sup>47</sup> それについては『本事詩校補考釋 事感第二』に次のような記述がある。

其詩一出、傳於都下。有素嫉其名者、白於執政、又誣其有怨憤。宰、與他日見時坐、慰問甚厚、既辭、即曰曰・・近者新詩未免爲累、禁何！不數日、出爲連州刺史。

（孟榮等撰。本事詩・続本事詩・本事詞。上海、上海古籍出版社版、1991。p. 53。）

<sup>48</sup> 注 2 柳北談叢。p. 107。

<sup>49</sup> 日本歴史学会。明治維新人名辞典。吉川弘文館、1999。p. 1022。

<sup>50</sup> 注 15 硯北日録 p. 769 の解説。

<sup>51</sup> 注 2 柳北談叢。p. 108。

<sup>52</sup> 川村博忠。近世日本の世界像。ペリかん社、2003。p. 228。

<sup>53</sup> 注 1 柳北全集。p. 7。

<sup>54</sup> 注 5 前田愛。成島柳北。p. 121-2。

<sup>55</sup> 文久 3（1863）年の 5 月には、長州藩が外国船を砲撃し、また 7 月には薩英戦争があった。また柳北閑居後、8 月 18 日の政変で攘夷論者失脚し、七卿の都落ち。天誅組の変。生野銀山の変があった。（注 17 角川日本史辞典。p. 1464。参照）。

<sup>56</sup> 注 2 柳北談叢。p. 24。

<sup>57</sup> 柳北の作品「航西日乗」中では、「シアノン」と記されているが、岩波新日本古典文学大系明治編『航西日乗』人名注・索引では「シャノワヌ」と記され、前田愛『成島柳北』でも「シャノワヌ」と記されているので、引用以外は「シャノワヌ」記す。）

<sup>58</sup> 田坂長次郎。成島柳北と英学。英学史研究 No. 2, 1970。p. 35。

<sup>59</sup> 青柳達雄。解説「伊都満底草」について。注 26 柳橋新誌・伊都満底草。p. 8。

<sup>60</sup> 注 2 柳北談叢。p. 30。

<sup>61</sup> 野口武彦。鳥羽伏見の戦い。中央公論新社、2010。p. 310。

<sup>62</sup> 注 2 柳北談叢。p. 64。

<sup>63</sup> 猪口篤志。日本漢文学史。角川書店、1984。p. 529。

<sup>64</sup> 注 13 柳北成島先生の碑。恕軒文鈔（抄）。p. 334。大意は同書の尾注を参照。



## 第Ⅱ章 明治維新直後の柳北

### 第1節 無用者意識の下で

#### 1 幕臣から市井の人へ

##### (1) 梅花への思い

幕府滅亡直後の柳北の心情は明治元（1868）年に詠まれた漢詩「十一月二十九日訪蒲田梅園感舊（十一月二十九日訪蒲田梅園感舊）」（『柳北詩鈔』RS2062）<sup>1</sup>により、窺い知ることが可能である。

肥馬年々向横灣。	肥馬（ひば） 年年 横灣（おうわん）に向う <sup>2</sup>
每折梅花挿金鞍。	毎（つね）に梅花を折って 金鞍（きんあん）に挿（さ）す
乾坤一變身事改。	乾坤一変（けんこんいっぺん）して 身事改まる
驛亭踏雪脚蹣跚。	驛亭に雪を踏めば 脚（あし） 蹣跚（まんさん）たり
當壚女存舊顔色。	当壚（とうろ）の女は旧顔色存し
視我一驚又一嘆。	我を視て一驚（いっしょう） 又一嘆（またいったん）
孤樽引我坐茅店。	孤樽（こそん） 我を引いて 茅店（ぼうてん）に坐せしむ
坐看梅花映竹欄。	坐して看る 梅花の竹欄（ちくらん）に映ずるを
舉酒屬花花莫笑。	酒を挙げて花に属（ぞく）す 花 笑うことなかれ
先生一褐吟骨寒。	先生 一褐 吟骨（ぎんこつ）寒し

ここで柳北は、立派な馬にまたがって毎年横浜へ赴く途中、この梅園でいつも枝を折り取って金の鞍に付けたものだったという感慨を述べている。次に天変地異が一変して、自分の身の上もすっかり変わってしまった。宿場で雪のように敷いた梅落花を踏むと、足元がよろよろするという状況を表している。さらに居酒屋の女はもと通りの容色をとどめ、自分を見て驚いたり嘆いたりするが、酒樽はわずか一つしかないと粗末な状況を表している。さらに柳北は花に対してはどうか自分を笑ってくれるかと語り掛け、この先生は粗末な着物一枚だけのなりで、詩を作るのだと頑張っているが、寒いと詠んでいる。

第二句で「每折梅花挿金鞍」と詠まれているように、「梅花」は柳北の愛した花であったが、中国では古く六朝時代から「梅花」が文芸に取り入れられていた。しかしそれは鑑賞の対象としてであって、実際に詩人が感慨をもって漢詩の中に詠み込む段階には達していなかった。「梅花」と漢詩について、岩城秀夫は「ところで、こうした單に美意識の対象としてのみ、梅花を見るのではなく、特殊な感情をこめてうたう詩人が、唐代にはあらわれる。」<sup>3</sup>と述べている。岩城は唐代の詩人の例として杜甫（712-770）と高適（-765）<sup>4</sup>を挙げている。杜甫は安祿山の乱（755-757）の頃に成都の草堂にいたが、友人であった高適から「人日寄杜二拾遺（人日（じんじつ） 杜二（とに）拾遺に寄す）」<sup>5</sup>という詩を贈られていて、その漢詩の中には「梅花滿枝空斷腸（梅花枝に満ちて空しく断腸）」の用例がある。杜甫は長い浪人生活を脱し、侍従長のような役職である左拾遺となって朝廷に仕えるが、安祿山の乱後には各地を漂泊して政治的な志を果たすことはできなかった。やがて宋代には林逋（976-1028）が、隠遁生活の中で「山園小梅二首」を遺している。その後は蘇軾（1036-1101）が「梅花」への深い感慨を漢詩の中に詠み込む作品を何首か詠んでいる。蘇軾も新法党と旧法党の争いの渦中にあてて人生の浮沈を繰り返し体験していた。蘇軾は黄州左遷の翌年である1081年の詩作には以前見たことのある関山の梅花について、「正月二十日往岐亭郡人潘古郭三人送余於女王城東禪莊院（正月二十日岐亭（きてい）に往く 郡人（ぐんじん）潘古郭（はんこくわく）の三人 余を女王城東の禪莊院（ぜんさうみん）に送る）」を詠んでいる。

この詩の終わりの部分は、「去年今日関山路 細雨梅花正斷魂（去年 今日 関山の路 細雨 梅花 正に斷魂）」<sup>6</sup>という情感を込めた表現で終わっている。この部分は「思えば去年の今日は、〔黄州への旅路で〕ちょうど関山を通った日。あの日、きりさめに湿った、嶺の梅花を見て、まさに魂も消え入る思いをしたことだった」<sup>7</sup>と解釈されている。

柳北の漢詩「十一月二十九日訪蒲田梅園感舊」は、寒さの中での詩作、また不遇を体験してから梅花を通じて過去を追想するといった面で、蘇軾の漢詩「正月二十日往岐亭郡人潘古郭三人送余於女王城東禪莊院」と相通ずる面がある。

## （２）天地への思い

柳北の漢詩「十一月二十九日訪蒲田梅園感舊」中の「乾坤一變身事改」の句について、野山嘉正は「第三句が維新の激動を渡った柳北の認識であるが、開明派の目指したところとはともかくとして政治上の理想の挫折が文明開化の御代を寒々と観ぜしめている。」<sup>8</sup>と述べている。

また「乾坤」は天地の意味であり、杜甫の 768 年頃の作品「江漢」、「登岳陽樓」には「乾坤」の用例がある。「登岳陽樓」は以下の作品である。

昔聞洞庭水。	昔聞く 洞庭の水 <sup>9</sup>
今上岳陽樓。	今上る 岳陽樓
吳楚東南坼。	吳楚 東南に坼け
乾坤日夜浮。	乾坤 日夜に浮かぶ
親朋無一字。	親朋 無一字無く
老病有孤舟。	老病 孤舟有り
戎馬關山北。	戎馬 關山の北
憑軒涕泗流。	軒に憑（よ）れば涕泗（ていし）流る

杜甫は当時とすれば高齢の 57 歳であり、老いの身に異民族と漢民族の戦争を嘆きながらの詩作であった。「乾坤日夜浮」の意味については、水面が昼夜の別なく浮動している様相を詠んでいるとされている。前野彬の『唐詩鑑賞辞典』には、杜甫より以前にも漢文学には用例があったことが、以下のように記されている。

「乾坤」は天地。「浮」は浮動する意で、昼も夜も全宇宙が、この広大な湖の水面に浮動しているということ。後魏の酈道元の『水経注』に、洞庭は「日月もその中に出没するが如し」とあるのに依っている。<sup>10</sup>

柳北が北魏の地理書『水経注』を読んでいたかどうかは不明であるが、杜甫の作品には精通していたので、代表作の一つである「登岳陽樓」の中の「乾坤」という語句が念頭にあったことは十分考えられる。しかし幕臣時代に横浜へ行く途中に通った梅園にたたずんだ柳北は、変遷を嘆きつつも、(R S -2062)最後の句の「先生一褐吟骨寒」という部分で、詩を作ろうと意気込みながらも寒さに震えそうな自分自身の姿を詠んでいるのである。従って、柳北は杜甫の悲哀の境地を理解しつつも市井の人となった悲哀の中で、文学への志は捨てまいとする意欲が僅かに残っていたと考えられる。

## 2 「無用の人」として

市井の人となった悲しみの中でも、柳北は自己を見つめていた。明治元年の秋の末には「濯上隠士傳」が書かれている。その中で、柳北は幕臣としての自分自身の半生の概略を述べた上で、徳川家への忠節を失っていないことを改めて確認している。最後の部分には以下のような記述があり、幕府が滅亡した以上は世間のために働くことはできないという寂寥の思いを述べている。

蓋隠士の言に曰、われ歴世鴻恩をうけし主君に、骸骨を乞ひ、病懶（びょうらん）の極、眞に天地無用の人となれり、故に世間有用の事を爲すを好まずと、それ或は然らん、それ或は然らん、明治元年秋の末 東京 野史氏しるす<sup>11</sup>

「天地無用の人」という表現は、柳北が愛読していた寺門静軒（寛政8（1796）年-慶応4（1868）年3月）の『江戸繁昌記』<sup>12</sup>の序文の大意で同じことが重ねて述べられている。。

嗟斯無用之人而録斯無用之事<sup>13</sup> （嗟（ああ）、斯の無用の人にして、斯の無用の事を録す。）

（大意：ああ、このような無用の人であって、（しかも）このような無用のことを記した。この無用の人というのは、世の中のために有用な人ではない。）<sup>14</sup>

静軒は水戸家の下級武士の庶子として生を受け、山本緑陰の下で学問に励んだが、仕官は叶わず、民間の儒学者として一生をおくった人物であった。『江戸繁昌記』の内容が原因で、天保の改革により処罰されたこと等から、静軒は自らを「無用の人」と称した。嘉永2（1849）年の静軒の自碣誌には「戯著嬰憲。不得復以儒立於世。於是髡髮毀形。不儒不佛。遂爲無用人。（戯を著し憲を嬰（うなが）す。復儒を以て世に立つを得ず。是に於いて髡髮（こんぱつ）形毀（こわ）れる。儒ならず、佛ならず。遂に無用の人と爲る。）」<sup>15</sup>と記されていることが、永井啓夫によって発見されている。

さらに永井は、「無用」の典拠として、『莊子』（内篇・人間世第四）中での一部分を挙げている。それは、以下の部分である。

山木自寇也、膏火自煎也。桂可食。故伐之。漆可用。故割之。人皆知有用之用、而莫知無用之用也。

（山木は自ら寇し、膏火は自ら煎く。桂は食す可し。故に之を伐る。漆は用ふ可し。故に之を割く。人は皆有用の用を知るも、無用の用を知る莫し、と。）

（大意：山の木は伐られる運命にあるし、油は燃やされる運命にある。肉桂は食用になるので切り倒され、漆は塗料になるので割かれる。人は誰も有用の用は知っているが、無用の用は知らない。）

16

「人間世第四」の中での莊子の主張は、才能のある者はそれが原因で災いを受けるので、「無用」であることの方が人間にとって幸いであると解釈されている。<sup>17</sup> 柳北が「濯上隠士傳」の中で静軒の影響もあって「天地無用の人」と記したのは、維新政府には仕えないという自身の信念に基づいたものと考えられる。

## 第2節 「航薇日記」の創作

### 1 「航薇日記」創作の背景

明治2（1868）年陰暦10月の山陽地方への旅行から柳北によって「航薇日記」が書かれた。柳北は当初は公開する意向はなかったが、最後の部分で書くに至った動機を述べている。

それ予ハ一個の避世人なり然るにこの覇旅に於てある時ハ毫（ごう）を揮（ふる）ひ紙を展（のばし）て文人墨客となりあるときハ鉢を算（かぞえ）し両（りょう）を秤（はかり）て商賈（しょうが）と化し或時ハ錦茵に坐し肥馬に跨りて貴公子の侶となりある時ハ雲を踏み石を枕にして行脚僧の如くある時ハ花を抱き柳に眠りて、遊冶少年を學びつる日ごとの變幻自らも驚く計りなり<sup>18</sup>

柳北は旅行中の毎日の体験が余りに変化に富んだものであるので、旅日記として記録を残したと述べている。

この日記について、執筆の背景にあるものは、無常観であるという見解もある。塩田良平は、柳北の近親者も含めて、文人墨客や遊女が主に描かれ、無常観を背景とした男女の出会いと別れが基調であることを指摘している。<sup>19</sup> 塩田はさらに永井荷風が「航薇日記」を愛読していたことを紹介している。

荷風の『斷腸亭日乗』の昭和20（1945）年7月13日に「余小豆島の名を聞き成嶋柳北が明治二年にものせし航薇日記中の風景を想起し却て一段旅愁の切なるを覚えたり。」<sup>20</sup>の記述がある。荷風は空襲を避けて山陽道に疎開をし、この日は妹尾崎の晴耕園を訪れていた。さらに同年9月5日には寄寓していた熱海の木戸邸で『柳北全集』を発見し、「航薇日記」を読んだことが記されており、最後に以下の記述がある。

余弱冠のころより柳北先生の人物と文章とを景慕して措く能はざるもの、今その遊跡の同じきを知り歓喜の情更に深き覚ゆ。

戦災を避けて、山陽地方に疎開していた荷風は「航薇日記」の世界で描かれた柳北の歩みに、自己の歩みを重ねていたと考えられる。荷風は柳北が訪れた旅先と同様の地を訪れ、社会の激変の中で「航薇日記」を心の支えにしていたことが考えられる。「航薇日記」は無常観を背景として人物や風景との出会いと別れが描かれているが、荷風に対しては混乱期に生きる力を与えた点で意義のある作品である。

「航薇日記」の文学作品としての評価では、野山嘉正が「航薇日記」中に柳北が努力しながら脱俗性を身につけていく姿があるとし、その結果「天地と人は時代の変転に関わりなくあるという独自の認識」<sup>21</sup>をもつに至ったと述べている。また乾照夫は「成嶋柳北の『航薇日記』について」の中で、「明治維新によって『敗者』の立場に置かれた旧幕臣のありようを物語る記録」<sup>22</sup>であると述べている。これらの先行研究を踏まえながら、柳北が自己の感慨を述べたと考えられる漢詩を中心に時系列で、柳北の足跡をたどる過程を考えることとした。日程と主な出来事を表にまとめて、下記に示す。

表Ⅱ-1 「航薇日記」（陰暦明治2年10月14日～11月28日）の旅程

月日	滞在地	見学先他
10月14日～17日	横浜	戸川成齋の一行と合流
10月17日～19日	（船中）	午後 米国のオレゴニアン号に乗船
10月19日～22日	大阪	松島・新町・道頓堀
10月22日～24日	（船中）	瀬戸内海航行

10月24日～ (11月4日)	妹尾（戸川家の領地）	岡山城下・高松稲荷・吉備津宮 25日岸田冠堂と出会う
11月4日～5日	田の口	成齋等と妹尾を立つ 四宮隠岐守の子孫である 貞蔵と出会う 瑜伽権現
11月5日～6日	（船中）	激しい風の中での船出
11月6日～7日	琴平	金刀比羅宮
11月7日～8日	瑜伽	瑜伽権現
11月8日～12日	妹尾	小川で釣りを楽しむ 冠堂と語り合う 11日亡 父の命日
11月12日～14日	児島	妹尾を発って船に乗る 戸川家の人々及び冠堂 も同行
11月14日～15日	（船中）	小豆島へ向かう
11月15日～16日	小豆島	寒霞溪 冠堂と対句を詠む
11月16日～17日	（船中）	冠堂と別れて乗船
11月17日～18日	兵庫	新町・福島三天神
11月18日～24日	大阪	住吉明神
11月24日～25日	兵庫	楠正成墓
11月25日～27日	（船中）	26日紀州大島周辺通過
11月27日～28日	横浜	12時頃横浜帰着

①乾照夫. 成島柳北の『航薇日記』について. 情報化社会の到来. 東京情報大学, 2007. p. 185-217. ②航薇日記. 成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. 明治文学全集 4. 筑摩書房, 1969. p. 96-116 から筆者作成)

## 2 東京・横浜で

### (1) 江戸追懐の中での旅立ち

山陽道への旅立ちは、10月12日に近親者戸川成齋（達穀）<sup>23</sup>が領地である備中妹尾に行くので、柳北に同行を勧めたことが発端である。成齋は明治2（1869）年頃の柳北の夫人（永井氏、明治4（1871）年没）の姉の子であり、柳北にとっては義理の甥であった。また戸川家は従五位下肥後守戸川達安を祖とする幕臣の家柄であった。

京阪の地に旅行をしたいと考えていた柳北は成齋の申し出を承諾し、14日には横浜港に向うために家を出た。16日に、横浜から出港する柳北を見送ったのは、実兄（森兄）や旧知の塩田三郎<sup>24</sup>、川奈部登であった。東京旅立ちの前日に吉川樓での酒宴について川奈部登から漢詩を求められた柳北は、柳橋の情緒との別れを惜しみ、以下の詩を詠んでいる。

(KB1001)

底事離筵獨涙多。 底事ゾ離筵（りえん）獨リ涙多キ。  
 多情不語且高歌。 多情語ラズ且ツ高歌ス。  
 楊梁早晚儂歸日。 楊梁早晚儂歸ル日。  
 酒美鱸鮮奈汝何。 酒美鱸鮮汝ヲ奈何ン。

「離筵」は離別の宴の意味であり、杜甫の「送田四弟將軍將夔州柏中丞命起居江陵節度使陽城郡王衛公幕」中に「離筵罷多酒」の用例がある。「多情」は蘇軾の「宿州次韻劉涇」中に「多情白髮三千丈」の用例がある。また「楊梁」は「柳橋」の意味である。柳北の明治4（1871）年の「風懷詩」<sup>25</sup>（『柳北詩鈔』第3巻）の序文は、「楊梁綺羅爲叢（楊梁の綺羅、叢を爲す）」で始まっている。「楊梁」という表現については、「柳橋にわざと変った字を宛てたもの」<sup>26</sup>という解釈がなされている。「酒美鱸鮮」は酒宴のはなやかさを述べているが、「酒美」は白楽天の「弄龜羅」中に「酒美竟須壞」の用例がある。

柳北は柳橋の地への追懐の念を中心に漢詩（KB1001）を詠んだのであったが、一方で柳北の心中には兄や旧友に送られての宴に臨んで感慨深いものがあつたのである。江戸の名残を遺す柳橋の花街は維新直後に崩壊し始めており、柳北は柳橋の変容を危惧していた。「航薇日記」で描かれた山陽道の旅から帰着して柳北は、明治3（1870）年の新春に柳橋の名妓お鳥（玉鸞）と語りあい、「柏樓雪夜與玉鸞飲（柏樓に雪夜に玉鸞と飲む）」（RS3009）（『柳北詩鈔』巻三）という漢詩を詠んでいる。

（RS3009）

江樓風雪夜淒清。	江樓の風雪 夜 淒清（せいせい）たり <sup>27</sup>
且剔寒燈話舊情。	且（しばら）く寒燈を剔（き）って舊情を語る
散盡天台諸女伴。	散じ盡（つく）す 天台の諸女伴
劉郎相識獨吾卿。	劉郎の相識（そうしき） 獨り吾が卿（けい）のみ

転句では柳橋の芸妓を「劉晨阮肇」（『幽明録』<sup>28</sup>）の中の天台山の女性に例え、結句では天台山で女性たちに出会った劉郎という人物に柳北自身を例えている。さらに自分（劉郎）の知り合いはあなた（玉鸞）だけになってしまったという嘆きを述べている。

柳北の山陽道への旅立ちの頃は、柳橋の荒廃がかなり進展していた時期であつた。しかし実兄や旧友の激励の中で、柳北は江戸の名残の地の荒廃を嘆く気持は表には出さず、収穫ある旅行を期待することを周囲に語っていたと考えられる。

## （2）横浜港で

旅のはじまりの横浜の地で、柳北は旧幕臣であつた榎本武揚（天保7（1836）年-明治41（1908）年）の写真を見て「帰路内田九市と蓮杖との両家に過ぎ旅窓のうさを慰めん爲めに舊知の寫眞を買ひ去るうちに榎本武揚子有り之が爲に惨然たり」<sup>29</sup>と、述べている。榎本は蝦夷島政府を樹立して、維新政府に抵抗したが明治2（1869）年の5月には降服して東京に護送されて辰ノ口に収監されており、処刑すべきか赦免すべきかが政府の内部で議論されており、「木戸孝允・山田顕義・板垣退助らの嚴罰論と黒田清隆・副島種臣らの寛典論」<sup>30</sup>があつて、柳北には大きな心配があつたと考えられる。

実際に榎本らが赦免されたのは明治5（1872）年になってからであつた。<sup>31</sup> しかし柳北は榎本の処遇がどのようになるか、そのことに心を痛めつつも、乗船の前に「新たに舶来せし那破命傳一本買ふ事を託す」と記している。柳北は武人であつた那破命第一世の伝記を買うことを依頼している。柳北は自己の立場が敗者であることを知りつつも、西欧社会の歴史の変遷に興味を失つてはいなかった。かくして17日に柳北は米国の蒸気船オレゴン号に乗船した。横浜港を出港後に、船中で柳北は以下の漢詩を詠んでいる。

（KB1002）

風怒海門霜氣澄。 風怒テ海門霜氣澄ム。  
 溟船萬里去如鵬。 溟船萬里去テ鵬ノ如シ。  
 長天一望毫無物。 長天一望毫モ物無ク。  
 皎々當檣大月昇。 皎々檣ニ當テ大月昇ル。

「風怒」は、韓愈の「陸渾山火。和皇甫湜。用其韻」中に「風怒不休何軒軒」の用例がある。「長天」は王勃の「滕王閣詩序」中に、「秋水共長天一色」の用例がある。「一望」には蘇軾の「虔州八境圖八首」の第五首目に「一望叢林一悵然」の用例がある。また日本の天台宗の僧侶で漢詩人の六如(享保 19(1734)年-享和 1 (1801) 年)<sup>32</sup>の「西山採蕈 十絶句」中の第二首中に「黃運一望覆平嶠」の用例がある。「皎々」は月が白く輝く様子を表しているが、陸游の「縦筆」第二首中に「皎々紙窗白」の用例が、蘇軾の「神女廟」中に「皎々秋月彎」の用例がある。

(KB1003)

狂濤撼枕不成眠。 狂濤枕ヲ撼（ふるわせ）テ眠ヲ成サズ。  
 強倒洋壇嘯海天。 強テ洋壇（びん）ヲ倒シテ海天ニ嘯（うそぶ）ク。  
 自發横灣纔半夜。 横灣ヲ發セン自リ纔（わずか）ニ半夜。  
 客舟已在富峰前。 客舟已ニ富峰ノ前ニ在リ。

「海天」は海上の空の意味で、柳宗元の「登柳州城樓詩」中に「海天愁思正茫茫」の用例が、また白樂天の「江樓夕望招客」中に「海天東望夕茫茫」の用例がある。「客舟」は蘇軾の「李思訓畫長江絶島圖」中に「客舟何處來」の用例がある。

(KB1002)、(KB1003) の二首からは、広大な海の中で、柳北一行を乗せた舟が高波を受けながらも迅速に歩む様子がうかがえる。旅行中の風景を詠んだ漢詩ではあるが、柳北は、蘇軾や陸游等の用例の影響をうけた語句を用いている。

### 3 京阪の地から山陽道へ

#### (1) 浪華城

19 日には兵庫に上陸し、柳北一行は浪華見物のために大阪へ向かった。花街に遊び、芝居見物等を楽しんだ後で、21 日は浪華（大阪）城を遠くから以下の漢詩 (KB1005) を詠んでいる。

(KB1005)

片帆東去大牙傾。 片帆東ニ去テ大牙傾ク。  
 一夜麤奔十萬兵。 一夜麤（きん）奔ス十萬ノ兵。  
 客子訴誰何限恨。 客子誰ニ訴ヘン何限ノ恨。  
 凄風吹涙浪華城。 凄風涙ヲ吹ク浪華城。

大阪城は豊臣秀吉の政權下では日本の中心地で、落城後は徳川幕府により再建されて、城代が置かれた。幕末には將軍慶喜が文久 3 (1863) 年から滞在していたが、慶応 4 (1868) 年の鳥羽・伏見の戦いで敗北から慶喜は船で江戸へ退却し、城は新政府軍に開け渡された。しかし戦火で大部分が焼失し、柳北が目にした頃は灰燼に帰した状態であった。初句の「片帆東去大牙傾」は、慶喜が江戸に退却して薩

長側が勝利したことを述べている。よく似た用例に、蘇軾の漢詩「念奴嬌 赤壁懷古」の初句「大江東去」がある。左遷されて人生の辛酸をなめていた蘇軾はこの漢詩中で、三国鼎立の少し前の呉と魏の戦闘を偲び、結句「人間如夢 一尊還酹江月」では、「人生はまことに夢、いまはやはり酒を地にそそいで江上の月に祈ろう」<sup>33</sup>と、自身に言い聞かせている状況であった。

柳北の漢詩（KB1005）では承句、転句では慶喜の脱出が原因で、一夜にして十万の兵が敗残兵として退却せざるを得なかった惨状が述べられている。慶喜の退却については、柳北は旧幕臣の立場もあってその是非を論じてはいないが、結果的に幕府滅亡を促したことは、深い嘆きがあったと考えられる。また慶喜の退却は、薩長側の働きかけにより徳川慶喜征討令を朝廷に出させたのであった。その経緯を野口武彦は次のように述べている。

土佐藩に続いて、薩摩、尾張、宇和島、熊本、鳥取などの諸藩が次々と請書を提出した。「公戦」としての鳥羽伏見の戦勝を認証させるダメ押しであり、その結果、薩長両藩はたんに軍事的にばかりでなく、政治的にも勝利したことになる。<sup>34</sup>

また結句の部分「凄風吹涙浪華城」で、柳北は感に堪えられず男泣きをした状況が語られている。「凄風」も蘇軾の漢詩「與述古自有美堂乘月夜歸」中に「凄風瑟縮經絃柱」の用例がある。

浪華城で旧幕府への追懷を詠んだ柳北ではあったが、悲しみだけに浸ってはいなかった。結句で詠んでいるように、凄まじい風は涙を吹き飛ばしたと現実の自分を見つめ直す余裕を心の中にもっていたのである。柳北は大坂で芝居見物と楽しみ、さらに芸妓小里との座敷で酒を楽しんだ後、22日には出発したのであった。

## （2）天保山

船旅の途中の22日に、柳北は次のような漢詩「短古一篇」（KB1006）（『柳北詩鈔』では「發天保山」）を詠んでおり、その中にも「乾坤」という表現が見られる。以下にその詩を記す。

（KB1006）

晨發天保山。	晨（あした）ニ天保山ヲ發シ
直入播淡間。	直ニ播（はん）淡（たん）間ニ入ル
山色翠且紫。	山色翠且ツ紫
海容曲又彎。	海容（かいよう）曲又彎
噫我結髮三十年。	噫（ああ）我レ結髮三十年
頭有冠冕腰佩環。	頭ニ冠冕（かんべん）有リ腰ニ佩環（はいかん）
榮枯一夢乾坤變。	榮枯一夢乾坤變ジ
青蓑白笠身始閑。	青蓑（せいさ）白笠（はくりゅう）身始テ閑ナリ
江山明媚天付我。	江山明媚天我ニ付ス
唯應漫遊搜仙寰。	唯（ただ）應ニ漫遊仙寰（せんかん）ヲ搜ス
縱令故園日相望。	縱令（たとひ）故園日ニ相望ムトモ
片帆未要容易還。	片帆未ダ容易ニ還ルヲ要セズ

「榮枯一夢乾坤變」の部分で、時代の変遷により無用の人となった自分の境遇に思いを馳せている。



王維の「重酬苑郎中（并序）」には、「榮枯安敢問乾坤」という用例もあり、柳北には維新直後に詠んだ漢詩「十一月二十九日訪蒲田梅園感舊」中で「乾坤一變身事改」という表現の用例もあって、旅行中でもまず自分の境遇を真摯に考える姿勢をとっていたことが十分考えられる。

### （３）牛窓

柳北は船中からの景色の素晴らしさを楽しむ気持ちを持ち、「青蓑白笠身始閑」の句における青と白との色彩の対比は、柳北が親しんでいた蘇軾の作品「出潁口初見淮山是日至壽州」中に「青山久與船低昂 壽州已見白石塔」という対句の用例がある。蘇軾は歐陽脩によって引き立てを受けていたが、王安石の政権下では不遇で地方官としての生活がながく、また流罪も経験した詩人であった。柳北は24日には牛窓の周辺では、その風景に感動し、「風景絶奇」と記して、以下の漢詩（KB1010）を詠んでいる。

（KB1010）

白石蒼松灣又灣。 白石蒼松灣又灣。  
扁舟靜過畫圖間。 扁舟靜ニ過グ畫圖ノ間。  
東南一髮青如拭。 東南一髮青拭（ぬぐ）フガ如ク。  
霜氣稜稜五劍山。 霜氣稜稜タリ五劍山

起句、承句では湾から湾へ絵のような風景であると絶賛し、転句の「東南一髮青如拭」は東南の方は髪の毛一筋のように見えて青い海を拭き取るかのようにであると述べている。

蘇軾の漢詩「澄邁驛通潮閣」の第二首に「青山一髮是中原」という用例がある。蘇軾は1100年に左遷されていた海南島から北方の中国本土へ帰ることを許され、海南島の北岸の港から中国本土を眺めながら、「澄邁驛通潮閣」の詩を詠んでいる。日本では柳北より以前に、頼山陽が「青山一髮」の用例を自作「泊天草洋」の中での「水天髣髴青一髮」に取り込んでいる。柳北は山陽の詩にも親しんでいたが、「航薇日記」中では蘇軾を直接念頭において詩作をした。それは蘇軾の異称である「坡老」<sup>35</sup>を、次に詠んだ漢詩（KB1011）の中に詠みこんでいるからである。

（KB1011）

往事茫々壽永秋。 往事茫々壽永ノ秋。  
鼓聲聲絶有漁謳。 鼓聲（こへい）聲絶チ漁謳有リ。  
断崖千尺思坡老。 断崖千尺坡老ヲ思フ。  
孤鶴啼來客子舟。 孤鶴啼キ來ル客子ノ舟。

柳北は壽永（1182-85）年間の源平時代の屋島の戦いに思いを巡らしながら、断崖絶壁の光景の中で蘇軾のことも偲んでいた。「孤鶴」は、蘇軾の作品「西湖壽星院明遠堂」の中に「孤鶴似尋和靖宅」の用例がある。「和靖」は、北宋の詩人林逋（967-1028）の諡（おくりな）であるので、漢詩（KB1011）が蘇軾の詩を踏まえたものとする客子は林逋ということになり、林逋の人柄を慕った鶴がやってくるという情景がこの漢詩（KB1011）の背後にあると考えられる。

柳北は日本の歴史を遡り、また中国の詩人蘇軾や林逋に思いを馳せながら船旅を満喫していた。この漢詩からは、大自然と一体となった柳北の様子が想像できる。断崖に蘇軾（坡老）の姿が見えるとされる想像の世界と、柳北が実際に鑑賞していた目の前の世界が重なって描かれているのである。

#### 4 山陽道から四国へ

##### (1) 妹尾・藤戸周辺

10月24日には、柳北は妹尾に到着した。妹尾では夫人の姉の嫁ぎ先である戸川氏の邸宅に滞在し、甥の成齋と付近を小旅行することを楽しんだ。また戸川家に出入りしていた医師で漢詩人である岸田冠堂や、歌人の藤井恕平和夫と知り合った。柳北はこの二人と文芸について語りあかし、「からやまと詞の花の咲添へてさか行く宿を祝ふ今日かな」という短歌を詠んでいる。27日に岡山の城下に足を向けた柳北は以下の漢詩を詠んでいる。

(KB1013)

高牆應是伐氷家。 高牆（こうしょう）應ニ是レ伐氷ノ家ナルニ。  
行入城闌路幾叉。 行テ城闌ニ入レバ路幾叉。  
暄日微風春正小。 暄（けん）日微風春正ニ小ナリ。  
棠梨處々放狂花。 棠梨（とうり）處々狂花ヲ放ツ。

「暄日」は暖かい日の意味であり、季節外れの気候を表している。「微風」は蘇軾の「遊金山寺」中に「微風萬頃轉文細」の用例がある。蘇軾は1071年の秋、杭州に赴く途中に金山に遊んだ。旅愁に浸りながらも、蘇軾は金山の風景に心ひかれる思いを漢詩に詠んだのである。「棠梨」は「ずみの花」の意味で4～6月に花をつけるが、季節外れに咲いている情景をここでは詠んでいる。「棠梨」の用例は白樂天の「寒食野望吟」に「棠梨花映白楊樹」があり、また蘇軾の「實山新開徑」中には「棠梨葉戰暝禽呼」がある。柳北はじっくりと旅先の情緒を味わうくらいに、心に余裕ができたのであった。柳北は妹尾付近の食材である柳菌や牡蠣、名産の菓子である大手饅頭や白羊羹等を味わいながら、備中の名山である龍王山にも登った。

11月1日に柳北は成齋や冠堂と酒を酌み交わしながら、藤戸の先陣菴<sup>36</sup>についても話が及んだ。『平家物語』の巻十「藤戸」には、道案内の地元の住人を源氏方の佐々木盛綱が殺害する様子が描かれている。

「下藹はどこともなき者なれば、又人にかたらはれて案内をもをしへむずらん。我計こそしらめ」と思ひて、彼男をさしころし、頸かききつて捨ててんげり。

（大意：「下郎はどこの者ともわからないあてにならぬ者だから、また人にうまく言われて地理の様子も教えることだろう。自分だけが知っていることにしよう」と思って、その男を刺し殺し、首を斬って捨ててしまった。）<sup>37</sup>

この先陣菴については、柳北は「十餘年前枯れて今ハ其遺蘂を存せり其傍に先陣菴といふ草屋ありこの名ハ菅茶山集中に於て見たることありし」と述べていて、柳北が菅茶山の詩「先陣庵」（『黄葉夕陽村舎詩』巻一）<sup>38</sup>を通して先陣庵の知識を持っていたことが分かる。

さらに柳北は、「この日ハ終日酒酌かハしてやみぬ夜間旅中の詩句いまだ全からぬものを推敲す」と記し、柳北は旅の感慨を少しまとめて、それを漢詩とし、二首（KB1015・1016）詠んでいる。

(KB1015)

一片征帆嶋嶼間。 一片ノ征帆嶋嶼（とうしょ）ノ間。

風霜憶昨度函關。	風霜憶フ昨函關ヲ度リシヲ。
傷心幾酌他郷酒。	傷心幾カ酌（つぐ）ム他郷ノ酒。
瘞骨未知何處山。	骨ヲ瘞（う）ム未ダ何處ノ山知ラズ。
鱸膾蓴羹故園遠。	鱸膾（ろかい）蓴羹（じゅんこう）故園遠ク。
荻花楓葉客身閑。	荻花楓葉客身閑ナリ。
此行隨我唯詩卷。	此行我ニ隨フハ唯詩卷。
夜々燈前手自刪。	夜々燈前手自ラ刪（さん）ス。

「征帆」は遠くへ去りゆく旅の船の意味で、『和漢朗詠集』下巻の「水付漁夫」中に「江路之征帆尽去 遠岸蒼蒼 曉賦」（謝觀）の用例がある。「傷心幾酌他郷酒」は蘆僊の「南樓望」（『唐詩選』）に「傷心江上客 不是故郷人」と、旅愁を詠んだ詩の中に類似の表現の用例がある。「故園」は故郷の意味で、白樂天の「寒食」に類似の表現「故園在何處」の用例が、また蘇軾の「過高郵寄孫君孚」中にも「故園在何處」の用例がある。

また「詩卷」は、杜甫の「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」中に「詩卷長留天地間」の用例があり、柳北にとって最も大切なものとして、この作品の中で最も重要な意味をもっていると考えられる。「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」は、杜甫が浙東に帰る孔巢父に贈った詩であるが、李白が浙東付近にいた頃なので、李白に出会ったならば宜しく伝えてくれという意味で詠んだ詩である。

さらに「燈前」は、陸游の「悲秋」中に「燈前一局欲殘棋」の用例がある。「燈前一局欲殘棋」については、「灯火の前には、今の時局を象徴するかのような、さしかけの碁が。」<sup>39</sup>という意味であることが指摘されており、陸游の作品では時局を心配する状況が述べられている。柳北も灯火の下で詩を刪改しつつ、当時の日本の時局に心を痛めていたことも考えられる。故郷を遠くはなれて、旅愁に浸っていた柳北ではあるが、李白、杜甫、陸游といった詩人たちに思いを馳せ、結聯の部分で文学への志は捨てまいとする決意を語っているのである。

（KB1016）

朱袍換得綠簑衣。	朱袍（ほう）換へ得タリ綠簑（さ）衣。
休道沈淪心事違。	道（い）フヲ休メヨ沈淪心事違フト。
病鶴乘軒非所願。	病鶴軒ニ乗ル願フ所ニ非ズ。
孤雲出岫有時歸。	孤雲岫（しゅう）ヲ出テ時有時歸ル。
一聲鴻雁鄉書到。	一聲ノ鴻雁鄉書到リ。
千里江山詩伴稀。	千里ノ江山詩伴稀ナリ。
却是海南多樂土。	却テ是レ海南樂土多シ。
梁甘酒冽又魚肥。	梁（りょう）甘酒冽（きよく）又魚肥ユ。

「朱袍」は四・五位の役人が着用した朱衣のことで、「綠簑」と対になっている。「心事」は蘇軾の「李白謫仙詩」中に「心事難形容」の用例がある。「病鶴」は蘇軾の「次韻范淳父送秦少章」中に「病鶴借一柯」の用例がある。「孤雲」は、蘇軾の「合浦愈上人。以詩名嶺外。將訪道南岳畱詩壁上云。閒伴孤雲自在飛東坡居士。過其精舍。戲和其韻」中に「孤雲出岫豈求伴」という類似の用例がある。「鴻雁」は雁の大型のもので、「郷書」は故郷からの手紙で、「雁」と「郷書」は対になって用いられることがあり、王灣の「次北固山下」中に「郷書何處達 歸雁洛陽邊」という類似の用例がある。「千里江山」は広大な山

野を指し、白楽天の「同夢得寄賀東西川二楊尚書」に「千里江山屬一家」の用例がある。

また「海南」は滞在していた妹尾付近が江戸よりも南方であったので、滞在地周辺を意味する言葉と考えられる。蘇軾の「十一月二十六日 松風亭下 梅花盛開」中に「海南仙雲嬌墮砌」の用例がある。柳北は「海南」の地で、「梁甘酒冽又魚肥」と食材にも恵まれた状況を安楽に過ごしている自分の姿を詠んでおり、すっかり詩心を失くしてしまいそうな状況を述べている。

(KB1016) の詩に詠まれていたように、柳北は文学への志を失いかけた一面もあったが、酒食に溺れてばかりいたわけではなかった。柳北に詩の指導を受けようと医学生伊丹蕙圃が来訪すると、早速その詩に目を通して。旅愁に浸りつつも、柳北は文学への意欲を失っていなかったのである。

## (2) 妹尾での望郷の念

11月2日には柳北の名を聞きつけた伊丹蕙圃<sup>40</sup>という医師が柳北を訪れ、詩の批評を依頼している。この日の夜の夢に柳北は柳橋の花街を見て、「この夜夢に錦兒を見る」と記している。「錦兒」は柳橋と親しかった芸妓「細錦」と考えられ、以下の短歌「旅枕日かすへぬれハ故郷のよるの錦もあたにやハ見ん」が詠まれている。家族のことも心配になった柳北は、以下の漢詩を詠んでいる。

(KB1017)

阿爺萍跡又天涯。	阿爺（あや）ノ萍跡（へいせき）又天涯。
想汝朝々憶阿爺。	想フ汝ガ朝々阿爺ヲ憶フヲ。
上國江山無限好。	上國ノ江山限り無く好キヲ。
不如與汝在吾家。	汝與（と）吾家ニ在ルニ如カズ。
兒復 <sup>41</sup>	

(KB1018)

一男三女膝相圍。	一男三女膝相圍ム。
憐殺燈花ト我歸。	憐殺ス燈花我ガ歸ルヲト（ぼく）ス。
夜々空閨人不寐。	夜々空閨人寐ズ。
裁縫應是阿誰衣。	裁縫應ニ是レ阿誰ノ衣ナランヤ。
玉蛾 <sup>42</sup>	

幼い長男と、留守を預かるその母親である女性への思いに満ちた内容である。<sup>43</sup> さらに柳橋の芸妓のお鳥（玉鸞）にも思いを馳せた漢詩を詠んでいる。

(KB1019)

欲別問儂何處去。	別ント欲シテ儂ニ問フ何ノ處ニ去ント。
悽愴一語恨奚深。	悽愴（せいそう）一語恨ミ奚（なん）ゾ深キ。
江城早晚相逢日。	江城早晚相逢フ日。
當問悽愴一語心。	當ニ問フベシ悽愴一語ノ心。
玉鸞	

「悽愴」は痛々しいという意味であり、杜甫の「八哀詩」中の第二首「故司徒李公光弼」中に「悽愴

槐里接」の用例がある。柳北にとって、玉鸞ともうじき別れるかもしれないということが、どんなに悲しいものかが表されている。従って、望郷の念を詠んではいるが、人の世の別れのつらさ、人生の悲哀が述べられている。『柳北詩鈔』第三巻には「憶家」という題で、兒復に宛てた（KB1017）と玉蛾に宛てた（KB1018）が収録されている。

玉鸞については、「航薇日記」の冒頭に「それより柳橋うち渡り石垣の媼に別れを告げ玉鸞が門にも立よりて」と記されている。また柳北の漢詩にもしばしば玉鸞との交流が描かれている。玉鸞との交流は慶応元年頃からで、「可愛叟歌」（（RH2053）『柳北詩鈔』巻二）には、序文に「有校書玉鸞者、毎来侑酒喚余可愛叟、余以爲別号、社友皆詰其說、乃作歌以解之（校書玉鸞なる者有り。毎（つねに）来たって酒を侑け余を可愛叟と喚ぶ。余、以別号と爲す。社友皆、其の說を詰う。乃ち歌を作って以て之を解く）」<sup>44</sup>と記されている。また明治3（1870）年の「柏樓雪夜與玉鸞飲」（（RH3009）柳橋で柳北の心情を理解できるのは、玉鸞だけとなってしまったという感慨が述べられている。

その後の明治4（1871）年の十首の「風懷詩」（（RH3027-3036）『柳北詩鈔』巻三）の序文には「噫舊知若玉鸞細錦者。既爲豪富所奪去。」（噫（ああ）、旧知の玉鸞・細錦の若き者、既に豪富の為に奪い去られる。）<sup>45</sup>と記されている。ここでは、玉鸞と細錦が富裕な人々により奪い去られて、柳橋の情緒を担う芸妓がいなくなってしまった状況が述べられている。玉鸞は柳北の心情を最も理解できた女性であり、柳橋の花街の情緒を象徴する芸妓であったので、その玉鸞から芸妓をやめる意向があることを聞いていた柳北は、別れが予想され、思いを馳せたと考えられる。

### （3）植松周辺

柳北は南朝の忠臣兒嶋高德の話を岸田冠堂から聞いたりしていたが、11月4日には成齋と連れだって植松まで出かけて行った。そこで稲を刈りつくした光景を見てから以下の漢詩を詠んだのである。

（KB1020）

一望寒村處々同。	一望寒村處々同。
黄雲刈盡水田空。	黄雲刈リ盡シテ水田空シ
木綿花吐荻花舞。	木綿花吐キ荻花舞フ。
晴日人行風雪中。	晴日人ハ行ク風雪ノ中。

「一望」蘇軾の「虔州八境圖八首」の第五首に「一望叢林一悵然」の用例がある。また日本の漢詩人で天台宗の僧侶であった六如（享保19（1734）年-享和元（1801）年）の「西山採蕈十絶句」の第二首には「一望」と「黄雲」の用例があるので、その詩を示す。<sup>46</sup>

黄雲一望覆平疇	黄雲（こううん）	一望	平疇（へいちゅう）を覆（おお）う
頗殺農肩汗殺牛	農肩（のうけん）	を頗殺（ていさつ）し	牛を汗殺す
道是豊年人意好	道（い）う是れ	豊年	人意好しと
吾儕剩得有今遊	吾が儕（せい）	剩（あまつ）	さえ今遊有るを得たり

六如は稲の収穫の際の人と牛との作業と農夫から聞いた豊作の喜びを詠んでいる。六如は備後出身の漢詩人菅茶山（永享5（1748）年-文政10（1827）年）に影響を与えた詩人で、六如自身は蘇軾や陸游さらに杜甫からの影響を受けたとされているので、柳北も六如の漢詩を知っていたと考えられる。<sup>47</sup>

#### （４）商家での見聞

11月5日には、舟を出そうとしたが風のために中止となった。小倉織眞田紐を売る店へ行った柳北は、そこで雲鳳の扁額を見た。雲鳳とは数少ない女性の儒者で漢詩人であった篠田雲鳳（文化7（1810）年-明治16（1883）年）<sup>48</sup>のことと考えられる。幕末の閨秀詩人には、梁川紅蘭（張紅蘭）や原采蘋が知られ研究もされてきたが、雲鳳は紅蘭や采蘋ほど資料も少なく、維新前後のことでは以下のことが把握されている。

安政のころから明治の初めにかけて、雲鳳の動静を知る資料を欠くが、おそらく書や経史を教え、詩を作り、大沼枕山や小野湖山といった詩人たちと交わりをもって生活をしていたと思われる。<sup>49</sup>

維新後の明治5（1873）年に、雲鳳は開拓使仮学校女学校の和漢学の教授となった。柳北は雲鳳と面識があったかは不明であるが、雲鳳は柳北と親しかった大沼枕山や小野湖山等と交流があったので、雲鳳の名前は周知していたと考えられる。柳北が雲鳳の作品に好感をもっていた様子は以下の記述からうかがえる。

此屋に雲鳳のかきし扁額あり雲竹飛雀の圖にて吾知といふ人の賛に「旗人は雲くれ竹の村雀とまりてハ立ちとまりてハ立ち」いと興あり

書画の鑑賞などをしているうちに、やがて柳北はそこの主人の息子（貞蔵）から、今は商店であるこの家の先祖が室町時代までは備前日比の城主であったことを聞かされた。

この家の祖先ハ四宮隠岐守隆國とて備前日比の城主（日比ハ田の口より二里ばかり東なり）たりしが足利氏の世に亡びて其子孫散じて農商に歸せりと其ことをきゝて思はず感慨の起りしもおろかなりといふべし

柳北の「おろかなり」という言葉は、柳北が武士の身分がなくなったことに対して、そこに歴史の流れがあることを悟ったからである。

戦国時代の備前日比の城主については、四宮隠岐守行清という人物の記載が『岡山県歴史人物事典』<sup>50</sup>中にあり、以下のようなことが把握されている。

戦国時代の備前国の武将。児島郡向日比村（現玉野市向日比）の地蔵山城主。生没年未詳。名は行清、または宗雪。信濃国（現長野県）諏訪氏の一族で、阿波国（現徳島県）か讃岐国（現香川県）に来往していた四宮氏の一部が児島に移ったものと推定される。

柳北は貞蔵から西洋について尋ねられ、知識の及ぶ限り様々なことを語っているが、それは戦国の武士の末裔である貞蔵親子の心情に共感したと考えられる。柳北と貞蔵には以下のような共通項があった。

柳北の先祖は、江戸幕府奥儒者（道雪、錦江等）であるが、維新後の生業は唐物屋を経営していた。<sup>51</sup>しかし現在も漢詩等を詠み、文芸への志を忘れなかった。西欧への関心も高く、幕末から蘭語や英語、仏語を習得していた。維新政府には仕えないで、旧幕臣としての帰属意識をもっていた。

これに対して、貞蔵は四宮隠岐守隆國（備前日比城主）の末裔で現在は小倉織眞田紐の店を経営して

いた。雲鳳の額を飾っていて、一応漢詩を理解するくらいの素養があった。また柳北に西欧世界について質問したりする程度の関心をもっていた。貞蔵の家では四宮隠岐守隆國の末裔の一族としての帰属意識から、士分に復帰することなく時代を重ねてきた。

柳北は落ちぶれた状況でも先祖を誇りとし、向上心を持って生きている貞蔵に自分と共通の部分を見ていた。11月末に東京に戻った柳北は、その約一カ月後の明治3（1870）年の元旦に、以下のような漢詩「庚午元旦」（RH2089）を詠んでいる。

（RH2089）

婦子朝來掃甌塵。	婦子 朝来（ちょうらい）甌塵（そうじん）を掃（はら）う
蕭條破屋又新春。	蕭条たる破屋（はおく） 又新春
賣書賣劍家貲盡。	書を売り 劍を売り 家貲（かし）尽（つ）く
幸是先生未賣身。	幸いに是れ 先生 未だ身を売らず <sup>52</sup>

柳北はまず妻が朝から塵のたまった釜の掃除をし、わびしい家にも、また春がめぐって来た状況を述べている。書物を取り、剣を取り、金になるものは全部売って、財産はすっかりなくなってしまったが幸いなことに、先生（自分）はまだ身売ることは免れていると詠んでいる。山陽道からの旅行で、柳北は自分自身と同じ運命をたどってきた貞蔵親子の生き方に触れ、維新政府には仕えない志を確認した上で、この漢詩を詠んだと考えられる。翌明治3（1870）年5月、日本橋箱崎町古河藩邸内に仮寓。馬喰町で、桂川甫周と薬舗の経営も始めている。

## （5）金比羅宮周辺

やがて11月6日には天候も回復し、柳北の一行は讃岐に向った。金比羅宮に参詣後、柳北は金比羅宮の近くの花街に遊び、その印象を以下の漢詩を詠んでいる。

（KB1022）

磴路連雲聳。	磴（とう）路雲ニ連テ聳エ。
祠前萬象幽。	祠前（しぜん）萬象幽ナリ。
繞山歌吹海。	山ヲ繞（めぐ）ル歌吹海。
翻是小楊州。	翻テ是レ小楊州。

結句の楊州（揚州）は中国の地名で、中国江蘇省中西部の河港都市。揚子江に連絡する大運河沿いにあり、古くから水運の要地である。晩唐の詩人である杜牧（803-853）には、「遺懷（懷（おもい）を遺（や）る）」<sup>53</sup>という作品があり、以下にそれを記す。

落魄江湖載酒行	江湖に落魄し 酒を載せて行く
楚腰纖細掌中輕	楚腰（そよう）纖細（せんさい） 掌中に輕し
十年一覺揚州夢	十年一たび覺（さ）む 揚州の夢
贏得青樓薄倖名	贏（あま）し得たり 青樓（せいろう）薄倖（はくこう）の名

杜牧は遊びほうけた十年の揚州の地を懷古し、目覚めれば花街の薄情がのこるという感慨を述べてい

る。柳北はその杜牧の気持ちを踏まえながらも金比羅宮周辺の花街にも江戸とは異なる情趣があることを指摘し、幼い遊女に短歌を贈っている。

このうちに竹江といへるハ姿容艶にして才藻あり鋏中の錚々とすべし人々みないたく酔ふて臥しぬ  
われも小倉といふ女と共に寐にけりこの女ハ年十五にてことし冬の初めつかた教坊に入りしものに  
て童こゝろあるもをかしこの夜霞降り出ぬ山近き家なればいと寒かりける  
七日快晴起出る折かくよみて小倉に贈る  
契り置いて今一たびハ来て見なん小倉の山の紅葉ならねと

その後瑜伽権現に参詣するために、柳北一行は花街の女たち別れを惜しみ、九日には杜牧の号「樊川」を詠み込んだ漢詩を詠んでいる。

(KB1024)

他郷一日永如年。	他郷一日永キコト年ノ如シ。
且對金樽却悵然。	且（しばらく）金樽ニ對シテ却テ悵然。
昨夜楊州興多否。	昨夜楊州興多キヤ否ヤ。
豪歌獨欠杜樊川。	豪歌獨リ欠ク杜樊川。

結句の「樊川」は杜牧の号であり、柳北が以前蘇軾の号「坡老」を詠み込んだ「断崖千尺思坡老」(KB1011)と同様な表現方法である。「航薇日記」中で蘇軾の影響を受けた漢詩を詠んだ頃の柳北は、維新後の幕臣としての立場についての感慨を詠んだものが多かった。しかし杜牧の漢詩の影響下での作品には、そうした悩みを抱えつつも花街に遊ぶ柳北の姿があった。柳北は幕末の慶応3（1867）年に詠んだ漢詩「丁卯中秋患痢枕、上賦三律、寄藤志州（丁卯中秋、痢を患う。枕上、三律を賦し、藤志州に寄す）」(RS2057)（『柳北詩鈔』巻二）中の第二首目でも杜牧「樊川」のことを詠みこんでいる。それは以下のようなものである。

快事如仙何處尋。	快事 仙の如し 何處にか尋ねん <sup>54</sup>
支離長對藥爐吟。	支離して長く藥爐に對して吟ず
疎桐葉盡風聲小。	疎桐 葉盡きて 風聲小に
老桂花薰秋意深。	老桂 花薰って 秋意深し
人笑人悲渾是夢。	人笑い人悲しむ 渾て是れ夢
月來月去本無心。	月來たり月去る 本 心無し
攀川久絕停車興。	樊川 久しく絶す 停車の興
閑却當年楓樹林。	閑却す 當年の楓樹林

終わりに近い部分での「停車興」は、杜牧の作品「山行」中に用例がある。金比羅宮の近くの花街で、柳北は杜牧の心情を思いやりながら時を過ごしていものと考えられる。

## （6）常山周辺

花街に遊んだりしながらも、柳北は亡父の命日を忘れたりはしなかった。柳北の父成島良讓（稼堂）



(享和2(1802)年-嘉永6(1853)年)は、11月11日に没していた。亡父や兄弟への感慨は11月11日に詠んだ以下の漢詩に込められている。

(KB1026)

兄弟七人隨九泉。	兄弟七人九泉ニ隨フ。
獨存遺體誦遺編。	獨リ遺體ヲ存シテ遺編ヲ誦(しょう)ス。
他郷今日蘋蘩奠。	他郷今日蘋蘩(ひんぱん)ノ奠(てん)。
遙隔滄溟拜墓阡。	遙ニ滄溟(そうめい)ヲ隔テ墓阡(ぼせん)ヲ拜ス。

転句で故郷を離れた自分は蘋蘩(浮き草と白艾(しろよもぎ))を供えていると述べて、さらに結句では大海原を隔てて亡父の墓を拝むことしかできない状況を詠んでいる。杜甫の「獨坐」中に「滄溟恨衰謝」の用例があり、望郷の念と共に成島家を思う柳北の思いが込められた作品である。

11月13日には柳北は四国へ向かうために、成齋と共に妹尾を発ち、浪華に向った。風雨のために舟の運航が遅くなった中で、柳北は以下の絶句を成齋に贈っている。

(KB1027)

南望常山雲幾重。	南ニ常山ヲ望メバ雲幾重。
憐君雙袖轉龍鍾。	憐ム君ガ雙袖(そうしゅう)轉(うた)タ龍鍾(りゅうしょう)。
孤帆欲發風潮駛。	孤帆發セント欲シテ風潮駛シ。
遙拜先公遺愛松。	遙ニ拜ス先公遺愛ノ松。

起句の「常山」は児島周辺の山である。「龍鍾」はうちしおれている状態を表しており、杜甫の「寄高使君岑長史詩」中に「何太龍鐘極」の用例がある。「孤帆」は蘇軾の「江上看山」中に「孤帆南去如飛鳥」の用例がある。

また先公は戸川氏の先祖、戸川肥後守(達安)をさしており、戸川家系図(戸川七流)<sup>55</sup>によれば、肥後守(達安)の父は宇喜多家の重臣で常山城主の戸川秀安である。戸川家の先祖に思いを馳せながら、柳北が自身の成島家の先祖にも思いを馳せていたことは十分考えられる。柳北は11日には亡父の命日に簡素な供養をしており、亡父や亡祖父のことが心底にあったことと考えられる。柳北の祖父成島司直(東岳)(安永7(1778)年-文久2(1862)年)<sup>56</sup>は、天保14(1843)年4月の十二代将軍家慶の日光参詣に随行した際の私的な旅日記「晃山扈從私記」を遺している。

## (7) 小豆島

14日には天候が回復したので柳北一行は小串を出発し、小豆島に近づく中で、柳北は「小豆嶋の最高き山を星ヶ城といふ其傍に見ゆるハ有名の神馳なり(鍾懸とも書す)」と述べて以下の漢詩を詠んだ。

(KB1028)

陽侯爲我放新晴。	陽侯我ガ爲ニ新晴ヲ放ツ。
風意如春波不驚。	風意春ノ如ク波驚カズ。
島嶼百千當面立。	島嶼百千面ニ當テ立ツ。
一堆凝翠是星城。	一堆(たい)翠ヲ凝ス是レ星城。

起句の「陽侯」は、蘇軾の漢詩「文登蓬萊閣下。石壁千丈。爲海浪所戰。時有碎裂。淘灑歲久。皆圓熟可愛。土人謂。此彈子渦也。取數百枚以養石菖蒲。且作詩。遺垂慈堂老人」の中に「陽侯殺廉角」の用例がある。「島嶼」は幾つかの島々の意味であるが、李白の漢詩「遊南陽白水登石激作」中に「島嶼佳景色」の用例がある。柳北は江戸中心の生活で、島が点在する海の風景に感動するものが多かったのである。

#### ① 柳橋への思い

小豆島で神馳山に登る途中、「柳橋」という石橋を見た柳北は「故山を距る數百里この地に於いて柳橋を渡るまた思郷の情を動かすとやいはん」と記した上で、望郷の念を込めた漢詩を詠んでいる。

(KB1030)

綺樓情夢斷。	綺樓情夢斷エ。
千里故山遙。	千里故山遙ナリ。
孤島無相識。	孤島相識無シ。
追雲渡柳橋。	雲ヲ追テ柳橋ヲ渡ル。

「綺樓」は美しい樓の意味であり、李白の「古風」第二十七首中に「綺樓青雲端」の用例があり、また杜甫の「哭韋大夫之晉」中に「綺樓關樹頂」の用例がある。「千里故山」は蘇軾の「和宋肇遊西池次韻」中に「故山西望三千里」と、楊萬里の「冬至前三日」中に「故山千里幾時回」と、類似の用例がある。

「孤島」は本土から離れた小豆島を意味し、王維の「送秘書晁監還日本國詩」中に「鄉國扶桑外 主人孤島中」の用例がある。さらに雲によって望郷の念を詠んだ詩に、韓愈の「左遷至藍關示姪孫湘」中に「雲橫秦嶺家何在」の用例がある。「雲橫秦嶺家何在」は、「雲は秦嶺山脈にたなびきわたしの家はどこにあるか分からぬ」<sup>57</sup>という意味であり、左遷された韓愈が侘しい身の上を詠んでいる。

しかし柳北は望郷の念に浸ってばかりはいなかった。小豆島の良さも把握し、小豆島の柳橋を渡った柳北は饅頭を食べて、店の様子を「この地の升屋に憩ひて一酌し饅頭を喫す酒香穀味孤島の物に似ず清潔喜ぶべし」と記している。ここには柳北の冷静な観察眼が感じられる。望郷の念もありながら、旅行先の土地の風俗やそこで出会った人々の善良な姿にも目を向けているのである。

#### ② 山の風景との出会い

山頂へ行くに従って一行が疲労して行く中で、柳北は周囲の人々を励まし、同行した岸田冠堂と聯句を作った。

(KB1031)

𩇑𩇑碧雲仙逕開	𩇑𩇑（あいたい）タル碧雲仙逕（せんけい）開ク
一蓑衝雨上崔嵬	一蓑雨ヲ衝テ崔嵬（さいかい）ニ上ル
柳北	

「𩇑𩇑」は雲がたなびくことで、『本朝文粹』に大江以言の「視雲知隱賦」中に「二華触石之膚𩇑𩇑」<sup>58</sup>の用例がある。「碧雲」は青みがかった雲で、陸游の「子聿至湖上待其歸」中に「碧雲忽起欲吞日」の用例がある。「仙逕」は仙人の通る逕で、李白の「送賀監歸四明。應制」中に「仙嶠浮空島嶼微」と、仙人の山道を詠んだ用例がある。

「一蓑」は陸游の「舟過小孤有感」中に「一蓑從此入空濛」の用例がある。また崔嵬は山中で石ころがごろごろしている場所であり、杜甫の「水閣朝霽奉簡雲安嚴明府」中に「崔嵬晨雲白」の用例がある。柳北に呼応して、岸田冠堂（桐蔭）は以下の句を詠んだ。

山靈莫笑無桃樹　　山靈笑フ莫レ桃樹無キヲ  
前度劉郎今復來　　前度ノ劉郎今復タ來タル  
桐蔭

「山靈」は蘇軾の「白水山佛跡巖」中に「山靈莫惡劇」という類似の用例がある。この詩は以下のような意味と考えられる。「桃樹」は杜甫の「風雨看舟前落花。戲爲新句」中に「江上人家桃樹枝」の用例がある。「前度劉郎今復來」の句は、劉禹錫の「再遊玄都觀」という詩「百畝庭中半是苔　桃花淨盡菜花開　種桃道士今何歸　前度劉郎今又來」の結句を踏まえている。これは左遷後に許されて再訪した玄都觀に昔あった桃樹が全くない状況を述べたものである。さらに「劉郎」というのは『幽明録』中に記されている劉晨と作者の劉禹錫の姓をかけたものと言われている。<sup>59</sup>

『幽明録』の中に「劉晨阮肇（りゅうしんげんちょう）」という話が収録されている。後漢の明帝の時代に天台山に入った劉晨と阮肇という二人の男性は、道に迷い山頂にある桃を食べ体力を養った。桃については「遙望山上有一桃樹、大有子実。」<sup>60</sup>と、その靈的な面が記されている。13日後位に美しい女性が現れ、侍女たちと二人をもてなした。そこで十日あまり酒や歌舞音曲等の遊興にひたって、二人が故郷に帰ってみると、自分たちの集落には七代後の子孫の時代になっており、昔先祖に行方不明になった者がいたという話を聞かされた。晋の孝武帝の頃に劉晨と阮肇は再び行方不明となったというのが結末である。

柳北と冠堂の聯句は陸游や蘇軾、杜甫や劉禹錫の漢詩の影響を受けつつ、『幽明録』の話をも踏まえ、漢文学の深い素養がうかがえる作品で、以下のように解釈できる。

青みがかった雲がたなびいて仙人の通る路が開かれると、蓑を衝くような雨が降り、その中を登って行った。（柳北）　不老不死に効く桃の木はないが、山の靈よ笑わないでほしい、劉郎がまた来たのだ。劉禹錫の「再遊玄都觀」のように時世が移り変わってしまったが。（桐蔭）

柳北は冠堂について「航薇日記」の中で、「其人のなり風致あり實に僻地に稀なる人物」と述べている。冠堂は医師で、明治11（1878）年5月に56歳で没した。その人柄は「貧者よりは薬価をとらず、困窮者には金銭及食糧を与えて治療を施す等、医は仁術の諺を身をもって実行したる仁者である。詩学を広瀬淡窓に学ぶ。」と『妹尾町の歴史』<sup>61</sup>に記されている。「航薇日記」中では伊丹惠圃と記されている伊丹蕉陰も、冠堂と同じ医師で漢詩人であり、広瀬淡窓のもとで漢詩文を学んでいた。伊丹惠圃（蕉陰）が柳北の下を訪れたのは、冠堂からの情報によって柳北の妹尾滞在を知ったからと考えられる。

柳北が「航薇日記」の中で記した妹尾の漢詩人たち冠堂や惠圃は、広瀬淡窓（天明2（1782）年-安政3（1856）年）の咸宜園の出身者である。咸宜園は単なる私塾とは異なり、四千人以上が学び、「身分等を排した三奪法や学力本位の月旦評など合理的な教育法をとり、高野長英や大村益次郎らを育てた」<sup>62</sup>教育機関であった。高野長英は幕府に抗し、大村益次郎は討幕側の人物であったが、柳北は冠堂や惠圃の文芸や生き方に共感する面もあったので、親しく接したものと考えられる。

### ③ 頂上で

やがて、神馳の頂上まで上り詰めた柳北は、山頂からの光景を以下の漢詩に詠んでいる。

(KB1035)

山出沒兮雲往來。 山出沒シ（兮）雲往來ス  
瞬間變幻亦奇哉。 瞬間ノ變幻亦奇ナル哉  
我登仙嶺最高處。 我仙嶺最モ高キ處ニ登テ  
長嘯一聲飛酒盃。 長嘯（ちょうしょう）一聲酒盃ヲ飛バス

「山出沒兮雲往來」は、詠嘆の意を表す「兮」の字を山と雲の語句と共に使用した例「雲兮汝歸山」が蘇軾の「攬雲篇」に見られる。「兮」は訓読では不読で、文のリズムを整える働きをしている。「變幻」はすばやく変わること、「仙嶺」は仙人の住みかである嶺のことである。「長嘯」は長く声を引いて詩歌を吟ずることであり、「長嘯一聲」と似た用例「長嘯一含情」が杜甫の「公安縣懷古」中にある。絶景を称賛し、それに関しての詩歌を吟じて酒を酌み交わしている柳北一行の様子がうかがえる作品である。さらに柳北は芭蕉の発句「初時雨猿も小蓑をほしけなり」を引用して、「句ハ此の山にて吟ぜしとぞ」と記している。しかしこの山でと柳北が記しているのは誤りであって、芭蕉は実際にこの地には足を踏み入れている。しかしこの山でと柳北が記しているのは誤りであって、芭蕉は実際にこの地には足を踏み入れている。しかしこの山でと柳北が記しているのは誤りであって、芭蕉は実際にこの地には足を踏み入れている。<sup>63</sup>

## 5 帰路

柳北は小豆島周辺の海の光景や、神馳山への登頂などから自然の美しさに感動しながらも、また自然の厳しさも体験した。15日に小豆島を後にする頃は、以下のような感慨をもっていた。

隠退以来各慮を踐渉すといへどもいまだ此の小豆島神馳の如き奇景怪境を見ず況や風雨を街き婦女と借に無人の境を經過す

天候によって、出発が遅れていた柳北たちは小豆島から浪華の地へ向かった。柳北の帰京に従って、成齋やその両親である貫好と永氏、さらに使用人である阿豊と茂介も浪華の地へ同行した。17日には晝嶋を右に見て船は進み、18日には浪華に到着した。19日には浪華の地を柳北はゆっくりと見物し、花街を中心に江戸との違い等を観察して「浪華の風俗もよく見なれたれど其の故郷にかはりたるさまハ猶をかしく覺ゆ」と述べている。

### （1）浪華の花街

浪華の地で花街に遊んだ柳北は、小里というお気に入りとおうことができなかったこともあり、以下の漢詩を詠んでいる。

(KB1037)

俄然相遇忽相親。 俄然相遇シテ忽チ相親ム。  
一曲絃歌一枕春。 一曲ノ絃歌一枕ノ春。

濃艶借來脂粉色。      濃艶借り來ル脂粉ノ色。  
不知世有號夫人。      知ラズ世ニ號（かく）夫人有ルヲ。

柳北はだしぬけに出会った遊女や廓の音曲などで情緒を味わいながら、浪華の風俗については少し華やかであるとしている。結句の「不知世有號夫人」では、中国唐代の楊貴妃の姉である號夫人が素顔で過ごし、化粧が天然の美しさを汚しているという考えを持っていたことを述べている。『唐詩選』には張祜の「號夫人」という漢詩が収められている。柳北には柳橋周辺の妓が濃厚な化粧をしていなかったことを懐かしむ心情もあったと考えられる。しかし柳北は「むし鮓」を出されて、江戸とは異なる食文化に注目した。また「小三」という遊女については、「此の女ハ詞少なくやさしきふし多しかくよみて贈る」と記して、「よしあしのふしこそしらね波枕かたしきなれし難波江の月」（KBT20）という短歌を詠んでいる。

その後、柳北は劇場に出向いたりして、浪華の文化に目を向けつつ、戸川家の使用人たちが妹尾に帰ることを見送ったりして過ごしていた。やがて11月25日には柳北自身も成齋たち戸川家の人々と共に浪華を発った。

## （2）俳諧や短歌への関心

11月21日住吉明神に詣でた柳北は、芭蕉の句碑「升買て分別變わる月見かな」を見たことを記している。この句は元禄7（1694）年に詠まれ、『笈日記』（元禄8年）に収録されている。季語は「月見」で秋であり、『住吉の市に立ちて』といへる前書ありて<sup>64</sup>と『笈日記』中に記されている。この句は住吉神社の大祭に参詣した芭蕉が名物の升を祭りの市で買ったならば、急に了見が変わって、十三夜の栗名月の月見の句会にも出ないでそのまま宿に帰ってしまった。申し訳のないことであるという意味で、その原因には芭蕉が熱を出して健康状態が悪かったと考えられている。柳北は「航薇日記」中の11月15日の記述で、小豆島の神馳山の頂上でも芭蕉の「初時雨猿も小蓑かほしけなり」という句を挿入しており、俳人の中では芭蕉の文芸に関心をもっていたことが理解できる。

また住吉神社には千種有功の短歌「萬代もたゝ相生に栄えまし住吉の神住吉の松」という短歌が書かれた屏風があることも、柳北は記している。千種有功（寛政9（1797）年-嘉永7（1854）年）は公卿で、一条忠良や飛鳥井家に和歌を学んでいたが、地下歌学にも関心をもち香川景樹等とも交わった。堂上歌人としての千種有功については、以下のような特徴が把握されている。

宣長歌論からの影響といい、景樹歌論からの影響といい、有功の歌人としての軌跡は、有功が書簡で述べているごとく「貴賤を論ぜず」（堂上・地下の別なく）理想の歌を詠むためのものといえよう。伝統的な堂上歌壇の枠からは大きくはみ出た歌人が有功であったのである。<sup>65</sup>

柳北もまた住吉の松についての短歌「幾世へしといひつる世より又いく世緑を添へし住吉の松」（KBT25）を詠んでいる。後に柳北は「千種有功卿和歌拔萃」<sup>66</sup>を作成しており、有功は柳北が敬愛していた歌人の一人であったと考えられる。

## （3）楠正成への思い

11月25日に湊川に到着した柳北は、楠正成の巨碣を目にした。明治維新の前後には、多数の志士達が墓前に詣でたのであったが、湊川に正成を祀る湊川神社が創建されたのが明治5（1872）年であり、

柳北が訪れたのはそれ以前であった。柳北は正成に対して以下の漢詩を詠んでいる。

(KB1042)

英雄得失與誰論。	英雄ノ得失誰レ與トモニカ論ゼン。
一死報君名故存。	一タビ死シテ君ニ報ズ名故ニ存ス。
當日若成功業了。	當日若シ功業ヲ成シ了ラバ。
書生未必祭忠魂。	書生ハ未ダ必シモ忠魂ヲ祭ラズ。

起句の「英雄」は杜甫「丹青引贈曹將軍霸」中に「英雄割據雖已矣」の用例が、蘇軾「八陣磧」中に「英雄不相下」の用例がある。承句の「一死」は、陸游「雨中排悶」中に「一死正自秋毫輕」の用例が、蘇軾「曹既見和。復次韻」中に「一死實未料」の用例がある。転句と結句では、正成が湊川で討ち死にしなければ、忠魂が祭られていたかどうかはわからない、正成という犠牲があつて後世の我々は忠魂を祭ったのだと、柳北自身の感慨が述べられている。

江戸時代の初期に、正成は徳川家康の孫で、『大日本史』の編纂を始めた徳川光圀（寛永 5（1628）年 - 元禄 13（1700）年）によって湊川に墳墓が作られた。幕末では、備後出身の漢詩人である菅茶山（寛延元（1748）年 - 文政 10（1827）年）が、湊川近くの生田村に宿泊した際に正成を偲んだ漢詩「宿生田」を、さらに吉野を訪れた後に湊川近くを訪れた際には「楠公墓下作」を詠んでいる。「楠公墓下作」の終わりの部分は「当時若無公輩出 乾坤亦豈有今日」で、「当時もし楠公らが輩出しなかったならば、天地もまたどうして今日のものでありえたであろうか。」<sup>67</sup>という茶山の感慨が述べられている。柳北も正成という犠牲があつて、後世の我々は忠魂というものを知ることができたと、(KB1042) の詩において正成を評価したのであった。

#### （４）帰宅

船旅によって柳北一行は 28 日には横浜港に着き、柳北は戸川家の人々と別れて馬喰町を経て、さらに浅草の自宅に戻った。帰宅直後に柳北は以下の漢詩を詠んでいる。

(KB1043)

回顧遊踪海接天。	遊踪（ゆうそう）ヲ回顧スレバ海天ニ接ス
飄々身事夢耶仙。	飄々（ひょうひょう）タル身事夢耶仙カ
一簑晚拂星城雪。	一簑晩ニ拂フ星城ノ雪
雙櫓晨搖畫島烟。	雙櫓晨（あした）ニ搖ス畫島ノ烟
情老紅裙唯買笑。	情老テ紅裙ハ唯笑ヲ買ヒ
愁多綠酒故求眠。	愁多シテ綠酒ハ故ラニ眠ヲ求ム
歸來鄉里年將暮。	歸來レバ鄉里年將ニ暮ント
殘柳蕭條書幌前。	殘柳蕭條（しょうじょう）タリ書幌（こう）ノ前

柳北にとって、瀬戸内海周辺の光景は忘れがたいものであり、神馳を含む星ヶ城山と畫嶋周辺の印象が特に強いものであったことが述べられている。「情老紅裙唯買笑」の部分で、遊女を相手の遊びも自分は老いてしまっているので遊女からの笑いを買ったりと述べ、一方ではまた悩みも多く、酒は眠りをもたらししたことが多かったことを述べている。故郷に帰るとまさに年末で、書物を覆う布の前にたたずむ

と外にはうらぶれた柳がもの寂しく見える光景を柳北は詠んでいる。

結句の「残柳」は劉滄の「煬帝行宮」中に、「残柳宮前空露葉」の用例があり、以下のように解釈されている。

「残柳」の残は、単にのこるのではなく、衰残、敗残などのように、すたれる、うらぶれるの意。

68

「煬帝行宮」は、唐代の劉滄（800-865?）が、隋の二代目の天子であった煬帝（在位 604-618）の舟遊びを楽しんでいた往事を偲んで詠んだ作品であった。煬帝は病床の父、文帝を謀殺して帝位についた人物であったが、黄河と長江を結ぶ大運河を開通させる事業も行った。

柳北は山陽道での旅を回想し、帰京すれば年の瀬である事実を受け入れつつ、旅の思い出を偲んでいたものであった。最後に柳北は「己巳十一月廿八日夜一酌後燈前にうつす末巻ハ火輪船中に記するものなれば最も拙劣にて讀がたし」と、この日記を完結させている。

「燈前」は柳北の「航薇日記」中の漢詩（KB1015）中でも「夜々燈前手自刪」という用例があるが、柳北が敬愛していた南宋の陸游の「悲秋」中に「燈前一局欲殘棋」の用例がある。陸游の作品中では、燈火の下で時局を憂慮する様相が述べられており、柳北も時局を思いやりながら、日記を読み返してみると、外車式蒸気船中で書いていた日記の最後の部分が最も拙い内容であったと述べている。

## 6 柳北にとっての「航薇日記」創作の意義

### (1) 社会の裏側を見る目を養う

柳北は僻地である妹尾で冠堂のような人物と出会い、社会に貢献する姿勢を学んでいったと考えられ、柳橋に代表される江戸から、日本の国へと社会への視線を広げていった。維新直後の柳北は自己の居場所を亡くした喪失感に支配されてはいたが、この旅で地方社会の人物や自然に触れ、社会への関心の萌芽を徐々に成長させていったのであった。

「航薇日記」では関西地方の花街も描かれている。浪華見物の一環としての松島遊郭の見学では、客の食事の東西の違いについて「飲食も亦東京に殊なること多し我家より飯を携へ來て穀を命じ樓上にて就いて食らふ者有りと云ふ」の記述がある。また各地の遊女との出会いと別れでは和歌による交流があるなど、当時の花街には未だ文芸的色彩があったことが語られている。乾は「航薇日記」の背景となる山陽への旅の意義について以下のように述べている。

これにより、柳北は改めて自分の置かれた状況を覚知するとともに、民間人としての地位を認識したものと見られる。<sup>69</sup>

乾はさらにそこにはルポルタージュの手法が認められるとし、また紀行文学の意義もあると述べている。乾の指摘を踏まえた上で「航薇日記」を概観すると、自然や風物を詠んだ漢詩や短歌の挿入もあるが、花街や社会の裏側にも目をむけている柳北の姿がある。11月18日に安治川の新街の遊女について、以下の記述がある。

初更の比より高島屋にゆきて遊びぬ玉鶴北枝といふ舞妓松鶴小宮といふ歌妓其席にありていとにぎはし玉鶴八年三五ばかりにて才貌共にある女なり酔て後此地の娼（土俗呼んでたはんと云ふ）花鶴と

共に臥したりそのさまめづらかに見ゆれどかの病のあらんと胸ふたがり衾のうちに縮まりて寐しの  
みか爐火の終夜薫蒸して頭のいたみつるにも困じはてぬ

柳北はうら若い遊女が病であるにも関わらず働くことに心から同情し、また自分自身が病気を移されないためにも、身を縮めて眠りについたが、爐火のために頭痛をもたらしたと記している。幕末に柳北が著わした『柳橋新誌』初編では、花街が金銭本位で動いている様相が記されていたが、安治川では衛生管理がされていない環境の悪い花街の様相を記し、病にも関わらず客を取らされている遊女の扱いを批判している。柳北は花街にはよく足を運んでいたが、そこで働く遊女に対しては人間としての立場を尊重していたのであった。

乾の指摘した通り、「航薇日記」にはルポルタージュの手法もあり、紀行文学としての意義もあるが、柳北のルポルタージュの手法による散文の創作は既に『柳橋新誌』初編で萌芽があった。『柳橋新誌』初編で描かれた花街は、金銭本位ではあるが江戸情緒を残すものであった。しかし「航薇日記」では貧しく不衛生な花街の裏側も描かれている。柳北の社会の裏側を描く視線は、江戸の花街の情緒を描いていた頃よりも現実を明確に記して、日本各地という領域に広がりを見せてさらに深められていった。

## （２）成島家への思い

### ①祖父司直と柳北

「航薇日記」という紀行文学の作成は、成島家の伝統を守り伝えたいという柳北の意志が強く働いていたことも一因であった。柳北は「航薇日記」の中で、亡父の思いも語っており、旧幕臣で奥儒者の家の主人である誇りは心底に深くもっていたと考えられる。また亡父以上に柳北の精神世界の形成に深い影響を与えた人物として、柳北が26歳となった文久2（1862）年まで生存していた祖父司直（東岳）が考えられる。

柳北の祖父成島司直（安永7（1778）年-文久2（1862）年）にも私的な紀行文『晃山扈従私記（こうざんこしょうしき）』（上・下）があった。『晃山扈従私記』は天保14（1843）年4月の第12代将軍家慶の日光山東照宮参詣の随行記で、漢詩も詠まれているが、和文で書かれたものであった。旅立ちから日光までの記録である「露の道芝」（『晃山扈従私記』上）は、最初に旅立ちの短歌「君も臣も心そいさむ黒髪山分衣春の立ぬと」<sup>70</sup>で始まり、日光到着後の「神わさ」（『晃山扈従私記』下）も短歌「此身にも恵かさねて日の光にあふ山にあふく神わさ」で始まっている。東照宮周辺の山に登った際の司直の漢詩は、「一峯行過一峰青 又見溪櫻花尚馨 先度劉郎才已老 耻無佳句謝山靈」である。柳北が「航薇日記」中に、神馳での岸田冠堂と聯句した作品の冠堂の作品に「山靈莫笑無桃樹 前度劉郎今復來」があり、「劉郎」と「山靈」という語が共に用いられている。

司直の公的な仕事としては『徳川実記』の執筆と編集であったが、さらに『改正三河後風土記』（27巻）、『江戸名園記』（1巻）、『源氏物語忍草』（5巻）、『老いのくりごと』（1巻）等の著作があった。柳北の遺孫大島隆一によれば、司直には文人や学究としての面の他に、諸政一般への関心もあった。

かういつた學究的な反面、幕政についても多大の關心をもち―「奥儒者成島司直、幕府に上書して水野忠邦の專横を訴へ、諸弊の改革を請ふ」（「國史大年表」）と、あるやうに、ときの、老中・水野忠邦の政策にたいして、けつぜん、たつことを辭さなかつた。これは、天保十二年四月のことである。<sup>71</sup>



さらに大島隆一は、柳北と司直には相通ずる面が多いことを指摘している。柳北は「航薇日記」中に、室町時代に日比の城主であった四宮隠岐守隆國の子孫が商人に身を落としている現実を記しているが、先祖を思う気持ちは旅行中の見聞によって、一層強いものとなったのであった。柳北の紀行文学創作への出発は、主に祖父から受け継いだ、文芸への造詣を深化させようとする意欲が基盤となっている。

## ②養子としての立場

奥儒者の家の主人として、柳北が祖父や父を偲ぶ思いが深いのは当然ではあるが、柳北は成島家の養子であったとされている。「航薇日記」の初めの部分でも、「十六日晴森兄訪ひ来たり旅路のこと種々物語りす」と記されていて、兄がいたことが判明している。この兄については、後の「航西日乗」での欧米の滞在中、明治6（1873）年2月16日に以下の記述がある。「本日始テ家信ヲ得ル 其喜ビ比ス可キ無シ 書ヲ寄セシハ森楠二兄荊妻謙兄舟橋玉卿園井忠雄竹内財次等ナリ」と記されている。森と楠という姓の異なる二人の兄については、森省吾と楠山孝一郎とされている。<sup>72</sup>

また柳北は永井氏との結婚以前に、安政元（1854）年に御絵師狩野董川の娘瀏と結婚していた。前田愛は「荷風によれば董川の妻は父稼堂の次女であったという。柳北にとっては姪に当るわけである」<sup>73</sup>と述べている。安政3（1856）年11月に、狩野氏は男児を出産するが、男児はまもなく死亡、翌年の3月に狩野氏と柳北は破局を迎えている。荷風の「柳橋新誌につきて」は、柳北の離婚と再婚について以下のように記している。

柳北は此年安政四年三月廿五日に其前年娶つた妻狩野氏を離別し翌四月廿四日に本所松井町に住した旗本永井氏の女を迎へて繼室となした。離別せられた先妻は幕府の繪師狩野董川中信の女で、柳北の姪に當るものらしい。董川中信の妻は柳北の父稼堂の次女であるが故である。<sup>74</sup>

狩野氏との離婚について柳北は自身の日記『硯北日録』（四）の3月25日に「如狩野氏決細君大去之事也携金二十圓返之」<sup>75</sup>と記している。柳北の心底は記されていないが、狩野家を訪ねた後に亀戸天神に参詣したことが記されている。狩野氏に対して柳北がどの程度の愛情をもっていたかは不明であるが、祖父司直も未だ生存しており、成島家の血縁である狩野氏との離婚は養子である柳北にとっては残念なことであったと考えられる。

柳北が祖父司直の生き方に多くのものを学んだことも、養子として成島家の当主としての義務感を痛感していたと考えられる。

## （3）人間としての女性の尊厳

柳北は女性に対して、その内面を評価し、人間性を認める視点をもっていた。幕末から明治にかけての閨秀漢詩人篠田雲鳳（文化7（1810）年-明治16（1883））については、その作品を評価していることが、「航薇日記」中の11月5日の記述にある。雲鳳は柳北よりも二十七歳も年長であり、先輩の漢詩人として敬意をもっていたと考えられる。若き日の雲鳳と交流があった梁川星巖（寛政元（1789）年-安政5（1858）年）は、『玉池吟社詩』に雲鳳の作品を掲載している。

雲鳳は詩人としてよりも、儒学者としての評価が高く、維新後の明治5（1873）年に、雲鳳は開拓使仮学校女学校の和漢学の教授となったが、病によって辞し、愛宕山麓に私塾を開いてその生涯を終えている。雲鳳の出身地である下田で大正3（1914）年に発行された『下田の栞』にも雲鳳の記述があり、晩年については、「或は厚俸之を招くものあれども就かず、明治十六年五月廿日死す、年七十四」<sup>76</sup>と

ある。

柳北と実際に交流し、幕末から明治初期にかけて柳北の心情を最も理解していた女性には柳橋の名妓お鳥（玉鸞）であった。「航薇日記」に描かれた山陽道の旅から帰った明治3（1870）年の冬には「柏樓雪夜與玉鸞飲（柏樓に雪夜に玉鸞と飲む）」（『柳北詩鈔』巻三）という漢詩が詠まれている。

（RH3009）

江樓風雪夜凄清	江樓の風雪 夜 凄清（せいせい）たり
且剔寒燈話舊情	且（しばら）く寒燈を剔（き）って舊情を語る
散盡天台諸女伴	散じ盡（つく）す 天台の諸女伴
劉郎相識獨吾卿	劉郎の相識（そうしき） 獨り吾が卿（けい）のみ

柳橋で柳北の心情を理解できるのは、玉鸞だけとなってしまったという感慨が述べられている。この「柏樓雪夜與玉鸞飲」という漢詩は「Ⅱ章2、(1) 江戸追懷の中での旅立ち」の中でもとりあげているが、柳北が花街の女性の内面に目を向けていたことが理解できる漢詩である。

柳北は、花街の女性だけでなく、浪華の地まで同行した戸川家の使用人である阿豊という女性の人柄に注目し、以下のように述べている。

永氏の侍婢阿豊ハ才気ありてよく其の主に事ふ余が妹尾にゆきしより衣食の事何くれとなく心づけ旅の身にもくるしく覚えぬ様に明暮なぐさめられしが此此ハわけてまめまめしく萬の事までのこりなく心を碎きてなす様に覚えければいと憐れに思ひてかくよめる

柳北が阿豊におくった短歌二首は以下のようなものであった。

（KBT22）香をとめて 家つとにせむ山里の落葉かなかの 菊の一本  
（KBT23）霜かれの 野邊に色なき白菊も 深き匂ひハ 知る人そしる

短歌（KBT22）では、阿豊の人柄を称賛して家へのみやげにしたい菊の花であるとしている。また（KBT23）では野辺では目立たない白菊のようなあなたの深みのある人柄は分かる人だけに分かるものであると、述べている。阿豊は閨秀詩人でもなく、名妓でもない、全く平凡な市井の女性であるが、その人柄に柳北は心を捉えられたと考えられる。

柳北は女性の外側の華やかさにだけ注目する男性ではなく、雲鳳や玉鸞のような女性の才覚にも目を向けていたが、戸川家を訪れて知った阿豊の内面を理解し、女性の人格を評価できる技量を持ち合わせていた。

#### （4）帰京後の柳北

柳北にとって「航薇日記」の舞台となった山陽道への旅は、社会や人間に対する見方を深化させた。乾の指摘している「航薇日記」の特徴は、柳北が旅先の風物がルポルタージュのように描写されていること、また漢文戯作である『柳橋新誌』の作者であった柳北が、漢詩や詩歌を挿入した紀行文学というジャンルの文芸を創作したこと、さらに維新政府の下で生きる幕臣としての立場を自覚したことである。乾の考察自体は的確なものであるが、維新政府の下で生きる幕臣として、柳北の心底は幕府の奥儒者成

島家の当主としての義務感に満ちていたことを付加する必要がある。

既に指摘していたことであるが、祖父司直の生き方に共鳴していた柳北は祖父の漢詩を採り入れた紀行文「航薇日記」を書いたと考えられる。司直については、日本の典故にも深い知識をもち文章に長じていたとされている。また和歌の造詣もあって、稲垣見年・山上伸之ら八人の百番歌合の判詞を書くこともしていた。<sup>77</sup>

祖父を見習おうとしていた柳北は、最後まで徳川家への忠誠心をもっていた。それは柳北が明治3(1870)年に維新政府から左院に徴せられたが辞退したことにも表れている。今村栄太郎は維新直後の柳北について、以下のように述べている。

柳北は終生、徳川家の遺臣として節を曲げず、新政府に官仕しなかった。のみならず、明治十七年十一月に死去した時、その遺書には子々孫々徳川家に背くことのないようにと認めてあった。<sup>78</sup>

明治3年の3月には『柳橋新誌』二編を柳北は完成させた。さらに8月には、大谷光瑩の依頼で浅草本願寺地内に設けられた学舎で少年たちの教育に携わることとなった。柳北は維新政府の下で旧幕臣として、また成島家の当主としての立場を自覚しつつ、独自の道を模索していたのである。

### 第3節 『柳橋新誌』二編の創作

#### 1 『柳橋新誌』二編の創作の背景

##### (1) 孤独の中で

「航薇日記」によって地方の光景を描いた柳北は、帰京後の明治4(1872)年の3月に『柳橋新誌』二編を完成させた。この頃の柳北は、柳橋の変遷に対して、自己の運命の変遷と同じようなものとして捉えていた。『柳橋新誌』二編<sup>79</sup>の後半で、柳北は以下の詩を挿入し散文中に挿入している。

嬌歌侑酒醉高秋。	嬌歌(けうか) 酒を侑(すす)めて 高秋に酔ふ
無限歡情却惹愁。	限りなき歡情 却(かへ)つて愁へを惹(ひ)く
門柳肅疎美人去。	門柳は 蕭疎(せうそ) 美人は去る
他年迫感在此樓。	他年の迫感 此の樓に在らん

「無限歡情却惹愁」は、漢の武帝の「秋風辭」の「歡樂極兮哀情多」を踏まえたものであり、「人生の秋の訪れに、さすがの武帝もなすすべがない」<sup>80</sup>ことが詠まれている。また「他年」は、後年の意味で蘇軾の「孫莘老求墨妙亭詩」中に「他年劉郎憶賀監」の用例がある。さらに柳北は以下のように述べている。

拒今僅七八年而 西坡老病 流離于北地 當時紅裾 皆凋落 如晨星 余亦託餘生於風塵中(今を距る僅かに七八年にして、西坡は老病、北地に流離し、当時の紅裾、皆凋落して晨星の如し。余も亦余生を風塵中に託す。)

大意：将軍家茂の侍医であった竹内西坡<sup>81</sup>が言うことには、今を距てること七、八年前に老いて病み、北方へ離れてしまったので、当時の名妓はまるで明け方の星のように疎らになってしまった。自分もまた風塵の中で余生をおくっている。)

文中の「余亦託餘生於風塵中」の部分は、当時の柳北の漢詩（明治4年 秋の作、七言律詩）「秋懷」十首のうちの最後の句に「餘生只合老風塵」（餘生 只合に風塵に老ゆべし）という句があり、幕府滅亡後の感慨が伺われる。餘生といっても、柳北はまだ35歳であり、幕府滅亡後に自己の存在が失われたことへの悲哀である。

「秋懷」十首の中の第二首目（RH3021）の詩では一層明確な孤独感が表現されている。

北窓高枕誦陶詩。	北窓に枕を高くして陶詩を誦（しょう）す
大馬長槍彼一時。	大馬 長槍 彼も一時
病客身邊秋到早。	病客の身邊 秋の到ること早く
醒人宅裏月來遲。	醒人（せいじん）宅裏（たくり） 月の来たること遅し
少年感慨老應悔。	少年の感慨 老いて応（まさ）に悔ゆるなるべし
浮世交情窮始知。	浮世の交情 窮して始めて知る
忘却従前榮辱事。	忘却す 従前 榮辱の事
琴書消日不圍棋。	琴書（きんしょ）に日を消して 棋を囲まず <sup>82</sup>

柳北はまず北窓の辺りで心やすらかに寝ながら、陶淵明の詩を吟じる状況を述べている。次に過去の栄華が述べられ、馬にまたがり槍を振り回すという時期があったことが思い出されると述べている。そして病気がちのこの身には、秋の訪れが一段と早く感じられ、文明開化と騒いでいる世の中を醒めた目で眺めつつ、世の中から取り残されている者には、月の出が遅いことが感じられると述べている。さらに、夢が砕かれたこと悔やまれるが、貧しい生活となって初めてこの世の冷たさを知ったと詠んでいる。最後の部分で柳北は今までの名誉も恥辱もすべて忘れて、琴と読書で毎日を過ごす事が多いとしながらも、戊辰戦争の思い出につながる囲碁だけはしないこと自分に言い聞かせている。

杜甫の七言律詩の連作「秋興八首」が柳北の念頭におかれ、「秋懷十首」が作られているが、第一句の「北窓高枕誦陶詩」と最後の句の「琴書消日不圍棋」に陶淵明の影響が、また第三句の「病客身邊秋到早」に劉禹錫の影響が見られる。劉禹錫「秋風引」には、秋の訪れを最も早く感じた異郷の客の孤独が雁の群れと対比されて表されている。

何處秋風至	何れの處よりか秋風至る。
蕭蕭送雁羣	蕭蕭として雁羣を送る
朝來入庭樹	朝來庭樹に入つて、
孤客最先聞	孤客最も先づ聞く <sup>83</sup>

劉禹錫はまず、どこから秋風が吹いてくるのか、蕭蕭として雁の群れを南に吹き送る状況を述べている。そして今朝方庭の樹々の間に吹き入ったのを、ひとりわびしい旅の身は、誰よりも先に聞きつけたのであると詠んでいる。

柳北は維新後間もない時期に、孤独な毎日であった。しかし『柳橋新誌』二編成立間もない頃の柳北は、真宗大谷派の好意で、その教団の初等教育の学校教師として過ごしていた。そのような中でも幕府崩壊の悲しみを忘れることはなかった。

## （2）文明開化の裏側への注目

孤独な状況下でも、柳北は『柳橋新誌』二編では柳橋の花街を舞台に維新政府への批判や文明開花の裏側を描き、文明批評的色彩が初編よりも強まっている。文明開化に対しては、芸妓と書生との英語を交えたやり取りを、柳北は軽妙に描いている。

一書生入學校頗通英語一夕飲柳光亭上與妓言半用英語妓曰郎君獨識英語奴輩不解是甚無趣願教奴以英語（一書生、学校に入り、頗る英語に通ず。一夕、柳光亭上に飲む。妓と言ふ、半ば英語を用ゆ。妓曰く、「郎君独り英語を識る。奴輩解せず。是れ甚だ趣きなし。願はくは奴に教ふるに英語を以てせよ」と。）

（大意：英語学校に入って英語に通じた一人の書生が柳橋の料亭で芸妓と酒を酌み交わしながら英語の知識を誇ったので、芸妓が客のみが英語を解していることに不快感をもち、自分にも英語を教えてくれと述べている。）

書生は、芸妓の朋輩数人の名前を英訳して芸妓に教えてやるのであるが、「美佐吉」「阿茶羅」は英訳できなかったのも、額の汗をぬぐいながら、次回に辞書を持ち込むことでその場を収めたのであった。柳北自身も英語に通じていたので、このような時代風俗を二編に盛り込んで、文明開化期の花街を笑いと風刺で描いているが、浅薄な文明開化を描く姿勢には文明批評の萌芽が見られる。

柳北の文明開化への痛烈な批判には、それを推進する維新政府への批判も込められていた。柳北が影響を受けたとされる余懷（1616-?）の『板橋雜記』は、明から清への政権の移行期に描かれたものであるが、余懷は柳北よりももっと激しい歴史の盛衰を体験し、友人の死や、金陵の名妓が清兵に強姦されることも傍観せざるを得なかったのである。『板橋雜記』の序には、「鼎革以来，時移物換。十年旧梦，依约扬州；一片欢场，鞠为茂草。」<sup>84</sup>（いまの清のご時世となりましてこのかた、時うつり物かわり、十年は昔の夢、揚州（隋の都）の繁華のさまも捨てがたいとは申せ、かつての歓楽の巷も草の茂るがまま）と、その変貌への悲哀が記されている。

『柳橋新誌』二編の自序において柳北は、以下のように述べている。

余曾著柳橋新誌 距今既十有二年 （中略）爾来 世移物換 柳橋遊趣一變 而新誌亦既腐

（余曾て柳橋新誌を著す。今を距る既に十有二年。（中略）爾来、世移り物換り、柳橋の遊誼一変して、新誌も亦既に腐す。）

（大意：自分が12年も前の安政6（1859）年に著した『柳橋新誌』初編は、その新しさが喜ばれていたが、その後時代が変わり柳橋の花街の趣も一変した。初編はもはや「新誌」と呼べるものではなく、内容も古びてしまった）

それは余懷への共感を、『柳橋新誌』初編創作時よりも柳北が深く味わったからで、前田愛はこれについて、次のように述べている。

『柳橋新誌』初編では見過ごされていた『板橋雜記』の真の主題—才子佳人の数奇な運命をかりて綴られた明清鼎革の悲史—は、幕府倒壊という歴史の悲劇を身を持って体験した柳北のころにあらためて深い感銘を喚びましたにちがいない。<sup>85</sup>

維新直後の柳北の著作「遷上隱士傳」においては「われ歴世鴻恩をうけし主君に、骸骨を乞ひ、病癰

の極、眞に天地間無用の人となれり、故に世間有用の事を為すを好まずと、それ或は然らむ、それ或は然らむ、」<sup>86</sup>と記されている。幕府滅亡後に將軍家への恩義から、新政府への出仕を辞退したことも、『柳橋新誌』二編の背景となっており、このような柳北の精神は、『板橋雜記』作者余懷の創作による旧政權への追慕という行為に影響を受けたからである。その一方で柳北は『柳橋新誌』二編で浅薄な文明開化を批判し、欧米では新聞に報道の自由があることを力説するなどしている。

『柳橋新誌』二編には文明開化期の産物としての、人力車と蒸汽車も登場している。人力車の発明は明治3（1870）年3月のことであった。<sup>87</sup>

似輦而非輦 似轎而非轎 乗者仰而踞 而非轎 推者俯而奔

（輦に似て輦にあらず。轎に似て轎にあらず。乗る者は仰いで踞り、推す者は俯して奔る）

（大意：輦に似ているが、輦ではなく、轎に似ているが、轎ではない乗り物があり、それに乗るものは足を延ばすことができない位に窮屈で、それを推す者は身を屈めて推している）

ここでは従来の駕籠を懐かしむ若い芸妓に対して、老妓がこの世の無常を説きながら、もはや蒸汽車の時代であることを語らせている。また一人の芸妓はその蒸汽車で天竺（インド）まで行くことができるのかと尋ねたり、さらにもう一人の芸妓は天の川の岸に行きたいと語っている。最後は天の川まで行こうという芸妓の話から一同が大笑いで終焉している。

柳北は幕末の頃から西洋文明に積極的な視線を向けていた。既に安政元年（1854）にペリーにより献上された蒸気機関車を柳北は見ている。その際に柳北は「火輪車歌」という長詩「槩艘画屋文炳彪（中略）輾轆声罷転輪休」（槩艘の画屋 文は炳彪（中略）輾轆の声罷み転輪休む）」<sup>88</sup>を詠み、後に『寒檠小稿』に収められている。しかしこの作品は、後年の『柳北詩鈔』には収録されていない。その要因として、次のような点が杉下元明によって指摘されている。

この詩が後年の『柳北詩鈔』に収められなかった理由は推測できる。あまりに描写が散文的であって、詩情に乏しいからであろう。ちなみに十一句の「江川子」は勿論、江川太郎左衛門であるが、こういう固有名詞を無造作に出すところなど、詩というよりもむしろ記録文を思わせる。<sup>89</sup>

『柳橋新誌』二編での「蒸汽車」についての記述には、柳北の西洋文明への関心の高さがうかがえる点は評価できる。しかしながら、芸妓たちも含めて当時の庶民には蒸汽車への機能についての科学的な知識はまだなかった。明治3（1870）年3月には新橋・横浜間の鉄道線路の測量が開始されたにすぎない状況で、海を越えた海外へは鉄道が敷けるわけではないのであるが、そこまでの認識が庶民には普及していなかったのである。英語の知識を振りかざした書生も含めて、西洋文明と花街との文化の層の違いという面からの「笑い」が一つの文明批評となって描かれている。この「笑い」は、才子佳人の恋を期待した『柳橋新誌』初編にはない「笑い」である。

また『柳橋新誌』二編の最後の部分で、柳北は自分自身の書いた文章が世の中の役にはたたないと自嘲的に述べてから、西洋の国々では新聞が自由な意見の発表の場であることを強調している。

泰西諸國所刻新聞紙者多是誹謗罵詈之言而君主不罪官吏不咎君子不怒小人不怨爭而讀之以博聞見以知警戒（泰西諸国刻する所の新聞紙は、多く是れ誹謗罵詈の言にして、君主罪せず、官吏咎めず。君子怒らず、小人怨みず。争つて之を読み、以て聞見を博め、以て警戒を知る。）

(大意：欧米では新聞が刊行されているが、その多くは政府への悪口雑言であるにもかかわらず、君主や政府はこれを罰していない。さらに人間的に器の大きい君子と呼べるような人もまた器の小さい小人も新聞を非難することもない。みんなが先を争って新聞を読み、それによって見聞を広めたり、また注意すべき点を知るのである。)

新聞の役割を説いて、新聞への評価を述べたことは、柳北が新聞によって当時の日本が近代的な国家への発展していくことを願っていたと考えられる。さらに、柳北は『柳橋新誌』二編は新聞紙と同様なものであると客人の口を借りて記した後に、愚か者を治療す薬はないと痛烈な笑い風刺で作品を完結している。

『柳橋新誌』初編では「笑い」が描かれていることは少ない。しかし『柳橋新誌』二編では文明批評的な視点で、風刺を伴う笑いが描かれている。羽鳥徹哉はそれについて、以下のように述べている。

「柳橋新誌二編」は、単に風俗の変遷を叙したような章もあるが、中心は、新時代に時を得て我物顔に振る舞い、卑俗な遊びにうつつをぬかすような者たちへの、そういう者たちの相手をする女たちをもひっくるめての風刺である、最後のそういうことを書き連ねる己の業の意識を主張しながら、また自嘲の思いをも加えたような書である、と言っている<sup>90</sup>。

漢文戯作という形式の中に、文明批評を自嘲的要素も含めて盛り込んでいることが『柳橋新誌』二編の大きな特徴と考えられる。

## 2 文学作品としての『柳橋新誌』二編

### (1) 『柳橋新誌』初編から三編までの経緯

漢文戯作『柳橋新誌』は三編から成り、柳橋の花街が舞台となった風俗誌としての要素が大きい作品でもある。流布本は初編、二編ともに半紙袋綴じ木版刷りの黄表紙和装本で、テキストとして使用した複製本もこの黄表紙本(初・二編)および三編序の初出である。

『柳橋新誌』二編は明治4(1871)年3月23日に成稿し、碧雲山人の序も明治4年であるので、すぐ刊行する予定であったと考えられるが、実際に刊行されたのは明治7(1874)年の2月であった。『柳橋新誌』初編は安政6(1859)年10月の脱稿で、万延元(1860)年の増補であるが、板行は二編より後の明治7年4月であって、伴鷗醉漁の序が明治2(1869)年4月である点から成立上の疑義もあるとされている。また題簽が「成島柳北著述 柳橋新誌 完」となっていて、内題が「柳橋新誌初編」とあり不統一であることから、初編執筆時には二編の予定がなかったとされている。『柳橋新誌』二編の冒頭で柳北は以下のように記している。

蓋王政一新 而柳橋亦一新 而未有好事者記其新也 聞頃日有儉刻我柳橋新誌者 而風流子弟多買讀之 余慨方此維新之日讀彼既腐之書也 作柳橋新誌二編。

(蓋し王政一新して、柳橋亦一新す。而して未だ好事の者の其の新を記するあらず。聞く、頃日、我が柳橋新誌を儉み刻する者あり。而して風流子弟、多く買ひて之を読むと。余、此の維新の日の方つて、彼の既腐の書を読むを慨く。柳橋新誌二編を作る。)

(大意：確かに王政復古の後の柳橋の花街は一変した。しかしながら柳橋の花街を愛する者の中で、未だその変貌を記するものは出ていない。また私が以前創作した『柳橋新誌』の初編の偽板が勝手

に刻されて、風流を愛する人々がこれを読んでいることも嘆かわしいので、そのような要因から『柳橋新誌』二編を創作した。)

維新後に柳北は柳橋の変遷をつぶさに見聞し、初編では描けなかった世界が新たにあることを痛感して二編を著したと考えられる。また「柳北は、この偽板の横行をふせぐために、『二編』の上梓をみるとすぐ、あらたに『初編』を刊行することを考へた。」<sup>91</sup>と、孫の大島隆一は語っている。

『柳橋新誌』は初編、二編ともに発行書肆は共に京橋銀座三丁目奎章閣山城屋政吉である。服部撫松の『東京新繁昌記』五冊と抱き合わせで発売されたが、明治9(1886)年2月発売差止めの処分を受けたので、三編は草稿段階で散佚したとされ、序が残っているが公刊されることはなかった。『柳橋新誌』三編は、明治10(1887)年1月4日に「何有仙史著すところの『柳橋新誌三編序』が『花月新誌』第一号に掲載されたが、その内容は公開されることがなかった。それについては、『柳北全集』<sup>92</sup>の「柳北先生略年譜」の明治9年の項で、「柳橋新誌三編成。官不許公之。先生大詰文部大輔田中不二麿。田中氏裁書以答。」(柳橋新誌三編成る。官、之を公にするを許さず。先生、大いに文部大輔田中不二麿を詰む。田中氏、書を裁して以て答ふ。)と、記されている。三編の内容は伝わらないが、田中不二麿(弘化2(1845)年-明治42(1909)年)<sup>93</sup>が刊行を許可しなかった所から、「第二編より揶揄は更に激越を加へ、且つ措辞にきはどい処があったであらう。」<sup>94</sup>と、考えられている。

## (2)『柳橋新誌』二編の構成

『柳橋新誌』は初編から二編へと書き継がれたのであるが、二編には初編よりも時代への風刺が込められている。『板橋雑記』と『柳橋新誌』の初編・二編の構成を表にして比較すると以下のようなものである。

表Ⅱ-2 『板橋雑記』と『柳橋新誌』の初編・二編の構成

『板橋雑記』雅遊編	『柳橋新誌』初編	『柳橋新誌』二編
1 金陵帝王建都之地/金陵の概観	1 柳橋の概観	1 柳橋の概観
2 旧院人称曲中(妓女の呼称)	2 船宿 3 酒楼案内	2 船宿 3 酒楼案内
3 妓家各分門戸(遊興の実際)	4 転妓 5 妓女の呼称	4 転妓 5 維新後の遊興
4 長板橋(風物)	11 柳橋の四季	9 維新後の新聞
5 秦淮燈船(行事)		
6 教坊梨園(演劇)		
7 裾履少年(風俗)	7 箱屋の風俗	
8 南曲衣裳装束(衣裳)	8 衣裳	
9 曲中女郎(妓家の内情)	6 妓家の内情	6 妓家の内情
10 旧院与貢院(書生の遊興)	9 風流子弟に示す	7 書生の遊興
11 曲中市肆(飲食)	1 柳橋の概観 3 酒楼案内	1 柳橋の概観 3 酒楼案内
12 虞山銭牧斎		
麗品編	10 妓女の連名	8 妓女の連名
佚事編		
附録		

(前田愛.『板橋雑記』と『柳橋新誌』.前田愛著作集 1.筑摩書房,1989. p. 492 掲載の表を参照して筆者



作成)

『柳橋新誌』初編と二編では最初の概観や酒樓案内の部分など似た構成をとっているが、明治維新後の遊興の実際、文明開化の下での客と妓のやりとり等、初編とは異なる部分が付加され、また妓の呼称や箱屋や衣装の部分は削られている。また明治維新後の文明開化の下での書生の遊興や、新聞の紹介など維新後の風俗や文化が二編中に占める割合が大きいことが二編の構成の特徴である。また初編では中国文学の影響下での柳北の風雅な恋への探求が作品の中心であって、客の登場が少なかった。しかし二編では芸妓と客のやりとりが作品の中心となっていて、維新政府の高官や旧大名が芸妓と対等な立場の人間として描かれ、時代風俗への風刺が作者の意図となっている。

### (3)『柳橋新誌』二編で描かれた柳橋

『柳橋新誌』の初編と二編では構成の一部に共通項があるが、その描かれた世界は異なった部分が大である。塩田良平は、以下のように初編と二編の内容の相違を捉えている。

初編は柳橋の讃歌であり二編はその挽歌である。その妓が淡粧で趣あり、その意気爽にして媚びざるところ深川の余風ありとし、妓を讃へその繁栄を悉さに叙述する辺りは通士の倂があるが、これに反して二編の方は、往年の柳橋の美風地に堕ち客も妓も墮落しきったことを痛罵し、意気と野暮とを対比し、その背後に鋭い文明批評を潜めてゐる。<sup>95</sup>

#### ① 概観

維新後の柳橋の花街は金銭的には繁栄をしていた。柳北は一応維新政府の力を認めて、料亭の繁昌と構えの立派になったことを最初に記し、それについては裏側があることを『柳橋新誌』二編の中で批判している。

人人樂王化之美而不為後世子孫之計獲一錢則食獲一楮則飲故也。

(人々、王化の美を楽しんで、後世子孫の計を為さず、一錢を獲れば則ち食ひ、一楮獲れば則ち飲む故なり。)

(大意：人々は天皇親政の徳化のめでたさを楽しみ後世のための計画などはしない。一錢を得ただけで料理を食ひ、一枚の太政官紙幣を得ただけで酒を飲んでいる。)

ここで語られている料亭での遊興には風雅な遊びというよりも、快樂と酒へのあくなき追求であることが風刺を込めて描かれているのである。その中で往年の柳橋の倂を伝える店は、巴屋であるとしている。巴屋の経営者には中国の春秋時代の宦官で料理の名人であった易牙のようであるとしている。有力な客には新政府の高官や旧藩主がおり、料亭の建物も立派になった。そのような状況の下で、柳北は維新後の柳橋の花街の裏側を見据えていた。

余謂 方今權貴 皆孟嘗 而客皆馮驩歟 何其爭求食之美也 而柳橋諸樓 不特春申平原之徒 珠履寶劍而至 寔使齊楚燕趙之主亦親枉駕於其門 噫亦盛哉。

余謂ふに、方今の權貴、皆孟嘗にして、客皆馮驩か。何ぞ其争つて食の美を求むるや。而して柳橋の諸樓、特に春申・平原の徒、珠履宝劍にして至るのみならず、寔に齊楚燕趙の主をして亦親ら駕を其の門に枉げしむ 噫、亦盛んなる哉。

(大意：維新の高官たちは斉の孟嘗君のように客好きであるのか、また客は孟嘗君の客となった馮驩のように贅沢なのであろうか、それは疑問である。馮驩は孟嘗君の所で出された食事に文句を言ったこともあったが。柳橋の楼に来る政府高官(客)は孟嘗君の故事と同様なくらい食通であらうか)

古代中国の例を持ち出し、皮肉な視線で新政府側への批判を込めた記述をしている。そして維新政府の高官や、その高官の旧主である幕藩体制下の旧藩主も共に柳橋の花街で遊んでいる状況を語り、権力者たちによる華やかな遊びの場が現今の柳橋の花街であることを指摘している。

## ② 船宿・酒楼

船宿にも変遷があつて、代替わりなどが盛んに行われた。また酒肴や舟の値段も高くなり、十年前の四から五倍となった。しかしそれは金貨の乱発で金貨の質が落ち、紙幣がこれに替わったからでもあった。また船宿・酒楼の数は殆ど変化しないのに、芸妓の数は昔の倍に近い。しかし船宿・酒楼が芸妓を呼ぶ回数は以前の帳簿と照合しても変わらないという事実があった。柳北はそれについて、芸妓の質が悪くなったことを指摘している。

柳橋往日之妓無姿色則有技藝無技藝則有才識三者無一而與婢子同致者甚希矣

(柳橋往日の妓姿色なければ則ち技芸あり。技芸なければ則ち才識あり。三の者一なく、婢子と致を同じうする者甚だ希なり。)

(大意：かつての柳橋の芸妓は、容色が芳しくなければ技芸に優れ、技芸に優れなければ知識教養があった。容色、技芸、教養の三つのうちの一つも長所のない下女と同様な水準の低い芸妓は希であった。)

ここで、柳北は「姿なく芸なく才なく」という下女と同様な水準の低い芸者が柳橋の花街では希であった、幕末の柳橋を懐かしんでいるが、それは柳橋の妓の水準が低くなったと述べたかったのである。さらに柳北は、維新後の柳橋について、新政府の高官から多くの金銭をむさぼろうと、妓の数が倍増しても質の悪い妓には客の呼び出しもないという状態があり、船宿や酒楼にそれ程の利益もないことを記している。維新後の妓の増加により、花街がますます金銭本位の遊びの場となったことへの失望感も込められている。

## ③ 客と妓の実態

初編ではあまり描かれなかった客と妓の交際や座敷でのやり取りが生々しく描かれている。その中で柳北が古の才子佳人の恋を思わせるものとして評価したのが、旧土佐藩主の山内豊信(容堂)(文政10(1827)年-明治5(1872)年)と寵愛した妓の交流であった。容堂は大政奉還に功績があり、維新後は議定に任じられたが、病のため官を辞し、詩文に親しむ生活で、「偶成」<sup>96</sup>という漢詩を遺している。

水樓歌罷燭光微。	水樓歌罷んで燭光微なり。
一隊紅粧帶醉歸。	一隊の紅粧醉を帯びて歸る。
纖手煩張蛇目傘。	纖手張るを煩はす蛇目傘。
二州橋畔雨霏霏。	二州橋畔雨霏霏たり。

ここではまず、水辺の高殿ではともしびの光も微かとなって、美しく装った女たちが酒を運びながら帰っていくという様子が語られている。さらに美しい女たちの細い手には蛇の目傘があり、両国橋のほとりでは雨がはらはらと降っていると詠まれている。このような詩を読んだ容堂は、国許への帰参のために芸妓とのしばしの別れを惜しんで、情愛の籠った手紙を送った。その手紙を柳北は読ませてもらったのであった。そのことを、柳北は「卿之私語每往来于懷綿々之恨不知有絶期」（卿の私語、毎に懷に往来す。綿々の恨み、絶ゆる期あるを知らず。）と記している。ここでは容堂が芸妓の手紙を常に携帯し、芸妓と別れる悲しみが「長恨歌」の中の恨みと同様に絶えることはないという意味が述べられている。また「綿々之恨」は「長恨歌」の以下の部分を踏まえている。

七月七日長生殿、夜半無人私語時..在天願作比翼鳥，在地願爲連理枝。天長地久有時盡，此恨綿綿無絶期！（「長恨歌」）<sup>97</sup>

（「七月七日 長生殿、夜半 人無く 私語の時、『天に在っては願わくは比翼の鳥と作らん、地に在っては願わくは連理の枝と為らん』と。天は長く地は久しきも 時有ってかて尽きん、此の恨みは綿綿として尽くる期無からん」）<sup>98</sup>

（大意）「あの七月七日、長生殿の人々が寝静まった夜半、ささめごとを交したとき、陛下は誓ってくださいましたね。『天上に在っては翼をならべた鳥になりたい。地上に在っては一つに合わさった枝になりたいものだね』と。ああ、天は長く地は久しいと申しまして、いつかは果てる日がくるでしょう。でもわたくしたちのこの恋は綿々として尽きる時はございません。」

柳北は中国古典を踏まえた格調高い韻文を旧藩主である容堂が芸妓に送り、また芸妓にも文芸の素養があったという点に感動したのである。そこには当時の柳橋の芸妓の優れた教養の一面もうかがえる。

しかし初編よりもさらに現実的な妓の姿もある。妓が身を売めることは明治期に入ってますます盛んとなった。また官僚制度も整ったので、より高位の客を求める風潮もおこったが、しかしその一方で真の恋人を求める妓もいたのであった。柳北は妓の以下の言葉を記している。

妾常謂真情要情假情要利若要利則宜擇勅任以上（妾常に謂ふ、真情は情を要め、仮情は利を要む。若し利を要む。則ち宜しく勅任以上を択むべし。）

真の恋人には愛情を求めるが、金銭で結びつく仮の恋人に対しては金銭を求めるので、四位以上の官吏を選ぶのだと、ある妓はその真情を明かしている。このような妓の心情を背景とする維新後の花街は、柳北が『柳橋新誌』初編に込めた柳橋の花街が才子佳人の出会いの場であってほしいとする理想とは全く異なる、人間の金銭欲だけが支配する世界であった。

#### ④ 文明開化の下での柳北の花街観

初編では柳橋での才子佳人の出会いを期待していた柳北であったが、二編では時代の変遷が前提となって、花街の移り変わりが述べられている。柳北は柳河春三と文久二年に柳橋二十四番花信評を作った。これは、「柳橋の芸者四十八人を二人ずつ二十四組に分け、各自を花になぞらえて評したものであろう。」<sup>99</sup>とされている。その中で現在も活躍しているのは、阿幸、菊寿、政吉（今は阿郁）、阿蓮の四人で、阿清、千吉、久吉の三人は故人となっていた。その状況を柳北は「噫嘻十年之久一浮一沈一枯一栄豈獨紅裙而已也哉」（噫嘻、十年の久しき、一浮一沈、一枯一栄、豈に独り紅裙のみまらんや）と、述

べている。この記述の中で柳北は、十年の月日は長いもので、人生の浮沈は芸妓の世界だけではないとしている。芸妓の運命の変遷に、自己の運命の変遷から共感を示しているのである。

花街の賑わいを賞賛した初編と異なり、花街の担い手である妓の運命の変遷に言及したことは、明治維新という大きな時代の転機があったからである。柳橋の妓が芸よりも身を売る風潮が維新後さかんとなったが、そんな中で幕臣の娘から妓となった妓が、金銭的に潤うために身を売る話を断り、ひたすら芸を売ることだけで生きようとする姿も描かれている。その妓はまず「妾雖委身于淤泥固不願與娼婦同業」（妾、身を淤泥に委つと雖も、固より娼婦と業を同じくするを願はず。）と、自身の決意を述べ、さらに自分の素姓については「妾父元武弁食禄五百父没而兄嗣」（妾が父元武弁。食禄五百。父没して兄嗣ぐ）と述べた上で、維新政府への抵抗のための戦いで兄が戦死した後に、母を養うために妓となったことを語っている。

人生の浮沈を描きながら、また一方では柳北も芸妓への考え方を変化させている。初編では、小妓を評価した柳北ではあるが、二編で二十歳を過ぎた成人の芸妓の方が共に語ることができてよいと述べている。柳北はまず袁枚の「硯を守る」の詩を踏まえて、「袁子才守硯詩云摩挲不积相愛憐劇於十五真嬋娟」（袁子才、「硯を守る」の詩に云ふ、「摩挲して积てず相愛憐す。十五の真嬋娟より劇だし」と、述べている。これは袁枚が詩の中で、硯をなでさすっていとおしむことは十五歳の美しい少女をいとおしむことよりももっと刺激的なものだと述べていることを引用している。

さらに柳北は『柳橋新誌』二編の中で、「愛憐」の二字は二十歳以下の女性に当てはめることとされているが、遊客が心から遊びの境地に到達することができるのは、二十歳以上の男女の情を弁えた妓がよいことを指摘している。袁枚は柳北が影響を受けた清代の文人である。『柳橋新誌』二編の中で一部が引用されているのは、七言古詩「董暢庵守硯図」（随園詩鈔二）である。性霊派詩人袁枚については後に述べるが、時代の流れの中で、柳北自身の妓に求めるものが変質していったと考えられる。

### 3 『柳橋新誌』二編と中国文学

『柳橋新誌』二編は江戸期の戯作の影響もあるが、柳北の培ってきた中国の散文や詩文の素養が背景にあり、その精神世界を支えている。

#### （1）『板橋雜記』の影響

『柳橋新誌』二編には初編よりも『板橋雜記』の引用は少ないが、幕府崩壊後の失意期を経た柳北は、作者余懷の真情に共感を表している。秦淮の地のことは『柳橋新誌』初編の序には書かれていないが、二編では題詞の中で「秦淮情事揚州説也入新篇添幾條」（柳橋新誌・伊都満底草 p. 80）（秦淮の情事 揚州の説 也た新篇に入つて幾条をか添ふ）と記されている。これは秦淮のほとり、金陵の花街を描いた『板橋雜記』に描かれる客と遊女との交流や、揚州の花街で遊んでいた杜牧のエピソードにも似たような話が盛り込まれるであろうと、柳北の知人である菊池三溪（文政2（1819）年-明治24（1891）年）が記したものである。

また、柳北自身は『柳橋新誌』二編の終りに近い部分で以下の自作の漢詩<sup>100</sup>を挿入している。

絃歌惱殺幾多人。	絃歌惱殺す 幾多の人
此地繁華世絶倫。	此の地の繁華 世に絶倫す
簾影横棲烟暖々。	簾影（れんえい） 棲に横たはつて煙暖々（あいあい）
櫓聲近岸水粼々。	櫓聲 岸に近づいて 水粼々（りんりん）

梅薫羅袖梅川夕。      梅は羅袖（らしう）に薫ず   梅川の夕  
柳映金絃柳屋春。      柳は金絃に映ず   柳屋の春  
姉妹新粧爭嫵媚。      姉妹新粧（しんしやう）   嫵媚（ぶび）を争ふ  
風流誰學李湘眞。      風流誰か学ばん   李湘眞（りしやうしん）

柳北はまず、この地の花街の音曲は多くの人々を悩殺してきたので、繁栄は世に比類がないとし、高殿にめぐらした簾には霞がおぼろにかかり、船が岸に近づくと水は透き通り、梅の香りは薄絹の袖に移り、料亭梅川の夕は趣があると述べている。次に柳の糸は三味線の糸に照り映え、柳屋での春を味わうことも情緒があるとしている。そして新しく装いをこらした大妓、小妓が争うように媚を含んで笑うが、これらの芸妓の中で、誰が金陵の名妓李十娘のような風流な遊び心を学んで遊びにたけた芸妓であろうかという感慨を詠んでいる。柳北はこの漢詩を詠んだ頃には、柳橋が秦淮の地のような花街になってほしいという願いをもっていたのであった。柳北は秦淮の地での才子佳人の出会いのような恋の情趣を柳橋の花街で求めていた。

しかし『板橋雜記』で描かれた世界も、柳北が描いた『柳橋新誌』二編の柳橋の花街と同様に時代の激変で変容せざるを得なかったのである。『板橋雜記』の時代背景は明から清への時代の過渡期であった。明の滅亡は1644年であり、陝西省に起こった反乱軍の首謀者李自成が皇帝を称していた。一方以前から朝鮮、内モンゴルを攻略し、従属させていた満州族の清は李自成一を自殺させて、漢人の支配に乗り出したのである。さらにその支配は正当な政権であることを、漢人に以下のように浸透させたのであった。

清朝は中国支配にのりだした当初から「李自成一を倒し、明朝の仇を打った」正統な王朝であることを強調した。<sup>101</sup>

明末には個人の内面を独白する文芸があり、滅亡後にも社会の裏側に明の遺民の文化が存続していた。清朝の統治体制が整い、その文化統制の機運も強力に動きはじめた18世紀の中ごろまでは、明の遺民としてみずからを持した学者や文人たちが、野にあってひそかに前代の史実を綴ったり、故人の思い出や交友との対話など、ささやかな同士のグループの生活記録をとどめるものがあつた。このような状況下で、『板橋雜記』の作者余懷の『金陵覽古詩』は林古度と親交のあつた王士禎（1634-1711）によって評価されたのであつた。

日本の明治維新は、天皇を戴く西南諸藩により進展させられたが、その権威移行の正統性は次のように根拠づけられている。

幕府=将軍に対抗するものが現われたとすれば、彼はまず幕府の独占を破って朝廷に接しようとするであろう。朝廷は幕藩体制の法源であるからである。<sup>102</sup>

従って、明治維新もまた天皇を背景とした正統な政権として捉えられていたのであつた。正統化された政権の移行によって、「無用の人」となった柳北は失意のどん底にあつた。そこに明朝への思いに浸っていた『板橋雜記』の作者である余懷への深い共感があつたと考えられる。余懷も清の体制下で命を保ちながら文芸活動をしていたように、柳北も後に言論人としての道を歩んだのであつた。

しかし日本の明治維新においては旧幕臣の維新政府への出仕もみられて、満州族の漢民族支配とは異なる状況もあつた。余懷は柳北よりももっと激しい歴史の盛衰を体験し、友人たちの死や、金陵の名妓

が清の兵に強姦されることも傍観せざるを得なかったのである。

『板橋雜記』の跋には、「鼎革以来，時移物換。十年旧梦，依约扬州；一片欢场，鞠为茂草。」<sup>103</sup> という記述がある。その大意は以下のようなものである。

いまの清のご時世となりましてこのかた、時うつり物かわり、十年は昔の夢、揚州（隋の都）の繁華のさまも捨てがたいとは申せ、かつての歡樂の巷も草の茂がまま。<sup>104</sup>

『柳橋新誌』二編の自序において柳北が「余曾著柳橋新誌距今既十有二年（中略）爾来世移物換柳橋遊趣一變而新誌亦既腐」（「余曾て柳橋新誌を著はす。今を距る既に十有二年。（中略）爾来、世移り物換り、柳橋の遊趣一變して、新誌も亦既に腐す。」）と余懷の跋と同様な内容を語っているのは、余懷への共感を『柳橋新誌』初編創作時よりも深く味わったからである。前田愛はこれについて、次のように述べている。

『柳橋新誌』初編では見過ごされていた『板橋雜記』の真の主題一才子佳人の数奇な運命をかりて綴られた明清鼎革の悲史一は、幕府倒壊という歴史の悲劇を身を持って体験した柳北の心にあらためて深い感銘を喚びさましたにちがいない。<sup>105</sup>

それについては、明治期に入ってから柳北自身の著作「瀟上隱士傳」において次のように語られている。

蓋隱士の言に曰、われ歴世鴻恩をうけし主君に、骸骨を乞ひ、病懶の極、眞に天地無用の人となれり、故に世間有用の事を爲すを好まずと、それ或は然らん、それ或は然らん、明治元年秋の末 東京 野史氏しるす<sup>106</sup>

幕府滅亡後にその主君への恩義から、新政府への出仕を辞退したことも、『柳橋新誌』二編の背景となっていると考えられる。このような柳北の精神は、『板橋雜記』作者余懷の創作による旧政権への追慕という行為に影響を受けたことが明白である。

余懷が妓の王月を称えた詩として、「月中仙子花中王，第一姮娥第一香」<sup>107</sup>（月中の仙子 花中の王 第一の嫦娥 第一の香）<sup>108</sup> と詠じたのと同様に柳北も故人となった柳橋の妓阿清を追慕する詩を詠んでいる。

舊情欲説聴人稀 舊情 説かんと欲して 聴く人稀なり  
涙滴當年舊舞衣 涙は滴る 當年の舊舞衣  
借問嫦娥何處去 借問す 嫦娥 何れの處にか去る  
夢魂長向月中飛 夢魂 長く月中に向つて飛ぶ<sup>109</sup>

柳北はまず、過去の感情を思いだして語ろうとしても聞く人が稀になってしまった状況を述べている。次に妓阿清が身につけて舞った着物に涙する現在の状況を述べ、嫦娥のような阿清は一体どこに行ってしまったのだろうか。夢を見ている私の魂は嫦娥の住む月中に永遠に飛び続けていると、悲哀の心情を詠んでいる。

ここで起句の「舊情」は、柳北が明治3（1870）年の新春に柳橋の名妓お鳥（玉鸞）と語りあい、「柏樓雪夜與玉鸞飲（柏樓に雪夜に玉鸞と飲む）」（RS3009）（『柳北詩鈔』卷三）という漢詩を詠んだ際にも承句の「且剔寒燈話舊情」に見られる語句である。また晩唐の李商隱の漢詩「常娥」中には、「常娥應侮偷靈藥」（常娥は応に靈藥を偷みしを侮ゆるなるべし）<sup>110</sup>の用例がある。

幕府の滅亡を体験した柳北は、維新政府や文明開化への批判と同時に過去の柳橋の情緒を追懐し、悲哀を込めて謳いあげているのである。

## （2）陶淵明

柳北の創作の基底となっている中国文学の素養は『板橋雜記』だけではない。『柳橋新誌』二編の序で記されている「戊辰變後仙史致仕而隱于市放逸自汗」（戊辰の変後、仙史致仕して市に隠れ、放逸自ら汚す）とあるのは、柳北が慶応4（1868）年4月に幕府の役職を辞して向島須崎村松菊荘に隠棲し、市井に隠れて気ままに暮らしていたことが記されている。隠宅の松菊荘とは晋の陶淵明（365-427）の「歸去來兮辭」に拠るものである。「三迳就荒 松菊犹存」<sup>111</sup>と記されている。これは陶淵明が「その任地の潯陽道彭沢県の令を辞して家に帰る時、その決意を述べた辞」<sup>112</sup>の中で、故郷の家の庭の三つの小径には雑草が生い茂っていても、松と菊の花はまだ枯れずに残っているという情景を詠んだものである。405年に41歳の淵明は官を辞して後に、晋の滅亡を体験するが再び出仕することなく、表面上は田園生活の中でその生涯を終えたのであった。しかし実際には権力の中核にいた人物たちとの関係も深いものがあつた。淵明が三十歳代の後半には晋の政局は不安定なものとなり、軍閥による権力争いが絶えなかった。その中の一人であつた劉裕（後の宋の武帝、在位420-22）は、同僚を次々に暗殺してついに晋朝を倒して、南北朝時代の宋王朝を樹立するが、淵明は出仕を辞していた。

隠遁者淵明は、権力にとって無害な、無視できる存在ではなかつた。たびたびの、しかも地方最高の権力者がわざわざ出向いての出仕要請が、そのことを示している。淵明はこれを拒みつづけた。そこから権力との間に、一種の緊張関係が生れたにちがいない。<sup>113</sup>

柳北が維新政府への出仕を辞したことは、隠遁者淵明の姿勢に学んだものがあると考えられるであろう。淵明の生涯に柳北がどの程度共感していたかは不明であるが、前掲の「秋懷十首」で、第一句の「北窓高枕誦陶詩」（北窓に枕を高くして陶詩を誦す）には「与子儼等疏」（子の儼等に与うる疏）を、最後の句の「琴書消日不囲棋」（琴書に日を消して棋を囲まず）は「歸去來兮辭」中の「樂琴書以消憂」を踏まえたことは、その人生への共感もあつたと考えられる。「与子儼等疏」は、50歳を過ぎた淵明が、病床に臥した後に、五人の子の未来と父親としての期待をこめて書き残した文章である。<sup>114</sup>

常言五六月中、北窗下臥、遇涼風暫至、自謂是羲皇上人。意淺識空、謂斯言可保、日月遂往、机巧好疏。（常に言ふ、五六月中、北窗の下に臥し、涼風の暫に至るに遇へば、自ら謂へらく、是れ羲皇上の人なりと。意淺く、識空けれど、謂へらく、斯の言保つべしと、日月遂に往き、机巧とは好に疏し）

淵明はまず、五六月の北向きの窓の下で寝転がっていると涼しい風が吹いてくると述べ、古代の三皇の一人であつた「羲皇」の御世の人によって、志は低くとも言葉の境地と保ちたいと願ってきたとしている。そして俗世とは縁を絶って久しい、巧みなかけひきとも無縁になったと詠んでいる。

失意期の柳北が自分自身の人生に思いをはせていた時、念頭においていた中国の文人の一人が陶淵明であった。陶淵明の俗世とまず縁を絶つという隠遁の姿勢に、柳北は関心を払いながら、後にはジャーナリストへの転身という人生を辿ることとなったのである。維新前後の混乱期の武士の忠誠心について、丸山眞男は以下のように述べている。

伝統的生活関係の動揺と激変によって、自我がこれまで同一化していた集団ないしは価値への帰属感が失われるとき、そこには当然痛切な疎外意識が発生する。この疎外意識がきっかけとなって、反逆が、または既成の忠誠対象の転移が、行なわれる。といっても帰属感の減退と疎外意識とが自動的にそうした行動様式を生むわけではない。<sup>115</sup>

柳北は既に幕末に不遇な時代をおくり、帰属感の減退も疎外意識の発生も体験していた。丸山眞男の論考を踏まえると、柳北の帰属感の喪失や疎外意識は幕末から明治維新にかけて次第に希薄なものとなったことも考えられる。柳北は「航薇日記」で記されたように国内の旅行から江戸以外の日本を知り、後には「航西日乗」で記されたように海外体験から近代的統一国家の必要性を知り、自己の進路を決定していったのであった。

### （３）袁枚

柳北の散文は、乾隆の三大家袁枚（1716-97）（袁随（隨）園）の影響を受けたとされてきた。『柳橋新誌』二編には、「袁子才守硯詩云摩挲不釋相愛憐劇於十五真嬋娟」（「袁子才、「硯を守る」の詩に云ふ、「摩挲して積てず相愛憐す。十五の真嬋娟より劇だし」）という記述が見られる。袁枚の七言古詩「董暢庵〈守硯圖〉」の中の「摩挲不釋相愛憐 劇於十五真嬋娟」（摩挲して積てず相愛憐す。十五の真嬋娟よりも劇し。）を背景としたものである。袁枚は硯を撫ですることは、十五歳の少女を愛撫することよりも甚だしいという境地を詠んでいるのである。袁枚の周囲には多くの女弟子がおり、また多くの愛人もいた。官能的表現の中に人間性の感じられる漢詩であり、袁枚の唱えた性霊説を背景としている。袁枚の作品は江戸時代に日本でも刊行されている。『隨園詩鈔』六卷（清 袁隨園撰 市河世寧編 市河三亥校 文化十三（1816）年刊 江戸 須賀屋伊八）や『隨園文鈔』三卷（清 袁隨園撰 田中恭編 安政四（1857）年刊 江戸 田中氏從吾軒）<sup>116</sup>、また京で出された『隨園絶句抄』十卷（清 袁隨園撰 上田元冲編 弘化四（1847）年刊 京都 林芳兵衛等）<sup>117</sup>に柳北が親しんでいたことが考えられる。

袁枚は清代の文人であり、1739年には進士に及第したが、38歳で官を辞し、南京城西の小倉山に邸宅（隨園）を構えて、在野の詩人として活躍をした。彼は復古主義的風潮に反対をして性霊説において、「性情の流露するままに自由に歌うべきであり、古人や技巧にとらわれてはならない」<sup>118</sup>ことを強調した。袁枚の性霊説の影響は日本の江戸時代後期の詩人たちにも影響を与えていた。性霊派と古文辞派の折衷派が多く、江戸時代後記の儒者である市河寛斎（世寧）（寛延2（1749）年-文政3（1820）年）は、『隨園詩鈔』六卷を編纂した。古文辞派が唐詩を重視するのに対して、宋学を基盤とする折衷派は宋詩も評価していた。

また袁枚は散文では怪異の談を創作し、それらをまとめたものが『子不語』である。その中には、「人虾」という作品があり、清朝の初期の明の遺臣が明に殉じたいと安楽に死ぬ方法を考えて、魏の公子信陵君のまねをして酒色の溺れて死のうとした。しかしすぐには死ねないで、体が蝦のように曲がって八十四歳でようやく死ぬことができたという話がある。忠誠心が滑稽化されていて、近代人の感性が感じられる作品である。柳北が幕府滅亡後に死を選ぶことなく、柳橋での遊興を幕末ほどではないが続けて



いた背景には、旧幕時代を偲びつつも、人間として生きようという意欲をもっていたと考えられる。

柳北が『子不語』をどの程度読んでいたかは不明であるが、袁枚の性霊説から人間性重視の文学観を吸収したことで、『柳橋新誌』の特に二編での芸妓と客との金銭等の欲望のぶつかり合いを描いたものと考えられる。一方では『板橋雜記』余懷の精神に学びながら、袁枚の人間性を自由に描く方法も吸収していたのである。「人蝦」では、「国初有前明逸老某 欲殉难 而不肯死于刀绳水火。」<sup>119</sup> と、遺臣が死ぬ方法をあれこれ考えたが皆気が進まないで、結局安楽な死に方を選ぶ経緯が描かれている。

安楽に死ぬる方法をとりたいと考え、それには信陵君のようにうまい酒と女で健康を害するのが一番だと、真似することにして、妾をたくさんかかえ、一日中淫乱にふけた。（「人蝦」・『子不語』）

120

『子不語』の中には、鬼が登場する話もある。ここでは鬼は登場しないので、奇怪な話としての要素を持った作品と考えられる。戦国時代の魏の公子信陵君が父から不信の目で見られるようになったので、屋敷に籠って酒色におぼれて病死したことを踏まえた小話である。『子不語』には次のような背景があった。

奇異な見聞を集めたもので、題名は『論語』の中の「子不語怪力乱神（子、怪力乱神を語らず）」にとっている。後、元代の人に同じ題名の著書があることを知り、『新齊諧（しんせいはい）』と改めた。<sup>121</sup>

忠誠心にこだわった人間の悲喜劇がこの「人蝦」という作品に描きだされているが、柳北の『柳橋新誌』二編には次のようなことが記されている。

拒今僅七八年而西坡老病流離于北地當時紅裾皆凋落如晨星余亦託餘生於風塵中（今を距る僅かに七八年にして、西坡は老病、北地に流離し、当時の紅裾、皆凋落して晨星の如し。余も亦余生を風塵中に託す。）

柳北は知人の西坡（医師）や七・八年前に柳橋にいた芸妓たちの運命の転変を嘆きながら、風塵の中での「生」を送るしかない自己の運命への嘆きを語っている。しかし柳北はただ嘆いただけではなかった。柳北の社会への視線を広げるきっかけとなったのが、『柳橋新誌』二編の創作であった。

#### （４）中国白話文学の語彙の影響

##### ①明代白話小説の影響

『柳橋新誌』初編にもそのスタイルの中に左戯訓や俗語の傍訓が存在したが、二編ではその傾向がさらに強まり、「傍訓つきの戯体漢文で、花街を舞台とする短編小説的な挿話をつらねた」<sup>122</sup> ことが特徴である。「頃年風習一變妓等産児與人家一般。」（頃年、風習一変し、妓等児を産むこと、人家と一般。）と、芸妓の出産を記しているが、「人家一般」の部分には左側に「セケンナミ」と戯訓が付されている。「人家」も「一般」も明代の白話小説『醒世恒言』（三）（「古今奇観」巻七）の「売油郎独占花魁」の翻訳である『通俗赤縄奇縁』の「熟字一覧」<sup>123</sup> に見られる付訓された熟語である。「人家」（ジンカ／いえ）と「一般」（一パン／一よう・おなじく）の二つが組み合わせられたものと考えられる。『柳橋新誌』

二編のこの場合の「人家」（ジンカ／いえ）は、家庭の意を表していて、その用例には、「明 唐順之《凤阳等处灾伤疏》“且江北人家素無積蓄。”」<sup>124</sup> 等がある。

『通俗赤縄奇縁』は江戸時代の中期、十八世紀の中葉には日本国内で流布していた。馮夢龍(1574-1646)の編著で、「三言」の一つである『醒世恒言』<sup>125</sup> は清代には禁書であったので、古い版は日本にしかないのである。また『通俗赤縄奇縁』の翻訳は「口木子」（江戸時代中期の儒者・西田維則）によってされたといわれている。

「今古奇観」等所収の「賣油郎獨占花魁」を譯した「通俗赤縄奇縁」四卷二冊或は四冊がある。宝暦十一年京都錢屋三郎兵衛板行（或は風月堂莊左門板）。<sup>126</sup>

このような明代白話小説が紹介されて、その影響は徐々に日本の文芸に影響を与えていったが、これらの白話小説について、大木康は以下のように述べている。

文章表記の点から見ると、六朝志怪、唐代伝奇はともに文言、すなわち文語で書かれている。それに対して明清の白話小説は、そもそも呼び名がそうになっているように、白話、すなわち口語で書かれている。日本でも多くの読者をもつ『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』の「四大奇書」、そして馮夢龍の「三言」などが、この白話小説というジャンルに属する作品である。<sup>127</sup>

明代白話小説の翻案史において司馬芝叟の読本「売油郎（あぶらうり）」、落語「紺屋高尾」など多方面に及んでいる。しかし「通俗赤縄奇縁」の翻案が「紺屋高尾」であるという根拠については、「現在に至っても明瞭な証をえない」<sup>128</sup>とされている。

## ②「一般」の用例

『柳橋新誌』初編と二編に共通して見られる「一般」という言葉に着目し、以下に述べる。「一般」については、『江戸明治唐和用例辞典』において、「同じである。同様である。」<sup>129</sup>とその意味が説明されている。また『中国語大辞典』では、明代の白話小説『醒世恒言』（三）に「同様に」という意味で「一般」の用例があることが以下の様に記されている。

④同様に，＝‘一般’，‘一样’**例**〈～子弟愛小娘，小娘不愛那子弟，却被他以势凌之〉同じく客が芸妓にほれ、芸妓はその客を嫌うが、男の権力に負けてしまう；（〈醒世・3〉）<sup>130</sup>

『通俗赤縄奇縁』では、卷之一において「又一般ノ小娘ト」<sup>131</sup>という用例があり、読み仮名として右側に「ハン」と記され、左戯訓として「般」には「ヤウ」が「小娘」には「ヂヨロウ」と記されている。同じく『通俗赤縄奇縁』の卷之四では「他ト一般ニ」<sup>132</sup>という用例が見られ、読み仮名として右側に「ハン」と記され、左戯訓として「オナジク」と記されている。また明治11（1878）年に刊行された『俗語解』では「一般」については、「全クト云意ノ如ク家人一般ナリナトアリ（中略）又一様ノ心ニ使フ所モアリ」<sup>133</sup>と記されている。さらに『俗語解』で「一樣」については、「一般ト同シ」<sup>134</sup>と記されている。

『柳橋新誌』初編では「傳母一般」（傳母と一般）の用例があるが、「傳母」には左戯訓として「モリ」と記されている。また既に述べたように二編では「頃年風習一變妓等産兒與人家一般。」（頃年、風習一

変し、妓等児を産むこと、人家と一般。)の用例が見られ、「人家一般」には「セケンナミ」と左戯訓が記されている。

「一般」という言葉は白話語彙の一例に過ぎないが、白話小説『醒世恒言』(三)の中の白話語彙が『柳橋新誌』初編と二編の中に見られることは、白話語彙が江戸時代末期から明治初期の文芸作品に取り込まれていったことを明白に示している。

#### 4 柳北にとっての『柳橋新誌』二編の創作の意義

柳北の最も奥深い風刺は当時の維新政府にも向けられていた。維新政府の官僚が花街で権勢を誇っていたことに対して、芸妓も官僚も人間として全く変わらない存在であることを出発点としている。芸妓が幼い頃から芸に打ち込んで一人前となるのに対して、新政府の官僚は権勢をほこり、一国の文化を向上させるような政治ができないことを、柳北は鋭い切り口で批判している。

漢文戯作である『柳橋新誌』二編には、文明批評をこめて、政府への批判も述べられている。このような近代的な要素とまた中国文学を背景とした作者の精神が特徴でもあり、近代社会への過渡期に書かれた作品の意義があると考えられる。

##### (1) 追懐の地—柳橋

柳北にとって、柳橋はまだ才子佳人の出会いの場の名残があつてほしかったのである。これは『柳橋新誌』初編から引き継がれた花街柳橋への願いでもあった。二編の終りに近い部分では、自作の漢詩「秦淮山水未嘗遊其勝想當輪二州(中略)此際好呼坡老帚為君一掃十年愁」(秦淮の山水 未だ嘗て遊ばず其の勝 想ふに當に二州に輪くるなるべし(中略)此の際 好し坡老の帚を呼んで 君が為に一掃せん 十年の愁へ)<sup>135</sup>を挿入して、風流な遊びの場としての柳橋への感慨を述べている。最初に秦淮の地に思いをはせて、坡老の帚で10年間の憂いを一掃しようとしたところで終わっている。ここで坡老というのは、蘇軾のことで、酒を飲むことで心が晴れると結論づけているのである。蘇軾の五言古詩「洞庭春色」の中での「應呼釣詩鉤 亦號掃愁帚」(應に呼ぶべし詩を釣る鉤と。亦號す愁へを掃ふ帚と)の部分をもまえたものである。「亦愁帚」には「王注」として、「李後主中酒詩…莫言滋味惡、一簣掃寒愁」<sup>136</sup>という注が付けられている。風流な遊びの場としての柳橋への思いは、中国文学の素養から養われたものとなっている。蘇軾(1036-1101)は北宋の詩人であり、左遷や流罪にされた経験の持ち主であった。

さらに現在の柳橋で活躍している芸妓に対しては、「夫業精于勤 荒於嬉 昌齡 言諸千載前」(夫れ業は勤むるに精しく、嬉しむに荒む。昌齡、諸れを千載の前に言へり。)と述べている。ここで柳北は韓愈(768-824)の「進学解」(元和8(806)年)を背景として、学業と同様に努力すれば芸を極めて一人前の妓となり、自分自身を養うことができるようになれると述べ、芸妓の人間性を認めている。韓愈もまた進士に合格しながらも官につけず、左遷を経験した不遇な一生の持ち主であった。「進学解」は国子博士である韓愈と学生との問答の書かれていて、まず冒頭で「業精于勤、荒于嬉、行成于思、毀于隨。」<sup>137</sup>(業は勤むるに精しく、嬉しむに荒む。行は思ふに成りて、隨ふに毀る。)と述べている。この大意は「学業は勤め励めばくわしくなり、遊びたのしめばすたれてそまつになる。行いは深く思慮すれば欠点がなくなり、気ままにすればやぶれ失敗する。」と考えられている。韓愈は自己の不遇を滑稽に弁解しており、そのことが「進学解」作成の意図であった。韓愈の文学における信念について前野直彬が以下のように述べている。

彼は学生の口を借りて、わが文章の根本を解き明かす。それは今の世において「用を済さぬ」ものであるが、実は文学の本道なのであり、上古の聖賢の世にはまさしく、「用を済した」ものであった。用を済さなくなったのは、時勢の方が悪いのである。自分はその時勢に随順することができない。そうした自分を認め得ず孟子や荀子と同じ運命をたどらせ、適材を適所に用いないのは、宰相の責任だ。<sup>138</sup>

「進学解」において、韓愈は自分を評価しない為政者を婉曲的に批判している。柳北は蘇軾や韓愈のように官僚としては不遇であった文人の詩や文を引用して、柳橋の情緒の復活や、芸妓が芸を売るような妓に復活するという希望を述べているのである。そして維新政府に対しては、高い地位を極めながらも政務に的確な人物がいないので、軽薄な文化の土壌しかない状況を以下のように『柳橋新誌』二編の中で批判している。

禮教未立于國徳澤未流于民者何也非其人庸劣不勝其職也（礼教未だ国に立たず、徳沢未だ民に流れる者は、何ぞや。其の人庸劣にして、其の職に勝へざるにあらず。）

（大意：規律が国家において確立せず、政府の恵みが民衆に及んでいないのは、なぜであろうか。政府の側の人物に優れた人材がなく、その役割を果たすことができないのである。）

柳北の批評は文明開化に迎合する浅い知識しかない書生や芸妓というよりも、その風潮を生み出した維新政府に対して向けられているのである。

## （２）維新政府への批判

維新政府の官僚が権勢をほこり、柳橋が金銭本位の世界になることに拍車をかけているという指摘が『柳橋新誌』二編では随所に記され、さらに戯画化もされている。芸妓には旧幕臣の娘などもおり、維新前までは貧しい暮らしをしていた公家や、風流の素養がない西南諸藩の武士などが客となっていた。ある公家出身の政府の権力者は芸もなくおしゃべりな芸妓から花札作りの内職を指摘され、最近では公家が政府の官僚となり多忙となったので、内職をしていないと答えている。これを聞いた芸妓が膝をうち、「解矣々々 近来 坊間 花牌甚乏（中略）価之貴亦宜哉」（解せり。解せり。近来、坊間、花牌甚だ乏し、（中略）価の貴き、亦宜なるかな）と、街中で花札が出まわらないのはそういった背景があったのかと素早く納得したので、その座にいたものは、手に汗を握ったという記述がある。ここには、政策のキャリアもなく、ただ時の運で権力者となった政府高官と、芸もなくその場をにぎわせるだけの芸妓の軽薄さが冷笑的に描かれている。政府高官については、「暗に三条実美を指すか。父の実万はカルタの絵付けを内職にしていたといわれている（前田）」<sup>139</sup>と考えられている。

このような高官を頂点とする政府に対して、柳北は『柳橋新誌』二編の中で、「不勤于為治而放擲為風之故耶」（治を為すに勤めずして、放擲（ほうてき）、風を為すの故にあるずや。）と述べている。それは、維新政府の高官がより良い政治をしようなどと努力をしないでなげやりな態度で政治を行っているという批判であった。柳北は幕末の幕藩体制を懐古する気持ちを超越し、政府高官の政治に対する底の浅い態度を指摘している。『柳橋新誌』二編には失意後の柳北の鋭い世相や政府への批判があり、江戸期の戯作の様式ではあるが、近代社会をめざす意欲が感じられ、初編よりも大きな反響をよんだとされている。

<sup>140</sup> それ故、柳北の創作の意図に対しては、当然ながら政府も注意を払っていた。

しかし、同時に、この作品の中で諷刺嘲笑の対象となった明治政府の高官たちは、柳北を敵視し、折があれば彼に掣肘を加えようと考えた。<sup>141</sup>

幕臣であった柳北は維新後に『柳橋新誌』初編、二編を刊行した。また幕府に最後まで抵抗した二本松藩の藩士であった服部撫松の『東京新繁昌記』は、明治9(1876)年8月に発売を禁止された。このような状況下で、柳北の維新政府への批判的姿勢はさらに確かなものとなっていったが、『柳橋新誌』の三編は本文は公開されることはなく、明治10(1877)年1月に「柳橋新誌三編序」が『花月新誌』(第1号)に発表されただけであった。

#### 第4節 第Ⅱ章のまとめ

柳北は幕府崩壊後には商店の経営等で生計を立てていた。明治2年には親族と共に、山陽地方への国内旅行にでかけた。柳北は妹尾を中心に四国にも脚を伸ばしたが、僻地である妹尾で岸田冠堂(医師で漢詩人)のような人物とも出会い心の交流の場をもった。このような体験から柳北は柳橋に代表される江戸から日本の国へと、社会への視線を徐々に広げていった。この山陽道への旅日記が「航薇日記」であった。維新直後の柳北は自己の居場所を亡くした喪失感に支配されてはいたが、この山陽道への旅で地方社会の人物や自然に触れ、社会への関心の萌芽を徐々に成長させていったのであった。

「航薇日記」によって地方の光景を描いた柳北は、帰京後『柳橋新誌』二編を完成させた。そこでは柳橋の花街を舞台に維新政府への批判や文明開花の裏側が描かれ、文明批評的色彩が初編よりも強まっている。このような柳北の精神は、『板橋雑記』作者余懷の創作による旧政権への追慕という行為に影響を受けたからである。柳北は『柳橋新誌』二編の終わりの部分で浅薄な文明開化を批判し、維新政府の政策が内容の貧しいものであることを述べている。さらに欧米では新聞による言論の自由があることを力説して、これからの日本の国もそのようにあるべきであるという基本的な構想を語っている。

維新前の柳北は、『柳橋新誌』初編で柳橋という江戸の花街の裏側を描き、花街という美の世界が人間社会の縮図でもあることを柳北は把握した。維新後の「航薇日記」では柳北は山陽や四国地方の社会を描き、日本の国で生きる様々な人々への感慨をもつようになっていった。東京に戻った柳北は再び柳橋を舞台に『柳橋新誌』二編を完成させ、文明開化の裏側を風刺を込めて描いている。「航薇日記」での柳北の社会の裏側に潜むものへの視線はより現実性をもったものとなり、病を抱えながらも客と接する遊女には人格も認められていない悲惨な状況が記されている。『柳橋新誌』初編から「航薇日記」によって江戸から山陽地方に柳北の見聞し体験した世界は拡大された。さらに『柳橋新誌』二編で金銭本位の花街の裏側を維新政府への批判を込めて描くことで、維新前の『柳橋新誌』初編よりも花街の人間模様の裏側に潜むものへの批判が深められていった。

#### 〈注〉

<sup>1</sup> 原文は『柳北詩鈔』の引用は、加藤国安. 日本漢詩 第三輯. 江戸後期／明治初期, 凱希メディアサービス, 2010. (CD-ROM). 以下『柳北詩鈔』の収録作品は同様。

<sup>2</sup> 書き下し文は、成島柳北・大沼枕山. 江戸詩人全集 10. 岩波書店, 1990. p. 80-82. 詩の解釈も同書を参照。

<sup>3</sup> 岩城秀夫. 梅花と返魂. 日本中國學會報. 1978, p. 136.

<sup>4</sup> 高適の生年は、『唐詩選』(目加田誠. 唐詩選. 新釈漢文大系 19. 明治書院, 1998)においては記載がなく「(-765)」と、765年に死去したことだけ記されている。しかし『中国文学小事典』(藤野岩友. 中国文学小事典. 高山堂出版社, 1997)には「(702?-765)」と記されている。杜甫の生没年や他の唐代の詩人については『唐詩選』を参照しているので、ここでは『唐詩選』に倣う。

<sup>5</sup> 原文及び書き下し文の引用は、目加田誠. 唐詩選. 新釈漢文大系 19. 明治書院, 1998. p. 253.

- <sup>6</sup> 近藤光男. 蘇軾. 漢詩選 11. 集英社, 1996. p. 197.
- <sup>7</sup> 注 6 蘇軾. p. 197.
- <sup>8</sup> 野山嘉正. 成島柳北の『詩』. 文学(岩波書店). vol. 53, No. 11, 1985, p. 206.
- <sup>9</sup> 原文、書下し文及びルビは、前野直彬. 唐詩鑑賞辞典. 東京堂出版. 1970, p. 25.
- <sup>10</sup> 注 9 唐詩鑑賞辞典. p. 25.
- <sup>11</sup> 瀧上隠士傳. 柳北全集. 文藝俱樂部 3 卷, 第 9 篇 臨時増刊. 博文館, 1897. p. 2.
- <sup>12</sup> 『江戸繁昌記』は初篇が天保 8 (1832) 年に出版された漢文戯作である。(江戸繁昌記・柳橋新誌. 新日本古典文学大系 100. 岩波書店, 1989. p. 573 の「解説」参照)。
- <sup>13</sup> 注 12 江戸繁昌記・柳橋新誌 p. 427.
- <sup>14</sup> 書下し文は、注 12 江戸繁昌記・柳橋新誌 p. 4. また大意も同書の尾注と解説を参照した。
- <sup>15</sup> 本文は、永井啓男. 寺門静軒. 理想社, 1966. p. 117 から引用、それに書下し文及びふりがなを付けた。
- <sup>16</sup> 原文及び書下し文は、老子・莊子 (上). 新釈漢文大系 7. 明治書院, 1966. p. 224.
- <sup>17</sup> 注 16 老子・莊子(上). p. 222. 参照。
- <sup>18</sup> 「航薇日記」の本文の引用は、成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. 明治文学全集 4. 筑摩書房, 1969. 尚、必要に応じてルビを挿入した。
- <sup>19</sup> 注 18 成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. p. 419 の塩田良平「解説」。
- <sup>20</sup> 永井壯吉. 新版 斷腸亭日乗 6. 岩波書店, 2002. p. 56-57.
- <sup>21</sup> 注 8 野山嘉正. 成島柳北の『詩』. p. 207.
- <sup>22</sup> 乾照夫. 成島柳北の『航薇日記』について. 情報文化社会の到来—東京情報大学情報文化学科創立一〇周年記念論集. 2007. p. 185. 以下同様。
- <sup>23</sup> 戸川成齋 (達毅) は戸川貫好 (達本) の嫡子として生まれ、妹尾戸川家の七代目であった。成齋は稻荷大明神に奉獻したことがあり、妹尾町で発行された『妹尾町の歴史』には、以下の記述がある。  
末社、清輝天王の社前には七代の領主戸川達毅 (成齋と号す) が奉獻した小形な石造唐獅子が左右一対並び慶応元乙丑年五月吉日と刻されている。(妹尾町の歴史. 妹尾町, 1970. p. 172.)
- <sup>24</sup> 塩田三郎 (1843-89) は旧幕臣で、維新政府に出仕し、外務省に勤務する。後年パリで柳北と交流した。(「航西日乗」人名注・索引) 海外見聞集. 新日本古典文学大系明治編. 岩波書店, 2009, 参照
- <sup>25</sup> 「航薇日記」中に名前が見える、柳北と交流のあった柳橋の芸妓「玉鸞」「錦兒」については、「風懷詩」の序文にも各々「玉鸞」「細錦」という名前が書かれている。
- <sup>26</sup> 注 2 成島柳北・大沼枕山. p. 118.
- <sup>27</sup> 注 2 成島柳北・大沼枕山. p. 92 を参照した。
- <sup>28</sup> 『幽明録』は南朝宋の劉義慶 (403-444) の撰で、原書は散逸したが、佚文の輯録が行われた。『幽明録』を輯録したものには、『古小説鉤沈』(魯迅先生紀念委員会編. 魯迅全集 第 8 卷. 魯迅全集出版社, 1938) 等がある。
- 『幽明録』の中に収録されている「劉晨阮肇」という小話は、山中で道に迷った劉晨と阮肇の二人は谷川で出会った仙女とおぼしき女性に導かれて別世界で約十日間を過ごしたが、故郷に帰ってみると数世代後の子孫の時代になっていたという内容である。(幽明録. 中国古典小説選 2. 明治書院, 2006, 参照)。
- 柳北は花街である柳橋を異境の世界とし、名妓であるお鳥 (玉鸞) を仙女に擬えているのである。
- <sup>29</sup> 「航薇日記」の引用は注 18 成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. を底本に、また『花月新誌』(複製版 ゆまに書房) 1974 年) を校本として用いた。『航西日乗』も同様である。
- <sup>30</sup> 樋口雄彦. 箱館戦争と榎本武揚. 敗者の日本史 17. 吉川弘文館, 2012. p. 106.
- <sup>31</sup> 榎本等の箱館戦争の降伏者が赦免された背景については、以下のような要因があった。  
罰をうけることとなった箱館戦争降伏人であるが、彼らのなかに有能な人材がいることは周知の事実であった。そのため、赦免の上、いち早く政府が登用すべきであるといった意見がでてくこととなった。(注 30 箱館戦争と榎本武揚. p. 104)。
- <sup>32</sup> 六如は「航薇日記」中に柳北が記している菅茶山とも親交があった。六如は唐代の杜甫を最も評価し、宋代では蘇軾と陸游の詩評価していた。(菅茶山・六如. 江戸漢詩人選集 4. 岩波書店, 1990. p. 441 参照)。
- <sup>33</sup> 近藤光男. 蘇軾. 漢詩選 11. 集英社, 1996. p. 214.
- <sup>34</sup> 野口武彦. 鳥羽伏見の戦い. 中央公論新社. 2010. p. 280.
- <sup>35</sup> 諸橋轍次. 大漢和辞典第 3 卷. 1984. 大修館書店. p. 2434.
- <sup>36</sup> 藤戸の先陣菴については、『平家物語』巻第十「藤戸」の段には佐々木三郎盛綱が先陣の功を狙って浦の

男に地形を尋ね、浅瀬を見つけた後で口封じの為に男を殺害してしまう話が伝えられている。

<sup>37</sup> 引用は平家物語 (2) . 日本古典文学全集 46. 小学館, 1984. p. 330. また大意は同書の尾注。

<sup>38</sup> 富士川英郎他. 詩集日本漢詩. 第 9 巻. 汲古書院. 1985, p. 15

<sup>39</sup> 一海知義. 陸游詩選. 岩波書店. 2007. p. 151.

<sup>40</sup> 伊丹蕙圃については詳細は不明であるが、『岡山県歴史人物事典』中の「都窪郡誌」に「伊丹蕉陰」という人物の記述があり、同一人物と考えられる。以下その一部を記す。

伊丹蕉陰 (1831~1881・12・4) 儒者・医者。名は蕙畝。都宇郡大福村 (現岡山市大福) の人。岡山藩士稲川良右衛門の子で伊丹家を継いだ。後に長崎に出て医学を学ぶ。また豊後日田 (現大分県日田市) の咸宜園で広瀬淡窓に就いて経史を研究し、詩文に優れていたという (岡山県歴史人物事典. 山陽新聞社, 1994. p. 101.)

<sup>41</sup> 兄復は柳北と三度目の夫人お蝶との間の長男、復三郎 (大正 9 年 7 月 31 日歿)

柳北の家族についての参考文献を下記に記す。

・大島隆一. 柳北談叢. 昭和刊行会, 1943.

・西岡勝彦. 航薇日記一成島柳北 西国旅日記一. 晚霞舎, Kindle 版. 2013.

<http://ebooklabo.fc2-rentalserver.com/wp/>. (参照 2017. 07)

<sup>42</sup> 玉蛾は柳北の三度目の夫人であり、柳橋の芸妓であったお蝶。玉蛾については「題玉蛾相憐帖」という漢詩が『柳北詩鈔』巻二に収録されている。

<sup>43</sup> 信夫恕軒『恕軒文鈔』三編下の中の「柳北成島先生の碑」の中では、柳北の家族について以下のような記述がある。

初め永井氏を娶るも、先に卒す。継いで田村氏を娶る。側室は渡辺氏。凡て男女十有七人。叔復、嗣ぐ。余は或は天、或は人に適ぐ。(柳北成島先生の碑. 恕軒文鈔三編下. 漢詩文集. 新日本古典文学大系明治編 2. 岩波書店, 2004. p. 336.)

柳北は永井氏との結婚以前に、安政元年に御絵師狩野董川の娘瀏と結婚していた。安政 4 年に、狩野氏は男児を出産するも、男児はまもなく死亡し、狩野氏も離縁された。永井氏は柳北との間に長女機を儲けたが、明治 4 年に病死している。その後柳橋の芸妓で外妾であったお蝶 (田村氏) が柳北の正妻となった。

(柳北の家庭については、注 41 航薇日記一成島柳北 西国旅日記一. も参照した。)

<sup>44</sup> 原文及び書下し文は注 2 成島柳北・大沼枕山. p. 63.

<sup>45</sup> 書下し文と大意は注 2 成島柳北・大沼枕山. p. 118.

<sup>46</sup> 本文及び書下し文は注 32 菅茶山・六如. p. 206.

<sup>47</sup> 注 32 菅茶山・六如. p. 410 の解説参照。

<sup>48</sup> 篠田雲鳳の出自等については、以下の記述が門玲子著『江戸女流文学の発見』の中にある。

篠田雲鳳 (一八一〇—一八三年) は伊豆下田の医者篠田化斎の娘である。名はふじ、儀ともいう。兄、妹がいたといわれるがくわしくはわからない。父化斎は雲鳳が五、六歳のころ、一家を伴って江戸にでた。

(江戸女流文学の発見. 藤原書店, 2006. p. 263-234.)

<sup>49</sup> 壬生芳樹. 『篠田雲鳳伝』考. 明治維新の人物像. 幕末維新論集 12. 吉川弘文館, 2000. p. 328.

<sup>50</sup> 注 40 岡山県歴史人物事典. p. 507.

<sup>51</sup> 今村栄太郎. 失意期の成島柳北. 文学 (岩波書店) vol. 46, No. 10. 1978. p. 19.

<sup>52</sup> 本文の引用は、『柳北詩鈔』巻二、書下し文及び大意は注 2 成島柳北・大沼枕山. p. 84.

<sup>53</sup> 注 9 唐詩鑑賞辞典. p. 22.

<sup>54</sup> 書下し文については、注 2 成島柳北・大沼枕山. p. 71. を参照した。

<sup>55</sup> 注 23 妹尾町の歴史. p. 243.

<sup>56</sup> 以下に柳北の祖父司直の概略を記す。

「晃山扈從私記」の筆者成島司直は錦江の曾孫に当る。通称邦之助、翠麗、東岳と号す。安永七年生、寛政七年十月十人格奥儒者見習、十一年大番格にすすむ。文化六年「御実記」(『徳川実記』正編)の編纂を命ぜられ大学頭林述斎の下に、自宅にて稿を起こし、嘉永二年、正編五—四冊 (国会図書館蔵本) を脱稿した。十年、奥儒者、ついで布衣となり、天保十二年広敷用人、加封のうへ、諸大夫となり、図書頭と改めた。これは將軍に時弊改革の上書をした恩賞で、江戸時代の儒者で諸大夫となったのは新井白石と司直だけであった。晩年故あって奥儒者を免ぜられ、文久二年閏八月歿した。年八十五。(大久保利謙. 江戸第六巻. 日記・紀行編. 教文舎, 1981. p. 628 の「解説補遺」)。

<sup>57</sup> 韓愈. 中國詩人選集 11. 岩波書店, 1958. p. 117.

- <sup>58</sup> 本朝文粹. 新日本古典文学大系 27. 岩波書店, 1992. p. 130.
- <sup>59</sup> 目加田誠. 唐詩選. 新釈漢文大系 19. 明治書院, 1998. p. 765. 参照。
- <sup>60</sup> 竹田晃・黒田真美子. 搜神記・幽明録・異苑他. 中国古典小説選 2. 明治書院, 2006. p. 360.
- <sup>61</sup> 注 23 妹尾町の歴史. p. 260.
- <sup>62</sup> 朝尾直弘. 角川日本史辞典. 角川書店, 1996. p. 802.
- <sup>63</sup> 松尾芭蕉集 (1) 全発句. 新編日本古典文学全集 70. 小学館, 2011. p. 318~319. 参照。
- <sup>64</sup> 注 63 松尾芭蕉集 (1) . p. 495.
- <sup>65</sup> 盛田帝子. 歌道宗匠家と富小路貞直・千種有功. 國語と国文学. vol. 88. No. 5, 2011. p. 46.
- <sup>66</sup> 『千種有功卿和歌拔粹 (成島柳北自筆稿本)』は、柳北の撰により明治 15 (1882) 年に刊行されている。さらに柳北は、『千種有功卿和歌拔粹』に収録された短歌について誤りがあったことを認め、明治 16 年には「烟草の吸いさし」(『熱海文藪』)の中で以下のことを記している。  
新潟縣下岩船郡村上町ノ某氏ヨリハ去年ノ歳首二年玉トシテ贈リシ千種有功卿ノ歌ニ誤寫有リトカ分カラヌ「有リトカニテ之ヲ今年今日ニ及ビ御糺問ニ與カルニ至レリ (注 18 成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. p. 56.)。
- <sup>67</sup> 原文及び解釈については注 32 菅茶山・六如. p. 126.
- <sup>68</sup> 村上哲見. 三体詩 (二) . 朝日新聞社. 1978. 127.
- <sup>69</sup> 注 22 成島柳北の『航薇日記』について. p. 216.
- <sup>70</sup> 注 56 江戸第六巻. p. 19.
- <sup>71</sup> 注 41 柳北談叢. p. 14.
- <sup>72</sup> 注 24 航西日乗. 海外見聞集. p. 305 の尾柱参照。  
森と楠山の二人の兄については、以下のことが把握されている。注 23『航西日乗』人名注・索引 参照。  
森省吾 ?—1898 泰次郎とも 旧幕直. 柳北の実兄 (松本家次男). 幕末には神奈川奉行・海軍奉行配下で活躍. 工部大学校で学び, 明治 21 年陸軍 5 等技師. 鉱業関連の著作もある. 俳優森繁久弥の祖父。  
楠山孝一郎 生没年未詳. 柳北の実兄. 名は, 永井荷風が「柳北の日記につきて」(昭和 2 年, のち「成島柳北の日誌」と改題)に記した成島家先机書では「孝三郎」と伝え, また『菅沼達吉君記念誌』「菅沼達吉君小伝」に「孝七郎」とあるが, 菅沼家過去帳などでは「孝一郎」とされる (『昭和女子大学近代文学研究叢書 68』). 児童文学者楠山正雄の曾祖父。
- <sup>73</sup> 前田愛. 若き將軍侍講. 硯北日録. 太平書屋, 1997. p. 721.
- <sup>74</sup> 永井荷風. 柳橋新誌につきて. 荷風全集第 16 巻. 岩波書店, 1972. p. 277.
- <sup>75</sup> 注 72 硯北日録. p. 295.
- <sup>76</sup> 下田己酉俱樂部. 下田の栞. 下田, 1914. p. 64.
- <sup>77</sup> 日本近現代人名辞典. 吉川弘文館, 2001. p. 778.
- <sup>78</sup> 注 51 今村栄太郎. 失意期の成島柳北. p. 1215.
- <sup>79</sup> 『柳橋新誌』二編の原文については、柳橋新誌・伊都満底草. 勉誠社文庫 127, 1985. を引用、書下し文については、注 12 江戸繁昌記・柳橋新誌 p. 416-417 を引用した。以下、本文及び書下し文の引用も同様である。
- <sup>80</sup> 石川忠久. 漢詩鑑賞事典. 講談社学術文庫, 2009. p. 28.
- <sup>81</sup> 竹西坡は柳北と親交のあった蘭方医・竹内玄洞である。注 12 江戸繁昌記・柳橋新誌 p. 416 の尾注によれば、「西坡は号。將軍家茂の侍医」とある。また、玄洞については、ケンペルの『日本誌』の邦訳に携わったとされ、以下のことが把握されている。  
これは幕府天文台の翻訳局において当代一流の蘭学者箕作阮甫・杉田成卿・竹内玄洞・宇田川興斎・高須松亭らが、命を受けて行ったもので、紅葉山文庫に収蔵されていたが、今日その所在は明らかではない。(ケンペル. 江戸参府旅行日記. 東洋文庫. 平凡社, 1979. p. 369 の「解説」)。
- <sup>82</sup> 書き下し文は、注 2 成島柳北・大沼枕山 p. 109-110 を参照した。
- <sup>83</sup> 原文、書き下し文及び大意は、注 59 唐詩選. p. 646.
- <sup>84</sup> [清]余怀. 李金堂校中. 板桥杂记. 上海古籍出版社, 上海. 2000. p. 3. 尚、参考のため日本語訳を併記したが、それは、板橋雜記・蘇州画舫録. 東洋文庫 29. 平凡社, 1964. p. 4. の引用である。
- <sup>85</sup> 前田愛. 『板橋雜記』と『柳橋新誌』. 前田愛著作集 1. 筑摩書房. 1989. p. 105.
- <sup>86</sup> 注 11 柳北全集. p. 2.
- <sup>87</sup> 「1870(明治 3)3 月、和泉要助らが東京府の許可を得て日本橋付近で営業を開始。」注 62 日本史辞典. p. 564.



- <sup>88</sup> 引用文及び書き下し文については、杉下元明・若き日の成島柳北・江戸文学(ペリカン社) 1999, No. 20, p. 134 を参照。
- <sup>89</sup> 注 88 若き日の成島柳北。
- <sup>90</sup> 羽鳥徹哉・『近代日本文学と笑い』試論・ハワード・S・ヒベット江戸の笑い・明治書院 1989, p. 290。
- <sup>91</sup> 注 41 柳北談叢, p. 370。
- <sup>92</sup> 注 11 柳北全集, p. 332。
- <sup>93</sup> 田中不二麿は、明治4年から6年にかけて岩倉使節の一員として欧米を視察していた。(久米邦武・米欧回覧実記 第1巻・岩波文庫・岩波書店, 1977, p. 426 の表を参照) 柳北とはその当時からの知人であったと考えられる。
- <sup>94</sup> 塩田良平・柳橋新誌前編の原型に就て・文学 vol. 9, No. 8, 1941, p. 288。
- <sup>95</sup> 注 94 と同じ。
- <sup>96</sup> 「偶成」については、「大政奉還の後、慶喜を上院議長となさんとし、岩倉具視に阻まれ、不平の極み、力士・俳優・芸妓を率いて白昼市中を闊歩したころの作」という説明がある。(井口篤志・日本漢文学史・角川書店, 1984, p. 538.)。
- <sup>97</sup> 顧學頤校点・白居易集第一冊・中華書局, 1979, p. 239。
- <sup>98</sup> 原文、書き下し文及び大意は、松枝茂夫・中国名詩選(下)・岩波文庫・岩波書店, 1986, p. 120-121。
- <sup>99</sup> 注 12 江戸繁昌記・柳橋新誌, p. 403 の尾注。
- <sup>100</sup> 漢詩の原文は注 79 柳橋新誌・伊都満底草, p. 133 引用、書き下し文については、注 12 江戸繁昌記・柳橋新誌, p. 418 を引用した。大意も同書の p. 418 の尾注を参照した。
- <sup>101</sup> アン・バルダーン・中国皇帝歴代史・創元社, 2001, p. 240。
- <sup>102</sup> 田原嗣郎・將軍継嗣の法理・幕末維新の文化・吉川弘文館, 2001, p. 319。
- <sup>103</sup> 注 83 板橋雑記, p. 3。
- <sup>104</sup> 余懷・西溪山人・板橋雑記・蘇州画舫録・平凡社, 1994, p. 4。
- <sup>105</sup> 注 85 『板橋雑記』と『柳橋新誌』, p. 501。
- <sup>106</sup> 注 10 に同じ。
- <sup>107</sup> 注 84 板橋雑記, p. 50。
- <sup>108</sup> 注 84 板橋雑記・蘇州画舫録, p. 41。
- <sup>109</sup> 原文は注 79 柳橋新誌・伊都満底草, p. 130。書き下し文は注 12 江戸繁昌記・柳橋新誌, p. 416。
- <sup>110</sup> 原文及び書き下し文は、注 98 中国名詩選(下) p. 192 からの引用。
- <sup>111</sup> 陶淵明・曹明綱标点・陶淵明全集・上海古籍出版社, 上海, 1998, p. 32。
- <sup>112</sup> 星川清孝・古文真宝・後集・新釈漢文大系第16巻・明治書院, 1995, p. 17。
- <sup>113</sup> 一海知義・陶淵明一虚構の詩人一・岩波文庫, 1997, p. 211。
- <sup>114</sup> 原文は注 111 陶淵明全集, p. 39。書き下し文については、田部井文雄・上田武・陶淵明集全注釈・明治書院, 2002, p. 383。
- <sup>115</sup> 丸山眞男・忠誠と反逆・ちくま学芸文庫・筑摩書房, 1998, p. 37-38。
- <sup>116</sup> 長澤規矩也・和刻本漢籍分類目録・汲古書院, 1976, p. 188 を参照。
- <sup>117</sup> 長澤規矩也・和刻本漢詩集成 第二十輯・汲古書院, 1977, p. 4 を参照。
- <sup>118</sup> 藤野岩友・中国文学小事典・高文堂出版, 1997, p. 63。
- <sup>119</sup> [清] 袁枚・朱純点校・子不语・岳麓书社, 1985, p. 128。
- <sup>120</sup> 前野直彬訳・中国古典文学大系 第42巻・平凡社, 1971, p. 295。
- <sup>121</sup> 内山知也・佐藤一郎・中国小説小事典・高文堂出版社, 1985, p. 57。
- <sup>122</sup> 注 79 柳橋新誌・伊都満底草, p. 6 の青柳達雄解説『『柳橋新誌』(全三編)について』。
- <sup>123</sup> 荒尾禎秀・『通俗赤縄奇縁』の熟字・東京学芸大学紀要 2 部門, No. 44, 1993, p. 275-90 を参照。
- <sup>124</sup> 漢語大詞典・上海, 世紀出版集团・汉语大词典出版社, 1997, p. 4。
- <sup>125</sup> 「喻世明言の刊行は天啓元年(1621)と考えられるが、二刻の警世通言は天啓四年(1624)、三刻の醒世恒言は同七年の刊行であり」という記述が、『中国学芸大事典』に見られる。(近藤春雄・中国学芸大事典・大修館, 1978, p. 271)
- <sup>126</sup> 石崎又藏・近世日本における支那俗語文学史・清水弘文堂書房, 1967, p. 152。
- <sup>127</sup> 大木康・明末のはぐれ知識人・講談社, 1995, p. 12。
- <sup>128</sup> 岡田袈裟男・翻刻西田維則訳『通俗赤縄奇縁』・立正大学大学院紀要(32), 2016, p. 27。

- 
- <sup>129</sup> 小田切文洋. 江戸明治唐和用例辞典. 笠間書院, 2008. p. 507.
- <sup>130</sup> 大東文化大学中国語大辞典編纂室編. 中国語大辞典 下. 角川書店, 1994. p. 3625-3626.
- <sup>131</sup> 中村幸彦編. 通俗赤縄奇縁. 近世白話小説翻訳集 第2巻. 汲古書院, 1984. p. 32.
- <sup>132</sup> 注 131 通俗赤縄奇縁. p. 118.
- <sup>133</sup> 長澤規矩也 解題. 俗語解. 唐和辭書類集 第十集. 汲古書院, 1972. p. 13.
- <sup>134</sup> 注 133 俗語解. p. 15.
- <sup>135</sup> 書き下し文は、注 12 江戸繁昌記・柳橋新誌. p. 418-419.
- <sup>136</sup> 蘇軾. 應榴輯注. 蘇軾詩集合注. 上海古籍出版社, 上海. 2001. p1751.
- <sup>137</sup> 引用は、屈守元. 常思春主編. 韓愈全集校注. 四川大學出版社, 1996. p. 1909. 書き下し文及び大意は、注 112 古文真宝・後集. p. 90. を引用。
- <sup>138</sup> 前野直彬. 韓愈の生涯. 秋山書店, 1976. p. 130-131.
- <sup>139</sup> 注 12 江戸繁昌記・柳橋新誌 p. 400 の尾注を参照した。
- <sup>140</sup> 反政府的な言動は、そのままただちに文明批評であるというわけのものではない。時代の支配的風潮に対する批判が、たんなる慷慨の言や鬱憤晴らしにとどまらず、それを知的に凌駕する批評性の骨格を備えたときにはじめて、警世の文は文学の名に値するといえることができるだろう。  
(野口武彦. 漢文体文学圏の様相：初期明治文学における漢文文体の機能. 現代文学研究 I —明治の文学. 至文堂, 1976. p. 69 参照。)
- <sup>141</sup> 伊藤整. 日本文壇史 I. 講談社文芸文庫. 講談社, 1995. p. 47.

### 第Ⅲ章 柳北と海外体験

#### 第1節 亜細亜周辺から仏国迄の航路

##### 1 日本からの旅立ち

##### (1) 真宗大谷派の一員として

明治5(1872)年9月、成島柳北は石川舜臺等と共に真宗大谷派の現如上人に随行して、欧州へ旅立った。横浜港から出発して11月には巴里(パリ Paris)<sup>1</sup>に到着し、米国を経て翌年の7月に帰国した。この時の記録が「航西日乗」である。後年「航西日乗」は、柳北が主宰した詩文雑誌『花月新誌』に掲載された。この時、最初は漢文で書かれた文章が書き下し文に書き改められたのであった。連載期間は第118号～153号(明治14(1881)年11月30日～17(1884)年8月8日迄149号と152号を除く)であった。「航西日乗」の元となる紀行中の日記の原文は散逸しているが、柳北と同行した松本白華の「松本白華航海録」について、以下の点が指摘されている。

ただし、「松本白華航海録」(『真宗史料集成 第十一巻』)のうち、九月十一日から十月二十二日までの漢文日記の内容は本紀行とほぼ同じ内容であり、柳北の日記原文を松本白華が写したものと考えられる。<sup>2</sup>

「航西日乗」の冒頭には「余ノ歐米ニ航遊セシハ實ニ明治五年壬申ノ九月ニ解纜シ翌年七月ニ歸朝セシナリ其際見聞シタル事共甚ダ夥シケレド」と記されている。ほぼ10ヶ月に及ぶ外遊であり、同行者は現如上人の他、石川舜臺、松本白華と関信三の3名の真宗大谷派僧侶であった。

現如上人は当時の真宗大谷派(東本願寺)の法主後継者で、後の二十二世大谷光瑩(こうえい)(嘉永5(1852)年-大正12(1923)年)である。明治6(1873)年4月には、英国へ行く柳北、石川と別れ、松本白華、小野弥一と共に獨逸(ドイツ)へ行き、同年7月に帰国した。石川舜臺(天保13(1842)年-昭和6(1931)年)は柳北と共に英米を経て帰国し、後に海外布教に活躍した。松本白華(天保9(1838)年-大正15(1926)年)は明治6(1873)年4月に英国へ行く柳北、石川と別れて現如上人等と獨逸へ行き、帰国した。外遊中の記録として「松本白華航海録」を残している。関信三(天保14(1843)年-明治13(1880)年)は後に教育者となる。明治6(1873)年1月に一行と別れて英国留学のために倫敦(ロンドン)へ、明治7(1874)年に帰国した。

柳北が一行に加わった原因は、彼の英語や仏語の語学力が評価されたからで、東本願寺の内部に翻訳局を設置する計画があったからとされている。それは、この頃の真宗大谷派は宗務機関の整備により、内部の改革を図ろうとしていたからであった。以下のような指摘もある。

明治五年の改正掛の設置により、宗務機関は逐次整備されることとなったが、宗務の近代化を促進する上に大きな影響をおよぼしたのは、五年九月から翌年七月にかけてなされた、現如上人をはじめ石川舜臺・松本白華・成島柳北による欧州の宗教事情視察旅行であったとおもわれる。<sup>3</sup>

真宗大谷派は、宗務の近代化への取り組みから帰朝後まもなく翻訳局を設置して柳北を局長とした。翻訳局はキリスト教やインド固有の宗教の典籍を翻訳研究することが目的で、宗務機構の審議に関わることはなかったが、仏教哲学を基盤に据えた翻訳局には「寺律」(寺法)の考閲が課されていた。翻訳局の仕事は欧州留学の新知識による宗務の近代化が期待されていたからであった。柳北は後に翻訳局が縮

小されるまで、局長として大谷派の仕事に携わった。

また柳北自身は西欧の文化へ高い関心をもっていた。『柳橋新誌』二編（明治4（1871）年成立）の最後の方で、江戸繁昌記を著した寺門静軒が当時の幕府からの取締りにあったことを偲んで以下のように述べている。

昔静軒翁著繁昌記當時幕吏怒其誹謗之語繫翁于獄焚其書鳴其罪竟遂之世笑其吏之局量偏隘而翁之書猶行于今焉。

（昔、静軒翁、繁昌記を著はす。当時の幕吏、其の誹謗の語を怒り、翁を獄に繋ぎ、其の書を焚き、其の罪を鳴らして、竟に之を遂ふ。世、其の吏の局量偏隘なるを笑つて、翁の書猶ほ今に行はる。）

（大意：昔、静軒翁は「江戸繁昌記」を著わした。当時の幕吏は「江戸繁昌記」の中に幕政の批判の内容を怒り、翁を獄に繋いで「江戸繁昌記」を焼いて処分した。「江戸繁昌記」の筆禍は、静軒翁を社会の隅に追いやった。現在は幕吏の度量の狭いことが笑われ、静軒翁の「江戸繁昌記」は現在も読み継がれている。）<sup>4</sup>

柳北は「江戸繁昌記」が体制側の弾圧にもかかわらず読み継がれていて、自由な言論へが無意味であることを述べている。さらに柳北は欧米ではメディアとしての新聞が政治や社会に対する自由な意見の発表の場であることを強調している。

泰西諸國所刻新聞紙者多是誹謗罵詈之言而君主不罪官吏不咎君子不怒小人不怨爭而讀之以博聞見以知警戒。

（泰西諸國刻する所の新聞紙は、多く是れ誹謗罵詈の言にして、君主罪せず。官吏咎めず。君子怒らず、小人怨みず。争つて之を読み、以て見聞を博め、以て警戒を知る。）

（大意：西欧諸国で刊行されている新聞紙は、多くは政府への批判等が書かれているが、君主はこれらに携わった人々を怒ることはしない、また政府側も弾圧することはない。度量の広い君主や政府は新聞を取り締まることはしない、身分の低い庶民も新聞を恨むことはない。庶民は先を争って新聞を読み、それによって見聞を広め、それによって注意すべき事項を知る。）

ここで柳北は新聞の発刊が盛んになり、自由な言論から日本が民主的な近代国家への発展を願うことを記している。柳北は新聞による自由な言論活動への期待をもっていたが、旧幕時代の寺門静軒の例を引き合いにだしたのは、維新政府による旧幕臣中心の新聞発行に制限が加えられつつあったからである。慶応4（1868）年から明治元年には、国内のニュースの報道に力を入れた「中外新聞」（柳河春三）や「江湖新聞」（福地桜痴）が既に出されていたが、旧幕臣を中心としたこれらの新聞に対して、維新政府は全て出版物を許可制として、旧幕臣を中心の新聞は事実上禁止されていた。そのような状況が続いていたが、「翌1869（明治2）年になると、明治政府は新制度・施策を伝える手段として積極的に新聞を活用し、その発行を認めることとなった」<sup>5</sup>のである。出発前の柳北には『柳橋新誌』二編の記述から、自由な言論を展開させる手段としての新聞も含めた西欧の文化への高い関心をもっていたことが理解できる。

柳北の「航西日乗」と「航西雑詩」（『柳北詩鈔』巻三）の中で記されていた欧米での旅行の簡潔な日程（陰暦明治5（1873）年9月13日～陽暦明治6（1874）年7月9日）を以下の表に示す。

表Ⅲ-1 「航西日乗」・「航西雑詩」(陰暦明治5年9月13日～陽暦明治6年7月9日)の旅程

月日	滞在国／地域	主な寄港地／滞在地	見学先
陰暦9月13日 ～	日本	横浜港出発	船中(フランス郵船ゴタベリイ号) 真宗大谷派の一員として
9月20日 ～22日	中国(清国)	香港着(ホンコン) 香港発	船の乗換(郵船メーコン号) 英華 書院での買物等 船中
9月25日 ～29日	東支那海	塞昆着(サイゴン) 塞昆発	市内観光
9月29日 ～10月1日	東支那海・南支那 海	星嘉坡着(シンガポー ル) 星嘉坡発	市内観光
10月1日 ～7日	印度洋		船中
10月7日 ～8日	英領錫狼	ポイントデガウルト(現在の ゴール)	古刹の見学等
10月8日 ～15日	印度洋 紅海	ポイントデガウルト発	船中
10月16日 ～28日	英領埃及	蘇ス(スエズ)運河通 過(紅海)	船中 27日エルバ島・コルシカ島を 見る
10月28日 ～30日	仏国	馬耳塞(マルセイユ) 着 馬耳塞発	市内観光、馬車・汽車等で巴里へ向 かう
10月30日～3 月16日(陰暦 11月21日が陽 暦12月21日と なる)	仏国	巴里(パリ)着  里昂(リヨン)発	観光、宮殿や公共施設の見学 語学 学習 旧知のシャノワーズと再会 岩倉使節団一行との交流 伊国へ出 発
3月17日 ～18日	伊国	チュラン着・チュラン 発	市内観光
3月18日 ～21日	伊国	米蘭着(ミラノ) 米蘭発	新聞社見学
3月21日 ～24日	伊国	威尼斯着(ヴェネチア) 威尼斯発	玻璃製造工場等の見学
3月24日 ～26日	伊国	弗稜蘭着(フィレンツ ェ) 弗稜蘭発	以前の君主の宮殿等の見学
3月26日 ～31日	伊国	羅馬着(ローマ) 羅馬発	宮殿等の見学
3月31日 ～4月2日	伊国	那不勒着(ナポリ) (ポンペイ) (深夜) 那不勒発	博物館見学 遺跡見学

4月3日 ～7日	伊国	羅馬着・羅馬発（チュ ラン経由）	書店等に立ち寄る
4月7日 ～27日	仏国	巴里着（パリ） 巴里発	博物館見学等
4月27日 ～5月22日	英国	倫敦着（ロンドン） リバプール出発	市内観光、宮殿等の見学
5月22日 ～6月1日	大西洋		（船中）米国へ
6月1日 ～16日	米国	紐育着（ニューヨーク） 桑港着（サンフランシ スコ）	大陸横断鉄道
6月16日 ～7月9日	太平洋	桑港出発 横浜港着	（船中）

（①マシュー・フレリ．成島柳北の洋行．國語國文，京都帝国大学国文学会，2002，71（11）．②海外見聞集．新日本古典文学大系 明治編 5．岩波書店，2009．から筆者作成）

## （２）故国との別れ

旧暦 9 月 13 日に、柳北を含めて真宗大谷派の一行 5 人は横浜港を発った。船は仏国の郵船「ゴタベリイ」であり、柳北一行の他に日本人も多数乗船した。華族の姉小路公義や維新政府側の河野敏鎌<sup>6</sup>（弘化元（1844）年-明治 28（1895）年）、井上毅<sup>7</sup>（天保 14（1843）年-明治 28（1895）年）等で、柳北一行を含めて合計十七人が日本人の乗船客であった。

16 日には船は鹿児島県の薩摩半島の南端に達していた。いよいよ日本本土から離れるという時に、柳北も含む日本人乗船者は惜別の情を抑えることはできなかったのである。日記中には記述と漢詩があるが、本研究での柳北の欧米旅詠中の引用は「航西日乗」と「航西雑詩」（『柳北詩鈔』巻三）に拠るものである。

十六日金曜晴風歇ム日向薩摩ニ近キ海路ヲ航ス海門嶽ヲ望ム富岳ニ彷彿タリ此山ヲ失ヘバ全ク本邦ノ地ヲ離ルハヲ以テ皆悵然トシテ回顧スル久シ夜間詩有り

（OR1007）<sup>8</sup>

回頭故國在何邊。	頭（こうべ）を回らせば故国何れの辺にか在る
休唱頼翁天草篇。	唱（とな）ふるを休（や）めよ 頼翁 天草の篇
一髮青山看不見。	一髮 青山 看れども見えず
半輪明月大於船。	半輪の明月 船よりも大なり

（大意：頭を回らしてみても故郷日本はどの辺りにあるのであろう。頼山陽は、万里船を泊す天草の洋と詠んだが、そのような詩篇を吟ずる必要もない。水天髣髴、青一髮と詠んだ水平上の青山は見えない。半輪の七日月は船よりも大きい。）

この絶句から、日本を確実に離れたことを心に刻もうとする柳北の姿を想像することは十分可能であ

る。絶句（OR1007）の背景には、頼山陽（安永9（1780）年-天保3（1832）年）の詩「泊天草洋」があるとされている。柳北は承句で「唱フルヲ休メヨ 頼翁 天草ノ篇」と、もはや故国は遠くなったので、それを思い出させる山陽の詩を唱えることはやめてほしいと述べている。それは柳北が山陽の詩を評価していたからであり、転句「一髪 青山 看レドモ見エズ」では、雲と空との間に一筋の髪のように緑の山々がわずかに見える情景を詠んでいる。山陽の漢詩を以下に記す。

雲耶山耶呉耶越	雲か 山か 呉か越か、
水天髣髴青一髪	水天 髣髴 青一髪
万里泊舟天草洋	万里 舟を泊す 天草の洋
煙横篷窓日漸没	煙（もや）は篷窓（ほうそう）に横たわりて 日漸く没す
瞥見大魚跳波間	瞥見す 大魚 波間に跳び
太白当船明似月	太白 船に当りて 明かなること月に似る <sup>9</sup>

山陽の「泊天草洋」では、結句で「太白当船明似月」と月との対比で主意を表現していて、柳北の山陽の詩から直接的に影響を受けていたことが明白である。山陽は漢詩人であり、『日本外史』等の著作のある儒者でもあった。『日本外史』は幕末の知識人に愛読され、特に尊王思想にも影響を与えたとされている。また山陽の子息頼三樹三郎（文政8（1825）年-安政6（1859）年）は安政の大獄で粛清されている。徳川幕府とは敵対した一族ではあったが、柳北は山陽の詩を故国を離れる前に脳裏に浮かべていたのである。しかし山陽の詩の「青一髪」という表現は、蘇軾（1037-1101）の詩「澄邁驛通潮閣（ちょうまいえきのつうちょうかく）二首」の中でも使用されている。蘇軾の作品を以下に記す。

餘生 欲老 海南村	餘生 老いんと欲す 海南の村
帝道 巫陽 招我魂	帝 巫陽をして 我が魂を 招か遣む
杳杳 天低 鶻沒處	杳杳として 天低れ（たれ） 鶻（こつ） 沒する處
青山 一髪 是中原	青山 一髪 是れ中原 <sup>10</sup>

「青山一髪是中原」の部分で、蘇軾は流刑地から生きて中原に帰りうる喜びを詠い上げているのである。山本和義によって、以下の指摘がある。

瓊州海峡の遙かかなたに、わずかに眺めやるなつかしい中原の地、東坡は瞳を凝らす。生還しうるよろこびがひろがる。わが国の儒・頼山陽（名は襄。一七八〇―一八三二）も、この詩に共感した一人である。その「天草の洋に泊す（泊天草洋）」の詩に、「雲か山か呉か越か、水天髣髴たり 青一髪」とうたうのは、この句に拠ろう。<sup>11</sup>

従って、山陽は蘇軾から「青一髪」の表現を学び、さらに柳北が学んだと考えられる。柳北は山陽や蘇軾を通じて、「一髪青山看不見」という表現を用いているが、蘇軾の作品は海南島に流罪となった時に詠まれており、その一連の作品は「海外の詩」と言われている。従って、柳北の心底には蘇軾への思いもあったと考えられる。

後の鷗外の『航西日記』収録の日本を離れる際の漢詩も、柳北、山陽、蘇軾の影響を受けた漢詩を残しており、柳北の先人への姿勢に倣ったものと言われている。<sup>12</sup>

## 2 亜細亜地域

### (1) 香港 (ホンコン)

柳北一行は、台湾沖を通り香港に到達した。旧暦 9 月 20 日に香港に上陸した柳北はまず騒がしく狡猾そうな人間の群れを目にした。また日本とは異なる気候の厳しさも痛感した。「頗ル繁華ノ地ナレドモ賤民婦兒ノ狡黠喧噪ナル實ニ厭フベキヲ覺ユ本港ハ北緯二十二度七分ナレバ頓ニ炎熱ニ驚ケリ」という記述がある。また二つの絶句を詠んでいる。

(OR1015)

枕水樓臺萬點燈。 水に枕 (のぞ) む樓台 万点の燈  
郵船估舶喚相騰。 郵船 估舶 (こはく) 喚べば相ひ騰 (こた) ふ  
海南九月猶炎熱。 海南 九月 猶ほ炎熱  
爭買銀盤幾片氷。 争ひ 買ふ 銀盤幾片の氷

(大意：水に枕む高層な建物には無数の燈火がともっている。湾内には多くの旅客や貨物船が停泊していて、呼べば答えんばかりである。海南の地、九月は未だ熱い。旅客は先を争いながら銀盤に載った氷を買い求めた。)

(OR1016)

層々鋸閣競繁華。 層々たる鋸閣 (きょかく) 繁華を競ふ  
百貨如邱人語譁。 百貨邱 (をか) の如く 人語譁 (かまびす) し  
此際誰來賣秋色。 此の際誰か來たりて秋色を売る  
幽蘭冷菊幾盆花。 幽蘭 冷菊 幾盆 (いくぼん) の花

(大意：高層な建物がにぎやかに立並んでいる。たくさんの品物が山のようにあり、人の声もうるさい。その時に誰かが秋の花を売りに来た。気品のある蘭や菊の花が幾つかの盆に盛られている。)

絶句 (OR1015) では自然条件の厳しさが、(OR1016) では自然の風物の美しさが詠まれている。(OR1015) の転句での「海南」は狭義では海南島を指すが、この島は香港の近くであるので、海南島の周辺部という意味で使われたと考えられる。海南島は蘇軾が紹聖 4 (1097) 年に流された地であった。蘇軾の「吾謫海南。子由雷州。被命即行。了不相知。至梧。乃聞尚在藤也。旦夕當追及。作此詩示之。」(「蘇東坡詩集」卷四十一) <sup>13</sup> という長い詩題の付いた七言排律の結びとなる聯にも、「他年誰作輿地誌 海南萬里眞吾郷」という句がある。これは「のちのち輿地誌を作る人があったら、海南の万里の地が私のほんとうの故郷だと書いておくれ」<sup>14</sup> という意味である。おそらく柳北も望郷の念にかられながらも、初めて上陸した外国 (中国) に親しもうとする気持ちもあった。また (OR1015) の結句「爭買銀盤幾片氷」と同様な表現は後の北米大陸横断の際の句にも見られる。<sup>15</sup> 「騒々しさと対照的な気高い蘭や冷ややかな感じの菊」<sup>16</sup> から秋の訪れをみた柳北の喜びが読み取れる。これら二つの絶句の後で柳北は盗賊が多いので早々に船に戻ったと記している。柳北は香港で貧しさや不潔な様子を感じつつも、秋の情緒を感じさせる国として蘇軾の詩などを思い出していたと考えられる。当時の香港は英国に領有されていたが、1860 年代以降は近代的な企業が進出し、多くの人々で騒々しい有様を柳北は詩作したのであった。その背景には、以下のような要因があった。

香港には中国大陆から不断に人口が流入した。商売の成功を願って来る者もいれば、港湾での労働



につく者もいた。香港政庁は、法秩序の維持を除けば、これら中国系の住民に対してあまり関心をもたなかった。むろん、これら住民たちは出身地や同業とごとに団体をつくったり、民間信仰による絆を保ったりしていた。<sup>17</sup>

近代国家としての英国に支配されながらも、中国人の庶民は貧しさから抜け出ることのできない状況であることを柳北も心に留めたと考えられる。

## (2) 塞昆 (サイゴン)

船はやがて9月25日には安南の塞昆に到達した。安南は仏国の支配下にあり、ここでも厳しい自然条件として、蚊が多いことを記しているが、蛍が異様に大きいことにも注目し、以下の絶句も残している。

(OR1020)

針路榮回入港門。      針路   榮回 (えいかい)   港門に入る  
長流一帯不知源。      長流   一帯   源を知らず  
夾舟雲樹奇於畫。      舟を夾 (はさ) む雲樹   画よりも奇なり  
誘得征人到塞昆。      征人を誘ひ得て塞昆に到る

(大意：船は針路に従って曲がりながら、港の入り口に入っていく。メコン河は一筋に長く流れ、その源は計り知れない。船を挟むようにして雲の大樹の姿は、画に描いたように奇である。旅行く人はこの風景に導かれ、塞昆に到着した。)

(OR1021)

夜熱侵人夢易醒。      夜熱   人を侵して   夢   醒め易し  
白沙青草滿前汀。      白沙   青草   前汀に満つ  
故園應是霜降節。      故園   応 (まさ) に是れ   霜降の節なるべし  
驚看螢螢大似星。      驚き見る   螢螢 (ばんけい)   星よりも大なるを

(大意：熱帯地方の夜は寝苦しく、夢はさめやすい。窓の外は白い砂と青い草が前方の水際に広がっている。故国日本は今頃、霜の降る季節であろうか。この蛮地では星よりも大きい螢が飛び、驚きながら見ている。)

(OR1020) では、承句でメコン河の風景の雄大さが詠み込まれている。また (OR1021) では、日本では霜降の季節であるが、秋であるのに寝付くことができない塞昆の地の暑さを最初に表現して、さらに大きな螢に驚いた様子を最後に詠んでいる。(OR1021) の転句で使われている「故園」は故郷の意味で漢詩では頻繁に使われる語であるが、杜甫の七言律詩「吹笛 (笛を吹く)」中でも「故園楊柳今搖落 (故園の楊柳今揺落す)」<sup>18</sup> という句があり、故郷の秋を偲ぶ表現に用いられている。

柳北が訪れた頃の越南 (ベトナム) は中国の清朝の影響下から仏国の支配下に入る過渡期であった。那破侖 (ナポレオン) 第三世は国威発揚政策として、越南進出を推し進め 1862 年にはサイゴン条約によってコーチシナ東部三省を獲得し、1867 年にはコーチシナ西部三省も併合していた。

その後も侵略は続き、一八七四年に結んだ第二次サイゴン条約では、ヴェトナムの「独立」を承認することによって中国との宗属関係の否定を試み、そのうえでヴェトナムが他国と条約を結ぶこと

に制限を加え、仏国との特殊な関係を規定してヴェトナムの保護国化へ大きな基礎を築いた。<sup>19</sup>

柳北は塞昆で日本の秋を偲んでいたが、仏国の越南支配が進展中であり、清国は衰退し始め、西欧諸国の亜細亜地域への進出は決定的なものとなっていたのである。

### (3) 錫狼（セイロン）島

柳北の一行は10月6日には錫狼島付近にまで達していた。錫狼は「16世紀以降ポルトガルが、17世紀中葉からオランダが進出し、1815年にイギリスが植民地支配を完成」<sup>20</sup>という歴史をもった印度洋上の島で、現在の国名はスリランカである。和蘭（オランダ）の支配下であり、同行の和蘭人がOld Gateの和蘭東印度会社の紋章を感慨深く見上げる様子を柳北は「和蘭人ノ共ニ來タリシ者之ヲ觀テ愀然（しうぜん）タル氣色有リ其ノ意中寔（まこと）ニ諒（りょう）ス可キナリ」と、記している。「愀然」は悲しみや憂いの様子を表す言葉であるが、実は『柳橋新誌』二編にも、「聽其曲觀其舞猶教人愀然催泣（其の曲を聴き、其の舞を觀る、猶人をして愀然泣（しうぜんなみだ）を催さしむ）」<sup>21</sup>という表現がある。『柳橋新誌』中で柳北は謡曲「松風」で、在原行平に恋をした須磨の海女の姉妹、松風と村雨の霊が現れて思い出を語って舞った様子に涙する有様を「愀然」という言葉で記している。憂い悲しむ和蘭人に深い共感をもったと考えられる。

やがて訪問した「ボウガハア」と言われる仏教寺院で、柳北は以下の絶句を詠んでいる。

(OR1031)

古廟肅條老蘇青。    古廟肅條（せうでう）    老蘇（らうせん）    青し  
時看遠客敲幽扃。    時に看る    遠客の幽扃（いうけい）を敲（たた）くを  
椰林深處山僧在。    椰林（やりん）深き處    山僧在り  
猶寫當年貝葉經。    猶ほ写す    当年の貝葉經

（大意：古い寺は静寂であり、年数のたった苔が青々としている。たまたま遠来の客が人気のない入口の扉を敲く姿が見られる。椰子の林に囲まれた奥の方に、一人の山僧がいて、現在でも昔の貝葉經を写している。）

転句の「山僧」は山奥の寺院の僧のことで、蘇軾の漢詩「峽山寺」等に見られるが、白居易の「池上二絶」の起句「山僧對棋坐（山僧棋に對して坐す）」<sup>22</sup>の用例もある。

「ボウガハア」という寺院で、柳北たち一行は巨大な釈迦涅槃像や地獄絵が日本の寺院と異なる雰囲気醸し出していることに驚いている。錫狼は大乗仏教に先行する上座仏教の国であるが、西域や中国を経て日本に伝えられたのは紀元前後から興った仏教運動である大乗仏教であった。上座仏教では僧侶が中心となって、仏の教えや規律を伝える独自の聖典を編纂し、在家の信者の帰依を受けながら修行に励むことが実践面での特徴である。これに対して、大乗仏教は「誰にでも実践可能な易行道」<sup>23</sup>を説くことを重視している。柳北一行は「ボウガハア」では「貝葉（貝多羅葉）」という植物の葉に書かれた經典と椰子の実の飲料をもらい、山を降りた。次に訪れた古刹では、さらにもう一つの絶句を詠んでいる。

(OR1114)

三千年古刹。    三千年の古刹  
一萬卷遺經。    一万巻の遺經

試問往時事。 試に往時の事を問へば

山風吹月青。 山風（さんふう） 月を吹いて青し

（大意：三千年も続いているという由緒ある古い寺、一万巻も遺っているという古い経典、昔のことを老僧に尋ねても答えはない。ただ山風が吹いて、月の青い光が辺りを照らすばかりである。）

この古刹で一行は、荘厳な塔をみたが、日本語を理解するという老住職とも会った。試みに簡単な言葉を二三語で話しかけてみたが、この人物からの日本語の反応は無かったことが記されている。「山風吹月青」の中の「山風」という言葉は、杜甫の漢詩「鐵堂峽」の中では、第一句に「山風吹遊子（山風 遊子を吹き）」<sup>24</sup>という用例がある。山風は山から吹き下ろす風であって、老住職との名残を惜しむ旅人である柳北の姿が想像できる。

### 3 英国の亜細亜地域への進出

#### （1）英国人の横暴への批判

錫狼では、和蘭から英国に支配者が交替した歴史の興亡や仏教文化に接した柳北は、徐々に世界観を広げていったと考えられる。また文明国である西欧人の裏側を見る機会もあった。明治5（1872）年10月18日の記述に以下のようなことが書かれている。

此夜英客水夫ト爭論シ水夫罰ヲ受ケテ囚ハル事英客ノ喫烟ニ起ルト云フ衆皆英客ヲ直シトセズ

また柳北によって書かれたとされている『松本白華航海録』<sup>25</sup>には、以下の記述がある。

夜、英人与水夫論事、水夫見繫。英人暴行可憎。蓋喫烟云々。

柳北も他の乗客も、英国人の横暴な様子を許しがたいとしている。英国は18世紀には米国の独立などで北米での支配力は失っていたが、19世紀には中近東、インド、太平洋、アフリカでの支配領域を拡大していたのである。英国はヴィクトリア（Victoria）朝（1837-1901）の繁栄期であり、西欧でも有力な文明国であった。世界の主導権を把握していた英国の乗客を怒らせたということで、水夫は罰せられたのであった。水夫の人種についての記載はないが、柳北の船室には黒人の客室乗務員が勤務していたことが記されているので、水夫も亜細亜系かアフリカ系であると考えられる。

柳北は乗船後まもない明治5（1872）年9月17日に、黒人の客室乗務員が奉仕する様子を絶句に詠んでいる。<sup>26</sup>

（OR1004）

艙外鶏鳴燭影残。 艙外（そうがい） 鶏鳴きて燭影（しょくえい）残す

蠻奴捧水白陶盤。 蛮奴（ばんど） 水を捧ぐ 白陶盤（はくとうばん）

無端驚覺家山夢。 端（はし） 無く驚き覚む 家山の夢。

憾枕濤聲客膽寒。 枕を憾（ゆるが）す濤聲（とうせい） 客膽（かくたん）寒し

（大意：船艙の外では、鶏が鳴き未だ夜のほとぼりが残っていた。アジアかアフリカ系らしいボーイが白い陶器の水盤に洗面用の水をいれて捧げもっている。扉をノックする音に起こされて故国の夢を破られて眼が覚める。枕を揺り動かす風濤の音に船旅の自分の心はひやりと恐れを覚える。）

「蠻奴」というのは日本人以外の人種で、柳北の目に映った黒人もしくは東南亜細亜人は、全て異国の人であって、日本人とは異なる人種であることを強調するための表現である。日本より文化的には遅れていた亜細亜系かアフリカ系の人間を一人の人物として絶句に詠みこんでいる。

柳北が親しくしていた大沼枕山にも「蠻（蛮）奴」という言葉を用いた詩作「書事、次元日韻」<sup>27</sup>がある。ここでは亜細亜系かアフリカ系の人ではなく、西欧人に対して用いられている。枕山の作品を以下に記す。

書事、次元日韻	事を書す。元日の韻を次ぐ。
騎隊風腥花失馱	騎隊 風は腥さく 花 馱りを失す
練兵人尽出宮幃	練兵 人は尽く宮幃を出ず
店沽醕酒春游悪	店は醕酒を沽って 春游悪しく
肆鬻昏油夜課非	肆は昏油を鬻いで 夜課非なり
洋吏攫金俄得沢	洋吏 金を攫んで 俄かに沢を得
蛮奴食肉更加肥	蛮奴 肉を食いて 更に肥を加う
王正不見冠裳美	王正 冠裳の美を見ず
毛布家家製窄衣	毛布 家家 窄衣を製す

この作品は慶応 3（1867）年正月に詠まれた七言律詩であり、『枕山詩鈔』三篇下に収録されている。「蛮奴食肉更加肥」の部分には、「西洋人どもは肉を食べて、いよいよ肥えている」という訳がつけられている。

柳北と枕山の交渉は、枕山が安政 6（1859）年『枕山詩鈔』（3 冊）編集刊行した際に、序文を柳北に乞うたことに始まるとされている。しかし柳北はこれを辞退したとされており、その後は「基本的には詩酒の世界を守りながらも、時には「天下の事」に心を乱されつつ、市井の詩人として」、<sup>28</sup> 明治維新迎えたのであった。

枕山の詩から「蠻奴」という表現の影響を受けた柳北は、亜細亜系かアフリカ系の人間を表すことに用いている。それは差別的な視点で亜細亜系かアフリカ系の人間を見ているわけではなく、日本人以外を指している言葉として用いている。枕山が西洋人を異国の人と表現しているのと全く同じ発想であった。

## （2）英国の海外への進出

後日、柳北一行が訪れた明治 6（1873）年頃の英国は、自由党のグラッドストーンが首相であった。しかし 1872 年 6 月 24 日には、野党であった保守党（トーリー党）のディズレーリが「水晶宮演説」<sup>29</sup>を行うなど、帝国主義政策の必要性も叫ばれていたのであった。この当時の英国は以下のような状況であった。

イギリス政界においては、六八年にディズレーリが保守党党首、グラッドストーンが自由党党首の座について以来、帝国主義政策を掲げる保守党と反帝国主義を掲げる自由党との対立という図式が明瞭になりつつあった。もっとも、自由党も、自由貿易の強制を通じて他国を経済支配しようとした点で、反帝国主義というより自由貿易帝国主義とみなされるべき見方もある。結局、七四年総選挙において、保守党は自由党に大勝を博し、保守党ディズレーリ内閣の下、イギリスの帝国主義政

策は新たな展開を見せるようになる。<sup>30</sup>

英国は1857年の印度大反乱（セポイの乱）によって、体制が動揺したが1858年には東インド会社を廃止して、印度を直接支配下においた。これ以後印度は英国の最も重要な植民地となった。

中国に対しては、1840～42年のアヘン戦争で香港島を植民地として、中国本土の五港を強制的に開港させて以後仏国と共同で砲艦外交を展開した。次に1856～60年の第二次アヘン戦争（アロー戦争）での武力行使を通じて自由貿易を押しつけられた。さらに1860年10月には北京条約を締結し、九竜半島の一部割譲と賠償金の支払いと、天津等の十一港を開港させたのであった。他の亜細亜の国々には、砲艦外交を展開して、友好通商条約を締結させた。それはペルシア、トルコ、シャム（タイ）、日本（1858年エルギン条約）<sup>31</sup>であった。

明治維新前の日本では幕府が安政5（1858）年に、米・蘭・露・英・仏と修好通商条約を締結していた。幕臣であった柳北は不平等条約の内容をよく理解しており、外遊によって、英国をはじめとする西欧諸国による亜細亜地域への支配を直接目にするという体験を深めたと考えられる。

## 4 西亜細亜から西欧へ

### （1）運河周辺

やがて柳北一行は西亜細亜に到達して、10月20日には新航渠（スエズ運河）を通過した。スエズ運河は仏国のレセップスにより1869年に完成された。起工は1859年で、運河の建設に当時の英国は反対していたが、後にその主たる利用者となった。柳北は新航渠の通過直後の様相を「午下一時港ヲ發シ新航渠ニ入ル兩岸赤地渺茫トシテ寸草ヲ見ズ時ニ駱駝ノ沙上ニ臥スヲ認ム」と記している。この時用いている「赤地」という語は、草木のまったくない土地、旱魃などのために作物がみのらない土地を意味している。「赤地」は古来の日本の文献の中に用例がある。『本朝文粹』の巻第二巻「減服御常膳并恩赦詔」（菅三品）においては、「園圃不見青草之色。壠陌多含赤地之愁。」<sup>32</sup>の用例がある。また『羅山先生文集』や、『漢書』にも用例のある語であり、柳北が古典の知識を活用して海外の風景を描写していることがうかがえる。

柳北が新航渠を通過した翌年の明治6（1873）年7月27日には、維新政府の岩倉使節団も新航渠を通過した。『米欧回覧實紀』の中では、柳北が「赤地」と表現した部分について、「赤野」という語が使用されている。「赤野黄埃」「蘇士府ハ、港浜ニヨリ、赤野ノ中ニタツ」<sup>33</sup>という記述がある。

22日にはポルサイトの新港に達した。ここも埃及（Egyp エジプト）領であり、柳北は蘭人コーク氏に誘われて上陸し、ホテルで飲酒を楽しんだが、町の清潔な様子を記している。その際の絶句は以下のものであった。

（OR1040）

新浦頭開海色妍。	新埔頭（ポートサイド）	開けて	海色	妍（けん）なり
南來北去萬帆懸。	南來北去	万帆懸かる		
千年砂磧無人地。	千年	砂磧（させき）	無人の地	
築起樓臺數百椽。	築起す	楼台數百椽（てん）		

（大意：新しい港が開けて、海の色も美しい。南北に往来する多くの船の帆が港内に翻っている。ここでは幾千年もの砂磧が積もった無人の地であったが、今や運河の港として開け、多くの楼台が建てられている。）

柳北が新埔頭（ポートサイド Portside）での一時に憩う様相がうかがえる。「南來北去」は南北に往来する船の帆の有様を表しているが、この言葉は中国晩唐の詩人杜牧の絶句「漢江」中に類似の表現「南去北來人自老（南去北來人自ら老ゆ）」<sup>34</sup>の用例がある。

## （２）コルシカ嶋付近

やがて 10 月 27 日には、柳北一行は伊国から仏国の沿岸に近づき、以下の記述がある。

二十七日水曜晴陰晴不定今朝甲板ヨリ望メバ右ニエルバ島ヲ望ミ左ニハコルシカ嶋ヲ  
瞻（み）ル島ニ港有リテ人家稠密（ちゅうみつ）ナリ那破侖第一世ノ往事ヲ追想シテ二絶ヲ賦ス

（OR1045）

想君齟齬伴漁郎 想ふ君 齟齬（てんしん） 漁郎に伴ふを  
末路龍潜亦此郷 末路 龍潜 亦た此の郷  
夕日影沈雲影遠 夕日 影沈んで 雲影遠く  
雙巖相對立蒼洋 双巖 相ひ対して蒼洋に立つ

（大意：ナポレン、君が未だ幼い頃に漁師に伴われて働いていたことを。そして人生の最後に帝位を奪われた後に暮らしたのもこの島であった。現在自分の眼下では夕日が落ち、雲がたなびいている。二つの岩が相對して蒼い海にそそり立っている。）

（OR1046）

兵威打破泰西天 兵威 打破す 泰西の天  
屈指茫々七十年 指を屈すれば 茫々七十年  
島嶼空存當日景 島嶼（とうしょ） 空しく存す 当日の景  
英雄成敗付雲烟 英雄の成敗 雲烟に付す

（大意：ナポレオンの軍隊の威力はヨーロッパの空を揺るがした。それから指折り数えると、はるか七十年の歳月が過ぎた。コルシカ島の島々は空しく当時の風景を遺している。ナポレオンの人生が失敗か成功か、それは人知の及ぶ所ではない。あの雲にその判断をゆだねよう。）

（OR1045）の句で、那破侖第一世（ナポレオン Napoleon I, 1769-1821, 在位 1804-14.15）を現下のコルシカ（Corsica）嶋を描きつつこれを偲んでいる。（OR1046）の句でも、まず起句と承句では過去の時間の流れを辿りながら、那破侖第一世に同情しつつこれを偲び、転句の「島嶼空存當日景」では同空間内の眼前の光景としてコルシカ嶋が描かれ、「英雄成敗付雲烟」とナポレオンの生涯が成功か失敗は、人知の及ばぬ所であり、あの雲に判断をゆだねることとしよう述べている。

日本に那破侖第一世の明確な情報が伝えられたのは幕末で、長崎の和蘭商館を通じてであった。文政元（1818）年長崎を訪れた山陽は、那破侖第一世のモスクワ遠征に参加した従軍医であった、出島の和蘭人医師から那破侖第一世の事績を聞いて「仏郎王歌」を詠んだ。その結果、山陽の詩作「仏郎王歌」によって武士や庶民に那破侖第一世の名が知られるようになったのである。

幕末の那破侖第一世の受容の捉え方については、以下の指摘がされている。

つまり、文学的・詩的詠嘆の対象として受容されたナポレオンは、海外情報に関心を持つ一部の蘭

学者の研究対象となっていき、他方で、幕末の志士の行動学理として受容されながら、国内外の軍事的緊張が高まるなかで実用的な軍事知識を体現する軍事家としても受け入れられるようになったと言えよう。<sup>35</sup>

旧幕府の中枢にいた柳北は、仏国からの軍事顧問と交流しており、一般の武士よりもさらに深く那破侖第一世の軍事面での情報を把握していたことは十分に考えられる。仏国上陸後に、柳北は巴里の那破侖第一世の廟を訪れている。

## 第2節 仏国

### 1 巴里で出会った人々

#### (1) 旧知の仏人

巴里(パリ Paris)に着いた柳北は、到着直後の柳北は旧幕臣の小野弥一、親族の長田銑太郎、栗本鋤雲の養子である栗本貞次郎等と交流し、旧知の仏人シャノワース(「航西日乗」中ではシアノン)とも再会した。また一方では徐々に維新政府側の人々とも交流の場をもった。旧幕府の軍事顧問であったシャノワースとは旧暦の11月18日に再会している。シャノワースは旧幕時代は那破侖第三世の命を受けて来日していたが、第二帝政崩壊後の当時は第三共和制の下での軍人であった。巴里を離れて渡英する際にも、柳北はシャノワースを訪ねて別れの挨拶をしている。シャノワースに対しての絶句はないが、その誠実な人柄に感謝する思いが、新暦の明治6(1873)年1月19日の記述に見られる。

舊識シアノン氏ヲ訪ヒ往年ノ交誼ヲ謝シテ始テ其内室ニ面ス氏ノ書室ニ余ガ曾テ贈リシ日本刀一及ビ江戸名所圖繪一部ヲ置ケリ且ツ余及ビ荊婦ノ寫眞モ亦氏ノ寫眞帖ニ挿ミテアリ氏ノ舊情ヲ忘レザル寔ニ感嘆ニ堪ヘタリ我ガ邦人ニシテ故舊ヲ視ル路人ノ如キ者夥シ豈ニ慙愧セザルヲ得ンヤ

柳北は仏人のシャノワースと旧交を温めつつも、日本人で旧知の人の中には自分を全くの他人のように扱う人々がいて全く恥ずかしいと述べている。

#### (2) 岩倉使節団の人々

岩倉使節団の随員であった安藤太郎(弘化3(1846)年-大正13(1924)年)は、旧幕臣であったが、函館戦争で降伏後に政府に出仕していた。11月7日に柳北は安藤から米国についての情報を得た喜びを「余ノ爲メニ米國ノ人情ヲ説キ深更ニ及ンデ寝ニ就ク」と、記している。また同様に使節団の随員であった島地黙雷(天保9(1838)年-明治44(1911)年)とも柳北は交流をもった。黙雷は浄土真宗本願寺派(西本願寺)の僧侶であり、明治以降は本山改革に従事していた。柳北は黙雷とは短期間ではあるが、親しく往き来をした。やがて伊国に出発した黙雷は、柳北への手紙を伊国から仏国に向う日本人の渋澤誠一(天保9(1838)年-明治45(1912)年)たちに託したのであった。柳北は明治6年(1873)3月7日、黙雷との別れの絶句「別島地黙雷」(OR1061)を詠んでいる。同じ頃に日本へ帰国する塩田三郎(天保14(1843)年-明治22(1889)年)に対しても、柳北は「送塩田三郎歸本邦」という絶句(OR1079)を残している。塩田は旧幕臣であり、旧知の間柄であったが、黙雷とは巴里で初めて出会った間柄であった。黙雷との別れの際の絶句を記す。

(OR1061)

客身同値海西春。 客身同じく値（あ）ふ海西の春  
来燕去鴻情更親。 来燕去鴻情更に親しむ  
何事夢間添一夢。 何事ぞ夢間 一夢を添（そ）ふ  
他郷翻送故郷人。 他郷翻（ひるがへ）つて故郷の人を送る

（大意：君と私は、旅人どうしの身でヨーロッパの春に巡り会った。春にやってくる燕、去ってゆく雁も、旅であればこそしみじみ感じられる。思いがけなく夢の中で、また夢を見るように。この異郷の地でさらに故郷の人である君（島地君）を見送らねばならないのだ。この度の君との別れは本当につらいことである。）

「客身」は、杜甫の詩「春日江邨五首」の第二首（「杜少陵詩集」卷十四）に「客身逢故舊」<sup>36</sup>の用法がある。また「他郷」は杜甫の「寄岳州賈司馬六丈・巴州巖八使君兩閣老五十韻」（「杜少陵詩集」卷八）に「他郷饒寐夢」<sup>37</sup>の用法があつて、杜甫の作品が念頭にあつた可能性も考えられる。交際期間の短い黙雷に柳北が礼を尽くした絶句を残したことは、二人が互いに理解しあえたからと考えられる。黙雷は帰国後に西本願寺の内部を改革し、また大教院から真宗各派を離脱させて、大教院を廃止に導いた。大教院の整備に取り組もうとする黙雷の姿勢に柳北は共感したと考えることも可能である。

柳北は岩倉使節団に対しては、恭順な態度で接している。明治5（1872）年11月16日の記述には、以下の事が書かれている。

十六日月曜晴本日我ガ大使岩倉右府木戸大久保諸公英國ヨリ來タリプレスボルク街ノ旅館ニ着セラ  
ル

ここで「我ガ大使岩倉右府」と、維新政府側の外遊の団長である岩倉に敬意を払った表現をしている。新暦で新年となった明治6（1873）年1月3日には、旧幕臣である栗本貞次郎・長田銈太郎の仲介により団長の岩倉具視に新年の挨拶に出向き、伊藤博文とも歓談の場をもった。1月22日には、「現如上人ト再び大使館ニ赴キ岩倉木戸大久保諸公ニ陪シリユキセンビルグノ天文台ニ赴キ諸器械ヲ觀ル」の記述がある。さらに裁判の模様や、刑務所内を見学した。この日の記述は『米欧回覧実記』第47巻にも同様の見学が記されているので、柳北たち東本願寺の一行が使節団と終日行動を共にしたことが理解できる。2月16日には、柳北は古金貨を入手して、木戸孝允に届けている。これは木戸の趣味も古銭の収集であり、同じ趣味をもつ柳北が木戸の依頼を受けて届けたのである。後に柳北は木戸と西南戦争の最中に京都で邂逅した。<sup>38</sup>

巴里での柳北は旧来の仏人シャノワーズや、縁者である旧幕臣の他に、岩倉使節団の一員であつた元長州藩士の木戸孝允や浄土真宗本願寺派の島地黙雷との交流もあつた。柳北は明治2（1869）年の山陽道への旅行では「航薇日記」を著して、江戸から日本各地の人々を見ることへ社会を見渡す視線を広げた。さらに海外での旧幕臣系ではない日本の人々との交流を通じて、彼らの中に今後の日本を思う姿勢を感じ取っていた。

## 2 第二帝政から第三共和制の中で

### （1）那破命第一世への追懷

明治6（1873）年1月9日に、柳北は旧幕臣の西村勝郎等と共に那破命第一世の廟を訪れた。柳北は瑪瑙のような光沢のある墓碕などの荘厳さを称えて、「實ニ宇内ノ墳墓此レト相匹スル者罕ナル可シ」と



述べている。さらに以下の絶句を詠んでいる。

(OR1054)

晒彼驪山鉤九泉      晒（わら）ふ彼の驪山（りざん）に九泉を鉤（とぎ）すを  
祖龍血肉霎時烟      祖龍の血肉    霎時（せんじ）に烟  
英雄身後無遺憾      英雄の身後    遺憾無し  
玉碣巍然億萬年      玉碣（ぎょくけつ）巍然（ぎぜん）たり億万年

（大意：始皇帝が死後の世界の平安の祈り驪山に墳墓を築いたのは笑うべきことである。始皇帝の肉体は瞬時に一片の煙となってしまった。かのナポレオン一世は、死後に思い残すことなどなかったであろう。ナポレオンを称える玉碣は巍然として、永遠に残るかのようにそびえ立っている。）

起句ではまず、始皇帝が死後の世界の安寧のために驪山に墓を築いたのは、笑うべきことであると述べ、承句ではその理由として死後の平安を願った始皇帝の肉体が一瞬の内に煙となってしまったからであると述べている。また始皇帝の肉体が煙となって墳墓は不明であるとしているのは、明治 6（1973）年当時は未だ始皇帝陵や兵馬俑の発掘がなされていなかったからである。始皇帝陵と兵馬俑の存在は『史記』などに記されていたが、長い歴史の中でその存在が不明であった。1974 年に驪山地区の住民が井戸を掘ろうとして土を掘っていた際に、兵馬俑が偶然発見され、1987 年には始皇帝陵や兵馬俑が世界遺産に登録されている。<sup>39</sup>

また転句では英雄那破侖は死後に思い残すことはなかったであろうと述べ、結句では玉で作られた碑が、永遠に堂々と聳え立つと、廟が永遠のものであることを強調している。コルシカ島付近で詠まれた絶句（OR1046）では結句で「英雄成敗付雲烟（英雄の成敗雲烟に付す）」と、那破侖の事績が歴史の中で儚い煙のようであるとしているが、この廟で詠まれた絶句では結句で那破侖第一世の永遠性を称えている。

「航西日乗」中で廟を去る直前には「尋常ノ思想ヲ以テ妄誕ナリト爲ス勿レ」と柳北は記しており、那破侖第一世の玉碣に象徴される英雄の事績に対しては、尋常な思想から事績をでたらめであると批判めいた考え方を示している。

## （２）那破侖第三世への追懷

柳北が那破侖第三世（ナポレオン Napoleon III, 1808-73, 在位 1852-70）の病没を知ったのは、1 月 9 日であり、「此日那破侖第三世病テ英國ニ殂ス寔ニ痛悼ス可シ」の記述がある。この日 9 日はまた那破侖第一世の廟のある廢兵院を訪れていた。その後の 21 日の「航西雜詩」には「此日各地ノ寺院ニテ路易十六世ノ靈ヲ祭ル又途上那破侖第三世死後ノ寫影ヲ得タリ爲ニ蒼然」の記述がある。ブルボン朝の路易十六世（ルイ Louis XVI, 1754-93, 在位 1774-92）が 1793 年の 1 月 21 日に処刑されたが、その慰霊が 80 年後の 1873 年にも行われていることが記され。さらに柳北自身が那破侖第三世の写真を手に入れたことが記されている。柳北は那破侖第一世ばかりでなく、その甥である那破侖第三世をも偲んだのである。

(OR1064)

勝敗何論鼠猫嚙。      勝敗何ぞ論ぜん    鼠猫を嚙む  
英雄末路奈蕭條。      英雄の末路    蕭条（せうでう）を奈（いかん）せん。  
判他獨逸新天子。      判す他（か）の獨逸（どいつ）の新天子。

高枕而眠從此宵。 枕を高くして眠るは此の宵よりす

(大意：戦争の勝敗など論じて何になろうか。窮鼠猫を噛むの例えもある。英雄ナポレオン三世の末路のは哀れであるが、どうすることもできない。思うに彼のドイツの新皇帝ウィルヘルム一世は、その夜から枕を高くして眠ることができただろう。)

那破侖第三世の失脚の原因は、メキシコ遠征の失敗や獨逸（ドイツ Germany）側のビスマルク（Otto. Bismarck-Schonhausen, 1815-98）の挑発にのった普仏戦争（1870-71）による敗北がその主なものであった。しかし那破侖第三世には、1867 には巴里万博を開催させ、ジョルジュ・オスマン（Georges Haussmann, 1809-91）に命じて首都巴里の都市機能を整備させた功績もあった。

起句の「勝敗何論鼠猫噛」では、新興国であるプロシア（Prussia）が大国である仏国を破ったことを述べ、柳北は日本と同様に歴史の興亡のあった仏国の歴史に共感の意を表している。プロシアは既に1866年の普墺戦争で墺太利（オーストリア Austria）に勝利して、獨逸連邦の中では指導的役割を果たしていくことになる。結句の「高枕而眠從此宵」は、柳北が獨逸皇帝となったプロシア王ヴィルヘルム一世（Wilhelm I, 1797-1888, 在位プロシア国王 1861-88 獨逸皇帝 1871-88）に対して那破侖第三世の亡き夜から、枕を高くして眠ることであろう、と語りかけている。

柳北の旧主、十五代将軍の徳川慶喜（天保8（1837）年-大正2（1913）年）は、幕末に仏国の経済的軍事的援助を頼みとし、那破侖第三世と親密な外交を展開した。柳北もまた仏国からの軍事顧問のシャノワヌと交流しており、那破侖第三世に対して哀悼の念をもっていた。

### （3）近代都市巴里での生活

1月31日の第二首「雪中口占」及び第三首を以下に記す。

(OR1053)

樓臺幾處捲羅帷。 樓台幾處か羅帷（らゐ）を捲（ま）く  
貼綴六花觀更奇。 六花（りくか）を点綴（てんてい）し觀更（さら）に奇なり  
身似邯鄲枕中客。 身は似る邯鄲（かんとん）枕中の客に  
黄梁一夢未醒時。 黄梁（こうりょう）一夢未（いま）だ醒めざる時

(大意：高殿のあちこちの建物、カーテンを巻き上げている。所々に雪が積もっていて、眺めは更に美しい。この大都会の巴里にいる自分は、邯鄲で不思議な夢を見た盧生のようなものである。粟の一種である黄梁（こうりょう）が煮える間に見た夢が未だ醒めていないで、榮華の中に居るかのようだ。)

(OR1063)

四邊鸞鏡咬無塵。 四邊の鸞鏡（らんきやう）咬（こう）として塵無し  
身是水晶宮裏人。 身は是れ水晶宮裏の人  
不識門前三尺雪。 識らず門前三尺の雪  
金爐銀燭滿堂春。 金爐銀燭滿堂の春

(大意：部屋の壁面を飾る四枚の鏡は、清らかで曇り一つもない。自分はまるで水晶宮の人となったかのようなものである。門前には三尺の雪が積もっていることも、この部屋では感じられない。火が赤々と燃える暖炉、明るく室内を照らす銀の燭台、これらによって家中に春が満ちあふれている。)

(OR1053)の「雪中口占」は、雪の中での即興の詩であるが、大都会巴里の中での柳北の思いが詠み込まれている。転句の「身似邯鄲枕中客」では、自分が故事「枕中記」の盧生のように述べている。「枕中記」では、人の世の栄枯盛衰のはかないことが述べられており、粟の一種である黄粱が未だ煮えない間に見た短い夢の中で、主人公の盧生が栄華を極めた夢を見ることが物語られている。

柳北は巴里の雪の中で単に過去の追懷に浸っているばかりではなく、起句、承句で近代都市巴里の様相を述べて、結句ではこの夢が醒めていない状態であると語っている。心底では、近代国家や西欧の文明を肯定的に受け入れざるを得ない柳北の姿が想像できる。

(OR1063)では起句から転句にかけて、外には雪が積もっているのに自分が水晶宮の人になったようであるとし、結句では暖炉の火で温かい室内にいる状態を柳北は述べている。「水晶宮」は水晶で作られたような美しい宮殿を意味しているが、杜甫の「曲江對酒（曲江いて酒に對す）」の中にも「水精宮殿轉霏微（水精の宮殿 轉（うた）た霏微（ひび）たり）」<sup>40</sup>という用例がある。また柳北が幕末に読んでいた寺門静軒の『江戸繁昌記』三篇「愛宕」の段には「或疑水晶宮遊眞上崑崙山」（或は疑ふ、水晶宮に遊ぶかと。真に崑崙山に上る）<sup>41</sup>の用例もある。柳北は先人の文学に親しんでおり、(OR1053)と同様に、その素養の深さがうかがえる作品である。

柳北の心情については、(OR1053)と(OR1063)で読み込まれている夢の世界に、醒めないことを願う柳北の気持ちが詠み込まれ、柳北が近代文明で整備された巴里の生活を快適に過ごしている様子も理解できる。柳北はその後もカタコンベを見学するなど、積極的に西洋文化を吸収する姿勢を見せている。

### 3 巴里での見聞

#### (1) 社会的な関心

多様な人々との交流から、柳北は訪問した地域の社会に対して、積極的な姿勢をとるようになった。柳北は1月22日には岩倉使節団と共に天文台を見学し、次に裁判を傍聴して、その後に牢獄を見学している。特に牢獄では、「獄室内ハ極メテ清潔ニテ我邦ノ圜圉ナドトハ同日ノ談ニ非ズ」と記している。また囚人がマッチの製造などの作業に従事していること等を見た後で、カトリックとプロテスタントの礼拝堂があつて、カトリックの方がプロテスタントよりも広いこと等が記されている。

2月6日に柳北は、旧幕臣の知人とノートルダム寺院に近くの教会の中の死体公示所を偶然通りかかった。遺体の安置については、「屍ヲ置ク室ハ玻璃障ヲ以テ囲メリ」と死者への礼が尽された状態であることを記している。さらに「現ニ老婆ノ死体アリ数日前溺死セン者ト云フ亦教徒ノ慈恵心深キヲ知ル可シ」の記述がある。柳北がキリスト教のヒューマニズムに理解を示し、人間尊重の精神に共感を示したことが考えられる。

#### (2) 芸術的な関心

柳北は西欧の演劇や音楽と接する場も数多くもち、2月20日には「ジミナアジュ」劇場（ジムナーズ座）でアレクサンドル・デュマ・フィス（Alexandre Dumas fils, 1824-1895）の戯曲である『椿姫』を鑑賞した。柳北は椿姫のストーリーを記し、特にヒロインの死去の様子については「情郎ガ父ノ許シヲ得テカメラノ家ニ來タル病者之ヲ見テ喜ビ極ツテ絶スル」と、悲劇的な場面に自身も感動したことが記されている。柳北と『椿姫』との関わりについては、木村毅によって「日本で最も早く、『椿姫』を知ったのは成島柳北であろう」<sup>42</sup>という指摘がされ、さらに木村は以下のように述べている。

すなわち、維新後間のない時で、西洋事情はよく分からず、言葉も通じないのに、観劇感想として

は大體要領を得て、不都合なきに近い。

柳北は日常会話としての仏語を理解することはできたが、演劇としての『椿姫』のテーマに共感したので、そのストーリーを追うことも可能となったと考えられる。

3月12日には仏人ブーセイの案内で、柳北も含む伊国行きの一行はオペラを鑑賞した。場所はル・ペルティエ街のオペラ座であった。柳北は当日演じられた『トゥーレの王の盃』（三幕四場）について、以下のように記している。

其演劇皆古語ヲ用フ殆ど我邦ノ散樂ト趣ヲ同クス而シテ女伎ノ舞踏ニ至テハ他ノ劇場ニ異ナル所無シ唯ダ美麗ヲ極ムルノミ戯中水底ノ景色ヲ示す密カニ銀線ヲ張り中ニ緑藻青萍ヲ貼シタル如キハ實ニ人目ヲ眩セリ

柳北は華麗な展開の当日の舞台に対して「歡ヲ尽クシテ歸ル」と記していて、娯楽性には満足した状況がうかがえる。『トゥーレの王の盃』はルイ・ガレ及びエドゥワール・ブロー台本で、ウジェーヌ・ディアズの作曲であった。仏国の芸術省設立のコンクール優秀作品であり、初演は1873年1月で、柳北が鑑賞したのは初演の二カ月後であったが、評判のよい作品ではなかった。しかしながら、柳北の「航西日乗」での記述は音楽史的には貴重なものであることが中村洪介により指摘されている。

現在、この「完全な失敗作」を上演する劇場は皆無に近い。内外の標準的なオペラ辞典、オペラ梗概集からその内容を知る事も甚だ困難である。それだけに却って、たとえほんの一部、第二幕海底の場の情景の印象だけでも柳北が記して置いた事は、近代日本洋楽史上、珍重すべき一例となろう。<sup>43</sup>

華麗なオペラ劇場での演目が娯楽性優位であったことを、柳北は把握していた。

#### 4 仏国滞在の意義

柳北は仏国では仏人や日本人との交流を通じて、また歴史的な建造物である宮殿等の見学や近代社会の裏側に位置する牢獄の見学、さらに芸術鑑賞等を通じて幅広い見識を養うことができた。柳北が幕末から知っていたボナパルト家の那破命第一世と第三世の栄枯盛衰を目にし、激しい歴史の変遷についての感慨によって、徐々に自分を見つめ直すことを開始していったことが考えられる。また仏国での革命で処刑された路易十六世の慰霊が全国で行われていることも目にした柳北は、過去の政権や王家を偲ぶ風潮があることを知ったのであった。

明治6(1873)年1月9日に、那破命第一世を偲ぶ絶句(OR1054)の中で、秦の始皇帝が驪山に墳墓を造らせた故事を引用し、那破命第一世の石棺は永遠のものであって、思い残すこともなかったであろうという柳北の感慨が述べられている。不老不死を願っていた秦の始皇帝の遺骸は一瞬のうちに烟となってしまったが、那破命第一世は永遠の墓碑によって外国人にも参詣され、歴史の中に存在していることを称えているのである。

また那破命第三世を偲んだ絶句(OR1064)において、「判他獨逸新天子。高枕而眠從此宵。」と述べていることに対して、前田愛は「第二帝政の没落は幕府の瓦解に重ねあわされ、勝ちほこったプロシヤは薩長に擬せられる」<sup>44</sup>と述べている。その他に前田は柳北がトリアノン宮殿を訪れた際に、その内園が

吹上苑に似ていて、旧幕時代のことを思い出したと記している点を挙げている。しかし柳北の巴里滞在は過去への追懐のみで終始していたわけではなかった。那破侖第三世を偲んだ絶句（OR1064）の後に、絶句（OR1053）（OR1063）が掲載されているのであう。特に絶句（OR1053）は「雪中口占」とあるように、即興的に詠んだものであり、後年多少改めた部分があったとしても、柳北の素直な感情が述べられたものと考えられる。絶句（OR1053）の中で、柳北はこの機械文明による社会にいるのは夢のようで、ずっといることができるという率直な願望を述べているのである。那破侖第一世に対して柳北は、成功や失敗を論ずるよりも永遠に記憶される人物としての絶対的な評価をもっていた。これに対して、第三世に対してはビスマルクを中心とした獨逸側の挑発に乗った悲劇の人物としての共感をもったのであった。

柳北は那破侖第一世と第三世を偲んだ絶句を詠み、また革命で処刑された路易十六世の慰霊が仏国で全国的に行われていることを記し、過去の歴史はそれなりに意義があるとしているが、それと並行して現在の生活にも意義があることを婉曲的に述べていると考えられる。さらに社会の裏側を象徴する牢獄の見学の記録や、政府が優秀作と認めたオペラにそれほどの芸術性がないことを記している。

巴里では維新政府側の人々との交流もあり、柳北は明治5（1872）年11月18日には岩倉使節団に挨拶のため大使館に赴き、さらに6年2月17日には此耳義（ベルギー-Belgium）に向かう一行を見送っている。別れに際して仏国で入手した古金貨を木戸孝允と岩倉具視に贈ったりもしたのであった。

### 第3節 伊国

#### 1 伊国での見聞

##### （1）米蘭府（ミラノ）での新聞発行風景の見学

柳北一行の仏国滞在は前後約4カ月であったが、その間3月17日から4月6日までは伊国に滞在していた。仏国に比べると近代国家への出発がおそい伊国ではあったが、柳北は伊国滞在中には新聞社を見学し、また情感のこもった漢詩を残している。柳北はこれからの自分の行く道を模索しており、伊国での柳北の見聞はその後の人生にとって一つの方向を示したと考えられる。仏国や英国での見聞も柳北にとって有意義であったが、伊国では特に自己の感性で受けとめるものが明確となって、柳北に自分自身を省みる機会を与えたものと考えられる。

3月20日に、米蘭府（ミラノ Milano）で柳北は新聞の発行所を見学し、「第十四號ニ住ムソソゾギョ氏ノ家ヲ訪フ新聞紙發兌ヲ業トス頗ル盛大ノ營業ナリ」と記している。新しい機械によって新聞の大量生産の光景に感動した柳北は、さらにその発行部数の多いことや、画法の精妙であることを日本の錦絵と比較して評価している。柳北が見学した新聞社では *Il Secolo* を発行していた。

欧州では英国の『タイムズ（*The Times*）』が最古であり、1785年の発刊であった。伊国ではカヴール（Camillo Benso Cavour, 1810-61）（後のサルディニャ及び統一伊国の首相）が同志と共に日刊紙 *Il Risorgimento* をトリノ（Torino）で発刊したのが1847年であった。柳北が外遊前の日本と伊国のジャーナリズム等の状況を、政治的事項も含めて以下に簡略に示す。

表Ⅲ-2 明治維新前後の日本と伊国の新聞の発行と政治状況

年	日 本	伊 国
1847 年	幕府、彦根・会津藩に江戸湾防備を命じる。	<i>Il Risorgimento</i> 発刊（トリノ）
1860 年	遣米使節団の小栗忠順、新聞発行を主張	<i>L' Osservatore Romano</i> 発刊（法王庁）

	して容れられず。	
1861 年	ロシア軍艦対馬占領事件。	伊国王国建設
1862 年	蕃所調所『官板 バタビヤ新聞』創刊。 (最初の新聞)	羅馬(ローマ)解放をめざすジュゼッペ・ガリバルディ(Giuseppe Garibaldi, 1807-82)の義勇軍、アスプロモンテで政府軍に阻止される。
1864 年	ジョセフ・ヒコ(浜田彦藏)『新聞誌』創刊。	仏伊間に九月協定締結。
1865 年	天皇、通商条約勅許。	<i>Il Secolo</i> 発刊(米蘭府(ミラノ))
1866 年	薩長盟約成る。	<i>Gazzetta bi Venezia</i> 発刊(ヴェネチア)
1868 年 1870 年	明治維新 柳河春三『中外新聞』創刊。 (最初の本格新聞) 『横浜毎日新聞』創刊(最初の日刊紙)。	1870 年 伊国王国、羅馬併合。 <i>L'Opinion Liberale</i> 発刊(羅馬、自由主義的), <i>Liberta</i> 発刊(羅馬、保守的)
1871 年	木戸孝允後援の『新聞雑誌』創刊。	羅馬に遷都。
1872 年	『東京日日新聞』創刊。	ジュゼッペ・マッツィーニ(Giuseppe Mazzini, 1805-72)(統一運動の指導者)死去。

(①世界史小辞典編集委員会. 山川世界史小辞典. 改訂新版. 山川出版社, 2004. p. 838-842. ②朝尾直弘. 角川日本史辞典. 角川書店, 1996. p. 1463-1464 ③春原昭彦. 日本新聞通史. 四訂版. 新泉社, 2007. p. 18-27. ④梶谷素久. 新・ヨーロッパ新聞史. プレーン出版, 1991. p40-41 から筆者作成)

柳北が伊国のジャーナリズムの状況をどの程度把握していたかは不明だが、*Il Secolo* の発刊が 1865 年であったことは新聞社見学の際に説明されていたと考えられる。その場で柳北が日本の新聞発刊の状況を思い出したことは自然な成行きであった。また『中外新聞』の創設者柳河春三は柳北と親交のあった洋学者で、柳北の著作『伊都満底草』には柳屋のあるじ春影の名前でその作品が掲載されている。

伊国については、柳北は既に見聞した仏国と比べて経済的にも貧しい状況であることを把握していた。また識字率も先進国に比べて低かったとされている。しかしそのような伊国の中でも新聞の発刊が盛大になりつつある状況に柳北は感動した。柳北は米蘭府を案内してくれたデロロ氏を厚くもてなし、「夜デロ、氏ヲ旅館ニ招キ之ヲ饗シ百事周旋ノ厚意ヲ謝シ同行ノ寫影本邦ノ金貨ヲ贈ル」と、「航西日乗」中に記している。

## (2) 弗稜蘭(フィレンツェ)での追懐

3 月 24 日に到着した弗稜蘭(「航西日乗」中ではフロラン, 現行のフィレンツェ Firenze) では、土地の人々の話から、「而シテ此府ノ人民猶故君多斯加納王ヲ追慕シテ今ノ伊王ニ心服セズ」という記述も見られる。日本の明治維新の少し前に、伊国ではサヴォイア(Savoia)家が統一後の国王となり、多斯加納(トスカーナ, Toscana)地方は既に 1859 年の伊国奥太利戦争の結果サルデーニャ王国に併合されていた。しかし庶民には旧君主への追懐の念があり、統一後の王家になじもうとしていない様子が描かれている。柳北もまた『柳橋新誌』二編で、維新政府がもたらした文明開化の弊害に対しての批判を展開させている。

3 月 25 日に旧多斯加納(トスカーナ)の君主の宮園を訪れた柳北は、中国の歴史との共通項を見出し

て、「殆ンド姑蘇ニ遊ビ吳王ノ古宮ヲ觀ルガ如キノ想ヒ有リ」と記している。ここには李白（701-762）の七絶「蘇臺覽古」の影響があるとされている。「覽古」とは古跡をみて感慨を述べるという意味であり、また李白は政治的には不遇であった。柳北が自分を李白になぞらえて感想を記していることが理解できる。この七絶を踏まえた柳北の絶句「遊多斯加納王故宮」<sup>45</sup>は以下のものである。

(OR1071)

知有遺民記大家。 知る 遺民の大家を記する有るを  
當年一曲後庭花。 当年 一曲の後庭花。  
石人不語春如夢。 石人語らず 春 夢の如し。  
滿苑藤蕪夕日斜。 滿苑の藤蕪（びぶ） 夕日斜なり。

（大意：メディチ家の遺民である当地の人々が記念碑を築いていることを知った。その一族の繁栄時には多くの人が集まって歌舞の宴が開かれていたことであろう。石像は無言であるが、華やかな往時が偲ばれるのである。庭園はいっぱいにかづらがしげり、それを染めるように夕日が斜めに差し込んでいる。）

柳北の絶句は、旧多斯加納（トスカーナ）大公国の民が元の君主であったメディチ家のことを忘れないでその記念碑を築いていることや、華やかな歌舞の宴がしのばれながらも、庭園いっぱいにかづらが生い茂った様子を詠んだものであり、詩人として立場から多斯加納の人々の行いに共感したことによる創作と考えられる。この詩については、次のような解釈が川口久雄編『幕末明治海外体験詩集』<sup>46</sup>に記されている。

江戸幕府の瓦解とともに公職を辞し、この欧米旅行ののち、明治の浮薄な文明開花を痛烈に批判することになる柳北の、滅びゆくものに寄せる哀惜の情がよくあらわれた作である。底本の評語には「懷古上乘」とある。

次に、柳北が踏まえたとされる李白の七絶「蘇臺覽古」<sup>47</sup>とはどのような内容であったのか、それを以下に記す。

舊苑荒臺楊柳新。 舊苑 荒臺 楊柳新たなり  
菱歌清唱不勝春。 菱歌 清唱 春に勝へず  
只今惟有江西月。 只今 惟（た）だ江西の月有るのみ  
曾照吳王宮裏人。 曾て照らす吳王宮裏の人

ここでは前半で蘇臺周辺の古い庭園や荒れた高台に楊柳が芽を吹いている様子が述べられて、菱摘む女性の歌を聞いているうちに春の悩ましさに堪えられなくなった作者の感慨が表現されている。さらに後半でかつての吳王の後宮にいた西施を月が照らしていた様子を偲んでいる。転句までに現在の荒涼な様相を述べて最後の句で昔の栄華に思いをめぐらしているのである。先述の柳北の「遊多斯加納王故宮」(OR-1071)では承句の「當年一曲後庭花」の部分にだけ往時が偲ばれており、月の代わりに夕日が使われている。

さらに柳北は陳後主（陳叔宝 553-604）の曲を踏まえて第三句の「當年一曲後庭花（當年 一曲の後

庭花)」の部分を作成したとされている。陳後主の曲は以下の「玉樹後庭花」<sup>48</sup>である。

麗宇芳林對高閣。	麗宇芳林 高閣に對す。
新妝艷質本傾城。	新妝の艷質 本傾城。
映戶凝嬌乍不進。	戸に映じ嬌を凝らして 乍く進まず。
出帷含態笑相迎。	帷を出で態を含み 笑いて相迎う。
妖姬臉似花含露。	妖姬の臉は似たり 花の露を含むに。
玉樹流光照後庭。	玉樹の流光 後庭を照らす。

亡国の天子であった陳叔宝は、過去の栄華を偲んで詩を詠んだのであった。李白の「蘇臺覽古」と、陳後主の「玉樹後庭花」という二つの漢詩を踏まえて作られた柳北の七絶「多斯加納王故宮」（トスカナ王宮）は、懷古の情緒を歌い上げた作品として幕府儒官であった菊池三溪（1819-91）に評価されている。後に編纂された『柳北詩鈔』においては、仏国や英国の地では「詠古」と評された作品が存在しないことも伊国滞在の特徴と考えられる。

### （3）羅馬（ローマ）とポンペイ

多斯加納では過去の王室に思いをはせた柳北であったが、後に羅馬での柳北は統一国伊国の皇太子（後のウンベルト一世 Umberto I, 在位 1878-1900）夫妻に丁寧な挨拶をしている。3月27日の記録には、トレヴィの泉付近での以下の記述がある。

デラビ」<sup>49</sup>ノ泉亦古跡ノ一ナリ此處ニテ伊國ノ皇太子及ビ妃ニ逢フ余等帽ヲ脱シテ禮ス太子亦慰懃ニ答禮セラレタリ  
クイリナル宮ハ即チ今ノ王宮ナリ公堂及ビ樓閣園池ノ覽縦ヲ許サル頗ル美麗ニテ有リキ

柳北はこれからの統一国家としての伊国やその王室に思いを馳せていたのである。統一国家の王宮は大変美しく、庭園は一般にも公開されている様子を柳北は記している。

多斯加納地方の人々の過去の王家の追懷の念に共感しつつも、それは中国の歴史でも例のあったことを柳北は自作の絶句の中に詠みこんでいる。柳北はその後南部の那不勒斯府（ナポリ Napoli）を訪れ、ポンペイ（Pompei）の出土品を鑑賞し、人類存亡の歴史に感慨を深めたのであった。4月2日にはポンペイの街を訪れて次のような絶句を詠んでいる。

### （OR1076）

天勝人耶人勝天。	天 人に勝つや 人 天に勝つや
殘楹再映舊峯烟。	殘楹 再び映す 旧峰の烟
酒壚詩壁依然在。	酒壚 詩壁 依然として在り
借問當年有八仙。	借問す 当年八仙有りしやと

（大意：火山灰に埋もれたポンペイの町では天が人間に勝ったのか、あるいは人間が天に勝ったのであろうか。家々の柱も掘り出され、かつて街を埋め尽くした噴火のすごみを映し出している。酒場も詩が書かれた壁もそのまま眼前にあるのである。その当時、この地にも八仙のような酒飲みが住んでいたのではあろうか。）



『柳北詩鈔』ではこの絶句について「實五洲中之一奇境也」という説明があり、柳北にとって伊国の中で最も心ひかれた景色がポンペイであったことが考えられる。火山灰に埋もれた町が再び人間社会にまいもどったことで、柳北は人間や歴史への洞察を深めたこともあったと思われるので、ポンペイの町の人々への追懷の念は、「借問當年有八仙」という表現に表れている。

「借問當年有八仙」の部分には杜甫の「飲中八仙歌」が踏まえられていて、李白以下の唐の八酒仙を想起させているが、明治8（1875）年3月18日の柳北の「陳腐閑語十二号」（『朝野新聞』）にも杜甫の「飲中八仙歌」を踏まえた漢詩が掲載されている。この頃の柳北は、『朝野新聞』の社長としてジャーナリストとしての道を歩んでいたのであった。

## 2 追懷の念と今後の模索

### （1）伊国、英仏の地の王宮

柳北は伊国から仏国に戻り、そのあとは英国を訪れ、さらに米国に渡って帰国したのであった。既に巴里で鳥児塞（ヴェルサイユ Versailles）宮殿を見学していた柳北は「鳥児塞宮」という絶句を残している。

（OR1056）

想曾鳳輦幾回過。 想ふ曾つて 鳳輦幾回か過ぐ  
好与淑姫長晤歌。 好し淑姫と長く晤歌す  
錦帳依然人不在。 錦帳依然たるも人在らず  
玻璃窓外夕陽多。 玻璃（はり）窓外 夕陽多し

（大意：想うに過去のフランス国王を乗せた馬車は何度ここを通り過ぎたであろうか。ここで王は貴婦人と仲睦まじく歌い、それは素晴らしいことであつた。だが当時の素晴らしいカーテンはあるのに、今は住む人はいない。ただガラスの窓の外を夕日が赤々と染めているばかりである。）

過去の王朝の君主たちの栄華を柳北は称えてはいるが、現在の無人の宮殿の哀感を感じたことが詠まれている。承句「好与淑姫長晤歌（好し淑姫と長く晤歌す）」は、『詩経』陳風の「東門之池」の「彼の美なる淑姫、与に晤歌すべし」を踏まえたものとされている。<sup>50</sup> また柳北は「航西日乗」中の11月12日の部分に「此宮ノ内園ハ甚ダ我ガ舊幕府ノ吹上苑ニ似タリ覺エズ感愴ノ情ヲ發セリ」と記している。

また伊国の後に訪れた英国ではウィンザー(Windsor)城を見学し、次のような絶句を残している。

（OR1085）

四野無人訴凍饑。 四野（しや） 人の凍饑（とうき）を訴ふるものなし。  
君主拱黙在深闈。 君主 拱黙して 深闈に在り  
請看靈囿能偕樂。 請ふ看よ 靈囿 能く偕に楽しむを  
麀鹿為群白鳥飛。 麀鹿（いうろく） 群をなし 白鳥飛ぶ

（大意：四方何処の地にも、飢えや寒さの苦しみを訴えるものはいない。帝王は手をこまねき黙って、宮殿の奥に住まうだけである。御覧なさい、王の御苑に諸人が散策を楽しんでいる姿を。古の皇帝たちの庭と同様に、鹿が群れ遊び、白鳥が飛んでいる。）

この作品では、一般の人々に離宮を解放している立憲君主国である英国ヴィクトリア朝の繁栄を称え

ている。またこの絶句のなかには中国古代の君主文王の故事<sup>51</sup>も踏まえられている。

当時の欧州での柳北の訪問国の政治体制や国状と、王宮に代表されるその国の一面を以下の表Ⅲ-3に示す。王朝の変遷や統一された近代国家への道程を辿り始めた時期等を比較して、日本と共通部分が多いのが伊国であることが理解できる。以下に柳北が訪問した当時の国々の状況を示す。

表Ⅲ-3 仏・伊・英の柳北訪問時の状況

訪問時	伊国	仏国	英国
王宮の名称・場所	ピッティ宮殿と庭園 弗稜蘭（フィレンツェ）	ヴェルサイユ宮殿と庭園（トリアノンも含む） 巴里	ウィンザー城と庭園 （一般公開されていた） ウィンザー
王宮の建設者	メディチ家のコジモー 世が改築	ブルボン家のルイ十四 世	ノルマン朝のウィリア ム一世
訪問時の政治体制	弗稜蘭はハプスブルグ 家→サヴォイア家（統一 後の君主）	第二帝政（那破侖第三 世）→第三共和制（那 破侖第三世は英国亡命 中に死去）	ハノーヴァー朝（ヴィク トリア女王）
「航西日乗」中で柳北が 訪問先の王朝について 詠んだ詩	先の君主（メディチ家と ハプスブルグ家）への追 懐。 明治6年3月25日 知有遺民記大家。 當年一曲後庭花。 石人不語春如夢。 滿苑蘿蕪夕日斜。	旧幕府時代への追懐、仏 国の過去の王朝の栄華 を称える。 明治5年11月12日（旧 暦） 想曾鳳輦幾回過。 好与淑姬長晤歌。 錦帳依然人不在。 玻璃窗外夕陽多。	離宮を解放した英国王 室の徳を称える。 明治6年5月16日 四野無人訴凍饑。 君主拱默在深闈。 請看靈囿能偕樂。 麀鹿為群白鳥飛。
中国文学の影響	李白「蘇臺覽古」 陳叔宝「玉樹後庭花」	陳風「東門之池」	文王（周）の故事 孟子「梁惠王」

①北原敦. イタリア史. 山川出版, 2008. p. 年表 31-41. ②福井憲彦. フランス史. 山川出版, 2001. p. 年表 36-45. ③川北稔. イギリス史. 山川出版, 2004. p. 年表 27-35. から筆者作成)

仏国での王宮見学は日本の幕府と過去の仏国の過去の王朝の栄華をうたうことにとどまった。それは既に君主制から共和制に移行されていて、周囲の人々が共和制の元で近代国家への道を歩んでいたからと考えられる。また那破侖第三世(1808-73、在位 1852-70)は那破侖第一世(1769-1821、在位 1804-14, 15)の甥で、コルシカ出身のボナパルト (Bonaparte) 家は長い歴史を仏国に刻んできたわけではなかったのである。その政権基盤は「立法・行政の権限を独裁し、新聞や労働者への統制を強め、同時に対外戦争によって自己の威信の保持に努力した。」<sup>52</sup>ことで支えられていたとされている。また英国では既に議会政治が浸透し、ヴィクトリア女王の治世下で近代国家への道を歩んでいた。柳北が王家を称える漢詩を詠んでも当然なことである。

柳北の七絶「多斯加納王故宮」は、懐古の情緒を歌い上げた作品として幕府儒官であった菊池三溪

(1819-91)に「詠古」として評価されている。後に編纂された『柳北詩鈔』においては、仏国や英国の地では「詠古」と評された作品が存在しないことも伊国滞在の特徴と考えられる。

## (2) ガリバルディへの評価

伊国での柳北については、田中彰が『岩倉使節団「米欧回覧実記」』において取り上げている。田中は「航西日乗」と「米欧回覧実記」との伊国の記述について比較を行っている。その中で田中は伊国統一の英雄ガリバルディ (Giuseppe Garibaldi 1807-1882) について『米欧回覧実記』では評価されているが、柳北は「航西日乗」の中でガリバルディの名前を一切記していないことが注目すべき点であるとしている。

柳北は統一後まもない伊国北部での見聞を記しているが、そこでは柳北自身の日本での生活の中での思いが、伊国の北部の人々の生活の中での思いと情緒的な部分では重なっている。『柳橋新誌』二編では、文明開化の弊害が花街にも影響を及ぼして、幕藩体制下の花街の方に情趣があったことが述べられている。しかし過去への追懐の念を超越して、西欧に学んで行こうとする柳北の姿勢も『柳橋新誌』二編には見られる。ジャーナリズムへの関心のあった柳北にとっては、さらに伊国の古代からの文化に関心を払ったことも考えられる。しかし柳北はガリバルディを無視していたわけではない、後年『朝野新聞』にその略伝が掲載されている。柳北の伊国滞在は明治6年(1873)3月17日から4月6日までのほぼ20日間であったが、新聞社見学等の貴重な体験をもつことができたのである。柳北はガリバルディについては、「航西日乗」では言及していないがガリバルディの略伝を『朝野新聞』に明治12年6月末頃には連載している。

『米欧回覧実記』では、ガリバルディについて久米邦武が「志節ヲ全クシ」<sup>53</sup>という評価を与えている。それはガリバルディが元来は共和主義者で、またカヴール(サルデーニャの首相)に対し深い嫌悪感を抱いていたにもかかわらず、最終的には伊国統一に貢献したからである。那破侖第三世とカヴールの間で取り交わされたプロンピエールの密約に失望したガリバルディは、一時期サルデーニャ王国から離反し、千人隊を率いて南伊国を征服した。しかし「伊国統一の大義のために、征服した南部をサルデーニャ王国に献上した」<sup>54</sup>のであった。

柳北が「航西日乗」の中でガリバルディに対して言及していないのは、伊国滞在中の1873年にはガリバルディはカプレーラ島で生活しており、世俗から退き余生を過ごしている彼の中には特に共感をもつこともなかったことも一因と考えられるが、田中は柳北のトスカーナ住民の元の君主への追懐を踏まえた上で次のように論じている。

すなわち旧幕臣柳北にとっては、新政府の使節団が注目した伊国統一王国の成立とそれをめぐる「英傑」よりも、その統一後の伊国王エマヌエレ二世(サルディニア王一八四九～六一年、伊国王一八六一～七八年)に対してフローレンスの人民たちが心服せず、旧トスカーナ王を追慕しているという事実の方が印象的だったとみてよい。とすれば、柳北がガリバルディに一言もふれないのはけだし当然であろう。<sup>55</sup>

柳北は外遊によって西洋文化の吸収を目指していたが、一方では幕臣として西欧諸国の政治体制の裏側にあるものに目を向けていたと考えられる。柳北より以前に、幕臣であった栗本鋤雲(文政5(1822)年-明治30(1897)年)は慶応2(1866)年11月に外国奉行、翌年には勘定奉行となつて、幕府の使節の一員として仏国を訪れた。そこでのガリバルディについて「曉窓追録」の中で「狂妄ヲ不免ト雖トモ

亦一個ノ奇男子ナリ」<sup>56</sup>と記している。当時ガリバルディはローマ法王と結んだ仏国の軍事力に敗退した直後で、未だ伊国の統一は完成していなかった。田中彰は、鋤雲のガリバルディ観については、ガリバルディの敗退は薩長と天皇との結びつきの前に敗退した徳川幕府の敗退に通うものがあるので評価をしていると述べている。

旧幕臣二人（鋤雲と柳北）のガリバルディの評価について、田中は「少なくとも『回覧実記』における評価の視点とは異なる」<sup>57</sup>としている。田中の意見に従うと、柳北の旧幕臣としての立場は、海外を見聞中にも常に心の底に存在していたのである。トスカーナでの絶句は、元の君主を追慕していた庶民の姿に旧幕臣としての自己の立場を重ねあわせていたものであり、それは『幕末明治海外体験詩集』の中でも「江戸幕府の瓦解とともに公職を辞し、この欧米旅行ののち、明治の浮薄な文明開化を痛烈に批判することになる柳北の、滅びゆくものに寄せる哀惜の情」<sup>58</sup>があることが指摘されている。

### 3 伊国見聞の意義

#### （1）追懐から自己を見つめ直して

伊国の多斯加納では追懐の念に浸った柳北ではあったが、一方では近代の統一国家伊国にも関心をもっていた。ローマでの柳北は統一国伊国の皇太子（後のウンベルト一世）夫妻に丁寧な挨拶をしている。西欧の文化に対して、幕臣時代から関心をもっていた柳北には、日本の国の文化の進展に参加をしたいと考えていたのである。それは渡航前に学校で子どもたちの教育に当たることや、また翻訳局の設置に向けての渡航に参加することに表れている。柳北は統一後まもない伊国を目にして、多斯加納では過去の王朝の追懐の世界を目の当たりにした。またローマでは統一後の近代国家の君主に礼を尽した挨拶をしている。柳北の忠誠への考え方の特徴については、乾照夫が以下のように述べている。

柳北における忠誠は、もとより主従の情誼にもとづく人間関係によって規定されたいことにはちがいないが、その関係を補強するはたらきをもっていたのは、過去の主恩とそれに対する父祖の「奉公」を歓迎する意識、いわば成島氏の精神的伝統に対する忠誠の意識であったと考えられる。<sup>59</sup>

柳北は後年、『花月新誌』上で祖父司直の「みるめのさち」や父稼堂の『紫史吟評』を掲載するなど成島氏の精神的伝統への忠誠意識を重視していた。乾の指摘を踏まえて柳北の忠誠意識の内容を以下に記す。

#### ①柳北の幕臣としての忠誠意識

柳北の祖父司直も水野忠邦の頃の幕政に批判的な視点を持っており、それについて大島隆一は『柳北談叢』の中で、以下のように述べている。

かういつた學究的な反面、幕政についても多大な關心をもち―「奥儒者成島司直、幕府に上書して水野忠邦の専横を訴え、諸弊の改革を請ふ」（「國史大年表」）とあるやうに、ときの老中・水野忠邦の政策にたいして、けつぜん、たつことを辭さなかった。<sup>60</sup>

また柳北は慶応4（1868）年の2月に將軍慶喜が上野の大慈院に入り、謹慎の意を表した際に、さらに慶喜に単身での上京を勧めた。それについては、以下の見解もある。

芳賀矢一博士は、—「慶喜ノ罪ヲ東叡山ニ待ツヤ、柳北公ニ勸メテ單身上京シテ罪ヲ闕下ニ謝セントス。用ヒラレズ。」（『日本百科大辭典』）と、いはれてゐる。<sup>61</sup>

柳北の意見は採用されず、そこで柳北は自ら隠居願ひを出して幕閣を辞したのであった。柳北の忠誠は將軍に媚びへつらう性質のものではなかった。先祖代々奥儒者としては従臣であると同時に將軍の教師に等しい立場でもあったので、大局的な立場で徳川家の行末を案じていたのであった。維新によって市井の人となった柳北は、「遷上隠士傳」の中で自分を「無用」と記している。しかしその後国内旅行などで次第に柳北は、社会への目線を江戸から関西・中国地方へと拡大し、「航薇日記」が著された。

## ②帰国後の忠誠意識

海外体験の中で柳北は徳川家の臣という帰属感から、徐々に日本の国の構成員としての帰属感が芽生えて、巴里では維新政府側の岩倉や木戸との交流を持つに至った。その後の伊国では過去の王朝を偲ぶ人々に共感して漢詩を詠んでおり、歴史への思索を深めたのであった。

帰国後、柳北は明治7（1874）年9月に『朝野新聞』の局長に就任するが、その直前の8月に北陸地方を旅行し、帰途関原を通った際に漢詩「八月十一日過關原慨然賦此」を詠んだ。その終わりの部分は以下の様である。

（RH6024）

夕陽滿原飛鳥盡	夕陽（せきやう）	原に満ちて飛鳥（ひちょう）盡く
風拂秋草碧離々	風拂ひて	秋草碧離々（しゅうそうみどりりり）たり
雲山猶存當日態	雲山	猶ほ存す當日の態（さま）
想見笑結冑纓時	想見（そうけん）す	笑つて冑纓（ちうえい）を結ぶ時

この部分ではまず、夕陽は野原一面に広がり飛ぶ鳥の全てにあたっている。秋草は風にそよぎ、碧に繁茂している。雲のかかった山はなおも当時の様子を知っているかのようであると述べてる。次にその当時を思い浮かべると、合戦が勝利をした後に家康公が笑いながら初めて冑の纓を結ぶ姿が偲ばれるという感慨を詠んでいる。柳北は新聞社の局長就任がまじかに迫っても、徳川幕府の礎を築いた家康への敬意を忘れはしなかったのである。

乾照夫は維新後の柳北の忠誠意識の対象の基底が「文明」に変容し、また「徳川氏への忠誠は『私的』な意味でのモラル」<sup>62</sup>となったと『成島柳北研究』述べているが、過去の君主を尊重し記念するという伊国の人々の姿勢に学んだ柳北にとり、徳川氏という歴史上の政権への思いは、果たして「私的」なモラルだけであったのであろうか。後年、柳北は日光東照宮の保存等に取り組むが、東照宮は徳川家康を祀っており、日光はその総本社の存在であった。明治12（1880）年のグラント將軍（Ulysses Simpson Grant, 1822-85）来日の際にその接待役を務めた柳北は、同年7月22日の『朝野新聞』に「晃山廟ノ保存ヲ論ズ」という論説を発表し、文化遺産としての名所旧跡の保存を訴えている。徳川氏も東照宮も、歴史上の意義を認めるという意識は「私的」なモラルの枠を超えた「公的」なモラルと柳北は考えていたのであり、「晃山廟ノ保存ヲ論ズ」の中で以下の様に述べている。

夫れ名勝の地に存する古代の建築の若きは、之を保護して其の不朽を図るは各国政府  
并に人民の共に務むる所ナリ。（『朝野新聞』明治12（1880）年7月22日）

古代の社を偲び尊重するという姿勢は人間としての普遍的義務と柳北は捉えていたので、『朝野新聞』を通じて日光東照宮の保護を読者へ訴えたのであった。

柳北は伊国での体験で遺跡や過去の歴史を尊重する姿勢を学び、同時に幕末から考えていた西欧文化を取り入れる必要性も痛感したのであった。帰国後に柳北は帰属感を旧幕臣から日本の国の構成員でもある領域へと拡大させた。福沢諭吉の啓蒙思想にも共感していた柳北は、忠誠意識の対象であった徳川將軍家に対しては、徳川氏という歴史上の遺産を保護することで奉公を果たしたと考えられる。柳北の忠誠意識の対象は、日本国全体に広域化したのであった。

## （２）「陳腐閑語十二号」での回想

柳北は「航西日乗」を『花月新誌』に発表する以前、明治８年（1875）３月１８日の「陳腐閑語十二号」（『朝野新聞』）に次のように明治５年の外遊時の体験を記している。

然レドモ吾曹欧米ニ航遊セシ時彼の風俗ヲ觀ルニ、文明ノ諸国ニ於テ詩賦ヲ貴重セザル所無シ

柳北は維新以来の自己の文芸への志を回想しているが、柳北自身に対して次のような詩が周囲から寄せられていることも記している。

本以詩豪兼酒豪	本 詩豪を以て酒豪を兼ね
風華狂却十年勞	風華狂却す 十年の勞
日知二報誰優劣	日知（にっち）二報 誰（いづれ）か優劣
輕妙爭如君筆高	輕妙 爭（いか）でか君が筆の高きに如かんや <sup>63</sup>

ここではまず、柳北はもともと優れた詩人であると同時に大酒豪でもあったと述べている。次に維新以来の十年間の苦勞があったとし、『東京日日新聞』と『郵便報知』の二紙と柳北の『朝野新聞』とで、いずれがまさっているのだろうか。輕妙さで、どうして君（柳北）の筆の素晴らしさに及ぶ新聞があるかと詠んでいる。<sup>64</sup>

また柳北に対して、『朝野新聞』社員の沢田春松は杜甫の「飲中八仙歌」の中の「李白一斗詩百篇」を踏まえた詩を詠んでいることが記されている。それは以下のようである。

文壇盟主老逾豪	文壇盟主老いて逾（いよいよ）豪たり。
一斗百篇知不勞	一斗百篇 知んぬ勞せずと
何怪新詩数十首	何ぞ怪しまん 新詩数十首
仍賡前韻豪勞高	仍（な）ほ前韻の豪勞高を賡（つ）げるを <sup>65</sup>

ここではまず、文壇の盟主は老いてますます盛んであるとし、李白のように酒を一斗飲むうちに百編の詩ができてきつと、疲れを知らないのだろうと述べている。さらにそれをどうして怪しむことがあろうか、疊韻して豪・勞・高とそれぞれの韻字にした詩を数十首作っている。<sup>66</sup>

沢田春松の詩の中では、杜甫の「飲中八仙歌」が「一斗百篇知不勞」の部分に踏まえられているが、柳北は伊国のポンペイで詠んだ絶句の最後にも「借問當年有八仙（借問す 當年八仙有りしやと）」と、「飲中八仙歌」を踏まえている。

「陳腐閑語十二号」が掲載された頃、『朝野新聞』の「読余贅評」では、読者投稿の漢詩が大槻盤溪によって批評され、さらに盤溪の詩作も掲載されていた。柳北は順調にジャーナリストとしての道を歩んでいたのであった。このような時期にポンペイで詠まれた漢詩と同様な「飲中八仙歌」を踏まえた漢詩が柳北に寄せられ、それを柳北が記している。柳北にとっては、古代の人々の姿が蘇ったようなポンペイの遺跡の記憶が大変に感動的であったと考えられる。

#### 4 海外体験の中での伊国体験の重要性

伊国から仏国に戻り、英国を訪れた柳北は、さらに米国へ向かった。明治6(1873)年6月1日の大西洋航海中の詩作で「航西日乗」は未完のまま閉じられている。『花月新誌』への掲載は、明治17(1884)年8月8日発行の第153号が最後となったのである。これは柳北の健康上の理由からであった。「航西日乗」は『花月新誌』に連載されたことで、まもなくメディアを通じて当時の社会に浸透した。森鷗外の「雁」の中には「航西日乗」の世界への傾倒をうかがう記述がある。それは「航西日乗」の記述の内容が、柳北が直接に体験した欧米社会の表裏であり、またそれによって当時の日本人は欧米の実態により深く触れることができたからである。

「航西日乗」の中では、特に伊国訪問の記述から、弗稜蘭では中国古代の歴史を踏まえた詩作によって過去の君主への追懐の念を詠んだ柳北が、それと並行して羅馬では統一された国家の形成が必要であることに関心を深めたと考えられる。柳北は維新後に一時期、無用の人間として自己を見失いがちであった。しかし「航西日乗」の背景となった欧米社会での直接の見聞や体験から、柳北自身の帰属感が旧幕臣から日本の国に徐々に拡大していき、日本の国への西欧文化の受容に努めることを使命とする意義を確固たるものにしたと考えられる。

### 第4節 英国

#### 1 英国での見聞

##### (1) 産業革命下での社会の見学

英国に到着した柳北は、明治6(1873)年5月11日、旧幕臣で維新政府に出仕していた大鳥圭介(天保4(1833)年-明治44(1911)年)を倫敦(London)の宿舎に訪ね、「十一日日曜晴大鳥圭介子ヲゴア街ニ訪フ共ニ「クリモアンノ公園ニ遊ブ夜ニ入り燈光晝ノ如ク男女雑踏頗ル熱鬧場ナリ」と記している。

柳北自身は維新政府への出仕を辞したが、大鳥に対しての批判は書かれていない。旧友の一人を訪ねた喜びが、倫敦の雑踏を背景として語られているのは、柳北と大鳥は日本の国や社会での文化の進展が重要であるという点では一致していたからである。柳北は在野の人間として、大鳥は政府の一員として立場は異にしていたが、日本の国の文化の進展が急務という共通な話題があったと考えられる。翌々日の13日に、柳北は同行者の日本人と牢獄を見学し以下のように述べている。

獄内園囿有リ囚人縄ヲ製シ席ヲ織リ煉化石ヲ造リ蔬菜ヲ耕シ婦女ハ衣巾ヲ洗濯ス囚人房内ノ臥床朝ニ収メタニ展ブ佛國ノ法ニ似ザルナリ

社会の裏側ともいえるべき存在である牢獄の内部について、二つの国の比較する点には文明批評の視線がある。5月16日には、柳北は東本願寺の石川舜墓や他の邦人とともにウィンズルカスル(ウィンザー城)に遊び、外国人である自分たちが見学できた喜びを前掲の絶句(OR1085)に詠んでいる。そしてヴィクトリア女王(Victoria 1819-1901 在位 1837-1901)の治世を称えて、「寔ニ感仰ノ至リト謂フ可シ」

と記している。

## （２）産業革命の進展と近代都市倫敦

仏国滞在と同様に、柳北は博物館や宮殿等を訪れたが、5月19日には「倫敦滞留中ノ悪詩ヲ左ニ録ス」と述べ、倫敦についての感慨を絶句「倫敦市上作」二首を残している。

(OR1080)

汽車烟接汽船烟。 汽車の烟は汽船の烟に接（まじは）る  
四望冥々不見天。 四望 冥々（めいめい） 天を見ず  
忽地長風來一掃。 忽地（たちまち）にして長風来りて一掃（いつさう）すれば  
倫敦橋上夕陽妍。 倫敦橋上 夕陽妍（うるは）し

（大意：汽車の煙と汽船の煙が重なり合い、その辺りは暗くて大空が見えない。突然に烈風が吹きわたって、煙が一掃されると、倫敦橋の向こうには美しい夕陽が見えた。）

(OR1081)

頂上晴雷脚底烟。 頂上は晴雷なり 脚底は烟  
一車入地一車天。 一車は地に入り 一車は天  
中間吾亦車中座。 中間 吾もまた車中に座し  
驀過東西陌與阡。 驀（ましぐら）に過ぐ 東西の陌（はく）と阡（せん）とを

（大意：上の方では晴天の雷のごとき高架線の響き、足下には煙が流れている。一車は地中に入り、一車は天を走っている。それらの中間点の地上では自分もまた車中に座っていて、市中の道を縦横無尽に駆け抜けている。）

これらの二首では、産業革命が進行している倫敦の様相が描かれている。(OR1080)では倫敦の橋上で夕日の美しさに感動している旅人柳北の姿が想像できる。産業革命下での汽船の煙で、真っ暗な状況の中にいた柳北であるが、風が突然吹くことで状況は一転する。転句の「忽」は状況を一転させる言葉であり白樂天の作品「雨夜有念（うやおもひあり）」の中に「忽來風雨天（忽ち來る風雨の天）」<sup>67</sup>の用例がある。(OR1081)では、汽車に乗った際の柳北の体験が述べられている。特に地下鉄と高架線が交錯する状況は驚くべきものがあったと考えられる。「驀（ましぐら）」は寺門静軒の『江戸繁昌記』五篇「深川」中に、「遂向東風菴驀進（遂に東風庵に向つて驀進す）」<sup>68</sup>の用例がある。また「陌與阡」は耕地の間に縦横に通じる道のことであり、西洋世界の近代都市の表現に東洋世界の風景を重ね合わせているかのようである。

## （３）繁栄の中で

英国の産業革命は進展していたが、過去の歴史にも輝かしいものがあつた。前掲の(OR1080)、(OR1081)に続いて、柳北は絶句「謁維靈敦之像（ウェルリントンのぞうにえつす）」を詠んでいる。

(OR1083)

莫怪遺容凜有神。 怪しむことなかれ 遺容の凜として神有ることを  
將軍功績足千春。 將軍の功績 千春に足る



輸贏一決窪多路。 輸贏（しゅえい） 一決す 窪多路（オートロー）

擒得驕龍是此人。 驕龍（きょうりょう）を擒（とら）え得たるは 是れ此の人

（大意：怪しんではいけない。この将軍ウェリントンの遺骸を収めた棺の上に、大理石の像容はいかにも凜として生き生きとした潔さがある。ウェリントンの功績は千載も十分に輝きを放ち続けている。彼は19世紀ヨーロッパの歴史の命運をかけた窪多路（オートロー）の戦いで勝敗を一決した。誇り高い龍にも似た英雄ナポレオンを生け捕りにしたのは、まさにこのウェリントンであった。）

柳北がウェリントン（Arthur Wellesley, 1<sup>st</sup> Duke of Wellington, 1769-1852）将軍の像に拝謁して詠んだ句で、那破侖第一世の侵略を防いだ人物としての客観的な評価を下している。「驕龍」は誇り高い龍としての意味であり、那破侖第一世を指し、西欧の歴史に想いを馳せる柳北の姿がある。「擒（とりこ）」は杜甫の「前出塞（ぜんしゅつさい）九首」の第六首に「擒敵先擒王（敵を擒にせば先づ王を擒にせよ）」<sup>69</sup>の用例がある。那破侖第一世の廟では、絶句（OR1054）の中で「英雄身後無遺憾。玉碣巍然億萬年。」と詠んで柳北の那破侖第一世への心情を思いやる配慮を感じられる。しかし（OR1083）では「莫怪遺容凜有神。將軍功績足千春」と、史上の人物としての維靈敦の功績を冷静に述べている。柳北は心情的には那破侖第一世に共感しつつも、英国では維靈敦に礼を尽くしているのである。

柳北は（OR1080）、（OR1081）では、英国の産業革命の様相を述べ、（OR1083）では英国の繁栄の出発点となった歴史の展開を述べているが、さらに現在の英国社会の盛況を以下の「禽獸園」と詠んだ絶句（OR1084）で述べている。

（OR1084）

鐵檻劃園豺虎橫。 鐵檻（てつかん） 園を劃（かざり）りて豺虎（さいこ）横たはる

踏青士女趁晚晴。 踏青の士女 晚晴を趁（お）ふ

誰圖釵影裙香裡。 誰か図らん 釵影（さいい） 裙香（くんかう）の裡に

聽箇空山嘯月聲。 箇（こ）の空山に月に嘯（うそぶ）く聲を聴かんとは

（大意：鉄製の檻の中に入れられ、庭園から区別された囲いの中に豹や狼が横たわっている。花園の緑の芝を踏んで男女の群れが晴れ上がった夕方を楽しみ、そぞろ歩いている。何事であろうか、髪飾りの影はゆらぐスカートからの香りの中にある。かの荒涼たる深山の月にうそぶく虎狼のたぐいの咆哮の声を聞くなどと誰が想像したであろうか。）

「禽獸園」は動物園のことで、1826年に建設され、リージェンツパークの北側に位置していた。ここでは夕方に庭園を歩行する男女の華やかな雰囲気と、その周囲で檻の中に横たわる猛獣の姿が詠まれている。「空山」は人気のない山のことで、王維の作品「鹿柴」に「空山不見人（空山 人を見ず）」<sup>70</sup>の用例があり、（OR1084）では静かな庭園をさしている。繁栄の中で、弱い立場にいる猛獣たちは檻の中の生活に不満をもっているのではという柳北の感慨が述べられている。

またこの禽獸園の動物は当時の英国の人々の大きな関心の的でもあり、新しい動物が入ると新聞に必ず掲載されていたのである。1852年2月2日の『タイムズ』に以下の記事がある。

リージェンツパーク動物園—エジプト太守殿下より賜ったカバ、子ゾウ、その他最近加わった動物たちを常時展示。入場料は一シリング、月曜は六ペンス。<sup>71</sup>

産業革命の進展によって、社会の繁栄に酔う人々もいるが、禽獣園の猛獣は人間のために不自由な生活を強いられているが、これも英国社会の裏側の一つであることを柳北は語りたかったと考えられる。また殆どの猛獣はアフリカ地域などの、英国の支配下や影響下にある国々から贈られてきたものであり、国威の象徴という見方も可能である。

## 2 英国滞在の意義

柳北は欧州の指導的立場にあった近代国家である英国において、近代文明で整備された社会に目を向け始めていた。1714年にステュアート（Stuart）朝が断絶した後にハノーヴァー（Hanover）朝に代わり、当時はヴィクトリア女王の治世であった。柳北が訪れた頃の英国は、以下のような状況下にあった。

十九世紀の第三・四半期、一八五一年のロンドン万国博覧会に始まり七三年の「大不況」の到来にいたる時期は、イギリス近代史上「繁栄の時代」として知られている。この時期は、世界で最初に産業革命を成しとげたイギリスが「世界の工場」として世界経済に君臨し、自由貿易のネットワークが、ヨーロッパのみならずグローバルに確立された時代である。<sup>72</sup>

繁栄の時代に英国を訪れた柳北は、狭義では植民地から連れてこられた動物園の猛獣の中に、大英帝国への不満の念を感じ取ったと考えられる。それは広義では植民地の人々の不満とも考えられる。亜細亜から西欧を船で旅した柳北は、英国の亜細亜支配を身をもって感じていた。また船中での英人の横暴な様子も直接見聞した。

柳北一行は、英国から米国へ渡る際には、阿爾蘭（アイルランド, Ireland）のクインストウン港から出発した。5月25日の記録では、その際乗り合わせた阿爾蘭人と日耳曼（ゲルマン）人の下等船客たちの様子を、「阿爾蘭及び日耳曼ノ下等船客男女諧謔百出人ヲシテ抱腹セシム下賤ノ人ハ東西同ジ情態ナリ」と描写している。阿爾蘭は本来ケルト民族による独立の島国であったが、英国の支配下に置かれており、不在地主である英国人によって貧しい生活を強いられていたのである。

帰国後の柳北は立憲君主制の下での政治への関心から、『英國國會沿革誌』（趙舞尔著）を共同で翻訳し明治12（1879）年に朝野新聞から刊行している。また一方では英国社会の裏側を詳述した翻訳作品「倫敦小誌」を『花月新誌』に連載した。これらの活動は近代国家英国の表側と裏側を見聞した実体験に基づくものであった。

## 第5節 米国

### 1 米国滞在の概要

柳北の米国滞在から帰国については、正確な記録が残されていない。6月1日に紐育（ニューヨーク, New York）着、16日に桑港（サンフランシスコ San Francisco）を出港して7月9日に横浜港着と推定されている。<sup>73</sup> 柳北の遺孫大島隆一は「ニューヨークへついでから、デトロイトを経て、シカゴへ寄り、サンフランシスコへと亜米利加の旅行は、きはめてかんたんであつた。」と、その著作『柳北談叢』<sup>74</sup>の中で述べている。米国での滞在は短期間であったので、見学場所も非常に少なかったことは事実と考えられる。

欧州の国々では、「航西日乗」中の散文の記述に絶句が挿入されているが、米国での記録は「航西日乗」には全くない。「航西雑詩」中の漢詩だけが旅の足跡を物語っている。

柳北が滞在していた1873年当時の米国は、南北戦争（Civil War 1861-65）が終結し、北部の資本が

南部を組み込んだ形で経済を発展させた時期であった。柳北は大陸横断鉄道で米国を横断した。<sup>75</sup> 途中、ネブラスカ州では亜児栩甫浪河（エルクホーン）河を渡っていた時に、橋が崩れるという事故に遭遇した。死傷者は出たが、柳北は難を逃れた。やがて柳北は雄大な山河に接しながらロッキー山脈を通過している。途中で馬斧狼（バッファロー）を見たという僅かな記述が「航西雑詩」中に見られる。柳北は亜児栩甫浪河の事故で命拾いをした後にも旺盛な好奇心から馬斧狼に注目したのであった。

さらに寧婆陀（ネバダ）山脈をアメリカ横断鉄道で通過し、西海岸の都会桑港（サンフランシスコ）に到着した柳北は太平洋を渡り、帰国したのであった。米国での同行者は石川舜臺のみで、現地の道案内人については記されていないが、僅かな人数での大自然の中の旅行には不安もあったことは十分考えられる。しかし柳北は欧米への旅行以前に、唐代の李白や杜甫、『唐詩選』中の詩人たち、宋代の蘇軾や陸游、清代の袁枚や趙翼の作品に親しんでいたもので、雄大で厳しい自然を前にしても怯むことなく情感のある漢詩を残している。

## 2 「航西日乗」未収録の漢詩 後世での評価

柳北の西欧での詩作は、訪問地への挨拶としての作品が多かった。しかし米国では挨拶代わりの作品よりも、柳北自身の心の底からの感動が詠まれている。柳北の没後、朝野新聞の漢詩欄の編輯を行った大江敬香（安政4（1857）年-大正5（1916）年）は「明治詩壇評論」<sup>76</sup>において、他の作者による海外体験の詩作よりも柳北の詩作を評価し、「真に詩人的眼光を以て観察したるものは柳北に始まる」と述べている。敬香は柳北の欧米旅行中の優れた絶句15篇を掲げているが、そのうち7篇は米国での詩作であり、これらは「航西日乗」<sup>77</sup>には収録されず「航西雑詩」（『柳北詩鈔』）<sup>78</sup>にのみ収録されている。他は東シナ海から南シナ海にかけての洋上での1篇、亜細亜2篇、伊国の付近の洋上（シチリア海峡）での1篇、伊国1篇、英国1篇、大西洋上1篇、太平洋上1篇である。それらの詩を表としてまとめ、以下に記す。<sup>79</sup>

表Ⅲ-4 大江敬香の評価した柳北の海外での詩作

国名等	題（詩鈔）	絶句とその創作月日
東シ海～ 南シ海	「舟中雑誌十首」中の第八首	亞刺羅山在那邊。風濤森漫碧涵天。艙間併載牛羊豕。彷徨千秋諾亞船。（「航西日乗」陰曆明治5年9月22日）（「松本白華航海録」（原文）10月8日）「詩鈔」との異同 亞刺羅（惡刺羅）
支那 （中国） 香港	「香港二首」中の第二首	層々鉅閣競繁華。百貨如邱人語譁。此際誰來賣秋色。幽蘭冷菊幾盆花。（「航西日乗」明治5年9月20日「松本白華航海録」9月21日）（「航西雑詩」では「亞刺羅山在那邊。風濤森漫碧涵天。艙間併載牛羊豕。彷徨千秋諾亞船。」の後に配置）原文との異同 鉅（巨） 華（美）
越南（ヴェトナム） 塞昆（サイゴン）	「塞昆二首」中の第二首	夜熱侵人夢易醒。白沙青草滿前汀。故園應是霜降節。驚看蠻螢大似星。（「航西日乗」陰曆明治5年9月25日「松本白華航海録」9月26日）（「航西雑詩」では「層々鉅閣競繁華。百貨如邱人語譁。此際誰來賣秋色。幽蘭冷菊幾盆花。」の後に配置）「原文」との異同 白沙青草滿前汀（尋涼艙上望）故園應是霜降節（回頭故国秋將晚）蠻（流）似（於）
伊国の海	「過西々利海峡」	江山咫尺水烟含。明滅篝燈一二三。涼雨淒風人不語。征帆夜過墨西南。（「航西日乗」陰曆明治5年10月25日）

伊国 弗稜蘭(フィレンツェ)	「遊多斯加納王故宮」	知有遺民記大家。當年一曲後庭花。石人不語春如夢。滿苑蘿蕪夕日斜。(「航西日乗」 陽曆明治6年3月25日)「詩鈔」との異同 苑(花)
英国 倫敦(ロンドン)	「倫敦府雜詩」中の第一首	漚車烟接漚船烟。四望冥々不見天。忽地長風來一掃。倫敦橋上夕陽妍。(「航西日乗」 陽曆明治6年5月19日)
大西洋上	「航大西洋之作」中の第一首。	經過東球三大洲。直將餘勇向西球。閣龍針路吾能認。山大風濤葉大舟。(「航西日乗」 陽曆明治6年6月1日)
米国 那耶哥羅(ナイアガラ)の滝付近	「那耶哥羅觀瀑詩」	客夢驚醒枕上雷。起攀老樹陟崔嵬。夜深一望乾坤白。萬丈珠簾捲月來。(「航西雜詩」においては、「那耶哥羅觀瀑詩 二首」の後に配置されているが、通常「那耶哥羅觀瀑」の詩として一般に知られているのは、この絶句である。)『日本漢詩』(下)では、「那耶哥羅觀瀑詩」と掲載。『幕末明治体験詩集』では、「那耶哥羅瀑」と掲載。『明治漢文學史』では、「那耶哥羅瀑」と掲載。『明治漢詩文集』)では、「那耶哥羅瀑」と掲載。『成島柳北 大沼枕山』(『江戸詩人選集』)では、「那耶哥羅瀑詩二首」(うち一首として)として、以下を掲載している。匡廬猶覺小涓々。蔽日涵雲漲半天。絶勝誰能運仙筆。人間無復李青蓮。
緑魑(ロッキー)山脈付近	「過緑魑山」	崎嶇路在老巖間。落月斷雲相對閑。怪獸有聲人不語。火輪輾上緑魑山。(「航西雜詩」)午炎烘地夜亦蒸。警鐸敲醒夢一肱。向曉空山人患渴。停車爭嚼澗頭冰。(「航西雜詩」)
鹽湖(ソールトレイキ)付近	「鹽湖二首」中の第一首。	隔岸翠螺収夕陽。晴瀾涵月鏡光凉。他年若憶鹽湖景。應是黃梁夢一場。(「航西雜詩」)
寧婆陀(ネバダ)山脈付近	「過寧婆山」	虬車奔壑勢如拋。征客坐捫栖鵲巢。夾路松杉皆百尺。漚輪軋過最高梢。(「航西雜詩」)
達桑港(サンフランシスコ)付近	「達桑港書喜二首」	漚機雖疾客程長。毒熱酸寒子細嘗。鐵路三千三百里。今朝始望太平洋。(「航西雜詩」)西來桑港似歸家。忘却家山萬里遐。蒼靄薰風好天氣。園々開遍杜鵑花。(「航西雜詩」)
太平洋上	「太平洋舟中之作四首」中第三首。	水滑天沈雨氣冥。孤帆無力度蒼溟。封姨驀地吹雲裂。滿目晴瀾月亦青。(「航西雜詩」)

(①『松本白華航海録』<sup>80</sup>②『日本漢詩』(下)<sup>81</sup>③『幕末明治体験詩集』<sup>82</sup>④『明治漢文學史』<sup>83</sup>⑤『明治漢詩文集』<sup>84</sup>⑥『成島柳北 大沼枕山』(『江戸詩人選集』)<sup>85</sup>を参照して筆者作成)

これらの作品の中で、伊国の弗稜蘭（フィレンツェ）での詩作には李白の「蘇臺覽古」が踏まえられていて、統一前の王朝への追懐の念が詠みこまれている。<sup>86</sup>伊国は近代国家への道を歩み始めたばかりであった。また米国は南北戦争後に再統一されながらも、先住民族や黒人問題を抱えた国家であった。

### 3 雄大な自然の中で

#### （1）柳北「那耶哥羅觀瀑詩二首」と李白「望廬山瀑布二首」

那耶哥羅（ナイアガラ (Niagara)）の滝を見物し柳北は、雄大な瀑布を題材に「那耶哥羅觀瀑詩二首」（「航西雜詩」<sup>87</sup>収録）を詠んだ。

(OR1093)

危巖迎瀑碎爲烟。 危巖瀑を迎へ 碎けて烟と爲る  
烟迸兩飛斜照天。 烟迸（ほとばし）り兩（二つながら）飛び 斜に天を照らす  
最是山靈逞奇幻。 最是れ 山靈 奇幻を逞（たくま）しくす  
橫溪幾道彩虹懸。 橫溪 幾道か彩虹懸かる

（大意：険しい岩に瀑が当たり、その水は碎けて烟のごとくである。両方ともに水が迸っていて、斜めに天が照らされている。それはまるで山靈が現れて妖術を使っているかのようであり、横の谷からは幾筋かの虹が懸かっている。）

(OR1094)

匡廬猶覺小涓々。 匡廬（きやうろ）猶ほ覺ゆ 小ききこと涓々（けんけん）たり  
蔽日涵雲漲半天。 日を蔽（さへぎ）り雲を涵（ひた）し半天に漲（みなぎ）る  
絶勝誰能運仙筆。 絶勝 誰か能く仙筆運ばん。  
人間無復李青蓮。 人間（じんかん） 復（ま）た李青蓮無し

（大意：この滝を見ると、あの廬山の滝ですら細い流れに過ぎないように感じられる。水煙は日の光を遮り、雲を濡らして空の半分に立ちこめている。その素晴らしい景色に対しては、誰がそれを詠ずる才能を発揮できるであろうか。既に李白はこの世にはいない。）

絶句（OR1093）、（OR1094）<sup>88</sup>については、柳北が李白の「望廬山瀑布二首」を念頭に浮かべたと考えられる。李白の「望廬山瀑布二首」<sup>89</sup>は以下の内容である。

西登香爐峯， 西のかた香炉峰に登り  
南見瀑布水。 南のかた瀑布の水を見る  
挂流三百丈， 流れを掛くこと三百丈  
噴壑數十里。 壑を噴くこと数十里  
歘如飛電來， 歘として飛電の来るが如く  
隱若白虹起。 隱として白虹の起つるが若し  
初驚河漢落， 初めは驚く 河漢落ちて  
半灑雲天裏。 半ば雲天の裏より灑ぐかと  
仰觀勢轉雄， 仰ぎ觀れば 勢い転た雄なり  
壯哉造化功。 壯なる哉 造化の功

海風吹不斷， 海風 吹いて断えず  
江月照還空。 江月 照らせば 還た空なり  
空中亂濺射， 空中に 乱れて濺射し  
左右洗青壁。 左右 青壁を洗う  
飛珠散輕霞， 飛珠 輕霞を散じ  
流沫沸穹石。 流沫 穹石に沸る  
而我樂名山， 而うして我は名山を楽しみ  
對之心益閑。 之に対して 心 益ます 閑かなり  
無論漱瓊液， 論ずる無かれ 瓊液に漱ぐことを  
且得洗塵顏。 且つは得たり 塵顏を洗うを  
且諧宿所好， 且つは諧う 宿てより好む所の  
永願辭人間。 永しく願う 人間を辞せんと願うに

日照香爐生紫烟， 日は香炉を照らして紫煙を生ず  
遙看瀑布挂前川。 遙かに見る瀑布の前川に掛かれるを  
飛流直下三千尺， 飛流 直下 三千尺，  
疑是銀河落九天。 疑うらくは是れ 銀河の九天より落つるか

柳北には外遊前にも瀑布を詠んだ漢詩「李白觀瀑圖」があり、『寒檠小稿』<sup>90</sup>（巻一）と『柳北詩鈔』（巻一）に収録されている。柳北が李白の廬山の滝を見上げる絵に題した作品で、嘉永7（1854）年の作とされている。（RH1007）「李白觀瀑圖」が詠まれた頃の柳北は十代後半で、前年の父の死により家督相続をした時期でもあった。

（RH1007）

天爲謫仙賦才多。 天 謫仙（たくせん）の為に才を賦すること多く<sup>91</sup>  
界破青山瀉銀河。 青山を界破して銀河を瀉（そそ）ぐ  
々々倒瀉萬雷吼。 銀河倒（さかし）まに瀉ぎて万雷吼（ほ）え  
騰擲翠蛟躍白鼉。 翠蛟（すいかう）を騰擲（とうてき）し白鼉（はくた）を  
躍（おど）らしむ  
謫仙瞥來聳毛髮。 謫仙（たくせん） 瞥（たちま）ち來たりて毛髮聳（た）ち  
呼奇叫快舞且歌。 奇を呼び快を叫びて 舞ひ且（か）つ歌ふ  
百篇之詩一斗酒。 百篇の詩 一斗（いつと）の酒  
玉山頽欲壓盤渦。 玉山頽（くづ）れて 盤渦（ばんくわ）を圧（お）さんと欲す  
君不見漁陽鼓轟如瀑布。 君見ずや 漁陽（ぎよやう）の鼓轟（とどろ）くこと瀑布の如くして  
潼關積屍山峩々。 潼関（どうくわん）屍を積むこと 山峩峩（やまがが）たるを  
一片白雲隔塵界。 一片の白雲 塵界を隔て  
醉鼾靜與泉聲和。 醉鼾（すいかん） 静かに泉声と和す  
嗚呼三千尺水今安在。 嗚呼 三千尺（さんぜんせき）の水 今安（いまいづ）くにか在る  
謫仙々去亦如何。 謫仙仙去して 亦（ま）た如何（いかん）

李白像の絵画が日本に到来したのは室町時代とされており、李白像には「詩仙」としての像と、「酒仙」としての二つの系統のもの像があった。<sup>92</sup> この作品では李白の「酒仙」としての面よりも「詩仙」としての面が強調され、李白が「謫仙」という名称で登場している。「謫仙」は李白が賀知章によって「謫仙人」<sup>93</sup>と賞賛されたことによるものである。

米国での「那耶哥羅觀瀑詩二首」中の二番目の絶句（OR-1094）の結句では、李白は「李青蓮」という名で登場している。「青蓮」は李白の号「青蓮居士」に拠るものであるが、「人間無復李青蓮」という部分は、「この世にはもう李白はいないのに」<sup>94</sup>という解釈がされている。「詩仙」である李白が人間社会の中にいなくなってしまったことを嘆いているのである。米国の雄大な自然を前にして、「詩仙」李白ならば自然を称賛できる卓越した詩を残したであろうというのが柳北の感慨であり、柳北は自己の才能に溺れることのない真摯な詩作の姿勢をとっていたと考えられる。

## （２）中国の詩人からの影響

柳北は日中に那耶哥羅（ナイアガラ）の滝を見物した後、夜間になってからの滝の情景も作品に残している。

（OR-1095）

客夢驚醒枕上雷。      客夢 驚き醒む 枕上の雷  
起攀老樹陟崔嵬。      起ちて老樹を攀（よ）じ 崔嵬（さいくわい）を陟（のぼ）る  
夜深一望乾坤白。      夜深くして一望すれば乾坤白く  
萬丈珠簾捲月來。      萬丈の珠簾（しゅれん） 月を捲（ま）きて來る

（大意：旅での夢は、枕元の雷鳴にも似た滝の音に驚いて醒めてしまった。起き出て老木にすがり、けわしい山道を登る。夜は更けていくが、見渡す限りの天地は白い。水しぶきが万丈の玉すだれとなって、月光を抱き込んでせまってくる。）

柳北は独自の感性で今一度那耶哥羅（ナイアガラ）の滝を描いているのである。聴覚と視覚で捉えた滝の豪快さは、迫真性のある表現である。この作品は「那耶哥羅觀瀑詩」としてよく知られている。それは実景を忠実に描いただけではなく、柳北の優れた観察眼から絵画的な世界が構築されて、雄大な自然を詠んでおり、また険しい山道を登っても滝を見ようとする感情の高ぶりも込められている。しかし独自の世界を描きつつも、柳北は中国の詩人たちの作品中の語を踏まえていた。下記の語釈は『日本漢詩（下）』の「那耶哥羅觀瀑詩」の語釈の部分参照したものである。また他に中国の詩人の作品中の用例については、『漢詩大観』を参照した。<sup>95</sup>

起句の「客夢」は旅の夢の意味であるが、蘇軾の「感旧詩」に、「車轂鳴枕中。客夢安得長」が見られる。承句の「陟崔嵬」は、険しい山道を登る意味であるが、詩経の周南、卷耳篇に「陟彼崔嵬。我馬虺隤」が見られる。「崔嵬」は李白の「金陵望漢江」や杜甫の「水閣朝霽奉簡雲安巖明府」の中でも用いられている。

転句の「一望」は、みわたす限りの意味であるが、杜甫の「秦州雜詩」の第八には「一望幽燕隔。何時郡国開」が見られる。「一望」はまた蘇軾の「虔州八境圖八首」中の第五首「使君那暇日參禪。一望叢林一悵然。成佛莫教靈運後。著鞭從使祖生先。」にも見られる。柳北は杜甫や蘇軾の詩にも親しみ、それらから一望が可能な雄大な光景を評価していたものと考えられる。

結句の「捲月來」の「捲」は簾の縁語として用いられていて、瀑流に月光が反射してきらめく情景を

詠んでいる。陸游の「泊公安県」の、「無窮江水与天接。不断海風吹月来」が類似句として挙げられる。

柳北が那耶哥羅（ナイアガラ）の滝を見物して詠んだ二つの絶句（OR1093）、（OR1094）よりも、夜の情景を詠んだ絶句（OR1095）の方が一般には「那耶哥羅觀瀑詩」としてよく知られている。<sup>96</sup> 大江敬香が明治詩壇評論で評価したのも、この夜の情景を詠んだ絶句であった。柳北が親しんだ中国古典の詩人たちの作品中で使われた語が多数あり、李白の他に蘇軾、杜甫、陸游等の影響を柳北が受けていたと考えられる。特に陸游については、信夫恕軒<sup>97</sup>が「文は袁随園に似て、詩は陸劍南、趙甌北の風有り。」<sup>98</sup>と、その影響を指摘している。陸游の漢詩「泊公安県」は、蜀に入った際の旅の途中で詠まれたものである。

杜甫の「秦州雜詩」二十首については、華州司功參軍の地位を棄てて家族を抱えながら秦州（甘肅省天水市）にやって来た時に様々な事を詠じた二十首の群作である。第八首は「聞道尋源使」（『杜少陵詩集』卷七）である。

聞道尋源使	聞道（聞くな）らく尋源の使
從天此路廻	天従り此の路を廻（かへ）ると
牽牛去幾許	牽牛 去ること幾許（いくばく）ぞ
宛馬至今來	宛馬（えんば） 今に至るまで來る
一望幽燕隔	一望 幽燕隔たる
何時郡國開	何（いつ）れの時にか郡國開けむ
東征健兒盡	東征 健兒盡く
羌笛暮吹哀	羌笛 暮吹（ぼすい）哀し <sup>99</sup>

杜甫のこの絶句では、「尋源の使い」としての漢の張騫の故事を踏まえており、未知の異郷を旅する哀感が詠みこまれている。柳北も那耶哥羅（ナイアガラ）の滝の近くに宿泊して、異郷の世界を目にした驚きから詩作をしたと考えられる。柳北は横浜港から出発する際に、絶句（OR1002）を詠んでおり、その起句は「誰知豪氣掣鯨鯢（誰か知らん 豪氣 鯨鯢を掣ふるを）」である。杜甫の「未掣鯨魚碧海中（未だ鯨魚を掣せず碧海の中）」（戯爲六絶句・四）を踏まえたと言われている。夜の滝の情景を詠んだ絶句（OR1095）は、柳北の中国の漢詩への造詣の深さを感じさせる点でも優れている。

### （3）国内の詩人への関心

杜甫の漢詩については、柳北は菅茶山（延享5（1748）年-文政10（1827）年）の作品からも間接的に影響を受けていたと考えられる。渡欧前の明治2（1869）年11月1日「航薇日記」の中で茶山に言及している。それは藤戸という場所にある先陣菴という草屋について話を聞いた際、その草屋の名前については「この名ハ菅茶山集中に於て見たるとありし」と述べているからである。<sup>100</sup>

茶山は天台僧の六如（享保19（1734）年-享和元（1801）年）を通じて杜甫の影響を受けたとされており、「茶山がもし六如から影響を受けたとするならば、六如の前半世における宋詩風の詩であるよりも後半生における杜甫風の詩であったと」<sup>101</sup>という指摘もある。従って柳北が杜甫風の詩を菅茶山等の先行文学からも知っていたという考えることは可能である。

さらに絶句（OR1095）の承句で用いられている「陟崔嵬」は険しい山道を登る意味であるが、「崔嵬」という語も「航薇日記」中の詩作に見られる。柳北が四国での山登りの際に同行した岸田冠堂<sup>102</sup>という漢詩人と聯句を作った際に用いられている。



(KB1031)

緩翫碧雲仙逕開 一蓑衝雨上崔嵬 柳北  
山靈莫笑無桃樹 前度劉郎今復來 桐蔭

柳北は「航薇日記」の中で、冠堂について「其人のなり風致あり實に僻地に稀なる人物と感嘆に堪へず」と述べている。李白や杜甫のような中国の大詩人ばかりではなく、国内の詩人たちにも目をむけながら柳北は詩作に励んできたのであった。幕藩体制下では奥儒者であった柳北が、地方の民間人であった冠堂を評価したことはその作品からと考えられるが、柳北は門地にこだわらないで作品のみを評価する姿勢をとっていたと考えられる。

#### (4) 風景への関心

夜の情景を詠んだ(OR1095)の絶句中の語である「一望」は、杜甫の作品中に見られるが、柳北は国内の游记「航薇日記」<sup>103</sup>の中の詩作にも「一望」という語を用いている。「航薇日記」は柳北が明治2(1869)年に大阪から山陽道、四国の一部を旅行した際の記録で、多くの漢詩も詠まれていた。以下に「一望」という語が詠みこまれた「航薇日記」中の絶句を記す。

(KB1020)

一望寒村處々同。 一望すれば寒村處どころ同じ  
黄雲刈盡水田空。 黄雲刈り盡して水田空し  
木綿花吐荻花舞。 木綿花吐き荻花舞ふ  
晴日人行風雪中。 晴日人は行く風雪の中

絶句(KB1020)は柳北が藤戸から児島に行く途中で、秋の収穫がすんだ後の水田やまわりの花々の光景を詠んだものであり、この絶句の前には「風景頗るよし」という記述がある。「航西日乗」の中で、柳北は仏国と伊国の国境付近でも「一望」という語を含む絶句を残していた。明治6年(1873)3月17日、早朝に柳北一行は仏国と伊国境ちかくのアンベリウ(Amberieu)という地点におり、山岳地方の光景を前にして以下の絶句を詠んだ。

(OR1065)

客身遠逐汽烟飛。 客身遠く汽烟を逐ひて飛ぶ  
千里風光一望奇。 千里の風光 一望奇なり  
來路未收紅旭影。 來路未だ収めず 紅旭の影  
前山已濺雨霏々。 前山已に濺(そそ)ぐ 雨霏霏(ひひ)

(大意：旅の身は、遠く伊国へと汽車の煙を逐って飛ぶようにゆく。車窓から千里の景色を瞬く間に一望できるのは、何とも素晴らしい。今やってきた路を振り返ると、真っ赤な朝日の光が消えやらずにいるのに。ゆくての山々の霏霏として雨が降りしきっている。)

柳北はこの絶句(OR1065)の後に付近の光景について「是ヨリ右ニ山骨ノ稜々トシテ瀑布の潺々タル有リ小湖時ニ現ジ隠レ風景愛ス可シ」と、記している。国内でも海外でも、柳北は広大な眺めを一目で見られるような光景、すなわち「一望」することが可能な光景に、心を惹かれて詩作をしていた傾向が

あったと考えられる。

#### 4 古戦場での柳北

##### (1) 蘇格都（スコット）将軍の評価

那耶哥羅（ナイアガラ）の滝の近くの米英戦争（1812-14）<sup>104</sup>の古戦場チップワ（Chippawa）を訪れた柳北は、米国側の蘇格都（スコット）将軍（Winfield Scott 1786-1866）の功績を称えた絶句「過蘇格都古戦場」を残している。米英戦争は1814年に勝負なしの講和が結ばれたことで終結したが、蘇格都（スコット）の功績は米国が英国と対等に戦い得ることを証明したことにある。英国の支配に抗した米国の姿勢には柳北も共感したものと考えられる。

(OR1096)

立馬林阜望古營。 馬を林阜（りんこう）に立てて古營を望む  
當年陳迹認分明。 当年の陳迹（ちんせき） 分明なるを認む  
歸雲陣々來爭岫。 帰雲 陣々 來たりて岫（しう）を争ふ  
飛瀑猶爲巨礮聲。 飛瀑 猶ほ為（な）す 巨礮（きよほう）の聲

（大意：馬をとめて水辺の樹林から昔の宿営地を望むと、昔の事績がはっきりと残されていることを確認した。帰り行く雲は盛んに吹く風に追いやられ、先を争いながら山の斜面の洞穴に入っていく。高い所から落ちる滝の音は、未だ大砲のように聞こえてくる。）

米英戦争の当時、未だ若かった蘇格都（スコット）は軍服の調達ができなかったためグレーの民兵服を正規兵に着用させて闘いに臨んでいる。<sup>105</sup> その後の蘇格都（スコット）はメキシコとの戦争において勝利を導き、南北戦争ではバージニア（Virginia）州出身であったが北軍側で活躍した。<sup>106</sup> 絶句（OR1096）の結句「飛瀑猶爲巨礮聲」では、那耶哥羅（ナイアガラ）の滝の雄大な自然と同時に米英戦争での蘇格都（スコット）の活躍を称えていると考えられる。柳北にも武人としての経験があった。幕末に騎兵頭を勤め、乗馬には堪能であった。『柳北詩鈔』巻二、『春声樓詩抄』には「九月二十日率兵馬發太田營歸江城有感而賦（九月二十日、兵馬を率ゐて太田の營を發ち、江城に歸る。感有りて賦す。）」<sup>107</sup>という詩作もある。

「航西日乗」中では、柳北は既に英国で維靈敦（ウェリントン）将軍を称えた絶句「謁維靈敦之像（維靈敦の像に謁す）」を詠んでいるが、それは維靈敦（ウェリントン）の像に拝謁する形で詠まれており、那破侖第一世の横暴を防いだ人物としての評価であった。

(OR1083) 再出

莫怪遺容凜有神。 怪しむことなかれ 遺容の凜として神有ることを  
將軍功績足千春。 將軍の功績 千春に足る  
輸贏一決窪多路。 輸贏（しゅえい） 一決す 窪多路（オートロー）  
擒得驕龍是此人。 驕龍（きょうりょう）を擒（とら）え得たるは 是れ此の人

絶句（OR1083）では、ベルギーの窪多路（Waterloo ワーテルロー）の戦いについて「輸贏一決窪多路」と転句で詠んでおり、「輸贏」は勝敗の意味であった。しかし米国での古戦場見学の際には、近くに那耶哥羅（ナイアガラ）の滝があるなどして、滝の音についての聴覚の世界の描写があつて、よりリア

ルな様相が描かれている。従って米国での絶句（OR1096）中の古戦場の見学の際の様相は、英国での絶句（OR1083）中にはない臨場感がある。

## （２）米英戦争の戦跡への関心

絶句（OR1096）の「當年陳迹認分明」の句では戦場の跡が歴史的遺産となっていることが述べられている。「陳迹」は時間の推移に対する感慨が込められて、現在の事象もたちまち過去の事迹となる意味であり、柳北が影響を受けたとされる清の趙翼（1727-1814）の「赤壁」中でも「一片山河百戰場。今日經過已陳迹」（一片の山河 百戦の場 今日 經過すれば 已に陳迹）<sup>108</sup>という用例がある。また杜甫の「客舊館」中に「陳迹隨人事。初秋別此亭。」という用例がある。

「歸雲陣々來爭岫」の部分では、雲が山のほろあなに先を争って切れ切れに帰っていく様相が詠まれている。「歸雲」については、杜甫の「返照」という詩の中に「歸雲擁樹失山邨（歸雲 樹を擁して山邨を失す）」<sup>109</sup>という用例がある。

『文選』中の潘岳による「西征賦」にも、「納歸雲之鬱蓊（うつおう）（歸雲の鬱蓊たるを納る）」<sup>110</sup>という用例もある。また『柳橋新誌』第二編の「後序」に、「若使樂廣藩岳是徒讀之必將棄其筆硯而却退瞠若于車塵之間也（若し樂廣藩岳の徒をして之を讀ましめば、必ず將に其の筆硯を棄てて、車塵の間に却退瞠若たらんとす）」<sup>111</sup>という記述がある。「後序」は清泉白石人が著したと記されているが、「初刷は白石人の後序が巻初に組まれている」<sup>112</sup>ことが指摘されており、柳北の文芸観をよく理解した人物が著したと考えられる。従って、柳北も潘岳の作品を評価していたと考えられる。さらに柳北が親しんだ日本の文人では寺門静軒<sup>113</sup>の『江戸繁昌記』初篇中の上野の部分に「歸雲抹靄（まつあい）」<sup>114</sup>という用例がある。奥儒者の家の嫡子であった柳北が、幕末に流布を禁止されていた『江戸繁昌記』を愛読していたのは、その文学性を評価していたからであった。柳北の門地にとらわれない人間観がうかがえる。

次に「岫」については陶淵明の「歸去來辭」中に「雲無心以出岫（雲は無心にして以て岫を出で）」<sup>115</sup>という用例がある。柳北は渡欧前の「航薇日記」中で以下の漢詩を詠んでいる。

(KB1016)

朱袍換得綠蓑衣。	朱袍換へ得たり 綠蓑衣
休道沈淪心事違。	道ふを休めよ 沈淪心事違ふと
病鶴乘軒非所願。	病鶴軒に乗る 願ふ所にあらず
孤雲出岫有時歸。	孤雲岫を出でて 時有りて歸る
一聲鴻雁卿書到。	一聲の鴻雁 郷書到り
千里江山詩伴稀。	千里の江山 詩伴稀なり
却是海南多樂土。	却て是れ 海南樂土多し
梁甘酒冽又魚肥。	梁の甘酒冽く又魚肥ゆ

(KB1016) の詩の中で「孤雲出岫有時歸。（孤雲岫ヲ出デテ時有りテ歸ル）」というのは、雲が本来の場所に帰ることを述べている。また「航薇日記」中でも「却是海南多樂土。（却テ是レ海南樂土多シ）」と、南の島が樂土であることを称えている。柳北は寂寥感を「雲」と「岫」という語で表しつつも、最後は雄大な自然に心を動かされている。人生を楽しむ境地を肯定し、悲哀に徹していたわけではないことが考えられる。この詩について乾照夫は以下のように述べている。

これによると、柳北は「沈淪」した身の上にこだわりつつも、敢えて仕官せず、俗世間から超然として生きる決心をもちたいとした。そうした中で、他郷にある孤独感、つねに故郷を思う心情を掻き立てるが、敢えて「楽土」を求めて漂泊したいとした。<sup>116</sup>

「航薇日記」中では、漂白の念に濃厚に支配されていた柳北であったが、米国では古戦場を見学したりしているうちに、次第に漂白への憧れは希薄になっていったと考えられる。「航薇日記」で描かれた「楽土」は、雄大で且つ過酷な自然を背景とする米国には存在しなかったからである。時には脅威ともいふべき自然との邂逅は、柳北に悲哀を感じさせる余裕すら与えなかったのである。

## 5 過酷な自然

### (1) 命拾いの体験

柳北一行はネブラスカ(Nebraska)州に達したが、亜兒棚甫浪河(エルクホーン河 The Elkhorn River)を渡っていた時に、橋が崩れるという事故に遭遇した。死傷者は出たが、柳北たちは無事であり、次の絶句を残した。

(OR1097)

霹靂推人迫急湍。 霹靂(へきれき) 人を推して 急湍に迫る。  
倏然万胆一時寒。 倏然(しゅくぜん)として 万胆 一時に寒し。  
栈摧車覆儂無恙。 栈摧(くだ)け車覆(くつがへ)るも 儂(われ)恙無し。  
笑唱青蓮蜀道難。 笑ひて唱ふ 青蓮の蜀道難。

(大意：雷鳴がなり、乗客である自分たちは急流に迫りやられた。一瞬の間に寒さを覚えた。横木が砕けて車が転覆しても自分にけがはなかった。思わず笑い、李白の「蜀道難」を口ずさんだ。)

絶句(OR1097)での「青蓮」は、李白をさし、また楽府題の雑言古詩「蜀道難」は李白の代表的作品である。その最後の部分は、「蜀道之難難於上青天 側身西望長咨嗟。(蜀道の難は青天に上るよりも難し。身を側だてて西望し長く咨嗟(しさ)す。)」<sup>117</sup>と記されている。蜀(四川省)と長安(現在の西安、陝西省)の間をつなぐ山道が険しいことを詠んだものである。柳北は東部から西部への移動を、蜀から長安へ行くことに擬えていたとも考えられる。さらに米国での命拾いの詩作の際にはまず雷鳴を意味する「霹靂」という語から始めているが、これは陸游の青天の霹靂(「九月四日鷄未鳴起作」から)を踏まえたと考えられる。従って、この絶句(OR1097)には陸游や李白という柳北の親しんだ詩人の作品が踏まえられている。

柳北が李白の「蜀道難」を踏まえた詩作は、渡欧前の作品にも見られる。明治4(1871)年の七言古詩「觀會津十六士自盡圖引(會津十六士自尽の図を觀るの引)」(『柳北詩鈔』卷三)中で、「一夫能當萬虎兇(一夫 能く當る 萬虎兇)」の部分は、「蜀道難」の「一夫當關 萬人莫開(一夫 関に当れば 万人も開く莫し)」を踏まえたものとされている。<sup>118</sup> 柳北は明治4年頃には未だ賊軍とみなされていた会津の白虎隊の悲劇を詠んだ作品を残していたのである。白虎隊の少年の勇猛さを「蜀道難」を踏まえて描いた部分は悲壮であるが、米国での柳北自身の命拾いに際しては、「蜀道難」の詩が旅行中の困難を克服した喜びを強調することに使われている。

柳北と親交のあった大沼枕山<sup>119</sup>には天保6(1835)年の作品に五言古詩「曉發箱根」(『枕山詩鈔』卷上)<sup>120</sup>がある。その作品中には「蜀道一何難 羊腸幾九折」という句があり、柳北以外の日本の漢

詩人にも李白の「蜀道難」を踏まえて詩作した用例が見られる。

マシュー・フレリーは、絶句(OR1097)をアメリカ大陸横断中の「もっとも妙な詩」<sup>121</sup>と述べているが、その理由は記されていない。しかし筆者は最も柳北の感情が直接的に表現された詩と考えている。転句「棧摧車覆儂無恙」には、命拾いをした際の人間の素直な感情が表れており、結句「笑唱青蓮蜀道難」はほぼ実体験を詠んだと考えられる。李白の「蜀道難」を踏まえつつも、自分流に笑いを誘う表現とした点に、柳北の独創性が感じられる。

## (2) 緑魑(ロッキー) 山中

命拾いをした後で、柳北一行は緑魑(ロッキー Rocky) 山脈を過ぎたが、通過直後に以下のような絶句を詠んでいる。

(OR1098)

崎嶇路在老巖間。      崎嶇(きく)たる路在り 老巖の間。  
落月斷雲相對閑。      落月 斷雲 相對して閑かなり  
怪獸有聲人不語。      怪獸 聲有り 人 語らず  
火輪輾上綠魑山。      火輪 輾(きし)り上る 綠魑(ロッキー) 山

(大意：鉄路は険しい老岩の間を縫って延びている。落ちていく月ときれぎれの雲が相對している頃、怪しげな獣の咆哮がこだまして、人々は黙して語らない。車輪はぐるぐる回ってロッキー山脈を登って行く。)

起句の「崎嶇」は、山道の険しいさまを表している。蘇軾「和陶擬古九首」の二首目の詩に「崎嶇煩沙麓」の用例が、陶淵明の「歸去來辭」中に「亦崎嶇而經丘(亦崎嶇として丘を經)」<sup>122</sup>の用例がある。

承句の「落月」は、月が西に傾く様子を表している。陸游「宿石帆山下」の中に「落月銜山聞杜鵑」の用例がある。また「斷雲」は雲がきれぎれにある状態を表し、陸游「蘭亭道上」に「斷雲漠漠雨淒淒」の用例がある。

起句と承句で異郷の地の夕暮れの寂寥感を表し、転句と結句でピューマやコヨーテと考えられる獣の声が聞こえる中を、汽車が山を登る様相が劇的に表現されている。またこの絶句(OR1098)の後に次のような語句「綠山有奇獸似牛而大余親見之其名曰馬斧狼(綠山に奇獸有り。牛に似て大なり。余親から之を見る。其の名、馬斧狼と曰ふ)」が書き添えられている。馬斧狼(バッファロー Bison)は先住民族<sup>123</sup>の必需品でもあったが、1871年以降には大量に虐殺されていた。<sup>124</sup> 先住民族と第七騎兵隊との間でリトル・ビッグホーンの戦い(Battle of the Little Bighorn 1876年)が行われ、先住民族側が最後の勝利を収めたのは、柳北が滞在していた時期よりも三年後であった。柳北の滞米中は、未だ先住民族の勢力はさほど衰えてはいなかった頃でもあった。

やがて柳北一行を乗せた客車は緑魑(ロッキー) 山中で早曉を迎え、激しい喉の渴きを訴える苦しみを味わい、その苦しみの中での生きることへの意欲を以下の絶句で表している。

(OR1099)

午炎烘地夜亦蒸。      午炎 地を烘き 夜も亦た蒸す  
警鐸敲醒夢一肱。      警鐸 敲いて醒ます 夢一肱

向曉空山人患渴。 曉に向ひて 空山 人 渴を患ふ  
停車爭嚼澗頭氷。 車を停めて 争ひ嚼む 澗頭の氷

(大意：昼間の地面をあぶるほどの照りつけで、夜に入っても未だ蒸し暑い。警鐸のたたかれる音で、旅の就寝中の肘枕の夢も破れ、人気のない山は夜に向かって白みはじめ、乗客は喉の渇きに苦しむ。汽車が止まると乗客は車外に出て、争うように氷をむさぼり嚼むのである。)

転句の「空山」は、人気のない寂しい山を表している。王維の「鹿柴」中に「空山不見人（空山 人を見ず）」という用例もあるが、杜甫の「憶幼子」の中に「澗水空山道（澗水 空山の道）」<sup>125</sup>という用例もある。さらに宋代では蘇軾の「次韻黃魯直見贈古風二首」の第二首目に「空山學仙子」という用例もある。

結句の「澗頭氷」は、谷間の氷であり、柳北も含む汽車の乗客たちが先を争って氷で喉を潤す様子が描かれている。

(OR1098)と(OR1099)の絶句から考えられることは、柳北は緑魁（ロッキー）山中での寂寥感や、厳しい自然との遭遇を自己の貴重な体験とし、中国の詩人たちの作品の用例を取り入れ、自己を見つめながら詩作をしていたのである。

### (3) 緑河（グリーンリバー）と鹽湖（ソールトレイキ）

柳北一行を乗せた汽車はやがて緑河（グリーンリバー Green River）を渡った。この河は米国西部のワイオミング州、コロラド州、ユタ州を流れている。それらの州を通過した頃に以下の絶句を残している。

(OR1100)

濃緑涵雲是緑河。濃緑 雲を涵（ひた）すは 是れ緑河  
爲誰新様染輕羅。誰が爲にか 新様 輕羅を染むる  
縱然日夜東流去。縱然（しょうぜん）として日夜東流し去るも  
難洗吾儂客思多。洗ひ難し 吾儂（われ）の客思の多きを

(大意：緑河は濃い緑で湖水は雲を浸して天と連なっている。誰の為であろうか、新しい形式で羅の布を染めるかのようなのである。この河が西方から東方に流れ去ったとしても、自分はこの有様を忘れ去ることはできない。それは旅の思い出が多いからである。)

起句の「涵雲」は、湖水が雲をひたして天と連なっているような様相を表している。孟浩然の詩「臨洞庭」中に「涵虚混太清（虚を涵して太清に混ず）」<sup>126</sup>という類似な表現が見られる。

承句の「爲誰新様染輕羅」は、『玉臺新詠』巻九の「雜曲」中に、「爲誰新起鳳凰樓」という表現がある。柳北は中国、六朝時代の詩集である『玉臺新詠』にも親しんでいた。万延元（1860）年頃に創作した「新樂府二篇柳春三囑」中の第二首目の作品「舞衣薄」の中で「妾節貞兮西陵柏」という部分に、『玉臺新詠』巻十の「錢塘蘇小歌一首」中の「西陵松柏下」が踏まえられている。<sup>127</sup>

転句の「縱然日夜東流去」は、緑河が日夜西方から東方に流れ去ったとしてもという意味であるが、『三體詩』巻一の司空曙「江村即事」中に「縱然（たとい）一夜風吹去（縱然 一夜 風 吹き去るとも）」<sup>128</sup>という類似な表現が見られる。また「東流去」は杜甫の「成都府」中に「大江東流去（大江東に流れ去り）」の用例がある。「大江東流去」の句については「川の流れについていうとともに、大き

な時間の推移という」<sup>129</sup>という指摘がされている。「成都府」は杜甫が成都紀行の最後に詠んだ作品であり、大江は長江（揚子江）を指している。柳北は緑河を揚子江に見立てて、絶句に詠んだと考えられる。「東流去」と類似した「東去」については、清の趙翼の「赤壁」に「大江東去有周郎（大江 東に去って 周郎有り）」<sup>130</sup>という用例がある。さらに蘇軾の「念奴嬌 赤壁懷古」は「大江東去（大江は 東に去り）」<sup>131</sup>という句で始まっている。「大江東去」もまた時間の推移を表すと考えられる。柳北の「航薇日記」にも浪華城（大坂城）を見た際の絶句中に「片帆東去大牙傾」という用例がある。

結句の「吾儂」は柳北自身のことであり、「吾儂」は「航西日乗」のセイロン近くの洋上で詠まれた絶句中にも見られる。柳北が欧米に到達する以前、重細重地域のセイロン近くで詠み「吾儂」という言葉を詠みこんだ「航西日乗」中の絶句は以下のようである。

(OR1027)

東望故山雲杳茫	東のかた故山望めば	雲杳茫
濤聲欲裂遠人腸	濤聲 裂かんと欲す	遠人の腸
怪他赤道炎燿地	怪しむ 他	赤道炎燿の地
添得吾儂鬢上霜	添へ得たり	吾儂鬢上の霜

（大意：東の方、故郷の辺りを望むと、雲ははるか遠くに霞んでいる。波の音を聞くにつけ、旅人の腸は望郷の思いに張り裂けそうである。不思議なことにこの赤道直下の炎熱激しい地にいるというのに、自分の毛に白髪が混じっている。）

この絶句（OR1027）の前には「此夜月明 金星ヲ望ムに赤キ火ノ如シ同行ト共ニ思ノ詩ヲ綴ル」という記述がある。ここでは燃え盛る炎のような暑さの中で、柳北が日本のことを思い出しているうちに、ふと気がつくとうの毛が白くなっていたという旅の苦労が述べられている。緑河の絶句（OR1100）中でも望郷の念の強さを表すことに「吾儂」という表現がされ、谷間の氷で喉を潤したりする体験をした柳北は、緑河を通過してからようやく故郷に思いをめぐらす余裕がでてきたことが考えられる。また「儂」は一人称我の呉の方言である。重児柳甫浪河（エルクホーン河）での鉄道事故での命拾いの際の絶句（OR1097）にも「棧摧車覆儂無恙」の用例があった。また蘇軾の「戲題坐山縣。用杜子美韻」の中には、「吳儂但憶歸」という表現があり、「吾儂」と類似な用例である。柳北は自分自身を強く打ち出す際に「吾儂」や「儂」という語を用いていると考えられる。

緑河を通過した柳北一行は、ユタ（Utah）準州（後に州に昇格）の鹽湖（ソールトレイキ Salt Lake）の付近を通過した。鹽湖（ソールトレイキ）のあるソルトレーク・シティ（Salt Lake City）は、モルモン教徒がイリノイ州を追われてからユタ準州に逃げ、指導者ブリガム・ヤング（Brigham Young 1801-77）が中心になって建設した町であった。その地で柳北は以下の絶句を詠んでいる。

(OR1101)

緑河太駛緑山危	緑河は太（はなは）だ駛（はや）く	緑山は危（たか）し
看到鹽湖意転怡	見て鹽湖に到れば	意転（うたた）た怡（やは）らぐ
風月一灣晴更好	風月 一灣	晴れて更に好く
烟波萬頃兩還奇	烟波 萬頃 兩（ふたつながら）還（ま）	た奇なり

（大意：緑河は幅広く早い流れであるが、その周辺の山は険しい。鹽湖に到着するとますます気持ちちは和らいでくる。風月は一灣の水面に映されて、晴れた天気のもとで素晴らしい。波の烟のよう

なもやが波立っていてその光景も素晴らしく、両方ともに得難いものである。）

起句では雄大な河や山脈を経ての旅の苦難を起句で述べている。また承句では鹽湖（ソールトレイキ）に到達してから、旅の苦難を心配する気持ちが和らいだことを述べている。さらに転句ではその背景として晴れた中での一湾の自然の風景が表されている。

最後の部分の結句では、水面が広々とした水面にもやのように波立つ様子を記して、その二つが珍しい光景であることを述べているのである。「萬頃」については、蘇軾の「次韻子由書王晋卿畫山水一首。而晋卿和二首」の第二首中に「萬頃滄波沒兩鷗」という表現があり、「烟波萬頃兩還奇」と類似している。また「還奇」については、蘇軾に「飲湖上初晴後雨二首」という七言絶句もあり、その中の第二首中の起句と承句は「水光潋灩晴方好。山色空濛雨亦奇。」で、似た用例がある。

さらに、鹽湖（ソールトレイキ）での夕陽を目にした柳北は、以下の絶句を詠んでいる。

(OR1102)

隔岸翠螺収夕陽。 岸を隔つる翠螺（ら） 夕陽収まり  
晴瀾涵月鏡光涼。 晴瀾（せいらん） 月を涵（ひた）して 鏡光涼し  
他年若憶鹽湖景。 他年若し鹽湖の景を憶はば  
應は黄梁夢一場。 応（まさ）に是れ黄梁（くわうりやう）の夢一場なるべし

（大意：岸を隔てる翠の島があり、夕日が沈みかけいる。大きな波が水面に映った月を涵して、鏡のような湖面の光は涼しい。後年にももし自分が鹽湖の風景を思い出すことがあれば、それはまるで夢の中の異次元の世界の一場面であつたろう。）

起句の「螺」は、湖上に浮かぶ島山を指している。劉禹錫の「望洞庭」の中に「遙望洞庭山翠色 白銀盤裏一青螺」という用例がある。また承句の「瀾」は大波の意味で、月が波に映っていて鏡のような湖面の様相を述べている。さらに転句の「他年若憶鹽湖景」は、後年もしも鹽湖（ソールトレイキ）の風景を思うことがあればという意味である。蘇軾の「六月七日。泊金陵阻風。得鍾山泉公書。寄詩爲謝」と題する七言排律の中に「他年若畫蔣山圖」という用例がある。

最後の部分の結句の「黄梁夢一場」は「邯鄲の夢」（『枕中記』）を指し、夢の中の異次元の世界を表現している。柳北は巴里の滞在中でも絶句（OR1053）「雪中口占」の中で、「黄梁一未醒時」という表現をしている。旅行中の苦難を克服した柳北は自然の雄大な美しさに感動し、鹽湖（ソールトレイキ）を洞庭湖に擬え、夢の世界での光景のようであると語っている。

#### （４）寧婆陀（ネバダ）山中

鹽湖（ソールトレイキ）を通過した柳北一行は、再び寧婆陀（ネバダ Nevada）州の山岳地帯を横断鉄道で通過した。その時の光景を以下の絶句に詠んでいる。

(OR1103)

虬車奔壑勢如抛。 虬車（きうしや）の壑（たに）を奔（はし）るは 勢抛（なげうつ）つが如く  
征客坐捫栖鶻巢。 征客 坐して捫（な）づ 栖鶻（せいこつ）の巢  
夾路松杉皆百尺。 路を夾（はさ）む松杉 皆百尺  
漚輪軋過最高梢。 漚輪 軋りて過ぐ 最高の梢

（大意：龍がのたくるような長い列車が谷間へ下る時は、放り出されるようである。山を登って行



くことは乗客は居ながらにして隼の巢を掴むこともできる。鉄路の両側に立つ松や杉の木は百尺もあるような巨木である。しかし瀟車はぎしぎししながら、最も高い木の梢の傍を通り過ぎて行く。)

起句の「虬車」は、「虬」が龍の意味を表し、機械文明の力強さが表現されている。また承句の「征客坐捫鵲巢」は、険しい山中なので、隼ノ巢もつかめそうだ」という意味」である。自然は過酷なものではあるが、ここでは人間に身近なものとなっている。柳北の親しんだ中国の詩人陸游の「山行」に「上捫鵲巢 下歴狼虎穴」用例があり、日本の詩人では枕山の「曉發箱根」中にも、「崢嶸捫鵲巢 崎嶇経狼穴(崢嶸として鵲巢を捫み 崎嶇として狼穴を経たり)」<sup>132</sup>という部分がある。柳北は緑魑(ロッキー)山脈を越える際にも、絶句(OR-1098)で「崎嶇路在老巖間」と詠み、日本の同時代の詩人では枕山の作風の影響も受けていたと考えられる。

転句「夾路松杉皆百尺」と類似の句は、『三體詩』巻一の薛能(せつのう)の「柳枝」という絶句の中の「夾路春陰十萬營(路を夾む春陰 十萬の營)」<sup>133</sup>の部分である。最後の部分の結句の「最高梢」は、杜牧の「襄陽雪夜感懷詩」の中に「莫止最高層」という類似した句がある。柳北は李白、杜甫、陶淵明、蘇軾、陸游の他に杜牧の作品にも親しんでいた。欧米への旅立ち以前に、柳北の(RH2057)「丁卯中秋患痢枕上賦三律寄藤志州(丁卯中秋、痢を患う。枕上、三律を賦し、藤志州に寄す)」という作品の第二首目の作品中で「樊川久絶停車興(樊川久しく絶す停車の興)」<sup>134</sup>という句がある。「樊川(はんせん)」は杜牧の号であった。

緑魑(ロッキー)山中を越える際にも過酷な自然との対決があった。そこでの自然は、人間に喉の渇きという苦しみを体験させる絶対的なものであった。しかし寧婆陀(ネバダ)山中では、絶句(OR-1103)の中で、険しい山道でも隼の巢がつかめそうだと述べられていて、自然と人間の距離が少し縮められている。

## 6 桑港(サンフランシスコ)から日本へ

### (1) 桑港(サンフランシスコ)到着

柳北一行は緑魑(ロッキー)山脈や寧婆陀(ネバダ)山脈、緑河(グリーンリバー)や鹽湖(ソールトレイキ)を通過して遂に桑港(サンフランシスコ San Francisco)に到達した。その安堵の気持ちが以下の絶句に表れている。

(OR1104)

瀟機雖疾客程長。 瀟機 疾(はや)しと雖も 客程長し  
毒熱酸寒子細嘗。 毒熱酸寒 子細に嘗(な)む  
鐵路三千三百里。 鐵路 三千三百里  
今朝始望太平洋。 今朝 始めて望む 太平洋

(大意: 汽車は速いが、旅行は長かった。熱さや寒さの辛さをなめつくした。鉄路は三千三百里と言っていいくらいの長いものであったが、この旅も終わりに近づき、今朝ははじめて太平洋をみたのである。)

起句の「客程」は旅程の意味で、岑参の「送許子第歸江寧拜親寄王大昌齡」の中に「楚雲引歸帆 淮水浮客程」という用例がある。次に承句の「酸寒」はつらく苦しい様子を意味している。蘇軾の「次韻李芳直感舊」の中に「酸寒病守尤堪笑」という用例がある。さらに転句の「三千三百里」は、実際の距

離ではない。一里は四キロであるので、「三千三百里」では、大陸横断鉄道の営業距離よりも少ない。ここでは距離の長い旅であったことを表している。最後の部分の結句では「今朝始望太平洋」という表現の中に旅の終わりに近づいた喜びが隠された表現である。白居易の「盤屋縣北樓望山」の中に「今朝始見山」という類似の句がある。

桑港（サンフランシスコ）において、柳北は二首目の絶句の中で率直に望郷の念を詠んでいる。

(OR1105)

西來桑港似歸家。 西のかた桑港に來たれば 家に歸るに似たり  
忘却家山萬里遐。 忘却す 家山 萬里遐（はる）かなるを  
蒼靄薫風好天氣。 蒼靄 薫風 好天氣  
園園開遍杜鵑花。 園園 開きて遍（あま）ねし 杜鵑（とけん）の花

（大意：北米大陸を西進して桑港（サンフランシスコ）に到達してみると、家に帰ったような気分になった。故国まで未だ遙かな道があるのにそれを忘れてしまったかのようなのである。蒼い空には靄があるが、風は薫り、良い天気である。花園にはサツキのような花が咲きみだれている。）

起句の「西來桑港」は、西進して桑港（サンフランシスコ）に来てみればという意味であり、岑參の「磧中作」の中に「走馬西來欲到天（馬を走らせて西來 天に到らんとす）」<sup>135</sup>の句も西進を詠んだ句である。次の承句の「家山萬里遐」は、陸游の「過野人家有感」の中に「家山萬里夢依稀」という句がある。さらに転句の「蒼靄」は、蒼い靄の意味であり、岑參の「終南山雙峰草堂作詩」の中に「石門破蒼靄」の用例がある。また「薫風」は蘇軾の「皇太妃閣五首」の中に「薫風草木酣」の用例がある。最後の部分の結句の「杜鵑花」は「サツキ」の漢名であり、李白の「涇溪東亭 寄鄭少府諤」の中に「杜鵑花開春已闌」の用例がある。米国で詠まれた絶句の中に、花が咲いている様相が詠まれたのは桑港（サンフランシスコ）での絶句（OR-1105）だけである。柳北には「航薇日記」中でも、瑜伽山という山に登った際に、「躑躅と蘭とを多しとす 眞に一佳境といふべし」とその光景を記している。サツキも含めて躑躅の花が好きな花の一つであったと考えられる。また杜鵑の花が咲いている様相から、日本の自然の風物を思い出したことも有り得る。

大陸横断鉄道の旅で、柳北は過酷な自然と対決し克服する体験をしてきた。日常の世界に戻った柳北は、まもなく帰国できることを喜び、明るい世界を描き出している。日本の国では可憐な野の花という自然の風物に親しんでいた柳北は、桑港（サンフランシスコ）でも同様に杜鵑の花という小さな自然の美を鑑賞している。帰国をひかえて心に余裕ができたからと考えられるが、自然は柳北にとってもはや対決し克服するものではなく、生活の中で愛でるものとなったのである。柳北は心の中で自然と和解し、融合していったと考えられる。

## （2）帰路

柳北の一行は客船で日本に向かった。無限な大海を航海することも柳北には貴重な体験であった。

(OR1108)

水滑天沈雨氣冥。 水滑らかに 天沈み 雨氣冥（くら）し  
孤帆無力度蒼溟。 孤帆 力無くして 蒼溟を度（わた）る  
封姨驀地吹雲裂。 封姨 驀地（まつしぐら）に 雲を吹き裂く

満目晴瀾月亦青。 満目の晴瀾 月も亦た青し

(大意：海は滑らかで低く雲のたれこめた空は雨気を含んで暗い。一隻の船が心もとなく太平洋の海原を進んでいく。たちまち風神が襲い、雲を吹き払った。見渡す限りに晴れ渡った天候の下に風が吹き、月は冴え冴えと青い。)

起句の「雨氣」は、陸游の「夕雨」の中に「雨氣挾龍腥」の用例がある。次の承句の「孤帆」は、李白の「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」の中に「孤帆遠影碧山盡（孤帆 遠影 碧山に盡き）」<sup>136</sup>の用例があり、「無力度蒼溟」は杜甫「宿江邊閣」の中に「無力正乾坤」という類似した句がある。さらに転句の「驀地」はまっしぐらに進む様子を表し、「封姨」（封十八姨）は風の神の意味である。『酉陽雜俎』（続集巻三）には、「封姨」について以下の記述がある。

玄微は、そこで悟った。あの女性たちの、楊という姓、李という姓、および色彩や衣服の不思議は、みな、いろいろな花の精であったと。緋の衣の、阿措という名の女人は、すなわち、安石榴であり、封十八姨という人こそ風の神であった。<sup>137</sup>

最後の部分の結句の「満目」は一面、見渡す限りの意味である。杜甫の「秦州雜詩 二十首」の第一首目に「満目悲生事（満目 生事を悲しむ）」<sup>138</sup>という用例がある。太平洋を客船は風雨に遭いながら進み、やがて天候がよくなり、波の青さで月まで蒼く見えるほどになったことがこの絶句（OR1108）では述べられている。最初は力弱く進んでいた客船が、中国文学の世界の風の神（封姨）の力によって天が晴れわたり、まっしぐらに日本に向かう様子も描かれ、無事に帰国することを祈念する柳北の姿が感じられる。

## 7 帰国後の柳北

### (1) 帰国後の歩み

帰国した柳北は明治7（1874）年2月に『柳橋新誌』二編を、4月には『柳橋新誌』初編を山城屋から刊行した。さらに9月には『公文通誌』社主から招請されて社長となり、同紙を『朝野新聞』と改称。以後、「大久保忠真の美譚」等の「雑録」欄を中心に活躍するその後、明治8（1875）年には、8月、同条例制定を『朝野新聞』上で攻撃。新聞条例に違反したので東京裁判所に呼び出され、5日間の自宅禁固に処せられる。さらに翌9年には司法官を誹謗したとして、鍛冶橋監獄に投ぜられたりしたが、明治10（1877）年の1月には詩文雑誌『花月新誌』創刊した。

『花月新誌』創刊前の明治8（1875）年3月18日の「陳腐閑語」12号（『朝野新聞』論説欄）で、柳北は以下のように記している。

然レドモ吾曹欧米ニ航遊セシ時彼ノ風俗ヲ觀ルニ、文明ノ諸国ニ於テ詩賦ヲ貴重セザル所無シ。東西文ヲ異ニシ語ヲ殊ニスレドモ、其情趣を玩味スレバ、豈霄壤ノ別有ランヤ<sup>139</sup>

柳北は西欧の文明国でも文芸を重んじ、文芸に込められている情趣には東西の差がないことを、海外体験から知ったと述べているのである。また『花月新誌』創刊から一年後の明治11（1878）年に刊行された丹羽純一郎訳の『花柳春話』に柳北は題言を書いた。丹羽は維新政府側の人物であったが、以下のように述べている。

固陋學士ハ云フ。泰西諸國ハ。人々實益ヲ謀リ。實利ヲ説キ。敢テ風流情痴ノ事ヲ問ハズト。是レ極メテ妄誕。余嘗テ航遊一年。親シク看破シ來ルニ。彼我ノ情相契ス。毫モ差異無キナリ。<sup>140</sup>

欧米の人々は実利を追求することを重視し、風流や恋愛は軽視しているとある偏狭な学者が指摘している。しかしそれは現実とは異なり、自分の海外体験では欧米人の情趣も日本の人々のそれと全く違いはないと、述べている。

帰国後の柳北は西欧の学問も含む幅広い領域での学びの必要性を主張し、少年を漢詩の添削のみに没頭させる風潮を批判した。底の浅い模倣だけの文明開化を否定し、若い世代には広い世界に目を向けさせることを考えていた柳北は、『花月新誌』には日本の古典文芸に根ざした和文や短歌、さらに海外の文学、思想、社会問題等の翻訳作品を掲載したのであった。（『花月新誌』については第Ⅳ章で詳述）

## （２）帰国後の詩作

横浜に帰着直後の明治 6（1873）年夏に、柳北が詠んだ絶句が「航西雑詩」に収録されている。

（OR1110）

歸家口號二首	帰家、口号二首（うち一首） <sup>141</sup>
無爵無田且莫憂。	爵（くらい）無く田無きも且（しばら）く憂うることなかれ
天公縱我自由遊。	天公 我を縱って自由に遊ばしむ
人間快樂汝知否。	人間の快樂 汝 知るや否や
雙脚踏來全地球。	双脚 踏み來たる 全地球

帰国直後の柳北は無事に帰還した喜びに満ちており、起句承句では海外体験がいかに貴重なものであったかを語っている。転句ではこの世の楽しみはどんなものか、君は知っているのかと呼びかける体裁を取り、結句で自分が二本の脚で地球を一巡したのだという感慨を詠んでいる。この絶句について、野山嘉正は起句に柳北の深い心情が込められていることを、次のように指摘している。

正格ではあるが、この簡素な表現が地球を捉えた驚異の心を如実に示している。それが柳北にとっての近代にほかならない。<sup>142</sup>

未知の世界を知ったという抱負は、柳北に人生への取り組みを積極的に方向づけた。後年の国内の游记に『熱海文藪』<sup>143</sup>がある。これは柳北の死の直前、明治 17（1884）年に出されているが、その中の「澡泉紀游」<sup>144</sup>では、山路の様相を「風景頗ル佳ナリ」として以下の絶句を詠んでいる。

（AT1024）

雲岫猶看雨氣饒。	雲岫猶看る雨氣の饒きを <sup>145</sup>
興丁雖疾路迢々。	興丁雖も疾しと路迢々
胡枝花紫芒花白。	胡枝花は紫に芒花は白し
山逕秋容未寂寥。	山逕の秋容未だ寂寥ならず

「雲岫」は雲のかかった山々を表し、「航西雑詩」中の米国での絶句（OR1096）「歸雲陣々來爭岫」や、「航薇日記」律詩（KB1016）中の「孤雲出岫有時歸」に類似した表現がある。絶句（AT1024）には寂寥感も感じられるが、山々の遙かな眺望や萩（胡枝花）や芒の花の風情を味わう境地の方がより強く感じられる。柳北の好んだ風景は、寂寥感をもちながらも、それを超越するような雲や山を一望できる遙かで雄大な眺めであり、「航薇日記」や「航西日乗」、「航西雑誌」中の詩作の作風からもうかがえる。大江敬香が評価した海外体験の作品中に米国での作品が七篇もあったのは、英国から独立した米国の歴史に関心を払い、雄大な自然に心底感動し、時には過酷な状況下でも生への意志をもっていたからである。そこには、漢文脈特有の「景と史と志をあわせて紀行の骨格とする手法」<sup>146</sup>があったのである。

## 8 米国滞在中の作品とその意義

### （1）米国での漢詩の特徴

米国での柳北の体験は残された絶句を手がかりに考えを巡らすことが、唯一の手段でもある。従って、敬香の評価した7篇を中心としてそこに蘇格都（スコット）将軍を称えた作品等も加えて、その背景等を考えることは、米国での旅行について理解することにも繋がると考えられる。具体的には作品の展開に重要だと考えられる語に注目し、柳北が親しんだとされる中国や日本の詩人の作品中での用例や、柳北自身の外遊前の作品中の用例と照らし合わせて、柳北の体験を考察した。また「游記」中の漢詩という観点から、「景」「史」「志」の要素が盛り込まれているかを表Ⅲ-5としてまとめた。「史」は訪問国米国の歴史を、「志」は志の高ぶりや感動を意味しており、明確に認められたものは「○」、それほど明確ではないが認められるものは「△」とした。

表Ⅲ-5 内容からみた滞米中の作品

作品番号	景	史	志	作品番号	景	史	志
OR1093	○		△	OR1100	○		○
OR1094	○		○	OR1101	○		△
OR1095	○		○	OR1102	○		○
OR1096	○	○	○	OR1103	○		○
OR1097	○		○	OR1104	○		○
OR1098	○		○	OR1105	○		○
OR1099	○		○	OR1108	○		○

（齊藤希史. 漢文脈の近代. 名古屋大学, 2005. p. 193-195. を参照して筆者作成）

特に「史」の面で、柳北は米国の蘇格都（スコット）将軍を評価するような、歴史や社会への目を養うことも体験した。それは旧宗主国であった英国の専横に対して、抵抗する姿勢をとった米国そのものへの評価でもある。権力者側への横暴への批判は、後年の游記にも見られる。西郷隆盛が狩猟を盛んに行ったので熱海一帯では鹿が激減したことが、「鴉のゆあみ」（『熱海文藪』）中で「猪鹿ノ鮮肉有レバ沽ハントスルニ土人云フ西郷様御出デノ度ニ日々山ニ遊獵ナサレ今ハ猪モ鹿モ至テ乏シ」と述べられている。

欧米への旅立ち以前に柳北は、『柳橋新誌』第二編<sup>147</sup>を完成させており、権力者側の横暴な面と戦う姿勢は、「航西雑誌」の中で描かれた米英戦争の蘇格都（スコット）将軍を称える絶句を残したことに

も表されているが、さらに後年の国内の游记の中にも受け継がれていったと考えられる。

また米国の自然との関わりについては、柳北は那耶哥羅（ナイアガラ）の滝の雄大さに心底感動したが、次には山岳地帯での過酷な自然との対決を経験した。やがて緑河（グリーンリバー）や鹽湖（ソールトレイキ）ではその美しさに感動し、最終地点の桑港（サンフランシスコ）では花を愛でるほどになった。帰国を前に、柳北はまるで日本にいるかのように、心に余裕ができたのであろう。柳北は自然の風物である杜鵑の花と心穏やかに向き合い、日本で見ていた花々と同様な美しさを感じながら、米国での最後の日々を過ごしていたと考えられる。

絶句(OR1093)から絶句(OR1108)には、「景」「志」が詠みこまれ、特に(OR1096)では「景」「史」「志」の全てが詠みこまれている。柳北は自然との遭遇で自己を見つめ続けており、鹽湖（ソールトレイキ）の景色については絶句（OR1102）で「他年若憶鹽湖景。應是黃梁夢一場。」と、自己を客観的にとらえた上でこれからの人生を肯定的に考えている姿勢が読み取れる。また帰路の絶句(OR1108)の転句「封姨驀地吹雲裂」には風の神に守られて日本への帰路を急ぐ柳北の姿がある。柳北は無事に帰還し、今後の人生を模索したかったからと考えられる。

## （２）漢詩からみた米国体験の意義

外遊中の柳北の心情についてマシュー・フレリーは、以下のように述べている。

柳北は、洋行中まだ帰国後の針路をはっきりとは把握していなかっただろうが、「航西日乗」に現れているのは懐古的な感情ではなく、むしろ未来に向っての模索である。<sup>148</sup>

筆者は未来への模索が「航西日乗」中に強く描かれている点には同感である。しかし伊国での「遊多斯加納王故宮」（OR1071）という絶句には前王朝への追懷の念が表されている。「航西日乗」には未来への模索と過去への追懷という二つの感慨が込められていると考えられるのであるが、それは過去を省みて未来を考えるとという姿勢であり、悲哀のこもった追懷ではない。

米国での漢詩によって描かれた世界は、雄大な自然の前の卑小な人間と、権力の横暴さと戦う尊厳ある人間であった。柳北は人間の弱さを痛感しつつも、国家社会を担う人間の強さにも感動した。さらに短い滞在期間で、未開の原野を含む大陸横断では柳北が逃避してきた美的世界（花街等）もなく、柳北は完全に自己と向き合う体験をした。自己と向き合うことで、柳北の将来への模索はより真剣なものとなったと考えられる。

滞米中の漢詩だけからは、柳北がジャーナリストへの道を歩む決意を固めたことは論証できなかった。しかし蘇格都（スコット）将軍を称えた絶句(OR1096)から、国家社会への関心が高まったことを読み取ることができた。また過去の歴史への思いと将来の模索は一見矛盾しているようも思われるが、柳北には過去への反省があった。柳北は文久3（1863）年に幕藩体制の旧態依然とした様相に抗議して狂詩を賦し、閉門となり、将軍侍講の地位を失った過去もあった。この頃から柳北は洋学を学んでおり、維新後の海外体験から西欧文化を学ぶ意欲も強まり、再び生きる勇気を取り戻していったと考えられる。柳北の過去への追懷や反省と将来への模索は、米国で自己と向き合う体験を通じて一層強いものとなっていった。

## 9 海外体験における「航西雜詩」の重要性

柳北の海外体験を考察するためには、未完であった「航西日乗」の内容だけでは完全とは言えない。

「航西日乗」に収録されなかった「航西雑詩」中の作品、特に米国での漢詩を視野に入れ、柳北が人生を前向きに考えることを方向付けた雄大な自然との遭遇も考慮する必要がある。前田愛の『成島柳北』では仏国の巴里の部分だけが取り上げられており、他の伊国、英国、米国での柳北についての言及がない、乾の『成島柳北研究』では柳北の各国での見学先などが綿密に記されているが、米国については記されていない。筆者は今まで言及されなかった柳北の米国体験を、「航西雑詩」から漢詩を手がかりに考察することを試みた。

米国は伊国や英国のような君主制ではなく、また仏国のように現時点では共和制でも過去の君主の王宮等の歴史的建造物をもつ国ではなかった。大陸横断の際に柳北が過去の歴史を思いつつも、広大な原野という大自然の中で今後の自分についての思いを巡らしたことは十分考えられる。「航西雑詩」は近代文明で切り開かれた大陸を背景に詠まれている。歸家口號二首の漢詩（OR1110）で野山嘉正が指摘したように、地球を捉えた驚異や喜びは「航西雑詩」の帰着の際の漢詩で最も明確に表現されている。柳北の海外体験については、「航西日乗」と「航西雑詩」を併せて探究することが必要である。

## 第6節 第三章のまとめ

### 1 海外体験の概略

柳北の海外游记「航西日乗」は真宗大谷派の人々との外遊から書かれたもので、訪問国は仏国、伊国、英国、米国と途中の航海で立ち寄った亜細亜の国々であった。「航西日乗」は未完で、米国での記述はないが、外遊中の漢詩は全てが「航西雑詩」（『柳北詩鈔』巻三）としてまとめられている。

「航西日乗」中では、柳北自身の過去への追懐の念が描かれる一方で、維新後の日本社会への取り組みの必要性を柳北が徐々に感じ始めたことが読みとれる。亜細亜地域では英国の支配の中で貧しさから抜け出せない香港等の人々が記されていて、柳北が深く心に留めた状況が想像できる。仏国での柳北は近代文明の都市の生活に親しんだが、伊国の多スカーナ（トスカーナ）地方の弗稜蘭（フィレンツェ）での見聞は柳北の土地の人々への共感を深めた。土地の人々が以前の君主を追懐し、「而シテ此府ノ人民猶故君多スカーナ王ヲ追慕シテ今ノ伊王ニ心服セズ」という記述が見られる。伊国は1861年に統一され、サヴォイア家が統一後の国王となったが、民には旧君主（ハプスブルク家）への追懐の念があり、統一後の王家になじもうとしていない様子が描かれている。多スカーナ（トスカーナ）地方では過去の王室に思いをはせている人々に心を動かされた柳北であったが、後に羅馬（ローマ）で、柳北は統一国の皇太子（後のウンベルト一世）夫妻に丁寧な挨拶をしたことを記している。さらにポンペイでは古代遺跡に深く感動した。伊国の次に英国を訪れた柳北は、立憲王政の必要性を知るが、その一方で産業革命下での近代化された社会の裏側にも目を向ける。最後に訪れた米国では、柳北は米英戦争の米国側の英雄である過蘇格都（スコット）将軍を称える漢詩「過蘇格都古戦場」（OR1096）を詠むなど米国の国状にも関心をもつ。また大陸横断鉄道による過酷な旅を体験する。米国での記述は「航西日乗」には収録されず、「航西雑詩」に漢詩が残されている。

### 2 伊国と米国

柳北が以前に著した国内游记の「航薇日記」では江戸中心の社会から日本という国へ、柳北の社会の裏側に潜むものへの視線は拡大されたが、さらに「航西日乗」では文化の進んだ英国社会の裏側に潜む貧しさに関心をもつことで深化されていった。英国社会の繁栄の裏側に生きる人々に目を向け柳北は「倫敦小誌」の翻訳から繁栄した社会の裏側の貧しさを描いている。既に柳北は幕末に『柳橋新誌』初編で花街の裏側の金銭本位の人間模様を描いており、外遊前から養われていた社会の裏側に潜むものへの視

線は海外体験によってさらに鋭いものとなったのであった。このような状況の下で、柳北にとっての新たな体験は主に伊国と米国での体験であった。伊国と米国の体験から、柳北の中で変化したものと変化しないものを考察し以下に記す。

## (1) 伊国

### ①変化しないもの

伊国の体験では、柳北の中で変化しないものは過去の君主への追懷の念である。弗稜蘭での「遊多斯加納王故宮」(OR1071) という絶句には前王朝への追懷の念が表されている。

(OR1071)

知有遺民記大家。	知る 遺民の大家を記する有るを
當年一曲後庭花。	当年 一曲の後庭花。
石人不語春如夢。	石人語らず 春 夢の如し。
満苑靡蕪夕日斜。	満苑の靡蕪 (びぶ) 夕日斜なり。

柳北の絶句は、旧多斯加納(トスカーナ)大公国の民が元の君主であったメディチ家のことを忘れないでその記念碑を築いていることを詠んだもので、「景」、「史」、「志」が詠みこまれている。多斯加納の人々の行いに共感したことによる創作と考えられる。

さらに伊国のポンペイでの古代遺跡に柳北は深い感慨をもったが、外遊前から柳北は古銭の蒐集をするなど歴史的遺産に関心を払っていて、悠久な時の流れに深く感動を覚えたのであった。

### ②変化が見られたもの

柳北の中で変化が見られたものは統一された国家の必要性に気付いたことであった。維新直後の明治元(1867)年の秋の末に柳北は「墨上隠士傳」を著し、その最後の部分には以下のような記述がある。

蓋隠士の言に曰、われ歴世鴻恩をうけし主君に、骸骨を乞ひ、病懶(びょうらん)の極、眞に天地無用の人となれり、故に世間有用の事を爲すを好まずと、それ或は然らん、それ或は然らん、明治元年秋の末 東京 野史氏しるす(「墨上隠士傳」)<sup>149</sup>

幕府が滅亡した以上は国家や社会のために働くことはできないという寂寥の思いを述べている。しかし「航西日乗」明治6(1873)年3月27日の記録には、トレヴィの泉付近での以下の記述がある。

デラビ」ノ泉亦古跡ノ一ナリ此處ニテ伊國ノ皇太子及ビ妃ニ逢フ余等帽ヲ脱シテ禮ス太子亦慇懃ニ答禮セラレタリ  
クイリナル宮ハ即チ今ノ王宮ナリ公堂及ビ樓閣園池ノ覽縦ヲ許サル頗ル美麗ニテ有リキ

柳北は統一国家としての伊国やその王室に思いを馳せて、統一国家の王宮は大変美しく、庭園は一般にも公開されている様子を柳北は記している。柳北は伊国では、小国分立から統一された近代国家の形成の必要性和古代の歴史的な文化財を重視することを学んだのである。帰国後の明治7(1874)年の『朝野新聞』に以下の記述がある。



迂生窃カニ謂フ、静岡ノ士族ハ宜シク徳川氏ノ恩ヲ忘レズ、鹿児島ノ士族ハ宜シク島津氏ノ徳ヲ慕フ可。是レ則チ忠厚ノ道ニシテ、其ノ道ヲ大ニスル時ハ即チ愛国トナルノミ。文明開化モ決シテ此ノ他ニ非ズ（唯頑固ニシテ旧主アルヲ知テ政府アルヲ知ラズ政府アルヲ知テ日本国アルヲ知ラザル如キ者ハ迂生亦之ヲ厭棄ス）。(『朝野新聞』明治7年11月9日投書欄) <sup>150</sup>

柳北は日本の国は一つの政府による近代国家にする必要性を伊国での見聞から学び、旧藩の士族であるよりも日本の国を構成している人間としての意識をもつように全国の士族に呼びかけたのであった。『朝野新聞』明治7年11月9日投書欄の中には、国を構成している一般の人々として「平民」<sup>151</sup>と「人民」という言葉が使われ、柳北は自分自身を「迂生の如き平民」と表現している。帰国後に柳北は旧主である徳川家への尊重の念をもちつつも、帰属を幕臣から日本の国を構成する一般の人へと徐々に変容させていったのである。

## (2) 米国

米国では米英戦争の戦跡の見学から過去の遺跡の保存の必要性を柳北は知った。特に米国の場合は専横的な旧宗主国である英国に反抗して国の独立を維持した歴史を学んだことが特徴である。

### ①変化しないもの

柳北は外遊以前から歴史上の武人には敬意を払っていて、「航薇日記」の中の楠木正成を詠んだ漢詩(KB1042)がある。その転句と結句を以下に記す。

當日若成功業了。      當日若シ功業ヲ成シ了ラバ。  
書生未必祭忠魂。      書生ハ未ダ必シモ忠魂ヲ祭ラズ。 <sup>152</sup>

転句と結句では、正成が湊川で討ち死にしなければ、忠魂が祭られていたかどうか、正成という犠牲があつて後世の我々は忠魂を祭ったのだと、柳北自身の感慨が述べられている。米英戦争は1814年に講和が結ばれたことで終結しており、米国での柳北は蘇格都(スコット)将軍の功績を称えた絶句(OR1096)「過蘇格都古戦場」を残している。その転句と結句を以下に記す。

歸雲陣々來爭岫。      帰雲 陣々來たりて岫(しう)を争ふ。  
飛瀑猶爲巨礮聲。      飛瀑猶ほ為(な)す巨礮(きよほう)の声

転句と結句では帰り行く雲は盛んに吹く風に追いやられ、先を争いながら山の斜面の洞穴に入っていく光景が詠まれ、雄大な自然を背景として武勇が称えられている。柳北の中での歴史上の人物の評価、特に命がけで戦った武人へ敬意の念は変わらなかった。

### ②変化が見られたもの

柳北の中で変化が見られたものは国の独立を重視する思考が芽生えたことである。米英戦争は英国の米国の海運への妨害に対する抗議がその原因であつて、米国は国の独立の維持のための戦いを行つたのであつた。正成を称えた絶句は湊川の歴史、「史」の要素が濃厚である。しかし「過蘇格都古戦場」には、「史」「志」「景」の全てが詠みこまれている。それは英国の専横に対して、国の独立を維持していった米国の人々に柳北が感動を覚えたからである。

### (3) 国家についての思索の深化

伊国での体験から柳北の中での帰属意識は幕府や旧主への帰属を持ちつつ、徐々に日本の国の構成員としての帰属に変容していった。また米国では戦跡の中に統一国家の形成に多く犠牲が払われた戦いがあったことを見聞し、国の独立への思索を深めていった。柳北の心底に日本の国の構成員としての帰属意識と、国の統一や独立を重視する思考が徐々に芽生えていったのは、伊国と米国での見聞に因るものが大きいのである。

#### 〈注〉

<sup>1</sup> 欧米の都市名及び国名は、柳北著作の「航西日乗」中の漢字表記に、初出はカタカナ表記、原綴を併記した。国名については、「航西日乗」中では仏国、伊国と記されているので、漢字表記。（「航西日乗」中ではイタリアについては、「伊太利」と「以太利」と二通り記されているが、英仏米については、「英国」というような略称で記されているので略称で統一。）但し、柳北著作の中の表記よりも、現行の出版物での表記が一般化した例外。伊国の都市名で弗稜蘭（フロラン）は、現行のフィレンツェ（Firenze）であり、（柳北の作品「航西日乗」中では弗稜蘭（フロラン）と記されているが、現行では「フィレンツェ」が一般的なので、引用以外は弗稜蘭（フィレンツェ）と記す。またアジア地域の地名については、柳北著作の中の漢字表記にカタカナ表記を付した。

<sup>2</sup> 海外見聞集. 新日本古典文学大系 明治編 5. 岩波書店, 2009. p. 250.

<sup>3</sup> 柏原祐泉. 近代大谷派の教団. 真宗大谷派宗務所出版部, 1986. p. 35.

<sup>4</sup> 『柳橋新誌』二編の原文は、柳橋新誌・伊都満底草. 勉誠社, 1985. p. 137. からの引用。また書下し文の引用は江戸繁昌記・柳橋新誌. 新日本古典文学大系 100. 岩波書店, p. 421. 大意についても同書参照。

<sup>5</sup> 日本新聞博物館. 新聞のあゆみ—明治から現代まで—. 日本新聞博物館, p. 4.

<sup>6</sup> 河野敏鎌（こうのとがま）は、幕末の土佐藩士、後に政治家。江戸で安井息軒に支持、土佐勤王党に加わり、投獄された。明治5（1872）年に司法省に入り、巴里で岩倉使節団に合流した。佐賀の乱・西南戦争では臨時裁判所裁判長をつとめたが、明治14年の政変で下野し、立憲改進黨（柳北も黨員）に参加し、後枢密顧問官、内相、司法相等を歴任した。

「航西日乗」に登場する日本史上の人物については、朝尾直弘. 角川日本史辞典. 角川書店, 1996. 及び『「航西日乗」人名注・索引』（注1 海外見聞集. 新日本古典文学大系 明治編 5. 岩波書店）を参照した。

<sup>7</sup> 井上毅（いのうえこわし）は、熊本藩出身の政治家。大学南校中舎長を経て司法省に入る。岩倉使節団に合流して、明治6年（1873）に帰国。後法制局長官、文相等を歴任し、大日本帝国憲法・教育勅語制定に参画。帰国後の柳北は明治8年に公布された讒謗律と新聞条例に対して、当時法制局2等書記官として実務を担当した井上と尾崎三郎を揶揄し、9年には鍛冶橋監獄に4ヶ月入獄する。

<sup>8</sup> 「航西日乗」中の詩については、原文は成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. 明治文学全集 4. 筑摩書房, 1969. からの引用である。「航西日乗」は、後年柳北が主宰した詩文雑誌『花月新誌』に掲載され、その際に漢文で書かれていた原文が訓下文に書き改められた。連載は第118号～153号（明治14年11月30日～17年8月8日迄149号と152号を除く）である。また「航西日乗」及び「航西雑詩」中の漢詩の書き下し文については、注2 海外見聞集を引用した。大意は同書及び川口久雄. 幕末明治海外体験詩集. 大東文化大学東洋研究所, 1984. を参照した。

<sup>9</sup> 本文と書下し文の引用は、入谷仙介. 頼山陽・梁川星巖. 江戸詩人選集 8. 岩波書店, 1990. p. 58-59.

<sup>10</sup> 本文と書下し文の引用は、近藤光男. 蘇軾. 漢詩選 1 1. 集英社, 1996. p. 340.

<sup>11</sup> 山本和義. 蘇軾. 中国詩文選 19. 筑摩書房, 1973. p. 224-225.

<sup>12</sup> 小島憲之. ことばの重み. 講談社学術文庫. 講談社, 2011. p. 87-97. 参照。

<sup>13</sup> 佐久節. 漢詩大観（下）. 鳳出版, 1974. p. 2988.

<sup>14</sup> 小川環樹. 蘇東坡詩選. 岩波文庫. 岩波書店, 2009. p. 288.

<sup>15</sup> 柳北はロッキー山脈を通過する際に、以下の句を詠んだ。

(OR1099)

午炎烘地夜亦蒸。 午炎 地を烘き 夜も亦た蒸す

警鐸敲醒夢一肱。 警鐸 敲いて醒ます 夢一肱  
向曉空山人患渴。 曉に向ひて 空山 人 渴を患ふ  
停車爭嚼澗頭氷。 車を停めて 争ひ嚼む 澗頭の氷

<sup>16</sup> 注 2 海外見聞集. p. 256 の尾注。

<sup>17</sup> 吉澤誠一郎. 清朝と近代世界 19 世紀. 岩波新書. 岩波書店, 2011. p. 170.

<sup>18</sup> 原文および書下し文の引用は、目加田誠. 唐詩選. 新釈 漢文大系 19. 明治書院, 1998. p. 575.

<sup>19</sup> 茂木敏夫. 変容する近代東アジアの国際秩序. 世界史リブレット. 山川出版社, 1997. p. 55-56.

<sup>20</sup> 世界史小辞典編集委員会. 山川世界史小辞典. 改訂新版. 山川出版社, 2004. 359.

<sup>21</sup> 『柳橋新誌』の原文は注 4 柳橋新誌・伊都満底草. p. 94 を、書下し文は注 4 江戸繁昌記・柳橋新誌 p. 391. を参照した。

<sup>22</sup> 本文の引用は、白居易. 顧學頤 校點. 白居易集第二冊. 中國古典文學基本叢書. 北京. 中華書局, 1979. p. 729.

<sup>23</sup> 注 20 山川世界史小辞典. p. 398.

<sup>24</sup> 本文及び書下し文の引用は、青木正兒. 杜甫. 漢詩大系 9. 集英社, 1981. p. 211.

<sup>25</sup> 松本白華航海録. 真宗史料集成第 11 卷. 「維新期の真宗」抜刷. 京都. 同朋出版, 1975. p. 379.

<sup>26</sup> 注 2 海外見聞集. p. 254 尾注参照。また、注 8 幕末明治海外体験詩集. p. 476 では、「蠻奴」を「東南亜細亜人のボーイ」として訳している。

<sup>27</sup> 日野龍夫. 成島柳北・大沼枕山. 江戸詩人選集 10. 岩波書店, 2001. p. 275-76.

<sup>22</sup> 本文の引用は、白居易集第二冊. 中國古典文學基本叢書. 北京. 中華書局, 1979. p. 729.

<sup>23</sup> 注 20 山川世界史小辞典. p. 398.

<sup>24</sup> 本文及び書下し文の引用は、青木正兒. 杜甫. 漢詩大系 9. 集英社, 1981. p. 211.

<sup>25</sup> 松本白華航海録. 真宗史料集成第 11 卷. 「維新期の真宗」抜刷. 京都. 同朋出版, 1975. p. 379.

<sup>26</sup> 注 2 海外見聞集. p. 254 尾注参照。また、注 8 幕末明治海外体験詩集. p. 476 では、「蠻奴」を「東南亜細亜人のボーイ」として訳している。

<sup>27</sup> 日野龍夫. 成島柳北・大沼枕山. 江戸詩人選集 10. 岩波書店, 2001. p. 275-76.

<sup>28</sup> 注 27 成島柳北・大沼枕山. p. 336 の「解説」。

<sup>29</sup> 水晶宮は、ロンドンのハイドパークにある建造物で第一回万国博覧会の会場として建てられたものである。ディズレーリは総選挙を念頭に演説を行い、74 年の総選挙では自由党に大勝した。その内容の一部は以下のようものである。

諸君が自宅や郷里に帰られた際には、感化できそうな人であれば誰にでも、こう言わねばなりません。  
イギリスがナショナルな原理とコスモポリタンな原理とのどちらかの選択を迫られるような時が、間近に迫っている。少なくとも遠からぬ日に来る、と。(なりやまぬ大歓声)  
(歴史学研究会編. 世界史史料 第 6 巻. 岩波書店, 2007. p. 226.)

<sup>30</sup> 注 29 世界史史料 第 6 巻. p. 227.

<sup>31</sup> 川北稔. イギリス史. 山川出版社, 1998. p. 307.

<sup>32</sup> 本朝文粹. 新日本古典文学大系 27. 岩波書店, 1992. p. 139. 尚、同書によれば菅三品は菅原文時(昌泰 2(899)年～天元 4(981)年)のことで、菅原道真の孫である。

<sup>33</sup> 久米邦武. 米欧回覧実記 5. 岩波文庫. 岩波書店, 2003, p. 256.

<sup>34</sup> 本文及び書下し文の引用は、青木正兒. 杜牧. 漢詩大系 14. 集英社, 1978. p. 269.

<sup>35</sup> 岩下哲典. 江戸のナポレオン伝説. 中公新書. 中央公論新社, 1999. p. 133.

<sup>36</sup> 佐久節. 漢詩大観(中). 鳳出版, 1974. p. 1301.

<sup>37</sup> 注 36 漢詩大観(中). p. 1195.

<sup>38</sup> 日本史籍協会. 木戸孝允日記(第三). 東京大學出版會, 1933 初版. 1977 覆刻. には、明治 10 年 4 月に柳北が木戸と交流していたことが記されている。

<sup>39</sup> 始皇帝陵については、現在以下のことが判明している。

始皇帝陵は驪山の山麓の微傾斜地につくられた人工の山陵である。そしてまたその墳丘は二重の城壁に囲まれている。人工都市を意識して造営したことは間違いない。(鶴間和幸. 始皇帝陵と兵馬俑. 講談社学術文庫. 講談社, 2004. p. 76.)

<sup>40</sup> 注 24 杜甫. 漢詩大系 9. 集英社, 1981. p. 150.

<sup>41</sup> 原文は、注 4 江戸繁昌記・柳橋新誌. p. 484. 書き下し文は、同書 p. 179.

- <sup>42</sup> 明治翻譯文學集. 明治文學全集 7. 筑摩書房, 1972. p. 409 の巻末の木村毅による「解題」。
- <sup>43</sup> 中村洪介. 維新时期日本人の洋楽体験. 筑波大学比較文化会編, 比較文化 第4巻. 1987. p. 95.
- <sup>44</sup> 前田愛. 成島柳北. 朝日新聞社, 1990. p. 186.
- <sup>45</sup> 柳北が「航西日乗」で詠んだ漢詩には題名が略されているものが多いが、『柳北詩鈔』に収録されている「航西雜詩」には詩の題名が記され、さらに何編かの詩には三溪による評が頭注に記されている。この詩の評は「詠古能品」である。
- 「航西雜詩」の原文は、『柳北詩鈔』(CD-ROM『日本漢詩第三輯(江戸後期／明治初期)』(加藤国安監修 凱希メディアサービス)からの引用。また柳北詩鈔. 寸珍百種第39編. 博文館, 1894. のデジタルコレクション(国会図書館)も参照。
- <sup>46</sup> 注8 幕末明治海外体験詩集 p. 513.
- <sup>47</sup> 原文および書下し文の引用は、青木正兒. 李白. 漢詩大系 8. 集英社, 1979. p. 154.
- <sup>48</sup> 原文および書下し文の引用は、細田三喜夫. 中国名詩鑑賞辞典. 東京堂出版, p. 147. 1977.
- <sup>49</sup> デラビ」ノ泉、注2 海外見聞集. p. 329 の尾注に、トレヴィの泉 (Fontana di Trevi) とある。また別の資料では「デラビの泉」と本文に表記され、またその注には「有名なトレヴィの泉 (Fontana di Trevi)」と記されている。(井田進也 校注. 幕末維新パリ見聞記. 岩波書店, 2009. p. 103, p. 230 の注.)
- 」は、表記上での一つの記号見られるが、この記号については同様なものが古典文学に見られることが指摘されている。
- ただし江戸時代になると、学者の中から、終止符について関心がもたれ、伴蒿蹊は『国文世』の跡 上』(安政六年刊一七七七)で「く」ハ一節。ハ句、ハ読△▲対話上下の合印トス」といい、「く」はかなり現代の「く」に近い。(杉本つとむ. 語彙と句読法. 杉本つとむ日本語講座 4. 桜風社, 1979. p. 215.)
- 「航西日乗」中では、伊国での固有名詞の表記に「く」が一つの区切りとして使われている。サンヂヨン」ノ寺や、マルス、ウルトレイ」ハ城門という記述がある。柳北が何故このように記したのかは不明であるが、井田進也 校注. 幕末維新パリ見聞記においては、サンヂヨンの寺、マルス、ウルトレイは城門、と本文上に記述されている。さらに昭和3(1928)年に刊行された『明治文化全集』の「外国文化篇」に収録されている「航西日乗」(明治文化研究会. 明治文化全集 第17巻. 外国文化篇. 復刻版. 日本評論社, 1992. p. 431.)においては本文に、「デラビ」ノ泉、「サンヂヨン」ノ寺、「マルス、ウルトレイ」ハ城門と表記されている。或いは柳北が「」の表記をするつもりが誤ったということも有り得ることである。
- <sup>50</sup> 注27 成島柳北・大沼枕山. p. 152 参照。
- <sup>51</sup> 靈囿は周の文王が設けた動物を放し飼いにした庭園である。『詩経』大雅「靈臺」には以下の部分がある。
- 王在靈囿 王 靈囿(れいいう)に在れば  
麀鹿攸伏 麀鹿(いうろく)攸(ここ)に伏す
- (原文および書下し文の引用は、石川忠久. 詩経(下). 新釈漢文大系 112. 明治書院, 2000. p. 150.)
- <sup>52</sup> 注20 山川世界史小事典. p. 495.
- <sup>53</sup> 久米邦武. 米欧回覧実記 4. 岩波文庫. 岩波書店, 2000. p. 262.
- <sup>54</sup> 注20 山川世界史小事典. p. 151.
- <sup>55</sup> 田中彰. 岩倉使節団「米欧回覧実記」. 岩波現代文庫. 岩波書店, 2007. p. 201.
- <sup>56</sup> 注8 暁窓追録. 成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. p. 305.
- <sup>57</sup> 注55 岩倉使節団「米欧回覧実記」. p. 201.
- <sup>58</sup> 注8 幕末明治海外体験詩集. p. 513.
- <sup>59</sup> 乾照夫. 成島柳北研究. ペリかん社, 2003. p. 81.
- <sup>60</sup> 大島隆一. 柳北談叢. 昭和刊行會, 1943. p. 14.
- <sup>61</sup> 注60 柳北談叢. p. 30.
- <sup>62</sup> 注59 成島柳北研究. p. 96.
- <sup>63</sup> 本文及び書下し文の引用、新編柳北詩文集. 漢詩文集. 新日本古典文学大系明治編 2. 岩波店, 2004. p. 250.
- <sup>64</sup> 大意は、注63 新編柳北詩文集 p. 250 の尾注参照。
- <sup>65</sup> 本文及び書下し文の引用は、注63 新編柳北詩文集. p. 251.
- <sup>66</sup> 注63 新編柳北詩文集. p. 251. の尾注参照。
- <sup>67</sup> 本文及び書下し文の引用は、田中克己. 白樂天. 漢詩大系 12. 集英社, 1986. p. 219.
- <sup>68</sup> 本文及び書下し文の引用は、注4 江戸繁昌記・柳橋新誌. p. 298 及び p. 523.

- <sup>69</sup> 本文及び書下し文の引用は、注 24 杜甫. p. 49.
- <sup>70</sup> 本文及び書下し文の引用は、青木正兒. 王維. 漢詩大系 10. 集英社, 1979. p. 315.
- <sup>71</sup> マイケル・パターンソン. ディケンズのロンドン案内. 原書房, 2010. p. 200.
- <sup>72</sup> 注 31 イギリス史. p. 295.
- <sup>73</sup> Matthew Fraleigh. 成島柳北の洋行—『航西日乗』の諸コンテクスト—. 国語国文. vol. 71. No. 11, 通号 819. 2002-11. p. 6.
- <sup>74</sup> 注 60 柳北談叢. p. 174.
- <sup>75</sup> 1869 年、東のユニオン・パシフィックと西のセントラル・パシフィックが連結、初の大陸横断鉄道が完成した。(猿谷要. 西部開拓史. 岩波新書. 岩波書店, 1986. p. 161 参照)。
- <sup>76</sup> 大江敬香. 明治詩壇評論. 明治漢詩文集. 明治文学全集 62. 筑摩書房, 1983. p. 323.
- <sup>77</sup> 「航西日乗」中の詩については、原文は注 8 成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. からの引用である。また花月新誌. 複製版. ゆまに書房. 1974 年を参照した。「航西日乗」は、後年柳北が主宰した詩文雑誌『花月新誌』に掲載され、その際に漢文で書かれていた原文が訓下文に書き改められた。連載は第 118 号～153 号（明治 14 年 11 月 30 日～17 年 8 月 8 日迄 149 号と 152 号を除く）であった。
- <sup>78</sup> 『柳北詩鈔』中の詩の原文については、『柳北詩鈔』（CD-ROM『日本漢詩第三輯（江戸後期／明治初期）』（加藤国安監修 凱希メディアサービス)）。また国会図書館の「近代デジタルライブラリー」を参照した。
- <sup>79</sup> 注 76 明治詩壇評論. 明治漢詩文集.
- <sup>80</sup> 注 25 松本白華航海録. 参照。柳北の航海中の日記については、原本は散逸しているが、『松本白華航海録』のうち、9 月 11 日から 10 月 22 日までの漢文日記の内容が「航西日乗」中の内容とほぼ同じであり、柳北の日記原文を松本白華が写したものと考えられている。(注 2 海外見聞集. p. 250 参照)。
- <sup>81</sup> 猪口篤志. 日本漢詩（下）. 新釈漢文大系 46. 明治書院, 2000.
- <sup>82</sup> 注 8 幕末明治海外体験詩集.
- <sup>83</sup> 三浦叶. 明治漢文学史. 汲古書院, 1998.
- <sup>84</sup> 注 76 明治漢詩文集.
- <sup>85</sup> 注 27 成島柳北・大沼枕山. p. 157.
- <sup>86</sup> 注 2 海外見聞集. p. 323 の尾注参照。
- <sup>87</sup> 「航西日乗」及び「航西雑詩」中の漢詩の書き下し文については、注 2 海外見聞集. 大意も同書の尾注参照。また注 8 幕末明治海外体験詩集. も参照した。
- <sup>88</sup> この二句についての大意は注 27 成島柳北・大沼枕山. p. 157-158. を参照した。
- <sup>89</sup> 李白の作品は李白集考注全二冊. 上海古籍出版社, 1979. p. 1238-1239. からの引用である。書き下し文については、李白. 鑑賞中国の古典 16. 角川書店, 1988. p. 250-256.
- <sup>90</sup> 『寒檠小稿』の書誌事項は以下のようである。  
『寒檠小稿』四卷／安政四年（一八五七）以降の成立／十八歳から二十一歳までの作を年ごとに編んで四巻全四四二首／柳北自筆らしい筆跡を含む／添削の跡がある。(国会図書館所蔵)
- <sup>91</sup> 書き下し文については、注 63 新編 柳北詩文集. p. 216-217. を参照した。
- <sup>92</sup> 柴田就平. 海を渡った李白像-中国から日本へ. アジア文化交流研究. 関西大学亜細亜文化交流研究センター, No. 4. 2009. p. 197-215 参照。
- <sup>93</sup> 注 89 李白. 鑑賞中国の古典. p. 372.
- <sup>94</sup> 注 27 成島柳北・大沼枕山. p. 158.
- <sup>95</sup> 注 81 日本漢詩（下）. p. 528-529 参照。また他に中国詩人の作品の引用については漢詩大観. 索引共全 5 巻. 鳳出版, 1974 復刊. 参照。
- <sup>96</sup> 注 83 明治漢文学史. の中で、三浦叶はこの作品を取り上げ「柳北の詩といえば、最も人口に膾炙しているのは、次のナイヤガラ観瀑の詩であろう」と述べている。
- <sup>97</sup> 信夫恕軒（天保 6 年（1835）-明治 43 年（1910））旧因幡藩士、明治政府にも出仕し、教員としての人生を歩んだ。「性狷介、酒を嗜んで友とする人は少なかったが、成島柳北とは親しかった」とされている。注 76 明治漢詩文集. p. 437.
- <sup>98</sup> 成島柳北先生の碑. 恕軒文鈔（抄）. 三編巻下. 注 63 新編 柳北詩文集. p. 335.
- <sup>99</sup> 本文、書下し文の引用は、注 24 杜甫. p. 189.
- <sup>100</sup> 先陣庵についての茶山の漢詩「先陣庵 庵在藤戸渡」は「六百年前舊戦營先登猶認艸菴名春潮一派通田洳野菜花中海舶行」であった。(菅茶山先生著「黄葉夕陽村舎詩」文化壬申年歳鑄 皇都書林 汲古堂梓（詩

集日本漢詩. 第九卷. 汲古書院, 1985. p. 15.)。

<sup>101</sup> 菅茶山・六如. 江戸詩人選集 4. 岩波書店, 1990. p. 410 の解説。

<sup>102</sup> 岸田冠堂(童)は、医師で漢詩人、明治11年5月に56歳で没した。その人柄については「貧者よりは薬価をとらず、困窮者には金銭及食糧を与えて治療を施す等、医は仁術の諺を身をもって実行したる仁者である。詩学を広瀬淡窓に学ぶ。」の記述が妹尾町の歴史. 妹尾町, 1970. p. 260 に見られる。

<sup>103</sup> 「航薇日記」は、『花月新誌』82号(明治12年9月28日)から117号(明治14年11月20日)に連載された。柳北が義兄戸川貫好の領地であった妹尾町を訪れた際の国内での游记である。「航薇日記」の引用は注6成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集。

<sup>104</sup> 米英戦争(アメリカ-イギリス戦争 Anglo-American War of 1812)については「ナポレオン戦争中アメリカでは、イギリスによるアメリカ海運の妨害や同国と北西部インディアンとの結びつきに対する反感から、対開戦論が強まり、1812年に宣戦した」との記述が注19山川世界史小事典. p. 26にある。ここでの「インディアン」とは先住アメリカ人のことであるが、先住アメリカ人(Native Americans)については主としてアメリカインディアンをさすが、エスキモー(イヌイット)、アリュートの先住民も含まれるとされている。

<sup>105</sup> Graves, Donald E. (Donald Edward), *Red Coats & Grey Jackets : The Battle of Chippawa, 5 July 1814*, Dundurn Press, Toronto & Oxford, 1994. 224p.

<sup>106</sup> スコット及び南北戦争時の米国の軍隊については、「南北戦争以前のアメリカ軍士官の大多数は南部出身者によって占められ、ことにバージニア出身者が多かった。北軍の最初の司令官、ウィンフィールド・スコット将軍はバージニア出身で、後に南軍の司令官となったロバート・リー将軍に、同郷のよしみもあって、北軍司令官にならないかと交渉したこともあった。」の記述が下記の文献に見られる。

デイビッド・ルー. アメリカ 自由と変革の軌跡. 日本経済新聞出版社. 2009. p. 117.

<sup>107</sup> 書下し文は、注63 柳北文集. 新日本古典文学大系 明治編 2. p. 234.

<sup>108</sup> 本文及び書下し文の引用は、近藤光男. 清詩選. 漢詩選 14. 集英社, 2002. p. 289.

<sup>109</sup> 本文及び書下し文の引用は、注24 杜甫. 漢詩大系 9. p. 305.

<sup>110</sup> 本文及び書下し文の引用は、高橋忠彦. 文選賦篇(中). 新釈 漢文大系 80. 明治書院, 1998. p. 191.

<sup>111</sup> 本文は、注3 柳橋新誌・伊都満底草. p. 139.、書下し文は、注3 江戸繁昌記・柳橋新誌. p. 422.

<sup>112</sup> 注3 柳橋新誌・伊都満底草. 青柳達雄の「解説」p. 7.

<sup>113</sup> 『柳橋新誌』初編の自序で、柳北は「往日日有静軒居士者著江戸繁昌記備模八百八街之景状勝場劇區無所不載無所不説」(注3 柳橋新誌・伊都満底草. p. 7)と『江戸繁昌記』を評価し、それに倣って『柳橋新誌』を著したことを述べている。『江戸繁昌記』は寺門静軒(寛政8(1796)年-慶応4(1868)年)によって、柳北の誕生以前、天保二(1831)年に初篇が著わされていた。

<sup>114</sup> 本文は、注3 江戸繁昌記・柳橋新誌. p. 445.

<sup>115</sup> 本文及び書下し文の引用は、星川清孝. 古文真宝(後集). 新釈漢文大系 16. 明治書院, 1984. p. 19. 3

<sup>116</sup> 乾照夫. 成島柳北の『航薇日記』について. 東京情報大学情報文化学科創立10周年記念論集. 2007. p. 211.

<sup>117</sup> 本文及び書下し文の引用は、注47 李白. 漢詩大系 8. p. 308.

<sup>118</sup> 注27 成島柳北・大沼枕山. p. 95. 参照。

<sup>119</sup> 大沼枕山(文化15(1818)年-明治24(1891)年)は、尾張出身の大沼竹溪の子であり、永井荷風の外祖父鷺津穀堂の一族であった。「枕山は范石湖・楊成齋を宗とし、陸放翁・蘇東坡・黄山谷の長を學んで一家独自の風を拓き」という記述が見られる。(注76 明治漢詩文集. p. 403.)

<sup>120</sup> 本文の引用は、枕山詩鈔卷之上. 詩集日本漢詩 17. 汲古書院, 1989. p. 418.

<sup>121</sup> 注73 成島柳北の洋行. p. 4.

<sup>122</sup> 本文及び書下し文の引用は、注115 古文真宝後集. p. 19.

<sup>123</sup> 紀平英作. アメリカ史. 山川出版, 1999. では先住アメリカ人(インディアン)を先住民と表記しているので、この論文でもそれに倣った。

<sup>124</sup> 注75 西部開拓史. p. 184-188. 参照。

<sup>125</sup> 本文及び書下し文の引用は、黒川洋一. 杜甫詩選. 岩波文庫. 岩波書店, 2008. p. 123.

<sup>126</sup> 本文及び書下し文の引用は、目加田誠. 唐詩選. 新釈漢文大系 19. 明治書院, 1998. p. 330.

<sup>127</sup> 注63 柳北文集. 新日本古典文学大系 明治編 2. p. 226 の尾注参照。

<sup>128</sup> 本文及び書下し文の引用は、三体詩(一). 朝日新聞社, 1978. p. 187.

<sup>129</sup> 注125 杜甫詩選. p. 248.

<sup>130</sup> 本文及び書下し文の引用は、注108 清詩選. p. 289.

- <sup>131</sup> 本文及び書下し文の引用は、注 8 蘇軾. p. 211.
- <sup>132</sup> 本文及び書下し文の引用は、注 27 成島柳北・大沼枕山. p. 166.
- <sup>133</sup> 本文及び書下し文の引用は、注 128 三体詩（一）. p. 200.
- <sup>134</sup> 書下し文の引用は、注 27 成島柳北・大沼枕山. p. 71.
- <sup>135</sup> 本文及び書下し文の引用は、注 126 唐詩選. p. 710.
- <sup>136</sup> 本文及び書下し文の引用は、注 24 杜甫. p. 39.
- <sup>137</sup> 段成式. 今村与志雄 訳注. 西陽雜俎 4. 東洋文庫. 平凡社, 1994. p. 146.
- <sup>138</sup> 本文及び書下し文の引用は、注 40 杜甫. p. 185.
- <sup>139</sup> 注 63 柳北詩文集. p. 249.
- <sup>140</sup> 花柳春話題言. 明治翻譯文學集. 筑摩書房, 1972. p. 3.
- <sup>141</sup> 書下し文は、注 27 成島柳北・大沼枕山. p. 161.
- <sup>142</sup> 野山嘉正. 成島柳北の詩. 文学 vol. 53, No. 11. 1985. p. 208.
- <sup>143</sup> 『熱海文藪』の書誌事項は以下のである。「柳北仙史 熱海文藪」一冊／四六判白色又は緑色ボール表紙／出版并發賣所伊豆國賀茂郡熱海村 世古六之助／賣捌所 東京銀座四丁目 朝野新聞社／編者 武内一郎（馬溪）／明治十七年七月三十日。（注 8 成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集 p. 417. の「解題」.）  
所収の本文の掲載誌紙を以下に記す。（同書参照）  
「澡泉紀遊」（明治 11 年 9 月 22 日）「鴉のゆあみ」（14 年 1 月 25 日）「なくもがな」（15 年 1 月 18 日）「烟草の吸さし」（16 年 1 月 26 日）「すげのを笠」（16 年 8 月 30 日）「菅の小笠附言」（16 年 9 月 14 日）  
「藥槽餘滴」（17 年 1 月 8 日）「澡泉紀遊」が『花月新誌』である以外、他はすべて『朝野新聞』所載。  
「澡泉紀遊」は『花月新誌』では「澡泉紀游」と記され、『花月新誌』第 54 号から 62 号に連載されている。  
<sup>144</sup> 「澡泉紀游」中の漢詩は『花月新誌』第 61 号（複製版）から、「鴉のゆあみ」は注 6 成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集から引用。
- <sup>145</sup> 書下し文は、松本先生のご指導の下で付加した。
- <sup>146</sup> 齊藤希史. 漢文脈の近代. 名古屋大学, 2005. p. 195.
- <sup>147</sup> 『柳橋新誌』第二編の創作の意図について以下の記述がある。  
薩長の田舎者を主体とする〈東京〉の客が文明開化を代表するのに対応して、柳橋は三百年の江戸文化の代表の役割を負わされたのである。〈東京〉の客が柳橋で我が物顔に振る舞うさまに、柳北は、粗野な文明開化の波が江戸文化の粹を蹂躪しつつある世相の縮図を見出して、憤りを禁じ得なかった。（注 3 江戸繁昌記・柳橋新誌 p. 609 の日野龍夫の「解説」）
- <sup>148</sup> 注 73 成島柳北の洋行. p. 43.
- <sup>149</sup> 遷上隠士傳. 柳北全集. 博文館, 1997. p. 2.
- <sup>150</sup> 注 63 柳北詩文集. p. 247.
- <sup>151</sup> 福沢諭吉の「平民」と「人民」という言葉の用法を以下に記すが、柳北も倣ったと考えられる。  
彼は「人民」と「平民」の語を用い、「日本人民」と使う一方、身分的には「平民」を使っている。  
（芳賀登. 民衆概念の歴史的変遷. 雄山閣出版, 1994. p. 327.）
- <sup>152</sup> 注 8 成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. p. 115.

## 第IV章 帰国後の活動

### 第1節 『朝野新聞』での政治や社会への批判

#### 1 新聞を通じての社会の進展をめざして

##### (1) 本願寺翻訳局との行き違い

柳北の海外での遊記「航西日乗」は、明治5(1872)年から6年にかけての真宗大谷派の人々との外遊から書かれたもので、訪問国は仏国(フランス)、伊国(イタリア)、英国(イギリス)、米国(アメリカ合衆国)と航海の途中で立ち寄った亜細亜の国々であった。当時東本願寺では翻訳局を作る計画があり、柳北はその責任者として期待されていた。

大島隆一は、明治6(1873)年の柳北の日記『西遊日乗』の中で8月6日に柳北が京都へ行き、11月5日には譯局開業講話如式に臨んだことを指摘しているが、「その後、この翻訳局がつづけられたものか、どうか、はっきりしない。」<sup>1</sup>と述べている。また前田愛は『成島柳北』の中で、柳北が明治7(1874)年には東本願寺から離反した経緯を以下のように述べている。

柳北が当面した問題は、築地東本願寺境内にあった学塾をうけついで東京支局と京都の翻訳局の関係を調整することでもあったが、東京支局は柳北の洋行中に多額の借財をつくったこともあって、結局廃止されることになった。<sup>2</sup>

やがて東本願寺の翻訳局から離れた柳北は『公文通誌(後の『朝野新聞』)』に招かれ、以前から関心をもっていた新聞の世界に入ったが、東本願寺時代の翻訳作品としては、『聖蘇區律文典』が罫紙5枚ほど残されており、大島隆一によって保存されていた。

『柳北談叢』によれば、明治7(1874)年1月17日に柳北は親族の長田銑太郎<sup>3</sup>に宛てた書簡の中で「當節は向島に引越し教授翻譯をいたし静かに世を渉る志也、官途に出るを勸むる人有れ共木戸公は兎角引き勝也」<sup>4</sup>と、維新政府への出仕を辞して語学の教授と翻訳への道を歩む決意を述べている。この明治7年9月という時期に、柳北には新聞の世界への転身という大きな出来事があったが、3月には『柳橋新誌』二編が山城屋から刊行され、4月には同初編が刊行されている。さらに5月には京都で『京猫一斑』の原稿が書かれている。柳北は創作活動に一つの区切りをつけた上で、新しい世界に身を投じたと考えられる。

##### (2) 江戸時代から明治時代初期の新聞

日本における江戸時代から明治維新前後の情報伝達的手段としては、江戸時代初期から庶民階級に流布していたかわら版や、幕末には外国人の手による英字新聞等があった。以下に明治初期までの新聞についての概略を記す。

#### ① かわら版

不特定多数の人々を対象とした情報伝達的手段として、日本には元禄以降に出されたかわら版というものがあった。かわら版は絵入り一枚刷りのもので、多様な情報を庶民に伝えていた。提供された情報の内容は以下のようなものであった。

内容としては、事件、災害(火事・水害)、敵討ち(赤穂浪士の討ち入りなど)、噂話(妖怪・人魚出現など)、心中ものなどがある。このうち、心中ものは身分制・封建制度に対する抗議と見なされ、



芝居などとともに、取り締まられ、現存が少ない。政治ものとは、黒船来航関連の「お固めもの」、14代将軍家茂に嫁いだ「和宮降家」の行列、朝鮮通信使の行列などを描いたものである。<sup>5</sup>

庶民階級が十分読解できたかわら版は、直接的な政治や社会への批判を盛り込んだものは少ないことも特徴であった。これに対して、落首や落書などには政治への批判を込めたものが見られた。

## ② 海外情報の伝達としての新聞

幕末には英字紙やその翻訳新聞の発行はあったが、日本人独自の新聞の発行はなかった。日本国内に於いて最初に発行された新聞は、文久元（1861）年に長崎で英国人ハンサード（A. W. Hansard）による英字新聞 *The Nagasaki Shipping List and Advertiser* であった。この新聞はその後横浜で発行され、名称も *The Japan Herald* と改められた。

日本語による初めての新聞は、幕府の蕃書調所によって、文久2（1862）年に出された「官板バタビヤ新聞」（官板海外新聞）で、蘭語からの翻訳新聞であり、その根拠は以下のようなものであった。

これはインドネシアに当時あったオランダ総督府の機関紙“*Javasche Courant*”を翻訳したものであり、「バタビヤ」からのニュースという意味で、いわゆる新聞の題号ではない。<sup>6</sup>

幕府は鎖国中にオランダからは海外情勢の報告を義務付けており、それは長崎奉行の下で翻訳されて、「和蘭風説書」として江戸に報告されていた。しかし阿片戦争後には国際情勢が複雑化し、オランダ総督は新聞として献上することとしたのであった。従って日本語による最初の新聞である「官板バタビヤ新聞」の読者は、武士階級や一部の洋学者とされている。

民間側の日本語による新聞は、ジョセフ・ヒコ（浜田彦蔵）<sup>7</sup>が岸田吟香<sup>8</sup>と元治元（1864）年に『新聞誌』を、慶応元（1865）年に『海外新聞』と改題して翌2年まで発行したもので、横浜入港の外国船がもたらした幾多の英字新聞から日本に必要な記事を選び、編集したものである。これは『ヒコ海外新聞』<sup>9</sup>と言われている。

## ③ 日本国内の情報を主体とする新聞

日本国内の情報を伝達する手段としての新聞には、慶応4（1868）年・明治元年新政府側から出された『太政官日誌』がある。これは官報ではあるが、戊辰戦争や海外情報を掲載したニュース性の強いものであった。江戸（東京）では、幕府側に近い人々による「中外新聞」（柳河春三）、「江湖新聞」（福地桜痴）、「諷歌新聞」（井上文雄）<sup>10</sup>が出され、新政府への批判的な記事が掲載された。

これらの新聞は政府への鋭い批判と判断され、福地桜痴は官軍に捕縛され、井上文雄は投獄されて日本における記者の筆禍事件第一号となった。新政府は旧幕府側からの新聞を発行禁止として、新聞発行には許可を求めることとした。しかし翌明治2（1868）年には、政府も新制度等を伝達する手段として、新聞の発行を認めるようになった。

旧暦明治3（1870）年12月8日（新暦では1871年1月26日）には、横浜で日本最初の日刊新聞『横浜毎日新聞』が出された。さらに明治5（1872）年に、東京初の日刊新聞『東京日日新聞』<sup>11</sup>、『日新真事誌』<sup>12</sup>、『郵便報知新聞』（現・報知新聞）等が発行されている。また地方では現存する最古の地方紙「峽中新聞」（現・山梨日日新聞）等が発行されている。

## ④ 小新聞の出現

『東京日日新聞』等の新聞は、政論を中心とした「大新聞」であったが、明治初期に出現したものと  
して小型サイズの「小新聞」がある。両者の違いは外形上だけでなく、以下のようなものであった。<sup>13</sup>

表IV-1 大新聞と小新聞の違いについて

比較事項	大新聞	小新聞
文体	漢文体・である調	かな書き・ですます調 明治10年代から 文章に句点が、さらに昭和に入り文末に読 点が入る
記者	士族・洋学者	戯作者
読者	士族・知識人	町人・女性全般
販売	月決め郵送か、書店での直接販売	街頭や書店での直接販売

(春原昭彦. 新聞のあゆみ—明治から現代まで. 日本新聞博物館, 2006. p. 8 の記述から筆者作成)

小新聞は庶民が対象であったが、新聞小説を掲載することなどから、社会に浸透していった。明治7  
(1874)年には「読売新聞」<sup>14</sup>が、明治12(1879)年には「朝日新聞」<sup>15</sup>が小新聞として発行されて  
いる。

### (3)『公文通誌』への入社

柳北は明治7(1874)年9月には『公文通誌』の社主乙部鼎に招かれて社長となり、直ちに同誌を『朝  
野新聞』と改称したのである。その経緯について野崎左文は「明治六年八月明石の旧藩主松平侯爵<sup>16</sup>  
が朝野新聞(公文通誌改題)を発行するに当って仙史は入って社長となり」<sup>17</sup>と、記している。旧明石  
藩は越前松平家の傍系であった。

外遊以前から柳北は新聞に関心をもっており、明治2(1868)年6月には『東京珍聞』という半紙8  
枚を假綴にした手製の新聞を出していた。また同じ明治2年に柳北は柳河春三と共に『万国新話』三卷  
(発行所:上州屋総七)を出版していて、そこには洋学者が洋書から訳出した記事がまとめられている。

幕末から柳北は蘭語の習得を通じて、柳河春三(天保3(1832)年-明治3(1870)年)の指導を受けて  
いた。春三について、遺孫の大島隆一は以下のように述べている。

和蘭語の手ほどきを、たれからうけたものか、このことについて、柳北は、なにも記してゐないが、  
おそらく、柳川春三ではないかとおもふ。

春三は、英・佛・蘭一の三ヶ國語をよくし、安政三年、江戸にでてきて、安政五年には紀州家蘭學  
所につとめてゐた。

文久三年のころは、幕府の開成所教授をしてゐたわけで、柳北とは、それ以前から、往來してゐた  
と考へる。<sup>18</sup>

大島隆一はさらに『柳北談叢』において、柳北の外国語の習得について、文久3(1863)年から元治2  
(1865)年の閉門期間中に最も没頭していたと記していて、外国語の他に西洋事情にも関心を払って  
いたこと述べている。春三は後年、『中外新聞』を創刊しているので、柳北は蘭語の習得の他に西洋文化の  
素養を春三から学び、ジャーナリズムにも関心をもつに至ったと考えられる。<sup>19</sup>

維新後には、外遊先の伊国の米蘭で柳北は新聞社の見学をした。「航西日乗」明治6(1873)年3月20

日の記録には以下のことが記されている。

新聞紙發兌ヲ業トス頗ル盛大ノ營業ナリ二年前迄ハ器械ニテ一時間ニ三千枚ヲ刷出セシガ當今ハ一時間ニ八千枚ヲ刷ルト云フ<sup>20</sup>

（新聞の発行を業としていて、非常に盛大である。二年前までは一時間に三千枚であったが、現在は八千枚が印刷されていると言われている。）

また『柳橋新誌』第二編の中で、柳北は新聞について以下のように記し、西洋の国々では新聞が自由な意見の発表の場であることを強調している。

泰西諸國所刻新聞紙者多是誹謗罵詈之言而君主不罪官吏不咎君子不怒小人不怨爭而讀之以博聞見以知警戒（泰西諸国刻する所の新聞紙は、多く是れ誹謗罵詈の言にして、君主罪せず、官吏咎めず。君子怒らず、小人怨みず。争つて之を読み、以て聞見を博め、以て警戒を知る。）<sup>21</sup>

（大意：欧米では新聞が刊行されているが、その多くは政府への悪口雑言であるにもかかわらず、君主や政府はこれを罰していない。さらに人間的に器の大きい君子と呼べるような人もまた器の小さい小人も新聞を非難することもない。みんなが先を争って新聞を読み、それによって見聞を広めたり、また注意すべき点を知るのである。）

柳北が新聞の役割を説き、新聞への評価を述べたことは、新聞によって当時の日本が近代的な国家への発展していくことを願っていたからと考えられる。従って、新聞社への入社によってジャーナリストになることは、柳北にとっては社会の進展に従事することに繋がることであった。

#### （４）旧幕臣のジャーナリストへの転身

明治4・5（1871・72）年頃になると、旧来の身分制度の崩壊から多くの人々が世界や国内の情勢、また欧米の新知識を得ようとして新聞というメディアを必要とするようになった。しかしながら、新聞を担う人材は未だ乏しい時代でもあった。柳北と同様に旧幕府に仕えていたが、明治以降にジャーナリストへの道を歩んだ人物もいた。その代表的な人物には柳北よりも15歳年長の栗本鋤雲と、4歳年少の福地桜痴である。共に柳北と同様に外国語を修得し、西欧社会を直接目にした体験をもっていた。

前田愛は、これらの旧幕臣ジャーナリストたちが拠り所としたのは、江戸社会であり文化であったと指摘している<sup>22</sup>。その前田の指摘を踏まえ、五十嵐暁郎は旧幕臣の維新後の活動について「旧幕臣の社会的な活動の背景には、彼らがそこで育まれ生活した江戸市井の社会意識と、幕末において彼らが経験したヨーロッパの市民社会の思想が重なり合って、リベラルな発想が息づいた」<sup>23</sup>と述べている。栗本鋤雲、福地桜痴は幕末に洋行体験をもっていて、柳北より以前に西欧社会を直接目にしていたのであった。柳北も幕末には幕政批判をする等のリベラルな発想を持ち合わせ、また発禁処分を受けた寺門静軒の『江戸繁昌記』を愛読したりしていた。従って前田や五十嵐の指摘は的確ではあるが、柳北は柳橋の花街等で金銭本位の社会の裏側にも目を向けており、幕末の文化に対しては共感と批判の両面をもっていた。

#### ① 栗本鋤雲（文政5（1822）年-明治30（1897）年）

幕臣の家に生まれ、昌平黌に学びさらに佐藤一斎（安永元（1772）年-安政6（1859）年）に学んだ鋤雲は医家栗本家の養子となって奥詰医師となった。幕末には仏人カシオンと日本語と仏語の交換教授を

行う経験をして、西欧の知識を得た。

鋤雲は一時期蝦夷地に流されていた時期もあったが、後に召還されて医籍から士籍に列して、小栗忠順と共に親仏派として活躍した。慶応3（1867）年には渡仏して幕府と仏国の協調を深めようとしたが、幕府瓦解のために帰国した。明治5（1872）年には横浜毎日新聞社に、さらに翌6年には郵便報知新聞社の主筆に迎えられた。<sup>24</sup> 郵便報知新聞社は旧幕臣で維新政府の官僚であった前島密（天保6（1835）年-大正8（1919）年）の発案で、秘書の小西義敬に設立させたものであり、「明治六年の郵便規則に新聞原稿無料通送の規定を定め、その制度を活用するため」<sup>25</sup>であった。

鋤雲の活動は社説等々の政治論争の場ではなく、随筆を紙上に掲載して評判を博したことであった。これについては、「徳川幕府を救えなかった鋤雲は、敗軍の将である自分が現代の問題に口を出す資格はない、と達観したのであろう」<sup>26</sup>と考えられている。

## ② 福地桜痴（天保12（1841）年-明治39（1906）年）

長崎の医家に生まれた桜痴は、蘭学、英学を修めた後に、幕府の通弁として翻訳に従事した。幕末には二度渡欧する機会を得、明治元年には「江湖新聞」を発行して新政府を批判したため、捕縛された。桜痴は江戸開城に関しては、抗戦派であった。しかし西欧体験があったため、明治3（1870）年には大蔵省に採用された。柳北が真宗大谷派一行の随員として渡欧中には桜痴も岩倉使節団の随員として渡欧していたが、明治7（1874）年には東京日日新聞社に入り、主筆・社長となった。<sup>27</sup>

政治的には漸進主義の立場で、明治15（1882）年には立憲帝政党を起こしたが、「自由民権運動が盛んになると彼の漸進主義は入れられず、御用記者とみられるようになったため晩年は振るわず明治21年社長を引退した」<sup>28</sup>のであった。その後は維新政府の末松謙澄（安政2（1855）年-大正（1920）9年）と演劇改良会を起こし、歌舞伎座の建設や著述に専念した後、明治37（1904）年に衆議院議員となったが2年後には没している。

## 2 新聞への弾圧

### (1) 政府の新聞対策

慶応4年から明治元（1868）年にかけて発行された「中外新聞」等は佐幕的な内容であったので、板木等が没収されて政府から発行を禁止された。それによって残った新聞は、「太政官日誌」<sup>29</sup>等の官版の日誌だけであった。新聞を禁止した維新政府は、流言飛語に悩まされ、明治2（1869）年になると新聞の発行を許可することとなり、新聞紙印行条例が制定された。幕末からの「中外新聞」等が許可を得て再刊されたが、佐幕的傾向の記事の掲載は無く、政府の施策が謳歌されて、外国文化の紹介等の記事が掲載された。

しかし政府は新聞というメディアに対して、その発達を再び憂慮するようになった。明治6（1873）年に「日新真事誌」は井上馨、渋沢栄一の「財政改革意見書」を、翌7年には「民撰議院設立建白書」をスクープした。このことにより、政府は新聞助成政策を改めて弾圧政策に方向を転じたのである。さらに当時勃興してきた征韓論や民権論も政府に対して新聞への弾圧の必要を検討させることとなったのである。明治8（1875）年には、初の新聞弾圧条例である新聞紙条例、及び初の名誉毀損法となる讒謗律が公布された。讒謗律は明治13（1880）年に公布された旧刑法に吸収されて廃止されるが、新聞紙条例は明治42（1909）年制定の新聞紙法に継承されていった。

新聞紙条例は、新聞紙印行条例よりも体系的に整備された条例であった。出版の内容の取り締まりのために、責任者を厳格にして、初めて刑罰の規定が設けられた。さらに違反に対する制裁規定と

して、発行禁止や発行停止が新設されている。

讒謗律は、日本で最初の名誉毀損法である。天皇や皇族、官吏や一般人により刑の軽重を定めているが、その主要な目的は官吏に対する誹毀を防止することであった。<sup>30</sup>

これらの法律の制定は新聞の世界を混乱させた。一時期民権論は下火となったが、次第に政府の姿勢に抗議する言論が展開され、政府側は新聞記者を続々禁固刑に処していった。新聞記者の恐怖時代が現出したのであった。

## (2) 柳北の抗議

柳北は入社以来、時事問題の風刺等で読者から喝采されていたが、新聞紙条例、讒謗律の発布に際しては、「僻易賦」を通じて抗議の意思を表明した。

「僻易賦」は、明治8(1875)年8月17日の『朝野新聞』の論説欄に無署名で発表されたもので、同じ年10月15日には「後僻易賦」では、江湖の諸君に喝采されて同日の発売部数が一万を超過したと記されていて、民間に浸透した。その内容は以下のような滑稽化された世界が描かれていた。

この文章は、当時の知識人たちにとって常識だった蘇軾の「赤壁賦」のパロディーになっており、政府の言論弾圧に右往左往する柳北の姿と、俗世のことを忘れて遊び、老荘思想を説く蘇軾との落差が笑いを誘う構造となっている。<sup>31</sup>

柳北は最後の部分で、条例を制定した政府に対して、幕末の攘夷論者と何ら変わらないものであると、以下のような辛らつな批判を述べている。特に法を制定した政府を、法を無視する乱暴者と記した点に柳北の反骨の姿勢が読み取れる。

是レ撰夷家ノ無法者也。而シテ吾レト子ト共ニ嫌フ所ナリ。僕驚イテ黙シ墨ヲ磨ツテ之ヲ記ス。蠟燭既に盡テ座敷眞ツ暗ナリ。相共ニ机邊ニ假寐シテ薺蚊ノ頻リニ刺スヲ知ラズ。<sup>32</sup>

このような柳北の姿勢もあり、明治9(1876)年1月10日には前年12月20日の『朝野新聞』の論説欄の記事が讒謗律違反に問われて、局長である柳北は裁判所に召喚され、2月13日には禁獄4ヶ月、罰金百円を申し渡された。この時、編集長である末広鉄腸(嘉永2(1849)年-明治29(1896)年)<sup>33</sup>も禁獄8ヶ月罰金百五十円を申し渡された。柳北の罪状は官吏侮辱罪で、法制官の井上毅(天保14(1843)年-明治28(1895)年)<sup>34</sup>と尾崎三良(三郎)(天保13(1842)年-大正7(1918)年)<sup>35</sup>を誹謗したとされている。明治8(1875)年の12月20日の『朝野新聞』論説欄の記事中で、二人の官僚を滑稽化したのは以下の部分である。

我輩ノ年少ナルニ当タリテ好デ同社ノ士人ト天下ノ法律ヲ論ジ天下ノ制度ヲ議ス。当時兩個ノ士人有リ。一ヲ井上三郎ト云ヒ一ヲ尾崎毅ト云フ。共ニ才学有テ頗ル狡黠ノ術ニ長ゼリ。

二人の官僚井上毅と尾崎三良の姓と名前を交換させて笑いを誘った上で、彼らは旧幕時代の知人であるという架空の設定がされている。最終的には「彼らが言論の自由を奪った『狡黠』さを非難することで、『野蛮』時代に逆戻りしたような明治政府の言論政策が批判されている」<sup>36</sup>のである。政府の弾圧は他の新聞社にも及び、柳北以外のジャーナリストたちも、政府への批判から同時期に獄に投ぜられた

人々が多数いた。それらを以下に記す。

表Ⅳ-2 柳北と同時期に弾圧されたジャーナリスト

刑 種	期 間	社 名	氏 名
禁 獄	三年	采風	加藤 九郎
同	二年半	同	本木 貞雄
同	二年	評論	小松原 英太郎
同	一年半	報知	岡 敬孝
同	一年	評論	山脇 巍
同	一年	同	中島 富雄
同	一年	朝野	沢田 直温
同	十ヶ月	采風	矢野 駿雄
同	八ヶ月	朝野	末広 重恭
同	六ヶ月	采風	杉田 定一
同	四ヶ月	評論	東 清七
同	四ヶ月	同	鳥居 正功
同	三ヶ月	同	横瀬 文彦
同	三ヶ月	同	満木 清繁
同	三ヶ月	同	柴田 勝文
同	三ヶ月	日報	甫喜山 景雄
同	三ヶ月	采風（投書）	宮本 千万寿
同	三ヶ月	朝野（投書）	西河 通徹
同	二ヶ月	報知	箕浦 勝人
同	二ヶ月	采風	中島 恭雄
同	二ヶ月	評論	岡本 清一郎
同	二ヶ月	同	中島 勝義
同	二ヶ月	同	高羽 光則
同	二ヶ月	同	渡辺 敬之
同	二ヶ月	同	小松 正胤
同	二ヶ月	報知（投書）	植木 枝盛
同	一ヶ月	評論	田中 直哉
同	一ヶ月	同	石田 知彦

（野崎左文. 私の見た明治文壇Ⅰ. 平凡社, 2007. p. 253-254 の記述から、筆者作成。）

柳北はこれら 28 人が獄中に追いやられたことを、「去年六月新聞条例ノ出シ以来記者ノ禁網ニ罹ルノ多キ実ニ此ニ至リテ極点ニ至ルト云フ可シ」と述べている。自由民権運動の活動家である植木枝盛<sup>37</sup>（安政 4（1857）年-明治 25（1892）年）のように、投書をしたことで禁錮刑を受けた人物も含まれていたものであった。

### （3）牢内での生活

柳北の牢内での生活は柳北の漢詩三首「獄中雜詩」(『明治十家絶句』卷下)<sup>38</sup>や、「ごく内ばなし」(『朝野新聞』に連載)という作品から窺い知ることが可能である。

#### ① 獄中雜詩

##### (第一首)

世人謾道日如年	世人(せじん)謾(みだ)りに道(い)ふ	日は年の如からんと <sup>39</sup>
豈識悠悠獄裏天	豈(あ)に識らんや	悠悠(いういう)たる獄裏の天
徐却三餐無一事	三餐(さんさん)を徐却(じょきやく)	すれば一事無く
優游送晷小神仙	優游	晷(とき)を送る小神仙なるを

柳北はまず、一日が一年にも感じられて退屈でこまるでしょうと、世間の人はみだりに同情して言うが、獄中の天上を眺めていると、時間がとりとめもなく長いことをどうして知るのであろうと述べている。そして三度の食事を除けば、何もなすことはない。獄はのんびりとした時間を過ごすことのできる小さな神仙境であると、詠んでいる。

##### (第二首)

監吏団欒語夜闌	監吏団欒	夜闌(やらん)に語る
笑声落枕不堪謹	笑声枕に落ちて	謹(かまびす)きに堪へず
暖炉火熾猶呼炭	暖炉火熾(ひさか)	んにして猶ほ炭を呼ぶ
知否囚人徹骨寒	知るや否や	囚人の骨に徹(とほ)りて寒きを

第二首目で柳北はまず、看守たちは円座をくんで、夜更けに語り合っているが、その笑い声は枕元まで響き、喧しくて寝ることもできないという獄での不自由さを述べている。次に暖炉に未だ火が燃えているのに、さらに炭を持って来いと命じている。彼らは自分たち囚人は骨にしみるほど寒いということ分かっているであろうかと、獄吏を批判している。

##### (第三首)

敢言幽室窄如坑	敢(あへ)て言はんや	幽室(いうしつ)窄(せま)きこと坑(あな)の如しと
静坐繙書龔古香	静坐	書を繙(ひもと)きて古香を龔(か)ぐ
一具青氈恩沢厚	一具の青氈(せいせん)	恩沢厚し
儒生不復夢咸陽	儒生復(ま)	た咸陽を夢みず

第三首では、まず柳北は敢て言いたい、薄暗い牢獄の部屋の中は穴のように狭く、静かに坐して書物を紐解いていると、そこに古い香りが漂うと侘しい様子の述べている。そして囚人に一枚の青い毛布が与えられるのは、政府の厚い恩情であり、儒者である自分には、秦の咸陽で行われた焚書坑儒を思い浮かべることはできないと詠んでいる。

第一首では、一日が一年にも感じられるような牢内での時間の経過が描かれ、その中でも獄を神仙境と割り切って過ごそうとする決意が語られている。第二首では獄中生活の裏側、寒さに苦しむ囚人と横暴な看守の姿が描かれている。最後の第三首では囚人への政府の温情から、寒さを防ぐ毛布が支給されそれに感謝しつつ、秦代の焚書坑儒<sup>40</sup>のような弾圧が起こらないように願う柳北の心情が表されてい

る。

② 「ごく内ばなし」(『朝野新聞』に連載)

柳北は政府の一方的な弾圧によって禁錮刑に処せられたことを、後に「ごく内ばなし」として『朝野新聞』に連載して、抗議の姿勢を著している。<sup>41</sup>

何故ニ柳北ハ岡田判事君ニ久シク喋々弁解ヲ費シ鎌田判事君ノ代ツテ訊問セラルルニ及ンデ復ター語ノ弁解ヲ為サズシテ其罪ニ服シタルヤト、是レ至当ノ疑問ト云フ可シ<sup>42</sup> (なぜ柳北は岡田判事に長らく盛んに弁解したにもかかわらず、鎌田判事に代わって後には一言も弁解を許せずに罪に服したのか、このことは極めて当然な疑問である。)

柳北と鉄腸は2月3日に、交代した鎌田判事によって再審問され、拘留を申し渡された。腰縄を打たれた二人は鍛冶橋の裁判所から三丁ほど北に位置した監獄署で一夜を明かした。翌日には、別々に裁判所の取調室に柳北と鉄腸は呼び出され、獄中生活をおくることは柳北や鉄腸のためにもいいことではない、罪状を認めれば獄中生活が短くなると示唆され、二人は罪状を認めざるを得なくなった。前田愛はこの間のことを以下のように記している。

こうした飴と鞭の巧妙な演出に鉄腸も柳北も足もとをすくわれてしまった。この日の午後口供書に調印した二人が、判決に服したのは二月十三日のことである。この判決には、井上と尾崎の代理人も立ち会った。<sup>43</sup>

また不健康な牢内での生活は柳北を肉体的に衰弱させていったが、柳北にはジャーナリストとしての仕事を果たせないことの方がつらいことであった。その苦しい状況は「僕輩新聞記者ガ禁錮中為サント欲スルハ唯購読著作ノ一途ニ在ルヲシリタルナラン」<sup>44</sup>と、記されている。

獄中生活の苦しみを味わった柳北は、「ごく内ばなし」の中で政府に対して自身の怒りを述べている。

僕輩窃ニ想像ス今ノ政府ハ往日ノ政府ニ非ズ焉ンゾ囚人獄裏ニ病ム者ガ老豚病鷲ノ如ク汚穢ナル木柵ノ内ニ斃レテ至重ノ生命ヲ瞬間ニ失フヲ顧ミザルノ理アランヤト<sup>45</sup>

(大意：自分が心秘かに想像することであるが、現在の政府は社会の進展に前向きに取り組んでいた往年の政府ではない。囚人が獄中で病み死に至ることは、老いた豚が病になり汚穢な木の柵の内側で斃れてゆくようなものである。囚人が瞬く間に生命を失うことを顧みる道理はどこにあるのであろうか、いやどこにもない。)

柳北は日本の国の文化の進展に取り組もうとしていた往年の政府を懐かしみながら、囚人の人権にも配慮することが必要であると述べている。それはまた言論の弾圧をも含めた政府への批判であった。

苦しい獄中生活ではあったが、柳北は時間を有効に使っていた。獄内でも僅かな読書をするのが許されていたのである。これについては、以下の記述が「成島柳北」(『三代言論人集』第二巻)にある。

獄囚第一の楽しみは読書で、次は喫飯、運動、入浴及び便器の掃除である。しかし読書といっても獄内でゆるされているのは、「名臣言行録」、「日本外史」、「春秋左氏伝」ほか一部で、それも御用書肆須原屋からの差入れ以外は許されていない。<sup>46</sup>



このような苦しい生活の中でも、柳北は手書新聞を作っていた。便器の掃除に出た際にリレー式に各房に投げ込んで、それが廻覧されていたのであった。柳北のジャーナリストとしての熱意が感じられる行動である。<sup>47</sup>

自由民権運動の展開期でもあったこの頃の新聞関係者への弾圧に対しては、以下のように捉えられている。

七五年後半から始まった厳しい新聞への規制は、政府批判を抑え込んだ。このようにして、芽生えたばかりのパブリック・オピニオンの形成の場は、むしりとられてしまったような様相を呈するに至った。<sup>48</sup>

ジャーナリストとして日本の国の発展に取り組もうとしていた柳北は、法律によって言論活動を抑え込まれることを体験して、維新政府の政策の中に時代に逆行する姿勢を見だし、ジャーナリストとしての仕事にさらなる熱意をもったことと考えられる。

#### (4) 出所後

##### ①逆境の中での決意

明治9(1876)年6月11日の出獄後に柳北は三首の出獄詩(『明治十家絶句』巻下)を詠んだが、その中の一首は以下のようなものである。

霜雪飛時始出家	霜雪(そうせつ) 飛ぶ時始めて家を出でて
幾句獄裏聴晨鴉	幾句(いくじゅん) か獄裏に晨鴉(しんあ)を聴く
帰来澤上春無跡	帰り来れば 澤上春跡無く
一径薫風鼓子花	一径(いつけい)の薫風 鼓子(こし)の花

ここで柳北はまず、霜や雪が飛んでいた季節に家を出て、獄裏で何十日にわたって朝の鳥の声を聞いたであろうかと、獄での生活の長さを述べている。そして家に帰ってみると隅田川一帯の春の風物はは跡かたなく終わり、風薫る季節の風が吹いて昼顔の花が咲いていると、季節の移り変わりを詠んでいる。

柳北は獄裏での生活が如何に長く侘しいものであったかを述べた後に、隅田川一帯の風景を眺めつつ、季節の変化に驚いているのである。その驚きは侘しい「鼓子花」によってもたらされていて、柳北は解放された直後でも今後の展望を胸に秘めていたのである。

「鼓子花」については、牡丹や芍薬のような庭に咲く美しい花ではなく、荒地に咲く鄙びた野の花で昼顔の意味とされている。中唐の鄭谷(842?-910?)の絶句「經賈島墓」<sup>49</sup>、北宋の陳師道(1053-1101)の詩論『後山詩話』の中にその事例を見ることができる<sup>50</sup>。鄭谷も陳師道も時勢に容れられず非常に苦しい人生を送った詩人たちであり、柳北が苦境の中でも今後を思いやる決意を婉曲に表したことと考えられる。

##### ②『朝野新聞』の発展

出所前後の「辟易賦」や「ごく内ばなし」の連載等から、柳北は雑録等で政府を追及し『朝野新聞』の名声は高まっていった。さらに末広鉄腸が出獄した明治9(1876)年8月以降には論説に権威が認められ、発行部数も増加した。以下に明治8-9年にかけての主要な新聞発行部数の表<sup>51</sup>を掲示する。

表IV-3 明治8-9年にかけての主要新聞の発行部数

題 号	8 年度	9 年度（一日平均）	前年比
朝 野 新 聞	1, 178, 699	5, 319, 510（17, 732）	4. 51
東 京 日 日 新 聞	2, 933, 998	3, 285, 238（10, 951）	1. 12
郵 便 報 知 新 聞	2, 143, 293	2, 393, 444（7, 978）	1. 12
東 京 曙 新 聞	814, 976	1, 934, 368（6, 448）	2. 37
横 浜 毎 日 新 聞	194, 289	186, 888（623）	0. 96
読 売 新 聞	4, 352, 554	5, 456, 723（18, 189）	1. 25
東 京 絵 入 新 聞	1, 030, 488	1, 848, 590（6, 162）	1. 79
仮 名 読 新 聞 *	231, 533	1, 561, 120（5, 204）	6. 74
大 阪 日 報 **	100, 433	998, 992（3, 330）	9. 95

（鶴飼新一・朝野新聞の研究・みすず書房、1985. 資料編 p. 24 に掲載）

『朝野新聞』は明治9（1876）年6月の柳北の出獄、8月の末広鉄腸の出獄を経て、順調に発行部数を伸ばしていた。特に同年の8月以降はそれ以前の月6000部の発行が7000部となりさらに8000、9000となっていた。このような『朝野新聞』の読者の拡大により、同年の11月5日には社屋が銀座四丁目九番地にあった元『日新真事誌』の旧社屋に移された。既に『日新真事誌』は廃刊されていて、『朝野新聞』がその地位を奪っていた。当時の『朝野新聞』の隆盛については、以下のように把握されている。

柳北はこのときちょうど四十歳のはたらき盛りであったが、「朝野」はまさに順風に棹さす黄金時代で、翌十年一、二月頃には「朝野」の発行部数はついに一万八千余となった。「これ実に極盛の時なり、その社主の得意なる知るべきなり」、と末広は云っている。<sup>52</sup>

柳北や末広鉄腸の出獄の翌年である明治10（1877）年、『朝野新聞』はその最盛期を迎えていたのであった。

### 3 西南戦争前後の『朝野新聞』

#### (1) 柳北の対応

『朝野新聞』が新聞としての最盛期を迎えた頃、維新政府に対しての不平士族の大規模な反乱である西南戦争が鹿児島県下で発生した。中心になったのは、明治6（1873）年の征韓論の敗北から下野していた維新の功臣、西郷隆盛（文政10（1827）年-明治10（1877）年）<sup>53</sup>であった。西南戦争以前にも政府に対する不平士族の反乱や暴動は各地で頻発していた。その状況を以下に示す。<sup>54</sup>

表IV-4 佐賀の乱勃発から西南戦争終結までの日本

和暦	西暦	事 項
明治6	1873	10. 24 朝鮮遣使の無期延長を裁可し、板垣退助・後藤象二郎・江藤新平・副島種臣が参議を辞職。西郷の辞表を受理（征韓論政変）。 12. 27 禄税・家禄奉還の法を制定。
7	1874	1. 17 民撰議院設立建白書を提出。 2. 1-3. 1 佐賀の乱。 4. 27 島津久光、左大臣に就任。

		6. 西郷私学校を設立。
8	1875	9.7 家録支給額の固定化を図る金録改訂。 9.20 江華島事件。 10.27 板垣・久光、参議左大臣を辞職。
9	1876	2.26 日朝修好条規調印。 3.28 廢刀令を布告。 8.5 金録公債証書発行条例公布。 10.24 神風連の乱。 10.27 秋月の乱。 10.28-11.5 萩の乱。
10	1877	1.29 私学校生徒、草牟田弾薬庫を襲撃。 1.30 私学校生徒、海軍造船所・礮弾薬庫を襲撃。 2.5 私学校幹部の対策会議。 2.7 西郷、「政府へ尋問の筋これあり」との上京願い出を大山鹿児島県令に提出。 2.9 川村純義、西郷との面会を試みるも私学校強硬派の反発で拒絶。 2.11 警視隊、九州に向け出発。 2.15 西郷、兵を率いて鹿児島を出発（西南戦争始まる）。 (中略) 5.26 木戸孝允、死去。 (中略) 9.24 城山の戦い、西郷、戦死（西南戦争の終結）

（落合弘樹. 西南戦争と西郷隆盛. 敗者の日本史 18. 吉川弘文館, 2013 の巻末の（巻末 p. 1-4）に掲載された略年表の明治6年10月から10年9月までの部分を引用）

柳北は2月には従軍記者として京都へ赴いており、5月2日の『朝野新聞』の社説で、以下のように西南戦争を論じ、不平士族の旧体制を懐古するような頑固な面が乱の根底にあることを指摘している。

夫れ隆盛の反するや、独り隆盛の罪に非ず、他に罪びとの在る有り。政府の顯官か、曰く非なり。中原尚雄の徒か、曰く非なり。前の鹿児島県令か、曰く非なり。桐野利秋の輩か、曰く非なり。然らば則ち罪人とは誰ぞや、曰く、我が日本国の頑固士族即ち是なり。<sup>55</sup>

維新政府側からの挑発もあり、西郷隆盛が不平士族等に推されて乱を起こしたことを、柳北は冷静に分析をしている。伊集院（薩摩）の郷士であった中原尚雄は警視庁から送り込まれた密偵で、城下士の多い私学校側に察知されて身柄を確保されていた。その経緯は以下のように把握されている。

生徒の弾薬庫襲撃を抑制できなかった幹部たちは、私学校と無関係の谷口登太を中原尚雄に接触させたうえで、中原が「西郷と刺し違える覚悟」との情報を得、鹿児島県一等警部中島健彦が二月三日に伊集院で中原を捕えた。<sup>56</sup>

西南戦争の終結時に、中原は解放されているが、柳北は密偵の中原には非はないとし、また西郷側の

中心人物とされていた桐野利秋（天保 9（1838）年-明治 10（1877）年）<sup>57</sup>にも非はないとしている。柳北は西南戦争の原因を特定の個人に限定するような意見は主張しないで、根底にあるものは時代から取り残された不平士族の狭量であることとしている。

しかし『朝野新聞』は西南戦争に関しては、柳北の京都通信の不評や高橋基一の戦況報道の誤報から業績をあげることができなかった。これに対して『東京日日新聞』の発行部数は「福地源一郎の西南戦争の戦況報道で急増した」<sup>58</sup>とされている。

## （２）大久保利通暗殺事件と発行停止

西南戦争の終結後、明治 11（1878）年の 5 月 15 日に『朝野新聞』は十日間の発行停止を受けた。これは日刊紙として最初の発行停止であった。その原因は 5 月 14 日に起こった大久保利通<sup>59</sup>（天保元（1830）年-明治 11（1878）年）の暗殺事件を報道した記事の内容であり、犯人島田一郎（石川県士族）等の斬奸状を略載したことが主な理由とされている。島田一郎等は加賀藩が維新の主導権をとれなかったことを残念に思い、西南戦争に呼応しようとして失敗してから、大久保の暗殺を計画していたのであった。

柳北はその後、政府側から停止の理由についての情報を得た。それは以下のように伝えられている。

- 一、記事の後尾に、「旧幕の昔井伊大老の桜田の事などを思い出でて哀れに覚え」云々との句があって、大久保を井伊に比較したのは危険である。
- 二、暗殺者島田一郎以下が斬奸状を郵送したのは同紙が激論を主張し、兇賊の意思に投合するからで、斬奸状の届出での遅れた上、処々に指痕があるのは、世間に示すため、ひそかに謄写したのであろうとの嫌疑を受けたこと。<sup>60</sup>

斬奸状の発表が政府の嫌疑を受けたことは、柳北や末広鉄腸にとって無法な処分であった。柳北は既に刊行していた詩文雑誌<sup>61</sup>『花月新誌』（第 45 号 明治 11 年 5 月 25 日発行）に「弔朝野賦」という文章を掲載し、弾圧への憤りを表している。柳北はまず冒頭で「朝野新聞罪有り発行停止ノ命ヲ蒙ル」<sup>62</sup>と、事実をそのまま公表した上で、今後も新聞の発行を続けていく意思を以下のように述べている。

商賈ヲ換ヘテ其ノ身ヲ樂ニセバ何ゾ必ズシモ此ノ苦ヲ求メンヤ、法官千人モ有テ疎忽ヲ觀テハ之ヲ叱ル、精密ノ警視ヲ加エテ更ニ目ヲ附ケテ之ヲ調ベル、我ガ尋常ノ記者豈粗漏ノ罪ヲ免レンヤ、江湖ニ悪マルルノ新聞固ヨリ將ニ嫌疑ヲ蒙ラントス

柳北は、職を換えて自分の身を楽しにしようとするならば、必ずしもこのように苦しむことはない。法官が千人もいて軽率な振る舞いをした者を叱り、細かい点まで行き届いている警視が加わってさらに目をつけた人間を取り調べたりしているのが現況であると述べている。我社のごく普通の記者のうっかりとした振る舞いは、法官や警視の目から逃れることなどできない。憎まれている新聞がまさに嫌疑を蒙ろうとしていると憤りを語っている。柳北は『朝野新聞』が発行停止によって読者が他紙へ流れることを一番恐れていた。明治 10（1877）年から 11 年頃が朝野新聞の最盛期で一日平均、一万五千から八千の発行があったが、停止後は読者の減少から衰退し、「明治十二には一万そこそことなったというのと半減したというのがある」<sup>63</sup>とされている。『朝野新聞』については、特に政府から警戒されていたこともあったということが以下のように把握されている。

これを始めとして発行停止は他新聞にも及んだが、殊に「朝野」に至っては発行停止に遭うこと幾

回なるかを知らず、その長きは五週間に及んだと末広鉄腸は後年「新聞経験談」で述べている。然し発行停止は所詮新聞の新聞たる機能を妨害するものであるから、その為に朝野新聞は次第に読者を失い、戦況報道の不備と相俟って漸次衰運に傾いていった。<sup>64</sup>

『朝野新聞』の発行停止は大久保利通暗殺事件の報道を皮切りに、その後も続き、柳北が在世中のものを下記に示す。<sup>65</sup>

表IV-5 柳北生存中の『朝野新聞』発行停止の状況

年 月 日	対応方法	掲載欄	記事の内容
11. 5. 15	*	[雑報]	内務卿暗殺の兇徒の斬奸状の一斑を掲載
13. 2. 28	*	[雑報]	独乙皇孫の事件を録す
15. 1. 20	*	[論説]	小開拓使事件又生ぜんとす (1. 27 抹殺)
15. 5. 18		[論説]	民情に背くは政府の不利
15. 6. 16	*	[付録]	革命親睦会開会広告
15. 8. 19	*	[雑報]	朝鮮事件についての訛伝電報掲載
17. 5. 21	*	[雑報]	札幌県下牧場の騎馬二頭を今度御料の中に加えられし由 (6. 12 取消し)

\* 解停後、停刊事由として明記或は記事抹殺、取消し、是正したもの。  
(鵜飼新一. 朝野新聞の研究. みすず書房, 1985. p. 22-23 の記述から筆者作成。)

このような経緯から『朝野新聞』は徐々に衰退していったが、柳北は既に明治 10 (1877) 年 1 月 4 日には、詩文雑誌『花月新誌』を創刊して活動の場を広げており、明治 14 (1881) 年 1 月から 17 (1884) 年 11 月にかけては『読売新聞』にも「雑譚」欄に記事を掲載していた。

## 4 自由民権運動

### (1) 武力闘争から自由民権運動へ

維新政府の官僚的な専制政治に対して、国会開設・憲法制定・地租軽減・不平等条約改正等を求めた政治運動が維新後まもなく展開され、「ブルジョア民主主義革命運動の性格をもつ」<sup>66</sup>運動であるという見方もされてきた。西南戦争の勃発以前の明治 7 (1874) 年には、板垣退助 (天保 9 (1837) 年-大正 8 (1919) 年)<sup>67</sup>等によって「民撰議院設立建白書」が提出され、さらに明治 8 年には不平士族が中心となった政治結社の連合組織としての愛国社が設立された。不平士族からの民権の主張の流れに対し、幕末から明治維新という激動期に社会的力量を蓄えていたのが地方の豪農層で、彼らを中心としての自由民権運動の潮流が形成されていった。やがて不平士族層と地方豪農層を中心に、明治 13 (1880) 年にはこれら二つの潮流が合流し、国会期成同盟が形成された。運動の進展にはメディアの果たす役割も増

大したが、それは「さらに、これら二つの潮流から人的に供給された都市知識人による都市民権派の潮流も、言論（政談会）とメディア（新聞・雑誌）を中心に活発な活動をはかってゆく」<sup>68</sup>という要因があった。

自由民権運動の出発点ともいえるべき「民撰議院設立建白書」は、左院に提出された翌日には『日新真事誌』に全文が掲載されている。その内容は現在の政府は情実で動き、このままでは国家が滅亡してしまうので、「天下ノ公論」を伸ばして人民の権利を確立すること等が必要であることが記されていた。さらに「民撰議院」を設立することは、「それによって『我が帝国ヲ維持振起』して、『幸福安全ヲ保護』することができるのである。」<sup>69</sup>と把握されている。

「民撰議院設立建白書」についての賛成や反対の意見は、『東京日日新聞』や『郵便報知新聞』等に掲載されていた。明治7（1874）年11月24日の『朝野新聞』は「投書」の新聞新評の欄に以下の記述を掲載している。

「朝野新聞」民選議院、其の論公平にして文明の邦に行われるべく、鄙野の郷にも行なわるべし。誰か是れを非とするものあらん、然れども其説の出る日猶浅くして且つ立君政府の好まざる所なれば、勉めて其の英気を養い時の至るを待つべし。<sup>70</sup>

『朝野新聞』は民選議院に関しては、その論は公平であって文明国においても鄙びた村落でもこの建白書を非とするものはいないと述べられている。しかしこの建白書で展開されている論理が出てから余り時節がたっていない。また政府も反対していることではないので、時節を待ち、その間に英気を養っておくべきであるとしている。

柳北自身が著わしたかどうかは不明であるが、柳北が賛同している見解であることは確かであり、それ故柳北は自由民権運動の急速な進展を求めているとは思わなかったと考えられる。しかし『朝野新聞』には維新政府の圧制に苦しむ民衆が演説会に参加することには理解を示す記事が掲載されていた。

たとえば、弁士が「流行の俚謡」だといって、「懲も懲りない圧制は竹槍蓆旗の花が咲く」と歌いはじめ、警察官が演説停止を命じるや、聴衆四千余人が立ちあがって「警察官に論弁抗争し、場中の紛擾一方ならず」となった（『朝野新聞』 八〇年七月二二日）。<sup>71</sup>

欧米への外遊中の柳北は、明治6（1873）年4月29日に英国で議事堂を見学したことがあり、「又議事堂ヲ觀ル其ノ雄偉宏壯驚ク可シ」という記述が「航西日乗」の中にある。英国の立憲君主制での政体を見聞した柳北は、帰国後の明治12（1879）年2月には、『英國國會沿革誌』（趙舞尔／著）を高橋基一<sup>72</sup>と共に『朝野新聞』から刊行している。この「緒言」は「譯者謹識」という署名で終わっているが、その一部は以下の内容である。

我邦今日ノ時機ニ際シテハ歐洲國會ノ法規制限習慣ノ逐次ニ沿革變遷シテ終ニ今日ノ完全ヲ致セシヲ知ルハ豈要務ニ非ストセンヤ<sup>73</sup>

ここでは我が国の現在という時期までに、欧州の国会の法規や習慣が次々と変遷しており、ついに今日のように完成したことを知ることは重要であるという見解が述べられている。柳北は読者を啓蒙することによって、日本の国に議会制度が根付くことを願っていたと考えられ、近代国家への歩みは漸進的に行なわれることを意図していた。またこの書物の中の「選挙建白」の項では、新聞の役割について以

下の記述がある。

選挙ニ就イテ用セシ費用ハ其精算書ヲ以テ選挙後二ヶ月以内ニ報告更ニ提出スルヲ要シ報告吏ハ則チ之ヲ地方ノ新聞紙ニ掲載セシム<sup>74</sup>

柳北は将来的には『朝野新聞』を含む日本の新聞が、国会議員の選挙の際の英国の新聞のような役割を果たすことを目指していたと考えられる。

## (2) 柳北の立憲改進黨への入党

### ①政党の結成

明治 15 (1882) 年 3 月に大隈重信 (天保 9 (1838) 年-大正 11 (1922) 年)<sup>75</sup> が中心となって立憲改進黨が結成されると、柳北は入党した。既に前年の明治 14 年には日本で最初の政党である自由党が国会開設の詔勅を受けて結成されていた。自由党は板垣退助を総理とし、政党の結成には河野広中・植木枝盛等が会合を持ち準備されてものであった。これに対して立憲改進黨は、自由党に参加しなかった民権派の人々が大隈重信を中心に結成したものであった。それは 4 つのグループからなる。<sup>76</sup>

表IV-6 4つのグループから成る立憲改進黨の構成

グループの基盤	主要なメンバー
東洋義政会 (慶応義塾出身者)・『郵便報知新聞』	矢野文雄・犬養毅・尾崎行雄
嚶鳴社・『東京横浜毎日新聞』	沼間守一 (リーダー)・島田三郎・大岡育造
鷗渡会系 (帝大出身者)	小野梓 (リーダー)・高田早苗・山田一郎
明治 14 年政変関係者	大隈重信 (リーダー)・河野敏謙・前島密

(稲田雅洋. 自由民権運動の系譜. 吉川弘文館, 2009. p. 119-120 の記述から筆者作成。)

その他、自由党の結成過程では参加しながら、土佐派・愛国者系の運営に同調できなくて自由党の結党に参加しなかった田中正造等も立憲改進黨に加わった。以下に二つの政党が結党時に目指したものの大枠を記す。<sup>77</sup>

表IV-7 自由党と改進黨の特徴

比較事項	自由党	立憲改進黨
憲法等	仏国流の急進的民約憲法論	英国流の漸進的立憲論
選挙	一院制・普通選挙	二院制・制限選挙
支持者	不平士族・地主・農民・商業資本家	知識階級・産業資本家

(安在邦夫. 立憲改進黨の活動と思想. 校倉書房, 1992. p. 202 の記述から筆者作成。)

政体については、自由党は「自由党盟約」<sup>78</sup>の第二章に「吾党は善良なる立憲政体を確立することに尽力すべし。」と明記されているが、君主への言及はない。これに対して立憲改進黨の「立憲改進黨主義要領」<sup>79</sup>の第二章では「我党は帝国の臣民にして左の冀望を有するものを以て之を団結す 一、王室の尊栄を保ち人民の幸福を全ふする事。」と、立憲君主制を明記している。また明治 15 (1882) 年には『東京日日新聞』の福地桜痴が中心となって、欽定憲法の制定を掲げる立憲帝政党も結党された。

柳北の朝野新聞社では既に明治 12（1880）年には『英國國會沿革誌』（趙舞爾／著）の翻訳を刊行しており、柳北の立憲改進黨への入党はその理想とする政治的思想に共通項があったからでもある。

## ②立憲改進黨入党後の『朝野新聞』

立憲改進黨では『立憲改進黨列傳』初編を明治 16（1883）年 5 月に刊行している。その目次では大隈重信を皮切りに、次に柳北の小伝が掲げられている。ここでは柳北が幕臣時代に閉門を体験しながらも、徳川の遺臣としての道を貫き、維新政府から左院に出仕を請われても固辞したこと等が記されている。またジャーナリストとしての柳北は、西南戦争への対応を「君自ヲ探訪者トナリ能ク戦地ノ状況ヲ探訪シテ讀者ヲノ秋毫モ遺憾ナカラシメタリ」<sup>80</sup>（大意：よく戦地の状況を読者に提供し、その記事はいささかも読者をがっかりさせるものではなかった）と記されている。さらに柳北の詩作が清国でも知られていると記している。<sup>81</sup>

其ノ著ス所ロノ柳北詩鈔夙ニ傳ヘテ清國ニ到ル清人爲ニ序シテ愛玩惜カズトイフ<sup>82</sup>

（著作である『柳北詩鈔』はずっと以前から清国でも知られていて、それが評価されている。）

柳北はその詩作が同じ漢字文化圏の清国でも評価されるなど、立憲改進黨においては歓迎すべき党員の一人であった。しかしながら『朝野新聞』では、雑録が粗雑であることが末広鉄腸に指摘されながらも、柳北はそれを受け入れることがなかった。さらに柳北や大部分の社員が立憲改進黨に入りながらも、鉄腸が自由党に入ったことで『朝野新聞』の衰退を方向づけてしまったことが小野秀雄によって指摘されている。

最初の間は両政党が提携して帝政党に当たったので、何ら差しつかえはなかったが、改進黨と自由党が泥仕合を始めると、「朝野」の立場は苦しくなった。末広の論文と柳北の雑録は矛盾するようになり、主義主張は一致しないことになった。<sup>83</sup>

このような状態から読者の信用を失った『朝野新聞』ではあったが、明治 16（1883）年 6 月には「不偏不倚」宣言を出した。<sup>84</sup> 自由党や立憲改進黨の結成から全国の新新聞が政党の機関紙（政党新聞）となって論戦を繰り広げている中で、柳北の『朝野新聞』は立憲改進黨にも自由党にも偏しない立場を打ち出している。既に明治 9（1876）年に福地桜痴が『東京日日新聞』の立場を鮮明に打ち出すためにこの「不偏不倚」という言葉を用いて新聞の民権派への傾斜を批判していた。福沢諭吉も明治 15（1882）年には『時事新報』を創刊していたが、『時事新報』は政党と距離を置いて報道本位の新聞となっていた。

『朝野新聞』は柳北の雑録で人気を博したが、柳北には民権派の経営者としての能力が備わっていたことが山本武利によって、以下のように指摘されている。

民党間に党派的な不統一があっても、無理な紙面統一を図らずに、『朝野』は特定の民党派色を結果的にうすめてしまう。そうすることは、民党系を中心とした読者を幅広く獲得することにつながる。多くの読者にとって、新聞は自由党系でも、改進黨系でもいすれでもよく、ただ民権派でさえあればよかった。<sup>85</sup>

明治 17（1884）年の柳北の死後は詩文雑誌『花月新誌』は廃刊されたが、明治十年代後半に『朝野新聞』の部数が他の政党機関紙のように激減しなかったのは、党派的にあいまいであったからとされている。



る。<sup>86</sup>その後『朝野新聞』は明治26(1893)年11月には第6052号で終刊した。さらに再刊紙『新朝野新聞』も出されたが、明治44(1911)年7月に廃刊となった。

## 第2節 『花月新誌』の創刊

### 1 創刊の背景

#### (1) 独自の情趣の世界を目指して

明治10(1877)年1月4日、柳北は詩文雑誌『花月新誌』を創刊した。発行は花月社で、これは朝野新聞社内内に設けられた。主筆は柳北自身であるが、編輯兼印刷については磯部節という人物の名前が記されている。この雑誌創刊の目的については、柳北自身が第一号の「題言」の中で、「花月ノ事ヲ海内の才子ニ商量セントス」<sup>87</sup>(大意：花月に代表される文芸の情趣を国内外の才人に考えていただきたいと)と述べている。そして最後には「果シテ其ノ眞情趣ヲ識ラント欲スル者有ラバ。扁舟ヲ墨江ニ棹サシ孤瓢ヲ東台ニ提ゲ。花神ト月娥トニ問ヘ。」(大意：もしも真の文芸の情趣を知りたい者がいたら、隅田川に小さな舟を浮かべ、一つの瓢箪を上野の山の方へつるして花神と月娥に尋ねよ)と結んでいる。「花神」は花をつかさどる神の意味で、『柳橋新誌』初編には、「紅裳離披奪花神之魂(紅裳離披として花神の魂を奪ひ)」<sup>88</sup>という用例がある。また「月娥」は月の神で、「嫦娥」と同義であり、やはり『柳橋新誌』初編では「身清心爽真是伴嫦娥入蟾窟(身清く心爽やかに、真に是れ嫦娥に伴つて蟾窟入る)」という用例がある。従って『柳橋新誌』初編で柳北が目指した才子佳人の恋を含むような情趣の世界を、『花月新誌』でも表現しようという方向がとられたのであった。

『花月新誌』第2号に掲載された漢詩「丙子歳晩感懷」<sup>89</sup>には、さらに柳北の創刊時の心情が表されている。

隙駒驅我疾於梭。	隙駒(げきく) 我を驅(お)ふこと 梭(ひ)よりも疾(はや)し
四十星霜容易過。	四十の星霜(せいそう) 容易に過ぐ
文苑偏憐才子句。	文苑(ぶんえん) 偏(ひとへ)に憐れむ 才子の句
教坊徒聽美人歌。	教坊(けうぼう) 徒(いたづ)らに聴く 美人の歌
青雲黃壤舊知少。	青雲(せいうん) 黄壤(くわんじょう) 旧知少なく
綠酒紅燈新感多。	綠酒(りよくしゅ) 紅燈(こうとう) 新感多し
好是寒梅花上月。	好(よ)し是(こ)れ 寒梅(かんばい) 花上(くわじょう)の月
稜稜風骨奈君何。	稜稜(りりょうりよう)たる風骨(ふうこつ) 君を奈何(いかん)せん

柳北はまず、人生は短く歳月は早く過ぎ去る、馬が馬子のすきから走りだすような月日が私を追いたててことは、機織りの道具である梭よりも速く、四十年の歳月は容易に過ぎてしまったと述べている。次に『花月新誌』が創刊され、多くの優れた詩人の作品が掲載された。教坊に遊んでも芸妓の歌を聞くだけで、昔のように耽溺することはない。昔の友人は青雲の上に栄達して去り、また黄土の下に永逝してしまい、数少なくなってしまったと、月日の流れを詠んでいる。そして花柳街、飲食街のはなやかな明かりとうまい酒も見新しいものが多く、冷やかな梅の花を照らす月は、とても趣があるとし、鋭く厳しい風貌で気品ある君(月)に対して、私は何をなすべきだろうか。花と月の風流をこそ、今は詠おうという志を語っている。<sup>90</sup>

首聯「隙駒驅我疾於梭」は似た用例が、『莊子』知北遊の「人生天地之間、若白駒過郤、忽然而已(人の天地の間に生まるる、白駒の郤を過ぐるが若く、忽然たるのみ。)」にある。この大意は、「人がこの天地の間に生きている時間は、あたかも駿馬が物のすき間を走り過ぎるようにごく短く、忽ちのうちに過

ぎ去ってしまうものである。」<sup>91</sup>である。

## （２）海外の文化の紹介

『花月新誌』創刊前の明治 8（1875）年 3 月 18 日の「陳腐閑語」12 号（『朝野新聞』論説欄）で、柳北は以下のように述べている。

然レドモ吾曹欧米ニ航遊セシ時彼ノ風俗ヲ観ルニ、文明ノ諸国ニ於テ詩賦ヲ貴重セザル所無シ。東西文ヲ異ニシ語ヲ殊ニスレドモ、其情趣を玩味スレバ、豈霄壤ノ別有ランヤ<sup>92</sup>

文芸に込められている情趣には東西の差がないことを説いているのである。語学にも精通していた柳北は『花月新誌』や『朝野新聞』に自己の翻訳作品を掲載し、また明治 11（1878）年に刊行された丹羽純一郎訳『花柳春話』<sup>93</sup>にも「題言」を寄せていた。『花柳春話』の原作は英国の 19 世紀の作家・政治家であったブルワー＝リットン（Edward Bulwer-Lytton）の著作である。テキストについては、「丹羽（織田）純一郎が抄訳する際に使った、ブルワー＝リットンの『アーネスト・マルトヴァーズ』（1837）、『アリス』（1838）のテキストは未だ判明していない」<sup>94</sup>のが現在までの状況である。「題言」で、柳北は以下のように述べている。

固陋學士ハ云フ。泰西諸國ハ。人々實益ヲ謀リ。實利ヲ説キ。敢テ風流情痴ノ事ヲ問ハズト。是レ極メテ妄誕。余嘗テ航遊一年。親シク看破シ來ルニ。彼我ノ情相契ス。毫モ差異無キナリ。<sup>95</sup>

欧米諸国の人間でも、男女の恋愛の情趣については日本人と少しも差がないことを柳北は説いているのである。丹羽純一郎は幕末までは三條家に仕えており、維新政府側の人間であった。しかし柳北は丹羽の海外の文芸に対する姿勢に自分との共通項を見出し、「題言」を書き、助力をしたと考えられる。また「航西日乗」では海外の文芸や演劇に接したことが述べられているが、海外の芸術作品を直接見聞したことで欧米人と日本人に人情に差のないことを確かなものとしたのであった。このような経緯から、多様なジャンルの文芸の掲載をした『花月新誌』が刊行された。

## （３）明治初期の詩文雑誌

新聞や雑誌に掲載された翻訳作品は不特定多数の読者が目にすることができた。森鷗外（文久 2（1862）年-大正 11（1922）年）も柳北の翻訳作品に接していた。代表作「雁」（『昂』明治 44 年 9 月-大正 2 年 5 月）の中に以下のような記述がある。

僕も花月新誌の愛読者であったから、記憶している。西洋小説の翻訳と云うものは、あの雑誌が始て出したのである。なんでも西洋のある大学の学生が、帰省する途中で殺される話で、それを談話体に訳した人は神田孝平さんであったと思う。それが僕の西洋小説と云うものを読んだ始であったようだ。<sup>96</sup>

『花月新誌』や『朝野新聞』上に掲載された翻訳作品は読者に西欧文学への関心を芽生えさせたのであった。

『花月新誌』が創刊された頃に他の詩文雑誌も盛んに創刊されていた。柳北が『花月新誌』に西欧文学の翻訳作品を載せたのは、他社のできない企画を打ち出す必要があったことも一つの要因であったと考えられる。『花月新誌』にも作品を載せていた森春濤（文政 2（1819）年-明治 22（1889）年）は、明

治 7 (1874) 年 10 月に上京し茉莉吟社を起こし、毎月十日には「十日会」(桃花会) という詩会を開いた。この詩会には春濤の門人の他に、大沼枕山・小野湖山・鷺津毅堂や、維新政府の官僚となった川田甕江等の台閣詩人が参加した。さらに春濤は吟社の機関誌『新文詩』<sup>97</sup>を、明治 8 (1875) 年 7 月に創刊した。ここには柳北の『花月新誌』と異なる視点からの編集方針があり、春濤は第一集には自作を掲載することはなかった。

また春濤以外にも吟社の機関誌の創刊が多数あり、主要なものを以下の表に示す。<sup>98</sup>

表IV-8 明治 10 年前後の詩文雑誌の創刊

(誌名)	(創刊年月)	(主宰者)	(廃刊年月)
新 文 詩	明治 8 年 7 月	森 春濤	明治 10 年 10 月
東 京 新 誌	明治 9 年 4 月	服部撫松	明治 16 年 11 月
東 洋 新 報	明治 9 年 7 月	岡本監輔	明治 11 年 12 月
明 治 詩 文	明治 9 年 12 月	佐田白茅	明治 14 年 1 月 (明治文詩と改題)
花 月 新 誌	明治 10 年 1 月	成島柳北	明治 17 年 10 月
詩 歌 雑 輯	明治 10 年 7 月	礮稻綺道秀	明治 11 年 1 月 (観光小誌と改題)
桂 林 一 枝	明治 11 年 11 月	石井南橋	明治 15 年 4 月
崑 山 片 玉	明治 11 年 11 月	大内青巒	明治 15 年 4 月
京 華 新 誌	明治 12 年 5 月	貫名清江	明治 13 年 4 月
古今詩文詳解	明治 13 年 12 月	吉田次郎	明治 20 年

(三浦叶. 明治漢文學史. 汲古書院, 1998. p. 233 掲載の表を筆者が横書に変更。)

明治 8、9 年頃から各地の吟社の機関誌が盛んに発行された要因については、三浦叶によって以下のような指摘がされている。

漢學が衰退し、洋學が盛んに採り入れられていた時代に、このような雑誌が創刊されたことは甚だ奇異に感じられるが、しかしこれは表面的な現象であって、世間一般にはなお依然として傳統の漢學の力が潜在していたと思われる。そして一つには洋學の興隆、西洋文化の心酔に対する反感から、又一つには當時にはなお詩文の大家がいてこれを指導しており、世の指導的階級の人々が漢學の教養を受けて斯文の興味を持ち、一般の人々も亦斯文を愛好して詩文を作っていた。<sup>99</sup>

柳北もまた漢詩人の一人として、白歐吟社を主宰しており、伝統文化の維持を重視していたと考えられる。しかし一方で柳北は「航西日乗」で記された海外体験等から、海外の文学作品を翻訳して『花月新誌』に掲載していた。翻訳した作品を掲載した点が、他の吟社の「詩文雑誌」<sup>100</sup>と大きく異なる点であった。

『花月新誌』と同時期に創刊されて、明治 20 年 (1887) まで発行され続けた詩文雑誌に『古今詩文詳解』がある。明治 14 (1881) 年から 17 (1884) 年にかけての『花月新誌』と『古今詩文詳解』の発行部数は、『花月新誌』が年間一万千部から二万八千部までにとどまったのに対して、『古今詩文詳解』は年間六万千部から一二万四千部までの好成績をあげている<sup>101</sup>ことが、乾照夫によって指摘されている。『古今詩文詳解』の隆盛は少年を中心とした読者に対して詩文添削指導を行っていたからでもあった。しかし柳北は西欧の学問も含む幅広い領域での学びの必要性を主張し、少年を漢詩の添削のみに没頭さ

せる風潮を批判し、「詩を作るは善き事に相違無けれども、少年の学ぶ可きもの国学洋学漢学、其区域頗る広し。」（「小技にのみ耽る勿れ」明治16年8月10日）<sup>102</sup>と、述べている。若い世代には広い世界に目を向けさせることを考えていた柳北は、『花月新誌』の隆盛を願いつつも、少年への添削指導は行わず、日本の古典文芸に根ざした和文や短歌、さらに海外の文学、思想、社会問題等の翻訳作品を掲載したのであった。（翻訳作品については、第3節で詳述）。

## 2 『花月新誌』における柳北

### （1）漢詩に見られる柳北の感慨

①「一月一日作」 （『花月新誌』第三十四号 明治11年1月16日）

『花月新誌』発刊後、一年を経過した頃の柳北は以下の漢詩を詠んだ。

海外春遊興欲仙。	海外ニ春遊シ興ハ仙ナラント欲ス。
豪懷落々五年前。	豪懷落々タリ五年前。
如今甚矣吾衰也。	如今甚シ吾ノ衰ヘタル也。
破屋元朝聽雨眠。	破屋（ハオク）元朝ニ雨ヲ聽キテ眠ル。

この詩の中で柳北は、外遊して仙人のような気分になっていたこともあり、五年前はそういった雄々しい心をもっていたが、現在の自分は甚だしく衰えてしまっていると述べている。さらに元日の朝にはあばら屋で雨の音を聞いて寝ているのばかりと、様々事情から自分の志が挫けてしまったと反省しつつ自嘲している。

柳北は明治5（1872）年から6（1873）年にかけて真宗大谷派の随員として欧米を訪れた頃を回想しているのである。『花月新誌』を発刊して未だ一年ではあるが、自己に厳しい視線をもっていたのである。柳北は同じ34号で自己の詩論「墨上夜話（三則）」を掲載していて、「詩ハ志ヲ言フノミ奇ヲ求ムルハ好マシカラズ」と、少年たちへ漢詩の作り方の注意点を述べている。

五年前の欧米を訪れた游记である「航西日乗」には未来への模索と過去への追懐という二つの感慨が込められていると考えられ、特に伊国での「遊多斯加納王故宮」という絶句には、前王朝への追懐の念が表されている。明治11（1878）年初めの柳北は既に「述齋偶筆ぬきかき」の連載を始めていて、江戸時代の幕閣に優れた文人がおり、またその文芸にも価値あるものがあることを、『花月新誌』を通じて読者へ伝えているのである。

また一方では「楊牙兒ノ奇獄」という西欧文学の翻訳を掲載していて、日本の文化の幅広い進展への方向付けを試みている。

②「新年口占」 （『花月新誌』第百二十号 明治15年2月12日）

『花月新誌』発刊後、五年が経過した新年に柳北は下記の漢詩を詠んだ、これは推敲せずに口に付いたままをまとめたものであり、柳北の真意が込められたものと考えられる。

倏然四十六春風。	倏然（しゆくぜん）として四十六の春風。 <sup>103</sup>
半鬢新霜吹不融。	半鬢（はんびん）の新霜吹けども融けず。
無復良圖報家國。	復（ま）た良図（りやうと）の家國に報ずる無し。
殘生漫寄蠹書中。	殘生（ざんせい）漫（みだ）りに寄す 蠹書（としょ）の中。

承句の「新霜」は、その年の初めての霜のことで、寺門静軒の『江戸繁昌記』の五篇・品川での漢詩「海晏寺楓」の「一従楓樹染新霜」の用例がある。結句の「残生」は余生の意味であるが、この語句の用例は杜甫の漢詩「寄司馬山人。十二韻」中に「残生一老翁」の用例があり、又陸游の「雨夜」中には「残生竟是老漁樵」の用例がある。ここで柳北はあつという間に四十六歳になり、新年の春風が霜のように白いものが混じる鬢の毛を吹くけれども、春風が霜を溶かすようにはいかず、鬢の白いものは変わることはない。復た国家の恩に報いる計画とてない。残されたこの生は、勝手ながら虫食いだらけの書物に託して過ごすのだと、自分の決意を語っている。

## （２）江戸時代末期の文芸の紹介

柳北は江戸時代末期の成島家やその周辺の人々の文芸作品を『花月新誌』に掲載し、読者に紹介している。「述齋偶筆ぬきかき」は、11号（明治10（1877）年5月29日）から97号（明治13（1880）年6月12日）迄、18回にわたって掲載された。「変化歌合」は、35号（明治11（1878）年1月27日）から39号（明治11年3月17日）迄、5回にわたって掲載された。「紫史吟評」は、65号（明治12（1879）年2月5日）から81号（明治12年9月11日）迄、17回にわたって掲載された。「みるめのさち」は82号（明治12（1879）年9月28日）から87号（明治12年12月18日）迄、6回にわたって掲載された。

### ①「述齋偶筆ぬきかき」

「述齋偶筆ぬきかき」は、第11号から97号に渡って不定期に掲載された和文の随筆である。掲載に際して、柳北は以下のように述べている。

述齋林先生ハ道春翁より林氏十餘世の間に於て其の徳望學術並び無き人なり佐藤一齋翁も其の門を出でたり著書多けれど知る人罕（まれ）なれば柳北の幼き時寫し置きたる偶筆を抄して世の我流に志めず（『花月新誌』11号 明治10年5月29日）

述齋は林羅山の子孫であり、その学才が優れたものであるのにその著書があまり知られていないので紹介するとし、初回に柳北自身が幼児期に書き写したものであることが「柳北の幼き時寫し置きたる偶筆を抄して世の我流に志めず」と記されている。

原著者は大学頭であった林衡（明和5（1768）年-天保12（1841）年）で号は述齋である。述齋は美濃の国岩村藩主の三男で幕府の命で林家の養子となり、大学頭として寛政の改革の際には文教政策の担い手であったが、その人柄については、以下の記述もある。

述齋は昌平坂学問所の学問吟味では、試験科目として朱子学に統一しても、個人的な見解の小異は問わないという柔軟な態度をとっていた。この点、松平定信の意をうけて、寛政異学の禁を主導した柴野栗山・岡田寒泉らとは考えを異にするが、林羅山・駕峯以来の林家の学風の延長線上にあったといえる。<sup>104</sup>

また『徳川実記』の編纂は述齋が統括して、奥儒者の成島司直が編集主任として執筆に当り、成島家の直接的な上司の立場にあった。初回の冒頭は以下のように記されている。

いにしへの歌詞ほど風韻高きものはあらじ梅に下風といひ荻に上風といふいかにしてかく思ひよりなん（大意：古への歌詞ほど風韻の高いものはないであらう。梅に下風といひ、荻に上風といふ。

どうかやうに思ひ寄つたのであらう。) <sup>105</sup>

古典の文芸に学ぶきものが多いことを冒頭で語っている。「述齋偶筆」は柳北が『花月新誌』に掲載したことで、初めて一般の読者に知られることとなったのである。述齋は文化元(1804)年ロシアのレザノフの来航や、天保8(1837)年の米国モリソン号事件についてはその対応を幕府から諮問を受ける等、政治的な立場をも担った人物であった。しかしながら、当時はまた詩文芸の一ジャンルとしての地位が低かった「俳諧」にも述齋は関心をもち、特に芭蕉の作品を評価していた。「述齋偶筆(四則)」(『花月新誌』第40号 明治11年3月28日)には以下の記述がある。

俳諧はいやしきものなれど昔芭蕉と呼ばれし翁の明月や池をめぐりて夜もすからといふ句八月をめでし心のふかき感ずべし今の歌仙この興趣を得るハ稀なるべし(大意:俳諧は賤しいものだけでも、昔芭蕉と呼ばれた翁が詠んだ、「名月や池をめぐりて夜もすから」といふ句からは、月を賞づる心の深さを感じず。今の歌人で、この興趣をもつ者は稀であらう。)

幕府の官僚として高位の人である述齋が、市井の詩文芸である俳諧を偏見をもたずに評価し、その文芸としての完成度を記している。それはまた一介の浪人である松尾芭蕉をも評価したことにも繋がっている。

さらに述齋は友人であった市橋下総守から教えられた文芸への視点を、「述齋偶筆(三則)」(『花月新誌』第89号 明治13年2月15日)の中に以下のように述べている。

雪中の梅を色ハマがへど香に志るきなどいふはそら言なり雪つもれば花ハうすきに見え香ハとちて句ハぬものなり雪はれ日影あたたかなれば香氣いづるは志れたるをなれど空語にいふが歌詩の妙處なりこの趣を解せざれば理窟に陥て詩も歌の出来ぬなるべし(大意:雪中の梅を、「色はまがへど香にしるき」などといふはそら言である。雪が積もれば花はうっすらと見え、香は閉ぢて句はない。雪が晴れて、日光が暖かになれば香氣が出るというのは知れたことではあるが、わざとそら言にいうのが歌や詩の妙處なのである。この趣を解しないようでは、詩も歌も出来ぬだらう。)

「述齋偶筆ぬきかき」の『花月新誌』への掲載は、柳北が述齋を広い視野のもとで風雅を愛でる人物であったことをも評価したからで、幕藩体制への追懷からだけではなかった。述齋が一切の偏見を捨てて、文芸を真摯に究めようという姿勢があったことを柳北は読者に紹介したのであり、「いち早く同誌に依って本書を世に紹介した柳北は、さすがに具眼の士であつた」<sup>106</sup>と考えられている。

芭蕉の作品評価という点から近代文学に共通する面を考えると、明治26(1893)年、正岡子規は新聞『日本』に連載した「芭蕉雑談」の中で「名月や池をめぐりて夜もすから」という句について以下のように記している。

極めて自然なる者は古池の句の外に

明月や池をめぐりて夜もすから

の如きあり。<sup>107</sup>

子規は明治32(1899)年にほとゝぎす発行所から『俳人蕪村』を刊行し、蕪村の「客観的美」<sup>108</sup>を評価したことで知られている。芭蕉よりも蕪村の方が「客観的美」においては優れているとしているが、芭蕉の文芸も評価していたのであった。

## ②「變化歌合」

「變化歌合」は第 35 号から第 39 号に連載された擬古文を思わせるような創作で、空想の世界での歌合が描かれている。原作者は長谷川安卿<sup>109</sup>である。柳北は第一回目の冒頭の紹介文に「この歌合ハ余カ家祖の門に遊びし長谷川安卿の作りしなり」と、先祖と交流のあった原作者を紹介している。初回に登場する法師風の人物については、「鎌倉山の谷陰に住む男ありけり名と利との二つを避けたるさまハ志つれとも誠心より浮世を厭ふにもあらず」と、記されている。やがて空想の世界の中での歌合が催され、判詞を通じてその文芸観が呈示されている。妖怪である「うふめ」(左)と「こけ地蔵尊」(右)の作品についての優劣については、以下のように記されている。

左

うふめ

闇よりも月夜はいと、思ひ子を思ひうふめの鳴あかす聲

(大意：闇夜よりも月夜に一段とはっきりしていることがある。それは思う子进行ううぶめの鳴きあかす聲が聞こえてくることだ。)

右

こけ地蔵尊

さしのはる月の圓みのたのしさハ我西方のかけも及ハシ

(大意：さし昇っている月の下で輪になって座りたのしむこと、そのたのしさは仏のいる西方浄土の光もおよぶまい。)

判云ひたり片野の雉子夜の鶴さへも子を慕ふ思ひの切なるにくらへて我身ひとつのかなしみ眼前に見えて哀れなり 又思ひうふめのといふ詞つゝきもをかしく聞え侍る 右極樂真如の月も及ひかたしといへるハあまり 賞譽すきて實意薄きに似たりかたかた鳴きあかす聲まさり侍らん

(大意：判者が言うには、左の歌では片野の雉子や夜の鶴までも子を慕う思いがはなはだしいが、それに比べうふめは自分一人の悲しみが眼前に見えてそれらの思いよりも哀切であり、「思ひうふめ」という言葉の続け方も趣深い。右の歌では極樂真如の世界の月よりもたのしいというのは称賛し過ぎた表現であり、真情のある表現ではない。左の歌の鳴きあかす声の方の歌の方がよい。)

右の歌の「圓みのたのしさ」は、『古今和歌集』(巻十七)の雑歌上の読人知らずの作品、「思ふどちまとみせる夜は唐錦たたまく惜しきものにぞありける」(大意：仲のいい者どうしが車座にすわって楽しいひとときを送っている夜は、立ち上がるのが本当に惜しいものだよ。)<sup>110</sup>の用例がある。詞の技巧では右の歌が優れているが、左の歌の子を思ふ「うふめ」の真情が評価された点に、原著者の文芸への思いが表れている。柳北も「うふめ」の真情を評価する長谷川安卿に共感したものと考えられる。

柳北の最晩年の作品に「洗愁日乗」がある。その中で柳北は桂園派の歌人松浦辰男(天保 14 (1843) 年-明治 42 (1909) 年)のことを記している。辰男は有栖川宮家に仕えていて、主家と共に東京に出てきた人物であったが、「嘘・偽りのない、邪気のない、わが誠の心をわが言葉で調べをなし詠いだすこと」<sup>111</sup>を重視した歌人であった。柳北は和歌においては詞の技巧よりも、歌に込められている真情を評価していたのであった。

長谷川安卿(郷)は、江戸冷泉門の歌人で幕府の書物奉行であった長谷川主馬(享保 4 (1719) 年-安永 8 (1779) 年)<sup>112</sup>、『霞関集』や『遊角筈別荘記』にその作品が残されている。安卿と交流のあった成島家の祖は、成島信遍(元禄 2 (1689) 年-宝暦 10 (1760) 年)とその長男である和鼎(享保 5 (1720) 年-文化 5 (1808) 年)と考えられる。信遍は錦江と号し、江戸冷泉門の組織化に功績があった。和鼎は

安卿と同年輩で、竜洲と号し、父信遍の後継者として幕臣の江戸冷泉門のまとめ役としての職責を果たして、寛政4（1792）年頃には、『冷泉家御褒詞詠藻』の撰者となっている。

### ③「紫史吟評」

「紫史吟評」は第65号から第81号に連載された『源氏物語』の評釈である。原著者は柳北の父で、奥儒者であった成島良譲（享和2（1802）年-嘉永6（1853）年）、号は稼堂である。第一回目では「桐壺」「簀木」「空蟬」の各巻を取り上げているが、柳北は以下のように紹介の文を寄せている。

余ノ先人講讀ノ餘戯レニ紫史吟評二卷ヲ草ス未ダ世ニ公セズ此ニ録シテ江湖雅流ノ一閱ニ供ス（大意：私の亡父は戯れに紫史吟評二巻を書いた。未だ一般の読者の目にふれてはいないので、江湖の人々で、文芸に志す人々に一読の機会を提供する。）<sup>113</sup>

原著「紫史吟評」は成島良譲の自筆原稿（全二冊）で、その詳細は以下のようなものである。

本書は縦二七・〇センチ、横一八・八センチの大本袋綴装二冊で、題簽は「紫史吟評 乾（坤）」とある。内容は『源氏物語』五十四帖にわたって各巻の主要な部分を漢文で記し、その後にそれについての七言絶句の漢詩を加えたものである。<sup>114</sup>

中野幸一の『源氏物語類聚鈔・紫史吟評』では、『紫史吟評』の乾巻巻頭には日野資愛の題辭（天保9（1838）年）があり、天保9年には成書が成立していたとされている。また坤巻の末尾に著者自身の天保11（1840）年2月の識語があり、それが稿本の謹書された時期と把握されている。稿本は著者である良譲の手で作成されていたが板本の存在が明かされず、柳北が『花月新誌』に連載することで知られることとなった。最初の巻である「桐壺」では、良譲が如何に『源氏物語』を高く評価していたかという良譲自身の独自の意見が記されている。

紫史。宇宙第一奇書也。使讀之者。欲泣欲笑。乍悲乍喜。上以察世態之遷移下以詳人情之向背。而一種箴規之意。隱然見於言外矣。

（紫史は宇宙第一の奇書なり。之を讀む者をして、泣かんと欲し、笑はんと欲し。乍ち悲み、乍ち喜び、上は以て世態の遷移を察し、下は以て人情の向背を詳にせしむ。而して一種箴規の意。隱然として言外に見る。）

（大意：源氏物語は天地間に於ける第一等の奇書である。今を去る一千年の昔、世界の何處に、源氏に匹敵する大小説があつたか。（源氏物語は獨り我が國文學の矜誇のみではない。實に世界文學史に君臨する寶典である。）<sup>115</sup> 一たび源氏を繙けば、其處に走馬燈の如く移り變わる世態や、秋空の如く定めなき人情が、至る處如實に展開せられ、讀者は其の靈筆に魅せられつゝ、人生に對する深い諷刺と教訓とに接することであらう。）

著者の良譲は『源氏物語』を深く読み解き、人生の諷刺や教訓に讀者が接することができる点を評価したのである。さらに「桐壺」の巻で、良譲は以下のように述べている。

善讀者先領此意有得於文字之外則五十四回之中。百千萬般之事。無不往而爲龜鑑牟。無不往而爲座



右之銘牟。何止立意之巧。詞章之艶而已也牟。

(善く讀む者先づ此の意を領し、文字の外に得る有らば、則ち五十四回の中、百千萬般の事。往くとして龜鑑と爲らざるは無く。往くとして座右の銘と爲らざるは無し。何ぞ止だ立意の巧と。詞章の艶とのみならんや。)

(大意：本當に源氏を讀む者が、單に文字の表面に捉はれず、先づ個中の消息を了解して讀破するならば、五十四帖の中に現れて來る千種萬葉の事柄は、一として處世の龜鑑で無いものではなく、一として座右の銘たらざるものはない。唯だ構想が巧妙であるとか、文章が艶麗であるとかいふ、そんな表面的な末梢的な處に、源氏の価値はなく、源氏の本色は無い。もつともつと深い文字文章の底に、眞の源氏精神が流れてゐることを知つて味讀せねばならぬ。)

『源氏物語』を讀み解くことで、文字の底に在る作者の精神を把握することができると良譲は述べており、それは良譲の古典を讀み解く視点と考えられる。

最終の巻である「夢浮橋」では、良譲自身の自由で率直な『源氏物語』の感想が書かれている。その部分を以下に記す。

余曾讀紫史。亦以夢爲眞。以無爲有。發幾哄笑。濺幾點淚。次第讀至此卷。憮然爲間 曰。嘻嗟夢也。夢幻之世。夢幻之身。莫往莫來。何喜何悲。

(余曾て紫史を讀み、亦夢を以て眞と爲し、無を以て有と爲し。幾哄笑を發し、幾點淚を濺ぐ。次第に讀んで此卷に至り、憮然として間を爲して曰く、嘻嗟夢なり、夢幻の世、夢幻の身、往莫く來莫し、何をか喜び何をか悲しまんと。)

(大意：自分も嘗て此の物語を讀み、或る時は口を開いて笑ひ、或る時は涙を流して泣いたが、最後に此の巻に讀み至つて、『あゝ夢だ、此の世も夢だ、此の身も夢だ、人間萬事皆夢だ、その夢に執着して、種々の悲劇喜劇を演ずることの愚かさよ』かう感ぜざるを得なかった。)

奥儒者としての良譲には『後鑑』(三百七十五卷)等の大著もあるが、「紫史吟評」の跋文によれば若い頃から『源氏物語』に親しみ、古典文学の鑑賞で人生觀の一部を形成していたと考えられる。良譲は『源氏物語』から人生は夢であり、その夢に執着することの儚さを習得したと記している。

『源氏物語』の基底にある根本思想については、大正時代に津田左右吉が『文学に現はれたる我が国民思想の研究』の「貴族文学の時代」の中で以下のように記し、良譲の見解との共通面が見られる。

源氏物語の一篇は、要するに人生のはかないこと、其のはかない運命に何人も抵抗すべからざることを示したものである。<sup>116</sup>

また「夢」という表現については、平成に入ってから岡部明日香が『紫式部の漢学世界：源氏物語と白氏文集・紫史吟評』の中で以下のように説明している。

「紫史吟評」は儒教的教誡觀を標榜して始まり、それを最後まで捨てないものの、その限界に対して苦慮しながら「夢」と断ずる。これは、『源氏物語』に魅かれながらも儒者の立場と見解を守るため、筑山が古注釈の言葉を借りて下した苦肉の結論のようにも思える。<sup>117</sup>

成島良讓の源氏評論「紫史吟評」は一時忘れられていたが、昭和 15 (1940) 年に谷口為二 (廻瀾) (明治 13 (1880) 年-昭和 17 (1942) 年) <sup>118</sup>により『紫史吟評詳解』が刊行された。谷口為二は松江藩の支藩である広瀬藩の藩儒山村勉斎の子で、島根師範学校に学んで漢文学や国文学を修め、明治 39 (1906) 年には「紫史吟評」の本文を全文翻刻していた。『紫史吟評詳解』は「紫史吟評」をただ口語に訳しただけの注解書ではない。各巻に藤原定家の短歌と、良讓の絶句に対しての廻瀾自身の次韻の絶句が収録されている。『紫史吟評詳解』の刊行については、谷崎潤一郎の現代語訳『源氏物語』が昭和 14 (1939) 年から刊行されたことに刺激を受けたことが、『紫史吟評詳解』の序文で廻瀾によって述べられている。さらに緒言で廻瀾は原著者成島筑山を「源氏物語の梗概を流麗なる漢文を以て叙し」と評価した上で、以下のように述べている。

紫史吟評は、往年花月新誌に連載せられたるものなるが、未だ単行本として発刊せられたることなし。<sup>119</sup>

明治 12 (1879) 年に柳北の『花月新誌』に掲載された「紫史吟評」の研究書が、一つの書籍として刊行されたのは 70 年余後の昭和 15 (1940) 年であった。この時期の『源氏物語』の研究書としては、昭和 17 (1942) 年に池田亀鑑が中心となって主要本文の校異を示した『校異源氏物語』(全 5 冊) が、中央公論社から刊行されている。

#### ④「みるめのさち」

「みるめのさち」は、第 82 号から 87 号にかけて 6 回に渡って連載された国内游记である。著者は柳北の祖父成島司直 (安永 7 (1778) 年-文久 2 (1862) 年) で、既に第 II 章で記したように私的な紀行文『晃山扈從私記』(上・下) もあった。『晃山扈從私記』は天保 14 (1843) 年 4 月の第 12 代将軍家慶の日光山東照宮参詣の随行記で、漢詩も詠まれているが、和文で書かれたものであった。この「みるめのさち」はそれ以前の随行記とされており、明治 42 (1909) 年に博文館から刊行された『紀行文集 続』にも収録され、その「解題」には岸上質軒によって以下のように記されている。

此紀行年代を記せず。文中記する所に據りて考ふるに。西の館の君が。来年厄歳に當るを以て。之を祓除せん爲。川崎大師に詣でけるに扈從せる由なり。<sup>120</sup>

(大意：この紀行の年代は記されていないが、文中から考察すると将軍世子である「西の館の君」が来年は厄年なのでこのお祓いのために川崎大師に詣でた際に随行したものである。)

将軍世子徳川家慶の厄年の前年は文化 13 (1816) 年であるので、その時の随行を記したと考えられている。季節は文中に「彌生の末つがた」とあるので、旧暦の三月末である。江戸の高輪あたりについては、「高輪の海づらに出給ふ。孝標の女の日記に。竹芝と志るせしは此邊にて。今も芝といふ名の残りし所もあり。」と、記されている。「孝標の女の日記」というのは『更級日記』(菅原孝標女著) のことで、司直の古典への造詣が偲ばれる部分である。また成島家の先祖、峰雄 (勝雄) には歌文日記「富士日記 (富士の日記)」(天明 8 (1788) 年) があり、「富士日記」中にも「竹しばのあたりにしたしき人々むまのはなむけの歌よむ。」<sup>121</sup>という記述が見られるので、司直の紀行文は峰雄の「富士日記」を踏まえたものと考えられる。

また司直は当時既に滅んでいた戦国の武将達にも関心があり、蒲田の梅園の付近では「行方弾正明連」、

「蒲田入道重連」、「上杉式部大輔憲行」たちの盛衰を記している。さらに司直は社会の底辺部にも目を向けて、現在の神奈川県に入ってから、以下の様な短歌を詠んでいる。

咲く頃も程ちかしとや 山賤が 卯花がきを ゆひそへにけん  
(咲く時節がまもなく訪れるからであろうか、猟師や樵のような人々の家のそとにも卯の花のための垣根が組み立てられたのだろう。)

卯花の垣根を用意している人々、それらは猟師や樵ではあるが卯花という自然の風物への愛情をもち、その様子が趣深いことに司直は目を向けているのである。後に十二代将軍となる家慶について、司直はその人柄を記している。

朝夕に武の業を勤めとし給ひ。文の道をも捨てたまはず。かく遙なる道をも厭ひ給はで。諸人の箕裘の業を勵まし。御身を先立て掟させ給ふ御事は。かの敬をもて怠に勝つの道理知られ。呉竹の代々の例とも仰ぎ奉るべけれど。有りがたくも畏くも思ひたまへらるゝまゝに。

(大意：朝夕に武道に励まれ、学問の道をもおろそかにはなさない。このように遙に遠い道のりを嫌われることもなく。様々な人々が父祖伝来の家業を引き継いでいるのをはげまされたりした。若殿がまず身を以てお定めになった身を慎むことで、怠け心に打ち勝つという人としての道理を教えられた。呉竹(淡竹の異名)の竹の節々のように代々の将軍家から引き継がれた御人徳ではあるけれども。大変有りがたくまた畏れ多いことである。)

旅日記である「みるめのさち」には、社会の底辺部から徳川将軍の後継者まで、広範な人々の生活や自然の営みが記されている。著者である司直が人間社会の様相を冷静にまた愛情を込めて記していることが、極めて特徴的である。しかし「みるめのさち」は冷静な記述ばかりではない、最後の部分は以下のような洒落た軽快さで締めくくられている。

春に後るゝ花の。色香もなき言の葉もて。憚りの關のはゞかりあることまで書記しぬるも。あさかの沼の浅き心を如何はせん。(大意：春にはもはや遅い花の色、その色の情趣もない言葉遣いで、憚らなければならない一線を越えてまで書いてしまったが、それは自分の底の浅い心がどうにもならなかったからである。)

「みるめのさち」の中に込められている軽快さは、当然ながら柳北の游記にも引き継がれていった。柳北の国内游記に「濱松風」<sup>122</sup>という作品がある。

急ぎ候程ニ是レハ早ヤ名ニ高キ大井川ニテ候、イカニ誰カ在ル橋錢ヲ定メテノ如ク払ヒ候ヘト言ヘド、供ニツレシ太郎冠者ハ車上ニ居眠リテ答ヘ無シ、<sup>123</sup>

柳北はこの旅には従者を伴っていたが、その人物が記者の中で寝込んでしまったことを「太郎冠者ハ車上ニ居眠リテ」と狂言の世界に擬えている。この作品については、高須芳次郎が「明治の紀行文」の中で以下のように記している。

その文章は、雅醇にちかく、平明を旨としてゐるが、時々、洒落を連發するのを一家の家法として

ある。<sup>124</sup>

柳北は祖父司直の紀行文を継承し、「濱松風」等の国内游记を著したのであった。明治の文人饗庭篁村の紀行文は、柳北以上に軽快さや洒落を採り入れたことも高須芳次郎によって指摘されている。

#### ⑤父祖やその周辺人物の文芸の紹介

柳北は、林述齋の芭蕉への評価や長谷川安卿の人間の真情の重視する文芸観に注目してこれを読者に紹介した。また祖父司直の作品では將軍から庶民までの全ての人間を見る姿勢が文学において大切なことを評価したからとも考えられる。この人間社会への注目は柳北の国内游记である「航薇日記」の中でも引き継がれている。

さらに文学は表現上の技巧などよりも作者の真情を読み解くことが大切であるという亡父良讓の文学観は、林述齋や長谷川安卿と相通ずる面もある。柳北が『花月新誌』に「紫史吟評」を連載したのも江戸時代の幕臣の古典文学の素養の深さ、そして文学への姿勢を明治時代の詩文雑誌の読者に知らせるためもあったと考えられる。江戸時代の伝統文芸の掲載は『花月新誌』の大きな特色であった。

### 3 文明開化の中での伝統文芸

詩文雑誌『花月新誌』の目指した境地、それは実利を追求する文明開化の偏りを批判して、日本の伝統文芸でも優れたものを取り入れようとした内容のある文化を創造することであった。これらの伝統文芸は、どのような点で『花月新誌』を刊行した柳北の目的に合致していたのかを考えて、以下の表に特徴点を示した。

表IV-9 『花月新誌』に掲載された伝統文芸の特色

作品名	ジャンル	原著者	特徴／明治以降の文学との共通項
述齋偶筆ぬきかき	随筆	林述齋	町人文芸である俳諧（芭蕉）の評価／正岡子規に拠る芭蕉の評価
變化歌合	擬古物語	長谷川安卿	歌の技巧よりも真情を評価／松浦辰男の和歌観と共通部分がある。
紫史吟評	評釈（漢文）	成島良讓	儒家の立場からの解釈に独自の解釈を付加／ 昭和15年刊行の『紫史吟評詳解』
みるめのさち	游记	成島司直	社会の裏側への視線と軽快な文章／ 明治初期の柳北や饗庭篁村の国内游记

（①正岡子規. 芭蕉雑談. 日本現代文学全集. 講談社, 1980. p. 253-271 ②谷口爲次. 紫史吟評詳解. 谷口廻瀾先生還暦記念刊行會, 1940. p. 1-5 ③明治紀行文學集. 明治文学全集 94. 筑摩書房, 1974. p. 3-28 から筆者作成）

「述齋偶筆ぬきかき」や「みるめのさち」では、社会の階層を超越して人間や文芸作品を評価する原著者の姿勢が見られる。柳北自身も初期の『柳橋新誌』から海外游记である「航西日乗」において、社会の裏側への視線を養い、それによりジャーナリストとしての礎を築いていった。『花月新誌』に掲載された「變化歌合」や「紫史吟評」では原著者の表面上の技巧よりも文や句の底に秘められた心情を読み取ることが、文芸を理解する姿勢であることが柳北により評価され、不特定の読者へ大量伝達されたの

であった。

林述齋、長谷川安卿、成島良議、成島司直は、何れも柳北の祖先の知人や柳北の祖父や父であるが、それだけの理由で柳北が彼らの作品を掲載したとは考えられない。久保田啓一は「前向きの江戸志向―成島柳北」の中で、柳北の文人趣味の理想の体現者として、彼らを位置づけたとして以下のように述べている。

柳北の直接の言は見出せないが、私は祖父成島司直、そして林述齋あたりが理想像に最も近かったのではないかと推測する。<sup>125</sup>

柳北はジャーナリストとして活動していたが、幕末の文人について柳北が追懐の念をもったことに対して、久保田は以下のように述べている。

彼は経世済民の真の教導者としての自負を持ち、日々の業務をこなすに十分な平衡感覚を保持しつつ、はるか昔の温和で実直かつ優秀な幕臣文人に思いをはせていたであろう。その意味で、述齋・司直追慕は言論人柳北の支えであり、指針であったと見たい。後ろ向きの江戸追懐とは全く別の、積極的な意味づけが柳北の内部で成されていたのではなかろうか。<sup>126</sup>

久保田は柳北の海外体験には触れていないが、柳北の目指す文化の進展は海外体験から培った漸進的なものであった。英国では立憲君主制の下での理想的な近代国家を目にし、また日本と国状に共通項の多い伊国では、過去の君主を偲ぶ人々の姿を見聞していて、過去の歴史を学ぶ意義を柳北は確認していた。

柳北の文芸を重視する姿勢は、当時の政府主導の産業を重視した文明開化とは相容れないものでもあった。それについて、柳北は「欧洲奇事 花柳春話」（丹羽純一郎訳）の「題言」で、「固陋學士ハ云フ。泰西諸國ハ。人々實益ヲ謀リ。實利ヲ説キ。敢テ風流情痴ノ事ヲ問ハズト。是レ極メテ妄誕。」<sup>127</sup>と述べている。この「固陋學士」は古い習慣や考えに固執し、新しいものを好まない旧来の学者というだけではない。猪野謙二は「明治文学史（上）」の中で次のように述べている。

むしろ当時文明開化の急先鋒であった指導的な洋学者たちのことにほかならぬが、柳北はあえてこれに「固陋」なる語を冠し、その物質万能、知的一方の実学、実利主義を批判しつつ、同時にその立場からする一種の文学無用論に反噬（はんぜい）を試みているのである。<sup>128</sup>

猪野は古典や漢文学に根ざした柳北の文芸は、文人趣味的反俗な文明批評とも相まって無思想な風俗文学の戯作の域を超えた知識人文学であるという評価をしている。さらに猪野はこれらの知識人文学の流れとして柴東海散士の「佳人之奇遇」があると述べている。

柳北の目指した文化とは、政府中心の実学主導の文明開化ではなく、また西欧文化の上部だけの模倣だけでない、日本の伝統文化をも採り入れて文芸を重視した内容の濃いものであったと考えられる。

### 第3節 柳北の翻訳作品

#### 1 西洋文芸の翻訳 軽薄な文明開化への批判

西欧紹介の翻訳作品を掲載した初期の雑誌は、慶応3年10月に創刊された『西洋雑誌』であり、柳北とも親交のあった柳河春三が自宅を発行所として開物社と称した。春三の死の明治3（1870）年まで不

定期に刊行されている。明治9（1876）年には西洋思想や語学普及を目的とした雑誌として、『同人社文学雑誌』が中村正直（号は敬宇（天保3（1832）年-明治24（1891）年）の家塾である同人社から塾誌として刊行されている。『同人社文学雑誌』は明治16（1883）年5月の第92号で廃刊されている。内容は医学や教育等の実学的なものや漢詩文、西欧文芸の紹介まで多岐であった。『明六雑誌』のような時代に大きな影響を及ぼす学術雑誌ではなかったが、総合的な啓蒙雑誌として以下のような評価がされている。

当時の開明的な書生の意識を如実に伝える点に特色があり、詩文からさまざまな分野に関する論説まで、はばひろい内容を持つ初の総合雑誌としての意義がある。<sup>129</sup>

漢詩文が主体の雑誌としては、明治9（1876）年4月に服部撫松の漢文戯作雑誌『東京新誌』<sup>130</sup>が刊行され、翌明治10（1877）年1月には柳北によって『花月新誌』が刊行された。詩文雑誌『花月新誌』<sup>131</sup>には、他の吟社主催の詩文雑誌と異なり、西欧文芸の翻訳作品が掲載されていた。西欧文芸の翻訳作品は、「小仙窟」が20号（明治10（1877）年8月16日）から27号（明治10年10月25日）に8回掲載され、「楊牙兒ノ奇獄」が22号（明治10（1877）年9月4日）から36号（明治11（1878）年2月14日）に15回掲載された。さらに「倫敦小誌」が70号（明治12（1879）年4月24日）から81号（明治12年9月11日）に12回されている。それらをまとめて、以下の表に示す。

表Ⅳ-10 『花月新誌』第20号～第81号に掲載の翻訳作品

題 名	内容等	号数	出版年月日
小仙窟 1	英書抄訳	20	明治10年8月16日
小仙窟 2	英書抄訳	21	明治10年8月28日
小仙窟 3	英書抄訳	22	明治10年9月04日
楊牙兒ノ奇獄 1	西欧文学の翻訳	22	明治10年9月04日
小仙窟 4 園囿	英書抄訳	23	明治10年9月14日
楊牙兒ノ奇獄 2	西欧文学の翻訳	23	明治10年9月14日
小仙窟 5 園囿	英書抄訳	24	明治10年9月25日
楊牙兒ノ奇獄 3	西欧文学の翻訳	24	明治10年9月25日
小仙窟 6	英書抄訳	25	明治10年10月6日
楊牙兒ノ奇獄 4	西欧文学の翻訳	25	明治10年10月6日
小仙窟 7	英書抄訳	26	明治10年10月14日
楊牙兒ノ奇獄 5	西欧文学の翻訳	26	明治10年10月14日
小仙窟 8	英書抄訳	27	明治10年10月25日
楊牙兒ノ奇獄 6	西欧文学の翻訳	27	明治10年10月25日
楊牙兒ノ奇獄 7	西欧文学の翻訳	28	明治10年11月9日
楊牙兒ノ奇獄 8	西欧文学の翻訳	29	明治10年11月18日
楊牙兒ノ奇獄 9	西欧文学の翻訳	30	明治10年11月29日

楊牙兒ノ奇獄 10	西欧文学の翻訳	31	明治 10 年 12 月 11 日
楊牙兒ノ奇獄 11	西欧文学の翻訳	32	明治 10 年 12 月 22 日
楊牙兒ノ奇獄 12	西欧文学の翻訳	33	明治 10 年 12 月 23 日
楊牙兒ノ奇獄 13	西欧文学の翻訳	34	明治 11 年 1 月 16 日
楊牙兒ノ奇獄 14	西欧文学の翻訳	35	明治 11 年 1 月 27 日
楊牙兒ノ奇獄 15	西欧文学の翻訳	36	明治 11 年 2 月 14 日
倫敦小誌 1 消防隊	英書抄訳	70	明治 12 年 4 月 24 日
倫敦小誌 2 土曜日 日曜日 貧人ノ景況	英書抄訳	71	明治 12 年 5 月 4 日
倫敦小誌 3 土曜日 日曜日 貧人ノ景況 2	英書抄訳	72	明治 12 年 5 月 16 日
倫敦小誌 4 土曜日 日曜日 貧人ノ景況 3	英書抄訳	73	明治 12 年 5 月 28 日
倫敦小誌 5 倫敦小童 1	英書抄訳	74	明治 12 年 6 月 7 日
倫敦小誌 6 倫敦小童 2	英書抄訳	75	明治 12 年 6 月 17 日
倫敦小誌 7 新聞報告	英書抄訳	76	明治 12 年 7 月 5 日
倫敦小誌 8 盜賊	英書抄訳	77	明治 12 年 7 月 24 日
倫敦小誌 9 盜賊 2	英書抄訳	78	明治 12 年 7 月 30 日
倫敦小誌 10 ヘンズ盜品ヲ買フ者	英書抄訳	79	明治 12 年 8 月 13 日
倫敦小誌 11 ヘンズ盜品ヲ買フ者 2	英書抄訳	80	明治 12 年 8 月 24 日
倫敦小誌 12 ヘンズ盜品ヲ買フ者 3	英書抄訳	81	明治 12 年 9 月 11 日

(『花月新誌』第 20 号～第 81 号から筆者作成。)

上記の三つの作品が『花月新誌』上に掲載されたものであるが、「小仙屈」と「倫敦小誌」は柳北自身の翻訳で「楊牙兒ノ奇獄」は神田孝平の訳を柳北が簡約して改変を加えたものであった。次にそれぞれの翻訳作品について述べる。

## 2 「小仙屈」

この翻訳作品は『花月新誌』第 20 号から 8 回にわたって掲載されている。テキストは英国の哲学者培根（フランシス・ベーコン（Francis Bacon 1561-1626））の『随想集』<sup>132</sup>である。『随想集』の初版は 1597 年に刊行されているが、柳北が『花月新誌』上で取り上げている「小仙屈」は、「四五 建築について」と「四六 庭園について」の部分である。『随想集』のこれらの章は初版には見られず、1625 年に刊行された第三版に収録されている。柳北は翻訳したことの意義としては、欧米の人々は功利だけで生きているわけではないことを読者へ知らしめるためであるとし、第一回目には冒頭で以下のように述べている。

余今有名ナル英國ノ碩學培根氏ノ文集ヨリ房舍園囿ノ築造方ヲ抄譯シ其ノ意匠ノ巧妙ニシテ高雅ナルヲ世ノ文士ニ示サントス原文ノ趣旨ヲ解スルニ難キ處ハ之ヲ補ヒ之ヲ削リ務メテ會得シ易カラシム（『花月新誌』第 20 号 明治 10 年 8 月 16 日）

翻訳に際して、柳北としては多くの読者に倍根（ベーコン）の著作の一部を理解してもらおうと努力したことを語っているのである。「四五 建築について」の訳文の中には以下のような部分がある。

余ハ首ニ云フ凡ソ宮室若シニ箇ノ異様ナル部分ヲ具フルニ非レバ之ヲ完全ト為ス可ラズ一部分ハ饗應ニ供ス即チ讌會慶賀ノ用ニ充ルナリ「エツセル」[經典]ニ記スルガ如シ一部分ハ家族ニ供ス即チ棲息ノ用ニ充ルナリ

ここでは、宮殿には外部からの賓客をもてなす機能も必要だが、家族の住まいとしての要素も必要であるという主張が述べられている。この部分の原文を参考までに記す。

First, therefore, I say, you cannot have a perfect place, except you have two several sides; a side for the banquet, as is spoken of in the book of Esther, and a side for the household; the one for feasts and triumphs and the other for dwelling. <sup>133</sup>

「the book of Esther」は旧約聖書「エステル記」を指しているが、当時の日本人によく理解をしてもらうために、柳北は「經典」という文字を付加している。また「四六 庭園について」では庭園の中を散歩しやすいように設計する必要があることを強調している。

大氣ノ流暢ノ壅塞セザルヲ主ト爲ス可シ故ニ陰翳乏キ憂有レモ炎天ニ緩歩スルハ彼ノ両側ノ地廊ニ於テスベシ（『花月新誌』第27号 明治10年10月25日）

庭園の中に必ず日陰の部分を作っておくことが力説され、欧米人の合理的な一面が述べられている。また倍根（ベーコン）については、「数量的な考え方」<sup>134</sup>には熟していないという非科学的な側面もあったことが指摘されているが、柳北が倍根（ベーコン）の原文を読解するには感性の世界における共感があったことが出発点となった。柳北は倍根（ベーコン）のいう日常的な個人的な経験の世界に着目し、欧米人の日常生活の背景となる精神世界の一端を翻訳によって紹介し、読者の啓蒙を意図したと考えられる。

### 3 「倫敦小誌」

「倫敦小誌」では12回に渡って、倫敦（ロンドン）市内の人々の生活が描かれている。柳北は倫敦を訪れたことがあった。「航西日乗」によれば、英国を訪れた柳北は明治6（1873）年5月11日、旧幕臣で維新政府に出仕していた大鳥圭介（天保4（1833）年-明治44（1911）年）を倫敦の宿舎に訪ね、「十一日日曜晴大鳥圭介子ヲゴア街ニ訪フ共ニ「クリモアンノ公園ニ遊ブ夜ニ入り燈光晝ノ如ク男女雜踏頗ル熱鬧場ナリ」<sup>135</sup>と記している。しかしヴィクトリア朝の倫敦の繁栄の裏側には想像を絶する貧困もあった。「倫敦小誌」には、近代国家英国の裏側に生きる貧しい人々の姿が描かれている。テキストは明確には特定できない部分もあるが、英国のジャーナリストであったヘンリー・メイヒュー（Henry Mayhew 1812-1887）の著作の影響を受けたと考えられる部分が随所にある。メイヒューは貧民街で行った調査記録と、1849年から約1年間『モーニング・クロニクル』（*Morning Chronicle*）紙に連載したもの等から『ロンドンの労働とロンドンの貧民』（*London Labour and the London Poor*）（1861-1862）を著した。

「倫敦小誌 1 消火隊」では倫敦の消火隊の活躍と消防士（ジョー、フチルド）の殉職が描かれている。さらに倫敦消防局（London Fire Brigade）の消火設備については「運用自在ナル龍吐水ニ蒸氣仕



掛ケ四墓手足ヲ以テ之ヲ使用スルモノハ二十七墓ヲ有セリ皆大監督セウ氏の指揮ニ屬セリ」と述べられている。大監督セウ氏は実在の人物、Ere Massey Shaw(sir.) (1830-1908) のことである。セウ氏は防災について研究し、著書も著した。代表作には、*Fire Surveys, or, a Summary of the Principles to be Observed in Estimating the Risk of Building*. (1872 年) 等がある。

メイヒューの『ロンドンの労働とロンドンの貧民』(1861-1862) の中にも *Of the Fires of London* という章があるが、そこには倫敦での火災に関する統計資料も掲載されているが、消防局の大監督についてはブレードウッド氏 (Mr. Braidwood) という名前が記されている。ブレードウッド氏はセウ氏の前任者であった。従って、柳北の翻訳した部分のテキストはメイヒューの作品の刊行後に書かれた作品であることが考えられる。柳北の翻訳した部分も、またメイヒューの *Of the Fires of London* という章でも防災についての取り組みの必要性やそれに携わる消防士の仕事への熱意が基調となっている。柳北は最後に「以テ消火隊ノ社会ニ必要ナルヲ知ル」と結んでいるが、柳北もまた近代国家での消防に関する法や設備の必要性を感じたに違いない。

「倫敦小誌 2 土曜日日曜日貧人ノ景況」、「倫敦小誌 3 土曜日日曜日貧人ノ景況 2」、「倫敦小誌 4 土曜日日曜日貧人ノ景況 3」では主として貧しい人々が、土曜日の夜から日曜日の朝にかけて市場に集まる盛況が描かれている。中心となっているのは「ニウ、カット (New-cut) 街」である。この部分については、テキストはメイヒューの著作の一部から影響を受けたものであることが推定できる。

ある一節でメイヒューは、テムズ河の南に位置する最も重要な小売り用食品の市場であり、呼売商人の活動の中心であるランベスのニュー・カットの市場での土曜の夜の様子を生き生きと描いている。<sup>136</sup>

柳北はメイヒューの著作『ロンドンの労働とロンドンの貧民』の中の *The London Street Markets on a Saturday Night* と *The Sunday Morning Markets* の章から影響を受けて訳したものと考えられ、『花月新誌』上の翻訳作品「倫敦小誌」に以下のような描写がある。

此夜ニウ、カット街ハ宛モ白昼ノ如ク「ナプサ」油（淡黄色の石脳油ニテ街頭ノ露天ハ一般之ヲ用フ）ノ焰光一面ニ照耀シ其火光ノ下ニ於テ單輪車ニ賈品ヲ運載シ來リ

しかしメイヒューが『ロンドンの労働とロンドンの貧民』を著した頃には、警察の取締りによって急速に衰退したことが以下のように描かれている。

Since the above a description was written, the New Cut has lost much of its noisy and brilliant glory.<sup>137</sup>

柳北の翻訳でこれに該当する部分は「會テ ブリュス 氏ガ立ル所ノ法案ニ因リ此ノ市場ヲ禁制セントスルニ至レリ」と、描かれている。従って、柳北が翻訳したものは 1861 年から 1862 にかけてまとめられた『ロンドンの労働とロンドンの貧民』そのものではない。或は調査記録が主体のメイヒューのテキストを柳北が『花月新誌』の読者に分かりやすいように独自に改変したことも考えられる。柳北が翻訳して『花月新誌』に掲載した部分と類似している内容を扱った章が、メイヒューの『ロンドンの労働とロンドンの貧民』(1861-1862)<sup>138</sup> の中にあるので、それを以下に記す。

表Ⅳ-11 『花月新誌』上の翻訳作品と *London Labour and the London Poor* の関わり

『花月新誌』上での掲載	<i>London Labour and the London Poor</i> 対応箇所
倫敦小誌 5 倫敦小童 1 倫敦小誌 6 倫敦小童 2	<i>Of the Childen Street Sellers of London</i> (vol. I. p. 468.)
倫敦小誌 7 新聞報告	無し
倫敦小誌 8 盜賊 倫敦小誌 9 盜賊 2	<i>The Sneaks, or Common Thieves</i> (vol. IV. p. 277.)
倫敦小誌 10 ヘンズ盜品ヲ買フ者 倫敦小誌 11 ヘンズ盜品ヲ買フ者 2 倫敦小誌 12 ヘンズ盜品ヲ買フ者 3	<i>Receivers of Stolen Property</i> (vol. IV)

(*London Labour and the London Poor. volume I-IV. Cosimo Classics, Cosimo, 2009.* から筆者作成)

メイヒューの『ロンドンの労働とロンドンの貧民』(1861～1862)は4巻にわたる歴大なものであり、統計的資料もかなり掲載されている。柳北は歴大なテキストを『花月新誌』にそのまま掲載することは不可能と考え、社会の裏側に潜む問題を扱う部分に着目して、読者に理解されやすいように簡潔に改めたと考えることも可能である。近代国家である英国の優れた面ばかりではなく、裏側に貧しさが隠されていることを柳北は読者に投げかけたのである。

#### 4 「楊牙兒ノ奇獄」

「楊牙兒ノ奇獄」は柳北自身の翻訳ではなく、柳北の英語の師でもあった神田孝平が幕末に蘭語から訳したものであった。『花月新誌』に掲載するにあたって柳北は簡略化して15回にわたって連載した。「楊牙兒ノ奇獄」の写本『和蘭美政録』は、吉野作造(明治11(1878)年～昭和8(1933)年)によって大正10年(1921)に発見され、明白になった。「日本翻譯史概観」<sup>139</sup>の中で、木村毅は以下のように『和蘭美政録』のテキストについて述べている。

Christmijer Belangrijke uit de Geschiednis der Lijfstra Regsplegling. (死刑囚訴訟事件中最も興味ある物を集めたという意味)。神田孝平は『死刑彙案』と名づけている。彼の用いた原書は一八三〇年ユトレヒト発行。

『死刑彙案』の中から神田孝平が訳した二篇が「楊牙兒ノ奇獄(談)」(De Jonkel van Roderijke)と、「青騎兵并右家族共吟味一件」(De blaauwe Ruiters en Zijn Huisgezin)であった。神田は「楊牙兒ノ奇獄」を『和蘭美政録』と題して文久元(1861)年頃に着筆完成し、そのおもしろさに感動した柳北は写本を借りて将軍家茂にも見せていた。<sup>140</sup>

『花月新誌』に掲載に際して、柳北は冒頭で「和蘭美政録ハ神田孝平君ガ十餘年前ニ譯述サレシ奇書ニシテ」とその翻訳作品を評価しているが、掲載に際して簡略した理由について「原書ノマヽニテハ其文頗ル長クシテ新誌ニ收ムルニ不便ナレバ今僭妄ヲ顧ミズ之ヲ節約ス看官幸ニ諒セヨ」(『花月新誌』第22号 明治10年9月4日)と、述べている。

神田孝平の訳は幕末までの蘭語の翻訳の伝統に適ったものであって、法廷の陳述である会話文は直接話法で候文が用いられていた。柳北は『花月新誌』に掲載するにあたって会話を間接話法で表し、漢字片仮名混じりの書下し文に改めたのである。柳北の簡略された表現に不満であった神田は、後にこれを訂正して博文館から刊行した。

この作品の展開は、別の殺人事件に巻き込まれて殺害されてしまった学生楊牙兒（ヨンケル）が、殺害現場となる宿屋に到着した場面は殺害者の陳述として以下のように表現されている。

一同表口の方へ罷出申候 此時凡夕六時頃に有之候 右罷越男は即ちヨンケル、フォン、ロテリツキにて御座候（神田訳『和蘭美政録』<sup>141</sup>）

一同表ノ方へ走り出デ候此時は凡そ夕六時此ニテ右の門ヲ敲きシ人ハ即チ是レ楊牙ニテ候ヒキ（「楊牙兒ノ奇獄」『花月新誌』第32号掲載）

柳北は読者に分かりやすく、候文を取らない表現をしているが、柳北の簡略された表現に不満であった神田は、後にこれを訂正して博文館から刊行した。

『花月新誌』に掲載された「楊牙兒ノ奇獄」は、西欧の探偵小説のおもしろさを不特定多数の読者に提供したことでは、意義のあることであった。『花月新誌』の愛読者であった森鷗外も初めて西欧文学の一端に触れることができたのであった。<sup>142</sup>

## 5 『朝野新聞』上での翻訳作品

『朝野新聞』上に連載された翻訳作品には「女優馬利比越兒（マリー・ピエール）ノ審判」がある。これは明治13（1880）年8月12日から10回にわたって連載されたものである。この話のテキストについては不明であり、大島隆一は『柳北談叢』で以下のように述べている。

「女優馬利比越兒ノ審判」はなにから譯したものかわからないが、たぶん、佛蘭西の新聞に連載されたものを譯術したものであらう。<sup>143</sup>

柳北は雑録欄の冒頭で「頃日病牀偶マ佛國ノ女優情夫ヲ謀殺スルノ一奇話ヲ獲タリ」<sup>144</sup>述べ、さらにその掲載の意図については「此ノ話敢テ取ル可キ無キニ似タレモ亦以テ泰西法官ノ情ヲ酌ミ律ヲ用フルノ公正ナルヲ見ル可シ」と、雑録欄に記している。「女優馬利比越兒ノ審判」の内容は、人道主義に基づく判決への共感であった。

仏蘭西の一女優（馬利比越兒（マリー・ピエール））が名家の子息（ジャンチアン）<sup>145</sup>と恋愛し妊娠するが、ジャンチアンは墮胎を勧めて、責任をとろうとしなかった。そして出産した子はジャンチアンによって育児院に送られ、まもなく死亡する。その後ジャンチアンは別の女性と親しくなり、馬利比越兒（マリー・ピエール）は捨てられてしまう。今は亡き子に対して、馬利比越兒（マリー・ピエール）は以下のような思いを綴った記録を法廷で公開した。

妾ガ愛子ヨ汝ハ既ニ地下ニ在テ腐化セントスルモ汝ノ母ハ生キテ猶此世ニ在リ是慈母ノ名アル婦女ノ快樂ナラズ愛子ヨ妾ガ汝ノ許ニ往クハ近キニ在ルゾ往カバ決シテ相離レマキゾ「クリスマス」  
第四時記ス

我が子を死に追いやったジャンチアンへの怨念から、馬利比越兒（マリー・ピエール）は拳銃でジャ

ンチアンを襲撃するが、失敗して法廷で裁判を受ける。しかし裁判官は馬利比越兒（マリー・ピエール）の我が子への愛情に真実を見て、無罪を言い渡した。大いに面目をつぶされたジャンチアンは、外国へ旅立ってしまった。

この判決に共感した柳北は、病気がちであったがこれを翻訳して、読者に訴えたのであった。法律の真の役割とは何かを問うているのであった。最後に柳北は以下のように述べている。

其情ヲ酌量セバ自ラ此審判ノ公正ナル者有ルヲ知ル孰レカ泰西諸國ハ唯法律ニノミ拘泥スルト謂フヤ蓋シ法律ニ拘泥スル者ハ深く法律ノ蘊奥ヲ知ラザルノ徒ナリ余大ニ感ズル所有テ此審判ヲ譯述シ以テ江湖ニ教道ス

1880年当時の仏国は第三共和制下で、フランス革命原理の一定の制度的定着がもたらされ始めた時期でもあった。我が子に全く愛情をもたないジャンチアンの方がむしろ罰せられるべきであり、我が子への愛情から殺人を決意した馬利比越兒（マリー・ピエール）には犯罪者として刑を科すべきではないという判決を柳北は評価したのであった。

## 6 翻訳家としての真摯な活動

柳北は海外体験から、文学以外の思想や社会問題への関心を深めた。ジャーナリストとしての道を歩み、読者の啓蒙の必要性を痛感し、海外の作品の翻訳を行い、新聞や雑誌に掲載した。「小仙窟」では英国の哲学者培根（ベーコン）の思想の一端を紹介し、また「倫敦小誌」では当時の英国の繁栄の裏側に潜む貧困の問題を読者に提示した。しかし西欧文学の面白さを提供するために「楊牙兒ノ奇獄」を簡略して掲載した。さらに「女優馬利比越兒ノ審判」では、病軀をおして翻訳し、近代国家の裁判や法のあるべき姿にも言及した。

柳北はジャーナリストとしても、また翻訳家としても、読者に対しては最善を尽くして仕事を完結させたのであった。

## 第4節 文化の進展への努力

### 1 国内の旅での文明批評

#### (1) 小田原周辺で

ジャーナリストとして活躍しながら、柳北は国内での遊記を残している。明治17（1884）年に刊行された『熱海文藪』は散文の記述の中に柳北の漢詩が盛り込まれ、「航西日乗」と同様な形式をとっている。『熱海文藪』に収録されている「鴉のゆあみ」（明治14年1月25日『朝野新聞』）<sup>146</sup>には、幕藩体制の構成員であった譜代の家臣、旧小田原藩士たちの生活ぶりについて、次のように述べられている。

小田原ノ舊藩士ハ多ク故土ヲ離レズ其ノ舊宅地ニ留マリ一部落ヲ成スニ似タリ興丁漁史ニ語ル舊藩ノ旦那方ハ皆内福ナリト其レ或ハ然ラン能ク勉メ節シ其ノ生計ヲ立テ、以テ自ラ守ルハ寔ニ感ズ可キナリ石橋山ヲ過グ坂路嶮峻往日異ナラズ

小田原藩は、最終的には維新政府側に恭順し、東征軍の江戸開城に助力したが、<sup>147</sup>柳北はそれには触れず、旧藩士が団結して堅実な生活を送っていることに感動している。さらに柳北は石橋山で源頼朝が大敗の中を辛くも生き延びたことを偲び、次の絶句を詠んでいる。

(AT1032)

覇圖誰復役風雲。 覇圖（ハト）誰カ復（マタ）風雲ヲ役セン。  
壯志灰如老賣文。 壯志灰ノ如ク老イテ文ヲ賣ル。  
無頼石梁山下路。 無頼ナリ石梁山下ノ路。  
徒將詩賦吊源君。 徒（イタズラ）ニ詩賦ヲ將（モツ）テ源君ヲ吊（トブラ）フ。

この詩でまず柳北は、武力によって天下統一を図るための戦いをまた誰かが行うのであろうか（それは必要ない）と述べている。次に幕府の中核にいた自分も戦いを行うことはもはやなく、勇猛な志は灰のようになり今は年老いて文章を売ることが生業していると述べている。そして石梁山の下の路は陰しく、そこを歩むことは無法といっているが、今は故人の源頼朝公を偲んで詩を賦し、その菩提を弔いたいと結んでいる。

源平の争乱を題材に清和源氏の棟梁であった頼朝を追懐した絶句である。起句の「覇圖」は、唐の陳子昂（661-700）の五言古詩「薊丘覽古」の中で用いられている。陳子昂は権力者の悪意によって獄中で憤死した人物であった。陳子昂の古風な作風は後に李白に引きつがれていったとされている。「薊丘覽古」では燕の昭王への追懐が述べられており、柳北は頼朝を偲ぶために「薊丘覽古」の世界を踏まえたと考えられる。承句の「壯志灰如老賣文」には、『花月新誌』を発行していた柳北自身の姿が描かれている。転句の「無頼石梁山下路」では、維新政府に抵抗することも危険が伴い、抵抗によって日本の国が欧米の水準に近づくことが妨げられるという感慨が込められている。そして結句の「源君ヲ吊フ」の部分から、徳川氏は清和源氏を先祖としているので、婉曲に徳川氏を偲んでいる。

徳川家の盛衰を偲びながら、武家政権の終焉後も団結して生きる旧小田原藩士たちを柳北は記している。旧小田原藩士が市井の巷に埋もれずにそれなりの生活をしている姿に、旧武士階級の生き方の一つの典型を見て、評価したものと考えられる。

## （２）旧幕臣の意識を超えて

柳北は文明批評の中に権力者側への批判を盛り込んでいる。既に故人となった西郷隆盛（文政 10（1827）年～明治 10（1877）年）についての「猪鹿ノ鮮肉有ラバ沽ハントスルニ土人云フ西郷様御出デノ度ニ日々近傍ノ山ニ遊獵ナサレ今ハ猪モ鹿モ至テ乏シト漁史亦失望ス」という記述もある。西郷は朱子学等を修めてはいたが、大規模な狩猟をして食材である猪や鹿を減少させたのである。柳北は西郷の横暴な一面を批判している。実は西南戦争の開始時から柳北は西郷には批判的であった。明治 10（1877）年 5 月 2 日の朝野新聞の社説では、西郷を「頑固士族」と非難し、「今日より以往、全国の頑固士族宜しく旧夢を醒まし、陋習を洗ひ、真の良民と化して、其の権利を全うし、以て愛国の公道を悟る可し。」<sup>148</sup>と、今後の士族のあり方を述べている。柳北の西郷への批判は、西郷が日本の国を時代の歩みと逆行させることを目論んだ人物であったことがその要因と考えられる。

しかしながら維新政府側でも文学に志しを持つ人々には、柳北は心を開いて交流をもった。明治 11（1878）年に刊行された丹羽純一郎訳『花柳春話』<sup>149</sup>にも「題言」を寄せていた。『花柳春話』の原作は英国の 19 世紀の作家・政治家であったブルワー＝リットン（Edward Bulwer-Lytton）の著作である。

『熱海文藪』には収録されていない、柳北の最晩年の作品に「洗愁日乗」がある。その中で柳北は桂園派の歌人松浦辰男（天保 14（1843）年-明治 42（1909）年）のことを記している。辰男は有栖川宮家に仕えていて、主家と共に東京に出てきた人物であったが、「嘘・偽りのない、邪気のない、わが誠の心をわが言葉で調べをなし詠いだすこと」<sup>150</sup>を重視した歌人であった。柳北は和歌にも通じていたので、

二人は歌の贈答を行った。

柳北が「航西日乗」で記した伊国の弗稜蘭（フィレンツェ）での懐旧の念や、「航西雑詩」で詠んだ米国での英国の旧植民地政策の横暴な面への批判の姿勢は、帰国後の国内游記『熱海文藪』等の作品にまで受け継がれていったのである。また文学の道を歩むような共通の目的をもった人物とは、維新政府側の人物であっても深い交流をもった点は、柳北の幅広い人間性を表している。

## 2 幅広い活動

『花月新誌』を中心に、西欧文芸の翻訳作品と幕末の伝統文芸の連載時期等の関連性から、明治 10（1877）年から柳北が死去する 17（1884）年の 7 年間を 4 つに分け、柳北の日本の国の文化進展のための活動の内容を記す。

(1) 第一期 創刊号から明治 10（1877）年 5 月の「述齋偶筆ぬきかき」の連載を経て、第 45 号（11（1878）年 5 月 25 日）の紀尾井坂の変や『朝野新聞』発行停止頃迄。

明治 10（1877）年の 1 月 4 日に柳北の『花月新誌』が創刊されたが、2 月 15 日には西郷隆盛が兵を率いて鹿児島を出発して西南の役が起こった。直ちに柳北は従軍記者と称して京都へ赴いているが、5 月には「述齋偶筆ぬきかき」の連載が始まっている。柳北は 5 月 2 日の『朝野新聞』の掲載記事によると、西郷等の不平士族の乱には日本の国の進路を妨げるとして批判的であった。また『花月新誌』第 9 号（5 月 10 日）には 3 月 4 日に薩軍の篠原國幹、桐野利秋、西郷隆盛について一人の読者からの投稿された短歌を掲載している。

封建の夢のなこり猶さめやらて篠原國幹かあらぬ軍して戦死したるをききてよめる  
美濃 蘆の屋利和 吉田

さめやらぬねむりのすえやあかつきの露とハ消し野路の篠原

桐野利秋を

あはれなり桐の一葉の秋をたにまたて散るらん命と思へハ

西郷隆盛を

波の上に消るはかりそ世を知らず身を知らぬ火ハもえにもゆとも

乱の首謀者たちに対して時勢を知らないと戯画化し批判しつつも、時代の進展から外れた人々への悲しみも秘められている。<sup>151</sup>

このような状況の中で、柳北は幕末の大学頭林衡（号：述齋）（明和 5（1768）年-天保 12（1841）年）の「述齋偶筆」の一部分を不定期に連載した。述齋は大学頭という要職にありながらも文芸への造詣が深く、文化 11（1814）年 11 月には『詠源氏物語和歌』中に「鈴虫」の巻で漢詩を詠んでいる。漢詩を詠んだのは述齋だけで、他の参加者は短歌であった。<sup>152</sup>

述齋はまた江戸時代では庶民の文芸として捉えられていた俳諧にも関心を示し、芭蕉の作品を評価するなど一切の偏見を捨てて、文芸を真摯に究めようという姿勢が見られたのであった。「述齋偶筆ぬきかき（七則）1」の次には、「五洲名勝志（亜細亜）波斯」が掲載されていて、読者に海外にも目を向けさせようとする柳北の意向が込められていると考えられる。第 20 号（10 年 8 月 16 日）からは翻訳の「小仙屈」が掲載されて、培根（ベーコン）の思想を読者に紹介している。さらに西南の役で薩軍が敗走を始めた 10 年の 9 月には、第 22 号（9 月 4 日）に西欧文芸の翻訳である「楊牙兒ノ奇獄」の第一回目の

連載が開始された。また「楊牙兒ノ奇獄」が15回で終了する頃、長谷川安卿の「變化歌合」が第35号（11年1月27日）から五回に渡って連載されている。

明治10（1877）年9月末の西南戦争の終結後の新聞の読者について、蛭原八郎は「民心の動揺は一段落を遂げ、新聞読者は次第に慰安を求める傾向が濃厚」<sup>153</sup>になっていったと述べている。新しい動きとしては、小新聞には続物、新聞小説が出現したことで、代表的なものが『かなよみ』（仮名讀新聞）に明治10年12月10日から11年1月10日に連載された「鳥追ひお松の話」であった。新聞小説の発生について、蛭原は以下のように述べている。

私の考へでは、當時行はれてゐた文藝雑誌「東京新誌」、「花月新誌」、「團々珍聞」等が小説戯作を毎號分載して讀者吸引策としてゐたのを、小新聞記者が模倣して意識的に新聞紙上の雜報に試みたのであらうと思ふ。

小新聞に影響を与えたことは、柳北の『花月新誌』での活動の成果の一つであった。『花月新誌』は翻訳文学の掲載もあり、読者が開拓されたが、『朝野新聞』の方は明治11（1878）年5月の紀尾井坂事件での大久保利通暗殺事件から斬奸状の掲載から政府の弾圧を受けることとなった。その後、政府側から停止の理由について柳北は情報を得たが、それは以下のように伝えられている。

一、記事の後尾に、「旧幕の昔井伊大老の桜田の事などを思い出でて哀れに覚え」云々との句があって、大久保を井伊に比較したのは危険である。

二、暗殺者島田一郎以下が斬奸状を郵送したのは同紙が激論を主張し、兇賊の意思に投合するからで、斬奸状の届出での遅れた上、処々に指痕があるのは、世間に示すため、ひそかに謄写したのであらうとの嫌疑を受けたこと。<sup>154</sup>

斬奸状の発表が政府の嫌疑を受けたことは、柳北と末広鉄腸にとって無法な処分であった。柳北は既に刊行していた詩文雑誌『花月新誌』（第45号 明治11年5月25日発行）に「弔朝野賦」という文章を掲載し、弾圧への憤りを表している。明治10（1877）年から11年頃が朝野新聞の最盛期で一日平均、一万五千から八千の発行があったが、停止後は読者の減少から衰退し、「明治十二年には一万そこそことなったというのと半減したというのがある」<sup>155</sup>とされている。朝野新聞は明治12（1879）年頃から衰退していったとされているが、柳北の雜録欄は読者に歓迎された。それについては、野崎左文が「成島柳北仙史の面影」の中で以下のように述べている。

偶ま雜録欄内で明治政府に反抗する場合でも、文を舞わしてさかさまに賢明なる政府などとおだて上げて窃かにその急所を衝くといふ風であったから、其の筋もつかまへ処がなかった。<sup>156</sup>

また山本武利は、雜録欄は落首や落書によって屈折した民衆のコミュニケーションの様式の系譜に連なるもので、当時の『朝野新聞』の読者のニーズに合致していた理由を以下のように述べている。

当時、落書類を愛読するユーモアと批判精神を持ち、漢文学的素養をもつ階層が知識人階層を中心にかなり多かった。ことに、風流を解しつつ、権力批判の論理や心情をいだく通人的伝統型知識人読者が東京などに残っていた。<sup>157</sup>

柳北も言論を弾圧する維新政府への批判を持ち合わせており、読者である伝統型知識人への共感から、政府への批判を新聞紙上に掲げることで『朝野新聞』を続行させたのであった。

(2) 第二期 第46号(明治11(1878)年6月)から第81号(12年9月11日)。米国のグラント將軍の来日を経て9月の『花月新誌』での西欧文芸の紹介終了。

明治11年5月には『朝野新聞』の発行停止があったが、8月には柳北は渋沢栄一(天保11(1840)年-昭和6(1931)年)<sup>158</sup>が会頭を務めていた東京商法会議所議員となり、議事規則調査委員に当選して殖産興業での活動の場を得ることができた。<sup>159</sup>

『花月新誌』においては、柳北は国内游记の「澡泉紀遊」を『花月新誌』第54号(明治11年9月22日)に連載し始めた。「澡泉紀遊」は後に熱海方面の他の游记と共に『熱海文藪』として刊行される。「述齋偶筆」の連載は完結していなかったが、第65号(12年の2月5日)からは「紫史吟評」の連載が開始された。

第61号(12年12月18日)には、松平定信の遺した文書(原本大久保氏旧蔵)が掲載されている。内容は定信が孔子の弟子、子貢の「温良恭儉讓」という五字の訓について言及したものであるが、最後は以下の記述で締め括られている。

五字の訓をほどこせどもこれかやうは唯だ字義の上の論にてまことはこの形容の意は言外微妙のさまなりと思ふただ此の如くにて聖人の形容をつくせりと思ひ給ひそ

聖人である孔子の形容は、この字義どおりに受け取るのではなく、言外からも学ぶ必要があると定信は述べているのである。第65号から開始された「紫史吟評」の「桐壺」でも冒頭の部分で、良讓は以下のように述べている。

善讀者先領此意有得於文字之外則五十四回之中。百千萬般之事。無不往而爲龜鑑矣。無不往而爲座右之銘矣。何止立意之巧。詞章之艶而已也哉。

(善く讀む者先づ此の意を領し、文字の外に得る有らば、則ち五十四回の中、百千萬般の事。往くとして龜鑑と爲らざるは無く。往くとして座右の銘と爲らざるは無し。何ぞ止(た)だ立意の巧と。詞章の艶とのみならんや。)

(大意：本當に源氏を讀む者が、單に文字の表面に捉はれず、先づ個中の消息を了解して讀破するならば、五十四帖の中に現れて來る千種萬葉の事柄は、一として處世の龜鑑で無いものではなく、一として座右の銘たらざるものはない。唯だ構想が巧妙であるとか、文章が艶麗であるとかいふ、そんな表面的な末梢的な處に、源氏の価値はなく、源氏の本色は無い。もつともつと深い文字文章の底に、眞の源氏精神が流れてゐることを知つて味讀せねばならぬ。)<sup>160</sup>

明治11(1878)年8月には東京商法会議所の仕事に携わり、さらに企業家集団である偕楽会の会員ともなった柳北ではあったが、伝統文芸の発掘にも目を向け、文章の奥底を読み取る研究への姿勢が旧幕時代からあったことを、「花月新誌」上で読者に訴えた。第70号(12年4月24日)からは、英国の貧しい人々の実態が描かれた翻訳「倫敦小誌」が掲載された。柳北は文明国の裏側に潜む貧しさに目をむ



け、読者にもその実態を報道したのであった。柳北は翻訳「倫敦小誌」と漢訳『源氏物語』である「紫史吟評」を『花月新誌』第81号（12年9月11日）で終了させている。

東京商法会議所の一員としての柳北は、米国の大統領でもあったグラント将軍<sup>161</sup>が明治12（1879）年7月3日に来日した際に、商法会議所から推されて接待委員となり歓迎会での接待を担当した。さらに7月17日からはグラント一行の日光東照宮にも柳北は同行した。柳北の東照宮一帯保全を訴えた「晃山廟の保存」という記事は『朝野新聞』（7月22日）に掲載された。柳北の主張は、外国の使節案内のためにも文化財である東照宮やその周辺地域の保存をすべきというものであって、西欧諸国では文化遺産の保護を政府が率先している状況を述べている。柳北は外遊中の伊国ではポンペイの古代遺跡等を見聞して、文化遺産の保護の重要性を痛感していた。また米国を訪れ、大陸横断鉄道で過酷な自然と対峙しながら、苦難な状況での旅を続ける中で広くその社会を見聞していた。グラント将軍の接待委員となり、さらに「晃山廟の保存」を新聞紙上で訴えたことは柳北の海外体験、特に伊国と米国での見聞に起因している。柳北にとって、「航西日乗」や「航西雑詩」で記された体験が結実したのであった。グラント将軍に随行していたジョン・ラッセル・ヤング（John Russell Young）は、日光での記述の中で以下のように述べている。

有名ではあるが、保守的な日本のある識者は次のように述べている。「私は新しい思想に危惧の念を抱いている。若い連中が討論会に駆けつけるのは好ましい徴候とはいえない。あの連中は民主主義や懷疑論に大分かぶれているらしい。日本の宗教は大した数ではなかったが、今ではだれもかれもが無神論に走っている。（中略）日本人の精神は西洋思想の長所を吸収し、悪いところをうけつがぬほどたくましくないのである。」<sup>162</sup>

ヤングは「有名ではあるが、保守的な日本のある識者」とだけ記し、氏名は公表していない。柳北は西欧の思想の優れた面を吸収することが大切で、一方的な模倣は避けるべきであるという考えをもっていた。従って、ヤングの記した「有名ではあるが、保守的な日本のある識者」人物と柳北には日本人の精神についての考え方に於いて共通の部分があると考えられる。

**（3）第三期 第82号（明治12（1879）年9月28日）から第117号（明治14（1881）年10月28日）の「航薇日記」の連載終了まで。**

第82号からは幕臣の伝統文学の面では「述齋偶筆」の続きと「みるめのさち」を『花月新誌』に連載し、自身の国内游记である「航薇日記」の連載を始めている。「みるめのさち」は柳北の祖父司直の游记で、その紹介として柳北は「其比のさま見ん爲めにと古めかしけれど茲（ここ）にうつし侍る」と、紀行文としては古い体裁であるが、祖父には社会を見聞する姿勢があったのでここに掲載すると述べているのである。柳北はまた成島勝雄、成島司直に倣い旅日記である「航薇日記」を著し、祖父司直の作品と並行させて掲載し、成島家の伝統の維持に努めたと考えられる。

柳北は既に明治12（1879）年2月には、『英国国会沿革誌』（趙舞尔／著）を高橋基一<sup>163</sup>と共に『朝野新聞』から刊行している。明治13（1880）年3月には愛国社の第四回大会で国会期成同盟が結成されるなど、自由民権運動の盛り上がりの時期であった。柳北は『花月新誌』には翻訳文学を掲載していないが、『朝野新聞』には仏国での実際に起こった事件である「女優馬利比越兒ノ審判」を明治13（1880）年8月12日から10回に渡って掲載している。柳北は読者に対して社会や国家への関心を方向付けよう

としたと考えられる。『花月新誌』上での国内游記「航薇日記」の連載は明治 14 (1881) 年の 10 月末で終了している。

『朝野新聞』や『花月新誌』の他に活動の場を拡大しようとした柳北は、明治 14 (1881) 年 1 月からは讀賣新聞社の「讀賣雜譚」に寄稿を始めた。同年 5 月 28 日には「文章小論」を著し、言文非一致論を説いた。福地桜痴の言文一致を訴えた「文章論」(『東京日日新聞』5 月 23・24 日掲載) に対しての批判であったが、福地の考察を全て否定したものではなく、文章の進化として言語体の文章の出現は当然のこととしながら、柳北は「言語と文章は同一には参らねど、甲に沿革有て乙に沿革無き事はあらず。」<sup>164</sup>と述べている。柳北は言語も文章も共に進歩するもので、一方が進歩して他方が進歩しないということはないという点を強調したのであった。

「航薇日記」の連載終了後の明治 14 年 11 月 4 日の「讀賣雜譚」の「子安先生の間に奉答す」中に、柳北は祖先への敬意を以下のように記している。

迂生が今日江湖に虚名を伝ふるに至るは、皆是れ父祖の余慶に頼れり。迂生何の才能有らん。先生、幸ひに迂生の為に一日の余白を与へ給へ。<sup>165</sup>

(大意：実力以上に自分が東京地方で名を知られるようになったのは、これは全て自分の先祖のお蔭である。自分は何の才能もないが、自分よりも目上の方々よ、自分のために一日分の余白をお与え下さえば幸いである。)

柳北は海外の政治や社会を紹介しながら、一方では父祖の文芸である「紫史吟評」や「みるめのさち」を『花月新誌』に掲載し、幕臣による幕末の文芸の一端を読者に知らしめたのであった。

**(4) 第四期 第 118 号 (明治 14 (1881) 年 11 月 30 日) の「航西日乗」の連載開始から第 153 号 (明治 17 (1884) 年 8 月 8 日) での終了まで。**

「航西日乗」は明治 5 年 (1872) の陰暦 9 月 13 日、柳北が石川舜臺や松本白華等と共に真宗大谷派の大谷光瑩(現如)に随行して欧米へ旅立った時の海外游記である。柳北は自身の海外体験を広く読者に伝え、また成島勝雄の「富士日記」や司直の「みるめのさち」等に連なる成島家の伝統文芸としての游記を、海外を舞台として著したのである。従って「航西日乗」は海外の文化を読者に伝えるという日本の文化の向上の促進という一面をもち、また幕府の儒官であった父祖が著わした国内游記を柳北自身は海外游記を著すことで、維新後も成島家の文芸を継承させて発展させたいという面をも併せ持っていた。

「航西日乗」が連載され始めた頃、明治 15 (1882) 年 3 月には立憲改進黨が結党され、柳北は結党と同時に入党した。立憲君主制の下での議会政治の展開を柳北は希求していたからであり、15 年 3 月 30 日の「読売雜譚」に柳北は「保存の流行」という文章を掲載している。その中で、以下のように今後の日本の進路についての見解を述べている。

嗚呼、古蹟古物を保存するは、唯之を保守して可なりと雖も、我邦を永遠に保存せんとするの道は、唯改良の一途に在り。<sup>166</sup>(大意：古蹟古物を保存するのは、ただこれをまもればよいが、日本の国を永遠に保つのはこの国を改良していこうとする一途な心がけが大切である。)

柳北は急激な国家社会の変革ではなく、一步一步進展に向けて漸進することの必要性を述べている。立憲改進黨への入党もそのような柳北の意図に適った政党であったからと考えられる。

### 3 明治時代における柳北への批判と評価

柳北の文芸作品に対して、明治時代に活動した文学者たちはどのような感想をもっていたのか、それを知ることは柳北の活動の位置づけを解明することに繋がると考えられるので、以下に記す。

#### (1) 北村透谷による柳北への批判

北村透谷（明治元（1868）年-明治27（1894）年）は旧小田原藩の士族の家庭の出身で、「日本文學史骨」の中で、柳北については「高品なる戯文家」と記し、さらに以下のように述べている。

柳北翁に至つては純乎たる混沌時代の産物にして、天下の道義を嘲弄し、世道人を揶揄して、うろたへたる風流に身をもちくづしたるものなり。<sup>167</sup>

透谷は柳北の表現形態の中の反近代性にのみ注目したのであるが、作品の根底には実利に傾く時代への批判が込められていることまで読解することはなかった。前田愛は『成島柳北』を著した同時期に、柳北も含む近世から近代の作家を論じた『幕末・維新期の文学』<sup>168</sup>（昭和51年）を著し、「近世から近代へ」の中では以下のように述べている。

『柳橋新誌』のリアリティは政治的行動を断念せしめられた柳北にとって、政治的行動権力への抵抗が文学的表現を通じてのみ可能であったという事情にもとづいている。さらにまた「文明開化」のメダルの裏を諷刺的に形象化してみせた『柳橋新誌』は、福沢らによって領導された実学の世界にたいして、文学の領域を確保したのである。このような柳北の文学的姿勢は透谷の「詩文人は、其原素に於ては兵馬の人と異なるなきなり。之を詩人に形り、之を兵士に形るものは時代のみ」ということばの持つ真の意味を解き明かすものとする。<sup>169</sup>

前田は北村透谷の「詩文人は、其原素に於ては兵馬の人と異なるなきなり。之を詩人に形り、之を兵士に形るものは時代のみ」（「日本文學史骨」）<sup>170</sup>を引用して、柳北の文芸面での活動は時代の過渡期を背景としていて武力闘争と等しいくらいの激しいものであったと語っている。前田は透谷の柳北への批評を一応踏まえていて、透谷は福沢諭吉（天保5（1834）年-明治34（1901）年）については「日本文學史骨」の中で、以下のように述べている。

福澤翁には吾人「純然たる時代の驕兒」なる名稱を呈するを憚らず。彼は舊世界に生まれながら徹頭徹尾世界を抛げたる人なり。<sup>171</sup>

透谷は柳北の漢詩文を土台にした文芸の表現固有の面を反近代と批判したのであって、作品の底に秘められた軽薄な文明開化への批判には気づかなかった。前田は柳北の作品中に軽薄な文明開化への批判を読み取り、福沢の文化の進展への志向を文芸の面で補うものと位置づけたのである。このような前田の指摘は、主として『柳橋新誌』と「航西日乗」を中心とし、特に「航西日乗」では仏国の巴里に焦点が当てられていた。

## （２）山路愛山による柳北への評価

柳北の文芸作品は『柳橋新誌』と「航西日乗」ではなかった。また「航西日乗」では伊国での体験も柳北にとっては貴重であり、米国での体験は「航西雑詩」の漢詩に詠まれている。このように柳北の海外游记を中心とした文芸面での活動は大変広範なものであった。さらに『花月新誌』での幕末の文芸の紹介また西欧文学の翻訳等からは、柳北は文芸による日本社会の漸進的な進展を模索していたと考えられる。

北村透谷と同時代人であった山路愛山（元治元（1864）年-大正6（1917）年）は、旧幕臣の家庭の出身で明治大正時代に言論人として活動した。愛山の著作「明治文学史」（「国民新聞」明治26（1893）年3月1日～5月7日）の中で柳北について以下のように記している。

すでにして奔る者は疲れたり、回顧の時代は来たり。成島柳北・栗本鋤雲の諸先生が新聞記者として多くの読者を喜ばすにいたりたるはなぬゆえぞ。反故の中に埋もるべき運命を有せりと思わしめたる漢詩文がふたたび重宝がられ、『朝野新聞』の雑録および『花月新誌』の一瀉千里の潮頭が、たちまち月の引力によって旧の岸に立ち廻らんとせしにあらずや。<sup>172</sup>

愛山は急激な欧化政策に人々がついていけない状況下で、柳北や鋤雲の漢詩文の果たした役割に意義があることを把握していた。愛山はさらに「あまりに急走したる結果が大なる休息を求むるにいたりたるゆえにあらずや。」と述べて、柳北の漢詩文を評価したのであった。

## 第5節 帰国後の活動の特徴

### 1 海外体験のもたらしたもの

柳北が父祖や父祖周辺の人物の創作による幕末の伝統文芸を重視するようになったのは、どのような経緯からであったのか、それについての海外体験との関わりは繋がりがあるかを考察することを試みた。

### （１）帰国後の柳北の内面の変化

その関わりを探究するために、帰国した後の柳北の人間観や、文芸や遺跡等への感慨は、旅行前と比べてどのような点に変容が見られるか、柳北の作品を手掛かりに以下の表を作成した。

表IV-12 海外体験による柳北の変容

比較事項	旅行前及び旅行中	帰 国 後
① 人間の情感 (戯曲・散文小説)	柳北の仏国の観劇で印象が深かったものに、男女の恋愛を描いた「椿姫」と肉親の愛憎を描いた「祖母」があった。語学に通じていた柳北は仏国の人々と同様に深い共感をもった。	丹羽純一郎訳『花柳春話』の題言中に、「余嘗テ航遊一年、親シク看破シ來ルニ、彼我ノ情相契ス。毫モ差異無キナリ」と記した。
② 社会道徳 (姦通)	男女間のことを例にとると、横浜で欧米人から男女同権や東洋人の一夫多妻への批判を聞いたことがあった。しかし外遊中に、欧米では男女共に婚外の私通が多いことを知った。（「昔かたり」）	「節婦阿多譽之傳」（明治7年）（『柳北全集』）の中で柳北は女性の貞操観の乱れを批判しており、男女間のモラルについては外遊前と変化はみられない。

③風流（伝統文学の美意識）	日本では明治初期の正月に友人や芸妓と雪の中に美酒を携え、舟に乗ったこと。海外では共感できた人々と多くを語りあった後に雪の中を宿に帰ったがセイヌ川の辺りのガス燈に照らされた情景に風情があったと述べている。（「面白カラズノ雪」）	「閑忙小言」（『花月新誌』第69号 明治12年4月10日）の中で、「縦令風雅ノ道ナリトモ人ニ迫ラルハハ好マシカラズ」と述べ、伝統的美意識をもたせようと人に強いることを批判し、「風流の主義」（『讀賣雜譚』明治15年6月15日）でも同様な意見を述べる。幕末に幕政批判から蟄居閉門された柳北は、外遊体験から洋の東西を知り、さらに独自の風流の世界を深化させたのであった。
④忠誠意識	少年期の漢詩「二蘇行」中で、頼朝側近の忠誠心を称えた。頼朝を徳川将軍家に擬えている。伊国弗稜蘭（フィレンツェ）では、住民が以前の君主を偲ぶ様子を記している。しかしそれは過去の王朝への追慕であった。	徳川家を偲ぶ気持ちはもっていて、「鴉のゆあみ」（『熱海文藪』）中で、石橋山で徳川家を偲んだ漢詩を詠んだ。統一された近代国家が必要であることを伊国や米国での体験で学び、忠誠意識を幕府（将軍）から日本の国（天皇）へ徐々に変容させた。
⑤帰属意識	幕臣としての江戸中心から、日本の地方都市へ広がる（「航薇日記」）。外遊で維新政府側との交流から日本全体への帰属意識が芽生える。伊国の首都ローマでは統一国家の元首である国王への好感を記している。（「航西日乗」）	徳川家への帰属意識を統一国家レベルの帰属意識に変容させた（『朝野新聞』明治7年11月）。さらに福沢諭吉の『学問のすゝめ』七編への共感と支援を行った。
⑥古蹟・古物の尊重	外遊以前から古銭を蒐集していた柳北は、明治5年11月20日にパリで独国の貨幣を入手し、6年2月15日には木戸孝允を訪ねた際に古銭を持参した。（『航西日乗』）	古蹟や古物の保存が叫ばれ、それが流行しているのはよいが、国の進路についてはただ改良の一途である。（「保存の流行」『讀賣雜譚』）

（①成島柳北. 柳北全集. 東京, 博文館, 1897. ②成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. 明治文学全集4. 筑摩書房, 1969. ③乾照夫. 読売雑譚集. ペリカン社, 2000. ④柳北詩文集. 漢詩文集. 新日本古典文学大系明治編 2. 岩波書店, 2004 からの柳北の著作から筆者作成。）

## （2）欧米人への共感と批判

帰国後に柳北の人間観や、文芸や遺跡等への感慨は、旅行前と比べてどのような点に変容したのか、また変容しない部分もあったかを表IV-12の項目に従って以下に記す。

### ①人間の情感（戯曲・散文小説）

欧米の最初の上陸地である仏国では、柳北は書店にも行ったが夜間は劇場に通うことが度々であった。その中で仏国の人々と感動を分かち合えたものが、「椿姫」と「祖母」であった。小説「椿姫」（アレクサンドル・デュマ・フィス原作1848年）は、1852年に原作者により戯曲化され、柳北は明治6（1873）年2月20日にジムナーズ座で鑑賞した。

危篤ノ際ニ至リ情郎ガ父ノ許シヲ得テカメリアノ家ニ来タル 病者之ヲ見テ喜ビ極ツテ絶スルノ事ヲ演ズ 日来極メテ看客ノ喝采ヲ得タルモノト云フ

ここでは娼婦と良家の青年の悲恋に多くの観客が感動したことを、柳北は記している。その後 3 月 9 日にオデオン座で「祖母」（アドルフ・デヌリとシャルル・エドモン共作 1863 年初演）を柳北は鑑賞した。その様子は以下のように記されている。

毒婦其ノ繼子ヲ鳩殺セントスルヲ知り其妹ナル実子毒ヲ奪フテ飲ミ代リ死スルノ事ヲ演ス 人ヲシテ惨然タラシメタリ

実際には毒婦は異母姉妹の姉の方の母方の祖母（老女）であり、異母妹が祖母に毒殺されようとした気配を感じた姉が代わりに毒を飲み、老女も罪を告白して死ぬという結末であった。<sup>173</sup>

「人ヲシテ惨然タラシメタリ」という部分では、国籍の枠を超えて観客の全てが心を抉られた様相が想像できる。仏国での観劇を通じて柳北は欧米人の情感も日本人と差が無いことを知り、明治 11 (1878) 年に刊行された丹羽純一郎訳の『花柳春話』の題言に「毫モ差異無キナリ」と記したのであった。柳北は「花柳春話題言」を『花月新誌』（第 43 号 明治 11 年 5 月 4 日）にも掲載して、より多くの読者に人間の情感に東西の差がないことを訴えた。

## ②社会道德（姦通）

「昔かたり」（『花月新誌』第 41 号 明治 11 年 4 月 9 日）の中で、柳北は支那人を表す朴念仁氏と泰西人を表すウスッペラ氏という架空の人物を登場させ論争させている。時代は柳北が横浜にいた時とされているので、「単純に柳北の年譜に当てはめると、横浜で『兵馬ノ職』についていた慶応二年から翌年にあたる」<sup>174</sup>と解釈されている。柳北はこの頃から男女同権や東洋人の一夫多妻への批判を聞いたことがあった。しかし外遊中に、欧米では男女共に姦通が多いことを以下のように記している。

何トナレバ西人往々男女同権ノ説ヲ以テ東洋人ヲ嘲レドモ、歐洲諸國到ル處不品行ノ人多ク、男女各々私夫私婦ノ多キ、我ガ邦人ヨリモ甚シトス、是レ余ガ實際ヲ觀テ驚嘆セシ所ナリ

柳北は外遊中に西洋の特に婦人の私通を見聞していたのであった。夫婦間のモラルという社会のモラルの一例をあげて、柳北は東西の教法学術制度律令のどちらを採用するかは、我ら日本人の自由であると結論づけている。柳北は西欧文化の受容からの日本文化の進展を望んでいたが、中国文学や中国の人々を後進的と結論づけていたわけではなかった。東西それぞれに良い点悪い点もあることを読者に訴えかけたのであった。「節婦阿多譽之傳」（明治 7 (1863) 年）（『柳北全集』（明治 23 (1890) 年）に収録）の中で柳北は女性の貞操観の乱れを批判しており、男女間のモラルについては外遊前と変化はみられないと考えられる。

## ③伝統文学の美意識（雪）

「面白カラスノ雪」（『朝野新聞』明治 16 年 3 月 3 日）の中で、特に面白い雪は一生に二回だけであったと回想し、さらに安易な「風流」を批判している。

外遊前に明治初年正月に友人や芸妓と雪の中に美酒を携え、舟に乗ったこと。そこは才子佳人の出会いのあった雪景色を背景としていた。

正月ノ中旬雪降りシ日、亡友安田運甕桂川月池ノ兩人ヲ伴ヒ、柳橋ヨリ舟ニ乗リ名妓三名美酒一樽ヲ携ヘテ柳島ニ遊ビタリシ、此ノ遊ビハ兩才子佳人有テ故サラニ情景ヲ添エタルモノカ

ここで柳北は単に雪景色そのものだけでなく、才子佳人たちとの心の交流の場があったことを描いている。明治ノ初年という表現であるが、慶応4（1868）年が明治と改元されたのは9月であるので、明治2（1869）年から明治3（1870）年の正月と考えられる。

また外遊中には、パリで岩倉大使や旧友を訪ねて多くを語りあった後に、雪の中を宿に帰ったがセイヌ川の辺りのガス燈に照らされた情景に風情があったと記している。これは明治6（1873）年2月10日のことと考えられる。「航西日乗」には以下の簡単な記述があった。

十日月曜又雪教師来タル大使ノ旗館ニ赴キ鹽田氏ニ面シ郷信ヲ託ス夜一時風雪ヲ冒シテ歸ル寒甚シ

ここで鹽田氏というのは旧幕臣塩田三郎（1843-89）のことで、幕末にはシャノワンヌとも交流のあった人物で仏語に通じていた。塩田は柳北と異なり維新後は外務省に出仕していたが、柳北は再会を喜び、また日本に帰る際には「送鹽田三郎歸本邦」という送別の詩を贈っている。「面白カラスノ雪」の中では2月10日の夜を以下のように記している。

晚餐後四方山ノ物語リニ刻ヲ移シ、二時比ニ馬車ヲ馳セテ我が寓ニ歸リシ途中、飛雪紛々タルニ街上ノ瓦斯燈ハ光ヲ放チテ白晝ノ如ク、セイヌ河ノ邊リナド得モ言ハレエヌ風景ナリシ、スカル奇絶ノ景色ハ再ビ看ルヲ得ントモ思ハレズ

ここにも旧知の塩田や遣欧使節の人々との交流があったと考えられる。柳北は情趣のある雪景色には洋の東西はないと暗に述べ、この二つの雪景色を「快事」と表現して、安易に風流と表現することを批判している。柳北は伝統的な美意識である「風流」について以下のように記している。

寒クシテ五体震エ飢エテ目ノ廻ルニ、猶我慢ニモ風流メカシテ雪月花ヲ翫ビ、奇妙絶妙ナド云フハ馬鹿ニ非ザレハ變人ナリ、漁史ハ決シテ之ヲ賛成スル能ハズ

それ以前には柳北は「閑忙小言」（『花月新誌』第69号 明治12年4月10日）の中で、「縦令風雅ノ道ナリトモ人ニ迫ラルハ好マシカラズ」と述べ、伝統的美意識をもたせようと人に強いることを批判している。また「風流の主義」（『讀賣雜譚』明治15年6月15日）の中で、以下のように述べている。

亜細亜地方にて、自由の何物たるを知らざる往昔の天地と雖も、能く風流の真訣を得し者は、皆冥々の中に自由の理を悟り得たるなり。故に、漁史は断言して曰く、人生の權利自由如何を知らざる者は、風流を談ずるに足らざるなりと。<sup>175</sup>

ここで柳北は精神世界の自由に立脚したものが、真の「風流」であると述べている。伝統的な美意識は決して人に押し付けるものではなく、自由な精神世界に生ずるものであるとしている。幕末に幕政批

判から蟄居閉門された柳北は、外遊体験から洋の東西を知り、さらに独自の風流の世界を深化させたのであった。

#### ④忠誠意識

少年期の漢詩「二蘇行」中で、柳北は曾我兄弟を逆臣として頼朝側近の忠誠心を表している。頼朝を徳川將軍家に擬えて、「二蘇行」中では曾我兄弟の五郎時致について、「牙帳有賊銀燭飛（牙帳 賊有り銀燭飛ぶ）」<sup>176</sup>としている。これは嘉永 5（1852）年柳北が 16 歳の時作品である。維新後ジャーナリストとなった柳北は「鴉のゆあみ」（『朝野新聞』明治 14 年 1 月 25 日）の中の漢詩で石橋山での感慨を以下のように述べている。

（AT1032）

覇圖誰復役風雲。 覇圖（ハト）誰カ復風雲ヲ役セン。  
壯志灰如老賣文。 壯志灰ノ如ク老イテ文ヲ賣ル。  
無頼石梁山下路。 無頼ナリ石梁山下ノ路。  
徒將詩賦吊源君。 徒ニ詩賦ヲ將テ源君ヲ吊（トブラ）フ。

（大意：武力によって天下統一を図るための戦をまた誰かが行うのであろうか(それは必要ない)。幕府の中核にいた自分も戦いを行うことはもはやなく) 勇ましい志は灰のようにになり今は年老いて文章を売ることをしている。石梁山の下路は険しく、そこを歩むことは無法とっていい。今は故人の源頼朝公を偲んで詩を賦し、その菩提を弔いたい。）

明治 14（1881）年に柳北は 45 歳であり、「二蘇行」の創作から 30 年近い歳月が経過していた。年月を経ても柳北は徳川家への思いは失わなかった。

柳北は海外体験から、徳川家を偲ぶ気持ちを確かなものとしていた。「航西日乗」の明治 6 年 3 月 25 日に伊国弗稜蘭（フィレンツェ）で、柳北は住民が以前の君主を偲ぶ様子を記し、漢詩を詠んでいる。その絶句「遊多斯加納王故宫」<sup>177</sup>は以下のものである。

（OR1071）

知有遺民記大家。 知る 遺民の大家を記する有るを。  
當年一曲後庭花。 當年 一曲の後庭花。  
石人不語春如夢。 石人語らず 春 夢の如し。  
滿苑藤蕪夕日斜。 滿苑の藤蕪 夕日斜なり。

（大意：メディチ家の遺民である当地の人々が記念碑を築いていることを知った。その一族の繁栄時には多くの人が集まって歌舞の宴が開かれていたことであろう。石像は無言であるが、華やかな往時が偲ばれるのである。庭園はいっぱいにかづらがしげり、それを染めるように夕日が斜めに差し込んでいる。）

柳北の絶句は、旧多斯加納（トスカーナ）大公国の民が元の君主であったメディチ家のことを忘れないでその記念碑を築いていることや、華やかな歌舞の宴がしのばれながらも、庭園いっぱいにはかずらが生い茂った様子を詠んだものであり、多斯加納（トスカーナ）の人々の行いに共感したことによる創作と考えられる。幕末から始まる柳北の国の進展に取り組もうという姿勢は、徳川家への忠誠心を否定するのではなく並行して志されたものであった。柳北は奥儒者の家に生まれながら、攘夷論の中で洋学



を習得するなど、幕末から既に西欧文明に関心をもっていた。しかしながら、閉門蟄居を体験するなど幕臣としては疎外感も味わったと考えられる。本研究の第Ⅱ章第3節において、維新前後の混乱期の中での忠誠心について、自我が同一化していた集団や価値への帰属が失われると痛切な疎外意識がもたらされることは、丸山眞男が『忠誠と反逆』の中で述べていることは第Ⅱ章の第3節に既に記した。<sup>178</sup>

柳北は幕末に不遇な時代をおくり、疎外意識を自覚するような体験をしていた。丸山眞男の論考を踏まえると、柳北の帰属意識の喪失や疎外意識の深さは、他の幕臣と比べるとそれほど大きなものではなかったことが考えられる。柳北は「航薇日記」で記されたように国内の旅行から江戸以外の日本を知り、また「航西日乗」で記されたように海外体験から近代的統一国家の必要性を知り、徳川将軍家には尊重の念をもちつつも、忠誠の人格的対象を徐々に将軍から近代国家の元首である天皇へと変容させていった。それは柳北が伊国での小国分立からの統一国家の成立過程を見聞し、米国での米英戦争の戦跡の見学から米国側の蘇格都（スコット）将軍の功績を称えた絶句「過蘇格都古戦場」（OR1096）を詠むなど、独立国家の意義について思索する機会をもったからであった。「過蘇格都古戦場」には、「史」「志」「景」の全てが詠みこまれており、英国の専横に対して、国の独立を維持していった米国の人々に柳北が感動を覚えたことが理解できる。柳北は統一された独立国家への道を日本が歩むことを重視し、忠誠意識の対象を徐々に変容させていったのであった。忠誠意識と関わりの深い帰属意識について次に述べる。

#### ⑤ 帰属意識

『柳橋新誌』初編（万延元年（1860）成立 明治7年（1874）4月刊行）では江戸の花街の裏側に目を向けていた柳北であったが、維新後には明治2年（1868）の柳北の山陽地方への旅行から、国内游记である「航薇日記」が書かれた。維新直後の柳北は自己の居場所を亡くした喪失感に支配されていたが、地方社会の人物や自然に触れ、社会への関心の萌芽を徐々に成長させたのであった。柳北の社会への目は江戸から関西・中国地方へ広がりを見せたのであった。『柳橋新誌』二編（明治4年（1871）3月成立、明治7年（1874）2月刊行）では、浅薄な文明開化を批判するなど、柳北は日本の国というものを考えるようになり、欧米では新聞による言論の自由があることを力説している。

羅馬での柳北は統一国伊国の皇太子（後のウンベルト一世）夫妻に丁寧な挨拶をしている。3月27日の記録には、トレヴィの泉付近での以下の記述がある。

デラビ」ノ泉亦古跡ノ一ナリ此處ニテ伊國ノ皇太子及ビ妃ニ逢フ余等帽ヲ脱シテ禮ス太子亦慰懃ニ答禮セラレタリ

クイリナル宮ハ即チ今ノ王宮ナリ公堂及ビ樓閣園池ノ覽縦ヲ許サル頗ル美麗ニテ有リキ

統一国家の王宮は大変美しく、庭園は一般にも公開されている様子を柳北は記している。統一国家としての伊国を旅したことで、日本も統一された近代国家となることを柳北は考えるに至ったのである。

さらに「航西日乗」（明治5（1872）年～6（73）年）で描かれた海外体験から、西欧文明で構築された社会の見聞によって、柳北の中にあつた文明批評的視点が深化され、特に伊国の統一などから統一国家の必要性を学び、日本の国全体を見渡す必要性を痛感したのであった。維新政府側の木戸や岩倉との交流もあり、柳北は江戸から日本へ、旧幕臣から統一国家日本の構成員として帰属意識を拡大させたと考えられる。

明治7（1874）年11月9日の『朝野新聞』の投書欄に柳北は無題で文章を掲載しているが、その中に

は全国の士族に対して統一国家の必要性を呼び掛けた以下の記述がある。

迂生窃カニ謂フ、静岡ノ士族ハ宜シク徳川氏ノ恩ヲ忘レズ、鹿児島ノ士族ハ宜シク島津氏ノ徳ヲ慕フ可シ。是レ即チ忠厚ノ道ニシテ、其道ヲ大ニスル時ハ即チ愛國トナル而已。<sup>179</sup>

柳北の投書欄の掲載の少し前、11月7日には福沢諭吉が「學問のすゝめの評」を『朝野新聞』に掲載していて、「日本の人民何れも皆この國を以て自家の恩を為し、共に全國の獨立を守らしめんとするの趣意なり。」<sup>180</sup>という国の獨立を重視する近代化の必要性をのべている。柳北は福沢の意見を評価する立場をとっていて、海外から帰国後には柳北の中の帰属意識が武士の身分から日本の國の構成員である「人民」に徐々に変容していったと考えられる。

ここで「忠厚」という語は、誠実で情に厚いという意味ではあるが、その出典は『詩經』『大雅』の「行葦」の詩序「行葦は忠厚なり」<sup>181</sup>にある。「行葦」の冒頭は、「敦彼行葦 牛羊勿踐履（敦彼たる行葦 牛羊踐履する勿かれ）」<sup>182</sup>で、その大意は「叢がる道端の葦、家畜の牛羊に踏ませてはいけない」である。柳北は中国の古典から含蓄ある言葉を引用して全国の士族に訴えたのであった。

## ⑥古蹟・古物の尊重（文化財の保存）

外遊以前から古錢を蒐集していた柳北は、明治5（1872）年11月20日に巴里で獨國の貨幣を入手し、明治6（1873）年2月15日には木戸孝允を訪ねた際に古錢を持参したりしている。帰国後も古物に関する雑文を柳北は著しているが、米國の大統領でもあったグラント將軍が明治12（1879）年7月3日に来日した頃から文化財の保護を訴えるようになった。商法會議所から推されて接待委員となり歓迎會での接待を担当した。さらに7月17日からはグラント一行の日光東照宮にも柳北は同行した。東照宮一帯保全を訴えた「晃山廟の保存」という記事が『朝野新聞』（7月22日）に掲載された。柳北の主張は外國の使節案内のためにも文化財である東照宮の保存をすべきというものであった。

その後「保存の流行」（『讀賣雜譚』明治15（1882）年3月30日）の中で、保存の徒な流行を批判して「嗚呼、古蹟古物を保存するは、唯之を保守して可なりと雖も、我邦を永遠に保存せんとするの道は、唯改良の一途に在り。」と、述べている。

外遊中に博物館に足しげく通った柳北ではあったが、実際に伊國のポンペイの發掘を見学したことは感動的なことであった。その際に詠んだ絶句（OR1076）では、結句に「借問當年有八仙（借問す 當年八仙有りしやと）」と、「八仙」という語が用いられている。噴火當時に唐の杜甫の飲み友達であった八人の酒豪たちが噴火の當時にいたのであろうかという意味であって、古代の人々への共感が読み取れる表現である。柳北はポンペイ遺跡には深い感動もったのであり、外遊体験が柳北の古錢や古蹟への関心を深めたと考えられる。

## 2 啓蒙思想への共感

柳北には日本の近代化を民間の立場から推進した福沢諭吉への共感もあった。柳北と福沢は同時代人で共に幕臣であって、幕末から相知る中でもあった。『福翁自伝』の中に以下の記述がある。

時は違ふが維新前文久三四年の頃 江戸深川六軒堀に藤沢志摩守といふ旗本がある 是は時の陸軍の將官を勤め極の西洋家で 或る日その人の家に集會を催し 客は小出播磨守 成島柳北を始め其の外皆むかしの大家と唱ふる蘭學医者 私ども合して七八名でした<sup>183</sup>

ここでは幕閣の中で欧米の文化の吸収を促進しようとする藤沢志摩守の邸宅に、同じ立場の人々が集まり、柳北や福沢が語り合っていたことが記されている。

維新後の福沢は維新政府からの出仕の誘いには応じないで、思想家や教育家として活躍し、『學問のすゝめ』を著した。しかし『學問のすゝめ』七編（明治7（1874）年3月）「国民の職分を論ず」の内容が、楠正成等を軽んじていると、国粋主義的立場からは福沢に非難が集中した。「国民の職分を論ず」の内容は儒教的価値観を否定し、啓蒙主義的色彩が強く、小泉信三によって以下のように把握されている。

この編の所論は「国法の貴きを論ず」る第六編に続くものであり、国民遵法の義務を説き、政府万一暴政を行うことあれば、正理を執って屈せず、そのために蒙る痛苦は甘んじてこれを忍ぶ殉教者(martyr)たるべしというその主旨は、ウェイランド中「市民の義務」と題する第四章から取ったものである。<sup>184</sup>

福沢は世論の批判に対して、『朝野新聞』（明治7（1874）年11月7日）に「學問のすゝめの評」と題し、「慶應義塾 五九樓仙萬」の名で反論を投稿した。「福澤は洋學者たるゆゑ其民権の説は必ず我嘗て想像する所の耶蘇共和ならんとて、」<sup>185</sup>というよう批判に対して、キリスト教や共和制を推進するものではないことを主張している。福沢に反論する場を提供したことは、柳北が啓蒙思想家福沢への理解や共感をもっていたからで、「全四頁の誌面のうち二頁余を占めているところから、柳北＝『朝野新聞』の福沢擁護の意気ごみのほどが知れよう」<sup>186</sup>と捉えられている。

柳北は同時代の啓蒙思想家である福沢の思想を、広く読者に知らしめるために『朝野新聞』を通じて行動したのであった。柳北と福沢はその後も交流を続けており、佐倉藩出身の依田学海（天保4（1833）年-明治42（1909）年）の『学海日録』の明治12（1879）年6月25日には以下の記録がある。

廿五日、成島柳北氏の家に福沢・箕作・中村・榎本・石川なんどの諸大家来遊せらるゝ由にて、余を招かれたり。<sup>187</sup>

福沢の他に、箕作秋坪（文政8（1825）-明治19（1886）年）、榎本武揚（天保7（1836）年-明治41（1908）年）の幕末以来の洋学系の人々と、儒学から洋学に転じて『同人社文学雑誌』を発刊していた中村正直（天保3（1832）年-明治24（1891）年）<sup>188</sup>と柳北が交流していたことが裏付けられている。明治4（1871）年に刊行された中村正直の翻訳『西国立志編』（サミュエル・スマイルズ著）については、平川祐弘によって以下の見解が述べられている。

英国でもそうであったように、日本でもまずなにより文明開化の民衆用教科書として読まれた。裁縫屋の丁稚のジョンソンが弁論の力で大統領の地位にまで上ったというような話は。それがアメリカ民主主義の実態を伝えてくれた点で貴重だった。<sup>189</sup>

柳北もまた明治12（1879）年には『花月新誌』第70号（4月24日）に翻訳「倫敦小誌」の掲載を始めていた。「倫敦小誌」には英国の貧しい人々の実態が描かれており、『西国立志編』にも貧苦に耐えて学習を続けたアレグザンダー・マレーが記されている等、柳北と中村正直には共通する一面があったのである。

## 第6節 第IV章のまとめ

柳北は幕臣時代から、明治以降も日本の国の西欧文化の受容にひたすら取り組んでいた。その決意をより強固にしたのが、明治 5（1872）年海外の体験であった。西欧諸国での見聞から、特に仏国では近代文明の都市生活を体験して西欧化の急務を知り、また伊国では以前の王朝を偲びつつも統一された国家の必要性を知ったからでもあった。さらに英国での立憲王政化での産業革命の進展を見聞し、柳北は議会政治が日本に導入されることを希求して『英國国会沿革誌』を翻訳し、出版している。最後の米国では大自然を切り開いていく近代文明の利器を直接目にしたのであった。外遊中に柳北は維新政府の人々とも交わり、日本の国への帰属意識にも目覚めていった。

これらの外遊から柳北は西欧社会の裏側にも目を向け、英国での貧しい人々の姿を描いた「倫敦小誌」の翻訳も行った。特に伊国での古代遺跡の保存や米国での大陸横断鉄道による社会見学は、グラント將軍の接待係としての活動や日光東照宮の保存運動という活動の場を柳北にもたせたのであった。過去の歴史を踏まえた上で西欧の文化を盛り込むことで独自の文化を創造する姿勢を柳北が養ったのは、主として外遊によって強く方向づけられたのであった。柳北は既に幕末から志していた日本の国への西欧文化の受容のために明治以降も一貫して活動し、またその手法としては、『朝野新聞』や『花月新誌』という大量伝達的手段を通じて、一般の読者に欧米の社会を紹介させることに尽力したのであった。

柳北が父祖や父祖周辺の人物の創作による幕末の伝統文芸を重視するようになったのは、柳北の海外体験も主な要因であった。「陳腐閑語第十二号」の中で、「文明ノ諸国ニ於テ詩賦ヲ貴重セザル無シ」と文芸を尊重する姿勢を評価している。さらに「航西日乗」の中で、仏国での明治 6（1873）年 3 月 12 日のオペラ座での「トゥーレの王の杯」（ゲーテの『ファウスト』の一部）の上演を見た折、「其演劇皆古語ヲ用フ」と記している。

海外旅行中に購入した本の内容や感想等は記されていないが、柳北は劇場や博物館には頻繁に出入りをしていて、乾照夫は柳北がパリでの博物館見学は前後 10 回位あったことに注目し、「またそれぞれの博物館で柳北が特に関心を示したのは古代の遺物や貨幣などであった」<sup>190</sup>と述べている。

遺跡や貨幣の他に過去の歴史を偲ぶ姿勢を、柳北は仏国の巴里や伊国の弗稜蘭（フィレンツェ）で知ることとなった。「航西日乗」の明治 6 年 1 月 21 日に巴里で「此日各地ノ寺院ニテ路易十六世ノ靈ヲ祭ル又途上那破侖第三世死後ノ寫影ヲ得タリ爲ニ蒼然」の記述がある。ブルボン朝の路易（ルイ）十六世が 1793 年の 1 月 21 日に処刑され、その慰霊が 80 年後の 1873 年にも行われていることが記されている。

さらに 3 月 25 日に伊国の弗稜蘭では絶句「遊多斯加納王故宮」（OR-1071）を詠んでいる。柳北の絶句は、旧多斯加納（トスカナ）大公国の民が元の君主であったメディチ家のことを忘れないでその記念碑を築いていることに共感したものであった。

柳北が幕末の文芸を何点か『花月新誌』に連載したことは、それらの文芸を後世に伝えたいと考えたからでもあった。柳北が掲載した幕末の文芸作品は、「述齋偶筆ぬきかき」11 号から 18 回、「変化歌合」35 号から 5 回、「紫史吟評」65 号から 17 回、「みるめのさち」82 号から 6 回であった。<sup>191</sup>

最初に取り上げられた林述齋の「述齋偶筆ぬきかき」の「述齋偶筆（七則）」（明治 10（1877）年 8 月 16 日 第 20 号）には、林述齋と老中であった松平定信（宝暦 8（1758）年-文政 12（1829）年）の交流が描かれ、述齋が定信の月や花を愛する面を評価した内容となっている。述齋と定信の交流には、その結びつきに花鳥風月を愛するという共通の要素があった。それは幕閣の上司と部下という結びつきではなく、共に雪月花を愛する対等の人間同士の結びつきである。述齋にはまず為政者としての視点が強いという見方もあるが、「二点目としては『公平』の徳を重視することである。学問の多様性を認める背景には、この「公平」性に因る所が大きいと言える」<sup>192</sup>という見解もある。「述齋偶筆」という伝統的な文芸の中に、明治以降の読者にも理解できる一面を見いだした柳北は、詩文雑誌である『花月新誌』という伝達手段で読者に呈したのであった。

帰国後の柳北は国の独立を重視した福沢諭吉の啓蒙思想に共感し、その正しい普及に協力した。それは柳北自身の帰属意識が武士から「人民」に徐々に変容していったからであった。また一方では日本文化の良い面に西欧文化の伝統を盛り込んで、日本独自の文化の進展に尽力した。柳北の帰国後の活動は新聞や雑誌を通じてなされ、日本の国を欧米の水準に斬新的に向上させることを目指したものであった。

## 〈注〉

<sup>1</sup> 大島隆一. 柳北談叢. 昭和刊行会. 1943. p. 124.

<sup>2</sup> 前田愛. 成島柳北. 朝日新聞社, 1990. p. 218.

<sup>3</sup> 柳北の長女の婿養子成島謙吉（?-1906）は長田銑太郎の弟で、明治6年から7年にかけて欧州に留学し、帰国後は維新政府に出仕していた。（『海外見聞集. 新日本古典文学大系明治編 5. 岩波書店, 2009. の『航西日乗』人名注・索引 p. 9. 参照）。

<sup>4</sup> 注1 柳北談叢. p. 120.

<sup>5</sup> 春原昭彦. 新聞のあゆみ—明治から現代まで. 日本新聞博物館, 2006. p. 2.

<sup>6</sup> 注5 新聞のあゆみ—明治から現代まで. p. 4.

<sup>7</sup> 浜田彦蔵、通称ジョセフ・ヒコは（天保8（1837）年-明治30（1897）年）は幕末の通訳・貿易商で、13歳の時に遠州灘で米国船に救助されて渡米した。安政6年にはアメリカ領事館付通訳として帰国し、日米外交交渉や貿易に携わった。その後は元治元（1864）年横浜で日本最初の「海外新聞」を岸田吟香と発行、維新後大蔵省で国立銀行条例編集に従事したのである。

（日本歴史学会. 明治維新人名辞典. 吉川弘文館, 1999, p. 513. 参照）。

<sup>8</sup> 岸田吟香（天保4（1833）年-明治38（1905）年）は、明治初期の新聞人で、幕末には箕作秋坪の幹旋でヘボンの『和英語林集成』の編集にも協力し、明治5（1872）年には『東京日日新聞』に招かれ、7年には征台の役の従軍記者となった（注7 明治維新人名辞典. p. 260. 参照）。

<sup>9</sup> 國史大辞典. 第3巻. 吉川弘文館, 1997. p. 10.

<sup>10</sup> 井上文雄（寛政12（1800）年-明治4（1871）年）は、医家として田安家に仕えたが、歌人でもあった。また任侠の風もあって貧窮した文人の世話もしていた。晩年「諷歌新聞」の歌が新政府の忌避にふれて入獄した。江戸明治初期歌壇の殿将といわれている（注7 明治維新人名辞典. p. 112. 参照）。

<sup>11</sup> 幕末の代表的な戯作者であった條野傳平（天保3（1832）年-明治35（1902）年）が、明治5（1872）年西田傳助、落合芳幾等と創刊した。（春原昭彦. 日本新聞通史. 四訂版. 新泉社, 2007. p. 27. 参照）。

<sup>12</sup> 英国人 J. R. ブラックが創刊した。John R. Black 貌刺屈（1827 年-1880 年）は、英国人の海軍士官であったが、豪州で商業に携わるうちに日本に立ち寄って在住した。横浜で「ジャパン・ヘラルド」「ジャパン・ガゼット」（夕刊）の主筆となったが、明治5（1872）年に英字新聞「日新真事誌」を発刊した。しかしスクープを危ぶんだ政府はブラックを左院顧問として、新聞から手を退かせた。明治8年には政府は新聞紙条例を改正して、外国人の新聞の経営を禁じたので、同紙も廃刊となった（注11 日本新聞通史. p. 28. 参照）。

<sup>13</sup> 注5 新聞のあゆみ—明治から現代まで. p. 8. 参照。

<sup>14</sup> 明治3（1870）年に、神奈川県裁判所の通訳翻訳方であった子安峻（天保7（1836）年-明治31（1898）年）は活版印刷所日就社を設立した。後に東京に移され、明治7（1874）年には子安が社長となって、本格的な小新聞「読売新聞」が創刊された（注11 日本新聞通史. p. 32. 参照）。

<sup>15</sup> 木村平八・木村騰の親子によって大阪に於いて朝日新聞社が設立されたが、その際に相談に預かったのが、村山龍平（嘉永3（1850）年-昭和8（1933）年）であった。明治14（1881）年から村山龍平が木村親子より朝日新聞社の経営権を譲り受け、上野理一（嘉永元（1848）年-大正8（1919）年）と共に経営に着手し、今日の朝日新聞社の礎を築いた。（注11 日本新聞通史. p. 49. 参照）。

<sup>16</sup> 幕末の明石藩は、当時の藩主松平慶憲について以下のような記述からその状況を把握できる。

明治元年鳥羽伏見の戦い起こるや、幕軍に参加しようとしたが、大坂落城のため断念した。ついで政府軍の追討をうけて帰順し、政府軍に参加して越後に出兵した。（注7 明治維新人名辞典. p. 931.）

<sup>17</sup> 野崎左文. 成島柳北仙史の面影. 私の見た明治文壇 I. 東洋文庫 759. 平凡社, 2007. p. 244).

<sup>18</sup> 注1 柳北談叢. p. 107.

<sup>19</sup> 柳川春三については、「洋学者で日本人による最初の雑誌、新聞である『西洋雑誌』『中外新聞』を発行した柳河春三（一八三二—一八七〇年、尾張藩、幕府開成所頭取）」という評価が、五十嵐暁郎によってなされている。

る。(日本通史. 第 16 卷. 近代 I. 岩波書店, 1994. p. 313.)。

<sup>20</sup> 「航西日乗」の引用は、成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. 明治文学全集. 第 4 卷. 筑摩書房, 1969. に拠る。以下同様。重要な箇所は筆者が大意を付加した。

<sup>21</sup> 『柳橋新誌』の原文は、柳橋新誌・伊都満底草. 勉誠社文庫 127. 勉誠社, 1985. p. 137.

書下し文は江戸繁昌記・柳橋新誌. 新日本古典文学大系 100. 岩波書店, 1989. p. 421. に拠る。大意も同書の尾注を参照した。

<sup>22</sup> 注 2 成島柳北. p. 222-223. 参照。

<sup>23</sup> 五十嵐暁雄. 旧幕臣の明治維新. 岩波講座 日本通史 16. 岩波書店, 1994. p. 318.

<sup>24</sup> 注 7 明治維新人名辞典. p. 370. 参照。

<sup>25</sup> 注 11 日本新聞通史. p. 27.

<sup>26</sup> 小野寺龍太. 栗本鋤雲. ミネルヴァ書房, 2010. p. 211.

<sup>27</sup> 注 7 明治維新人名辞典. p. 844. 参照。

<sup>28</sup> 注 5 新聞のあゆみ—明治から現代まで. p. 10.

<sup>29</sup> 太政官日誌 (明治元年 2 月 23 日～明治 10 年 1 月 22 日廃刊) は、維新政府が政府の政策、戦況を知らせるために京都の御用書林村上勘兵衛に発行させたもので、後の官報に該当する。注 11 日本新聞通史. 17-19. 参照。

<sup>30</sup> 注 11 日本新聞通史. p. 34 参照。

<sup>31</sup> 新編 柳北詩文集. 漢詩文集. 新日本古典文学大系 明治編 2. 岩波書店, 2004. p. 256 の尾注。

<sup>32</sup> 注 31 新編 柳北詩文集. p. 258.

<sup>33</sup> 末広鉄腸 (重恭) は、政治家・新聞記者・小説家であって、明治 8 (1875) 年には『曙新聞』に編集長として迎えられた。しかし同年に新聞条例や讒謗律を攻撃して禁固刑を受け、『曙新聞』を退社し、同年の 10 月には『朝野新聞』の編集長に迎えられた。自由民権論を主張し、明治 19 (1886) 年には政治小説『雪中梅』を発表した。第一回衆議院議員に当選して政治家としても活躍した (注 11 日本新聞通史. p. 35 参照)。

<sup>34</sup> 井上毅は熊本藩の陪臣の家に生まれ、長崎や昌平黉で仏語を学び、後に維新政府 (司法省) に出仕した。明治 5 (1873) 年には仏国、独国の法制度等を視察し、民約的な仏国の法よりも王権の強い独国の法に関心をもつようになった。後に帝国憲法制定に際しては伊藤博文等と起草に従事し、教育勅語草案を熊本藩出身の元田永孚と共に作成した (注 7 明治維新人名辞典. p. 109-110. 参照)。

<sup>35</sup> 尾崎三良は三條実美に仕えていたが、長崎で坂本龍馬と出会い、上京した。慶応 3 (1866) 年には、大政奉還後の政治機構の改革について坂本龍馬等と謀り、岩倉具視に呈した。明治元 (1867) 年には英国に留学し、帰国後は維新政府に仕え、左院議官や法制局長官等を歴任した (注 7 明治維新人名辞典. p. 241. 参照)。

<sup>36</sup> 注 32 新編 柳北詩文集. p. 259-260 の尾注。

<sup>37</sup> 植木枝盛は自由民権運動の政治的・思想的指導者で高知県出身。投書による禁獄に処せられたが、その後立志社に参加した。さらに国会期成同盟・自由党の結成に参加した。(朝尾直弘. 新版 角川日本史辞典. 角川書店, 1996. p. 94. 参照)

<sup>38</sup> 『明治十家絶句』(上・下) は、關三一 (鴨渚) の編集で明治 11 年 4 月に東生書館から出された。柳北の作品は全部で 41 首が収録されており、他に収録されている作家は、大槻磐溪、小野湖山、大沼枕山、森春濤、菊池三溪、鱸松塘、關雪江、向山黄村、植村蘆洲で、柳北を含む十人の作家の絶句が合計 458 首収録されている。(明治十家絶句. 詞華集日本漢詩. 第 8 卷. 汲古書院, 1983.)

<sup>39</sup> 原文、及び書下し文の引用は注 31 新編柳北詩文集 p. 240. 大意は同書 p. 240 の尾注を参照した。

<sup>40</sup> 焚書坑儒は、中国秦の始皇帝が前 213～2 年に行なった、法家の思想からの儒家に対する言論統制政策。医薬や農事等の実用書以外を焼き、儒生を捕えて、460 余人を咸陽で坑殺したといわれる事件である。これについては、以下のような捉え方もされている。

法家主義に徹し、思想統制を目的としたこの事件は、後世の儒教の立場で粉飾誇張されているらしいが、これによって先秦の古書が多く亡失したとされている。(世界史小辞典編集委員会. 山川世界史小辞典. 改訂新版. 山川出版社, 2004. p. 618.)

<sup>41</sup> 柳北の出獄は明治 9 (1876) 年 6 月 11 日で、『朝野新聞』への「ごく内ばなし」の連載は 14 日から 24 日迄である。(成島柳北・大沼枕山. 江戸詩人選集 10. 岩波書店, 2001. p. 140 参照)。

<sup>42</sup> 注 17 私の見た明治文壇 I. p. 250.

<sup>43</sup> 前田愛. 成島柳北. 朝日新聞社, 1990. p. 240.

<sup>44</sup> 注 17 私の見た明治文壇 I. p. 272.

<sup>45</sup> 注 17 私の見た明治文壇 I. p. 274. 大意は筆者が付加した。

<sup>46</sup> 小野秀雄. 三代言論人集 2. 時事通信社, 1963. p. 211.

<sup>47</sup> 柳北の手作り新聞は、大きさは九寸に七寸の粗末なちり紙であった。その中のひとつである「絵入都々一」は、その内容が公告、雑報、寄書、社説の四部に区分されていた。(注 46 三代言論人集 2. p. 212 参照)。

<sup>48</sup> 稲田雅洋. 自由民権運動の系譜. 吉川弘文館, 2009. p. 87.

<sup>49</sup> 注 42 成島柳北・大沼枕山. 岩波書店, 1990. p. 141. の注参照。

<sup>50</sup> 注 31 新編柳北詩文集. p. 241. の尾注参照。

<sup>51</sup> 鶴飼新一. 朝野新聞の研究. みすず書房, 1985. 資料編 p. 24.

この表については、さらに以下の記述がある。

当時の一年度はその年の7月1日から翌年6月30日までである。一日平均発行部数は年度発行部数の1/300とした。内務省(卿)年報による。\*明治8年11月創刊。\*\*明治9年2月創刊。

<sup>52</sup> 注 46 三代言論人集 2. p. 214.

<sup>53</sup> 西郷隆盛は薩摩藩の下級藩士の出身で、藩主島津斉彬に重用されていたが、斉彬の死後は斉彬の異母弟久光に藩政から遠ざけられるなどの不遇を体験していた。やがて藩政に復帰後は戊辰戦争の際に活躍し、江戸無血開城を実現させた。陸軍大将となり、維新政府の中心となったが、明治6年には征韓論に敗れて下野していた。西郷と西南戦争については、『明治維新人名辞典』に以下の記述がある。

七年隆盛に従って帰郷した軍人・官吏らのために私学校を創設したが、政府の挑発と私学校党の暴発により十年の西南戦争をおこし、敗退し九月二十四日城山で自刃した。

(注 7 明治維新人名辞典. p. 424.)

<sup>54</sup> 落合弘樹. 西南戦争と西郷隆盛. 敗者の日本史 18. 吉川弘文館, 2013. の巻末の略年表を参照した。

<sup>55</sup> 注 46 成島柳北. 三代言論人集 2. p. 257.

<sup>56</sup> 注 54 西南戦争と西郷隆盛. p. 139.

<sup>57</sup> 桐野は幕末には中村半次郎と称し、元治元(1864)年の禁門の変で西郷に認められた。明治以降本姓に復して桐野利秋と改めた。陸軍少将に任ぜられたりしたが、征韓論に敗れた西郷に従い下野し、篠原国幹、村田新八らと私学校の経営に携わっていた。『明治維新人名辞典』には、以下の記述がある。

十年西南戦争が勃発すると、四番大體長となって熊本城に向い総指揮長となって熊本城に向い総指揮長となって軍事を指揮したが、人吉敗戦後、宮崎に転戦、西郷と共に鹿児島に帰り、城山の岩崎谷で戦死した。(注 7 明治維新人名辞典. p. 346.)

<sup>58</sup> 山本武利. 新聞記者の誕生. 新曜社, 1990. p. 120.

<sup>59</sup> 大久保利通は西郷隆盛とは幼少時から交流をもっていた。西郷と共に藩政改革や公武合体運動への道を歩むが、禁門の変や長州征伐等から公武合体運動の限界を悟り、西郷と共に討幕運動へ進む。維新後は参議や大蔵卿となり、岩倉全権大使の副使として欧米各国を訪れた。帰国後は内政重視の立場から、西郷の征韓論に反対した。『明治維新人名辞典』には、以下の記述がある。

征韓派参議辞職後、内務卿を兼ね政府の中心となり、殖産興業をすすめるとともに、自由民権運動・士族の反乱・百姓一揆等のうち続くなかで専制的な支配を強めながら、七年の佐賀の乱から十年の西南戦争に至る事件処置に挺身した。(注 7 明治維新人名辞典. p. 185.)

<sup>60</sup> 注 46 成島柳北. 三代言論人集 2. p. 221.

<sup>61</sup> 「詩文雑誌」という表現は乾照夫の『成島柳北研究』(ペリカン社 2003) で用いられているので、本研究でもそれに倣う。

<sup>62</sup> 『花月新誌』からの引用は、『花月新誌』の原本に拠る。以下「弔朝野賦」も同様。

<sup>63</sup> 注 46 成島柳北. 三代言論人集 2. p. 223.

<sup>64</sup> 注 51 朝野新聞の研究. p. 22.

<sup>65</sup> 注 51 朝野新聞の研究. p. 22-23 参照。

<sup>66</sup> 注 37 新版 角川日本史辞典. p. 506.

<sup>67</sup> 板垣退助は土佐藩士であって、幕末には藩政にも携わっていたが、中岡慎太郎の影響で討幕を志すようになった。戊辰戦争では会津攻略に功をたて、維新政府の参議となった。明治6(1873)年には、西郷等の征韓論に同調して下野し、翌7年には後藤象二郎、江藤新平、副島種臣と愛国公党を組織して、民撰議院設立建白書を提出した。明治14(1881)年には自由党を組織したが、外遊後には民権運動の下からの激化のために自由党を解党した。その後の板垣の歩みについては、『明治維新人名辞典』に以下の記述がある。

二十年伯爵となり、以後愛国公党を組織し、立憲自由党総裁、第二次伊藤内閣の内相を経て、三十一年

最初の政党内閣である隈板内閣の内相となった。三十三年伊藤博文による政友会結成と共に政界を退き、以後社会事業に尽力した。(注7 明治維新人名辞典. p. 83.)

<sup>68</sup> 歴史学研究会. 日本史史料 [4] 近代. 岩波書店, 1997. p. 125.

<sup>69</sup> 注 48 自由民権運動の系譜. p. 74.

<sup>70</sup> 注 51 朝野新聞の研究. p. 108.

<sup>71</sup> 牧原憲夫. 民権と憲法. 岩波. 岩波書店, 2006. p. 24.

<sup>72</sup> 高橋基一については、朝野新聞の社員であることが明白であり、明治14年12月撮影の朝野新聞社編集局員の写真がある。(注46 成島柳北. 三代言論人集 2. p. 171-172 の間の写真)。また『英國國會沿革誌』(国会図書館デジタルコレクション)では、「翻訳人 島根県士族 高橋基一」と記されている。柳北については、「成島柳北閣」と記されている。

<sup>73</sup> 趙舞尔. 英國國會沿革誌. 全3巻. 朝野新聞社, 1879.

<sup>74</sup> 注 73 英國國會沿革誌巻一. p. 6-7.

<sup>75</sup> 大隈重信は佐賀藩士で、若き日には長崎で蘭学を修め、脱藩後には尊攘派として活躍し、維新後は参議や大蔵卿等を務めた。明治14(1881)年の政変では、英国の議会制度を取り入れた国会の即時開設や開拓使官有物払下批判から政府から追放された。以下に『明治維新人名辞典』に記された明治15年から明治末年までの大隈の歩みを記す。

十五年三月小野梓・矢野文雄らと立憲改進黨を結成して総理となり、十月東京専門学校(後の早稲田大学)を設立した。二十一年外務大臣になり条約改正交渉に当たったが、翌年十月の爆弾事件で負傷し辞任した。二十九年には進歩党を結成して党首となり、松方内閣に外務大臣となったが翌年辞職。三十一年板垣退助と憲政党を結成してわが国最初の政党内閣(隈板内閣)を組織したが、十一月に解散した。四十年一月憲政本党総理を辞し早稲田大学総長に就任した。(注7 明治維新人名辞典. p. 186)。

<sup>76</sup> 注 48 自由民権運動の系譜. p. 119-120.

<sup>77</sup> 安在邦夫. 立憲改進黨の活動と思想. 校倉書房, 1992. p. 202. 参照。

<sup>78</sup> 注 68 日本史史料 [4] 近代. p. 146.

<sup>79</sup> 注 68 日本史史料 [4] 近代. p. 148.

<sup>80</sup> 平井三郎. 立憲改進黨列傳初編. 古山武次郎(出版者), 1883. p. 14. (国会図書館デジタルコレクション)

<sup>81</sup> 『花月新誌』第13号で金陵の詩人・孫霽人の「放語」の文章が掲載されていて、また『花月新誌』第26号には錢塘の詩人・許鈴身の「柳北詩鈔序」が掲載され、評価がされている。

<sup>82</sup> 注 80 立憲改進黨列傳. p. 15.

<sup>83</sup> 注 46 成島柳北. 三代言論人集 2. p. 228.

<sup>84</sup> 注 58 新聞記者の誕生. p. 141. には以下の記述がある。

各紙の論客ばかりでなく、読者からの編集方針の不統一への不満や疑問も高まる。そこで苦しまぎれに出したのが、「吾輩記者ハ常ニ不偏不倚ノ地位ニ立」(16. 6. 24)

つという「不偏不倚」宣言である。

<sup>85</sup> 注 58 新聞記者の誕生. p. 141.

<sup>86</sup> 注 58 新聞記者の誕生. p. 142.

<sup>87</sup> 『花月新誌』からの引用については、『花月新誌』花月社の原本からであるが、他に『花月新誌』(複製版)ゆまに書房を参照した。以下同様。

<sup>88</sup> 『柳橋新誌』原文の引用は注21 柳橋新誌・伊都満底草。同書の底本は明治7年に山城屋から刊行された黄表紙本の『柳橋新誌』初編、『柳橋新誌』二編である。また書下し文は注21 江戸繁昌記・柳橋新誌。こちらの底本も同じく明治7年刊の黄表紙本。以下同様。

<sup>89</sup> 原文は『花月新誌』第2号から、また書下し文は注32 新編柳北詩文集. p. 241.

<sup>90</sup> 大意は注32 新編 柳北詩文集. p. 241-242. の尾注参照。

<sup>91</sup> 本文、書下し文及び大意は、遠藤哲夫. 莊子下. 新釈漢文大系 8. 明治書院, 2002. p. 584.

<sup>92</sup> 注 32 新編 柳北詩文集. p. 249.

<sup>93</sup> 『花柳春話』(五冊)は明治11(1878)年11月から12年4月にかけて、坂上半七によって刊行されている。「題言」は成島柳北、校閲は服部誠一であった。訳者の丹羽純一郎(嘉永4(1851)年~大正8(1919)年)は三條家の諸太夫の丹羽家の養子であり、明治初年の英国留学中に知人から送られた英書を帰路の船中で読み、興味を感じたので訳したとされている。後に丹羽は養家の事情から織田姓となり、官途に意を絶ってジャーナリストに転身したが、立身出世とは無縁の人生を辿った。(明治翻譯文學集. 明治文学全集 7. 筑摩



書房, 1972. p. 399. 木村毅の「解題」.)

<sup>94</sup> 山本芳明. 丹羽純一郎『花柳春話』. 国文学 解釈と鑑賞. vol. 57. No. 4, 1992. p. 18.

<sup>95</sup> 注 93 明治翻譯文學集. p. 3.

<sup>96</sup> 雁・阿部一族. 森鷗外全集 4. ちくま文庫. 筑摩書房, 1995. p. 11.

<sup>97</sup> 日野俊彦は『森春濤の基礎的研究』の中で、維新政府の官僚の詩作が多数収録されていることについて、以下のように述べている。

特に官僚の詩人が多くいることを基準として、春濤が権力者に迎合しているとする論は、おおむね「官僚＝俗」「在野＝雅」という二元論に拠っていて、大きな見落としをする危険があろう。(森春濤の基礎的研究. 汲古書院, 2013. p. 104.)。

<sup>98</sup> 三浦叶. 明治漢文學史. 汲古書院, 1998. p. 233. 参照。

<sup>99</sup> 注 98 明治漢文學史. p. 233.

<sup>100</sup> 「詩文雑誌」という表現は乾照夫の『成島柳北研究』(ぺりかん社 2003) で用いられているので、本研究でもそれに倣う。

<sup>101</sup> 注 100 成島柳北研究. p. 229-230.

<sup>102</sup> 乾照夫. 読売雑譚集. ペリかん社, 2000. p. 199.

<sup>103</sup> 書下し文及び大意は注 32 新編柳北詩文集. p. 244. 参照。

<sup>104</sup> 石毛忠. 日本思想史辞典. 山川出版, 2009. p. 823.

<sup>105</sup> 原文は『花月新誌』11 号、以下同様。

大意は、森銑三(訳). 述斎偶筆. 江戸随想集. 筑摩書房, 1977. p. 275. 以下同様。

<sup>106</sup> 森銑三. 江戸時代の随筆. (注 99 江戸随想集. p. 386.)

<sup>107</sup> 正岡子規. 芭蕉雑談. 日本現代文学全集. 講談社, 1980. p. 263.

<sup>108</sup> 正岡子規. 俳人蕪村. 注 108 日本現代文学全集. p. 333.

<sup>109</sup> 江戸冷泉門の歌人である長谷川安卿(やすあきら)については、以下の記述が『近世歌文集(上)』の「人名索引」にある。

通称、帯刀・主馬、法号、了聴、享保 4 年(1719) 生、安永 8 年(1779) 没、61 歳。田中休愚の子。安貞の養嗣となる。幕府の小普請を経て御書物奉行。江戸冷泉門の主要人物の 1 人で和文も巧みであった。

(近世歌文集(上). 新日本古典文学大系 67. 岩波書店, 1996. 人名索引 p. 40.)

長谷川安卿の氏名の表記については、『花月新誌』では「安卿」であるが「江戸に於ける堂上派 その一 長谷川安卿」(熊谷武至. 東海学園国語国文. 1977) では、「安郷」と表記されている。

<sup>110</sup> 引用及び大意は、小沢正夫/他. 古今和歌集. 新編 日本古典文学全集 11. 小学館, 1994. p. 328.

<sup>111</sup> 兼清正徳. 桂園派最後の歌人松浦辰男の生涯. 作品社, 1994. p. 147.

<sup>112</sup> 注 109 近世歌文集(上). 参照。

<sup>113</sup> 原文は『花月新誌』65 号。

<sup>114</sup> 中野幸一. 源氏物語類聚鈔・紫史吟評. 勉誠出版, 2008. の解説。

<sup>115</sup> 原文は『花月新誌』81 号、書下し文及び大意は谷口爲次. 紫史吟評詳解. 谷口廻瀾先生還暦記念刊行會, 1940. p. 4. 以下、「紫史吟評」の書下し文及び大意は『紫史吟評詳解』に従う。特に(源氏物語は獨り我が國文學の矜誇のみではない。實に世界文學史に君臨する寶典である。)の部分は原文の訳には対応していないで、谷口爲次が大意を補い強調したものである。

<sup>116</sup> 津田左右吉. 文学に現はれたる我が国民思想の研究 2. 岩波文庫. 岩波書店, 2006. p. 115.

<sup>117</sup> 岡部明日香. 紫式部の漢学世界. 源氏物語と白氏文集・紫史吟評. 慈済大学, 2013. p. 224.

<sup>118</sup> 注 117 紫式部の漢学世界. p. 225-227 参照。

<sup>119</sup> 注 115 紫史吟評詳解. p. 1.

<sup>120</sup> 岸上質軒. 紀行文集・続. 博文館, 1909. p. 18 の「解題」

<sup>121</sup> 引用は、注 109 近世歌文集(上). p. 505. また成島勝雄については、以下の記述がある。

初名、峰雄。通称、仙蔵。字、叔飛。寛延元(1748) 年生、文化 12(1815) 年没、68 歳。北角久琢勝有の二男。和鼎の養嗣となる。幕府の小十人格奥詰・大番格を経て御書物奉行。(注 109 近世歌文集(上). 人名索引. p. 14.)

<sup>122</sup> 「濱松風」は明治 12 年 10 月に『朝野新聞』に掲載された。

<sup>123</sup> 濱松風. 柳北全集. 博文館, 1897. p. 171.

<sup>124</sup> 高須芳次郎. 明治の紀行文. 明治紀行文集. 明治文学全集 94. 筑摩書房, 1974. p. 374.

尚、高須芳次郎「明治の紀行文」は、昭和 9（1934）年に改造社から刊行された『日本文学講座』第十二巻に収められている。

<sup>125</sup> 久保田啓一. 前向きの江戸志向―成島柳北. 江戸文学. vol. 21. ペリかん社, 1999. p. 61.

<sup>126</sup> 注 126 前向きの江戸志向. p. 62.

<sup>127</sup> 注 94 明治翻譯文學集. p. 3.

<sup>128</sup> 猪野謙二. 明治文学史（上）. 講談社, 1985. p. 194.

<sup>129</sup> 復刻日本の雑誌 解説. 日本近代文学館. 講談社, 1982. p. 51.

<sup>130</sup> 『東京新誌』を漢文戯作雑誌とするのは、注 1 復刻日本の雑誌 解説. p. 55 における浅井清の「團圓珍聞」に拠る。

<sup>131</sup> 『花月新誌』については、原本と復刻版花月新誌. 全 8 巻. ゆまに書房, 1984. を参照した。

<sup>132</sup> ベーコンの『随想集』については、ベーコン随想集. 岩波文庫. 岩波書店, 1983.）のテキストには *The Works of Francis Bacon*, ed. by J. Spedding, R. L. Ellis, D. D. Heath, vol. VI, 1861. が使用されているが、他にも以下の出版がなされている。

*Bacon's Essays, ed. with Introduction & Notes*, F. G. Selby, Macmillan, 1907.

*Bacon's Essays, with Annotations*, R. Whately, London, J. W. Parker and son, 1858.

*Frances Bacon's Essays, Introduction*, O. Smeaton, London, J. M. Dent, 1958.

*The Essays Or Counsels Civil And Moral By Frances Bacon, with Introduction and Notes*, S. Narita, Kenkyusha, 1979.

<sup>133</sup> 柳北の用いたテキストについては特定できないが、外遊中に入手した場合を想定して、*Bacon's Essays, with annotations*, R. Whately, London, J. W. Parker and son, 1858. p. 400 の原文を記した。

<sup>134</sup> 今道友信. 西洋哲学史. 講談社学術文庫. 講談社, 1987. p. 214.

<sup>135</sup> 「航西日乗」の引用については、『花月新誌』花月社の原本からであるが、他に注 1 復刻版花月新誌. を参照した。

<sup>136</sup> ケロウ・チェズニー. ヴィクトリア朝の下層社会. 高科書店, 1991. p. 49.

<sup>137</sup> Mayhew, Henry, *London Labour and the London Poor. volume I, Cosimo Classics*, Cosimo, 2009. p. 10.

<sup>138</sup> Mayhew, Henry, *London Labour and the London Poor. volume I, Cosimo Classics*, Cosimo, 2009. 494p.

Mayhew, Henry, *London Labour and the London Poor. volumen II, Cosimo Classics*, Cosimo, 2009. 511p.

Mayhew, Henry, *London Labour and the London Poor. volume III, Cosimo Classics*, Cosimo, 2009. 442p.

Mayhew, Henry, *London Labour and the London Poor. volume IV, Cosimo Classics*, Cosimo, 2009. 504p.

<sup>139</sup> 注 93 明治翻譯文學集. p. 357.

<sup>140</sup> 柳北が借りた写本『和蘭美政録』は、その後火事で焼失してしまったが、明治になって『和蘭美政録』上巻を柳北は安田次郎吉から贈られた。（注 93 明治翻譯文學集. p. 387. 参照）

<sup>141</sup> 本文の引用は、和蘭美政録. 翻訳小説集二. 新日本古典文学大系 明治編 15. 岩波書店, 2002. p. 388.）

<sup>142</sup> 森鷗外（文久 2（1862）年―大正 11（1922）年）も柳北の翻訳作品に接していた。代表作「雁」（『昂』明治 44 年 9 月～大正 2 年 5 月）の中に以下のような記述がある。

僕も花月新誌の愛読者であったから、記憶している。西洋小説の翻訳と云うものは、あの雑誌が始めて出したのである。なんでも西洋のある大学の学生が、帰省する途中で殺される話で、それを談話体に訳した人は神田孝平さんであったと思う。それが僕の西洋小説と云うものを読んだ始であったようだ。

（雁・阿部一族. 森鷗外全集 4. ちくま文庫. 筑摩書房. 1995. p. 11.）

<sup>143</sup> 大島隆一. 柳北談叢. 昭和刊行會, 1943. p. 126.

<sup>144</sup> 『朝野新聞』の掲載記事については、朝野新聞. 縮刷版. ペリかん社, 1981. 5-1984. 7. から引用し、他に以下の文献を参照した。

女優馬利比越兒ノ審判. 柳北遺稿下巻. 博文館, 1892.

鵜飼新一. 朝野新聞の研究. みすず書房, 1985.

<sup>145</sup> 漢字表記は作品中には見られない。

<sup>146</sup> 鴉のゆあみ. 成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. 明治文學全集 4. 筑摩書房, 1969. p. 47-52.

洗愁日乗. 柳北全集. 博文館, 1897. (文藝倶楽部. vol. 1. 3, No. 9 臨時増刊)p. 208-219.

<sup>147</sup> 藤野保. 江戸幕府崩壊論. 塙書房, 2008. p. 221.

<sup>148</sup> 「西南戦を論ず」は明治 10 年 5 月 2 日の『朝野新聞』の社説である。注 47 三代言論人集 2. p. 177 参照。

<sup>149</sup> 『花柳春話』〈五冊〉は明治11年(1878)11月～12年4月にかけて、坂上半七によって刊行されている。「題言」は成島柳北、校閲は服部誠一であった。訳者の丹羽純一郎(嘉永4年(1851)～大正8年(1919))は三條家の諸太夫の丹羽家の養子であり、明治初年の英国留学中に知人から送られた英書を帰路の船中で読み、興味を感じたので訳したとされている。後に丹羽は養家の事情から織田姓となり、官途に意を絶ってジャーナリストに転身し、立身出世とは無縁の人生を辿った。(注93 明治翻譯文學集. p. 399. 木村毅の「解題」参照)

<sup>150</sup> 兼清正徳. 桂園派最後の歌人松浦辰男の生涯. 作品社, 1994. p. 147.

<sup>151</sup> 乾照夫氏はその著作『成島柳北研究』において、森春濤の『新文詩』には西郷への批判と官軍よりの姿勢が表現されていると述べ、『花月新誌』については以下のように記している。

『花月新誌』はそれとは対照的に、西南戦争や西郷隆盛に関する詩歌をいっさい採用しなかった。強いて挙げれば、前田愛が指摘したように、同誌第二号(明治十年八月二十八日)にある春濤の詩「桃太郎討鬼島図」で、桃太郎を官軍に、鬼を薩軍に擬したとされる程度である。(成島柳北研究. ペリカン社, 2003. p. 218.)

しかし実際には『花月新誌』第9号(5月10日)には篠原國幹の戦死の報道や、第14号(6月26日)には読者投稿の漢詩「西南兵火灼天紅」(白鶴仙史)、第28号(11月9日)には政府側の山縣有朋の短歌「肥後の戦場にて」を掲載している。従って、『花月新誌』には西南に関する詩歌の掲載が全く無かったとするのは誤りである。

<sup>152</sup> 注109 近世歌文集(上). p. 452.

<sup>153</sup> 蛭原八郎. 明治文学雑記. ゆまに書房, 1994. p. 29.

<sup>154</sup> 注46 三代言論人集 2. p. 221.

<sup>155</sup> 注46 三代言論人集 2. p. 223.

<sup>156</sup> 注17 私の見た明治文壇 I. p. 244.

<sup>157</sup> 注58 新聞記者の誕生. p. 135.

<sup>158</sup> 幕臣であった渋沢栄一は、維新政府にも仕えたが辞職して実業界に入り多くの業績を残した。特に明治11年には商業会議所と銀行集会所の設立し、商工業や銀行関係の指導者となった。(注7 明治維新人名辞典. p. 488. 参照)。

<sup>159</sup> 注61 成島柳北研究. p. 128-129. 参照。

<sup>160</sup> 本文の引用は、『花月新誌』第65号(明治12年2月5日)。書下し文の引用及び大意は、谷口爲次. 紫史吟評詳解. 谷口廻瀾先生還暦記念刊行会, 1940. p. 3-4.。

<sup>161</sup> グラント(1822-85)はアメリカの軍人、第18代大統領(在任1869～1877)。南北戦争中、指揮官として頭角を現し、1864年合衆国陸軍総司令官となり、戦争を勝利に導いた。(世界史小辞典編集委員会. 山川世界史小辞典. 改訂新版. 山川出版社, 2004. p. 199. 参照)。

<sup>162</sup> 宮永孝. グラント将軍日本訪問記. 雄松堂書店, 1983. p. 134.

<sup>163</sup> 高橋基一については、朝野新聞の社員であることが明白であり、明治14年12月撮影の朝野新聞社編集局員の写真がある。(注46 三代言論人集 2. p. 171-172の間の写真)。また『英国国会沿革誌』(国立国会図書館デジタルコレクション)では、「翻訳人 島根県士族 高橋基一」と記されている。柳北については、「成島柳北閣」と記されている。

<sup>164</sup> 注102 読売雑譚集. p. 53.

<sup>165</sup> 注102 読売雑譚集. p. 54.

<sup>166</sup> 注102 読売雑譚集. p. 115.

<sup>167</sup> 北村透谷集. 明治文学全集 29. 筑摩書房, 1989. p. 129.

<sup>168</sup> 『幕末・維新期の文学』は1972年10月に法政大学出版局から刊行された。小池正胤は『日本近代文学』(18, 1973年)の「前田愛著『幕末・維新期の文学』」の中で、前田の近世から近代文学についての論考の特徴を以下の様にのべている。

氏の幕末・維新の文学を貫く美学とその方法は、人と作品に何種かの偏光プリズムを当てて解析し、それを「政治と文学」「有用と無用」、そして冒頭の詩篇の「狂愚」と「才良」にそれぞれ当てはめ、さらにどのように組み合わせていくか、ということにあるのではないかと考える。

<sup>169</sup> 前田愛. 幕末・維新期の文学・成島柳北. 前田愛著作集 1. 筑摩書房, 1989. p. 20.

<sup>170</sup> 注167 北村透谷集. p. 128.

<sup>171</sup> 注167 北村透谷集. p. 129.

- 
- <sup>172</sup> 徳富蘇峰・山路愛山. 中公バックス. 日本の名著 40. 中央公論新社, 1984. p. 468.
- <sup>173</sup> 注 3 海外見聞集. p. 311. 尾注参照。
- <sup>174</sup> 注 31 柳北詩文集. p. 274. 尾注.
- <sup>175</sup> 注 102 読売雑譚集. p. 131.
- <sup>176</sup> 前田愛. 硯北日録. 太平書屋, 1997. p. 721 の「解説」参照。
- <sup>177</sup> 柳北が「航西日乗」で詠んだ漢詩には題名が略されているものが多いが、『柳北詩鈔』（博文館 1894（寸珍百種；第 39 編 国会図書館デジタルコレクション））に収録されている「航西雜詩」には詩の題名が記され、さらに何編かの詩には三溪による評が頭注に記されている。この詩の評は「詠古能品」である。
- <sup>178</sup> 丸山眞男. 忠誠と反逆. ちくま学芸文庫. 筑摩書房, 1998. p. 37-38.
- <sup>179</sup> 注 100 成島柳北研究. p. 247.
- <sup>180</sup> 福澤諭吉全集 1. 岩波書店, 1958. p. 39.
- <sup>181</sup> 石川忠久. 詩経(下). 新釈漢文大系 112. 明治書院, 2000. p. 146.
- <sup>182</sup> 本文、書下し文、大意は、注 181 詩経(下). p. 140.
- <sup>183</sup> 福翁自伝. 福沢諭吉集. 新日本古典文学大系明治編 10. 岩波書店, 2011. p. 265.
- <sup>184</sup> 福沢諭吉. 学問のすゝめ. 岩波文庫. 岩波書店, 2008. p. 219 の小泉信三『学問のすゝめ』解説.
- <sup>185</sup> 注 180 福澤諭吉全集 1. p. 47.
- <sup>186</sup> 注 183 福翁自伝. 福沢諭吉集. p. 438 の補注.
- <sup>187</sup> 依田学海. 学海日録 4. 岩波書店, 1992. p. 199.
- <sup>188</sup> 中村正直（敬字）は幕臣で、昌平黌に学び後に教授となっている。英学を中心とした洋学も学んで慶応 2（1866）年には幕府から英国に派遣されていた。明治 4（1871）年には『西国立志編』（サミュエル・スマイルズ著）、『自由之理』（ジョン・スチュワート・ミル著）の翻訳を刊行し、啓蒙思想の普及に努めた。（平川祐弘. 天ハ自ラ助クルモノを助ク. 名古屋大学出版会. 2006. p. 2-32 参照。）
- <sup>189</sup> 注 188 天ハ自ラ助クルモノを助ク p. 93.
- <sup>190</sup> 注 100 成島柳北研究. p. 106.
- <sup>191</sup> 三好行雄. 近代文学史必携. 別冊國文學, 學燈社. 1987. p. 6.
- <sup>192</sup> 有馬毅. 寛政期以降の林家—林述齋の教学政策を中心に. 年報日本思想史. 2005, p. 17.

## 終章 総括と今後の課題

### 第1節 各章のまとめ

#### 第I章 幕臣としての歩み

幕臣としての柳北の歩みは決して平坦なものではなかった。幕末に柳北は幕政の刷新等を考えるがやがて弾圧を受ける。閉門中に洋学を学び、奥儒者の地位を失いながらも騎兵頭等を歴任するが、まもなく幕府は崩壊して無用の人となった。柳北は本来は幕府に忠実で、旧態依然な勢力への批判から狂詩を賦し、上層部に評価される機会には余り恵まれなかった。しかし花街の金銭本位の人間関係を見ていた柳北は、人間社会の裏側にも目を向け、散文の創作に励むことで、独自の世界を歩み出していった。

#### 第1節 幕藩体制の揺らぎの時代に生まれて

奥儒者である成島家の嫡男柳北は、漢籍の他に和歌を学び、『源氏物語』を少年期には読破していた。柳北は後年『花月新誌』に自作の短歌を載せ、また父稼堂の著した「紫史吟評」を、さらに林述齋の歌論を抄訳した「述齋偶筆ぬきがき」を連載した。それらの文芸は明治時代の読者にも理解してもらえる内容であろうと、柳北が確信したものであった。

柳北は父の死後に『続徳川實紀』等の編纂に携わり、また日記も書き出していた。漢詩も盛んに作りながら、一方では市井の儒者寺門静軒の『江戸繁昌記』や明末清初の文人余懷の『板橋雜記』を読むなどして社会にも目を向け出していた。静軒は武家社会の最下層に属し、江戸の街の繁栄の裏側を描いた『江戸繁昌記』を描き、幕府から弾圧を受けていた人物であった。また余懷は明の遺臣として、清初に世を避けて生きながら、明代の代表的な花街を描いた『板橋雜記』を著した人物であった。

静軒や余懷のような社会の裏側でひっそりと生きていった人物の創作に目を向けつつも、柳北は概ね儒家の嫡子として、将軍家茂によく仕え、父祖の仕事を忠実に守るという目標は半ば達成していた。しかし養子であったされる柳北は、成島家の血縁である女性との最初の結婚には破れるなど、心の内には悩みを抱えた青年期を過ごしていた。

#### 第2節 『柳橋新誌』初編の創作

柳北は、二十代前半から柳橋中心の花街に足を向けるようになった。そして花街の裏側に潜む金銭を主流として人間関係を目にして、最初の著作で、漢文戯作である『柳橋新誌』初編を起草する。『柳橋新誌』を著した目的は、花街の中に一つの社会を見出し、人間社会全体の問題に言及しようとしたと考えられる。花街という美の世界が金銭本位の人間社会の縮図でもあることを柳北は把握していたのである。しかし青年柳北は、金銭本位の柳橋を『板橋雜記』で描かれた風情ある花街に変わることを願い、才子佳人の出会いの場となるような理想をもっていたのである。『板橋雜記』は中国明代の遺臣であった余懷が清代になってから明代の遊里の繁栄を記したものであった。

#### 第3節 海外への関心と幕臣としての苦悩

幕臣時代から海外への関心が深かった柳北は、蘭語、英語、仏語を習得していたとされている。神田孝平や福沢諭吉等の洋学者とも知り合い、洋学の知識を吸収しながら幕藩体制にも改善すべき点があることを考えるが、誹謗により閉門蟄居となり、奥儒者としての職務を失うこととなった。しかしこの蟄居の間に、柳北は洋学を真摯に学び、日本の進路に目をむける姿勢をとり始める。

やがて閉門蟄居を許された柳北は、奥儒者の職は解かれていたが、軍事や外交面の才能が評価されて、慶應 3 (1867) 年には騎兵頭となった。騎兵頭は老中支配に属し、与力総隊より選出して組織された洋式騎兵隊を統率する役目を担うものであった。さらに慶應 4 (1868) 年 1 月には通商、貿易その他、外国人に関する事務をつかさどった外国奉行に、4 月には会計副総裁に任ぜられた。幕府の仏国からの軍事顧問シャノンヌとの交流も柳北に海外への関心を深化させた。しかし時代の潮流は幕藩体制から薩

長中心の維新政府に政権が移り、柳北はその活躍の場を失うこととなった。

#### 第4節 第I章のまとめ

柳北は『柳橋新誌』初編を幕臣時代に完成させている。それは柳北が奥儒者としての栄光に包まれて『徳川実記』等を訂正補修した時期でもあった。柳橋を舞台とした『柳橋新誌』は、中国（清）文学の影響を受けたもので、柳北が社会への目を開いた出発点となった。花街の金銭本位の人間関係を見ていた柳北は、人間社会の裏側にも目を向け始めたが、日本の国状を案ずることから西欧文化にも関心を払うようになった。そのような状況の下で幕府の将来を案じた柳北は、旧態依然な勢力を批判するために狂詩を賦し、それにより閉門蟄居を経験する。やがて柳北は幕政に復帰し、洋学への造詣の深さ等が評価されて最終的には外国奉行や会計副総裁の要職に就き、また仏国の軍事顧問との交流もあった。しかし幕藩体制が崩壊して薩長中心の維新政府に政権が移ると、柳北は社会的に活躍する場を失い市井の人となったのである。

## 第II章 明治維新直後の柳北

幕府崩壊後に市井の人となった柳北は、隠居して短期間の隠遁生活に入る。しかし親族に誘われた山陽地方への旅行等から社会への関心を再び取り戻した。その時の国内の游记が「航薇日記」であって、江戸中心の国家観から日本全体に柳北は目を向けることとなった。東京に戻った柳北は漢詩「秋懷十首」において、幕臣としての職務に励みつつも幕府が崩壊したことの無念さを切実に詠んでいる。また創作では『柳橋新誌』二編において、文明開化の浅薄さを批判して、上辺だけではなく内容のある文明開化の必要性訴えている。この時期には社会での「新聞」の重要性も把握して、徐々に文明批評家として第一歩を踏み出しつつあった。幕府崩壊から海外渡航までのほぼ4年半の歳月は、柳北にとって最も辛い時期ではあったが、自己の役割を模索するための期間であった。そして幕臣時代に培った学識や海外の文化への造詣の深さが、柳北に維新政府下で生きることの基盤となったのである。

#### 第1節 無用者意識の下で

明治維新によって柳北はその社会的生命を失った。新政府からは左院に召されたが、これを辞退して市井の人となり、柳北は東本願寺の経営する学校で教師をしたりする生活をおくった。漢詩や自伝『澤上隠士傳』の中で、旧幕府への追懷の念を述べているが、柳北は社会から全く隔絶した生活をおくっていたわけではなく、明治2（1868）年6月には「東京珍聞」という半紙8枚を假綴にした手製の新聞を出していた。

無用者の意識の下でも、柳北は社会での活動の場を模索していた。柳北は幕府への追懷の念をもちつつも、幕府に殉じて一切の活動を止めて社会から隔絶される状況からの脱出を目論み始めたのであった。

#### 第2節 「航薇日記」の創作

「航薇日記」は柳北の山陽地方への国内游记である。自然や風物を詠んだ漢詩や短歌の挿入もあるが、文明批評の萌芽が盛り込まれ、花街を舞台とした『柳橋新誌』初編と相通ずる面のある作品と考えられる。柳北が社会的地位を全く喪失した時期に書かれたものであり、過去の生活への追懷の念と無常観を背景としている。しかし柳北は江戸以外の地方の人々との交流や漢詩人との出会い等から、日本の国というものの全体への視線を向けるようになった。また社会の底辺層にも目を向けるようになったが、その契機は柳北が山陽への旅で知った貧しい花街やその中で必死に生きる芸娼妓との出会いと別れであった。

#### 第3節 『柳橋新誌』二編の創作

柳北は幕府滅亡によって、『柳橋新誌』初編では見過ごしていた『板橋雑記』作者の創作の意図を、身をもって体験した。それは『板橋雑記』の作者余懷が明から清への王朝の変遷の中で時流を避け、遊里を描くという文芸の中に自己の心情を込めるという前王朝への追懷であった。柳北もその姿勢に倣って、

『柳橋新誌』二編を創作したのである。『柳橋新誌』第二編成立間もない頃の柳北は、真宗大谷派（東本願寺）の好意で、その教団の初等教育の学校教師として過ごしながらも、幕府崩壊の悲しみも持ち合わせていた。

幕府崩壊による無常観は未だ柳北の中に残ってはいたが、日本が西欧と同等の文化国家になることを希求する点は、『板橋雑記』の作者と大いに異なる点である。柳橋の花街が滑稽化され、またそこを舞台に維新政府への批判や浅薄な文明開花の裏側が描かれ、文明批評的色彩が初編よりも強まっている。柳北は読者に対して、欧米での新聞による自由な言論活動の状況を示し、日本の国の文化の進展の必要性を述べている。

#### 第4節 第Ⅱ章のまとめ

明治維新によって市井の人となった柳北は、明治2（1869）年には親族と共に山陽地方への国内旅行にでかけた。妹尾を中心に四国にも脚を伸ばした柳北は、僻地である妹尾で岸田冠堂（医師で漢詩人）の出会い心の交流の場をもった。この山陽道への旅日記が「航薇日記」で、維新直後の柳北は山陽道への旅で地方社会の人物や自然に触れ、社会への関心の萌芽を徐々に成長させていった。

「航薇日記」によって地方の光景を描いた柳北は、帰京後『柳橋新誌』二編を完成させた。そこでは柳橋の花街を舞台に維新政府への批判や文明開花の裏側が描かれ、文明批評的色彩が初編よりも強まっている。『板橋雑記』作者余懷の創作による旧政権への追慕という行為に影響を受け、柳北は『柳橋新誌』二編の終わりの部分で浅薄な文明開化を批判し、維新政府の政策の貧しさを述べている。また欧米では新聞による言論の自由があることを力説し、これからの日本の進むべき方向の在り方を述べている。

維新前の柳北は、『柳橋新誌』初編で柳橋という江戸の花街の裏側を描き、維新後の「航薇日記」では柳北は山陽や四国地方の社会を描いている。「航薇日記」での柳北の社会の裏側への視線はより現実性をもったものとなり、病を抱えながらも客と接する遊女には人格も認められていない悲惨な状況が記されている。『柳橋新誌』初編から「航薇日記」によって江戸から山陽地方に柳北の見聞し体験した世界は拡大された。さらに『柳橋新誌』二編で維新政府への批判を込めて花街の裏側を描くことで、柳北の中の人間社会の裏側に潜むものへの探求心は徐々に深められていった。

### 第Ⅲ章 柳北と海外体験

柳北は東本願寺の運営する学校で教師としての勤務する仕事に就いていたが、まもなく東本願寺に翻訳局を設置する計画があり、柳北は東本願寺の人々と洋行する機会に恵まれた。東本願寺は幕府側であり、維新後の布教に活路を見出そうとしていたのであった。訪問国は仏国、伊国、英国、米国の4カ国であったが、欧州までの航路では亜細亜の国々にも立ち寄った。亜細亜地域では、文化の遅れた状態の地域の人々を見て、日本の国の文化の進展を痛感した。また船中や上陸地では過酷な自然に遭遇した。欧州での最初に訪れた近代国家は仏国であり、柳北は近代文明を背景とした社会を見学しつつ、那破侖第一世と三世を追慕して漢詩を詠んだり、観劇や外国語の学習も経験する。次に訪れた伊国ではサヴォイア家が中心となった統一後まもない国の状況から、幕藩体制を追慕しつつも日本の国の進路に思いをはせる。また弗稜蘭（フィレンツェ）では過去の君主であるメディチ家やハプスブルク家を追懐する住民の姿に共感し、ポンペイの遺跡見学から悠久の時の流れに心を動かされる。第三番目に訪れた先進国の英国では、産業革命による近代国家の状況を柳北はつぶさに見学した。立憲君主制である英国の繁栄を評価しつつも、柳北は社会の裏側に潜む貧しさにも目をむける。最後の訪問国の米国では、柳北は亜細亜地域よりもさらに過酷な自然と対決しながら、大陸横断鉄道で大陸を横断した。娯楽のない車中で、柳北は自己を省みながら漢詩を詠む日々を過ごし、次第に帰国後の人生に希望を持って臨む姿勢を養ったのであった。

船中と車中での生活が主だった亜細亜地域と米国で、柳北は自然と対峙しながら自己と向き合い、西欧では歴史の変遷の中で社会の進歩を直接見聞した。柳北は幕臣としての立場を忘れることはなかったが、維新政府の人々とも交わり、日本の国への帰属意識を徐々に芽生えさせていった。

### 第1節 亜細亜周辺から仏国迄の航路

欧米への旅の途中で、中国の一部である香港を訪れた柳北は、文化の遅れた地域の不潔感のある社会を味わった。南下して、塞昆（サイゴン）では灼熱の夜という厳しい自然にも遭遇し、星嘉坡（シンガポール）では街の雑踏を目にした。さらに星嘉坡（シンガポール）から乗船した中国人の困窮した様相から近代国家の必要性を痛感した。亜熱帯地域での自然の過酷さと、珍しい風物に接しながら舟は徐々に欧州に向うが、途中蘇ス（スエズ）運河付近では水夫と英人乗客のトラブルがあり、文明国である英国人の横暴に柳北は憤慨している。亜細亜の人々にも欧米人にも柳北は人間としては平等な視線をもっていた。

「航西日乗」に対しての先行研究では、今まで亜細亜地域について論じられることはなかったが、列強の植民地化が進展している亜細亜地域を直視した柳北は深く心に思うことがあったと考えられる。亜細亜周辺から仏国迄の航路では厳しい自然との対決や、限られた人々との交流だけで、厳しい環境の中での旅の始まりであった。柳北は厳しい状況下で自己とそして自国（日本）と真に向き合うこととなったのである。エルバ島を通過直後に柳北は、那破侖第一世を偲んだ詩を詠んでいるが、そこでは人生の栄光や悲慘を超越した心境を表現している。柳北は次第に無用者としての悲哀感を克服し、海外の見聞そのものに集中していくのであった。

### 第2節 仏国

仏国では公使館への出入りや岩倉使節団の人々とも交流の場をもちつつ、柳北は多様な場所を見学した。巴里の鳥兒塞（ベルサイユ）宮殿では、王朝の変遷を偲びながら柳北は那破侖第三世の悲運に同情をし、栄枯盛衰に思いを馳せていた。また近代的な施設を見て回り、整備された刑務所などにも関心をもった。日本の岩倉使節団との邂逅もあり、木戸孝允や岩倉具視との交流もあった。さらに幕臣時代の仏人顧問のシャノワヌとも再会した。柳北は仏国の社会の実情を見ながら、劇場や花街にも足を向けるなど、人間として積極的に生きる姿勢を回復しつつあった。また近代文明の中での雪の夜の風景が風流であったと帰国後に文章の中に記したり、近代文明の必要性を感じた漢詩を詠んだりしている。

### 第3節 伊国

柳北が訪れた頃の伊国は、北方のサヴォイア家を中心となって、近代国家として統一されたばかりであった。柳北は米蘭（ミラノ）での新聞社の見学に感動して後、弗稜蘭（フィランツェ）では過去の王朝の宮殿の見学から、旧幕府への追懐の念を深めていった。しかし羅馬（ローマ）で統一国家伊国の皇太子夫妻に会釈するなど、近代国家への統一の必要性も痛感した。近代国家として出発したばかりの伊国を歩きながら、柳北は幕臣としての立場を心中に秘めつつも、統一された国家の建設に立ち向かうことの必要性を徐々に考えるように至ったのである。

また柳北は羅馬や南部のポンペイの古代遺跡を見物して、過去の歴史の中に悠久な時の流れを感じたりしていた。ポンペイの街に李白のような酒豪がいたのではないかという意味の漢詩を詠んでおり、伊国の風物を味わった。風物を味わいながらも、柳北は栄枯盛衰という歴史の流れを認めざるを得なかったのである。柳北は以前から古銭の蒐集をするなど過去の文化財に関心をもっていたが、伊国での古代遺跡の見学から柳北は次第に歴史を見つめ直し、過去の歴史を重視しながら統一国家としての日本の建設に心を向けるようになった。

維新直後の一時期、自己を見失いがちな柳北であったが、「航西日乗」の背景となった欧米社会での直接の見聞や体験、主として伊国での体験から帰属意識が次第に変容し、日本の国の進展に努めることを



重要視するに至ったと考えられる。帰国後の柳北は、日本の社会の進展に集中しつつも、幕臣として旧幕府への礼を失うことはなかった。

#### 第4節 英国

倫敦で、柳北はかつての幕臣時代の知人大鳥圭介に再会する機会に恵まれた。社会見学の一環として、刑務所を見学したり、また維靈敦（ウェリントン）将軍の像を見たりして、往時を偲んだりしていた。

ヴィクトリア女王の治世であった英国は、立憲君主制の下で、一部の宮殿を一般庶民や外国人（柳北一行）が自由に見学できるほどの近代国家としての繁栄があった。帰国後の柳北は明治12（1879）年に共著で『英國國會沿革誌』を翻訳した。柳北は欧州では国会の法規や習慣が次々と変遷しており、ついに今日のように完成したことを述べている。それは柳北が読者を啓蒙することによって、日本の国に議会制度が到来することを願っていたと考えられる。

柳北は「航西日乗」では近代国家としての英国の良い面を主として描いているが、社会の底辺にも目を向け、英国から米国へ航海に出発する際には英国が併合した阿爾蘭（アイルランド）の人々の下賤な様相を悲哀に満ちた筆致で記している。

#### 第5節 米国

米国での旅の記述は「航西日乗」には収録されていないので、『柳北詩鈔』に収録された「航西雜詩」の漢詩から柳北の心情を読み取ることが必要であると考えた。そこには人間柳北と雄大な自然との交流から、柳北が自然や人間社会を見る視野を広げていった様相が表れている。

柳北が訪れた頃の米国は、南北戦争後に国家として統一されたばかりの状態であり、先住民族や奴隷の問題も未解決であった。また欧州と異なり、厳しく過酷な自然とも遭遇した。その中で、米英戦争の激戦地を訪れ、また大陸横断鉄道では列車事故を経験した。過酷な自然との対決を経て、柳北は米国を東部から西部へと横断した。厳しい旅の経験は、柳北に自己との対話を促して、柳北は自分の中に未だ生きていく可能性があることを知ったと考えられる。米国での体験は、柳北に日本の国の文化の進展に自己の人生を捧げようという方向を模索させた。また米英戦争の歴史を知ることによって横暴に権力を振ろうとする者（国）と対決する姿勢や国家の独立の保持の必要性の意義を柳北は学び取ったのである。

#### 第6節 第Ⅲ章のまとめ

柳北の海外游记「航西日乗」は真宗大谷派の人々との外遊から書かれ、訪問国は仏国、伊国、英国、米国と途中の航海で立ち寄った亜細亜の国々であった。「航西日乗」は未完で、米国での記述はないが、米国滞在中の漢詩は「航西雜詩」（『柳北詩鈔』巻三）としてまとめられている。

仏国では近代文明の都市の生活に柳北は親しんだが、伊国の弗稜蘭（フィレンツェ）では、土地の人々の話から、「而シテ此府ノ人民猶故君多斯加納王ヲ追慕シテ今ノ伊王ニ心服セズ」という記述が見られる。1861年にはサヴォイア家が統一後の伊国王となったが、民には旧君主（ハプスブルク家）への追懐の念があったのである。しかし羅馬（ローマ）で、柳北は統一国の皇太子（後のウンベルト一世）夫妻に丁寧な挨拶をしたことを記している。さらにポンペイの古代遺跡の見学から遺跡の保存の必要性を学んだ。伊国の次に英国を訪れた柳北は、立憲王政の必要性を知るが、その一方で産業革命下での近代化された社会の裏側にも目を向ける。最後に訪れた米国では、柳北は米英戦争の米国側の英雄である過蘇格都（スコット）将軍を称える漢詩「過蘇格都古戰場」（OR1096）を詠むなど米国の国状にも関心をもった。

柳北にとっての重要な体験は主に伊国と米国での体験であった。伊国の体験では、柳北の中に変化しないものは過去の君主への尊重の念である。変化がみられたものは統一された国家の必要性に気付いたことであった。帰国後に柳北は旧主君尊重の念をもちつつも、帰属意識を日本の国の構成員へと変容させていったのである。

米国での柳北は主として大陸横断鉄道での旅が中心であった。漢詩「過蘇格都古戰場」には、「史」「志」

「景」の全てが詠みこまれている。柳北は楠木正成を称える漢詩を詠んだりする等、歴史上の人物特に命がけで戦った武人へ敬意の念をもっていたが、国の独立維持のための戦いを評価した点に深化が見られたのであった。

伊国での体験から柳北の中での帰属意識は幕府や旧主への帰属を持ちつつ、徐々に日本の国の構成員としての帰属に変容していった。また米国では、戦跡の中に統一国家の独立が維持されるために多く犠牲が払われた戦いがあったことを見聞し、柳北は国の独立の必要性を心に刻んで歴史への思索を深化させた。柳北の中の帰属意識と、国や歴史への思いは徐々に変容していったのである

#### 第IV章 帰国後の活動

帰国後の柳北は当初は翻訳家としての道を歩もうとしたが、本願寺との関係が希薄となり、以前から関心のあったジャーナリストへの道を歩むこととなる。柳北以外にも幕臣からジャーナリストへ転じた人々は多かった。柳北の幕臣時代の洋学の師柳川春三や、海外体験のある栗本鋤雲や福地桜痴等であった。前田愛は、これらの旧幕臣ジャーナリストたちが拠り所としたのは、江戸社会であり文化であったと指摘している。その前田の指摘を踏まえ、五十嵐暁郎は旧幕臣の維新後の社会的な活動の背景には、彼らが経験して育まれ生活した江戸市井の社会意識と幕末に体験したヨーロッパの市民社会の思想が重なり合って、リベラルな発想が息づいていたことを指摘している。柳北も幕末には幕政批判をする等のリベラルな発想を持ち合わせ、また発禁処分を受けた寺門静軒の『江戸繁昌記』を愛読したりしていた。従って前田や五十嵐の指摘は的確ではあるが、柳北は柳橋の花街等で金銭本位である社会の裏側にも目を向けており、幕末の文化に対しては共感と批判の両面をもっていて、ヨーロッパの市民社会の思想を理解しやすかったと考えられる。

柳北は海外体験が加わって人間社会に対してリベラルな視点を深化させた。また柳北の理想とする自由な言論活動は、維新政府の政策とは相容れないものであり、次第に柳北と政府との間の溝は広がっていった。やがて政府の弾圧を受けた柳北は政府との直接対決よりも、読者の思想の進展を重視するようになり、『花月新誌』を発行した。

##### 第1節 『朝野新聞』での政治や社会への批判

帰国当初は翻訳家をめざした柳北であったが、やがて旧明石藩の藩主が後援していた『公文通誌』に招かれて局長となった。柳北が局長に迎えられるに際して『公文通誌』の名称は『朝野新聞』に改題された。柳北は主に論説欄や雑録欄を担当し、後に末廣鉄腸を編集長に迎えている。

維新政府の裏側に潜むものへ目を向けようとした柳北であったが、自由民権運動の高まり等の中では政府批判の言論活動に対しては弾圧もあり、他のジャーナリストたちと収監されたこともあった。厳しい弾圧の下で、柳北は政府との直接対決よりも読者の啓蒙を考えるようになった。それは柳北が技術面だけの国の文化的向上を嘆き、精神面での向上を必要と考えていたからであった。

柳北は福沢諭吉の『學問のすゝめ』七編が共和制の推進等であると誤った解釈がされた際に、明治7(1874)年11月7日の『朝野新聞』に福沢自身の反論である「學問のすゝめ評」を掲載させて、啓蒙思想を擁護する立場をとった。さらにその直後の11月9日の『朝野新聞』の投書欄で柳北は西欧文化の模倣だけの底の浅い文明開化の風潮を批判し、また幕藩体制を忘れて維新政府に一方的に歩み寄る士族の姿勢を批判して、忠厚を基盤とする文明開化の道を目指すべきであるという意見を述べている。『柳橋新誌』や「航西日乗」でその萌芽を見せた柳北の文明批評的視点が、『朝野新聞』の雑録欄等の執筆から深められていったのであった。

##### 第2節 『花月新誌』の創刊

柳北は西欧諸国でも文芸が重視されている状況を見聞したことから、日本人の精神面での発展を促進

させるために、文芸による啓蒙を考えるようになった。明治10(1877)年1月には詩文雑誌『花月新誌』を創刊して、漢詩文から短歌、遊里を舞台とした作品の他に、西欧の文芸を自ら翻訳して掲載した。

森春濤の『新文詩』が川田瓊江等の政府高官の漢詩文を掲載したり、また成章社発行の『古今詩文詳解』が青少年の漢詩の添削などに力を入れたりしたことに対して、柳北の『花月新誌』は在野の立場で、青少年の漢詩の添削ブームには批判的であったことが特徴である。柳北は西欧の学問を青少年が学ぶことを主張したが、一方では旧幕臣系の漢詩人大沼枕山等の作品を掲載するなどして、江戸追懐の念を盛り込むことも忘れていなかった。従って『花月新誌』に掲載された文芸には、大沼枕山の漢詩のような江戸市井の社会意識を背景とした伝統文芸の作品とヨーロッパの市民社会の思想を背景とした翻訳作品があり、多様な内容であった。少年時代の森鷗外も『花月新誌』に連載された「楊牙兒ノ奇獄」を愛読しており、後年鷗外が西欧文学の翻訳に力を発揮したことを考慮すると、『花月新誌』は柳北の願い通りに、青少年の文芸観によい影響を与えたものと考えられる。柳北は伝統文学と西欧文学の双方を取り入れた幅広い文学を希求していた。それは柳北の理想とする文化の進展が、日本の伝統の良い面を受け継ぎつつ、西欧の良い面を見習うというものであったからであった。

### 第3節 柳北の翻訳作品

柳北は海外体験から、文学以外の思想や社会問題への関心を深めた。ジャーナリストとしての道を歩み、読者の啓蒙の必要性を痛感して海外の作品の翻訳を行い、『朝野新聞』や『花月新誌』に掲載した。「小仙窟」では英国の哲学者培根(ベーコン)の思想の一端を紹介し、近代の合理主義的思想の概観を提供することで読者の啓蒙を図ろうとした。しかし「倫敦小誌」では当時の英国の繁栄の裏側に潜む貧困の問題を読者に提示した。柳北は産業革命が進展している英国社会の裏側を問題視することで、先進国を批評する視点を養っていたのである。

しかし西欧文学の面白さを一般の読者へ提供するために「楊牙兒ノ奇獄」を簡略して掲載した。さらに「女優馬利比越兒ノ審判」では、病軀をおして翻訳し、近代国家の裁判や法のあるべき姿にも言及した。柳北はジャーナリストとしても、また翻訳家としても、読者に対しては最善を尽くしてその任を果たそうと努めたのである。『花月新誌』とほぼ同時期に出版された中村正直の『同人社文學雑誌』(明治9(1876)年から16(1883)年)にも西欧文学の翻訳作品が掲載されたが、それは知識階級の青年を対象とした高度な内容のものであった。

### 第4節 文化の進展への努力

柳北が「航西日乗」で記した伊国の弗稜蘭(フィレンツェ)での懐旧の念や、「航西雑詩」で詠んだ米国での英国の旧植民地政策の横暴な面への批判の姿勢は、帰国後の国内での遊記『熱海文藪』中の作品にまで受け継がれていった。『熱海文藪』の中で柳北は、徳川将軍家を偲んだ漢詩を残している。しかしそれは幕臣として旧主への礼儀であって、柳北は最終的には旧幕府からは自立した個人であって、武士の世に戻る必要はないという考えをもつに至った。『朝野新聞』上では、西南戦争を引き起こした西郷隆盛を後進的人物と批判している。

維新政府の裏側に文明批評的視点をあてた柳北ではあったが、維新政府側出身の丹羽純一郎(翻訳家)や松浦辰男(歌人)とは文芸において交流した。文化人としての柳北は幕臣や政府側という立場を超越しており、そこには個人の精神を重んじる倫理があった。

柳北は江戸時代末期の文芸で明治時代の読者に伝えたいものを『花月新誌』に掲載したりしたが、米国のグラント将軍の接待にもあたり、日光東照宮等の過去の文化遺産や歴史的遺産を尊重する立場をとった。その後柳北は政治的には立憲改進黨に入って、漸進的な改革で日本の国の社会的な面や文化的な面での発展を主張した。また「讀賣雜譚」では開拓使官有物払下げ問題を追及するなど、政府の弾圧を気にしながらも自己の信念を曲げないで、ジャーナリストとしての道を歩もうとした。

## 第5節 帰国後の活動の特徴

日本の文化の向上に向けて柳北はその生涯をかけて取り組んだ。柳北のめざす文化とは、日本の伝統文化の良い面をふまえつつそこに西欧の文化を盛り込んだもので、日本独自の文化を創造していくというものであった。それは海外によって欧米社会の良い面も悪い面も見聞したからであった。「航西日乗」で描かれた海外体験では、柳北は英国では産業革命で構築された社会の裏側に人々にも目をむけて、柳北の中にあった文明批評的視点が深化されて帰国後の翻訳作品をもたらした

しかし柳北の中で変容したものもあった。新たに日本という国への帰属意識を持つに至ったことであった。『柳橋新誌』初編（万延元年（1860）成立 明治7年（1874）4月刊行）では江戸の花街の裏側に目を向けていた柳北であったが、維新後には明治2年（1868）の柳北の山陽地方への旅行から、国内游记である「航西日記」が書かれた。維新直後の柳北は自己の居場所を亡くした喪失感に支配されていたが、地方社会の人物や自然に触れ、社会への関心の萌芽を徐々に成長させたのであった。柳北の社会への目は江戸から関西・中国地方へ広がりを見せたのであった。『柳橋新誌』二編（明治4年（1871）3月成立、明治7年（1874）2月刊行）では、浅薄な文明開化を批判するなど、柳北は日本の国というものを徐々に考えるようになっていった。

「航西日乗」（明治5（1872）年～6（73）年）の明治6（1873）年3月27日の記録には、羅馬のトレヴィの泉付近での以下の記述がある。

デラビ」ノ泉亦古跡ノ一ナリ此處ニテ伊國ノ皇太子及ビ妃ニ逢フ余等帽ヲ脱シテ禮ス太子亦慰懃ニ答禮セラレタリ

クイリナル宮ハ即チ今ノ王宮ナリ公堂及ビ樓閣園池ノ覽縦ヲ許サル頗ル美麗ニテ有リキ<sup>1</sup>

羅馬での柳北は統一国伊国の皇太子（後のウンベルト一世）夫妻に丁寧な挨拶をしている。統一国家の王宮は大変美しく、庭園は一般にも公開されている様子を柳北は記している。統一国家としての伊国を旅したことで、日本にも統一された近代国家が必要であることを柳北は考えていたのである。

柳北は徳川家を尊重しつつ、海外体験から特に伊国の統一などから統一国家の必要性を学び、日本の国全体を見渡す必要性を痛感したのであった。維新政府側の木戸や岩倉との交流もあり、柳北は江戸から日本へ、旧幕臣から統一国家日本の構成員として帰属意識を変容させたと考えられる。

明治7（1874）年11月9日の『朝野新聞』の投書欄に柳北は無題で文章を掲載しているが、その中には全国の士族に対して統一国家の必要性を呼び掛けた以下の記述がある。

迂生窃カニ謂フ、静岡ノ士族ハ宜シク徳川氏ノ恩ヲ忘レズ、鹿児島ノ士族ハ宜シク島津氏ノ徳ヲ慕フ可シ。是レ即チ忠厚ノ道ニシテ、其道ヲ大ニスル時ハ即チ愛国トナル而已。<sup>2</sup>

柳北の投書欄の掲載の少し前、11月7日には福沢諭吉が「學問のすゝめの評」を『朝野新聞』に掲載していて、「日本の人民何れも皆この國を以て自家の恩を為し、共に全國の獨立を守らしめんとするの趣意なり」という国の獨立の必要性をのべている。柳北は福沢の意見を評価する立場をとっていて、海外から帰国後には帰属意識が一国のレベルに高められていった。

ここで「忠厚」という語は、誠実で情に厚いという意味ではあるが、その出典は詩經の大雅の「行葦」の詩序「行葦は忠厚なり」<sup>3</sup>にある。「行葦」の冒頭は、「敦彼行葦 牛羊勿踐履（敦彼たる行葦 牛羊踐履する勿かれ）」<sup>4</sup>で、その大意は「叢がる道端の葦、家畜の牛羊に踏ませてはいけない」である。柳北は中国の古典から含蓄ある言葉を引用して全国の士族に訴えたのであった。

柳北は啓蒙思想家福沢諭吉とは、幕末から交流を続けていた。福沢の説く議会制度のある統一国家の形成を帰国後の柳北は目指すようになっていった。海外に行く前の柳北の帰属意識を考えると、『柳橋新誌』初編（万延元年（1860）成立 明治7年（1874）4月刊行）では江戸の花街の裏側に目を向けていた柳北であったが、維新後には明治2年（1868）の柳北の山陽地方への旅行から、国内游记である「航薇日記」が書かれた。維新直後の柳北は自己の居場所を亡くした喪失感に支配されてはいたが、地方社会の人物や自然に触れ、社会への関心の萌芽を徐々に成長させたのであった。柳北の社会への目は江戸から関西・中国地方へ広がりを見せたのであった。『柳橋新誌』二編（明治4年（1871）3月成立、明治7年（1874）2月刊行）では、浅薄な文明開化を批判して、欧米では新聞による言論の自由があることを力説している。柳北が日本の国というものを意識するようになっていった状況が考えられる。

柳北は「航薇日記」で記されたように国内の旅行から江戸以外の日本を知り、また「航西日乗」で記されたように海外体験から近代的統一国家の必要性を知り、日本の国全体を見渡す必要性を痛感したのであった。仏国の巴里で柳北は公使館に出入りをし、維新政府側の木戸孝允や岩倉具視との交流の場を持ったこともその一因である。柳北は江戸から日本へ、旧幕臣から統一国家日本の構成員として帰属意識を変容させ、最終的には武士という身分から日本の「人民」としての帰属意識をもって活動したものと考えられる。

#### 第6節 第IV章のまとめ

明治5（1872）年海外の体験で柳北は、西欧諸国での見聞から、仏国では近代文明の都市生活を体験して西欧化の急務を知り、また伊国では以前の王朝を偲びつつも統一された国家の必要性を知った。さらに英国での立憲王政化での産業革命の進展を見聞し、柳北は議会政治が日本に導入されることを痛感し、帰国後には『英國國會沿革誌』（趙舞爾／著）を『朝野新聞』の同僚である高橋基一とともに翻訳し、出版している。最後の米国では、独立戦争の戦跡の見学や大自然を切り開いていく近代文明の利器を直接目にした。外遊中に柳北は維新政府の人々とも交わり、日本の国への帰属意識に徐々に目覚めていった。これらの体験から柳北は西欧社会の裏側にも目を向け、英国での貧しい人々の姿を描いた「倫敦小誌」の翻訳も行った。また伊国での古代遺跡の保存や米国での米英戦争の戦跡の見学や、大陸横断鉄道による体験は、グラント將軍の接待係としての活動や日光東照宮の保存運動という活動の場を柳北にもたせたのであった。

柳北の過去の歴史を踏まえた上で西欧の文化を盛り込むことで独自の文化を創造する姿勢は、主として海外体験によって強く方向づけられたのであった。柳北は既に幕末から志していた日本の国への西欧文化の受容のために明治以降も一貫して活動し、またその手法としては、『朝野新聞』や『花月新誌』という大量伝達の手段を通じて、一般の読者に欧米の社会を紹介させることに尽力し、西欧文芸の翻訳作品を掲載した。西欧文芸の翻訳と同時に、柳北は父祖や父祖周辺の人物の創作による幕末の伝統文芸を重視するようになったが、それは柳北の海外体験も主な要因であった。「陳腐閑語第十二号」の中で、「文明ノ諸国ニ於テ詩賦ヲ貴重セザル無シ」<sup>5</sup>と文芸を尊重する姿勢を評価している。柳北が幕末の文芸を何点か『花月新誌』に連載したことは、それらの文芸を後世に伝えたいと考えていたからである。柳北が掲載した幕末の文芸作品は、「述齋偶筆ぬきかき」等であった。最初に取り上げた林述齋の「述齋偶筆ぬきかき」の「述齋偶筆（七則）」（明治10（1877）年8月16日 第20号）には、林述齋と老中であった松平定信（宝暦8（1758）年-文政12（1829）年）の交流が描かれ、述齋が定信の月や花を愛する面を評価した内容となっている。述齋と定信の交流には共に雪月花を愛する対等の人間同士の結びつきが描かれていることが特徴であった。「述齋偶筆」という伝統的な文芸の中に、明治以降の読者にも理解できる一面を見いだした柳北は、詩文雑誌『花月新誌』という大量伝達の手段で読者に呈したのであった。

帰国後の柳北は国の独立を重視した福沢諭吉の啓蒙思想に共感して、その正しい普及に協力した。また一方では日本の文化の良い面に西欧文化の伝統を盛り込んで、文化の進展に尽力した。柳北の帰国後の活動は新聞や雑誌を通じることとなされ、日本の国を欧米の水準に斬新的に向上させることに取り組むという目的意識に根ざしていた。

## 第2節 結論と今後の課題

### 1 本研究の結論

明治維新後、成島柳北は独自の道を歩んだ。明治5(1873)年には真宗大谷派の人々と欧米を旅する機会に恵まれたが、真宗大谷派の内部事情から東京の翻訳局が廃止され、柳北は以前から関心をもっていた新聞の世界に入り活動を展開した。柳北以外にも旧幕臣の中で、新聞の世界へ転身した人物は数多くいる。彼らの多くが海外渡航の経験者でもあった。その中で、柳北より四歳下の福地桜痴は明治政府に歩みよって裏切られて後、再起して歌舞伎座を創設して演劇界に助力した。また栗本鋤雲は柳北よりも十三歳年長で文明開化の時代でも儒教倫理に従ってその人生を終えた。これらの人々と比較すると、柳北は維新政府の一部の人々と接しても常に一定の距離を保ち、桜痴のような政府側への親しい接近を控えた。政府への批判的記事の掲載から、柳北が社長を務めていた『朝野新聞』は発行停止の処分をされることが度々あった。

柳北にとっての海外体験は、帰国後の人生に深い影響をもたらした。外国語の習得等を含む西欧の文化に対して、柳北は幕末から深い関心をもっていたが、日本の文化の発展に力を尽くすことを考えたのはその海外体験が出发点となった。仏国では近代文明の下での文化的生活を体験し、次に訪れた伊国では、旧体制の君主を偲ぶ庶民の様相と小国分立から近代国家統一という歴史の過渡期を目にしてい、柳北は歴史の変遷から学ぶものが大であった。またポンペイの遺跡の見学等から過去の文化の保存も柳北は痛感したのであった。さらに柳北は英国では立憲王政による国家の進展をみることができた。最後に訪れた米国では、米英戦争の戦跡の見学から国の独立の意義を知り、また大陸横断鉄道での旅では過酷な自然を切り開いていく近代文明の意義を直接体験し、柳北は日本の国の統一や文化の発展の必要性を痛感したのであった。

海外体験を通じて柳北は武士から日本の国の民へと帰属意識を徐々に変容させた。伊国での古代遺跡の保存と統一後まもない国状を見聞したことから、帰国後の柳北の中で過去の君主への尊重の念はもちつつも、徳川の臣から日本の構成員へと帰属意識に徐々に変容が見られた。また米国での米英戦争の戦跡の保存を見聞し国の独立の意義を知ったことで、柳北は歴史や文化を尊重する姿勢を養い、国の独立や統一の意義を学んで、自分という存在が国に帰属することを意識するに至ったのである。さらに独立国としての日本の国の文化の独自の進展を願い、西欧文学の翻訳と幕末の伝統文芸の紹介を『花月新誌』上で行ったことにも繋がっていくのである。柳北が帰国後に目指した日本の独自の文化は、日本の伝統文化を受け継ぎ、そこに西欧文化を盛り込んだものであり、西欧の模倣ではなかった。模倣することだけの文明開化を批判して独自の文化の創造を目指した点に、柳北の活動の特徴があった。柳北は海外体験から自己の歩むべき道を模索し、伝統文化の良い面を見いだしてこれを受け継ぎ、また西欧の文化に学ぶことで斬新的に社会や文化の改革を行おうとした。

帰国後の主要な言論活動では、明治7(1874)年には福沢諭吉の「學問のすゝめの評」を『朝野新聞』に掲載し、「日本の人民何れも皆この國を以て自家の恩を為し、共に全國の獨立を守らしめんとするの趣意なり。」<sup>6</sup>という国の独立を重視する啓蒙思想の展開に助力をしている。柳北もまた『朝野新聞』明治7年11月9日投書欄の中には、国を構成している人々として「平民」<sup>7</sup>と「人民」という言葉を用いて、柳北は自分自身を「迂生の如き平民」と表現している。帰国後に柳北は帰属意識を幕臣から日本の国を

構成する一般の人へと徐々に変容させていったのである。その後明治10(1877)年には柳北は『花月新誌』を創刊し、江戸時代末期の林述齋や成島司直等の文芸作品で明治時代の読者に紹介した方がよいと思われる作品を詩文雑誌『花月新誌』に掲載して、過去の文化を尊重する立場をとった。柳北は同時期に「楊牙兒ノ奇獄」等の西欧文学の翻訳作品も『花月新誌』に掲載していた。翻訳作品には社会の裏側に生きる人々を描いた「倫敦小誌」もある。柳北は産業革命の進展していた英国社会の繁栄の裏側にも目を向け、「倫敦小誌」の翻訳から繁栄した社会の裏側の貧しさを描いている。既に柳北は幕末に『柳橋新誌』初編で花街の裏側の金銭本位の人間模様を描いており、以前から養われていた社会の裏側に潜むものへの視線は海外体験によってさらに鋭いものとなったのであった。

明治12(1879)年の米国グラント将軍の来日に際しては接待委員となり、日光東照宮の保存を呼びかける活動を行っている。明治15(1872)年に柳北は立憲改進黨に入った。漸進的に社会の進展を願っていた柳北の目指した統一された近代国家とは、政治的には立憲君主体制の下での議会政治であった。また柳北にとっての日本の国の文化の進展とは、伝統文化の優れた面を踏まえつつ西欧文化の優れた面を取り入れた独自の文化の漸進的な創造と進展であった。幕臣時代から西欧の文化に関心をもっていた柳北は、海外体験から日本の国の独立の維持や独自の文化の進展の必要性を心に刻み、ジャーナリストや文明批評家、翻訳家という立場からの活動を通じて意欲的に取り組んだのであった。

以上から、「柳北の著作を通じて海外体験が帰国後の言論活動にもたらしたものを解明する」という本研究の目的に対しては、柳北は海外体験から自己の歩むべき道を模索し、欧米の歴史に学ぶことで独立した統一国家としての日本を形成して文化の進展を斬新的に図ろうとしたというのが結論である。ここでの文化の斬新的な進展とは、日本の伝統文化の良い面に西欧文化の良い面を融合させた文化の形成であった。柳北がこのような考えをもつに至ったのは、海外体験での見聞に因る。特に伊国での体験では柳北は小国分立から国の統一がなされるが過去の王朝を偲ぶ人々も一部にいる状況であることを学び、また米国での米英戦争の戦跡の見学から国の独立の意義を見聞する等、海外での見聞から歴史や国家への思索を深めたからであった。

## 2 今後の課題

柳北は海外体験から欧米の文化の進展を学びつつ、日本の国の文化の創造的な進展に取り組んでいった。その姿勢には真摯なものがある。しかしながら柳北の全体像ということになると未だ不十分で、『熱海文藪』で描かれた漢詩を通しての維新政府の人々との交流等も視野に入れて把握する必要があるのではないかと考えられる。漢詩の応酬が当時の有識者の日常の一部であった事等を考慮して、幕末から明治の歴史をさらに学びながら、日本近代の歴史の流れの中で今一度柳北の果たした役割を探究したいと考える次第である。また福沢諭吉の啓蒙思想や森鷗外の『航西日記』との関わりについては、後日研究する予定である。

### 〈注〉

<sup>1</sup> 成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集. 明治文學全集4. 筑摩書房, 1969. p. 136.

<sup>2</sup> 新編柳北詩文集. 漢詩文集. 新日本古典文学大系 明治編2. 岩波店, 2004. p. 247.

<sup>3</sup> 石川忠久. 詩経(下). 新釈 漢文大系 112. 明治書院, 2000. p. 146.

<sup>4</sup> 本文、書下し文、大意は、注3 詩経(下). p. 140.

<sup>5</sup> 注2 新編柳北詩文集. p. 249.

<sup>6</sup> 福澤諭吉全集 1. 岩波書店, 1958. p. 39.

<sup>7</sup> 福沢諭吉の「平民」と「人民」という言葉の用法を以下に記すが、柳北も倣ったと考えられる。

---

彼は「人民」と「平民」の語を用い、「日本人民」と使う一方、身分的には「平民」を使っている。  
(芳賀登. 民衆概念の歴史的変遷. 雄山閣出版, 1994. p. 327.)



## 謝 辞

平成 21 年に筑波大学大学院図書館情報メディア研究科に入学致しましてから、浅学な私が今まで学習を続けていくことができましたのは、ひとえに先生方の行き届いたご指導によるものと深く心に刻んでおります。

この度、本研究を提出させていただきましたが、ご指導を賜りました本学の松本浩一先生、綿拔豊昭先生、平久江祐司先生、吉田右子先生、白井哲哉先生、また日本大学大学院の小田切文洋先生に厚く御礼を申し上げたく存じます。さらに本学大学院学務、図書館の方々にも大変にお世話になり、深く感謝申し上げます。

平成 29 年 8 月

具島 美佐子

## 参考文献 〈図書〉

- 青木正兒. 李白. 漢詩大系 8. 東京, 集英社, 1979. 365p.
- 青柳達雄. 柳橋新誌・伊都満底草. 勉誠社文庫. 東京, 勉誠社, 1985. 169, 15p.
- 青山忠正. 日本近世の歴史 6. 明治維新. 東京, 吉川弘文館, 2012. 292p.
- 朝尾直弘. 岩波日本通史. 第 16 卷. 近代 I. 東京, 岩波書店, 1994. 359p .
- 阿部吉雄. 老子・莊子 上卷. 新釈漢文大系 7. 東京, 明治書院, 1966. 306p.
- 安在邦夫. 立憲改進党の活動と思想. 東京, 校倉書房, 1992. 302p.
- 池田庸, 伊和中辞典, 東京, 小学館, 2010. 1841p.
- 石川忠久. 漢詩鑑賞事典. 講談社学術文庫. 東京, 講談社, 2009. 892p.
- 石毛忠. 今泉淑夫他. 日本思想史辞典. 東京, 山川出版, 2009, 1097p.
- 石崎又藏. 近世日本における支那俗語文学史. 東京, 清水弘文堂書房, 1967. 442p.
- 石田雄. 福沢諭吉集. 近代日本思想体系 2. 東京, 筑摩書房, 614p.
- 井田進也. 幕末維新パリ見聞記―成島柳北「航西日乗」・栗本鋤雲「暁窓追録」. 岩波文庫. 東京, 岩波書店, 2009. 284, 2p.
- 一海知義. 陸游詩選. 岩波文庫. 東京, 岩波書店, 2007. 413p.
- 一海知義. 陶淵明―虚構の詩人―. 岩波新書, 東京, 岩波書店, 1997. 216p
- 伊藤整. 日本文壇史 I. 講談社文芸文庫. 東京, 講談社, 1995. 333, 11p
- 稲田雅洋. 自由民権運動の系譜. 東京, 吉川弘文館, 2009. 190p.
- 乾照夫. 成島柳北研究. 東京, ペリかん社, 2003. 364p.
- 乾照夫編. 読売雑譚集. 東京, ペリかん社, 2000. 314p
- 猪野謙二. 明治文学史 上巻. 東京, 講談社, 1985. 424p.
- 井上勝生. 開国. 幕末維新論集 2. 東京, 吉川弘文館, 2001. 338p.
- 猪口篤志. 日本漢文学史. 東京, 角川書店, 1984. 691p.
- 猪口篤志. 日本漢詩. 下巻. 新釈漢文大系 46. 東京, 明治書院, 2000. 403p.
- 今道友信. 西洋哲学史. 講談社学術文庫. 東京, 講談社, 1987. 349p.
- 井本農一. 松尾芭蕉集 (1) 全発句. 新編日本古典文学全集 70. 東京, 小学館, 1995. 604p.
- 入谷仙介. 漢詩文集. 新日本古典文学大系明治編 2. 東京, 岩波書店, 2004. 517p.
- 岩下哲典. 江戸のナポレオン伝説. 中公新書. 東京, 中央公論新社, 1999. 200p.
- 鵜飼新一. 朝野新聞の研究. 東京, みすず書房, 1985. 350, 60p
- 内山知也, 佐藤一郎編著. 中国小説小事典. 東京, 高文堂出版社, 1985. 161p.
- 遠藤哲夫. 莊子 下巻. 新釈漢文大系 8. 東京, 明治書院, 1967. 850p.
- 大石学. 徳川歴代将軍事典. 東京, 吉川弘文館, 2013. 851, 29p.
- 大木康. 明末のはぐれ知識人 馮夢龍と蘇州文化. 東京, 講談社, 1995. 254p.
- 大久保利謙. 江戸第 6 巻. 日記・紀行編. 東京, 教文舎, 1981. 650p
- 大島隆一. 柳北談叢. 東京, 昭和刊行会, 1943. 413p.
- 岡照雄. 翻訳小説集二. 新日本古典文学大系明治編 1 5. 東京, 岩波書店, 2002. 564p.
- 岡野他家夫. 明治文学研究文献総覧. 東京, 富山房, 1944. 810p.
- 岡部明日香. 紫式部の漢学世界 源氏物語と白氏文集・紫史吟評. 花蓮, 慈済大学, 2013. 253p
- 小川環樹. 蘇軾 上. 中国詩人選集二集 5. 東京, 岩波書店, 1962. 174.
- 小川環樹. 蘇軾 下. 中国詩人選集二集 6. 東京, 岩波書店, 1962. 168.

小川環樹. 山本和義. 選訳. 蘇東坡詩選. 岩波文庫. 東京, 岩波書店, 2009. 369p.

興津要. 明治開化期文学集. 日本近代文学大系 1. 東京, 角川書店, 1970. 478p.

小田切秀雄. 北村透谷. 明治文学全集 29. 東京, 筑摩書房, 1976. 432p.

小田切文洋. 江戸明治唐話用例辞典. 東京, 笠間書院, 2008. 10, 587p.

越智治雄. 近代文学の誕生. 講談社現代新書. 東京, 講談社, 1975. 222p.

小野寺龍太. 栗本鋤雲. 大節を堅持した亡国の遺臣. 東京, ミネルヴァ書房, 2010. 279, 7p.

寛久美子. 李白. 鑑賞中国の古典 16. 東京, 角川書店, 1988. 406p.

柏原祐泉. 近代大谷派の教団. 京都, 真宗大谷派宗務所出版部, 1986. 364p.

梶谷素久. 新・ヨーロッパ新聞史 : ヨーロッパ社会と情報. 東京, ブレーン出版, 1991. viii, 204p.

兼清正徳. 松浦辰男の生涯 桂園派最後の歌人. 東京, 作品社, 1994. 229p.

川北稔. イギリス史. 東京, 山川出版社, 1998. 460, 78p.

川口久雄. 幕末明治海外体験詩集. 東京, 大東文化大学東洋研究所, 1984. 900, 96, 23p

川村博忠. 近世日本の世界像. 東京, ペリかん社, 2003. 286p .

神田喜一郎. 明治漢詩文集. 明治文学全集 62. 東京, 筑摩書房, 1983. 455p.

岸上質軒. 校訂. 紀行文集続. 東京, 博文館, 1909. 1014p.

北原敦. イタリア史. 東京, 山川出版, 2008. 545, 115p.

紀平英作. アメリカ史. 東京, 山川出版, 1999. 432, 67p.

木村毅. 明治翻譯文學集. 明治文學全集 7. 東京, 筑摩書房, 1972. 434 p

『近代文学研究とは何か』刊行会. 近代文学研究とは何か—三好行雄の発言—. 東京, 勉誠出版, 2002. 311p.

久米邦武. 特命全権大使米欧回覧実記 1. 岩波文庫. 東京, 岩波書店, 1977. 429p

久米邦武. 特命全権大使米欧回覧実記 5. 岩波文庫. 東京, 岩波書店, 1982. 389p.

黒板勝美. 續徳川實紀第四篇. 新訂増補國史大系. 東京, 吉川弘文館, 1991. 988p.

黒板勝美. 續徳川實紀第五篇. 新訂増補國史大系. 東京, 吉川弘文館, 1991. 438, 6p.

黒川洋一. 菅茶山六如. 江戸詩人選集 4. 東京, 岩波書店, 1990. 422p.

黒川洋一. 杜甫詩選. 岩波文庫. 東京, 岩波書店, 1991. 397p.

慶応義塾. 福澤諭吉全集 1. 東京, 岩波書店, 1958. 624p.

ケンペル. 江戸参府旅行日記. 東洋文庫 303. 東京, 平凡社, 1979. 371, 12 p .

国史大辭典編集委員会. 国史大辭典 3. 東京. 吉川弘文館, 1997. 982p.

国史大辭典編集委員会. 国史大辭典 4. 東京. 吉川弘文館, 2001. 1098p.

小島憲之. ことばの重み. 講談社学術文庫. 東京, 講談社, 2011. 281p.

小林太市郎. 王維. 漢詩大系 10. 東京, 集英社, 1979. 371p.

近藤春雄. 中国学芸大事典. 東京, 大修館, 1978. 1000p.

近藤光男. 蘇軾. 漢詩選 11. 東京, 集英社, 1996. 382p.

近藤光男. 清詩選. 漢詩選 14. 東京, 集英社, 2002. 390p

齊藤希史. 漢文脈の近代. 名古屋, 名古屋大学出版会. 2005. 314, 8p

佐久節. 漢詩大観. 上巻. 東京, 鳳出版, 1974 復刊. 1095p.

佐久節. 漢詩大観. 中巻. 東京, 鳳出版, 1974 復刊. 1097-2424p.

佐久節. 漢詩大観. 下巻. 東京, 鳳出版, 1974 復刊. 2425-3604p.

佐竹昭広. 近世歌文集. 上巻. 新日本古典文学大系 67, 東京, 岩波書店, 1996. 561, 44p.

佐竹昭広. 江戸繁昌記・柳橋新誌. 新日本古典文学大系 100. 東京, 岩波書店, 1989. 613p.

佐藤弘夫. 概説日本思想史. 東京, ミネルヴァ書房, 2005. 354p.

猿谷要. 西部開拓史. 岩波新書. 東京, 岩波書店, 1982. 207, 7p.

塩田良平先生古稀記念論文集刊行会. 日本文学論考. 東京, 桜楓社, 1970. 596p.

塩田良平. 成島柳北 服部撫松 栗本鋤雲集. 明治文学全集 4. 東京, 筑摩書房, 1977. 435p.

重松泰雄. 明治大正昭和作家研究大事典. 東京, 桜楓社, 1993. 619p.

杉本つとむ. 語彙と句読法. 杉本つとむ 日本語講座 4. 東京, 桜楓社, 1979. 250p.

春原昭彦. 新聞のあゆみ—明治から現代まで. 横浜, 日本新聞博物館, 2006. 41p.

春原昭彦. 日本新聞通史. 4 訂版. 東京, 新泉社, 2007. 369, 17p.

隅谷三喜男. 徳富蘇峰 山路愛山. 東京, 中央公論新社, 1996. 530p.

世界史小辞典編集委員会. 世界史小辞典. 東京, 山川出版社, 2004. 1063p.

妹尾町の歴史編纂委員会. 妹尾町の歴史. 妹尾町 (岡山), 妹尾町, 1970. 278p.

大東文化大学中国語大辞典編纂室 編. 中国語大辞典. 東京, 角川書店, 1994. 全 2 冊.

高橋誠一郎. 小野秀雄. 三代言論人集. 第 2 巻. 東京, 時事通信社, 1963. 291p

高橋基一. 訳. 英國國會沿革誌. 東京, 朝野新聞社, 1879. 和装 3 冊 (巻 1 45, 巻 2 42, 巻 3 11, 24 丁)

高橋忠彦. 文選賦篇 (中). 新釈漢文大系 80. 東京, 明治書院, 1998. 4, 257p

竹田晃. 中国古典小説選. 第 2 巻. 東京, 明治書院, 2006. 446 p

武田徹/他. 現代ジャーナリズム事典. 東京. 三省堂, 2014. 378p.

竹林滋. 新英和中辞典. 東京, 研究社, 2010. 2125p.

田中彰. 岩倉使節団「米欧回覧実記」. 岩波現代文庫. 東京, 岩波書店, 2007. 262p

田中克己. 白樂天. 漢詩大系 1 2. 東京, 集英社, 1986. 354 p.

谷口爲次. 紫史吟評詳解. 東京, 谷口廻瀾先生還暦記念刊行會, 1940. 242p.

田部井文雄. 陶淵明集全注釈. 東京, 明治書院, 2002. 446p.

段成式. 今村与志 訳注. 酉陽雜俎 4. 東京, 平凡社, 1994. 333p.

ケロウ・チェズニー. ヴィクトリア朝の下層社会. 東京, 高科書店, 1991. 423, 6p

津田左右吉. 文学に現はれたる我が国民思想の研究. 第 2 巻. 岩波文庫. 東京, 岩波書店, 1977. 274, 11p

鶴間和幸. 始皇帝陵と兵馬俑. 講談社学術文庫. 東京, 講談社, 2004. 296p.

鶴見俊輔. ジャーナリズムの思想. 東京, 筑摩書房, 1965. 388p.

目加田誠. 杜甫. 漢詩大系 9. 東京, 集英社, 1981. 350p.

市野沢寅雄. 杜牧. 漢詩大系 1 4. 東京, 集英社, 1978. 352p.

永井荷風. 荷風全集. 第 16 巻. 東京, 岩波書店, 1972. 459p

永井荷風. 新版斷腸亭日乗. 第 6 巻. 東京, 岩波書店, 2002. 432p.

永井啓男. 寺門靜軒. 東京, 理想社, 1966. 306p.

長澤規矩也 解題. 唐話辭書類集 第十集. 東京, 汲古書院, 1972. 605p.

長澤規矩也 解題. 唐話辭書類集 第十一集. 東京, 汲古書院, 1974. 609-1132p. .

長澤規矩也. 和刻本漢籍分類目録. 東京, 汲古書院, 1976. 221p.

長澤規矩也. 和刻本漢詩集成 第二十輯. 補篇 4. 東京, 汲古書院, 1977. 619p.

中野幸一. 源氏物語享受資料影印叢書 : 九曜文庫蔵 11. 源氏物語類聚鈔・紫史吟評. 東京, 勉誠出版, 2008. 457, 19p

中野三敏. 海外見聞集. 新日本古典文学大系 明治編 5. 東京, 岩波書店, 2009. 693, 13p.

中村幸彦 編. 近世白話小説翻訳集 2. 東京, 汲古書院, 1984. 628p.

成島柳北. 柳北全集. 文藝俱樂部 3 卷, 第 9 篇 臨時増刊. 東京, 博文館, 1897. 332p.

成島柳北. 花月新誌 複製版. 東京, ゆまに書房, 1984.

日蘭学会. 洋学史事典. 東京, 雄松堂出版, 1984. 787, 82, 35p.

日本史籍協会. 編著. 木戸孝允日記 第三. 東京, 東京大學出版會, 1933 初版. 1977 覆刻. 591p

日本歴史学会. 明治維新人名辞典. 東京, 吉川弘文館, 1981. 1096, 8p

野口武彦. 鳥羽伏見の戦い. 東京, 中央公論新社, 2010. 328p.

野崎左文. 増補私の見た明治文壇 1. 東洋文庫 759. 東京, 平凡社, 2007. 305p

羽賀祥二. 幕末維新の文化. 東京, 吉川弘文館, 2001. 377p.

芳賀登. 民衆概念の歴史的変遷. 東京, 雄山閣出版, 1984, 374.

マイケル・パターソン. ディケンズのロンドン案内. 東京, 原書房, 2010. 406, 19p

樋口雄彦. 箱館戦争と榎本武揚. 敗者の日本史 17. 東京, 吉川弘文館, 2012. 270p.

日野龍夫. 頼山陽・梁川星巖. 江戸詩人選集 8. 東京, 岩波書店, 1990. 359p.

日野龍夫. 成島柳北・大沼枕山. 江戸詩人選集 10. 東京, 岩波書店, 2001. 348p

日野俊彦. 森春濤の基礎的研究. 東京, 汲古書院, 2013. 210, 172p.

平川祐弘. 天ハ自ラ助クルモノヲ助ク. 名古屋, 名古屋大学出版会, 2006. 388, 8p

福井憲彦. フランス史. 東京, 山川出版, 2001. 450, 85p.

福田清人. 明治紀行文學集. 明治文学全集 94. 東京, 筑摩書房, 1974. 404p

富士川英郎. 他編. 詩集日本漢詩. 第 9 卷. 東京, 汲古書院, 1985. 491p.

藤野岩友. 中国文学小事典. 東京, 高文堂出版. 1997. 293p.

藤野保. 江戸幕府崩壊論. 東京, 塙書房, 2008. 304p.

ベーコン. ベーコン随想集. 岩波文庫. 東京, 岩波書店, 1983. 327p.

星川清孝. 古文真宝後集. 新釈漢文大系 1 6. 東京, 明治書院, 1984. 481p.

細田三喜夫. 中国名詩鑑賞辞典. 東京, 東京堂出版, 1977. 384p.

前田愛. 成島柳北. 東京, 朝日新聞社, 1990. 269p.

前田愛. 幕末・維新期の文学. 前田愛著作集第一巻. 東京, 筑摩書房, 1989. 551p.

前田愛. 硯北日録. 東京, 太平社屋, 1997. 777p.

前野直彬. 唐詩鑑賞辞典. 東京, 東京堂出版, 1970. 57, 600p.

前野直彬. 韓愈の生涯. 東京, 秋山書店, 1976. 189p.

前野直彬. 宋詩鑑賞辞典. 東京, 東京堂出版, 1998. 422p.

牧原憲夫. 民権と憲法. 岩波新書. 東京, 岩波書店, 2006. 209, 13p

正岡子規集. 日本現代文学全集 16. 東京, 講談社, 1980. 446p.

松枝茂夫. 中国名詩選. 下巻. 岩波文庫. 東京, 岩波書店, 2010. 518p.

松沢弘陽. 福澤諭吉集. 新日本古典文学大系明治編 10. 東京, 岩波書店, 2011. 513, 6p.

松平定信. 西尾実 校訂. 花月草紙. 岩波文庫. 東京, 岩波書店, 1939, 181p.

丸山眞男. 忠誠と反逆. ちくま学芸文庫. 東京, 筑摩書房, 1998. 499p.

三浦叶. 明治漢文學史. 東京, 汲古書院, 1998. 478p.

村上哲見. 三体詩 (一). 東京, 朝日新聞社, 1978. 274p.

村上哲見. 三体詩 (二). 東京, 朝日新聞社, 1978. 274p.

明治文化研究会. 明治文化全集 第 17 卷. 外国文化篇. 東京, 日本評論社, 1992. 577p.

目加田誠. 唐詩選. 新釈漢文大系 19. 東京, 明治書院, 1998. 811 p.

目加田誠. 詩経. 講談社学術文庫. 東京, 講談社, 2011. 265p

内野熊一郎. 孟子. 新釈漢文大系 4. 東京, 明治書院, 1981. 558p

茂木敏夫. 変容する近代東アジアの国際秩序. 世界史リブレット, 東京, 山川出版社, 1997. 90p.

森鷗外全集. 第4巻. ちくま文庫. 東京, 筑摩書房, 1971, 354p.

森銑三. 他訳. 江戸随想集. 古典日本文学 34. 東京, 筑摩書房, 1977. 393p.

諸橋轍次. 大漢和辞典巻三. 東京, 大修館書店, 1956. 1028p.

山本武利. 新聞記者の誕生. 東京, 新曜社, 1990. 357p.

余懷. 板橋雜記・蘇州画舫録. ワイド版東洋文庫 29. 東京, 平凡社, 2003. 243p.

吉川幸次郎. 韓愈. 中國詩人選集 11. 東京, 岩波書店, 1981. 205p.

吉澤誠一郎. 清朝と近代世界 19 世紀. 岩波新書. 東京, 岩波書店, 2011. 232, 14p.

宮永孝. グラント将軍日本訪問記. 東京, 雄松堂書店, 1983. 274p.

デイビッド・ルー. アメリカ 自由と変革の軌跡. 東京, 日本経済新聞出版社, 2009. 490p.

歴史学研究会. 日本史史料 4. 東京, 岩波書店, 1997. 418p.

歴史学研究会. 世界史史料 6. 東京, 岩波書店, 2007. 358, 12p

#### 参考文献 <論文>

荒尾禎秀. 『通俗赤縄奇縁』の熟字. 東京学芸大学紀要 2 部門. 44, 1993, p. 275-290.

有馬毅. 寛政期以降の林家—林述斎の教学政策を中心に. 年報日本思想史. 『年報日本思想史』編集掛, vol. 40, 2005, p. 15-17.

乾照夫. 成島柳北の『航薇日記』について. 情報文化社会の到来—東京情報大学情報文化学科創立 10 周年記念論集. 2007, p. 185-217.

今村栄太郎. 失意期の成島柳北. 文学. vol. 46, No. 10, 1978, p. 19-26.

岩城秀夫. 梅花と返魂. 日本中國學會報. 30, 1978, p. 135-149.

木村毅. 成島柳北論. 早稲田文學. 229, 1925, p. 123-132.

久保田啓一. 前向きの江戸志向—成島柳北. 江戸文学. vol. 21. ぺりかん社, 1999. p. 59-62.

熊谷武至. 江戸に於ける堂上派 その一 長谷川安郷. 東海学園国語国文. 12, 1977, p. 1-7.

柴田就平. 海を渡った李白像—中国から日本へ. アジア文化交流研究. 4. 2009, p. 197-215.

下田己酉倶楽部編/発行. 篠田雲鳳女史. 下田の栞. 1914, p. 64.

杉下元明. 若き日の成島柳北. 江戸文学. 20, 1999, p. 127-140.

田坂長次郎. 成島柳北と英学. 英学史研究. 3. 1971, p. 33-44.

土屋礼子. 書評. 乾照夫著『成島柳北研究』. メディア史研究. 17, 2004, p. 172-177.

中村洪介. 維新时期日本人の洋楽体験—久米邦武編「特命全権大使米欧回覧実記」と成島柳北「航西日乗」を中心に. 比較文化(筑波大学比較文化会). 4, 1987, p. 69-110.

野崎左文. 柳北仙史の一面. 明治文化研究: 新旧時代(復刻版). Vol. 2, No. 8, 1926, p. 19-26.

野山嘉正. 成島柳北の「詩」. 文学. vol. 53, No. 11, 1985, p. 202-210.

マシュー・フレーリ. 成島柳北の洋行—「航西日乗」の諸コンテクスト—. 國語國文(京都大学). Vol. 71, No. 11, 2002, p. 1-55.

松本白華. 松本白華航海録. 真宗史料集成第 11 巻. 維新时期の真宗抜刷. 京都, 同朋舎, 1975. p. 371-416.

盛田帝子. 歌道宗匠家と富小路貞直・千種有功. 國語と国文学(東京大学). Vol. 88, No. 5, p. 35-48.

山田有策. 反近代. 別冊國文学近代文学史必携 (學燈社) . 1987, p. 75.  
山本芳明. 丹羽純一郎『花柳春話』. 解釈と鑑賞. Vol. 57, No. 4, 1992. p. 16-21.  
久保田啓一. 前向きの江戸志向—成島柳北. 江戸文学. vol. 21. ペリかん社, 1999. p. 61.

#### 参考文献 <洋書>

Bacon, Francis, *Bacon's Essays, with Annotations*, R. Whately, London, 1858. xxiv, 620, 24p.  
Graves, Donald E. (Donald Edward), *Red Coats & Grey Jackets : The Battle of Chippawa, 5 July 1814*. Dundurn Press, Toronto & Oxford, 1994. 224p.  
Mayhew, Henry, *London Labour and the London Poor. volume I*, Cosimo Classics, New York, Cosimo, 2009. 494p.  
Mayhew, Henry, *London Labour and the London Poor. volumen II*, Cosimo Classics, New York, Cosimo, 2009. 511p.  
Mayhew, Henry, *London Labour and the London Poor. volume III*, Cosimo Classics, New York, Cosimo, 2009. 442p.  
Mayhew, Henry, *London Labour and the London Poor. volume IV*, Cosimo Classics, New York, Cosimo, 2009. 504p.

#### 参考文献 <中国書>

汉语大词典. 上海, 世纪出版集团. 汉语大词典出版社, 1997. 全 3 冊.  
屈守元. 常思春主編. 韓愈全集校注. 成都, 四川大學出版社, 1996. 705p.  
蘇軾. 應榴輯注. 蘇軾詩集合注. 上海, 上海古籍出版社, 2001. 全 3 冊.  
陶淵明. 曹明綱標點. 陶淵明全集. 上海古籍出版社, 上海. 1998. 8. 5. 116p.  
白居易. 顧學頤 校點. 白居易集第二冊. 中國古典文學基本叢書. 北京, 中華書局, 1979. 463 p .  
余怀. 李金堂校中. 板桥杂记. 上海, 上海古籍出版社, 2000. 138 p .

#### 参考文献 <その他>

加藤国安. 日本漢詩 第三輯. 江戸後期／明治初期. 名古屋, 凱希メディアサービス, 2010. (CD-ROM)  
西岡勝彦. 航薇日記—成島柳北 西国旅日記一. 晚霞舎. Kindle  
版. 2013. <http://ebooklabo.fc2-rentalserver.com/wp/>. (参照 2017. 07)

## 研究業績

具島 美佐子

### (図書)

- ・具島美佐子.『柳橋新誌』研究：漢文戯作による自己実現,伊丹,牧歌舎,2005.133p.  
(日本大学大学院総合社会情報研究科提出修士論文の自費出版)

### (論文)

- ・具島美佐子.滞米中の荷風と『即興詩人』(鷗外訳)--英文書簡から  
解釈.52(7・8)(通号 616・617).東京,2006. pp.8-11.
- ・具島美佐子.荷風文学の出発点--「六月の夜の夢」(『あめりか物語』)  
国際文化表現研究 (4).三島,2008. pp.115-131.
- ・具島美佐子.明末清初の小説と日本の近代小説--鷗外・荷風とその後の作家たちへの影響  
国際文化表現研究 (5).三島,2009. pp.145-176.
- ・具島美佐子.成島柳北のイタリア体験：追懐の念と将来への模索  
国際文化表現研究 (6).三島,2010. pp.57-78.
- ・具島美佐子.成島柳北の米国体験：漢詩を手掛かりにして  
図書館情報メディア研究 9(1).つくば,2011. pp.35-50.
- ・具島美佐子.柳北における「航西日乗」の意義  
解釈 57(7・8)(通号 661).東京,2011. pp.2-11.
- ・具島美佐子.成島柳北の翻訳作品について  
国際文化表現研究 (8)三島,2012. pp.287-305.



付録 1

柳北詩鈔目次

巻 名	記号	番号	題名
巻之一	RH	1001	林逋看梅圖
巻之一	RH	1002	敦盛吹笛圖
巻之一	RH	1003	丑時詛
巻之一	RH	1004	老妾
巻之一	RH	1005	牧牛圖
巻之一	RH	1006	暮春
巻之一	RH	1007	李白觀瀑圖
巻之一	RH	1008	夜歸
巻之一	RH	1009	平忠度宿櫻下圖
巻之一	RH	1010	秋夜
巻之一	RH	1011	秋蝶
巻之一	RH	1012	中秋風雨
巻之一	RH	1013	潮水怨
巻之一	RH	1015	掃塵行
巻之一	RH	1016	歲晚書懷
巻之一	RH	1017	桃源圖
巻之一	RH	1018	吳王夜宴圖
巻之一	RH	1019	歸去來圖
巻之一	RH	1020	彈劍
巻之一	RH	1021	病中偶作
巻之一	RH	1022	題關將軍傑
巻之一	RH	1023	富岳圖
巻之一	RH	1024	源廷尉
巻之一	RH	1025	葡萄
巻之一	RH	1026	秋水
巻之一	RH	1027	切々歌
巻之一	RH	1028	戲贈茶師某
巻之一	RH	1029	寒草
巻之一	RH	1030	地震行
巻之一	RH	1031	除夕二首（一）
巻之一	RH	1032	除夕二首（二）
巻之一	RH	1033	聞歸雁有感
巻之一	RH	1034	題西行望岳圖
巻之一	RH	1035	晚春偶得

卷之一	RH	1036	首夏同友人賦
卷之一	RH	1037	鬪鷄圖
卷之一	RH	1038	五月九日遊金川臺
卷之一	RH	1039	新涼讀書
卷之一	RH	1040	題芭蕉美人圖
卷之一	RH	1041	桶峽懷古
卷之一	RH	1042	漁父圖
卷之一	RH	1043	張志和泛宅圖
卷之一	RH	1044	赤壁圖
卷之一	RH	1045	寒雲
卷之一	RH	1046	暮鐘
卷之一	RH	1047	二喬圖
卷之一	RH	1048	關原懷古
卷之一	RH	1049	春遊戲作
卷之一	RH	1050	早櫻
卷之一	RH	1051	鋤園穫石印一顆篆曰才不才之間有感而賦
卷之一	RH	1052	醉後走筆
卷之一	RH	1053	春夜閨思
卷之一	RH	1054	夜過柳橋
卷之一	RH	1055	晚春雜咏十首錄六（一）
卷之一	RH	1056	晚春雜咏十首錄六（二）
卷之一	RH	1057	晚春雜咏十首錄六（三）
卷之一	RH	1058	晚春雜咏十首錄六（四）
卷之一	RH	1059	晚春雜咏十首錄六（五）
卷之一	RH	1060	晚春雜咏十首錄六（六）
卷之一	RH	1061	老鵲
卷之一	RH	1062	先考七年忌辰有感而作
卷之二	RH	2001	病中感懷
卷之二	RH	2002	髑髏圖
卷之二	RH	2003	孟春君
卷之二	RH	2004	平原君
卷之二	RH	2005	信陵君
卷之二	RH	2006	春申君
卷之二	RH	2007	夏日讀書樂倣宋翁森體
卷之二	RH	2008	有虞鼓琴圖
卷之二	RH	2009	送小澤生遊西陲
卷之二	RH	2010	蝦夷圖

卷之二	RH	2011	浪花城之圖
卷之二	RH	2012	夏日偶得
卷之二	RH	2013	二洲納涼襖詩綠三（一）
卷之二	RH	2014	二洲納涼襖詩綠三（二）
卷之二	RH	2015	二洲納涼襖詩綠三（三）
卷之二	RH	2016	天目山懷古
卷之二	RH	2017	新樂府二篇柳春三囑（一）
卷之二	RH	2018	新樂府二篇柳春三囑（二）
卷之二	RH	2019	楓林停車圖
卷之二	RH	2020	季札掛劍圖
卷之二	RH	2021	奉賀大城土木功竣 爰遷 台駕
卷之二	RH	2022	無題
卷之二	RH	2023	手栽盆菊贈木堂賦此代牘
卷之二	RH	2024	鳳鳴高岡圖 家祖鳳卿先生百年祭辰賦此寓懷
卷之二	RH	2025	春山雪霽 磐翁課題
卷之二	RH	2026	雕工活龍軒乞詩書以此贈
卷之二	RH	2027	題玉蛾相憐帖
卷之二	RH	2028	公退
卷之二	RH	2029	山月彈琴圖 林氏席上
卷之二	RH	2030	大府迎 王姬于京師 內外臣僚並西上 吾友多紀元 佶亦以良于醫選 在行中賦此以贈
卷之二	RH	2031	聞市井女子私賣色及粧飾塗抹戲賦以寄某君
卷之二	RH	2032	開爐話舊與林學齋同賦
卷之二	RH	2033	賣書買劍歌
卷之二	RH	2034	春聲樓口號
卷之二	RH	2035	春遊圖
卷之二	RH	2036	壬戌三月望與大沼枕山鷺津穀堂小橋橘陰植村蘆洲誘南豐廣瀨青村泛舟 墨江觀櫻花大槻磐溪桂川月池遠田木堂春木南華等亦不期而至花前唱和 盡歡寔春來一大快事也乃以花字爲押記其
卷之二	RH	2037	事似同遊者
卷之二	RH	2038	舟中與諸子同賦
卷之二	RH	2039	患麻疹
卷之二	RH	2040	歲晚書感
卷之二	RH	2041	春半遊墨水值雨
卷之二	RH	2042	題西洋各國貨幣帖
卷之二	RH	2043	有感
卷之二	RH	2044	化石谷

卷之二	RH	2045	感懷
卷之二	RH	2046	偶得
卷之二	RH	2047	無題
卷之二	RH	2048	寄向山黃村二首（一）
卷之二	RH	2049	寄向山黃村二首（二）
卷之二	RH	2050	送安運覽之金川就洋客學其書
卷之二	RH	2051	書懷
卷之二	RH	2052	聞友人某屬率兵戍于東西戲寄此詩
卷之二	RH	2053	可愛叟歌
卷之二	RH	2054	次恒堂松平君見寄之韻
卷之二	RH	2055	憶家
卷之二	RH	2056	太田屯營調馬々上所得
卷之二	RH	2057	丁卯中秋患痢枕 上賦三律 寄藤志洲
卷之二	RH	2058	九月二十日率兵馬發太田營歸江城有戚而賦
卷之二	RH	2059	無題
卷之二	RH	2060	戊辰五月所得雜詩
卷之二	RH	2061	將遊畫島途經金川
卷之二	RH	2062	十一月二十九日訪蒲田梅園感舊
卷之二	RH	2063	雪中踰函嶺
卷之二	RH	2064	過由井驛
卷之二	RH	2065	駿城客舍所得
卷之二	RH	2066	憶人二首（一）
卷之二	RH	2067	憶人二首（二）
卷之二	RH	2068	再度函關
卷之二	RH	2069	宿湯原福住樓
卷之二	RH	2070	己巳元日墨江草蘆與玉鄉同賦
卷之二	RH	2071	十月十七日乘米國蒸瀛船發金港
卷之二	RH	2072	發天保山
卷之二	RH	2073	夜過須磨浦
卷之二	RH	2074	箭寄濱
卷之二	RH	2075	久々井
卷之二	RH	2076	龍王山歌
卷之二	RH	2077	黃薇客中雜詩
卷之二	RH	2078	岡山城
卷之二	RH	2079	憶家
卷之二	RH	2080	植松邨
卷之二	RH	2081	瑜伽山

卷之二	RH	2082	妹尾村觀捕魚似戶川成齋
卷之二	RH	2083	十一月十一日客舍祭先考蓋忌辰也
卷之二	RH	2084	舟過常山下賦此寄戶川成齋常山成齋家祖肥洲之城趾也
卷之二	RH	2085	航小豆島舟中所見
卷之二	RH	2086	登神馳山々在小豆島天下之絕勝也
卷之二	RH	2087	咏西京妓
卷之二	RH	2088	臘月歸淺草々盧
卷之二	RH	2089	庚午元日
卷之二	RH	2090	水梅處投示所作梅
卷之二	RH	2091	詩乃次其韻却寄
卷之二	RH	2092	答人
卷之二	RH	2093	干歸圖植村蘆洲課題
卷之二	RH	2094	下館城過菊池三溪悲歡交集賦此以寄
卷之二	RH	2095	三溪誘余遊繰川快飲竟日三溪似一律乃次某韻
卷之二	RH	2096	宿葱道村口感
卷之二	RH	2097	咏楮幣
卷之二	RH	2098	庚午五月念二日卜居干函崎軒前有一柳樹喜而賦
卷之三	RH	3001	漫吟
卷之三	RH	3002	送鹽田三郎奉敕之歐羅巴
卷之三	RH	3003	介子推
卷之三	RH	3004	張騫
卷之三	RH	3005	寫眞鏡
卷之三	RH	3006	傳信機
卷之三	RH	3007	秋清分杜少陵句得輕字
卷之三	RH	3008	新蕎麥
卷之三	RH	3009	柏樓雪夜與玉鸞飲
卷之三	RH	3010	辛朱元日
卷之三	RH	3011	觀會津十六士自盡圖引
卷之三	RH	3012	筆頭菜
卷之三	RH	3013	次王摩詰初夏田園樂韻
卷之三	RH	3014	磐溪翁自東奧來五月念八日與桂月 池艤舟柳橋以邀翁。是日二洲開河節也。炎蒸亦甚。到則水風襲人。爽涼如秋。紅裙助酒。酣飲盡歡余竟酩酊不知與翁別也。乃作斷句若干首而記其遊。且以謝翁。
卷之三	RH	3015	示兒敏二十韻
卷之三	RH	3016	月夜泛舟于二洲似同遊
卷之三	RH	3017	柏樓醉中寄釋白華

卷之三	RH	3018	觀蓮節關雪江會枕山蘆洲諸子子不忍池僧舍觀蓮余亦與磐溪翁赴焉席上用唐張朝採蓮之韻
卷之三	RH	3019	友人織田房之戊辰五月戰死于忍岡偶憶及之作此詩
卷之三	RH	3020	秋懷十首錄六（一）
卷之三	RH	3021	秋懷十首錄六（二）
卷之三	RH	3022	秋懷十首錄六（三）
卷之三	RH	3023	秋懷十首錄六（四）
卷之三	RH	3024	秋懷十首錄六（五）
卷之三	RH	3025	秋懷十首錄六（六）
卷之三	RH	3026	梧桐歌
卷之三	RH	3027	風懷誌 有序（一）
卷之三	RH	3028	風懷誌 有序（二）
卷之三	RH	3029	風懷誌 有序（三）
卷之三	RH	3030	風懷誌 有序（四）
卷之三	RH	3031	風懷誌 有序（五）
卷之三	RH	3032	風懷誌 有序（六）
卷之三	RH	3033	風懷誌 有序（七）
卷之三	RH	3034	風懷誌 有序（八）
卷之三	RH	3035	風懷誌 有序（九）
卷之三	RH	3036	風懷誌 有序（十）
卷之三	RH	3037	秋江歸漁圖
卷之三	RH	3038	元龜經筒歌贈釋嚴護
卷之三	RH	3039	對鏡嘆
卷之三	RH	3040	秋淋連日書窓無聊會白華子以松嶺鶴巢二友訪來乃冒雨遊金龍山飲于甲子樓酒間分滿城風雨近重陽句得重字作長句每句押韻以記其遊
卷之三	RH	3041	古劍篇
卷之三	RH	3042	夜聽砧聲
卷之三	RH	3043	磐溪翁中秋在橫濱用自傳對月憶元九詩韻見寄乃豐其韻以酬
卷之三	RH	3044	鐘馗圖
卷之三	RH	3045	送麟兮上人赴西
卷之三	RH	3046	十三夜陰牕懶於出遊社友亦不至孤坐無聊興細君對酌感舊作二絕句（一）
卷之三	RH	3047	十三夜陰牕懶於出遊社友亦不至孤坐無聊興細君對酌感舊作二絕句（二）
卷之三	RH	3048	廿八日三溪將歸常洲余餞之二洲三浦樓枕山翁亦至酣飲盡歡席上分聲妓幸見所唱惱殺歸人柳色青句爲韻得歸字
航西雜詩	RH	4001	明治壬申九月將航泰西賦此題寓樓之壁
航西雜詩	RH	4002	發橫濱此夜繼華之夕也

航西雜詩	RH	4003	舟中雜詩十首（一）
航西雜詩	RH	4004	舟中雜詩十首（二）
航西雜詩	RH	4005	舟中雜詩十首（三）
航西雜詩	RH	4006	舟中雜詩十首（四）
航西雜詩	RH	4007	舟中雜詩十首（五）
航西雜詩	RH	4008	舟中雜詩十首（六）
航西雜詩	RH	4009	舟中雜詩十首（七）
航西雜詩	RH	4010	舟中雜詩十首（八）
航西雜詩	RH	4011	舟中雜詩十首（九）
航西雜詩	RH	4012	舟中雜詩十首（十）
航西雜詩	RH	4013	香港二首（一）
航西雜詩	RH	4014	香港二首（二）
航西雜詩	RH	4015	從香港航安南舟中所得（一）
航西雜詩	RH	4016	從香港航安南舟中所得（二）
航西雜詩	RH	4017	塞昆二首（一）
航西雜詩	RH	4018	塞昆二首（二）
航西雜詩	RH	4019	星嘉坡二首（一）
航西雜詩	RH	4020	星嘉坡二首（二）
航西雜詩	RH	4021	印度洋雜詩（一）
航西雜詩	RH	4022	印度洋雜詩（二）
航西雜詩	RH	4023	印度洋雜詩（三）
航西雜詩	RH	4024	楞伽山
航西雜詩	RH	4025	泊亞丁此夜月色清瑩（一）
航西雜詩	RH	4026	泊亞丁此夜月色清瑩（二）
航西雜詩	RH	4027	紅海三首（一）
航西雜詩	RH	4028	紅海三首（二）
航西雜詩	RH	4029	紅海三首（三）
航西雜詩	RH	4030	蘇士新航渠二首（一）
航西雜詩	RH	4031	蘇士新航渠二首（二）
航西雜詩	RH	4032	甫兒塞港
航西雜詩	RH	4033	地中海二首（一）
航西雜詩	RH	4034	地中海二首（二）
航西雜詩	RH	4035	過西々利海峽
航西雜詩	RH	4036	舟中口號
航西雜詩	RH	4037	舟過可兒西加埃爾馬之間感那破崙興廢之事有此作（一）
航西雜詩	RH	4038	舟過可兒西加埃爾馬之間感那破崙興廢之事有此作（二）
航西雜詩	RH	4039	望馬耳塞港
航西雜詩	RH	4040	馬耳塞

航西雜詩	RH	4041	火輪車中之作
航西雜詩	RH	4042	巴里雜咏（一）
航西雜詩	RH	4043	巴里雜咏（二）
航西雜詩	RH	4044	巴里雜咏（三）
航西雜詩	RH	4045	謁那破崙之廟
航西雜詩	RH	4046	遊聖日耳曼山
航西雜詩	RH	4047	島兔寨宮
航西雜詩	RH	4048	巴里客舍元旦醉後得二絕（一）
航西雜詩	RH	4049	巴里客舍元旦醉後得二絕（二）
航西雜詩	RH	4050	晚步清音河上
航西雜詩	RH	4051	觀美人戲馬
航西雜詩	RH	4052	別島地縮堂
航西雜詩	RH	4053	巴里竹枝二首（一）
航西雜詩	RH	4054	巴里竹枝二首（二）
航西雜詩	RH	4055	哭那破侖第三世
航西雜詩	RH	4056	三月十二日發巴里赴伊太利瀛車中所得
航西雜詩	RH	4057	過捫星尼地道
航西雜詩	RH	4058	米蘭
航西雜詩	RH	4059	威尼斯
航西雜詩	RH	4060	過阿伯尼山
航西雜詩	RH	4061	弗稜蘭
航西雜詩	RH	4062	遊多斯加納王故宮
航西雜詩	RH	4063	羅馬
航西雜詩	RH	4064	過該撒之遺宮有感作二絕（一）
航西雜詩	RH	4065	過該撒之遺宮有感作二絕（二）
航西雜詩	RH	4066	那不勒
航西雜詩	RH	4067	觀奔北遺趾此地距今一千八百年火山噴裂闔府爲熱砂所埋沒發掘之尚見屋舍器物歷々完存。實五大洲中之一奇境也
航西雜詩	RH	4068	題伯德寺々則羅馬法王所居
航西雜詩	RH	4069	再遊巴里
航西雜詩	RH	4070	送鹽田三郎歸本邦
航西雜詩	RH	4071	倫敦府雜詩（一）
航西雜詩	RH	4072	倫敦府雜詩（二）
航西雜詩	RH	4073	渡嘉黎
航西雜詩	RH	4074	謁維靈敦之墓
航西雜詩	RH	4075	觀倫敦禽獸囿
航西雜詩	RH	4076	遊維奴日留城英主之離宮也



航西雜詩	RH	4077	憶鄉三首（一）
航西雜詩	RH	4078	憶鄉三首（二）
航西雜詩	RH	4079	憶鄉三首（三）
航西雜詩	RH	4080	航大西洋之作（一）
航西雜詩	RH	4081	航大西洋之作（二）
航西雜詩	RH	4082	航大西洋之作（三）
航西雜詩	RH	4083	遊紐育中央園
航西雜詩	RH	4084	那耶哥羅觀瀑詩三首（一）
航西雜詩	RH	4085	那耶哥羅觀瀑詩三首（二）
航西雜詩	RH	4086	那耶哥羅觀瀑詩三首（三）
航西雜詩	RH	4087	過蘇格都古戰場
航西雜詩	RH	4088	渡亞兒栩甫浪河。橋架摧裂。車陷急流有死傷者。余幸而免。爲賦此詩
航西雜詩	RH	4089	過綠魑山
航西雜詩	RH	4090	綠山
航西雜詩	RH	4091	綠河
航西雜詩	RH	4092	鹽湖二首（一）
航西雜詩	RH	4093	鹽湖二首（二）
航西雜詩	RH	4094	過寧婆陀山
航西雜詩	RH	4095	達桑港書喜二首（一）
航西雜詩	RH	4096	達桑港書喜二首（二）
航西雜詩	RH	4097	太平洋舟中之作四首（一）
航西雜詩	RH	4098	太平洋舟中之作四首（二）
航西雜詩	RH	4099	太平洋舟中之作四首（三）
航西雜詩	RH	4100	太平洋舟中之作四首（四）
航西雜詩	RH	4101	歸家口號二首（一）
航西雜詩	RH	4102	歸家口號二首（二）
航西雜詩	RH	4103	到橫濱二首追錄（一）
航西雜詩	RH	4104	到橫濱二首追錄（二）
航西雜詩	RH	4105	楞仙山追錄柳
柳北詩抄補遺	RH	5001	壬申元日（一）
柳北詩抄補遺	RH	5002	壬申元日（二）
柳北詩抄補遺	RH	5003	六日拉社友出遊得一律
柳北詩抄補遺	RH	5004	步挽車
柳北詩抄補遺	RH	5005	書感
柳北詩抄補遺	RH	5006	余在西京客舍十旬小婢阿鶴索詩戲賦以贈
柳北詩抄補遺	RH	5007	甲戌元日
柳北詩抄補遺	RH	5008	憶昨行寄石芙蓉
柳北詩抄補遺	RH	5009	四月十六日遊嵐山花下遇三溪老兄。乃相携上杜鵑亭呼酒。々問風雨一

			過。殊添風致。作絶句數首以託其遊錄三（一）
柳北詩抄補遺	RH	5010	四月十六日遊嵐山花下遇三溪老兄。乃相携上杜鵑亭呼酒。々問風雨一過。殊添風致。作絶句數首以託其遊錄三（二）
柳北詩抄補遺	RH	5011	四月十六日遊嵐山花下遇三溪老兄。乃相携上杜鵑亭呼酒。々問風雨一過。殊添風致。作絶句數首以託其遊錄三（三）
北遊吟草	RH	6001	觀琵琶湖八勝歌
北遊吟草	RH	6002	過福井城有感
北遊吟草	RH	6003	唯稱寺窓雨上人
北遊吟草	RH	6004	浴加洲山背温泉得一絶
北遊吟草	RH	6005	吉崎拜蓮如師遺蹟
北遊吟草	RH	6006	丹釀歌贈三國港銀杏閣主人每句韻
北遊吟草	RH	6007	憶家
北遊吟草	RH	6008	七月二十日松浦吉右近余於開月樓酒間賦此詩
北遊吟草	RH	6009	鬼跡行
北遊吟草	RH	6010	福井竹枝五首（一）
北遊吟草	RH	6011	福井竹枝五首（二）
北遊吟草	RH	6012	福井竹枝五首（三）
北遊吟草	RH	6013	福井竹枝五首（四）
北遊吟草	RH	6014	福井竹枝五首（五）
北遊吟草	RH	6015	席間有酒妓阿富字春妍善描蘭余爲題此詩
北遊吟草	RH	6016	眞生近得西京相識書信。中有校書某氏書。戲賦以似生。
北遊吟草	RH	6017	客感
北遊吟草	RH	6018	福井諸子餞余于愛宕山清和樓。歌妓小竹小雛皆善畫闌。席上塗抹數幅。賞玩之余作此詩
北遊吟草	RH	6019	發福井抵杉谷途中
北遊吟草	RH	6020	八月十日發越入江途中（一）
北遊吟草	RH	6021	八月十日發越入江途中（二）
北遊吟草	RH	6022	過賤岳下之作
北遊吟草	RH	6023	姉川
北遊吟草	RH	6024	八月十一日過關原慨然賦此詩
北遊吟草	RH	6025	過青墓邨源左興廐手刃朝長之處村居多賣花班石
北遊吟草	RH	6026	發小田原

柳北詩鈔目次は、加藤国安. 日本漢詩 第三輯. 江戸後期／明治初期, 凱希メディアサービス. 2010.

（CD-ROM）から、「航西雜詩」については、第Ⅲ章以降では欧米旅行中の詩として整理して別の番号付して筆者作成。

付録 2

表付 2-1 「航薇日記」収録 漢詩目次

記号	番号	初句	「日記」中での日付(陰暦)	収録文献等(陽暦)
KB	1001	底事離筵獨淚多。	明治2年10月16日	『花月新誌』82号 明治12年9月28日
KB	1002	風怒海門霜氣澄。	明治2年10月17日	『花月新誌』83号 明治12年10月21日
KB	1003	狂濤撼枕不成眠。	明治2年10月17日	『花月新誌』83号 明治12年10月21日
KB	1004	經過南洋蒨里灘。	明治2年10月19日	『花月新誌』83号 明治12年10月21日
KB	1005	片帆東去大牙傾。	明治2年10月21日	『花月新誌』85号 明治12年11月16日
KB	1006	晨發天保山。(舟中短古一篇)	明治2年10月22日	『花月新誌』87号 明治12年12月18日
KB	1007	夜來舟子扣舷歌。	明治2年10月22日	『花月新誌』87号 明治12年12月18日
KB	1008	客子神清曉不眠。	明治2年10月22日	『花月新誌』87号 明治12年12月18日
KB	1009	經來南海幾汀磯。	明治2年10月24日	『花月新誌』90号 明治13年2月29日
KB	1010	白石蒼松灣又灣。	明治2年10月24日	『花月新誌』90号 明治13年2月29日
KB	1011	往事茫々壽永秋。	明治2年10月24日	『花月新誌』90号 明治13年2月29日
KB	1012	彷彿桃源洞裏家。	明治2年10月24日	『花月新誌』91号 明治13年3月23日
KB	1013	高牆應是伐冰家。	明治2年10月27日	『花月新誌』93号 明治13年4月14日
KB	1014	龍王山高烟靄茫。(龍王山歌)	明治2年10月29日	『花月新誌』95号 明治13年5月13日
KB	1015	一片征帆島嶼間。	明治2年11月1日	『花月新誌』97号 明治13年6月12日
KB	1016	朱袍換得綠蓑衣。	明治2年11月1日	『花月新誌』97号 明治13年6月12日
KB		一身無恙遇良辰。(伊丹蕙圃の作品)	明治2年11月2日	『花月新誌』98号 明治13年7月3日
KB	1017	阿爺萍跡又天涯。 兒復(思郷の詩三首)	明治2年11月3日	『花月新誌』98号 明治13年7月3日
KB	1018	一男三女膝相圍。 玉蛾(思郷の詩三首)	明治2年11月3日	『花月新誌』98号 明治13年7月3日
KB	1019	欲別問儂何處去。 玉鸞(思郷の詩三首)	明治2年11月3日	『花月新誌』98号 明治13年7月3日
KB	1020	一望寒村處々向。	明治2年11月4日	『花月新誌』98号 明治13年7月3日
KB	1021	石逕縈回攀薜蘿。	明治2年11月4日	『花月新誌』99号 明治13年7月29日
KB	1022	磴路連雲聳。	明治2年11月6日	『花月新誌』101号 明治13年9月28日

KB	1023	波瀾百道拍巖還。	明治2年11月7日	『花月新誌』102号 明治13年10月30日
KB	1024	他郷一日永如年。	明治2年11月9日	『花月新誌』103号 明治13年11月24日
KB	1025	竹籬遮淺水。	明治2年11月9日	『花月新誌』103号 明治13年11月24日
KB	1026	兄弟七人隨九泉。	明治2年11月11日	『花月新誌』104号 明治13年12月19日
KB		蒼茫海岸遠鐘微。(冠童翁余を送る詩)	明治2年11月12日	『花月新誌』104号 明治13年12月19日
KB		汎愛能容乳臭兒。(伊丹蕙圃も詩を贈る)	明治2年11月12日	『花月新誌』104号 明治13年12月19日
KB	1027	南望常山雲幾重。(一詩を成齋に贈る)	明治2年11月13日	『花月新誌』105号 明治14年1月19日
KB		枯草離々夜氣腥。(冠童翁の幽霊の詩)	明治2年11月13日	『花月新誌』105号 明治14年1月19日
KB	1028	陽侯爲我放新晴。	明治2年11月14日	『花月新誌』105号 明治14年1月19日
KB	1029	容子多歡却有悲。	明治2年11月14日	『花月新誌』105号 明治14年1月19日
KB	1030	綺樓情夢斷。	明治2年11月15日	『花月新誌』106号 明治14年2月28日
KB	1031	鬢黷碧雲仙逕開。 柳北(冠童余と聯句をなす)	明治2年11月15日	『花月新誌』106号 明治14年2月28日
KB		山靈莫笑無桃樹。 桐蔭(冠童余と聯句をなす)	明治2年11月15日	『花月新誌』106号 明治14年2月28日
KB	1032	絶勝始疑天有私。	明治2年11月15日	『花月新誌』107号 明治14年3月11日
KB	1033	雲岫千重又萬重。	明治2年11月15日	『花月新誌』107号 明治14年3月11日
KB	1034	萬仞峰巒滄海間。	明治2年11月15日	『花月新誌』107号 明治14年3月11日
KB	1035	山出沒兮雲往來。	明治2年11月15日	『花月新誌』108号 明治14年3月29日
KB	1036	家郷日夜望儂不。	明治2年11月18日	『花月新誌』111号 明治14年5月31日
KB	1037	俄然相遇忽相親。	明治2年11月19日	『花月新誌』112号 明治14年6月21日

KB	1038	誰道豪遊不返家。	明治2年11月20日	『花月新誌』113号 明治14年7月15日
KB	1039	郷里雲山隔。	明治2年11月20日	『花月新誌』113号 明治14年7月15日
KB	1040	相逢還告別。	明治2年11月23日	『花月新誌』115号 明治14年8月31日
KB	1041	沃野蒼茫一路平。	明治2年11月24日	『花月新誌』116号 明治14年10月9日
KB	1042	英雄得失與誰論。	明治2年11月25日	『花月新誌』116号 明治14年10月9日
KB	1043	回顧遊踪海接天。	明治2年11月27日	『花月新誌』117号 明治14年10月28日

柳北以外の作者の漢詩(番号無し)

(「航薇日記」の漢詩の引用は、成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集.明治文学全集 4. 筑摩書房,1969 から筆者作成)

表付 2-2 「航薇日記」収録 短歌目次

記号	番号	短 歌
KBT	1	名に高き淡路しま山来て見れば 昔なからの千鳥なくなり
KBT	2	名にし負ふ難波の浦に栖む鶴の 毛に一つたに無きそかなしき
KBT	3	思ひきや故郷遠き難波江の あしの假ねに君を見んとは
KBT	4	別れては又逢こともしら菊の 露のなさけにぬるる袖かな
KBT	5	中中に朽し袖こそ嬉しけれ 今宵かたしく須磨の浦波
KBT	6	藝子にはゆふへ別れて又けふは 舞子の濱にかかる舟人
KBT	7	舟人も心ありてや舟とめて 一夜あかしの月をこそ見れ
KBT	8	夕日影兒島の松に暮れはてて 庭瀬にいそく蛋のつり舟
KBT	9	荒れはてし吉備の中山なかなか 在すか如き神の御社
KBT	10	旅枕日かすへぬれは故郷の よるの錦もあたにやは見ん
KBT	11	契り置て今一たびは来て見なん 小倉の山の紅葉ならねと
KBT	12	染出しゆかの山邊の蔦紅葉 錦に似たるいろも見えけり
KBT	13	何故か妹か玉章忘れけん いたつらに来る雁か音そうき
KBT	14	千早ふる神代の聲を今ここに 耳新しくきくも珍し

KBT	15	いつとなく日をふる郷の心地して 假寝の宿も住馴にけり
KBT	16	唐丸を夜なかにしめて毛をひくと いふは不埒な東京子なり
KBT	17	遠近の紅葉白雪ふみわけて 錦のなかに小男鹿のなく
KBT	18	雲くらし杉の下道わけゆけは 深山の池にさゆる月かけ
KBT	19	跡とへばなみだに袖もこほるなり 松風寒き須磨の古寺
KBT	20	よしあしのふしこそしらね波枕 かたしきなれし難波江の月
KBT	21	えにしあらは立歸りこん我も亦 寄るへ定めぬ浪よしの橋
KBT	22	香をとめて家つとにせん山里の 落葉かなかの菊の一本
KBT	23	霜かれの野邊に色なき白菊も 深き匂ひは知る人そしる
KBT	24	幾世へしといひつる世より又いく世 緑を添へし住吉の松
KBT	25	いかにせん難波のあしのかり枕 よせ來し波の歸るならひを
KBT	26	上方に延し鼻毛を剃りすてて 吾妻男に立ちかえる顔

（「航薇日記」の短歌の引用は、成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集.明治文学全集 4. 筑摩書房,1969 から筆者作成）

付録3 欧米旅行中（「航西日乗」と「航西雑詩」）の漢詩と帰国後「熱海文藪」中の漢詩

表付3-1 欧米旅行中（「航西日乗」と「航西雑詩」）の漢詩

記号	番号	初句	原文 順番	日乗 順番	日乗年月日（明治 6年1月1日以降 は陽暦）	収録文献等（年月日：陽暦）
OR	1001	右望巴黎 城上月。	1	2	陰暦 明治5年9 月13日（2）	『花月新誌』118号明治14年11月30日
OR	1002	誰知豪氣 駕鯨鯢。	2	1	明治5年9月13 日（1）	『花月新誌』118号明治14年11月30日
OR	1003	波底金蟾 未吐輝。 （9月14 日）	3			
OR	1004	艙外鷄鳴 燭影殘。	4	5	明治5年9月17 日（2）	『花月新誌』118号明治14年11月30日
OR	1005	庖人未進 他方產。 （9月16 日）	5			
OR	1006	何物半宵 掀我床。	6	4	明治5年9月17 日（1）	『花月新誌』118号明治14年11月30日
OR	1007	回頭故國 在何邊。	7	3	明治5年9月16 日	『花月新誌』118号明治14年11月30日
OR	1008	唯看漁舟 數葉翻。	8	8	明治5年9月19 日	『花月新誌』119号明治14年12月29日

OR	1009	書在篋中 酒在瓶。	16	6	明治5年9月18 日 (1)	『花月新誌』119号明治14年12月29日
OR	1010	故園日夜 望儂不。	17	7	明治5年9月18 日 (2)	『花月新誌』119号明治14年12月29日
OR	1011	四邊無復 一螺青	22	13	明治5年9月23 日 (1)	『花月新誌』120号明治15年2月12日
OR	1012	亞刺羅山 在那邊。	26	12	明治5年9月22 日 (2)	『花月新誌』120号明治15年2月12日
OR	1013	午厨散處 水風徐。		14	明治5年9月23 日 (2)	『花月新誌』120号明治15年2月12日
OR	1014	天氣和時 人啞然。	29	15	明治5年9月23 日 (3)	『花月新誌』120号明治15年2月12日
OR	1015	枕水樓臺 萬點燈。	9	9	明治5年9月20 日 (1)	『花月新誌』119号明治14年12月29日
OR	1016	層々鉅閣 競繁華。	10	10	明治5年9月20 日 (2)	『花月新誌』119号明治14年12月29日
OR	1017	瀟烟一迸 白帆翻。	11			



OR	1018	昌黎驅鱷 已千秋。	12	11	明治 5 年 9 月 22 日 (1)	『花月新誌』 120 号明治 15 年 2 月 12 日
OR	1019	一鳥不翔 雲水間。	13	16	明治 5 年 9 月 24 日	『花月新誌』 120 号明治 15 年 2 月 12 日
OR	1020	針路縈回 入港門。	14	17	明治 5 年 9 月 25 日 (1)	『花月新誌』 120 号明治 15 年 2 月 12 日
OR	1021	夜熱侵人 夢易醒。	15	18	明治 5 年 9 月 25 日 (2)	『花月新誌』 120 号明治 15 年 2 月 12 日
OR	1022	南邊麻陸 北蘇門。	18	19	明治 5 年 9 月 29 日	『花月新誌』 121 号明治 15 年 3 月 2 日
OR	1023	日蒸積水 起爲雲。	19		明治 5 年 10 月 1 日	
OR	1024	幾個蠻奴 聚港頭。	20	20	明治 5 年 10 月 1 日	『花月新誌』 121 号明治 15 年 3 月 2 日
OR	1025	自發橫灣 路幾千。	21		明治 5 年 10 月 3 日	『花月新誌』 122 号明治 15 年 4 月 4 日
OR	1026	同舟豪富 競遊嬉。	23		明治 5 年 10 月 5 日	
OR	1027	東望故山 雲海茫。	30	22	明治 5 年 10 月 5 日	『花月新誌』 122 号明治 15 年 4 月 4 日

OR	1028	扯兔拉婦 太多情。	27	21	明治 5 年 10 月 4 日	『花月新誌』 122 号明治 15 年 4 月 4 日
OR	1029	夢迷墨水 旧今窩。	28		明治 5 年 10 月 10 日	
OR	1030	萬里來航 印度洋。	24	23	明治 5 年 10 月 7 日 (1)	『花月新誌』 122 号明治 15 年 4 月 4 日
OR	1031	古廟蕭條 老蘚青。	25	24	明治 5 年 10 月 7 日 (2)	『花月新誌』 123 号明治 15 年 5 月 7 日
OR	1032	一般之人 若一家。	31		明治 5 年 10 月 13 日	
OR	1033	斷巖千尺 海門開。	32	26	明治 5 年 10 月 15 日 (1)	『花月新誌』 124 号明治 15 年 5 月 30 日
OR	1034	四望難看 寸草青。	33	27	明治 5 年 10 月 15 日 (2)	『花月新誌』 124 号明治 15 年 5 月 30 日
OR	1035	摩西仙去 幾千秋。	34	28	明治 5 年 10 月 16 日	『花月新誌』 124 号明治 15 年 5 月 30 日
OR	1036	電光夜掣 萬重山。		29	明治 5 年 10 月 19 日 (1)	『花月新誌』 125 号明治 15 年 6 月 23 日
OR	1037	溽熱蒸空 月亦紅。		30	明治 5 年 10 月 19 日 (2)	『花月新誌』 125 号明治 15 年 6 月 23 日

OR	1038	一道新渠 爾海通。		31	明治 5 年 10 月 20 日 (1)	『花月新誌』 125 号明治 15 年 6 月 23 日
OR	1039	鑿得黃沙 幾萬重。		32	明治 5 年 10 月 20 日 (2)	『花月新誌』 125 号明治 15 年 6 月 23 日
OR	1040	新埔頭開 海色妍。		33	明治 5 年 10 月 22 日 (1)	『花月新誌』 126 号明治 15 年 8 月 3 日
OR	1041	客舟忽入 怒濤間。		34	明治 5 年 10 月 22 日 (2)	『花月新誌』 126 号明治 15 年 8 月 3 日
OR	1042	人定連房 燈影殘。		35	明治 5 年 10 月 23 日	『花月新誌』 126 号明治 15 年 8 月 3 日
OR	1043	江山咫尺 水烟含。		36	明治 5 年 10 月 25 日	『花月新誌』 126 号明治 15 年 8 月 3 日
OR	1044	浴罷柁樓 快欠伸。		37	明治 5 年 10 月 26 日	『花月新誌』 127 号明治 15 年 9 月 19 日
OR	1045	想君齟齬 伴漁郎。		38	明治 5 年 10 月 27 日 (1)	『花月新誌』 127 号明治 15 年 9 月 19 日
OR	1046	兵威打破 泰西天。		39	明治 5 年 10 月 27 日 (2)	『花月新誌』 127 号明治 15 年 9 月 19 日

OR	1047	四旬經過 怒濤間。		40	明治5年10月28 日 (1)	『花月新誌』127号明治15年9月19日
OR	1048	枕海樓臺 十萬家。		41	明治5年10月28 日 (2)	『花月新誌』127号明治15年9月19日
OR	1049	坐看萬水 又千山。		42	明治5年10月30 日	『花月新誌』127号明治15年9月19日
OR	1050	十載夢飛 巴里城。		43	明治5年11月1 日 (1)	『花月新誌』128号明治15年11月6日
OR	1051	五洲當在 一城中。		44	明治5年11月1 日 (2)	『花月新誌』128号明治15年11月6日
OR	1052	晚餐圍案 肘交肘。		45	明治5年11月1 日 (3)	『花月新誌』128号明治15年11月6日
OR	1053	樓臺幾處 捲羅帷。		53	陽曆 明治6年1 月31日 (2)	『花月新誌』134号明治16年4月10日
OR	1054	晒彼驪山 銅九泉。		50	陽曆 明治6年1 月9日	『花月新誌』131号明治16年2月25日
OR	1055	半似鴻臺 半島邱。		47	陰曆 明治5年11 月29日	『花月新誌』130号明治16年1月25日

OR	1056	想曾鳳輦 幾回過。		46	陰曆 明治5年11 月12日	『花月新誌』129号明治15年12月15日
OR	1057	草廬猶在 墨江濱。		48	陽曆 明治6年1 月1日(1)	『花月新誌』131号明治16年2月25日
OR	1058	客裏新正 趣更奇。		49	明治6年1月1日 (2)	『花月新誌』131号明治16年2月25日
OR	1059	鐵欄橋畔 夜無風。		51	明治6年1月14 日	『花月新誌』132号明治16年3月10日
OR	1060	鐵蹄翔處 翠裙坡。		55	明治6年2月8日	『花月新誌』136号明治16年5月13日
OR	1061	客身同值 海西春。		57	明治6年3月7日 (2)	『花月新誌』138号明治16年5月13日
OR	1062	石口蹣處 賽旗斜。		71	明治6年4月24 日(2)	『花月新誌』147号明治16年11月30日
OR	1063	四邊鸞鏡 皎無塵。		54	明治6年1月31 日(3)	『花月新誌』134号明治16年4月10日
OR	1064	勝敗何論 鼠嚙猫。		52	明治6年1月31 日(1)	『花月新誌』134号明治16年4月10日

OR	1065	客身遠逐 瀛烟飛。		58	明治6年3月17 日 (1)	『花月新誌』140号明治16年7月10日
OR	1066	斜陽影裏 破雲行。		59	明治6年3月17 日 (2)	『花月新誌』140号明治16年7月10日
OR	1067	想見富饒 冠各州。		60	明治6年3月18 日	『花月新誌』140号明治16年7月10日
OR	1068	漕河百道 入江流。		61	明治6年3月22 日	『花月新誌』141号明治16年7月25日
OR	1069	石洞吞車 又吐車。		62	明治6年3月24 日 (1)	『花月新誌』142号明治16年8月10日
OR	1070	客程南入 弗稜蘭。		63	明治6年3月24 日 (2)	『花月新誌』142号明治16年8月10日
OR	1071	知有遺民 記大家。		64	明治6年3月25 日	『花月新誌』142号明治16年8月10日
OR	1072	風意吹春 舊帝都。		67	明治6年3月28 日	『花月新誌』144号明治16年9月25日
OR	1073	揀築當年 鑿斷崖。		65	明治6年3月27 日 (1)	『花月新誌』143号明治16年8月10日

OR	1074	莫問殺君 忠不忠。		66	明治6年3月27 日 (2)	『花月新誌』143号明治16年8月10日
OR	1075	都城如錦 港如弧。		68	明治6年3月31 日	『花月新誌』144号明治16年9月25日
OR	1076	天勝人耶 人勝天。		69	明治6年4月2日	『花月新誌』145号明治16年10月10日
OR	1077	西教誨民 將口民。				
OR	1078	海西四月 漸韶華。		70	明治6年4月24 日 (1)	『花月新誌』147号明治16年11月30日
OR	1079	故園曾唱 送君詞。		56	明治6年3月7日 (1)	『花月新誌』138号明治16年5月13日
OR	1080	瀝車烟接 瀝船烟。		74	明治6年5月19 日 (1)	『花月新誌』151号明治17年5月22日
OR	1081	頂上晴雷 脚底烟。		75	明治6年5月19 日 (2)	『花月新誌』151号明治17年5月22日
OR	1082	風濤之險 世無雙。		72	明治6年5月4日	『花月新誌』148号明治16年12月28日

OR	1083	莫怪遺容 凜有神。		76	明治6年5月19 日 (3)	『花月新誌』151号明治17年5月22日
OR	1084	鐵檻劃圍 豺虎橫。		77	明治6年5月19 日 (4)	『花月新誌』151号明治17年5月22日
OR	1085	四野無人 訴凍饑。		73	明治6年5月16 日	『花月新誌』151号明治17年5月22日
OR	1086	一白雲踪 出故山。				
OR	1087	想汝遊嬉 在舊廬。				
OR	1088	絃歌久不 夢潯陽。				
OR	1089	經過東球 三大洲。		78	明治6年6月1日 (1)	『花月新誌』153号明治17年8月8日
OR	1090	長天積水 碧茫々。		79	明治6年6月1日 (2)	『花月新誌』153号明治17年8月8日
OR	1091	老鯨出沒 碧瀾間。		80	明治6年6月1日 (3)	『花月新誌』153号明治17年8月8日
OR	1092	輪蹄鎮入 洞門來。				
OR	1093	危巖迎瀑 碎爲烟。				
OR	1094	匡廬猶覺 小涓々。				



OR	1095	客夢驚醒 枕上雷。				
OR	1096	立馬林皋 望古營。				
OR	1097	霹靂推人 迫急湍。				
OR	1098	崎嶇路在 老巖間。				
OR	1099	午炎烘地 夜亦蒸。				
OR	1100	濃綠涵雲 是綠河。				
OR	1101	綠河太駛 綠山危。				
OR	1102	隔岸翠螺 收夕陽。				
OR	1103	虬車奔壑 勢如拋。				
OR	1104	漚機雖疾 客程長。				
OR	1105	西來桑港 似歸家。				
OR	1106	啼禽催我 不如歸。				
OR	1107	征人西去 復西還。				
OR	1108	水滑天沈 雨氣冥。				
OR	1109	銷海濃雲 黯不開。				
OR	1110	無爵無田 且莫憂。				
OR	1111	休送新霜 上鬢頭。				
OR	1112	渺々鯨濤 來路長。				

OR	1113	去時江月 照人清。				
OR	1114	三千年古 刹。		25	陰曆明治5年10 月7日(3)	『花月新誌』123号明治15年5月7日

(欧米旅行中の漢詩については、「航西日乗」中の詩については、原文は成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集.明治文學全集4.筑摩書房,1969.「航西雜詩」中の詩については、海外見聞集.新日本古典文学大系明治編5.岩波書店,2009から筆者作成)

表付3-2 「熱海文藪」中の漢詩

記号	番号	初句	文中での日付 (陽曆)	収録文献等(陽曆)
AT	1001	恰是秋雲收雨時。	明治11年9月 2日	「澡泉紀遊」明治11年戊寅『花月新誌』54 明治11 年9月22日
AT	1002	不挈妻兒不帶奴。	明治11年9月 2日	「澡泉紀遊」明治11年戊寅『花月新誌』54 明治11 年9月22日
AT	1003	浦々輕風不起波。	明治11年9月 2日	「澡泉紀遊」明治11年戊寅『花月新誌』54 明治11 年9月22日
AT	1004	水作簾紋山作屏。	明治11年9月 2日	「澡泉紀遊」明治11年戊寅『花月新誌』54 明治11 年9月22日
AT	1005	起臥紫嵐蒼石間。	明治11年9月 3日	「澡泉紀遊」明治11年戊寅『花月新誌』55 明治11 年9月28日
AT		唾手當年收敷州。(鐸 子詩有り)	明治11年9月 3日	「澡泉紀遊」明治11年戊寅『花月新誌』55 明治11 年9月28日
AT	1006	漸入山中天漸涼。	明治11年9月 3日	「澡泉紀遊」明治11年戊寅『花月新誌』55 明治11 年9月28日
AT		酒冷蕭然人坐す堂。(鐸 子戲ニ一絶ヲ寫ス)	明治11年9月 3日	「澡泉紀遊」明治11年戊寅『花月新誌』55 明治11 年9月28日
AT	1007	嵐氣溪聲冷畫堂。(余 韻ヲ次イデ云フ)	明治11年9月 3日	「澡泉紀遊」明治11年戊寅『花月新誌』55 明治11 年9月28日
AT	1008	水聲高響雨聲低。	明治11年9月 4日	「澡泉紀遊」明治11年戊寅『花月新誌』56 明治11 年10月10日
AT	1009	過第二場探第三。	明治11年9月 4日	「澡泉紀遊」明治11年戊寅『花月新誌』56 明治11 年10月10日
AT	1010	客裏須行樂。	明治11年9月 4日	「澡泉紀遊」明治11年戊寅『花月新誌』56 明治11 年10月10日
AT		青山遶屋絶塵縁。(鐸 子)	明治11年9月 5日	「澡泉紀遊」明治11年戊寅『花月新誌』56 明治11 年10月10日

AT	1011	浴室猶留太閤名。	明治 11 年 9 月 5 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』56 明治 11 年 10 月 10 日
AT	1012	水吼石跳雲亦趨。	明治 11 年 9 月 5 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』56 明治 11 年 10 月 10 日
AT		東海先生安在哉。（木 戸松菊）	明治 11 年 9 月 5 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』56 明治 11 年 10 月 10 日
AT	1013	浮世浮生亦夢哉。	明治 11 年 9 月 5 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』56 明治 11 年 10 月 10 日
AT	1014	峭壁圍屋纔見天。	明治 11 年 9 月 5 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』57 明治 11 年 10 月 18 日
AT	1015	一徑將窮一徑開。	明治 11 年 9 月 6 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』57 明治 11 年 10 月 18 日
AT	1016	乍上萬仞山。	明治 11 年 9 月 6 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』57 明治 11 年 10 月 18 日
AT	1017	日金之勝天下聞。	明治 11 年 9 月 6 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』58 明治 11 年 10 月 27 日
AT	1018	浴罷倚樓角。	明治 11 年 9 月 6 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』58 明治 11 年 10 月 27 日
AT	1019	水美而山秀。	明治 11 年 9 月 7 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』59 明治 11 年 11 月 12 日
AT	1020	客子淹留不憶家。	明治 11 年 9 月 8 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』59 明治 11 年 11 月 12 日
AT	1021	熱泉一道戴雲開。	明治 11 年 9 月 8 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』60 明治 11 年 11 月 24 日
AT	1022	東樹西樓燭影明。	明治 11 年 9 月 9 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』60 明治 11 年 11 月 24 日
AT	1023	闔邑人家業釣漁。	明治 11 年 9 月 10 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』61 明治 11 年 12 月 18 日
AT	1024	雲岫猶看雨氣饒。	明治 11 年 9 月 11 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』61 明治 11 年 12 月 18 日
AT	1025	征人揮淚吊源公。	明治 11 年 9 月 11 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』62 明治 11 年 12 月 26 日
AT	1026	老樹猶堪蔽十牛。	明治 11 年 9 月 11 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』62 明治 11 年 12 月 26 日
AT	1027	海天欲暮路悠々。	明治 11 年 9 月 11 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』62 明治 11 年 12 月 26 日
AT	1028	管絃應是滿京城。	明治 11 年 9 月 11 日	「澡泉紀遊」明治 11 年戊寅『花月新誌』62 明治 11 年 12 月 26 日
AT	1029	聞説海南春色催。	明治 14 年 1 月	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14

			20 日	年 1 月 25 日雜錄欄
AT	1030	擁路雪泥來往難。	明治 14 年 1 月 20 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 1 月 25 日雜錄欄
AT	1031	山城人去後。	明治 14 年 1 月 21 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 1 月 26 日雜錄欄
AT	1032	霸圖誰復役風雲。	明治 14 年 1 月 21 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 1 月 26 日雜錄欄
AT		浴室冬來少漫遊。（關 雪江）	明治 14 年 1 月 21 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 1 月 26 日雜錄欄
AT	1033	借厨借榻借衾褥。	明治 14 年 1 月 21 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 1 月 26 日雜錄欄
AT	1034	且呼盃酒且吟哦。	明治 14 年 1 月 22 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 1 月 28 日雜錄欄
AT		無限情懷任口哦。（落合 濟三）	明治 14 年 1 月 23 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 1 月 29 日雜錄欄
AT		花晨月夕共吟哦。（兒 玉少助）	明治 14 年 1 月 23 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 1 月 29 日雜錄欄
AT		京城寒氣近如何（林研 海）	明治 14 年 1 月 23 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 1 月 29 日雜錄欄
AT	1035	奈此春寒料峭何。	明治 14 年 1 月 23 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 1 月 29 日雜錄欄
AT	1036	寒風捲潮拍石磯。	明治 14 年 1 月 24 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 1 日雜錄欄
AT	1037	幾箇湯槽玉液溫。	明治 14 年 1 月 25 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 1 日雜錄欄
AT	1038	水樓小酌且論文。	明治 14 年 1 月 26 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 2 日雜錄欄
AT	1039	老漁舸上葛衫涼。	明治 14 年 1 月 26 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 2 日雜錄欄
AT	1040	羅袖飄飄一曲新。	明治 14 年 1 月 26 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 2 日雜錄欄
AT	1041	繁華應是比華清。	明治 14 年 1 月 27 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 3 日雜錄欄
AT		望裏江山無不文。（島 維精）	明治 14 年 1 月 27 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 3 日雜錄欄
AT		錦囊之裡富奇文。（島 維精）	明治 14 年 1 月 27 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 3 日雜錄欄
AT	1042	入山而獵入江漁。	明治 14 年 1 月 29 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 5 日雜錄欄

AT	1043	沙白松青畫不如。	明治 14 年 1 月 31 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 6 日雜録欄
AT	1044	恰好漁郎買醉來。	明治 14 年 1 月 31 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 6 日雜録欄
AT	1045	一鷗歸去一鷗留。	明治 14 年 2 月 1 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 8 日雜録欄
AT	1046	寒梅吹雪野人門。	明治 14 年 2 月 1 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 8 日雜録欄
AT	1047	野鶴翱翔水石間。	明治 14 年 2 月 2 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 8 日雜録欄
AT	1048	萍踪到處易消魂。	明治 14 年 2 月 3 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 9 日雜録欄
AT	1049	办難脱室奈君何。	明治 14 年 2 月 3 日	「鴉のゆあみ」明治 14 年辛巳『朝野新聞』明治 14 年 2 月 9 日雜録欄
AT	1050	碧翁知我着吟鞭。	明治 15 年 1 月 12 日	「なくもがな」明治 15 年壬午『朝野新聞』明治 15 年 1 月 18 日雜録欄
AT	1051	潮氣凝如雨。	明治 15 年 1 月 13 日	「なくもがな」明治 15 年壬午『朝野新聞』明治 15 年 1 月 18 日雜録欄
AT	1052	溜浴驚吾病骨蘇。	明治 15 年 1 月 14 日	「なくもがな」明治 15 年壬午『朝野新聞』明治 15 年 1 月 27 日雜録欄
AT	1053	冰雪猶封濕上梅。	明治 15 年 1 月 14 日	「なくもがな」明治 15 年壬午『朝野新聞』明治 15 年 1 月 27 日雜録欄
AT		回首京城隔暮雲。（谷 隈山）	明治 15 年 1 月 16 日	「なくもがな」明治 15 年壬午『朝野新聞』明治 15 年 1 月 29 日雜録欄
AT		鐵石心腸天地知。（谷 隈山）	明治 15 年 1 月 16 日	「なくもがな」明治 15 年壬午『朝野新聞』明治 15 年 1 月 29 日雜録欄
AT	1054	功名富貴付浮雲。（谷 君ノ次韻ニ云フ）	明治 15 年 1 月 16 日	「なくもがな」明治 15 年壬午『朝野新聞』明治 15 年 1 月 29 日雜録欄
AT	1055	筆陳堂々海内知。（谷 君ノ次韻ニ云フ）	明治 15 年 1 月 16 日	「なくもがな」明治 15 年壬午『朝野新聞』明治 15 年 1 月 29 日雜録欄
AT	1056	病間偶作畫。	明治 15 年 1 月 16 日	「なくもがな」明治 15 年壬午『朝野新聞』明治 15 年 1 月 29 日雜録欄
AT	1057	小寓常無事。	明治 15 年 1 月 16 日	「なくもがな」明治 15 年壬午『朝野新聞』明治 15 年 1 月 29 日雜録欄
AT		天晴海波歛。（雪香君 又前韻ヲ倒用シテ示サ ル）	明治 15 年 1 月 16 日	「なくもがな」明治 15 年壬午『朝野新聞』明治 15 年 1 月 29 日雜録欄
AT	1058	君志追仙鶴。（漁史ノ 次韻ニ云フ）	明治 15 年 1 月 16 日	「なくもがな」明治 15 年壬午『朝野新聞』明治 15 年 1 月 29 日雜録欄

AT		身忘城市境。（蠡舟何君ガ雪香君ノ詩ノ次韻ヲ得タリ）	明治15年1月17日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月1日雑録欄
AT		乞假辭金闕。（蠡舟何君ガ雪香君ノ詩ノ次韻ヲ得タリ）	明治15年1月18日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月1日雑録欄
AT	1059	君家墨水我青山。（蠡舟君）	明治15年1月18日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月1日雑録欄
AT	1060	同衝氷雪出家山。（漁史其韻ヲ歩ス）	明治15年1月18日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月1日雑録欄
AT		雪滿京城不放春。（蠡舟君）	明治15年1月18日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月1日雑録欄
AT	1061	且喜靈泉早釀春。（漁史ノ次韻）	明治15年1月18日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月1日雑録欄
AT		時入大寒如小春。（雪香君モ亦賡ス）	明治15年1月18日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月1日雑録欄
AT	1062	南風不競兮。（題：温泉寺）	明治15年1月20日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月3日雑録欄
AT	1063	遊客尋聲到。（題：伊豆山）	明治15年1月20日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月3日雑録欄
AT	1064	古祠有老楠。（題：木之宮）	明治15年1月20日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月3日雑録欄
AT	1065	闔島無毛族。（題：初島）	明治15年1月20日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月3日雑録欄
AT	1066	冬時歛縮密。（紙中ニ姓名モ無ク）	明治15年1月21日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月3日雑録欄
AT		雲横老樹亂峯堆。（一友人山縣公ガ小澤少将ニ寄セラレシ詩ニ次韻セン）	明治15年1月22日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月4日雑録欄
AT	1067	詩卷畫箋圍坐堆。（漁史其韻ヲ歩シ雪香君ニ呈ス）	明治15年1月22日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月4日雑録欄
AT		一去逍遙南海間。（浅田澱橋子ヨリ）	明治15年1月22日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月4日雑録欄
AT		老柳大才無匹儔。（雪香君又一絶）	明治15年1月22日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月4日雑録欄
AT	1068	每嘆吟壇罕好儔。（漁史又次韻ノ惡詩）	明治15年1月22日	「なくもがな」明治15年壬午『朝野新聞』明治15年2月4日雑録欄

AT		滿堤梅柳未生塵。（痴堂君詩有り）	明治 16 年 1 月 23 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 1 月 26 日雑録欄
AT	1069	衝寒曉發夢香洲。	明治 16 年 1 月 24 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 1 月 31 日雑録欄
AT	1070	海南託病避風塵。（用痴堂君韻）	明治 16 年 1 月 23 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 1 月 31 日雑録欄
AT	1071	行々毎値奇景。	明治 16 年 1 月 25 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 2 日雑録欄
AT	1072	認來樓樹意先歡。	明治 16 年 1 月 25 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 2 日雑録欄
AT	1073	諸友結隣眞可歡。（前日ノ韻ヲ步シテ）	明治 16 年 1 月 28 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 4 日雑録欄
AT	1074	山容水態助清歡。（掬翠君ノ次韻ニ云フ）	明治 16 年 1 月 28 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 4 日雑録欄
AT	1075	箕踞山巔怪石頭。	明治 16 年 1 月 29 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 6 日雑録欄
AT	1076	仙山再度伴君來。	明治 16 年 1 月 29 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 6 日雑録欄
AT		團欒煖酒坐峯頭。（掬翠君）	明治 16 年 1 月 29 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 6 日雑録欄
AT		蓮峯咫尺掌中來。（掬翠君）	明治 16 年 1 月 29 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 6 日雑録欄
AT		幾層畫閣對滄溟。（淺田澱橋）	明治 16 年 1 月 29 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 8 日雑録欄
AT		龍挺和得銀絲膾。（淺田澱橋）	明治 16 年 1 月 29 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 8 日雑録欄
AT	1077	北山捲翠迸南溟。（次韻 漁史）	明治 16 年 1 月 29 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 8 日雑録欄
AT	1078	上簪漁介日無量。（次韻 漁史）	明治 16 年 1 月 29 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 8 日雑録欄
AT	1079	知有名媛倚綺櫳。	明治 16 年 2 月 1 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 10 日雑録欄
AT		健鶻聲海角風（掬翠君）	明治 16 年 2 月 1 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 10 日雑録欄
AT		隔浦松間夕日春。（三橋君一絶）	明治 16 年 2 月 3 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 13 日雑録欄
AT		夕陽峯外亂雲春。（掬翠君ノ次韻）	明治 16 年 2 月 3 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 13 日雑録欄
AT	1080	樓外巖坳風浪春。（漁	明治 16 年 2 月	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治

		史モ亦次韻)	3 日	16 年 2 月 13 日 雑録欄
AT		水國菴居最寂寥（中峯 禪師水居ノ詩ニ云フ） 「三籟集」より	明治 16 年 2 月 3 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 13 日 雑録欄
AT	1081	客居未必嘆寥々。	明治 16 年 2 月 4 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 13 日 雑録欄
AT		山南山北已韶華。（谷 中將君＝谷隈山）	明治 16 年 2 月 4 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 13 日 雑録欄
AT	1082	風煙清絶海之隈。	明治 16 年 2 月 5 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 14 日 雑録欄
AT	1083	衝雪而來衝雪還。	明治 16 年 2 月 7 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 14 日 雑録欄
AT	1084	東京城裏燕居人。	明治 16 年 2 月 9 日	「烟草の吸さし」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 2 月 15 日 雑録欄
AT	1085	輪蹄爭蹴熱埃行。	明治 16 年 8 月 25 日	「すげのを笠」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 8 月 30 日 雑録欄
AT	1086	家居避暑豈無方。	明治 16 年 8 月 25 日	「すげのを笠」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 8 月 30 日 雑録欄
AT	1087	水聲耶雨聲。	明治 16 年 8 月 27 日	「すげのを笠」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 9 月 1 日 雑録欄
AT	1088	五更衆影滅無跡。	明治 16 年 8 月 27 日	「すげのを笠」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 9 月 1 日 雑録欄
AT	1089	隔林夕照曛。	明治 16 年 8 月 28 日	「すげのを笠」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 9 月 4 日 雑録欄
AT	1090	夜靜水聲大。	明治 16 年 8 月 28 日	「すげのを笠」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 9 月 4 日 雑録欄
AT	1091	桂川水劃一村流。	明治 16 年 8 月 29 日	「すげのを笠」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 9 月 5 日 雑録欄
AT	1092	擲衣爭浴共同湯。	明治 16 年 8 月 29 日	「すげのを笠」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 9 月 5 日 雑録欄
AT	1093	鵲鴿原上風雨悽。	明治 16 年 8 月 30 日	「すげのを笠」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 9 月 8 日 雑録欄
AT	1094	寤生有智遠優君。	明治 16 年 8 月 30 日	「すげのを笠」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 9 月 8 日 雑録欄
AT		修禪寺邊逢柳北。（副 島君）	明治 16 年 8 月 31 日	「すげのを笠」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 9 月 9 日 雑録欄
AT	1095	三島驛南三津北。（漁 史）	明治 16 年 8 月 31 日	「すげのを笠」明治 16 年癸未『朝野新聞』明治 16 年 9 月 9 日 雑録欄



AT		桂谷之山多鹿聲。(狩野君)	明治16年8月31日	「すげのを笠」明治16年癸未『朝野新聞』明治16年9月9日雑録欄
AT	1096	桂谷函山足壯觀。	明治16年9月1日	「すげのを笠」明治16年癸未『朝野新聞』明治16年9月11日雑録欄
AT	1097	前舸纔離岸。	明治16年9月2日	「すげのを笠」明治16年癸未『朝野新聞』明治16年9月12日雑録欄
AT	1098	網蹙魚狼狽。	明治16年9月2日	「すげのを笠」明治16年癸未『朝野新聞』明治16年9月12日雑録欄
AT	1099	漁長呼輕舸。	明治16年9月2日	「すげのを笠」明治16年癸未『朝野新聞』明治16年9月12日雑録欄
AT	1100	銀河移影夜山明。	明治16年9月5日	「すげのを笠」明治16年癸未『朝野新聞』明治16年9月13日雑録欄
AT	1101	相山豆海路縈回。	明治16年9月7日	「すげのを笠」明治16年癸未『朝野新聞』明治16年9月13日雑録欄
AT	1102	漁火耶曉星。	明治16年9月8日	「すげのを笠」明治16年癸未『朝野新聞』明治16年9月13日雑録欄
AT	1103	推窓星斗影品々。	明治16年12月28日	「藥槽餘滴」明治17年甲申『朝野新聞』明治17年1月8日雑録欄
AT	1104	一病三旬百事拋。(除タニ首)	明治16年12月31日	「藥槽餘滴」明治17年甲申『朝野新聞』明治17年1月8日雑録欄
AT	1105	殘燈花映鬢絲黃。(除タニ首)	明治16年12月31日	「藥槽餘滴」明治17年甲申『朝野新聞』明治17年1月8日雑録欄
AT	1106	客中爲客遇新年。	明治17年1月1日	「熱海ノ元日」明治17年甲申『朝野新聞』明治17年1月6日雑録欄
AT	1107	無復拜年車馬喧。(甲申元日詩歌)	明治17年1月1日	「熱海ノ元日」明治17年甲申『朝野新聞』明治17年1月6日雑録欄
AT	1108	京城歲事不堪愚。(甲申元日詩歌)	明治17年1月1日	「熱海ノ元日」明治17年甲申『朝野新聞』明治17年1月6日雑録欄
AT	1109	此生四十八年間。(甲申元日詩歌)	明治17年1月1日	「熱海ノ元日」明治17年甲申『朝野新聞』明治17年1月6日雑録欄
AT		三百人家一望平。(必山君左ノ詩)	明治17年1月2日	「藥槽餘滴」明治17年甲申『朝野新聞』明治17年1月10日雑録欄
AT	1110	家々拊舞祝昇平。(漁史…必山君ノ御本職ニ對シ次韻セザルヲ得ズ)	明治17年1月2日	「藥槽餘滴」明治17年甲申『朝野新聞』明治17年1月10日雑録欄
AT	1111	指上金環輕脱去。	明治17年1月3日	「藥槽餘滴」明治17年甲申『朝野新聞』明治17年1月10日雑録欄
AT	1112	夜來一雨美如酥。	明治17年1月	「藥槽餘滴」明治17年甲申『朝野新聞』明治17年

			5 日	1 月 11 日雜錄欄
AT	1113	車中顧汝發東京。	明治 17 年 1 月 5 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 11 日雜錄欄
AT	1114	想見泥孩存匣中。	明治 17 年 1 月 5 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 11 日雜錄欄
AT	1115	兔聞瀕死叫號聲。	明治 17 年 1 月 5 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 11 日雜錄欄
AT	1116	上校學成伊呂波。	明治 17 年 1 月 5 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 11 日雜錄欄
AT	1117	恍若有人燈影青。	明治 17 年 1 月 5 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 11 日雜錄欄
AT		掌大僑房趣却佳。（長 谷川青水君作）	明治 17 年 1 月 7 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 15 日雜錄欄
AT		門松飾了又蓬萊。（題： 東京新年 無名氏作）	明治 17 年 1 月 9 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 17 日雜錄欄
AT	1118	今朝暗淚數行新。	明治 17 年 1 月 10 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 17 日雜錄欄
AT	1119	狂喜浴樓相遇時。	明治 17 年 1 月 11 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 17 日雜錄欄
AT	1120	客來不送迎。	明治 17 年 1 月 13 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 19 日雜錄欄
AT	1121	故園寒廿度。	明治 17 年 1 月 13 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 19 日雜錄欄
AT	1122	孰賓熟主人。	明治 17 年 1 月 13 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 19 日雜錄欄
AT	1123	相遇多相識。	明治 17 年 1 月 13 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 19 日雜錄欄
AT	1124	眠醒天未曉。	明治 17 年 1 月 13 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 19 日雜錄欄
AT		烈士何會嘆暮年。（南 橋翁本日漁史ニ一律ヲ 寄ス）	明治 17 年 1 月 16 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 24 日雜錄欄
AT	1125	與君契濶已三年。（漁 史次韻シ）	明治 17 年 1 月 16 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 24 日雜錄欄
AT		舊年遊了又新年。（翁 又疊韻シテ）	明治 17 年 1 月 16 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 24 日雜錄欄
AT		幽憂之病幾經年。（童 山子モ亦贈ラル）	明治 17 年 1 月 16 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 24 日雜錄欄

AT	1126	快事唯當讓少年。（漁史默止スルフ得ズ）	明治 17 年 1 月 16 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 24 日雜録欄
AT		此身未可厭殘年。（翁ノ三疊韻ニ云フ）	明治 17 年 1 月 16 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 24 日雜録欄
AT	1127	知尋仙種上嶙峋。	明治 17 年 1 月 17 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 25 日雜録欄
AT		午眠初覺舉吟觴。（上杉勝賢君）	明治 17 年 1 月 19 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 27 日雜録欄
AT	1128	入港京船月五回。	明治 17 年 1 月 22 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 29 日雜録欄
AT	1129	漫道優游養我神。	明治 17 年 1 月 22 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 1 月 29 日雜録欄
AT	1130	暖靄和風春一蓑。	明治 17 年 1 月 24 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 2 月 1 日雜録欄
AT	1131	潮色嵐光越様奇。	明治 17 年 1 月 26 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 2 月 6 日雜録欄
AT	1132	無復塵囂達耳邊。	明治 17 年 1 月 28 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 2 月 9 日雜録欄
AT	1133	健筆投來閑養神。	明治 17 年 1 月 31 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 2 月 12 日雜録欄
AT	1134	咳唾爲球腸錦繡。	明治 17 年 1 月 31 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 2 月 12 日雜録欄
AT	1135	蠻情俗眼不知梅。	明治 17 年 2 月 1 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 2 月 12 日雜録欄
AT	1136	聞説京城冰雪多。	明治 17 年 2 月 1 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 2 月 12 日雜録欄
AT		依稀風物似三吳。（題：寄柳北翁在熱海兼乞高和大江敬香作）	明治 17 年 2 月 4 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 2 月 15 日雜録欄
AT	1137	鄉貫奚分越與吳。（題：次敬香子見寄韻時風説滿樓 漁史作）	明治 17 年 2 月 4 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 2 月 15 日雜録欄
AT		相逢何復問秦吳。（山内君…次韻）	明治 17 年 2 月 5 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 2 月 20 日雜録欄
AT	1138	九右衛門吾愛汝。	明治 17 年 2 月 7 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 2 月 20 日雜録欄
AT	1139	昨雪又今雨。	明治 17 年 2 月 9 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 2 月 22 日雜録欄
AT	1140	客衣雖不薄。	明治 17 年 2 月	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年

			9 日	2 月 22 日 雜録欄
AT	1141	雪後江山畫樣奇。	明治 17 年 2 月 15 日	「藥槽餘滴」明治 17 年甲申『朝野新聞』明治 17 年 2 月 23 日 雜録欄

柳北以外の作者による漢詩（番号無し）

（『熱海文藪』中の漢詩については、成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集.明治文學全集 4 .筑摩書房,1969  
から筆者作成）

付録4

『花月新誌』上の柳北の作品

(a 和文(随筆等), b1 漢文, b2 漢文書下文, c 漢詩, d 短歌)

文体	題名	内容等	号数	出版年月日	署名
b2	題言	花月新誌発行の意	1	明治10年1月4日	澀上漁史柳北
b2	癩鬼之言	夢による世評批判	1	明治10年1月4日	澀上漁史
b1	柳橋新誌三編序		1	明治10年1月4日	何有仙史
b2	兵庫屋新樓ノ記	風俗評	2	明治10年1月14日	澀上漁史
b1	「京猫一斑」 自序	京の遊里	2	明治10年1月14日	何有仙史
c	丙子歳晩感慨	柳北の感慨	2	明治10年1月14日	柳北
b2	青塚ノ説	佳人の運命	3	明治10年1月26日	澀上漁史
b1	鴨東新誌(京猫一斑 抜萃) 1	京の遊里	3	明治10年1月26日	何有仙史
b2	枕ノ記	中国を舞台に風俗 評	4	明治10年2月5日	澀上漁史
b1	鴨東新誌(京猫一斑 抜萃) 2		4	明治10年2月5日	何有仙史
b2	水ノ説	遊里と世評	5	明治10年2月16日	澀上漁史
b1	鴨東新誌(京猫一斑 抜萃) 3		5	明治10年2月16日	何有仙史
a	花のなさけ	随筆	6	明治10年2月25日	澀上漁史
d	花のなさけ収録	短歌	6	明治10年2月25日	澀上漁史
b1	鴨東新誌(京猫一斑 抜萃) 4		6	明治10年2月25日	何有仙史
b2	烟草ノ説	世評批判	7	明治10年3月10日	澀上漁史
b1	鴨東新誌(京猫一斑 抜萃) 5		7	明治10年3月10日	何有仙史
b2	花下ノ寝言	随筆	8	明治10年3月23日	澀上漁史
c	蒲田梅園對花話舊	幕臣時代の感慨	8	明治10年3月23日	柳北
b1	鴨東新誌(京猫一斑 抜萃) 6		8	明治10年3月23日	何有仙史
b2	京阪看花ノ記 1	京の遊里	9	明治10年5月10日	澀上漁史
b1	鴨東新誌(京猫一斑 抜萃) 7		9	明治10年5月10日	何有仙史
c	鴨東新誌(京猫一斑 抜萃) 7 収録		9	明治10年5月10日	何有仙史
b2	京阪看花ノ記 2	京の遊里	10	明治10年5月20日	澀上漁史
c	席上次黄石翁韻		10	明治10年5月20日	柳北
b1	鴨東新誌(京猫一斑 抜萃) 8		10	明治10年5月20日	何有仙史

	拔萃) 8				
b2	詰澤上遊客文	遊里と世評	11	明治 10 年 5 月 29 日	澤上漁史
d	嵐山の花を見て		11	明治 10 年 5 月 29 日	柳北
a	述齋偶筆ぬきかき (七則) 1	随筆	11	明治 10 年 5 月 29 日	紹介の文の署名 柳北
b1	鴨東新誌 (京猫一斑 拔萃) 9		11	明治 10 年 5 月 29 日	何有仙史
b2	観銀座ノ夜市ヲ記	風俗評	12	明治 10 年 6 月 5 日	澤上漁史
b1	鴨東新誌 (京猫一斑 拔萃) 10		12	明治 10 年 6 月 5 日	何有仙史
a	述齋偶筆ぬきかき (六則) 2	随筆	13	明治 10 年 6 月 16 日	
b2	埃及古神像記	考古学	13	明治 10 年 6 月 16 日	澤上漁史
b1	鴨東新誌 (京猫一斑 拔萃) 11		13	明治 10 年 6 月 16 日	何有仙史
b2	小風船記	文明開化批判	14	明治 10 年 6 月 26 日	澤上漁史
b1	鴨東新誌 (京猫一斑 拔萃) 12		14	明治 10 年 6 月 26 日	何有仙史
a	述齋偶筆ぬきかき (五則) 3	随筆	15	明治 10 年 7 月 4 日	
b1	鴨東新誌 (京猫一斑 拔萃) 13		15	明治 10 年 7 月 4 日	何有仙史
b2	土用干ノ記 1		16	明治 10 年 7 月 12 日	澤上漁史
b1	鴨東新誌 (京猫一斑 拔萃) 14		16	明治 10 年 7 月 12 日	何有仙史
b2	土用干ノ記 2		17	明治 10 年 7 月 20 日	澤上漁史
b1	鴨東新誌 (京猫一斑 拔萃) 15		17	明治 10 年 7 月 20 日	何有仙史
b2	花月問答	花月新誌に込めた 意	18	明治 10 年 7 月 28 日	澤上漁史
b1	鴨東新誌 (京猫一斑 拔萃) 16		18	明治 10 年 7 月 28 日	何有仙史
b2	吊西京妓流文	京の遊里	19	明治 10 年 8 月 8 日	澤上漁史
b1	京猫一斑後序		19	明治 10 年 8 月 8 日	何有仙史
b2	小仙窟	西欧文化	20	明治 10 年 8 月 16 日	澤上漁史
b2	房舎	西欧文化	20	明治 10 年 8 月 16 日	澤上漁史
a	述齋偶筆 (七則)	随筆	20	明治 10 年 8 月 16 日	
b2	小仙窟 2	西欧文化	21	明治 10 年 8 月 28 日	澤上漁史譯述
b2	小仙窟 3	西欧文化	22	明治 10 年 9 月 04 日	澤上漁史譯述

b2	楊牙兒ノ奇獄 1	西欧文学の翻訳	22	明治 10 年 9 月 04 日	柳北拜識
b2	小仙窟 4 園囿	西欧文化	23	明治 10 年 9 月 14 日	澤上漁史譯述
b2	楊牙兒ノ奇獄 2	西欧文学の翻訳	23	明治 10 年 9 月 14 日	
b2	小仙窟 5 園囿	西欧文化	24	明治 10 年 9 月 25 日	澤上漁史譯述
b2	二橋ノ優劣	東京の遊里	24	明治 10 年 9 月 25 日	澤上漁史
b2	楊牙兒ノ奇獄 3	西欧文学の翻訳	24	明治 10 年 9 月 25 日	
b2	小仙窟 6	西欧文化	25	明治 10 年 10 月 6 日	澤上漁史譯述
b2	楊牙兒ノ奇獄 4	西欧文学の翻訳	25	明治 10 年 10 月 6 日	
b2	小仙窟 7	西欧文化	26	明治 10 年 10 月 14 日	
b2	楊牙兒ノ奇獄 5	西欧文学の翻訳	26	明治 10 年 10 月 14 日	
b2	小仙窟 8	西欧文化	27	明治 10 年 10 月 25 日	
b2	楊牙兒ノ奇獄 6	西欧文学の翻訳	27	明治 10 年 10 月 25 日	
b2	猫々奇聞ノ題言		28	明治 10 年 11 月 9 日	澤上漁史
b2	楊牙兒ノ奇獄 7	西欧文学の翻訳	28	明治 10 年 11 月 9 日	
b2	好古小言	古美術	29	明治 10 年 11 月 18 日	澤上漁史
b2	楊牙兒ノ奇獄 8	西欧文学の翻訳	29	明治 10 年 11 月 18 日	
b2	好古小言 2	古美術	30	明治 10 年 11 月 29 日	澤上漁史
b2	楊牙兒ノ奇獄 9	西欧文学の翻訳	30	明治 10 年 11 月 29 日	
c	喬松ノ歌賀嚴如上人 華甲一周		31	明治 10 年 12 月 11 日	柳北
b2	楊牙兒ノ奇獄 10	西欧文学の翻訳	31	明治 10 年 12 月 11 日	
c	哭五郎詩	子を亡くした悲しみ	32	明治 10 年 12 月 22 日	柳北
b2	楊牙兒ノ奇獄 11	西欧文学の翻訳	32	明治 10 年 12 月 22 日	
b2	花天月地		33	明治 11 年 1 月 4 日	澤上漁史
b2	楊牙兒ノ奇獄 12	西欧文学の翻訳	33	明治 11 年 1 月 4 日	
c	一月一日作		34	明治 11 年 1 月 16 日	柳北
b2	澤上夜話 (三則)	詩論	34	明治 11 年 1 月 16 日	澤上漁史
b2	楊牙兒ノ奇獄 13	西欧文学の翻訳	34	明治 11 年 1 月 16 日	
b2	雪ノ説	風流への思い	35	明治 11 年 1 月 27 日	澤上漁史
a	変化歌合 (1)	擬古文	35	明治 11 年 1 月 27 日	紹介の文の署名 柳北
b2	楊牙兒ノ奇獄 14	西欧文学の翻訳	35	明治 11 年 1 月 27 日	
a	変化歌合 2	擬古文	36	明治 11 年 2 月 14 日	
c	二月二日發千葉歸家 作	梅花の風情	36	明治 11 年 2 月 14 日	柳北
b2	楊牙兒ノ奇獄 15	西欧文学の翻訳	36	明治 11 年 2 月 14 日	
a	変化歌合 3	擬古文	37	明治 11 年 2 月 26 日	
b2	思フマゝ	文芸への思い	37	明治 11 年 2 月 26 日	澤上漁史

a	変化歌合 4	擬古文	38	明治 11 年 3 月 8 日	
b2	羅浮餘韻	風流への思い	38	明治 11 年 3 月 8 日	瀬上漁史
a	変化歌合 5	擬古文	39	明治 11 年 3 月 17 日	
b2	龜トノ考	占いへの批判	39	明治 11 年 3 月 17 日	瀬上漁史
a	述齋随筆（四則）	随筆	40	明治 11 年 3 月 28 日	
b1	丹釀歌贈三國港銀杏 閣主人毎句韻		40	明治 11 年 3 月 28 日	柳北
b2	昔かたり		41	明治 11 年 4 月 9 日	瀬上漁史
a	言葉の露	歌論	42	明治 11 年 4 月 19 日	瀬上漁史
b2	花柳春話題言	文芸論	43	明治 11 年 5 月 4 日	瀬上漁史
a	述齋偶筆（六則）	随筆	43	明治 11 年 5 月 4 日	
b2	獨言	政治的見解	44	明治 11 年 5 月 15 日	瀬上漁史
b2	吊朝野賦	新聞発行停止	45	明治 11 年 5 月 25 日	花月社員
b2	阿堵ノ贅言	古銭	45	明治 11 年 5 月 25 日	
a	述齋偶筆（三則）	随筆	45	明治 11 年 5 月 25 日	
b2	新居未成記		47	明治 11 年 6 月 19 日	瀬上漁史
c	新居未成記収録漢詩		47	明治 11 年 6 月 19 日	瀬上漁史
c	美人調箏圖		47	明治 11 年 6 月 19 日	柳北
b2	劇場私言	演劇論	48	明治 11 年 6 月 29 日	瀬上漁史
a	述齋偶筆（五則）	随筆	49	明治 11 年 7 月 13 日	
b2	哭澤村田之助	演劇	49	明治 11 年 7 月 13 日	瀬上漁史
b2	松菊荘ノ略記	随筆	50	明治 11 年 7 月 28 日	瀬上漁史
d	星河落簷	短歌	50	明治 11 年 7 月 28 日	柳北
a	川端歌合	歌論	51	明治 11 年 8 月 11 日	柳北しるす
b2	蝶二ノ技	遊里からの随筆	51	明治 11 年 8 月 11 日	瀬上漁史
a	川端歌合 2	歌論	52	明治 11 年 8 月 18 日	
b2	古榴彈ノ記	軍事批評	52	明治 11 年 8 月 18 日	瀬上漁史
a	川端歌合 3	歌論	53	明治 11 年 8 月 29 日	
b2	墨水烟火ノ記	時事評論	53	明治 11 年 8 月 29 日	瀬上漁史
a	川端歌合 4	歌論	54	明治 11 年 9 月 22 日	
b2	澡泉紀遊 1	国内游记	54	明治 11 年 9 月 22 日	瀬上漁史
a	川端歌合 5	歌論	55	明治 11 年 9 月 28 日	
b2	澡泉紀遊 2	国内游记	55	明治 11 年 9 月 28 日	瀬上漁史
b2	澡泉紀遊 3	国内游记	56	明治 11 年 10 月 10 日	瀬上漁史
b2	澡泉紀遊 4	国内游记	57	明治 11 年 10 月 18 日	瀬上漁史



a	述齋偶筆（四則）	随筆	57	明治 11 年 10 月 18 日	
b2	澡泉紀游 5	国内游記	58	明治 11 年 10 月 27 日	瀬上漁史
b2	澡泉紀游 6	国内游記	59	明治 11 年 11 月 12 日	瀬上漁史
b2	澡泉紀游 7	国内游記	60	明治 11 年 11 月 24 日	瀬上漁史
b2	澡泉紀游 8	国内游記	61	明治 11 年 12 月 18 日	瀬上漁史
a	楽翁公手書きの写し 原本大久保氏舊蔵	古典解説	61	明治 11 年 12 月 18 日	
b2	澡泉紀游 9	国内游記	62	明治 11 年 12 月 26 日	瀬上漁史
b2	促春遊檄文	風流への思い	63	明治 12 年 1 月 10 日	瀬上漁史
c	一月一日出遊	漢詩	63	明治 12 年 1 月 10 日	柳北
d	春の始めによめる	短歌	63	明治 12 年 1 月 10 日	柳北
b2	遊事ノ沿革 1	世評批判、郷愁	64	明治 12 年 1 月 21 日	瀬上漁史
b2	遊事ノ沿革 2	世評批判、郷愁	65	明治 12 年 2 月 5 日	瀬上漁史
b1	紫史吟評 1	源氏物語評釈	65	明治 12 年 2 月 5 日	柳北拜識
b1	紫史吟評 2	源氏物語評釈	66	明治 12 年 2 月 23 日	
b2	遊事ノ沿革 3	世評批判、郷愁	66	明治 12 年 2 月 23 日	瀬上漁史
c	蕎麥	美食への思い	66	明治 12 年 2 月 23 日	柳北
a	述齋偶筆（三則）	随筆	66	明治 12 年 2 月 23 日	
b1	紫史吟評 3	源氏物語評釈	67	明治 12 年 3 月 8 日	
b2	答童生之問	詩論	67	明治 12 年 3 月 8 日	瀬上漁史
b1	新柳情譜 1	芸妓評判記	67	明治 12 年 3 月 8 日	瀬上漁史戯稿
b1	紫史吟評 4	源氏物語評釈	68	明治 12 年 3 月 29 日	
b2	文墨ノ弊	世評 国力増強力説	68	明治 12 年 3 月 29 日	瀬上漁史
b1	新柳情譜 2	芸妓評判記	68	明治 12 年 3 月 29 日	瀬上漁史戯稿
b1	紫史吟評 5	源氏物語評釈	69	明治 12 年 4 月 10 日	
b2	閑忙小言	風雅の道への導き	69	明治 12 年 4 月 10 日	瀬上漁史
b1	新柳情譜 3	芸妓評判記	69	明治 12 年 4 月 10 日	瀬上漁史戯稿
b1	流燈會之碑	墨田川の風物史	70	明治 12 年 4 月 24 日	柳北
b1	紫史吟評 6	源氏物語評釈	70	明治 12 年 4 月 24 日	
b2	倫敦小誌 1 消火 隊	英書抄訳	70	明治 12 年 4 月 24 日	
b1	新柳情譜 4	芸妓評判記	70	明治 12 年 4 月 24 日	瀬上漁史戯稿
b1	紫史吟評 7	源氏物語評釈	71	明治 12 年 5 月 4 日	
b2	倫敦小誌 2 土曜日 日曜日貧人ノ景況	英書抄訳	71	明治 12 年 5 月 4 日	
b1	新柳情譜 5	芸妓評判記	71	明治 12 年 5 月 4 日	瀬上漁史戯稿
b1	紫史吟評 8	源氏物語評釈	72	明治 12 年 5 月 16 日	

b2	倫敦小誌 3 土曜日 日曜日貧人ノ景況 2	英書抄訳	72	明治 12 年 5 月 16 日	
a	述齋偶筆 (六則)	随筆	72	明治 12 年 5 月 16 日	
b1	新柳情譜 6	芸妓評判記	72	明治 12 年 5 月 16 日	瀬上漁史戯稿
b1	紫史吟評 9	源氏物語評釈	73	明治 12 年 5 月 28 日	
b2	倫敦小誌 4 土曜日 日曜日貧人ノ景況 3	英書抄訳	73	明治 12 年 5 月 28 日	
c	ある女の寄文戀てふ 題にて歌よめといひ ければ	短歌	73	明治 12 年 5 月 28 日	柳北
b1	新柳情譜 7	芸妓評判記	73	明治 12 年 5 月 28 日	瀬上漁史戯稿
b1	故幕府侍醫法印節齋 岡先生墓碑	墓碑	74	明治 12 年 6 月 7 日	柳北
b1	紫史吟評 10	源氏物語評釈	74	明治 12 年 6 月 7 日	
b2	倫敦小誌 5 倫敦小 童 1	英書抄訳	74	明治 12 年 6 月 7 日	
b1	新柳情譜 8	芸妓評判記	74	明治 12 年 6 月 7 日	瀬上漁史戯稿
b1	紫史吟評 11	源氏物語評釈	75	明治 12 年 6 月 17 日	
b2	倫敦小誌 6 倫敦小 童 2	英書抄訳	75	明治 12 年 6 月 17 日	
a	述齋偶筆 (三則)	随筆	75	明治 12 年 6 月 17 日	
b1	新柳情譜 9	芸妓評判記	75	明治 12 年 6 月 17 日	瀬上漁史戯稿
b1	紫史吟評 12	源氏物語評釈	76	明治 12 年 7 月 5 日	
b2	倫敦小誌 7 新聞報 告	英書抄訳	76	明治 12 年 7 月 5 日	
a	述齋偶筆 (一則)	随筆	76	明治 12 年 7 月 5 日	
b1	新柳情譜 10	芸妓評判記	76	明治 12 年 7 月 5 日	瀬上漁史戯稿
b1	紫史吟評 13	源氏物語評釈	77	明治 12 年 7 月 24 日	
b2	倫敦小誌 8 盗賊	英書抄訳	77	明治 12 年 7 月 24 日	
b1	新柳情譜 11	芸妓評判記	77	明治 12 年 7 月 24 日	瀬上漁史戯稿
b1	紫史吟評 14	源氏物語評釈	78	明治 12 年 7 月 30 日	
b2	倫敦小誌 9 盗賊 2	英書抄訳	78	明治 12 年 7 月 30 日	
b1	新柳情譜 12	芸妓評判記	78	明治 12 年 7 月 30 日	瀬上漁史戯稿
b1	紫史吟評 15	源氏物語評釈	79	明治 12 年 8 月 13 日	
b2	倫敦小誌 10 ヘンズ 盗品ヲ買フ者	英書抄訳	79	明治 12 年 8 月 13 日	
a	述齋偶筆 (三則)	随筆	79	明治 12 年 8 月 13 日	
b1	新柳情譜二編 1	芸妓評判記	79	明治 12 年 8 月 13 日	瀬上漁史戯稿
b1	紫史吟評 16	源氏物語評釈	80	明治 12 年 8 月 24 日	

b2	倫敦小誌 11 ヘンズ 盗品ヲ買フ者 2	英書抄訳	80	明治 12 年 8 月 24 日	
b1	新柳情譜二編 2	芸妓評判記	80	明治 12 年 8 月 24 日	澤上漁史戯稿
b1	紫史吟評 17	源氏物語評釈	81	明治 12 年 9 月 11 日	
b2	倫敦小誌 12 ヘンズ 盗品ヲ買フ者 3	英書抄訳	81	明治 12 年 9 月 11 日	
b1	新柳情譜二編 3	芸妓評判記	81	明治 12 年 9 月 11 日	澤上漁史戯稿
a	みるめのさち 1	随筆	82	明治 12 年 9 月 28 日	紹介の文の署名 柳北
b2	航薇日記 1	国内游记	82	明治 12 年 9 月 28 日	澤上漁史
b1	新柳情譜二編 4	芸妓評判記	82	明治 12 年 9 月 28 日	澤上漁史戯稿
a	みるめのさち 2	随筆	83	明治 12 年 10 月 21 日	
b2	航薇日記 2	国内游记	83	明治 12 年 10 月 21 日	
b1	新柳情譜二編 5	芸妓評判記	83	明治 12 年 10 月 21 日	澤上漁史戯稿
a	みるめのさち 3	随筆	84	明治 12 年 10 月 31 日	
b2	航薇日記 3	国内游记	84	明治 12 年 10 月 31 日	
b1	新柳情譜二編 6	芸妓評判記	84	明治 12 年 10 月 31 日	澤上漁史戯稿
a	みるめのさち 4	随筆	85	明治 12 年 11 月 16 日	
c	二州與友人小飲	漢詩	85	明治 12 年 11 月 16 日	柳北
b2	航薇日記 4	国内游记	85	明治 12 年 11 月 16 日	
b1	新柳情譜二編 7	芸妓評判記	85	明治 12 年 11 月 16 日	澤上漁史戯稿
a	みるめのさち 5	随筆	86	明治 12 年 12 月 5 日	
b2	航薇日記 5	国内游记	86	明治 12 年 12 月 5 日	
b1	新柳情譜二編 8	芸妓評判記	86	明治 12 年 12 月 5 日	澤上漁史戯稿
a	みるめのさち 6	随筆	87	明治 12 年 12 月 18 日	
b2	航薇日記 6	国内游记	87	明治 12 年 12 月 18 日	
b1	新柳情譜二編 9	芸妓評判記	87	明治 12 年 12 月 18 日	澤上漁史戯稿
b2	新年ノ祥瑞	妬律序の紹介	88	明治 13 年 1 月 23 日	澤上漁史
a	述齋偶筆（二則）	随筆	88	明治 13 年 1 月 23 日	
b1	新柳情譜二編 10	芸妓評判記	88	明治 13 年 1 月 23 日	澤上漁史戯稿
a	述齋偶筆（三則）	随筆	89	明治 13 年 2 月 15 日	
b2	航薇日記 7	国内游记	89	明治 13 年 2 月 15 日	
b1	新柳情譜二篇 11	芸妓評判記	89	明治 13 年 2 月 15 日	澤上漁史戯稿
b2	航薇日記 8	国内游记	90	明治 13 年 2 月 29 日	
b1	新柳情譜二篇 12	芸妓評判記	90	明治 13 年 2 月 29 日	澤上漁史戯稿
b2	航薇日記 9	国内游记	91	明治 13 年 3 月 23 日	
a	述齋偶筆（三則） 2	随筆	92	明治 13 年 3 月 31 日	
b2	航薇日記 10	国内游记	92	明治 13 年 3 月 31 日	
d	墨田堤の花をみて	短歌	92	明治 13 年 3 月 31 日	柳北

b2	航薇日記 11	国内游記	93	明治 13 年 4 月 14 日	
b2	航薇日記 12	国内游記	94	明治 13 年 4 月 27 日	
b2	航薇日記 13	国内游記	95	明治 13 年 5 月 13 日	
b2	航薇日記 14	国内游記	96	明治 13 年 5 月 25 日	
d	夏述懷	短歌	96	明治 13 年 5 月 25 日	柳北
a	述齋偶筆（五則）	隨筆	96	明治 13 年 5 月 25 日	
b2	航薇日記 15	国内游記	97	明治 13 年 6 月 12 日	
a	述齋偶筆（五則） 2	隨筆	97	明治 13 年 6 月 12 日	
b2	航薇日記 16	国内游記	98	明治 13 年 7 月 3 日	
c	村莊日暮蚊雷大作戲 得一絕	漢詩	98	明治 13 年 7 月 3 日	柳北
b1	茅山遺草序	文学論	99	明治 13 年 7 月 29 日	柳北
b2	航薇日記 17	国内游記	99	明治 13 年 7 月 29 日	
b2	航薇日記 18	国内游記	100	明治 13 年 8 月 17 日	
b2	航薇日記 19	国内游記	101	明治 13 年 9 月 28 日	
c	墨水夜歸與杉山翁舟 中沽韻二首	漢詩二首	101	明治 13 年 9 月 28 日	柳北
b1	庚辰九月	新柳情譜への感慨	101	明治 13 年 9 月 28 日	墨上病夫識
b2	航薇日記 20	国内游記	102	明治 13 年 10 月 30 日	
b2	航薇日記 21	国内游記	103	明治 13 年 11 月 24 日	
b2	航薇日記 22	国内游記	104	明治 13 年 12 月 19 日	
d	月島水鳥	短歌	104	明治 13 年 12 月 19 日	柳北
b2	歳首ノ祝詞	新年雜感	105	明治 14 年 1 月 19 日	墨上漁史
d	歳首ノ祝詞収録短歌	短歌	105	明治 14 年 1 月 19 日	墨上漁史
b2	航薇日記 23	国内游記	105	明治 14 年 1 月 19 日	
c	歳旦二首	漢詩二首	105	明治 14 年 1 月 19 日	柳北
b2	航薇日記 24	国内游記	106	明治 14 年 2 月 18 日	
b2	航薇日記 25	国内游記	107	明治 14 年 3 月 11 日	
b2	航薇日記 26	国内游記	108	明治 14 年 3 月 29 日	
d	達如上人追慕 寄霜 懷舊	短歌	108	明治 14 年 3 月 29 日	柳北
b2	航薇日記 27	国内游記	109	明治 14 年 4 月 30 日	
b2	航薇日記 28	国内游記	110	明治 14 年 5 月 17 日	
c	緑陰	漢詩	110	明治 14 年 5 月 17 日	柳北
b2	航薇日記 29	国内游記	111	明治 14 年 5 月 31 日	
d	朝郭公	短歌	111	明治 14 年 5 月 31 日	柳北
b2	航薇日誌 30	国内游記	112	明治 14 年 6 月 21 日	
b2	航薇日誌 31	国内游記	113	明治 14 年 7 月 15 日	
b2	航薇日誌 32	国内游記	114	明治 14 年 7 月 31 日	

c	水樓晚涼	漢詩	114	明治 14 年 7 月 31 日	柳北
b2	航薇日誌 33	国内游記	115	明治 14 年 8 月 31 日	
b2	航薇日誌 34	国内游記	116	明治 14 年 10 月 9 日	
b2	航薇日誌 35	国内游記	117	明治 14 年 10 月 28 日	
c	送梅村瓜生君遊香山	漢詩	117	明治 14 年 10 月 28 日	柳北
b2	航西日乗 1	海外游記	118	明治 14 年 11 月 30 日	墨上漁史
b2	航西日乗 2	海外游記	119	明治 14 年 12 月 29 日	墨上漁史
b2	航西日乗 3	海外游記	120	明治 15 年 2 月 12 日	墨上漁史
c	新年口占	漢詩	120	明治 15 年 2 月 12 日	柳北
b2	航西日乗 4	海外游記	121	明治 15 年 3 月 2 日	墨上漁史
b2	航西日乗 5	海外游記	122	明治 15 年 4 月 4 日	
b2	航西日乗 6	海外游記	123	明治 15 年 5 月 7 日	
b2	航西日乗 7	海外游記	124	明治 15 年 5 月 30 日	
b2	航西日乗 8	海外游記	125	明治 15 年 6 月 23 日	
b2	航西日乗 9	海外游記	126	明治 15 年 8 月 3 日	
b2	航西日乗 10	海外游記	127	明治 15 年 9 月 19 日	
b2	航西日乗 11	海外游記	128	明治 15 年 11 月 6 日	
d	松間鶯	短歌	128	明治 15 年 11 月 6 日	柳北
b2	航西日乗 12	海外游記	129	明治 15 年 12 月 15 日	
b2	新年移文	風流への思い	130	明治 16 年 1 月 25 日	墨上漁史
b2	航西日乗 13	海外游記	130	明治 16 年 1 月 25 日	
c	癸未元旦	漢詩	130	明治 16 年 1 月 25 日	柳北
d	年の始に	短歌	130	明治 16 年 1 月 25 日	柳北
b2	航西日乗 14	海外游記	131	明治 16 年 2 月 25 日	
b2	航西日乗 15	海外游記	132	明治 16 年 3 月 10 日	
b2	航西日乗 16	海外游記	133	明治 16 年 3 月 25 日	
b2	航西日乗 17	海外游記	134	明治 16 年 4 月 10 日	
b2	航西日乗 18	海外游記	135	明治 16 年 4 月 25 日	
b2	航西日乗 19	海外游記	136	明治 16 年 5 月 13 日	
b2	航西日乗 20	海外游記	137	明治 16 年 5 月 25 日	
b2	航西日乗 21	海外游記	138	明治 16 年 6 月 10 日	
b2	航西日乗 22	海外游記	139	明治 16 年 6 月 25 日	
d	清水六兵衛のみまかりしと聞て	短歌	139	明治 16 年 6 月 25 日	柳北

b2	航西日乗 23	海外游記	140	明治 16 年 7 月 10 日	
b2	航西日乗 24	海外游記	141	明治 16 年 7 月 25 日	
b2	航西日乗 25	海外游記	142	明治 16 年 8 月 10 日	
c	墨上晩歸	漢詩	142	明治 16 年 8 月 10 日	柳北
b2	航西日乗 26	海外游記	143	明治 16 年 8 月 25 日	
c	古中元墨上賞月探韻	漢詩	143	明治 16 年 8 月 25 日	
b2	航西日乗 27	海外游記	144	明治 16 年 9 月 25 日	
b2	航西日乗 28	海外游記	145	明治 16 年 10 月 10 日	
d	題しらす	短歌	145	明治 16 年 10 月 10 日	柳北
b2	航西日乗 29	海外游記	146	明治 16 年 10 月 25 日	
b1	末廣雙竹傳	伝記	147	明治 16 年 11 月 30 日	墨上漁史
b2	航西日乗 30	海外游記	147	明治 16 年 11 月 30 日	
b2	航西日乗 31	海外游記	148	明治 16 年 12 月 28 日	
b2	航西日乗 32	海外游記	150	明治 17 年 4 月 4 日	
b2	航西日乗 33	海外游記	151	明治 17 年 5 月 22 日	
b2	航西日乗 34	海外游記	153	明治 17 年 8 月 8 日	

（柳北は編纂者であり、また自作の漢詩・短歌や散文作品、そして翻訳文学の紹介を行った。明らかに柳北の署名のあるもの、また他の著作者のものでも紹介の文章に署名のある物を記す。『花月新誌』からの引用については、『花月新誌』花月社の原本からであるが、他に『花月新誌』（複製版）ゆまに書房を参照して筆者作成）

付録 5

『花月新誌』に掲載された西欧文芸の翻訳作品と幕末の伝統文芸

『花月新誌』 西欧文芸の翻 訳作品	『花月新誌』 江戸末期の伝 統文芸	『花月新誌』柳 北の他の作品	『朝野新聞』で の掲載記事	柳北の人生及 び社会的事件	収録号数
	述齋偶筆ぬき かき（七則）1			西南の役始ま る 2-9	第 11 号 明治 10 年 5 月 29 日
	述齋偶筆ぬき かき（六則）2				第 13 号 明治 10 年 6 月 16 日
	述齋偶筆ぬき かき（五則）3				第 15 号 明治 10 年 7 月 4 日
小仙窟	述齋偶筆（七 則）				第 20 号 明治 10 年 8 月 16 日
房舎					第 20 号 明治 10 年 8 月 16 日
小仙窟 2					第 21 号 明治 10 年 8 月 28 日
小仙窟 3/楊牙 兒ノ奇獄 1					第 22 号 明治 10 年 9 月 4 日
小仙窟 4 園 囿/楊牙兒ノ奇 獄 2				西南の役終わ る	第 23 号 明治 10 年 9 月 14 日
小仙窟 5 園 囿/楊牙兒ノ奇 獄 3					第 24 号 明治 10 年 9 月 25 日
小仙窟 6/ 楊 牙兒ノ奇獄 4					第 25 号 明治 10 年 10 月 6 日
小仙窟 7 楊 牙兒ノ奇獄 5					第 26 号 明治 10 年 10 月 14 日
小仙窟 8/ 楊 牙兒ノ奇獄 6					第 27 号 明治 10 年 10 月 25 日
楊牙兒ノ奇獄 7					第 28 号 明治 10 年 11 月 9 日
楊牙兒ノ奇獄 8					第 29 号 明治 10 年 11 月 18 日
楊牙兒ノ奇獄 9					第 30 号 明治 10 年 11 月 29 日

楊牙兒ノ奇獄 10					第31号 明治10年 12月11日
楊牙兒ノ奇獄 11					第32号 明治10年 12月22日
楊牙兒ノ奇獄 12					第33号 明治10年 12月23日
楊牙兒ノ奇獄 13		一月一日作／ 遷上夜話（三 則）			第34号 明治11年1 月16日
楊牙兒ノ奇獄 14	変化歌合（1）				第35号 明治11年1 月27日
楊牙兒ノ奇獄 15	変化歌合 2				第36号 明治11年2 月14日
	変化歌合 3				第37号 明治11年2 月26日
	変化歌合 4				第38号 明治11年3 月8日
	変化歌合 5				第39号 明治11年3 月17日
	述齋隨筆（四 則）				第40号 明治11年3 月28日
		昔かたり			第41号 明治11年4 月9日
		言葉の露			第42号 明治11年4 月19日
花柳春話題言	述齋偶筆（六 則）				第43号 明治11年5 月4日
		獨言（政治的見 解）		紀尾井坂の変	第44号 明治11年5 月15日
	述齋偶筆（三 則）	吊朝野賦（新聞 発行停止）			第45号 明治11年5 月25日
	述齋偶筆（五 則）				第49号 明治11年7 月13日
		川端歌合・歌論		東京商法會議 所議員（柳北）	第51号 明治11年 8月11日
		川端歌合 2 歌 論			第52号 明治11年 8月18日



		川端歌合 3 歌 論／墨水烟火 ノ記			第 53 号 明治 11 年 8 月 29 日
		川端歌合 4／ 澡泉紀遊 1 (「熱海文藪」)			第 54 号 明治 11 年 9 月 22 日
		澡泉紀遊 2			第 55 号 明治 11 年 9 月 28 日
		澡泉紀遊 3			第 56 号 明治 11 年 10 月 10 日
	述齋偶筆 (四 則)	澡泉紀遊 3-2			第 57 号 明治 11 年 10 月 18 日
		澡泉紀遊 5			第 58 号 明治 11 年 10 月 27 日
		澡泉紀遊 6			第 59 号 明治 11 年 11 月 12 日
		澡泉紀遊 7			第 60 号 明治 11 年 11 月 24 日
	楽翁公手書き の写し 原本 大久保氏舊蔵	澡泉紀遊 8			第 61 号 明治 11 年 12 月 18 日
		澡泉紀遊 9			第 62 号 明治 11 年 12 月 26 日
		遊事ノ沿革 1			第 64 号 明治 12 年 1 月 21 日
	紫史吟評 1	遊事ノ沿革 2			第 65 号 明治 12 年 2 月 5 日
	紫史吟評 2／ 述齋偶筆 (三 則)	遊事ノ沿革 3			第 66 号 明治 12 年 2 月 23 日
	紫史吟評 3				第 67 号 明治 12 年 3 月 8 日
	紫史吟評 4				第 68 号 明治 12 年 3 月 29 日
	紫史吟評 5				第 69 号 明治 12 年 4 月 10 日
倫敦小誌 1 消火隊	紫史吟評 6				第 70 号 明治 12 年 4 月 24 日

倫敦小誌 2 土曜日曜日 貧人ノ景況	紫史吟評 7				第 71 号 明治 12 年 5 月 4 日
倫敦小誌 3 土曜日曜日 貧人ノ景況 2	紫史吟評 8/ 述齋偶筆 (六 則)				第 72 号 明治 12 年 5 月 16 日
倫敦小誌 4 土曜日曜日 貧人ノ景況 3	紫史吟評 9				第 73 号 明治 12 年 5 月 28 日
倫敦小誌 5 倫敦小童 1	紫史吟評 10				第 74 号 明治 12 年 6 月 7 日
倫敦小誌 6 倫敦小童 2	紫史吟評 11/ 述齋偶筆 (三 則)				第 75 号 明治 12 年 6 月 17 日
倫敦小誌 7 新聞報告	紫史吟評 12/ 述齋偶筆 (一 則)		東照宮一帯保 全「晃山廟の保 存」7 月 22 日	米国グラント 将軍を日光東 照宮に案内 (柳 北)	第 76 号 明治 12 年 7 月 5 日
倫敦小誌 8 盜賊	紫史吟評 13				第 77 号 明治 12 年 7 月 24 日
倫敦小誌 9 盜賊 2	紫史吟評 14				第 78 号 明治 12 年 7 月 30 日
倫敦小誌 10 ヘンズ盜品ヲ 買フ者	紫史吟評 15/ 述齋偶筆 (三 則)				第 79 号 明治 12 年 8 月 13 日
倫敦小誌 11 ヘンズ盜品ヲ 買フ者 2	紫史吟評 16				第 80 号 明治 12 年 8 月 24 日
倫敦小誌 12 ヘンズ盜品ヲ 買フ者 3	紫史吟評 17				第 81 号 明治 12 年 9 月 11 日
	みるめのさち 1	航薇日記 1			第 82 号 明治 12 年 9 月 28 日
	みるめのさち 2	航薇日記 2			第 83 号 明治 12 年 10 月 21 日
	みるめのさち 3	航薇日記 3			第 84 号 明治 12 年 10 月 31 日
	みるめのさち 4	航薇日記 4			第 85 号 明治 12 年 11 月 16 日

	みるめのさち 5	航薇日記 5			第 86 号 明治 12 年 12 月 5 日
	みるめのさち 6	航薇日記 6			第 87 号 明治 12 年 12 月 18 日
	述齋偶筆（二 則）				第 88 号 明治 13 年 1 月 23 日
	述齋偶筆（三 則）	航薇日記 7			第 89 号 明治 13 年 2 月 15 日
		航薇日記 8			第 90 号 明治 13 年 2 月 29 日
		航薇日記 9			第 91 号 明治 13 年 3 月 23 日
	述齋偶筆（三 則） 2	航薇日記 10			第 92 号 明治 13 年 3 月 31 日
		航薇日記 11			第 93 号 明治 13 年 4 月 14 日
		航薇日記 12			第 94 号 明治 13 年 4 月 27 日
		航薇日記 13			第 95 号 明治 13 年 5 月 13 日
	述齋偶筆（五 則）	航薇日記 14			第 96 号 明治 13 年 5 月 25 日
	述齋偶筆（五 則） 2	航薇日記 15			第 97 号 明治 13 年 6 月 12 日
		航薇日記 16			第 98 号 明治 13 年 7 月 3 日
		航薇日記 17			第 99 号 明治 13 年 7 月 29 日
		航薇日記 18	「女優馬利比 越兒ノ審判」 8 月 12 日から 10 回		第 100 号 明治 13 年 8 月 17 日
		航薇日記 19			第 101 号 明治 13 年 9 月 28 日
		航薇日記 20			第 102 号 明治 13 年 10 月 30 日
		航薇日記 21			第 103 号 明治 13 年 11 月 日

		航薇日記 22			第 104 号 明治 13 年 12 月 19 日
		航薇日記 23	「鴉のあゆみ」 （「熱海文藪」）	讀賣新聞社の 「讀賣雜譚」に 寄稿を始める。 （柳北）	第 105 号 明治 14 年 1 月 19 日
		航薇日記 24			第 106 号 明治 14 年 2 月 18 日
		航薇日記 25			第 107 号 明治 14 年 3 月 11 日
		航薇日記 26			第 108 号 明治 14 年 3 月 29 日
		航薇日記 27			第 109 号 明治 14 年 4 月 30 日
		航薇日記 28			第 110 号 明治 14 年 5 月 17 日
		航薇日記 29			第 111 号 明治 14 年 5 月 31 日
		航薇日誌 30			第 112 号 明治 14 年 6 月 21 日
		航薇日誌 31			第 113 号 明治 14 年 7 月 15 日
		航薇日誌 32/ 水樓晚涼			第 114 号 明治 14 年 7 月 31 日
		航薇日誌 33			第 115 号 明治 14 年 8 月 31 日
		航薇日誌 34			第 116 号 明治 14 年 10 月 9 日
		航薇日誌 35			第 117 号 明治 14 年 10 月 28 日
		航西日乗 1			第 118 号 明治 14 年 11 月 30 日
		航西日乗 2			第 119 号 明治 14 年 12 月 29 日
		航西日乗 3/新 年口占	「なくもがな」 （「熱海文藪」）		第 120 号 明治 15 年 2 月 12 日
		航西日乗 4		立憲改進黨に 入党（柳北）	第 121 号 明治 15 年 3 月 2 日

		航西日乗 5			第 122 号 明治 15 年 4 月 4 日
		航西日乗 6			第 123 号 明治 15 年 5 月 7 日
		航西日乗 7			第 124 号 明治 15 年 5 月 30 日
		航西日乗 8			第 125 号 明治 15 年 6 月 23 日
		航西日乗 9			第 126 号 明治 15 年 8 月 3 日
		航西日乗 10			第 127 号 明治 15 年 9 月 19 日
		航西日乗 11			第 128 号 明治 15 年 11 月 6 日
		航西日乗 12			第 129 号 明治 15 年 12 月 15 日
		航西日乗 13	「烟草の吸い さし」（「熱海 文藪」）		第 130 号 明治 16 年 1 月 25 日
		航西日乗 14			第 131 号 明治 16 年 2 月 25 日
		航西日乗 15			第 132 号 明治 16 年 3 月 10 日
		航西日乗 16			第 133 号 明治 16 年 3 月 25 日
		航西日乗 17			第 134 号 明治 16 年 4 月 10 日
		航西日乗 18			第 135 号 明治 16 年 4 月 25 日
		航西日乗 19			第 136 号 明治 16 年 5 月 13 日
		航西日乗 20			第 137 号 明治 16 年 5 月 25 日
		航西日乗 21			第 138 号 明治 16 年 6 月 10 日

		航西日乗 22			第 139 号 明治 16 年 6 月 25 日
		航西日乗 23	「難有迷惑ノ 目玉」		第 140 号 明治 16 年 7 月 10 日
		航西日乗 24			第 141 号 明治 16 年 7 月 25 日
		航西日乗 25	「すげのを笠」 （「熱海文藪」）		第 142 号 明治 16 年 8 月 10 日
		航西日乗 26			第 143 号 明治 16 年 8 月 25 日
		航西日乗 27	「昔の小笠附 言」（「熱海文 藪」）		第 144 号 明治 16 年 9 月 25 日
		航西日乗 28			第 145 号 明治 16 年 10 月 10 日
		航西日乗 29			第 146 号 明治 16 年 10 月 25 日
		航西日乗 30		鹿鳴館の落成 式に招かれる （柳北）	第 147 号 明治 16 年 11 月 30 日
		航西日乗 31	17 年 1 月「菓 草餘滴」（「熱 海文藪」）		第 148 号明治 16 年 12 月 28 日
		航西日乗 32			第 150 号 明治 17 年 4 月 4 日
		航西日乗 33			第 151 号明治 17 年 5 月 22 日
		航西日乗 34			第 153 号明治 17 年 8 月 8 日

（『花月新誌』からの引用については、『花月新誌』花月社の原本からであるが、他に『花月新誌』（複製版）ゆまに書房を参照して筆者作成）

付録 6

成島柳北年譜

元号	西暦	年齢 (数え年)	事 項
天保 8	1837	1 歳	2 月 16 日、奥儒者成島稼堂の子として浅草厩河岸の自邸に出生。 ★大塩平八郎の乱
弘化元	1844	8 歳	和歌を作り、『源氏物語』を読破する。
嘉永 3	1853	17 歳	11 月 15 日、父稼堂死去。既に『南山史』、『将軍家系譜』、『後鑑』等の調査編纂。★ペリー 浦賀に来航
安政元	1854	18 歳	1 月、侍講見習に任じられ、『徳川実紀』の編纂に加えられる。3 月、父稼堂の死を公表し、家督相続。9 月家茂公の駒場の武術修練閲覧の際に随行し「賦短古一篇」を作る。11 月狩野氏と結婚。『硯北日録』7 巻（1 月から万延元年）の起草が始まる
安政 2	1855	19 歳	10 月、夜大地震、一詩「乙卯十月二日。夜大地震。…」を賦す。 11 月、和泉橋通りに転居。
安政 3	1856	20 歳	11 月、侍講となる。この年、弓術の稽古を始める
安政 4	1857	21 歳	3 月、狩野氏を離別。 4 月、永井氏と再婚。 この頃から従兄の杉本忠達らとともに柳橋にて盛んに遊興をする。11 月、布位（当時六位の身分）となる。
安政 5	1858	22 歳	7 月、長女機誕生、将軍家定逝去、家定の院号を憚り、名を惟弘と改める。
安政 6	1859	23 歳	9 月、『柳橋新誌』初編起草、10 月了。
万延元	1860	24 歳	7 月、『柳橋新誌』初編増補。『徳川實記』『後鑑』等の訂正補修。
文久元	1861	25 歳	6 月、柳原の北に有待舎を建て、側室お蝶（柳橋の芸妓）を置く。約 2 年居住。
文久 2	1862	26 歳	3 月、大沼枕山、鷺津毅堂らと隅田川で満開の花を觀賞。 5 月、柳河春三と柳橋芸者の見立て「二十四番花信評」を作成。
文久 3	1863	27 歳	8 月、幕府重臣の誹謗により五十日間の閑居。（狂詩を賦して幕閣の因循を批判したために、侍講の職を解かれた。）『投閑日録』を閉門の日から起筆する。文久 4 年 6 月 13 日まで続く。この年、洋学を学び始める。
慶応元	1865	29 歳	1 月、『伊都満底草』四巻の内、一、二巻校了。 9 月、歩兵頭並に登用。12 月、フランス騎兵伝習の建言、騎兵頭並に転ずる。
慶応 2	1866	30 歳	1 月、横浜太田頓當に赴任、フランス式三兵伝習に従事する。この年、仏式練兵指導者、シャノワヌと親交を結ぶ。
慶応 3	1867	31 歳	1 月、仏軍事教官団シャノワヌ一行横浜に到着。5 月、騎兵頭に昇任、二千石増俸。9 月、江戸に帰る。12 月、騎兵頭を辞す。
慶応 4～ 明治元	1868	32 歳	1 月、外国奉行に、大隈守を名乗る。禄高三千石。ついで会計副総裁に就任。4 月、江戸開城の前日、養子信包に家督を譲り、向島須崎村松菊荘に隠棲秋、上野に閑居していた慶喜に水戸行きを勧める。『湍上隠士伝』（自伝）を記す。 ★明治維新
明治 2	1869	33 歳	浅草森田町に転居。畿内山陽道に旅行し、「航薇日記」を著す。唐物屋を開業していた。この年、柳河春三と『万国新話』を刊行する。

明治 3	1870	34 歳	5 月、日本橋箱崎町古河藩邸内に仮寓。馬喰町で、桂川甫周と薬舗を営む。
明治 4	1871	35 歳	3 月、『柳橋新誌』二編成立。8 月、浅草東本願寺学塾の学長に招かれる。秋に、七言絶句『感旧』等を作詩する。この年、左院に徴せられたが、辞退。
明治 5	1872	36 歳	9 月、本願寺東派現如上人に石川舜臺等と随行のため、横浜を出発、ヨーロッパへ向かう。11 月、パリ着。この時の日記を『航西日乗』として後年発表。
明治 6	1873	37 歳	1 月、「代言人」という言葉を始めて使用する（「航西日乗」明治 6 年 1 月 22 日）。7 月、アメリカを経て外遊から帰朝する。8 月、京都東本願寺翻訳局の局長となる。
明治 7	1874	38 歳	2 月、『柳橋新誌』二編を山城屋から刊行。4 月、『柳橋新誌』初編を山城屋から刊行。5 月、京都にて『京猫一斑』を草する。9 月、『公文通誌』社主から招請されて社長となり、同紙を『朝野新聞』と改称。以後、『大久保忠真の美譚』等の「雑録」欄を中心に活躍する。★服部撫松の『東京新繁昌記』が山城屋から刊行。
明治 8	1875	39 歳	6 月、政府『新聞条例及讒謗律』が公布される。8 月、同条例制定を『朝野新聞』上で攻撃。新聞条例に違反したので東京裁判所に呼び出され、五日間の自宅禁固に処せられる。 8 月、『辟易ノ賦』、10 月『後辟易ノ賦』を『朝野新聞』に発表。
明治 10	1877	41 歳	1 月、詩文雑誌『花月新誌』創刊。「柳橋新誌三編序」、「京猫一斑ノ序」をそれぞれ『花月新誌』（1 号、3 号）に発表。さらに同月、『鴨東新誌』（京猫一斑）を『花月新誌』（3 号から 19 号に連載）。2 月、『朝野新聞』の発行部数が 18,000 に達する。3 月、西南戦争取材のため、京都に赴く。
明治 11	1878	42 歳	3 月、『柳北奇文』（西山喜内編、二冊）を明八堂より刊行する。5 月、紀尾井坂暗殺事件を『朝野新聞』に報道し、5 日間発行停止となる。8 月、商法会議所議員に選出される。9 月、小田原、箱根に遊び、『澡泉紀遊』を草する。
明治 12	1879	43 歳	3 月、『新柳情譜』を『花月新誌』（67 から 90 号）に連載。7 月、アメリカ前大統領グラント将軍の接待委員となる。9 月、『航薇日記』を『花月新誌』（82 から 117 号）に連載。
明治 13	1880	44 歳	2 月、川崎小日向村梅林を探訪。「小日向村探梅ノ記」を『朝野新聞』に発表。
明治 14	1881	45 歳	1 月、『本邦現存古泉目録』を『花月新誌』号外として刊行。 11 月、『航西日乗』を『花月新誌』（118 から 153 号）に連載。
明治 15	1882	46 歳	3 月、立憲改進黨結成と同時に入党。
明治 16	1883	47 歳	1 月、熱海に遊び、療養中の。岩倉具視を見舞う。 11 月、鹿鳴館落成式に招かれる。宿痢の肺病が悪化する。
明治 17	1884	48 歳	7 月、『柳北仙史熱海文藪』を世古六之助より刊行。秋、病が悪化して病床に横たわることが多くなった。11 月 30 日、午前 11 時、須崎の自邸で病没。 12 月 3 日、本所押上村、本法寺に埋葬される。

（①前田愛.硯北日録—成島柳北日記.太平書屋,1997.巻末の年譜②前田愛.成島柳北.朝日新聞社,1990.の巻末の年譜③成島柳北・服部撫松・栗本鋤雲集.明治文学全集 4.筑摩書房,1969.所収の巻末の年譜④日蘭学会.洋学史事典.雄松堂, 1975.p584 を参照して筆者作成。人名国名等は前掲の書の表記に従った。）